
本格推理委員会

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本格推理委員会

【Nコード】

N8318N

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

こんにちは！今回、新しく小説を書く夢幻です。

今作品は小・中・高校と一貫教育学校、「木ノ花学園」に転校した主人公と探偵の素質を持つ少年少女達を選抜して作られた「本格推理委員会」のメンバーが織りなす推理&ギャグ？小説です！

登場人物紹介（前書き）

メインキャラクターを載せました。サブキャラクターはおいおい説明したいと思います。

登場人物紹介

〈オリジナルキャラクター〉

速水零牙（はやみ れいが）

本作の主人公。木ノ花学園小等部六年六組
本格推理委員会所属。

白髪頭でいつもけだるい雰囲気を持つ。顔は「心霊探偵 雲の主人
公」である。

身長145センチメートル。体重46キログラムの普通の男の子。

飛天御剣流の継承者で、いつもは木刀で戦う。

イギリス清教の魔術師でもあるため魔術も使えるが、本人曰わく、
「疲れるし、面倒くさい」ため、魔術はほとんど使わない。

甘い物が好きでよくケーキをつくる。

はやかわ りゅうのすけ
早川龍之介

主人公の友人。木ノ花学園小等部六年六組所属。容姿は「禁書 録
の青 ピアス」である。

その容姿と大きい声が特徴。

家が道場のため腕っ節は強いが勉強はできない。
多趣味でギターやドラムなどできる。

〈原作キャラ〉

管原雅 (かんばら みやび) 通称 「ミア」

本作のヒロイン。木ノ花学園小等部六年六組
本格推理委員会所属。

前髪の花飾りと八重歯が特徴の少女。

暗い過去があるが本作の数週間前(原作の『本格推理委員会』)の
事件後その過去を乗り越え、前向きに生活している。

将来の夢は世界一の大道芸人。

城崎修 (きのさき しゅう)

ヒロインの従兄。木ノ花学園高等部一年
本格推理委員会所属。

料理が上手く、世話焼き上手だが顔が犯罪者面のためよく勘違いさ
れやすい。

三年前にとある事件を解決するが犯人が死んでしまい、トラウマに

なる。しかし数週間前の事件後乗り越えて吹っ切れた。
将来の夢は名探偵。

木下椎 (きのした しい)

木ノ花学園高等部一年
本格推理委員会所属。

究極の勘の持ち主で、勘の必中率は百パーセント。ずばらな性格で
どごとも寝てしまう。

極度のロリコン。

桜森鈴音 (さくらもり すずね)

木ノ花学園高等部二年
本格推理委員会委員長

学校一の頭脳を持つ(大半は顧問に詰め込まれたらしい)本格推理
委員会の良心。

家庭部の部長でもある

楠木菜摘 (くすのき なてき)

木ノ花学園高等部二年
本格推理委員会所属。

空手部のエースで美人。顧問のことを「あざみちゃん」と呼ぶ。

元警視総監の祖父の影響で親類に司法官僚が多い。一部の人から「歩く国家権力」と呼ばれている。

椎と同じく極度のロリコン。

木下梢

木ノ花学園中等部二年

本格推理委員会所属。

木下椎の妹でいつも姉の椎からスキンシップされているが、クールに返すひと。本人も嫌ではなく、恥ずかしいので冷めた態度をとってしまう。

男子から人気があり、よく告白される。

木ノ花あざみ（このはな あざみ）

木ノ花学園高等部理事長兼保険医

本格推理委員会顧問

木ノ花学園をつくった木ノ花グループの一人。

破天荒かつ自分勝手な性格のため、主人公曰わく「ろくな大人じゃない」

しかし、主人公たちに優しく道を諭すなど、教師らしいところもある。

登場人物紹介（後書き）

感想、ネタ、どしどし応募してください！待っています！

プロローグ（前書き）

どーも。夢幻です！

今回から、本格推理委員会がスタートします。皆さん楽しんで見てください。

プロローグ

イギリス セントジョーシ大聖堂。

カツコツカツコツ…

ここで一人の少年が一般客の入らない薄暗い道を早足で歩いていた。

カツコツカツコツ…

その少年は黒の神父服を着て重い顔持ちで歩いていた。

カツコツカツン

薄暗い道から一転、広く月明かりに照らされた広間に出た所で少年は足を止めた。

そして目の前で月を眺めている女性にこう言った。

「お呼びでしょうか？アークビショップ最大主教」

するとその声に気づいてゆっくりアークビショップ最大主教と呼ばれた女性は振り向き、微笑んで、

「そこに固くなりしことはないけるよ？れいが零牙？」

『零牙』と呼ばれた少年はかまわず続けて…

「私はまだ寝たいのでさっさと要件を言ってください。最大主教」

暴言を言った。確実に会社だったら一発でクビ確定するような暴言

を…

無礼極まりない行為である。

「黙れ作者。こちとらもう、2日も寝ていないんだ。さつさと寝たいんだ。やっと寝むれると思ったら呼び出しを食らったんだ。イライラしてしょうがないんだよ！」

作者に対して八つ当たりである。そんな風景を見て、一段落ついたと思ったのか、最大主教の女性が話し掛けた。

「もうよいかの？して要件といふのはの…」

作者に対して不満をぶつけたらならないらしいが最大主教が話し始めたのでしぶしぶそつちを向く。

「…で要件と言うのは？」

「うむ、おぬしにとある学園に転入して欲しゆての…この依頼引き受けてくれるかの？」

学校に転入 これだけしか言わなかったが少年はどういった内容か理解した。

「スパイですか。どの学校に転入すれば良いのですか？」

経験からこれは“潜入捜査”とわかった。

「うむ。『木ノ花学園』というところに入って欲しいのじゃ」

『木ノ花学園』 - それはこの世界では世界的大企業《木ノ花グル

ア！」

何か用があるらしい。一体何だろうか？

「近所挨拶用の粗品はどこだ！」

テーブルの上だ。

中に饅頭が入っている。

「あゝあつたあつた。よし、準備完了。まずは向かいの家から行くか…。」

そういつて零牙が向かいの家「城崎」と掛かれた標札のある家に向かった。

オレは城崎修木きののむきしゅうノ花学園に通う高校生だ。

ここでオレの愉快な家族について教えておこう。

まず、「母」

城崎カンナからだ。

彼女は中国を題材にした硬派な小説家でそこそこ評価を受けている。

母が「城崎カンナ」と知れば大抵の人は驚く。しかし、身内から見れば引きこもり同然だった。

母は今寝ている。24時間働き、12時間爆睡するという社会人失格の36時間生活を過ごしている。

次に「父」だ。父さんは世界をまたかける冒険家である。今も世界中のどこかで元気にやっといろろつ…。

最後に「オレの「妹」ミアについて話そう。

ミアは正確に言うならオレの「従兄弟」だ。今はワケあって、オレの家に住んでいる。

「オーイ、ミア？」

そういつてオレはミアのを呼んでみた。

「なーに？お兄ちゃん？」

「作者が自己紹介して欲しいらしいから、読者の皆様に挨拶しな。」
そう言う。ミアはなぜかオレの後ろに隠れてから…。

「あ…えつと…かんばらみやび管原雅です。よろしくお願いします…。」

と言った。ミアは極度の人見知りなので人と接するのが苦手なのだ。そしてオレ…城崎修は個性溢れる家族と一緒に過ごす普通の高校生だ。

ピンポン

なんて自己紹介していたら誰か来たようだ。対応しなければ…。

「ミア、自己紹介は終わったからもう大丈夫だぞ。」

そう言つと、ミアはそそくさとソファで雑誌を読みに行った。

ピンポン

どうやら待たしているらしい…。

「はい、今行きますよ。」

そういつて、オレは玄関のドアを開けた…。

玄関先のインターフォンを鳴らすと、高校生ぐらいの人が出てきた。

なんというか…顔が恐ろしく怖い。ヤバい薬に手を出していそうな顔である。めっちゃめっちゃ怖い。

「何のご用ですか？」

すると顔が恐ろしく怖い人が話し掛けて来た。

「あ…。えっと…。今度こちらに引越して来た速水零牙はやみれいです。これお近きのしるしに…」

そういつとオレは饅頭の入った袋を一つ手渡した。

「ん。ああ、ありがとございます。オレは城崎修。これからよろしく。」

そういつて、手を伸ばしてきた。握手のつもりらしい。

「よろしくお願いします。」

オレも手を出して握手した。そして、

「では、他の家にも挨拶しなければならぬので今日は失礼します。」

と言って、おじきを手を離した。

「そうか。頑張れよ。」と言って強面顔の高校生は笑って家の中に入って行った。

「はい。」

オレも笑って返し、他の家にも挨拶し始めた。

時は経って、夜。

「だあゝ。疲れた。」

オレは近所挨拶を終え、家に帰ってきた。

「明日から学校だし…今日はちゃっっちゃっど寝るか。」

お風呂に入り、夕食を食べ、オレは眠った…。

プロローグ（後書き）

夢幻

「本格推理委員会スタート!!」

零牙

「イエーイ!」

夢幻

「あゝプロローグ打つの大変だった。」

零牙

「これから頑張っていけよ?」

夢幻

「はい!不定期にナリガチですが、頑張って書き続けます!」

零牙

「次回 本格推理委員会 お楽しみに。」

本格推理委員会（前書き）

本格推理委員会のメンバー紹介です。

本格推理委員会

ピピッピピッガツ！

目覚まし時計を音を黙らせ起床。現在7時30分。

「あゝ。今日から学校に行くんだよな。上手く手配してくれていれば良いけど…。」

そういつて、零牙は自分の白い髪を搔いて、
「まずは、シャワー浴びてから考えるか。」
と浴室に向かった。

.....

そして時は経ち、現在8時50分、オレは「木ノ花学園」に来ていた。

とても広い敷地面積のために地図で確認しながら…。

「んゝここかな？職員室は？」

壁に貼ってあるプレートを見ると「職員室」とかかれていた。

「よし、ここだな。失礼します。」

ノックして入室。するとメガネを掛けたいかにもインテリという男が出てきた。

「君は誰だい？」

そう尋ねられたのでこう返した。

「今日からこの学校に通うことになった速水零牙です。」

インテリの男は少し考えてから、

「ああ、君がイギリスから来た帰国子女の零牙君だね？入りたまえ。」

「失礼します。」そういつてオレは入り、職員室の広さと先生の人数の多さに驚いた。

ざっと見て1000人近くいる。

「え〜。今日からこの学校に通うことになった速水零牙君だ。零牙君は6年6組だから…小萌先生の受け持ちになる。小萌先生はえつと…？」

そういつて探し始めると…

「はいはい、私はここですよ〜。」

とぴょんぴょん跳ねながらこっちに手を降っている人がいた。

手しか見えなかったため小柄な先生だろう。

「あ〜あそこか。零牙君、君の担任の月詠小萌先生だ。挨拶してくと良い。」

さも、つまらなそうな顔でそういつた。気にせず担任の席に行ったら…。

小学生がいた。というか小学生にしか見えなかった。

「えつと…。あなたがオレの担任の…」

「はい！月詠小萌です！これから一年よろしくです〜。」

「ありえねえ…。こんな大人がいていいのか？」と小声で漏らしたオレの言葉を聞いたのか小萌先生は

「先生、ちっちゃいですけどどれつきとした大人ですから、悩み事があつたらバンバン相談してくださいね〜。」

と言った。

世の中には、まだまだ知らないことが多いんだな…。

「よし。転入生も来たことですし、今日の職員会議はここまでとします。皆さん、自分が受け持つクラスへ向かってください。」

「ほら、いきますよ〜。さっきも言いましたが零牙君のクラスは6年6組ですからね〜。付いて来てください〜。」

職員会議が終わり、どうやら教室へ向かう様子。まともなクラスだったら良いなと思い。小萌先生のあとをついて行った。

.....
ところ変わって6年6組の教室。教室の中は転入生の話で盛り上がっていた。

「おい、聞いたか！転入生はイギリスから来たらしいぞ。」

「ああ、しかもかなりイケメンらしい。」

「彼女の有無を確認次第、異端審問会を開けるようにしとおけ。」

「了解です！須山会長！」「」

なんとという会話や、「ねえねえ転入生ってどんな子かな？」

「楽しみだね。どう思う？ミアちゃん？」

「ん〜。会って見ないとわからないと思う。」

という会話があった。

ガヤガヤと騒がしくしていたら教室の引き戸が開き、担任の小萌先生がやって来た。

「はいはい。皆さん、もうホームルームの時間ですよ。席に座ってください〜。」

そういつてクラス全員が席に着き、

「今日はみんなのお待ちかねの転入生がやってきましたよ。ちなみに男の子ですよ。良かったね。子猫ちゃんたちも残念でした
（野郎共）」

それを聞いた瞬間男子には殺気、女子は嬉気を露わにした。

「それじゃ。入ってきてくださーい。」

『良かったですね。子猫ちゃんたちも残念でした。野郎共。』

小萌先生が教室に入って、呼ばれるのを待っている。

見た目は冷静に構えているが、心の中では…

（やべえ…緊張してきた…！）

実はこの主人公、生まれてこのかた学校に通うことなく、教会で勉強していた。そのため、学校に通うこと事態が初めてで、ガチガチに緊張していた。

（落ち着けオレ…。戦闘前だと思い込めばきっと落ち着ける…！）

『それじゃ。入って来てくださーい。』

小萌先生に呼ばれたため、一回深呼吸して教室に入った。

「はいはい。この子が転入生の速水零牙君です。零牙君自己紹

介をお願いします。」

小萌先生が教壇から声かけてからオレは

「あゝ、新しくこのクラスに入った速水零牙です。趣味は読者、特技は剣術、好きなものは甘いものです。皆さんこれからよろしく。」
「というワケで、皆さんこれからよろしくです。」

小萌先生が拍手したのを見て、クラス全員が拍手をする。

「皆さんの自己紹介は6時間目の学活でやりますので。皆さんから零牙君に質問はありますか？」

そうすると、ビツと手挙げたやつてが一人。
どんな質問だろうか？と身構える。

「はい！それじゃ〜須山君！」

「はい、零牙君、きみには……」

どんな質問だろう？真剣な眼差しで聞いてきた

「……君には彼女はいるのか？」

いきなりのこの質問。なぜにこんな真剣に聞くんだ？

「いないけど……それがどうかしたのか？」

「いや、いないなら良い。ありがとう。」

そういつて須山君は席に着いた。さっきから異端審問会がどうとか話しているが関係あるのだろうか？

「はいはい。他のみんなはありますか？」

なさそうなので終わりにしますよ。零牙君の席は……」

そういつて教室をきよきよ見て、

「あ！管原さんの隣ですね。あそこの花飾りをつけた女の子の隣に行ってください。」

窓際の列から一つ横の席、前から三番目の席を指した。

先生に軽く返事をして、指された席に着いた。

そして隣の花飾りの女の子に

「これからよろしく。」と軽く挨拶して前を向いた。

一時間目は英語だった。イギリスにいたため、適当に受け流していたら、後ろの席から肩を叩かれた。

「なあ、消しゴム貸してくれない？」

小声と言うにはあまりにも大きい声で頼んできた。

「おっと、自己紹介しないと、オレは早川龍之介。リュウって呼んでくれ」

早川龍之介といった少年は、声の大きいのが特徴だな。と思っ
てい

「なあ、消しゴム貸してくれない？忘れちゃって……」

「…あいよ。」

消しゴムをリュウの机に置く。

「ありがとう。お前良いやつだなあ。わからないことあったらなんでも聞いてくれ！」

…どつやら、こいつとは悪友になりそうな気がした。

.....

「それじゃ〜皆さん気をつけて帰ってくださいです〜。」

小萌先生ののんびりとした声で今日の学校は終わった。

「レイ〜今日ゲーセン行こうぜ！」

リュウこと早川龍之介はオレのことを”レイ”と呼ぶようになった。

わずか1日弱でここまで親しくなるやつはいないだろう。と思ったが口にはしなかった。なせならオレも”リュウ”と呼ぶことにしたからだ。

「おう。オレ『太鼓の 人』やりたいんだか…良いところあるか？」

「任せておけ！ついでに町も案内してやるよ！」

「ああ、たの『ピンポンパンポン』…ん？」

校内放送が流れた。オレは転入生なので何かあるのか？と気になって聞いてみた。

「おい、行こ…」速水零牙君 速水零牙君 至急高等部理事長室に

来ててください。もう一度繰り返し返します。速水零牙君、速水零牙君、

至急高等部理事長室に来てください。」

何故か高等部から呼び出しを食らった。

これは置いてあるというより投げ捨ててあるんじゃないか…というツッコミを飲み込んで理事長室のちょうど真ん中にあるテーブルに向かった。そこには一対のソファもある。

そこに見覚えのある生徒が座っていた。

「管原さん…?」

そう、大きな花飾りをした女の子…管原雅の姿である。

さらにもうひとり

「あれ!? 城崎さん!?!」

昨日、近所挨拶であった怖い顔の高校生である。

「ミア。知り合いか?」 「クラスメートだよ。お兄ちゃんは?」

「昨日、近所挨拶と言って饅頭をくれたときに知り合った。」

「修? こんなかわいい男の子知っててなんで私に教えてくれないんや?」 「そうよ! 修君! なんて教えてくれなかったの?」

「いや、教えるも教えなくてもどっちでも良いだろ。」

「二人共落ち着いて。まず自己紹介しないと…」

城崎さんのあと続いたアホな雰囲気の人と凛々しい雰囲気の人が抗議してそれを、メガネをかけたビクビクした人が止めた。

なぜだろう? さっきから少しだけ体に悪寒がはしかった。

「ハイハイそうよ。まずは自己紹介から。」

と理事長（確定）は言つて、

「ようこそ、速水零牙君。私は高等部理事長の木の花あざみ（このはな あざみ）。よろしく〜」

「わっ…私は桜森鈴音（さくらもり すずね。）よろしくね。」

「私は楠木菜摘（くすのき なてき）かしあなた災難ね。」

「私は木下梢（きのした しょうえ）よろしく…。」

「私は木下椎ゆーねん。アンタも難儀やなあ。」

「城崎修だ。まあ昨日挨拶したから知っているか…。可愛いそうに…。」

「管原雅ね。教室で挨拶したから知っているよね？」

いつの間にか自己紹介が自分の番にきていることに気づき挨拶する。

「速水零牙です。あの、こつて一体…？」

「そして理事長はオレに向かつてこう言った。

「ようこそ。本格推理委員会へ。」

本格推理委員会（後書き）

夢幻

「レギュラーメンバーの初登場シーンですね。みんな初々しいなあ」

零牙

「オイ！作者！」

夢幻

「なんだい？」

零牙

「なんで、小萌先生が担任なんだよ！」

夢幻

「そりゃあ、『禁書 録』のキャラだし、なにより面白そうだし。」

零牙

「要は思いつきか…。はあ、大丈夫か？この小説…？」

夢幻

「大丈夫大丈夫。次回から事件になるから。」

零牙

「はあ、わかったよ。それじゃあ期待しているぞ？」

夢幻

「任せなさい！上手かくよー！」

零牙

「次回 本格推理委員会『探し物』」

探し物（前書き）

最初の事件です。

本格的な捜査は次回からとなります。

ババーンと背後に雷鳴が轟くような声で言った。

オレはどうリアクションして良いか分からず、困り果てた。

先輩方は「これが当たり前だ」と言わんばかりにため息をついた。

「我が学園が常時危険に曝されている！」

何かのスイッチが入ったのか、キラリと目がひかる。

「小中高合わせて生徒数は七千二百人あまり。関係者を含めると、一万人を超える木ノ花学園では、連日何らかの事件が産み落とされている！警察及び部外者の介入は教育上、芳しくないためこのような事件は誰が解決すべきかは……」

「…何言っているのですか？この人？」

「元々こういう人なの…」

「この人は変人だからな」

「しゃーないしゃーない。」

「で、あるからして！」

あざみ先生はガツンと床を踏んでみんなを黙らせた。

「我が本格推理委員会は学園内の事件を解決するために、私、木ノ花あざみによつて組織されたのである……。わかった？」

先生の兇悪な顔を見てオレはうなずいた。

まあ、つまり『本格推理委員会』とは、あざみ先生のおもちゃでオレ達はその道具に選ばれたと言っことか。

そこまで聞いてオレは質問してみた。

「ふーん…。大体のことはわかりました。それで、何でオレは呼ばれたんです？理由があるんでしょう？」

あざみ先生は満足そうな顔で微笑し、

「もちろんよ。あなたが木ノ花学園に転入する時に受けてもらった転入試験の結果を見ると…。」

そう言うと先生は机から一枚の紙を取り出し、
「なんと満点合格を叩き出したのよ？」

それを聞いた先輩方はそれぞれの反応を示した。

「ま、満点合格って…天才じゃない！」「一体どうやってたらそんなこと出来るの…？」

「…すごい。」

「化け物かよ…。」

「ありえへん。」

注：上から楠木先輩、桜森先輩、木下梢先輩、城崎先輩、木下椎先輩の順です。

ちなみに菅原は驚き過ぎて声も出ないようだ。

「そんな天才を我が委員会に入れないでどうするっていうのよ?。」

どうやら、おれの知識が目的らしい…。

この胡散臭い委員会に入るべきだろうか…?

オレはあざみ先生の言葉を吟味して、ある結論をだした。

「なるほど。オレをスカウトした理由はわかりました。」

「それじゃあ、我が『本格推理委員会』に入ってくれのかな？」

「どうせ断っても無駄なんだろう?別に入っても良いよ?」そういう

とあざみ先生はニヤリとて笑い

「じゃあ、決定ね。今日もう帰って良いわよ。

ただし、明日のお昼、ここに集合すること！それじゃあ、解散！！」

こうやって、オレは「本格推理委員会」へ入っていった。

学校からの帰り道、家が真向かいなので管原と城崎先輩と一緒に帰った。

どうやら管原には事情があって従兄弟の城崎先輩の家に暮らしているらしい。

「なあ、一つ聞いて良いか？」

「なんでしよう？」

「ウチの転入試験、どうやって満点をだしたんだ？」

城崎先輩からの質問は最もである。木ノ花学園の転入試験は相当難しいもので、今まで満点を出した者がいないそうだ。

しかしオレはそれを成し遂げた。その理由は…

「ああ、オレは一度見たり、聞いたりしたら忘れない『完全記憶能力』なんですよ。」

そう、完全記憶能力によっていろんな公式を覚え、実践したみた結果である。チートくさい能力である。

「えっ！じゃあ今までに何があつたのか全部覚えているの？」
これは管原から。

「ああ、全部覚えている」

「すごい！それじゃあ勉強しなくても良いじゃん！」
「便利な能力だな。」

とそれぞれ感想を述べる。

「まあ、そういうのには便利なんですけど…。逆に言えば 忘れてくても忘れられない ですよね…。」

「???? どういうこと?」「例えば…。そうだな。二人の大切な人が目の前を殺されたとします。

嫌な思い出なので普通の人なら忘れられるけど、オレ達は絶対に忘れられないんですよ。」

そう言うオレは諦めたかのように笑った。

二人は悪いことを聞いたなど、雰囲気でわかった。空気が重かったので、

「逆に言えば、忘れたくない大切な思い出をずっと覚えていられるんですよ?」

と言っでごまかした。

空気が軽くなったのを感じたのか二人は

「そうだよな。楽しい思い出をいつでも思い出せるんだよね！」
「ああ、悪いことばかりじゃないな！」

とさっきまでの空気を有耶無耶にした。

そうしていると、家が見えてきた。

「じゃあ、また明日。」そういつて、オレは家に向かった。そして
ら、菅原が

「零牙君！明日から一緒に登校しない?」

と言った。一人でいるよりかは良いかなと思い、「ああ、わかった！」と返した。管原が笑った。その笑顔はとてもかわいかった。

そして、今となる。管原とは8時20分に家の前で待ち合わせした。

木ノ花学園の登校時間は小中高と上がることに15分ずつ早くなるため、城崎先輩は先に登校する。

電話で「ミアに何かしたら…覚えていろよ？」と脅された。顔が見えなくて良かった…。

「『本格推理委員会』か。」

もちろん、オレがこの委員会に入っているのは、「断つても無駄」

という理由ではない。

それもあるが、この委員会に入れば必然的に木ノ花グループの弱点となる何かに触れる確率が高いからである。

オレが木ノ花学園に入って理由…木ノ花グループの弱点を探すこと。

オレはもう一度、自分の任務を確認し、寝た。…

翌朝8時20分。オレは管原と一緒に登校した。管原は極度の人見知りで人前だと緊張してしまうらしい…。

オレに心を許してくれたのかな？そう考えると妙に恥ずかしくなった。

管原と話しているうちに学校に着いた。教室に入り、リュウも交えて話をした。

「へえ」『本格推理委員会』にはいったんだ。お前も物好きだなあ。レイ」

「まあ、面白そうだったからな。そういえば管原はどうして委員会にはいったんだ？」

そい聞くと管原は顔を赤くしてこう言った。

「ちよつと無理矢理に入らされたんだよね…。」

入る時に何があったんだらうか…？

チャイムが鳴り小萌先生が朝のホームルームを始めた。

時は過ぎて昼休み。昨日の召集予告のため、早めに弁当を食べ、高等部の理事長室に向かった。

「失礼します。」

オレと管原が入って来た時先輩達は全員集まっていた。

集まったことを確認した委員長 - 桜森先輩はオレ達全員に書類を渡し、今回の事件を説明した。

「今回、私達が解決する事件は『盗難事件』よ。」
昨日のオドオドした感じとは違い、しっかりとした口調でオレ達全員にわかるように説明した。

「ここ最近、小等部の高学年から中等部の一年生を間に頻繁に起こっているものよ。盗まれた物は主に財布や携帯、カメラといったものばかり…。早急に事件を解決する必要があるわ。」

今渡されたプリントには盗まれた人や盗まれた場所、物が書き連ねられている。ざっと30名ほど。

「手がかりとして、その時間帯に犯行が行える人をリストアップしたんだけど…。」

「複数いるんですね。」「ええ…。全員、小等部の子で…。」

・五年一組 工藤麻衣子

・五年三組 神山進

・五年五組 進藤薫

「この三人なの…。」

全員アリバイはないんだけど…。決定的証拠がなくて…。」

この三人の内の一人が犯人らしい。

この三人の顔を覚えて、これからどうするか、考えてみた。

「まず、捜査の基本は聞き込みよ。一人ずつアタックしたみたら？」

「そうね…。今回の事件は小等部で起きている確率が多いから…。」

零牙君、ミアちゃん。この三人に聞き込みしてくれる？」

「わかりました。」「はい！」

そして放課後…。オレと管原は容疑者に聞き込みを始めた。

探し物（後書き）

夢幻

「今日はゲストを呼んでみました。」

管原

「どうも…」

零牙

「管原、恥ずかしいのもわかるが頑張ってくれ。」

管原

「う、うん。皆様、今回の『本格推理委員会』は楽しめたでしょうか？皆様に暖かく見守っていただけると幸いです！」

夢幻

「次回 『本格推理委員会』 重なる事件」

零牙

「期待してください。」

重なる事件（前書き）

次回で『盗難事件編』は終わります。

重なる事件

小等部の下校時間。オレと管原は今回の事件の容疑者を探していた。

しかし、三千人以上の人数を誇る小等部……。容疑者を見つけるも大変だった。

「あいつか。」

オレはやつとの思いで容疑者を見つけ、話を聞くことにした。

「工藤麻衣子さんだね？」

その少女は栗色の髪で髪型はボーイッシュだった。服装も、どこことなく、男の子っぽくなっている。

「ボクに何か用？」

「最近、小等部などで起きている盗難について、ちょっと……。」

「ふーん。良いよ。此処じゃ、邪魔だから端の方に行こうよ。」

「わかった」

移動して校舎の隅

「さて、ボクの何が知りたいのかな？」

「そうだな……。じゃあ、この日の放課後、キミはどこにいたんだい？」

「ん〜と、図書室にいたよ。」

「それを証明できる人は？」

「カウンター当番だった中林先生ならできるかも。」

「わかった。協力してくれてありがとう。」

「ん〜頑張つてね〜。」オレから去っていく工藤さんを見ながら、

オレは「……嘘をついているようではなかったな。」

と呟いていたら管原が走ってきた。

「あいつ、オレ達が質問している間かなり動揺していましたから。」
「私達の方は無理ね。本人に聞く前に、同じ部活の子が5人彼を見たというから…」

…結論をいえば、今回の事件の犯人は「神山進」の可能性が極めて高くなった。

「で、どうするの？神山さん捕まえるの？」
管原は少し興奮ぎみに言った。

「ん〜。いや、帰りましょう。もう下校時間だし…。明日、神山君に詳しく事情を聞きましよう」

「「「「「はい」「」「」「」

今日はこれで解散となった。

オレ達はまだ気づいていなかった。この事件の本当の始まりを…

次の日、朝食のトーストを食べていると

「『では、次のニュースです。』」

オレはいつも朝食の際にニュースも見る。普段はただ、記憶するだけだったが…。

「『現在、十人の女性を殺害し、現在も逃走中の神保哲也容疑者が不知木町に潜伏していることがわかりました。』」

この日は違った。不知木町はオレが住んでいる町だ。注意深く、そのニュースを聞いて見ると

「『神保哲也容疑者は明け方未明、不知木町に入り未だその行方をくらませています。不知木町警察署では《全力で捜査に当たります》とコメントをしました。」

では、次のニュースです。『』」

そのニュースを聞いて、オレは

「気をつけないとな…」と思わず呟いた。食器を片付け、管原と一緒に登校しながら、何も無いことを願っていた。

その日の放課後、遅れて来た委員長からとんでもないことを聞いた。

「皆大変！神山進君が行方不明になっちゃった！」

突然のことにオレ達は全員唖然となった。委員長・・・桜森先輩は続けて

「昨日、私達が質問したあと、家に帰ってないようなの…。」
と言った。

オレは今朝の「神保哲也」のニュースを思い出していた。可能性は否定できないといえれば否定できない。

「一体誰が…？」

楠木先輩はそう呟いた。「…神保哲也」

ふと、木下梢先輩はそう言った。

「…彼かもしれない…」自信はなさそうだ。

「そうね…。友達の家にもいないようだし…。可能性はあるわ。」

「だけど、何のために？神保哲也は神山進と何か関係があるのか？」

城崎先輩が最もな問いを投げかける。そこで全員黙ってしまった。

そこでオレは少し考えてみて、こう言った。

「楠木先輩、警察庁のデータベースから『神保哲也』に関する事
持ってこれますか？」

神保哲也はかなり計画的なやつらしい。彼の情報を知らなくては、
どうすることもできない。

楠木先輩は考えてみて、「なるべく持ってこれたら、持ってくるよ
うにするわ。」

「ありがとうございます。」

「委員長、『神山進』の最近の行動、調べることはできますか？」

「時間がかかるけど、みんなが協力してくれれば……。」

「はい、喜んで協力しますよ。」

管原や城崎先輩、梢先輩が頷いてくれた。

「とりあえず、なんでも調べましょう。考えるのはそれからです。」

全員が頷き、捜査を始めることになった。

「ん。なんや？なんか始めるんかいな？」

…立ったまま爆睡していた椎先輩を城崎先輩がひっぱたいてから。

次の日の放課後、楠木先輩が『神保哲也』に関する情報を持って来てくれたので、それを見てみることに。

「どうやら『神保哲也』は医者で被害者は全員、彼の患者だったらしい。」

「でも、彼は被害者全員殺すことは無理なのよね…？」

「そうね…。殺害された時刻、神山は完璧なアリバイがあるし…。捜査もそこで行き過まっているらしいのよ。」

「被害者は全員、毒殺されているんやから遅効製の毒ウ使えばええんやないの？」

「ううん、使用された毒は使っても2〜3時間ぐらいで毒が聞き始めるの。一度効いてしまえば、確実に相手を殺せるけど…。」

「じゃあ、カプセルにいれれば？前、テレビで『カプセルは飲んで数時間後に効く』ってやってたよ？」

「カプセルに入れたとしても、せいぜい5時間が限度…。被害者は神保哲也と最後に接触して12時間以上経ってから死んでいるの…。みんなの質問に楠木先輩が答える。オレは資料を見て、情報を頭の中でいつでも確認できるようにした。」

「…これは神保哲也の部屋の写真図ですか？」

「ん？…そうよ。それが神保哲也の部屋の中」

ありがとうございます。と返してから神保の部屋を見てみる。

ふむ、おかしなものはなさそうだな。パソコンにオーディオプレーヤーなどの電化製品に、目薬やマニキュアといったものだな。

…ん？なぜ男の神保哲也がマニキュアを持っているんだ？もしかして…

「楠木先輩、あの…」

このことを質問してみようと思い、聞いてみた。

「なに？」

「神保の部屋にあるマニキュアは一体何に使うんですか？」「えっ？ああそれ、神保哲也は最近爪を割って痛み止めに使っていたみたいよ？」

「…ありがとうございます」

共犯者の証拠でなく落胆するオレ。

「さて、今度は『神山進』君よ。みんな、協力してね！」

その日は神山進の足取りを追ったところで委員会は終えた。

.....

明くる朝、「本格推理委員会」総出で『神保哲也』と『神山進』の接点を探したが、見つからなかった。

オレも含めた全員が悩んでいると…

「そういえば、なんで私達はこんなに必死になっているんやろ？」
「バカかお前は？『神山進』が盗難事件の第一容疑者だからだろう
か。」

「ああ、そやったな。」

「椎さん…忘れてたの？」

「…お姉ちゃん…」

城崎先輩、管原、梢先輩と呆れてかえり…

「あはは〜。忘れてもうたわ〜。」

椎先輩は笑っていた。

そんなやりとりを聞いていたら、ふと、オレの中で何かが引っか
かった。何が引っかかったんだ…？と考え、もう一つの可能性に気づ
いた。そう、『神保哲也』が『神山進』を攫った理由を…。

「…どうしたの？零牙君？」

恐らく、オレは恐い顔をしていたのだろう…梢先輩が聞いてきたの
でついさっき出した結論を言うことにした。

「…『神保哲也』が『神山進』を攫った理由がわかりました。」

それを聴いてみんなは

「……………えっ！……………」

と見事に八モった。おかげで耳が痛い…。

「零牙君、どういうこと？」

皆を代表して委員長が聞いてきた。

「…神保哲也の目的は恐らく、『神山進』ではなく、『神山進が持っているもの』だと思います。」

「『神山進が持っているもの？』何だそれは？」

「学校の皆から盗んだ『デジタルカメラ』でしょうね…。」

「…何が言いたいのもったいぶってないで教えなさい」

楠木先輩の言葉に従い、説明し始めた。

「恐らく、『神保哲也』が欲しがっているのは、『神山進』が持っている『デジタルカメラ』でしょう。」

オレの予想が正しければ、それは神保の犯行の証拠となる写真が写っているはずですよ。

だが、そのデジタルカメラが神山進に盗まれたのを知った彼は神山進を探し始めて誘拐した…、というところでしょう。」

「なんで、神保は神山が犯人だって分かったんだ？」

「神山の犯行を見たのかもしれませんが、そうすれば、つじつまが合います。」

城崎先輩の疑問を梢先輩が答えてくれた。

「どつちにせよ、オレ達が探るべき行動は二つ
オレは指を二本立てて言った。」

「一つ 盗まれたものを見つけること。」

「一つ 神保哲也を見つけること。」

「このどちらかでしょう。」

「みんな黙ってしまった。おそらくは考えているんだろう、「最善の策」を……。『オレは『神保哲也を見つける』方が得策だと思えますね。警察庁のデータベースから大体の位置は特定出来るでしょうし……。」

「でも、それじゃあ、危ないんじゃない？」

委員長が止めるが楠木先輩は逆に

「鈴ちゃん。何かをやる時は、危険を犯さないといけない時もあるんだよ！」

「オレと零牙と楠木先輩で神保のところに乗り込んでみます。」

「それが良いでしょう。管原や委員長はオレ達が神保のところに行ったのを、バレないようにしてください。」

その後も議論はでたが、オレ、城崎先輩、椎先輩、楠木先輩で乗り込み、桜森先輩、梢先輩、管原で隠蔽することになった。

所変わって神保が潜伏（していると思えられる）場所にきた。もう太陽は沈んでいる。

裏口から侵入することにしたので扉を開けようとしたが……
「開かない……。どっしょよ。」

扉が開かない事態に。まあ、こんな事態は予測済みなので……

「城崎先輩、鍵穴照らしてもらえますか？」

「…何する気だ？お前…」

ゴソゴソと制服の内ポケットから、道具を取り出した。

「何…それ…？」

楠木先輩の質問にこう答えてた。

「13ある犯罪行為を犯す道具の一つ『開錠 ピッキングツール』です」

「武装 金…ブラボーがなくぞ。」

城崎先輩が冷ややかなツツコミを入れているうちに鍵は開き、いざ侵入。

中はもう寂れていた。どうやら元給水施設だったらしい。

椎先輩の『究極の勘』の案内があったが、神山の気配は感じられなかった。しかし…

「あつ 神山君！」

今回の事件の元凶、神山進は発見した。

かなり弱っているけど

大丈夫そうだ。

「うっ…。誰？」

「本格推理委員会よ。もう大丈夫。家に帰れるよ。」

楠木先輩が優しく声をかける。

しかしオレは今回の要となる”あるもの”の隠し場所を教えてくださいなうことにした。

「神山君、君が盗んだデジタルカメラはどこにあるの?」

「学校の 中庭の木の根元」

「ありがとう。今はしっかり寝な。」

「うっ…」

「とりあえず、外に出ましょう。」楠木先輩の一言で一旦外にできることにした。

神保哲也は木ノ花学園にいた。

神山進が口を割らないので、自力で探しにきたのだ。誰にも見られないよう細心の注意を払って潜入。

搜索を開始した。

「私は神山君を家族の元に送ってくるね。」

「わかりました。オレと零牙でデジタルカメラを探します。」

「早くしましょう。業を煮やした神保が木ノ花学園にいる可能性だってあります。」オレと城崎先輩、楠木先輩と椎先輩で別れ、オレ達は木ノ花学園に向かった。

途中で城崎先輩が誰かと連絡を取り始めた。口調からして菅原だろう。

「ミア、中庭の木の根元にデジタルカメラ埋めてある。掘り返してくれ!」

「『わかった！お兄ちゃん達は？』」

「今、零牙と一緒にそっちに向かっている！」

「もしかしたら、神保がいるかもしれない！気をつけろよ！」

「『うん！掘り返したらまた、連絡するね！』」

ピッ

電話を切った先輩に、

「急ぎましよう！！」

「ああ！！！！」

声を掛け、力強く返事が返ってきた。

闇の中で二人は駆け抜ける。

重なる事件（後書き）

夢幻

「いや〜今回の事件もいよいよ次回でラストだね。

零牙

「内容はグダグダだったかな。」

夢幻

「まあ、最初の事件だし。いいだろ？」

零牙

「最後はきっちりカッコ良くしろよ？」

夢幻

「任せる！どうにかするさ！」

零牙

「次回 『本格推理委員会』 幸福な時間」

夢幻

「お楽しみに！」

幸福な時間（前書き）

「第一の事件」解決編です。

幸福な時間

管原雅は中庭いた。掘るためのシャベルも借りてある。先輩達は今トイレに行っている。

「お兄ちゃん達に言われたことをやんなきゃ…。」
そういつて、彼女は中庭の木の根元を掘り始めた。

そして、ものの5分で泥にまみれたデジタルカメラを見つけ出した。

(この中に神保の犯行を証明する写真が…)。
どんな写真かと思っただが見ないことにした。今、デジタルカメラを起動させれば神保に見つかる危険があるからだ。

「とりあえず、お兄ちゃんに連絡しよう。」

そう思い彼女は携帯電話を操作し始めた。

その時、闇に蠢く男が管原の前に現れた。

- - - - -

タッタッタツ

「くそ！まだ着かねえのかよ！」 「あと5分ぐらいですね…早く行きましょう。」

オレは城崎先輩と一緒に走っていた。学園の敷地かは見えて来たがまだ遠い。

その時、ピリリリリリ！と城崎先輩の携帯が鳴った。相手は管原らしい。

すぐさま、携帯に出て、安全の確認をしようとした。

「もしもし？ミアか！？今どうして…」

「『助けて！！お兄ちゃん！！』」

いきなりのSOSに驚き、走りながら、状況を聞いてみる。

「『ハアハア、デジタルカメラを掘り出して、ハアお兄ちゃんに連絡、ハアしようとしたら、いきなり神保が現れて…』」

「管原！今、どこにいる！？」

「ハア、学校裏の林の中。」

木ノ花学園の敷地内には小さいが林がある。恐らく、管原はそこに逃げ出したのだろう。

「わかった！管原、すぐ行くから待ってる！！！」

オレは木ノ花学園に向けて、全力で走り始めた。

- - - - -

一方、その頃管原は犯人から全力で逃げていた。

「ハアハアハア…。」

管原は運動が得意な方だが、それはあくまでも同年代と比べてである。

大人の男と競争すれば、確実に負ける…。現に少しずつ距離が縮まっている。それでも逃げていた。

（もう少しでお兄ちゃんが来る…そしたらもう大丈夫。）

一縷の望みにすがって、逃げて続けていた。

しかし…

「あっ！」

木の根に足を引っかけて転んでしまった。

（早く、逃げなきゃ…）しかし、恐怖で足が動かない。なんとか逃げようとしたが足が動かない。そうしていると、神保哲也が管原の前に現れた。

優しげな風貌だがその目は冷たく凍てついていた。

「お嬢ちゃん、大人しくそのカメラを渡してくれないかな？ そうすれば、命だけは取らないから…」

管原の前に仁王立ちし見下して言った。

管原は恐怖で泣きそうだった。しかし10人も命を奪ったこの男に対して負けたくなかった。

管原は逆に睨み付けて

「おまえなんか…」

「あん？」

「おまえなんかに渡してたまるかあ！」 精一杯、声を張り上げて睨み付けた。

「生意気言っでんじゃねえぞ！クソガキがあ！！」

胸ぐらをつかまされて無理やり立たされた。

その瞬間にデジタルカメラを思い切り、向こうに投げた。

左手を見るとぎらぎら光るものがあつた。

（ああ…私、殺されるんだ…。ごめん。みんな…）

目を瞑ってくる痛みに耐えようとした。しかし、その瞬間、

「そいつから手を離せ…」

「あん？」

「管原から、手を離せってんだよ。この野郎！」

主人公^{ヒロ}がやってきた。

オレは目の前の状況にイラついている。

恐らく、管原の胸ぐらを掴んでいるやつが『神保哲也』なんだろう。管原の命が危険な今、隠し持っている木刀で殴りにいけない…。そう思ったオレはまず、目下に落ちているデジタルカメラを拾った。

「おい…小僧…。それをこっちに渡せ。さもないとこいつ殺すぞ！」
そう言っつて管原の喉元にナイフを突き立てた。

「交換だ。」

「あん？」

「このデジタルカメラと管原を交換しろ、それならあんにこれを渡す。」

そう言っつてオレはデジタルカメラを前に突き出した。

「そんな取引乗るわけねえだろ！」

ドラマではこういう場面では取引に応じるが、現実はず。やつはこの取引に乗ってこなかった。それならば…

「じゃあ、あんたがどうやって10人の被害者を殺したか、その方法をオレが知っているとしたら？」

「なに？」

「零牙くん…どうやって殺したかわかったの？」
管原が絞りだすような声で言った。

「ああ。」

「ほう…。じゃあ答え合わせといくか？名探偵君？」

さあ、トリックの解き明かしの始まりだ…。

待ってる！管原！今助けるからな！

「あんたは、遅効性の毒をカプセルに入れて被害者にわたしたんだ。」

「はん。それじゃあ、オレが犯人とは言えないぜ？カプセルに入れてもせいぜい5時間が限度… オレと被害者は12時間以上あつてないぞ！」

「ああ、確かに普通にカプセルに入れて渡したんじゃ、5時間が限度だろうな。だからアンタは使ったんだらう？」

「何をだ？」

「アンタの部屋にあつた痛み止めのマニキュア、あれを、毒の入ったカプセルに塗ったんだらう？」

その瞬間、神保の顔が驚きに満ちた。

「アンタはマニキュアを塗った毒入りカプセルを被害者に渡して、アリバイを得てたんだらう？」

被害者が毒入りカプセルを飲めば、まず最初に溶けるのはカプセルではなく、周りにコーティングしてあるマニキュアから溶けていく。コーティングするマニキュアの量を変えれば、時間調整もできるだらうしな。

…これがあなたのアリバイトリックの真相だ。――なんで10人もの人を殺したんだ？」

オレがアリバイトリックの真相を解くと神保は不気味に笑い

「いやあ、お見事だよ。まさかこのトリックが小学生に解けられるなんて思わなかったよ。

私が10人もの人達を殺した理由？そんなの決まっているじゃないか。

《実験》だよ。何時間も溶けない毒を作れるか…そのための必要な犠牲だったんだよ。」

狂っている…管原は思った。

「《実験》だ？ふざけんなよ。そんなことで自分を正当化しようとするんじゃない…。」

そして、今難攻不落なトリックを解いた名探偵は本気で怒っていた。

「アンタがやってきたのはただの《人殺し》だ！」

「うるさい！さあ、カメラを渡せ。さもないと…」

そう言って管原の首にピタリとナイフ突き立てた。少し当たっているのか、血が細く出ていた。

「同時にだ。オレが合図したら、管原を離せ。」「まで。合図はオレがする…。3・2・1」

神保は管原を、オレはデジタルカメラを同時に離れた。

オレは管原に駆け寄り、「もう大丈夫だ。よく耐えたな。」

と言って抱きしめた。

神保はカメラを拾い上げ、急いで、データファイルを確認するが、しかしデータはなかった。

「なんだ？これは！」

神保は怒り狂った。そしてオレのほうを向き、

「ああ、そうそう、データファイルはここだ。」オレはポケットからデータチップを取り出して見せた。

「さて、と。」

気絶した管原を地面に下ろして、隠し持っていた木刀を取り出す。そして「神への祈りを済ましておけ……」

本物の「殺意」を神保に向かった放った。

とたんに神保はガクガク震えだし、後ずさりをし始めた。

「おまえに殺された人達の……管原の受けた恐怖をおもいしれ！」

オレは神保との間合いを一瞬で詰め高く飛んだ。「飛天御剣流！
龍追閃』！」

木刀の一撃が神保の意識を奪った。

「安心しろ。手加減してやった。あとは暗い牢屋で反省してろ。」

管原を背負い、神保を引きずって先輩達の元に向かった。

.....

「くそ！ミアのやつどこにいるんだ？おーい！ミアー！」

「見つかった？」

「いや、まだです。」

「…零牙君もいない。」「全く見つけれへんで。」

「全くどこにいるのよ！あの子たち！」

本格推理委員会全員で探しても見つけれられない。もう、陽は登り始めている…。本当にやばいな。

「もう一回、みんなで探しましょう！」

「その必要はありませんよ。」

「……零牙くん！（零牙！）」「……」

背中にミアを乗せ、誰かを引きずってきた速水零牙の姿をオレ達は全員で確認した。

「ミア！大丈夫か！？」

「大丈夫ですよ。城崎先輩。寝ているだけですから。」

「その引きずっている人…」

「神保哲也です。気絶させてあるだけなんで、はやく警察を呼んでください。」

「ええ、わかったわ…」「しかし無事で良かったわ。探しての見つからないからてつきり…」

「オレはそうそう死にませんよ」

と言って笑ってた。すると、

「うっん…」

「起きたか？管原。」

「ハッ！神保は？どうなったの？」

ミアが目覚めました。

「大丈夫だよ管原。全部終わったから。」

「えっ！終わったって…どういうこと？」

「事件は解決したんだよ」

「うん。…あれ、私って今…。」

「あー。気絶していたからおんぶしてここまでできたぞ?」

「へっ…。カアア（顔が急激に赤くなる）お、降ろして〜!」

「うおっ! あ、暴れるな降ろせない!」

「うっ…! / / / /」

ミアは降りたあとも顔を赤くしたまんまだった。

「まあ…、無事で良かったよ。管原。」

「〜〜っ! / / / /」

ミアは顔をトマトのように赤くして、そっぽ向いてしまった。

「ミア、零牙に何か言うことは?」

取りあえず礼を言わせないと…

「あ、ありがとう…」

「ちゃんと、顔見て!」「うっっ…! / / / / あ、ありがとう…。」

「…!! お、おっ / / / /」

ミアが礼を言うと零牙も顔を赤くした。すると、「あれあれ〜二人共、顔が赤いゾ〜」

「どうしたんかナ〜?」

椎と菜摘先輩がちゃかし始めた。それを見守るオレ達…。

「「なっ なっ なんでもないです! / / / /」」

「見事に八モっているヨ〜」

…このままじゃ永遠に続くので…。

「先輩、椎、そこらへんにしとけ。」

「そつだよ二人共。」
オレと委員長で止めて、家に帰ることにした。

事件が解決し、家に帰る途中、城崎先輩が

「おふくろの生存か気になるから先に行っているぞ。二人は歩いてゆつたりこい。」

「あ、お兄ちゃ『ミア』…何？」

「…零牙ならOKだぞ。お袋にはオレが伝えておくからな」

「ちよつ！お兄ちゃ『じゃあな』…もう！、お兄ちゃんたら…。」

なんてやりとりのおかげで管原と二人つきりに…なんか管原がチラチラ、オレを見ているし…。

「な、なんだ？なんか付いているのか？」

「別に…なんでもない」

勇気を出したが再び、気まずい雰囲気…。そうしてきたら、家が見えてきた。そしたら、管原が「ねえ！」

「ん、ん？何だ？」

「あつあのさ、今度から『ミア』って呼んでくれない？私も『レイ』って呼ぶから…。」
と、提案してきた。

「良いよ。管原…ミア」「今日はありがとう…レイ」

ああ…恥ずかしい…死んでしまいそうだ…。

家の間に着き別れようとしたとき、

…

オレの頬に柔らかいものが…

「……………ミア！」

…もう城崎家の玄関はしまっていた。

オレは…今日のこの幸福な時間を…どんなことがあっても決して忘れないだろう。…

『第一の事件 終』

幸福な時間（後書き）

夢幻

「第一の事件終了了。いやあ長かったわ」

零牙

「今回はギャグパートだな？」

夢幻

「イエス。遂にあいつらが動きだすよ。」

零牙

「ところで聞くが作中に出てきた『13ある犯罪行為を犯す道具』って、ちゃんと考えてあんのか？」

夢幻

「あ、ありますよ。ちゃんとあと12個出しますよ。（汗）

零牙

「一度、ちゃんと反省させた方がいいな。」

夢幻

「零牙君、木刀なんて出してどうするの？ねえ！」

零牙

「ちゃんと真面目に考えてからつくれや！ コリアマ！」

夢幻

「ギヤアアアア!!」

管原

「次回 本格推理委員会

『異端審問会』

零牙

「お楽しみに」

異端審問会（前書き）

ついに「あいつら」が動きだします。

異端審問会

『諸君、今回我々が集まった理由は他でもない。「ヤツ」のことだ。』

ここは「とある組織」のアジト。ここでは今、重要な会議を開いている。

『ボス…「ヤツ」ということは…。』

『遂にやるんですね。』

『ああ、もう「ヤツ」の好きにさせられない…。
次で「ヤツ」を狩る』

『わかりました。では次は「ヤツ」を狩るときに…』

『ああ、オレ達が「ヤツ」…「速水零牙」を狩るときに集まろう。』

『『ラジャー！…』』

「ママ〜あれ、なに？」

「しっ！見ちゃダメよ」

………

オレの名は速水零牙。

木ノ花学園小等部6年6組の小学生だ。

「レイ」。行こう！」

彼女の名は管原雅。

オレと同じ木ノ花学園小等部6年6組の同級生である。

「おう！」

『神保哲也』の事件が終わり、本格推理委員会が当初、捜査していた『盗難事件』も無事解決し、平和な一時を過ごしていた。

- - - - -

時は進んで学校、いつものクラスである。オレはミアとリュウに勉強を教えて、半日過ごし昼休み。

キーンコーンカーンコーン。

チャイムがなり、お昼休み。木ノ花学園には給食はなく、また、学食も中等部からのため、小等部はお弁当となる。

「あー腹減った。さて、お弁当は…。あれ？」

おかしい、今朝作ったお弁当がない！

「どうしたんだ？レイ。」

「リュウ…。お弁当、忘れた…。」

この事実を親友に伝えた…きっと助けてー！

「ぶははは！お弁当忘れたのか！残念だったな！」

「…くれないようだ。」

「頼む！分けてくれ！」「嫌だね！」

「頼む！」

「無理だね」

「そこをなんとか！」

「断る！」

なんてやつだ。親友の危機を楽しんでやがる…！

「あ、あの〜。」

「何だ？ミア？」

ミアが遠慮がちに何かを言おうとしてる

「良かったら、お弁当食べる？作りすぎて二つ持って来ちゃったし

…」

「ぜひ！いただきます！」

これは幸運だ！ミアの手作り？お弁当が食べられるなんて！

「は、はい。どうぞ…。あんまり自信ないけど…」

「えっ！これミアの手作り！？」

「う、うん。口に合うと良いんだけど…」

お弁当を開けてみた。中身は

・卵焼き

・唐揚げ

・ハンバーグ（ミニサイズ）

・ブロッコリー（マヨネーズ付き）

・チャーハン

という、超豪華ラインナップ…。念のために聞いてみた。

「ミア…これ全部手作り？」

「うん…。お兄ちゃんも手伝ってくれたけど…」

なんか…全ての料理が凝っていて、とてもおいしそうに見える。

『あ〜それ、雅ちゃんの愛妻弁当？』

『いいな〜。零牙君。こんなに尽くしてくれる彼女がいて。』

『しかも零牙君が忘れた日に持ってくるなんて。』

『ヒューヒュー！お熱いね。二人とも』

女子からのもてはやされて…。

「わわわわ私は！レレレイのか彼女じゃない！」

ミアがかなりテンパってた。

このままではお弁当にありつけそうにないので、はしをとり、

「いただきます」

まずは卵焼きをいただいてみた。

「ど、どう？」

ミア感想を求めてきた。ふむ、甘過ぎず、しょっぱ過ぎず…。

モグモグゴクン！

「…うまい」

普通にうまかった。

それを聞いたミアはホツとしたようなため息を着き、

「どんどん食べて！」

と笑顔で言った。

唐揚げやハンバーグ、チャーハンもおいしかった。ああ、ミアのよ
うな彼女がいたらなあ…。

「ミアが彼女だったらなあ…。」

『零牙君、本音がもれているよ。』

ハッ！しまった幸せすぎてつい、本音が…。

「レイ…？」

ミアは顔を俯きにしている。

「は、はい？」

何だろう？ちよつと怖い。

「そういうことは二人きりのときに言ってよね！／＼／＼」
単に照れてただけだった照れている顔も可愛いな。

「ミアの料理がおいしくてな。また作ってくれないか？」

「また、作って欲しい？」

少し屈んで上目遣い。

…か、可愛いすぎる…。落ち着けオレ、ここは冷静に対処しろ…。

「うん。また頼むよ。ごちそうさま」

ああ、今日のお昼ご飯最高だったな。今なら、死んでも悔いはない…。

『いまだ、やれ…』

『イエス、サー』

「レイ…ちよつと良い？」

「何だ？リユウ…」

ドスツ（鳩尾に拳が入る音）

バタツ（オレが気絶する音）

『標的、速水零牙を捕獲しました。須山会長』

『よくやった、早川裁判官。即刻、「異端審問会」を開くぞ。』

『サー、イエス、サー！。』

薄れゆく意識の中、そこで意識は途絶えた。

『諸君、ここは？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！』』』

『男とは？』

『愛を捨て、哀に生きるもの！！！』

『宜しい。これより6-F異端審問会を開催する。』

目を覚ますと、オレは十字架にかけられてた。そして、目の前には覆面をした宗教団体が…。

「何をしているんだ？おまえら…？」

『目を覚ましたか。被告人、では罪状を読み上げたまえ』

『はつ。須山会長。えー、被告、速水零牙（以降この者を甲とする）は我が木ノ花学園小等部6年6組の生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は環境破壊罪及び背任罪である。本日正午甲が同6組の女子生徒である菅原雅（以降、この者を乙とする）に対して強制的な背任行為、及び環境破壊を行っているところを、我らが同胞が捕縛、現在に至る。尚、今度の甲と乙の関係を調査し、甲に然るべき罰を…』

『御託はいい、結論だけを延べよ』

『手作りの愛妻弁当を作ってもらえて羨ましいのであります！』

『うむ、実にわかりやすい結論だ。』

『異端者、速水零牙 汝は自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？』

「すまない、返事をする前にいくつか聴きたいことがある。」

『聞いてやる』

「ありがとう、

おまえらの目的と裁きの内容が聞きたい。」

『ふむ、我らがFFF団の目的は、幸せが訪れた者に裁きの鉄槌を下すことだ。』

「うん。」

『そして、裁きの内容だが…まずガソリンとライターを用意し…』

「ありがとう、もう大丈夫。十分だ。」

まさかのスタイルの拷問方法。そしてそれは処刑と言うべきではないか？

『それでは、汝、裁きを受け入れるか？』

「受け入れる前に言い残したい言葉がある」

『良からう、聞いてやる。』

「ありがとう、オレがイギリスにいたころ、オレは教会で神父の仕事をしていたんだ。」

そのころ、勉強教えてくれた修道女がいてな…。今度、みんなに会いたいと言っていたが、合わせられそうにない。残念だよ…」

そして制服の内ポケットから神裂の写真がひらりと舞い落ちた。

クレープを笑顔でほうばっている神裂香織の姿が映っていた。

それを見て、動きを止めるFFF団。

それから

『今回の異端審問会での速水零牙は無罪とする。…これに異論はないな？』

『『異論ありません』』

『宜しい。では被告人を解放し、これにて閉会とする。』

十字架から解放され、命に危機を回避。

まあ、神裂なら大丈夫だろう。

元の席に戻り、次の授業の準備をした。

.....

「あゝ。今日も疲れた。」

「大変だったね？レイ。」

「『異端審問会』なんて恐ろしい組織を作りやがって…。本当にヤ

「バかったぞ…。」

「ふふつ。でも面白そうだね。」

「いや、できうる限りならもう二度と会いたくない。」

異端者として殺されたくない…！

「ん〜。でもそれは無理かも。」

「何でだ？」

「だって、またお弁当、作ってくるからさ。」

そう言つとミアはニカツと笑った。

…ミアのお弁当が食べられるなら大丈夫だろう。例え来たとしても最悪、武力で…。

「ミア」

「何？」

「今日はごちそうさま。おいしかったよ」

そう言つとオレは少し微笑んだ。

「じゃあ、また明日」

「うん、また明日ノノ」

こうしてオレの愉快な1日が終わった。

異端審問会（後書き）

夢幻

「はい」。今回は異端審問会の初登場でした！」

零牙

「作者よ。FFF団は六組の須山が会長なんだろう？なんでFFFになっただんだ？」

夢幻

「アルファベットの六番目の文字がFだからだよ。」

零牙

「そこは考えてあるんだな……。」

夢幻

「次回もギャグパートです！」

零牙

「次回 本格推理委員会 『ラブレターと逃避行』」

ラブレターと逃避行（前書き）

今回は新キャラクターアンド、作者登場です。

ラブレターと逃避行

異端審問会の追撃に慣れてきたある日、もうすぐ夏だから暑い日が続いていた。

「だ〜。暑い…。」

「そんなんじゃないダメダメだよ！レイ！もっと元気元気で行かなくちゃ！」

「そうだ。ミアの言う通りだ。シャキツとしろ！」

いつもの登校ではなく、今日は城崎先輩も一緒だ。たまには早く登校しよう！というミアの提案によってこうなった。

そうしていると駅が見えてきた。

「うっす、おはよう。」「おはようございます。梢先輩。」

クールな印象の梢先輩がいた。

「ミア、ほらあいさつはどうした？」

「そうだぞ。ミア。21行前の言葉はどうした？」

ミアの特性“人見知り”が発動。

「お、おはようございます。」城崎先輩の後ろでしがみついて離れない。

「おはようございます。」三人に向かって挨拶した梢先輩は夏服のセーラー服だった。ちなみに、オレや城崎先輩も夏服である。（ブレザー着用）

「あれ。あいつはどうした？」

「お姉ちゃんならまだ寝てます。」

「起こして来なかったんですか？」

「ええ。私、冷たい人間なんです。」

そう言う梢先輩のはかなりクールだな。と改めて思った。

そうすると…「梢」

という声だ。

何かと思えば、椎先輩が梢先輩に抱きついてた。

先輩は極度のロリコンだ。ミアにも過度のスキンシップをとる。オレにもやってくるが、上手く回避している。

「梢おはよう、ミアちゃんもおはよう」

顔が欲望丸出しのエロオヤジだった。

「お、おはようございます。」

ミアも椎先輩には挨拶する。

「ああ、今日も可愛ええなあ。」

そう言ってミアに抱きついた。

ちなみに、楠木先輩も同じぐらい過度のスキンシップをとる。

作者

(出さなきゃ良かった…)

作者も後悔しているらしい。

「先輩、そろそろ電車くるんで行きますよ。」

「ほら、行くぞ。」

オレと城崎先輩で椎先輩をなだめて学校に向かった。

木ノ花学園に着き、上履きを取ろうと下足箱を開けた。

そのなかに、手紙があった。

(これは…！まさか…！)
おそらくラブレターだろう。

「ういゝッス。どうしたんだ？レイ。」

リュウがきた。まずい手紙を見られたら、異端審問会が怒り狂う羽目はなる…。

「いや、何でもない。」慌ててラブレターを隠し、平然とした態度に。

「さ。はやくいこうぜ。わかんない問題とかあるんだろ？」

「ん。頼むぞ。」

今回の事、誰にも気づかれないうか…？

.....

「秋山君」「はい」「江藤君」「はい」「沖田さん」「はい」

普通の出席確認…。特に問題はなさそうだ。

(…須山、速水がラブレターをもらったそうだ)

『殺せえ！！！！！！』

須山の一言で全員がカッターか、コンパスのどちらかを投擲準備。そして全員から放たれる殺気

「待て！おまえら何を！」

『黙れ…異端者…貴様、管原だけでなく他の女の子からラブレターをもらっただと…？』

『殺す…。マジ殺す。魂まで殺す…。』

『出入り口を固めろ！確実に殺るぞ！』

「くっ…。ミア、みんなを説得して…」

《ゾクリ》

急に背中に悪寒が走った。

ギチギチと後ろを向くとミアか底冷えする声で…

「レイ…私がいるのに、ラブレターもらったって本当？」

静かに放たれる殺気は誰よりも怖ろしかった。

「み、皆さん…。まだ出席確認の途中なのですよ。」

小萌先生の声でしぶしぶ席に着くみんな。

「じゃあ続けますよ？」「織田君」「速水殺す」「上条君」「速水殺す」「管原さん」「レイ。…あとでお話ししよ？」

「木下さん」「はい」

「菊池さん」「はい」

「桐山君」「速水殺す」

「待て！男子の返事が『速水殺す』になっているぞ！！…それからミア、オレはラブレターもらったってミア一筋だから怖い声だすのやめろ！」

「それじゃ～みなさん、今日も元気に頑張りましょう。」

「待ってくれ先生！オレを見捨てないでくれ！先生え！」

小萌先生が出て行った瞬間みんなが殺気をオレに向ける。

(ヤバい…確実に殺される！)

「くっ！」

オレは窓から飛び出して逃亡した。

『ヤツめ！錯乱したのか？』

木ノ花学園にベランダはない…。あとは地面に向かった落ちるだけ…。

「13ある犯罪行為を犯す道具の一つ『潜入 フック付きワイヤー』！！！！(自動巻き取り式)」

ワイヤーの先端部分にあるフックを屋上の手すりにかけてワイヤーを巻き取る。するとあっというまに屋上についた。

(はやく中身を確認しないと…。)

下からFFF団の声が聞こえてくる。大急ぎで中身を確認すると、

《大切なお話があるので、放課後、体育館裏に来てください。》

と書いてあった。急いで元に戻すと、

『『速水零牙アアアア！』』

FFF団の怒号が聞こえてきた。

「くっ…。作者、助けてくれ！」

主人公からのSOS…。それに対して、俺は、

作者

『…異端者には、死の鉄槌を！』

「くそっ…。万事休すか？」

『零牙アア！もう逃げられないぞ…。』

十人の異端審問員が屋上にやってきた…。
鎌とマシンガンを装備して。

「オレを殺す気かア！作者ア！」

作者

『…異端者には、死の鉄槌を！…！』

ジャコン！とマシンガンを撃つ準備が完了。
後は蜂の巣にしてやるだけ…。

「くそっ！」

オレは屋上から飛び降りた…

『ヤツめ、本当に死ぬ気か？』

慌てて下をみるが誰もいない。逃げられた。

『くそっ！会長に連絡！大急ぎでヤツを殺すぞ！』

『作者よ……。いや、同志「夢幻」よ、おまえならヤツの居場所がわかるのでは?』

作者

『おまえら……俺の力がないと異端者一人処刑できないのか?』

異端審問会の異端者を確実に殺すというプライドはどうした!?!』

『そつだ。みんな……殺るだつたら、俺たちの手で殺りきつてやろうじゃねえか!』

『『おおー!!!!サーチアンドデース!!!!』

.....

「作者の野郎……後書きで殺つてやる……。」

オレは6年5組の教室にいた。

屋上から飛び降りる際フックをかけてワイヤーで降りてきた……。そして、今、突然の来訪者^{オレ}に5組のクラスの皆さんが唾然となっている。科学の授業中だつたらしい。

「すみません!授業の邪魔をしてしまいました。」

オレは教室を走って出て行った。

その時、黒髪の女の子が、

「何で、アレを持っているんだろつ……?」と言ったのをオレは知らなかった……。 - - - - -

その頃、早川龍之介は

「君がこのラブレターの送り主か。一体、誰に送ろうとしたの？」
長い黒髪の少女は顔を赤らめて

「リュウに…早川龍之介に送ろうとしたんです。」
よく聞き取れなかった…というより聞きたくなかった…。

「えっ…。じゃあ、君はリュウの事が好きなの？」

「好きですし…許嫁何です。」

その瞬間、オレは息が止まった。

「えっ…リュウの奥さん…君が!？」

少女・白石さんは頬を赤らめて頷いた。

ブチッ

オレの怒りと嫉妬が頂点に達した。

「あの野郎…許嫁の存在がいながら異端審問会でオレを裁くとは…」

「あの…どうしたんですか？」

「君について来て欲しい。そして、言って欲しいことがあるんだ」

.....

ドン！オレは6年6組の教卓側の引き戸を開けた。

その瞬間、異端審問会（+ミア）がこっちを見た

「全員集まっているな。みんなよく聞け！オレが持っているラブレターは実はオレ宛てではない！」

「何を世迷い言を…そのラブレターはおまえの下足箱にあったはず

だ！」「ああ、確かにオレの下足箱に入れてあった…しかし、それはオレではなく、リュウの…早川龍之介の下足箱に入れられるはずだったんだ！」

『何？』

「この手紙は私がだしたの…けど間違えちゃって速水君の下足箱に入れちゃったの。」

白石さんが出てきて説明した。

『同志 龍之介…この者とは知り合いなのか？』

『オレは…そんなヤツ知らない。』

「…！！」

《知らない人宣言》が相当きたようで、白石さんは泣き始めてしまった。

「ジー（女子の冷たい視線）」

『な、何だよ。オレは本当にそんなヤツ知らない！』

「リュウ！小さい頃に一緒にお風呂入ったのを忘れちゃったの!？」

ブチン！（男子全員がリミッターを外した音）

『貴様…こんなに可愛い子と一緒ににお風呂に入っただと…』

『なんて羨ましいヤツだ…殺してやりたい。』

『神への祈りを済ましておけ…』

「待ってくれみんな！オレの話を…」

「一緒のお布団で寝たのに！」

ブチン！！（第二リミッター解除）

『一緒のお布団で寝ただと！』

『羨ましい…妬ましい…』

『お前にオレ達の…独り身の辛さがわかってたまるか…』

「みんな！全身からどす黒いオーラが出てんぞ！」

「ファーストキスもあげたのに！」

ブチン！！！！（最終リミッター解除）

『殺せえ！！！！！！！！！！』

『『『『『うおおお！！！！！！！！！！』』』』』

「たっ…たすけ」

……………。

「白石さん、このバカを連れてってくれ。煮るなり焼くなり好みにして良いから」

「……うん。わかった」

白石さんは早川龍之介（だと思われるもの）を引きずって持っていた。

『おい！血は丁寧に拭いておけ！染みになるからな！！！』

『弾効も集めておけ！見つかったら厄介なことになる！』

『鎌の手入れもしておけ！』

男子全員で暴行現場の事故処理をしていた。

それを見た女子は…

「なんかすごい光景だね…。」

「うん。女の嫉妬より恐いかも…」

『あと、飛沫痕の処理だな』

異端審問会の覆面を被ったオレ登場。

「ねえ、レイ。」

『なんだ。ミア』

「今度、一緒にお風呂入らない？」

突然のカミングアウトに驚くオレ。

「バ、バカ！いくら冗談にも程があるぞ！」
そして…

『速水を殺せえ！』

『うおお、サーチアンドデース！！』

命を懸けた鬼ごっこ第二ラウンドスタート。

.....
更に時が過ぎ、放課後。オレは朝学校に来たメンバーで帰路に着いていた。

「.....っていうことがあったの」

「.....怖ろしい組織だな。」

ミアが今日の異端審問会の話をしたら先輩達がドン引きしてた。

「先輩、これぐらいで驚かないでください。」

当たり前のように返事をするオレ。

「いや、驚くなっていうほうが無理だろ。」

「級友を殺すことに躊躇いは感じないのか？」

梢先輩の言うことはわかるが...

「先輩、『級友』ではなく、『異端者』です。異端者は罰さなければならぬのです。」

「...」

もうこの事に関してはつつこまないことにしよう...と思われているだろう。

「しかし、まあ最近学園内で目立った事件がありませんね...。大きな事件の前触れじゃなければ良いんですが。」

「嫌な事言つなよ、零牙…。平和が一番だろ？」
「…そうですね。」

そう、今のこの平和な時間が永遠に過ごせれば良いのに…そう思ったが…

「ふうん、ま、その平和がいつまで続くかな？」

突然現れた男・赤髪で2メートルぐらいの身長、耳に大量のピアスを付け、右目の下にバーコードのような刺青をした不良神父・『ステイル』マグヌス』の一言でその《平和》はあっさりと打ち砕かれた…。

物語は続いていく。

闇の中の光を守るために新たな『事件』が幕を開ける。

ラブレターと逃避行（後書き）

夢幻

「今回、新しく登場したキャラ 『白石美雪』のプロフィールです。

」

白石美雪

木ノ花学園小等部六年五組。 文芸部所属

早川龍之介とは親、本人が認めている許嫁。
（唯一龍之介だけが認めていない）

名家のお嬢様でもあり、『容姿端麗 才色兼備』がよく似合う。

長い黒髪が特徴。

夢幻

「とまあ、こんな感じです。バカ スの霧島翔子さんのようなポジションです。今後の活躍を期待してください。」

零牙

「作者アアアア！」

夢幻

「うおっ！真剣なんて持ってどうするの？零牙君！」

零牙

「有言実行だ…。死ねえ！」

夢幻

「ギヤアアア！」

ミア

「次回 本格推理委員会
『光と闇』」

零牙

「お楽しみに……っとミア死体運ぶのを手伝ってくれ。」

ミア

「わかった。血はどうするの？」

零牙

「専用の洗剤持ってきたからそれで。」

ミア

「うん。」

夢幻

「……………」

光と闇（前書き）

『第二の事件です』

零牙の魔法名、魔術が出ます。

「関係ないって、なんだよ！零牙はオレ達の仲間だぞ！」

「そつや！アンタなんかに関係ない！」

それを聞いてステイルは面倒くさそうに

「あー、君たちには本当に関係ないんだ。僕は零牙に用があるんだ。わかつたら黙っててくれないかな？」

「てめっ…「止めてください、先輩」…零牙？」

「ステイル、話は行きながらも良いだろ？ミア、先輩、また明日学校で会いましょう。」

「レイ。ちゃんと戻って来てね？」

ミアが不安そうに聞く。それに対してオレは…

「ああ…」

それだけ返した。

.....

ところ変わってどこかの路地裏、オレとステイルは歩いていた。

「しかし、久しぶりだな。ステイル。」

「ああ、最後に会ったのは『あの子』を追う時だったな…」

「…インデックスは元気か？」

「相変わらず元気だよ。…あの笑顔を見るたび心がえぐられる。」

ステイルは悲しいそうな顔をして、そう言った。

「教会も酷だよな。お前にこんな指令を出すなんて…」

「他の奴らより僕達で安全がわかるんだから、大丈夫だよ。」

ステイルは疲れきった顔でそう言った。

「それはそうと、オレに急用があるみたいだが…。一体なんだ？」

話題を切り替え、『仕事』の話にする。

「ああ、君にしか出来ないことだ。…除霊して欲しい。」

「それは『ロシア正教』の管轄じゃないか？」

「いや、今回は別だよ。正直言ってかなり特殊なケースだ。…何

者かの霊が女性の体に取り憑いているらしい。さすがのロシア正教もお手上げだってよ。」

「…なるほど、オレにしか出来ないな。その取り憑かれている人は？」

「この家の人だ」

オレとステイルは『霊に取り憑いているという女性』の家にたどり着いた。

それはとても大きい家だった。どこかの大富豪なのかと思ったら、

「その『取り憑いている女性』はこの国の警察署長の娘らしくてね。」

まったく、同じ人間でもこうも位がちがうと扱いまで変わってくる…。笑えてくるね。」

皮肉っぽくステイルは言った。玄関先のインターフォンを鳴らすと50辺りの女性が出てきた。

日本風美人ですぐにでもパーティーにでも出かけられそうな小綺麗な格好をしている。

「イギリス清教の神父、ステイル」マグヌスです」

おそらく、本人の証だろう十字架を取り出した。そしたら、玄関から出てきた女性は

「お待ちしていました。主人から話は聞いています。」

警察署長の奥さんは家に招き入れた。

「ところで、そちらの方は…」

「心霊心理学の先生です。」

「速水と言います。」

「見たところ、小学生のようですが大丈夫ですか？」

「はい、彼は我々イギリス清教が認める方です。必ず、娘さんを幽霊から開放させられるでしょう。」

「れっきとした神父のあなたが言うのであれば、信用しても良いのでしょうか。」

「はい、まかせてください。」

オレは自信に満ちた声で言った。

「こちらの部屋の中に娘がいます。あの、わかっているとは思いますが」

「安心してください。この事はだれにも言いません」

そう言ってオレは部屋の中に入った。

暗く、息苦しい。じとじとする。背中にゾワゾワつと震えが走った。

電気が消え、カーテンも締め切っている薄暗い部屋。

その部屋の窓際にあるベットに座っている女性。

全身の力が抜けていて、腕がだらしなく垂れ、頭頂部が見えるほどうなだれていた。

オレはそばに近寄り聞いてみた。

「あなたは誰ですか？」

反応がない。もう一度聞く

「あなたは誰ですか？」

「おお…。」

「あなたは一体…」

「おおおおおおおおおおお！」

突如、女性が叫び始めた。口の端から涎がボタボタ垂れる。

気分を悪くしたのか、依頼主の警察署長の奥さんは顔を逸らして泣いていた。

オレは取り憑いている幽霊に

「話せないのか？」

「でえでえいけえ！」

女性が犬歯をむき出しにして言った。

「あなたは何時からそこにいるんですか？」

質問に答える代わりに体が小さく震えだし、

「た…助けて…」

「だあまあれえ!!!」

そうつって体が動かなくなつた。

おそらく、最初の声が本当の体の持ち主の声、後に出てきたのが取り憑いている幽霊だろう。

神経をすり減らし、これ以上は無理だと判断し部屋から出た。

部屋を出て、気分を変えるため外へ。そこでステイルが

「どう？何かわかったかい？」

「…お前の言う通り、かなりまずい。」

冗談で聞いたつもりが真剣に返されて、驚いた様子。今度は真剣な眼差しで

「どうまずいんだい？」

「オレも『自分の魔術』の影響で霊の魂を感じ取れるようになって、それからいろいろとああいふ《肉体を乗っ取られそうな状態》を見てきたが…」

ここで一旦言葉を切り、続けて

「あれほど肉体が乗っ取られそうな危険な状態を見たのは初めてだ。」

「

「体が乗っ取られそうになっている？どういう意味だ？」

ステイルが疑問に思っているので、

「あの体には二人の魂が入っているんだよ。」

『元々あった魂』と『乗っ取ろうとしている魂』の二つが。」

「ほつといても平気なのか？」

「いや、いくら肉体が魂の器だとしても無理だろう。臓器移植で拒絶反応が起こるのと同じで、どの魂でも良いという訳ではないからな。」

あのままじゃ衰弱死するかもしれないな…。」

「それじゃあ、どうすれば彼女は助かるかな？」

「中に入っている『乗っ取ろうとしている魂』が出ていけば大丈夫だが…」

そう簡単にはいかないだろう。」

「なんでだい？」

「オレが『乗っ取ろうとしている魂』に対して感じた印象は、『貪欲なまでの生への渴望』…あれじゃあ自分から出ていく、なんてことはないだろうね。」

「ふむ。追い出すためには何が必要かな？」

「まずは『乗っ取ろうとしている魂』を知る…なぜあそこまで『生』にしがみつくのか、その理由を知らないといけない。」

「彼女がああなったのは確か…3日前の交通事故の現場に倒れてからだな。」

「事故に会ったのか？」

「いいや、車に跳ねられた男を助けようとしたらしい。」

「その男は？」

「即死だよ。」

「まずはその男について調べる必要があるな。事故の状況も含め、家族関係、仕事内容、生い立ち…できるだけ詳しく調べてくれないか？」

「わかった。任せておけ」

そしてオレとステイルは別れた。

次の日、学校に行く途中でミアに質問せめにあった。「どこにいったの?」「何をしていたの?」と。

オレは「話せない」としか答えなかった。

ついに諦めたのかムスツとしてそっぽを向いてしまった。

学校に着いてもミアと一言も話す事はなかった。

それを見てリユウは

「なんか…ケンカでもしたのか? 今日、一言も話してないぞ。お前ら…」

心配してくれているらしい。しかしオレは…

「なんでもない」

の一言で済ました。

放課後、本格推理委員会の集まりの時、先輩達に質問せめあったが

「話せません」「なんでもないです」だけ返した。

先輩達は納得のいかないようだったが、あざみ先生が調べて欲しい事件について説明するらしいのでしぶしぶ断念した。

「今回、調べて欲しいのは、『このストラップの持ち主』を探す事よ」

と行って、先生が出したのは携帯電話のストラップと思われる物だった。

アルファベットが一文字ずつ並んで《SHIINA》と付けられていた。

「このストラップは2日前、高等部の生徒が河原で見つけたらしいの。」

その時、河原に人の姿が写っていたらしいから気味が悪いつて私に預けたのよ。」

「で、オレ達に何をしろと?」

城崎先輩が胡散臭そうに聞く。

「私の見解ではこのストラップは先週から行方不明になっている『山口椎名』さんだと思うの。」

この行方不明の『山口椎名』の行方を調べるのが今回の事件よ。」
「警察も探しているのに見つからないんじゃない私達で探しても無理なんじゃ…」

委員長の最もな意見。

それに対して先生は、

「大丈夫よ。彼女が事件前、どこで何をしていたかを調べるべれば、

大体の手がかりはつかめると思うから。」

と、強引に締めくくってオレ達は調査を開始した。

――
結局、本格推理委員会の調査は『山口椎名』さんの顔を見ただけで終わってしまった。

『山口椎名』は、ミアやオレと同じぐらいの子供だった。ポニーテールが特徴的だったのを覚えている。

ところ変わって、どこかの公園。オレはステイルが調べた事を聞いてみた。

「あの事故で死んだ男の名は『仙道保』せんどうたせつというらしい。

職業はサラリーマン。平社員だったそうだ。

家族関係は少し複雑でね…。元々彼は愛人の子で母親は彼が六歳の時、自殺して父親のもとに引き取られたそうだ。彼は忌み嫌われ、虐待を受けていた。」

「たった1日でよくここまで調べたな。ステイル」

一人でここまで調べるのは容易なことではない。ステイルの調査に感心していると。

「彼は事故の数日前、ちょっとした揉め事を起こしてね…。そこから調べたんだ。」

「…揉め事？」

「ああ、簡単な冤罪だよ。女子高生の痴漢をしたという濡れ衣を着

せられたんだ。

ま、被害者の女子高生のイタズラだろうね。

事情聴取を受けているさい、彼は必死に『していない』と言いはった。そのとき、被害者の女子高生が『嘘つき、アンタなんか死ねばいい。』と言ったらいきなり首を絞めたらしいよ。

結局、嚴重注意で済んだらしいけど。」

「そうか…じゃあその『母親の死』っていうのが気になるな。調べられるか？」 調

「任せておいてくれ。」

ガサガサガサ

そのとき、そばの草むらに足音がした

「誰だ！出て来い！」

ステイルは声を張り上げた。

そのとき、草むらから男が十人ほど現れ、リーダーらしき男がこう言った。怪しい修道服を着ている。

「こんばんは。ステイル、マグヌス、速水零牙くん？」

「あんたら、一体誰だ？」

敵意をむき出しにして、オレは聞いた。

「私達は魔術結社『天地逆転』のメンバーでございます。」

「『天地逆転』？聞いたことのない組織だな。」
ステイルが嘲く笑うふうに言った。

「それはそうでしょう。我々が出来たのは、ほんの二・三年前：知らぬのも仕方のないこと。
今回はあなた方にお願いがあつて来ました。」

「お願い？」

「はい。」

オレの質問にリーダーらしき男は言った。

「あなた方が調べている『除霊』の件：あれを止めてほしいのです。」

「なぜ、止めてほしいんだい？」

「その理由はお答え出来ません。」

「理由が話せないのなら止める義理はないね。早く帰ってくれないか。」

オレとステイルの言葉にリーダーらしき男は

「そうですか。ならば仕方ありませんね…。力づくで止めさせて貰いましょう！」

その瞬間、他の九人の男達はオレとステイルを取り囲み、各々の『魔法名』を口にした。

「ステイル、『人払い』の方は済ませてあるかい？」

「大丈夫だよ。ちゃんと終わらせてある。」

オレとステイルはその光景を見ながら、念のために確認した。

そしてオレは、ため息をついて、

「ハア、一丁やりますか！」

『Fortis931!』(わが名が最強である理由をここに証明せよ)』

『Hoplis666!』(わが存在が人々の希望にならんことを!)

オレとステイルは魔法名を言い、戦闘体制へ。

十人の魔術師が魔術の攻撃をしてきた。直径1メートルほどの青白い光の玉だった。

ステイルは攻撃の直前、『炎よ。巨人に苦痛の贈り物を!』

と言い、炎剣を生み出し、光の玉を破壊した。

そしてオレはこう唱えた。

『刃物よ。私の敵を刺し、その血で濡れよ!』

十人の魔術師全員の全身に剣や槍の武器が刺さり武器は血で濡れていた。

「ぐはっ！な、なんだ？この魔術は？」

さっきのリーダーらしき男が血を吐きながら聞いた。オレは自分の魔術について、説明した。

「オレは『闇の魔術 - 墮天使の魔術』を使える。」

「その昔、人に恋をして、人に知識を与えた天使がいた。その天使は人に薬学や天文学を教えたが、最も重要なのはそこじゃない。」

「そう、その天使は人に『武器』を伝え、醜い争いを起こしてしまつた。」

それゆえ、神に追放され地に落ちた天使がいた。」

「 - その天使の名は『アザゼル』。この世界に武器と知識を与えた者。 - オレの魔術は、『あらゆる空間を問わず、武器を出現し操る』ものだ。」

「そ、そんな魔術が…」リーダーらしき男は血を吐きながら言った。

「さて、お前らのアジトはどこだ？」

オレは聞いた。しかし。

「私を見くびらないでほしい。これでも食らえ！」

突然、空から槍が降ってきた。恐らく、特定の場所にある物質を公園の上に転送したのだろう。

ステイルは持っている炎剣を消し、『インケンティウス魔女狩りの王』を呼び出して、
防御。

オレは武器を呼び出して、撃ち落とした。

しかし、すべてには当たらずとところどころの切り傷が出来てしまった。

横にいた男を見ると死んでいた。ステイルとオレで後始末をし、今日は家に帰った。

- - - - -

次の日、ミアとは一緒に登校せず、一人で登校した。傷の手当てに時間がかかったからだ。

学校でミアに会った時、顔を真っ青にして聞いてきた。

「レイ！その包帯…どうしたの!？」

「なんでもない。ちょっと…ケンカしただけだ。」

昨日の戦闘を言うわけにもいかず、適当に嘘をついた。

「レイ…私達に何を隠しているの？正直に言って！」

ミアが声を荒げて言う。しかしオレは、

「なんでもない。大丈夫だよ。ただの傷だし。」

で返した。しかしミアは「この前の赤髪の神父さんに会ってから、レイは何かを隠してる！本当は何か危険な事をしているじゃないの？お願いだから正直に言って!!」

そう言った。しかし

「大丈夫だよ。危険な事なんかしていないから。それに、オレは何も隠していない。」

「嘘！絶対何か隠してる！ねえ、教えてよ。レイはあの神父さんと何をしているの？お願いだから教えて！！」

ミアはうつすらと涙を流していた。教室にいたクラスメートたちが何があつたんだろうと、ざわついている。

オレは辛い気持ちで、

「なんでもない。お前には関係ない事だよ……」

そういつて、ミアの横を通り、自分の席に行こうとした。

そのとき、

ミアがオレの顔を自分の方に向けて

パン！

思いっきりひっぱいた。

ミアはうつむいて涙を流している。

「レイの馬鹿…私がどれだけ心配したと思っっているの？それなのに、『関係ない』って……」

ミアの声は弱々しく、聞き取るのがやっとだった。

「レイの…レイの大馬鹿ヤロー！」

そういつて、ミアは教室から走り去ってしまった。

リュウがオレに近づいて

「レイ…お前、ミアちゃんに何隠している？」

「別に…何も隠していないさ。」

「ミアちゃんがお前の事どれだけ心配したと思っているんだ！」

リュウはオレに掴みかかる寸前だった。

「お前、ミアちゃんのおんな顔みたいのか？見たくないんだったら正直に話せ！」

その言葉に対して、オレは冷たく言い放った。

「お前には関係ない」

その瞬間、リュウはオレを殴った。

慌てて、リュウを止める男子。

「レイ…テメエ…」

「リュウ、誰にも話せないんだ。オレの《闇》は…。それは、お前やミアのような《光》が聞くべきものじゃない。」

「この《闇》は暗すぎる。お前たちをその《闇》に入れたくない。」

リュウは驚いてから、悔しそうな顔をした。

オレは席に着き、机に伏せた。

教室に流れる重々しい空気。クラスメートたちも先生も居心地が悪そうだった。

その日から - オレは『本格推理委員会』を休んだ。

続く。

光と闇（後書き）

夢幻

「し、死ぬかと思った。良かった。生きてて。」

零牙

「…」

夢幻

「零牙、あとがきだぞ…」

零牙

「…」

夢幻

「えー、主人公がかなり落ち込んでいるので、次回予告は私が…」

梢

「次回 本格推理委員会

『除霊』」

夢幻

「できなかった…。」

除霊（前書き）

グダグダです…。これから、模索していきます…。

除霊

「ミア、どうした？食欲がないのか？」

その日、私は学校から帰った後、ずっと黙っていた。

お兄ちゃんが心配になったのか、学校で何があったか聞いてきた。

「ううん。なんでもない。」

嘘をついてごまかした。

「そっか…それなら良いが…」

お兄ちゃんもそれ以上追求しなかった。

コンコン、
ご飯を食べた後、私が部屋で本を読んでいたらドアに誰かがノックした。

「入ってきていいよ。」

そう返事したら、入ってきたのは、お兄ちゃんのお母さん…私の叔

母さんのカンナおばさんが入ってきた。

「お、お邪魔します…。」

おばさんは身を小さくして入ってきた。

「おばさん、原稿は上がったの？」

おばさんは小説家なので、めったに部屋から出てこない。不思議に思った私は聞いてみた。

「へへへ。さつき終わったよ！」

自信満々に言った。それから、

「ミア、学校でレイ君と何かあったの？」

単刀直入に言われた。

「うん…。実はね…」

私は今朝あったことを話した。

話を聞き終えたおばさんは。

「うーん…。やっぱり、仲直りしないとダメだね!」

と結論づけた。

「えっ…そんなの無理だよ…。ひっぱたいちゃったし…。私の事、嫌いになっちゃったかも。」

最後の言葉を言う時、胸の奥がズキツと痛んだ。

「悪かったと思うなら、謝るべきだよ。零牙くんも悪かったと思っているだろうし、会いにいこう!」

そういっておばさんは急に立ち上がり、私の手を取って、玄関まで行って、靴に履き替えた。

「ち、ちょっと、おばさん!」

おばさんは私以上の人見知りで知らない人に会えにくいのが、最も苦手のはずなのに…。

レイの家は真向かいなので、すぐついた。玄関先のインターフォン

を押し、少し待ったら玄関からレイが出てきた。寝間着だろう、上
下黒のTシャツにズボンを着てきた。

「…ミア。」

レイが最初にそういった。

おばさんはその様子を見て、

「こんばんは。私は城崎修の母の城崎カナナです。あなたが零牙く
ん?。」

「はい…。」

「前の事件の時はミアを守ってくれてどうもありがとう。」

「いえ…」

「これからミアを守ってくれるかしら?。」

「…。」

黙ってしまった。私を守る自信がないのだろうか…。

「今朝の事、まだ起こっているかしら？」

この問いかけにレイは

「いえ…。隠し事しているオレが悪いんですし…。」

「じゃあ、その『隠し事』話してくれる？」

レイは首を横に振り、

「できません」

「それは、どうしてかしら？」

「それは…」

そういつて、私の方を見て、すぐにおばさんの方に向いて、

「話せません」

と言った。

おばさんは、納得がいったような顔で

「なるほど、『ミアに危険が振りかかるかもしれない』からね。」

沈黙の肯定。

そしておばさんは

「じゃあ、私に一つだけ約束しなさい。」

と、厳しい顔で言った。

「…何でしょう?」

「『ミアを何が何でも守る』…これが約束よ。絶対に守りなさいね
」!

「はい。」

そういつて、レイは微笑んだ。

そして今度は

「さあ、ミアも零牙くんと仲直りしなさい。」

そういっておばさんは私をレイの前に押した。

近くなって、気まずい空気が流れる。

ああ、ヤバイよこれ… と思っっていると、

「ミア…」

レイが私に話かけてきた。

「な、何？」

「今朝は『関係ない』って言って、ごめん。」

そういって、頭を下げた。

「私もひっぱたいたりして、ごめんなさい！」「私も頭を下げた。」

「明日からまた、よろしく。」

そういって手を差し出した。

「うん。また明日からよろしく！」

そういつて手を握って仲直りをした。

「じゃあ、えっと…お休み。」

レイが照れくさそうに言った。

「うん。お休み。」

私は笑ってそう言った。

家に帰って私はおばさんにお礼を言おうと思ったが、玄関に入るなりおばさんは崩れ落ちた。

やっぱり、相当頑張っていたみたいだ。

「はあ。母さんはいつまでも治らないんだな。」お兄ちゃんはため息をついてそういった。

「でも今回はありがとう。母さん。今紅茶入れるから。」

そういつて、お兄ちゃんはおばさんを担いでリビングに連れて行った。

明日からはまたいつもの日常に戻るだろう…

私はそう確信して寝た。

- - - - -

昨日の夜、ミアと仲直りをしてからずっと考えていた。自分の秘密について…。

しかし、『話さない』と決めた。これはミア達を知るべき事じゃない。

一緒に登校して、リュウに謝った。

リュウは「分かればヨシ」で済ませてしまった。

本格推理委員会にも出て、先輩達に謝った。先輩達は「ケンカしたんだからしょうがない」と許してくれた。

そして昨日調べた事をオレに教えてくれた。

どうやら椎名さんは連続殺人事件の最初の被害者だったらしい。

「二人目の被害者は『檜山智子』さん、三人目の被害者は『有田布美子』さん。死因は椎名さんが窒息死。後の二人が溺死よ。」

淡々と楠木先輩が言った。

「警察でも躍起になって犯人を探しているわ。全く、何でこんな美少女を殺してしまうのかしら？」

「そつや！犯人のやつ許せへん。」

「先輩、怒るところ違つような……」

「「いや、これであつてる！（んや！）」「なんか、この先輩達についている城崎先輩と委員長の苦勞がわかつたような気がした。」

「うーん、この事件の犯人って誰でしょう？」

「わからないわね……」

なかなか、犯人の目星がつかないので、『除霊』の件を片付けることに。

「先輩、5日前に事故で亡くなった、『仙道保』と言つ男の遺品を見せてください。」

「…それは何のために？」

楠木先輩が目を細めて言う

「ん〜、守秘義務があるんで詳しく話させないんですけど、今オレが赤髪の神父と一緒に捜査している事件なんですよね…。」

「…あの神父って、探偵なの？」

梢先輩が聞いてきた。本当の事は話せないので、

「柄の悪い不良神父探偵ですよ。あいつは、」

という嘘をついた。

「そう。まあ良いわ、監察医に話をつけといてあげるから、後は勝手に調べなさい。」

「恩にきます。」

そう言って先輩は承諾してくれた。

その日は結局、何も進まず解散となった。

- - - - -

後日、オレとステイルは楠木先輩が紹介してくれた監察医に会いに行った。

「全く君は何を考えているんだい？『不良神父探偵』なんて、この世界中どこ探したつていないよ？」

「いや、『神父探偵』はいるんだよ？小説で。ブラウン神父っていう人が探偵で事件を解決するんだ。ほら！ステイル、何にも恥ずかしい事ではないよ？」

「そういう問題ではない！」

「じゃあ、何が問題なんだ？」

「とつさとは言え、何で僕が『不良神父探偵』という、恥ずかしい肩書きを持たないといけないんだ！」

「そういう不満は作者に言え。」

「くそっ…。あとがきで覚えている！作者！」

恐ろしい予言をしても無駄ですよ。秘策がありますから…

そんな会話をしていたらいつの間にか『解剖室』と掛かれた部屋へ。

「ここか…。いくぞ」

そういつて、オレとステイルは中に入っていった。

中は薬品の匂いで充満していて、異様な雰囲気醸し出していた。

「よく来たね。」

出迎えてくれたのは定年間近のようなおじいさんだった。

「菜摘ちゃんから聞いてるよ。『仙道保』の遺体をみたいんだね？」

「はい。僕の名前に速水零牙と言います。そしてこちらが」

「ステイル」マグヌスです。今回、我々の捜査に協力していただきありがとうございます。」

「いやいや。こっちも職業柄、『死体をみたい』なんて人いないと思うからね。会えて嬉しいよ？ヒッヒッヒ…」

気味の悪い人だななど思ったが、構わず話を続けた。

「それで、今回拝見したい写真ですが…」

「ああ、ここにあるよ。まあ見たって変わらないと思うけどね。」

「拝見します。」

オレとステイルは事故の状況や遺体の状況などを見たが、結局わかる事は何もなかった。

「…すみません。遺品の方がありますか？」

「いや、遺族が全部持っていったよ…。写真ならそこにあるがね。」

「引き取る時の家族の様子は？」

「冷たいもんだったよ…。火葬して墓に置いて終わりだった。」

「そうですか…。」

「ああ、そういえば、一つだけ戻って来た遺品があったなあ。」

「それはどこにありますか？」

ステイルが冷静に聞いた。

「確か保管庫にあったなあ。付いてきなさい。」

あとを付いて行って保管庫に着き、戻って来た遺品を見てみた。

それは聖書だった。

「ふうん。『仙道保』は僕達と同じ十字教徒だったのかな？」

「さあな。ま、とにかく中を確認するぞ。」

聖書の中は、至って普通のものだった。おかしいところはないかな？と思っていたら…。

ドリン…

一枚の写真が舞い落ちた。その写真に写っていたのは…

「！！これは…『山口椎名』さん…！」

「知り合いかい？」

「今、本格推理委員会で調べている事件だ。そうか、『仙道保』が犯人だったのか…。」

「どうしたんだい？」

「今、警察が躍起になって探している『連続殺人事件』の犯人がわかったんです。」

「まさか、『仙道保』かい？」

「はい。」

…今、オレとステイルは何者かに後を付けられている。

カツカツカツ…

「十五人だ。全く昼間から戦う気か？」

カツカツカツ…

「さてね。どうまく？」

小声で話ながら相手の情報をまとめる。

カツカツカツ…

「ステイル、『人払い』は？」

カツカツカツ…

「大丈夫」

カツカツカツン。

「じゃ。目障りなので殺りますか。」

遂に動きを止め、高らかに魔法名を叫ぶ。

『Hoppliss666!』

そして…、一瞬で敵を倒した…。

「…相変わらず、恐ろしい魔術だね。」

「まあな。その代わりに、魔力の消費が半端ないんだが。」

「いつか足元を救われるなよ?」

「わかっている。」

「それじゃ、また今度…」

「ああ、また今度。」

事故処理（ステイルの炎で辺り一面燃やし尽くした。）を終えた才
レ達は再び別れた

後日、畠さんが用意してくれた道具で除霊をした。

用意してもらったのは、

ネズミ

本物そっくりの霊安室

仙道保そっくりの頭

マネキン

の3つ。さて、知っている人は知っている除霊方法で、さっそく除

霊を開始した。

「オイ、作者が遂に壊れたぞ。」とレイが。

「自分からネタをばらすなんて、小説家としてあるまじき行為だね。」
とステイルがツッコミをいれた。

「まあ、良いや。さっそくやるぞ。彼女は連れてきたな？」

「ああ、口は封じさせてもらったがね。」

ステイルは車椅子に乗っている女性を見た。

そう、今回の事件の当事者、「幽霊に取り憑かれた女性」である。

「…」

口がガムテープで塞がれてしゃべることを封じている。

「よし、さっそく始めるぞ」

ガムテープをはがし、「取り憑いた魂」と対話を始めた。

「聞こえますか？」

オレは聞いてみた

「…」

黙っているので話を続けることに。

「以前、会いましたね？今回はあなたを『除霊』しに来ました」

「だあまあれえ！」

突然、大きな声を出して暴れ始めた。

何日間も食べていない口は青紫色に変色し、ひび割れていた。

「このかあらだはあ、おれのものおだ！」

声を荒げて暴れている。それでもオレは続けて、

「聞きなさい。あなたはこの体にも、いずれ死ぬ」

『死ぬ』という単語に反応して、動きが止まった。

「この体にもいれずれあなたは死にます。それは『一つの肉体には、一つの魂しかはいれない』…この世の定義に反しているからです。」

「…」

「そして、『一つの肉体には一つの決まった魂しかはいれない』
…これもこの世の定義です。」

「…」

オレの話を慎重に聞いているのか、ずっと黙っている。

「今、あそこにあなたの遺体があります。あれならば、あなたの魂も入ります。しかし、肉体だけでは次第に腐っていく…そろそろ」

オレはここで一息つき

「限界だ。」

「おお…」

「戻る、戻らないはあなたの自由だ。しかしあなたの体でないと、あなたは生きていけない。」

…さて、どうしますか？」

オレは『仙道保』に聞いた。そして…

「おおおおおおお！！」

急に雄叫びをあげ、がくがくと動かなくなった。

そして、近くのネズミが「チュー！」

と言って、走り回っていた。

「…ふう。」

「…終わったのかい？」

ステイルが聞いてきたのでオレは無事終わったことを告げた。

「なんとなくつか、『駆け引き』みたいだったね。」

ステイルの言葉にオレは今、じぶんが何をやったのか説明し始めた。

「オレは『仙道保』を説得して、出て行ってもらったただだ。『仙道保』は自分の体に戻ろうとした。しかし…」

「マネキンだから戻れない。」

「そう。今頃はネズミにでも取り憑いているだろう。」

そう、オレは仙道保自身が体を出て行ってもらったようにしたただけ。それ以外は何もしていない。

「とりあえず、今回の依頼はこれで終了だ。彼女は僕が送り届けるよ。」

「ああ、頼む。…またなステイル。」

「おいおい、何しんみりしているんだい？また会えるさ。」

「ああ、またな。」

そして、ステイルはイギリスに戻りオレはみんなのもとに帰った。

後日、本格推理委員会で今回の事件の内容を話した。

「今回の事件は『仙道保の母親の死』がきっかけだったんです。」

ここは高等部理事長室。先輩達が真剣にオレの話を聞いている。

「仙道保は小さくして母親を亡くし、父親の元に引き取られました。

オレの想像ですが、おそらく幼い仙道保は自分の母親が死ぬところを見たんでしょう。それゆえ、『死』に対して異常な恐怖心を抱いた……」

「仙道保は『ネクロフォビア』だったのね。」

「その通りです委員長。そして最近、仙道保は痴漢の取り調べ中、女子高生に襲いかかったことがありました……。おそらく、襲いかかる前に言った『死んじゃえ!』……この一言が原因でしょう。」

「仙道保にとって、『死ぬ』は禁句タブーだったんだな。」

「はい、城崎先輩。そしてその数日後、仙道はその女子高生を再び見つけました。」

「ただし、勘違いでしたが。」

「勘違いで殺しちゃったの？」

「いや…多分、特徴が似ていたからだと思っよ、ミア」

「そっか、ポニーテール。」

「はい楠木先輩。そのまま仙道が殺したか、もしかしたら何かの拍子に『死ぬ』と言ってしまったか…。とにかく仙道は最初の被害者、『山口椎名』さんを殺しました。」

「…おそらくですが、この時、仙道は死に対しての異常な恐怖心から解放される感覚を覚えた。」

そして、被害者を増やしていった。」

「じゃあ、今回の事件は仙道保の『死に対する異常な恐怖心の暴走』が原因ってこと？」

「結論から言えばそうなります。」

「「「「うーん……」」」」

みんな、納得していないようだ。

「ま、事件はあっけなく終わるものですから。」

「「「「うーん……なんかなあ……」」」」

ピリリリリリリ！

突然、オレの携帯に電話がかかってきた。

「すみません。ちょっと……」

席を外し電話にでた。

「もしもし。」

『……やあ、速水零牙君。こんにちは。』

聞いたことのない声だった。

「あんた誰だ？」

警戒しながらも話をしてみた。

『私は《天地逆転》のリーダー「あまのしゅういち天野秀一」』

「何の用だ？」

「今回の我々の実験…生きた人間に別の魂を入れる実験はどうだったかい？素晴らしかっただろう？」

「…何を言っている？」
疑問に思ったオレは聞いてみた。

「『仙道保』の魂を使って、他の人間に憑依させた実験だよ。どう思った？」

「まさか、今回の『除霊』の原因はお前らが？」

『そうだよ。素晴らしい実験だったよ。おかげで魂の存在と人間への憑依の可能性を証明させたよ』

頭が狂っている…神保哲也も狂っていたが、こいつはもっと狂っている…
オレはそう思った。

「それじゃ、また会えるだろうから、じゃあね〜。」

「お、おい！…くそっ」

気づいた時にはもう切られていた。

魔術組織『天地逆転』…奴らは何を企んでいるんだ…？

『第二の事件 完』

除霊（後書き）

夢幻

「…」

零牙

「作者よ…。この小説のタイトルは？」

夢幻

「『本格推理委員会』だ…」

零牙

「そつだ。そして今回は何を推理したのかな？」

夢幻

「…（プイッ）」

零牙

「話せないか…それなら」

夢幻

「皆様、今回の『本格推理委員会』は作者の無理やりな展開のせいで内容がかなりグダグダになってしまいました。誠に申し訳ございません。」

今後とも精進していきますゆえに、皆様からのご意見を待っております—！」

零牙

「次回のギャグパートでどうにかしろよ?」

夢幻

「はい、頑張ります!!」

零牙

「次回 『本格推理委員会』 海と王様とお祭り」と

夢幻

「期待しててください!」

海と王様と鼻血…（前書き）

ギャグパートです。

感想、レビュー、お待ちしています…！

海と王様と鼻血…

ザザーン

『青い海』

キラーン

『照りつける太陽』

カアカアカア

『わめくカモメ達』

そして…

「あははっ！あははっ！ レーイー！（ブンブン）遊ぼうよ〜。」

『海ではしゃいでいるミア』

ガバツ

オレは今…本格推理委員会のメンバーに加えて、リュウと白石さん。それから城崎先輩と椎先輩の友達と一緒に海に来ている…。

なぜ、このような事態になったか、読者の皆様にもわかるよう、説明したいと思う。

あれは、夏休みに入る前だった…。

.....

「海に行こう！」

「「「「「は？」「」「」」」」」

『仙道保』の事件後、特に危険な事件が起こらず

『天地逆転』とかいう魔術組織も動きを見せず

平和な時間が過ぎていき、もうすぐ夏休みだ」というある日、『本格推理委員会』顧問、木ノ花あざみ先生が急にそんな事をいった。

「いや、だから海よ！海！もうすぐ夏休みだからみんなで海に行こう！」

完全にいつものわがままである。

「先生、何いつてるんですか？」

「いや、最近、みんな頑張ってくれたしさ。夏休みだし、先生が海に連れてってあげようかと...どう!?行きたくない!？」

「行きたくない!?!って言われましても...第一、どこに行くんですか？」

城崎先輩の問いは先生は...

「ふふん！私の別荘に招待するわ！」
というビックリ発言で返した。

「えっ！先生って別荘持ってたんですか！？」

委員長の発言にも…

「そうよ！プライベートビーチもあるわよ…！」と返し…

「あざみちゃん、船とかも持っている？」
楠木先輩の問いには…

「当たり前よ！」
堂々と胸を張って言っていた。

「さあ、みんな参加しないの？するの？」
みんな黙ってしまい、
「参加するかしないか…ミアはどうする？」
まず、オレがミアに聞いてみた。

「う、うーん、お兄ちゃんどうする？」
ミアは城崎先輩に聞き

「むー。レイはどうしたい？」城崎先輩はオレに回してきた。

巡りめぐって最初の問いに答える事になったオレ。これじゃあ聞いた意味がない…。

「オレは…行きたいですね。海なんて行ったことないし…」

「えっ！レイ、海行ったことないの？」

「ああ、一度、みんなで楽しい海の思い出が欲しいなあ…」

ほんの少しの、オレのわがままを聞いて…

「はい！私は参加します！」
とミアが…

「ま、レイに『楽しい海』の思い出を作ってるか。」
と城崎先輩が…

「そやな。まあ、私は楽しそうだから、最初から参加する気やったけど。」
椎先輩が…

「お姉ちゃんが行くなら私も行く…」
梢先輩が…

「私も夏休みの空手部の部活を休んで行くわ。あんまり根を詰めても体に良くないし…」

楠木先輩が…

「わ、私も海に行きます！」

委員長が…なんと全員が参加することに。

「そう。それじゃあ全員参加ね？じゃあ後日の連絡を待っててね」

「あの…先生…」

「ん？なんだい、零牙君。」

全員参加の意思を見たオレはもう少しだけわがままを言ってみた。

「リュウも連れて来ても良いですかね？」

「六年六組の早川龍之介ね？良いわよ、多い方が楽しいし。」

それを見たミアは…

「じ、じゃあ私もミュちゃん連れて来て良いですか？」

「六年五組の白石美雪さんね？良いわよ。」

と言った。

「あれ？ミアって、白石さんと知り合いだったっけ？」

「ラブレター騒動の後、友達になったんだよ。悩み事の相談とか乗

ってもらっているんだ〜」

いつの間に…と内心驚いていた。

「じゃあ、俺たちも響さんと虎スケを誘うか。」

「せやな、長い付き合いやしな。」

「F組の菊池響に風間虎之介も誘うのね？わかったわ。」

先輩も誰かを誘っていくらしい。

「じゃあ、みんなで海行くわよ〜！」

「」「」「おー！」「」「」

…これが始まりだった。

.....

後日、一学期が終わり夏休みに入ってから…

「いや〜。レイ、海誘ってくれてありがとうな〜。」

「ああ、あの白髪頭が『速水零牙』だ」

「ふーん。挨拶してこよ！」

虎スケがレイ達のところに行つた。

「それじゃあ私も挨拶してきます。」

響さんも挨拶しに行つた。

「さて、みんなはまだかな……。」

オレは椎や先輩達の到着を待つことにした。

「こんにちは。」

後ろから何か声が聞こえてきた。その人は顔は幼い系のイケメンで、確実に『かわいい部類』にはいる人だった。

「君が『速水零牙』君？」

その人はオレに話しかけてきた。

「…はい。」

「おっと、そんなに警戒しないで。俺は『風間虎之介』（かざまとらのすけ）。『虎スケ』って呼んでくれ。」

「わたしは『菊池響』（きくち ひびき）です。修からは、『響さん』と呼ばれています」

後からもつひとりの先輩がきて、話しかけてきた。

どうやら、城崎先輩のお友達らしい。

自己紹介してくれたので、こちらの自己紹介することに

「オレは『速水零牙』って言います。」

「オレは『早川龍之介』よろしくお願ひします。先輩。」

「私は早川龍之介の妻『白石美雪』「ちよつと待て！一体何を」（ブスッ、…ビクンビクン）

…美雪です。」

リュウが白石さんに目潰しをくらいのと打ちまわる。バカだなあ…コイツ

「よろしくね〜美雪ちゃん。しかし、あれだな〜」

「そうですね…。」

先輩達がなにやら悩んでいる…なんだろう？

「どうしたんですか？」

「いや、ミアちゃんの彼氏がこんなにかっこいいとは思わなくてさ〜。」

「そうですね。意外でした。もっと暗い雰囲気の方だと思っていました。」

…城崎先輩、オレのことどう言っているんですか？
というか、まさかの『彼氏発言』…少し恥ずかしい。

すると…

「おーい。みんな集まったか〜？」

向こうを見ると、城崎先輩が委員長達と一緒にいた。

集合時間五分前。椎先輩は走ってきたのか、

ハアハア言っている。

とりあえず、城崎先輩のところに向かった。

すると、虎先輩が…

「どうしたの椎ちゃん！朝からそんな喘いで…

ハッ、そうか、朝から椎ちゃんは誰かに襲いかかられて…ブベラッ」

椎先輩の正拳突きで騙させられた。

なるほど、虎先輩の中身は下ネタ大好きの三枚目か。

「みんな集まったね。後は先生だけど…」

「遅刻か？あの人。」

委員長の疑問に城崎先輩が呆れたように答えた…しかし。

「ヤッホー。みんな元気い？」

どこからか、あざみ先生の声が、どこからかと周りを探していたら…

黒光りするリムジンに乗っていた。

「「「「「…「「「「」

驚き過ぎてぐうの音でない。

「みんな集まっているわね。さあ乗って乗って！」

そして普通に車の中から声を掛けてくる先生。

さすがは木ノ花グループの一員と言ったところか。

「「「「「お、お邪魔します」「「「「」

おそろおそろリムジンに乗車して出発した。

- - - - -

そして、車中で…別荘に着くまで時間がかかるらしいので、オレ達は「ゲーム」をしていた。

みんな、真剣な眼差しでやっている…オレ達が今やっている『ゲーム』は…

「ウノ」

そう…みんながよく知っているゲーム『UNO』だ。

ここで、ルール説明をしておこう。

基本的なルールは市販されている『UNO』と同じ

同じ数字、または同じ記号がある場合、それらを一回に出しても構わない。正し、その場合一枚一枚に効果が発揮される
例・リバーズを三枚出したら、向きは逆回りになる

『ドロー2』または『ワイルドドロー4』が発動された場合、次の人が『ドロー2』、『ワイルドドロー4』を発動しない場合、『引かなければいけないカードの合計分』カードを引く

発動した場合、これは更に次の人に適用される

最初に勝った人に最後まで抜けられなかった人に命令ができる（拒否権なし）

そして、順番は以下の通り。

- 1 あざみ先生
- 2 委員長（桜森先輩）
- 3 楠木先輩
- 4 響先輩
- 5 椎先輩
- 6 梢先輩
- 7 虎先輩
- 8 城崎先輩
- 9 ミア
- 10 白石さん
- 11 リユウ
- 12 オレ

今は、城崎先輩が残り一枚で上がりそうである。

ミアの番（残り5枚）

「緑の5」

白石さんの番（残り4枚）

「青の5」

リュウの番（残り5枚）「赤の5」

オレの番（残り5枚）

「リバース×3」

リュウの番（残り4枚）「青のドロー2×2」

白石さんの番（残り3枚）「赤のドロー2」

ミアの番（残り4枚）

「赤のドロー2×3　そしてウノ！」

城崎先輩（残り1枚）

「くっ…」

城崎先輩が12枚のカードを引く。

目論見成功。城崎先輩を飛ばして虎先輩へ。

虎先輩（残り4枚）

「スキップ×2」

次の人の番を飛ばし、更に次の人の番にするスキップを発動。これにより楠木先輩へ

楠木先輩（残り3枚） 「青のスキップ」

これであざみ先生の番に

あざみ先生（残り8枚） 「青の7×4」

次にオレ（残り2枚）

「黄色の7×2 これ以上が！」

「「「「「なっ！」「」「」」」」

みんなが驚いた顔でオレを見る。

このゲームは一枚になったら「ウノ！」と宣言しなければならぬが、2枚なので関係なし。

えっ？卑怯？何を言っているんだ。ルールには「2枚以上で上がってはいけない」なんて書いてないよ？
とにかく、オレは勝ったから問題なしだ。

…結局、このゲームの敗者は城崎先輩だった。

城崎先輩は無言でうつむいている…。
さて、何を命令しようか？

「城崎先輩、『今までで一番恥ずかしいことを言ってください。』」

城崎先輩は「なんてことを命令するだ!」と目でオレに言っていた。
しかし…

「修、諦めて話しなさい。」

「城崎先輩、諦めてください。」

「お兄ちゃん!」

と、みんなが口々に言うので城崎先輩は自分が小等部の頃、『少年
探偵団』というのをやっていたことを赤面して話した。

- - - - -

そんなこんなで時間が過ぎ、あざみ先生の別荘に到着

なんというか…かなりでかかった。

「さあ、今日みんなが泊まる私の別荘よ!みんな気兼ねなく使って
頂戴!」

入ってみたらそこは高級ホテルみたいな内装で、みんなから感嘆の
声が上がった。

「すげえ…」

「綺麗…」

「こんなところに泊まれるなんて幸運だな。」

そして唐突にあざみ先生が…

「ああ、そうだ。みんな、部屋は個室が良い？」

そこでエロ野郎（虎先輩とリュウ）二人が…

「「ぜび、女子と一緒のベットで！」」

と鼻息を荒げて言った。

「ふ〜ん。その二人は女の子と一緒に寝たいのね？ 他は？」

「私は特に…」

「「ミアちゃんか、ミュちゃんと一緒に寝たい！」」

「リュウと一緒に寝たい…」

「私は何もないよ？」

委員長とミアは特になく、白石さんはリュウと、ロリコンの二人は
美少女と一緒に寝ることを要求

…みんな欲望に忠実だなあ…

「その男子三人は？」

「いえ、特になにも」

オレ、城崎先輩、響先輩はこう答えた。

しかし、あざみ先生は…

「ん」。でもせっかく人数が揃っているから二人一組で寝ましょう
！」

と言ったため、くじで番号を引いて、ペアになった人と一緒の部屋
に。

で、結果は…

『白石さん・リュウ』

『オレ・ミア』

『梢先輩・楠木先輩』

『委員長・椎先輩』

『虎先輩・城崎先輩』

『あざみ先生・響先輩』

したような水着で登場。

「ぐはあ！（ボタボタボタ）」

いきなり虎先輩が出血。先輩は無事に帰ることができるだろうか？

「だ、大丈夫！？虎スケ君！？」心配した楠木先輩が走って駆け寄った。そして…

（ブシャアアアアッ）胸が揺れるのを見て赤い華を咲かす先輩。死にかけだけど、とても幸せそうだ。

「…お待たせしました」次に現れたのは、白石さんと委員長。委員長はピンクのビキニにパレオをはいていて、白石さんはフリルがあしらってあるかわいらしい水着だった。

「ダメだよ、菜っちゃん、虎スケ君をいじめちゃ…」

「いや、何もしていないんだけど…」

先輩が駆け寄り、虎先輩の様子を見る…

そして…

「う、うう…ハッ」

虎先輩が目を覚まし…

「大丈夫？虎スケ君？」

委員長が心配して、

(ブシャアアアアア)

おお、すごい。さすがに頸動脈を切っても、あそこまで勢いよく出ないだろう。

その様子をじっと見ていた城崎先輩が虎先輩に近寄る。

「…修」

「…虎スケ、…遺言はあるか？」

「修君！縁起でもないよ！？その言葉！」

「来世には、鳥にでも生まれてきますように…」

「ちょっと虎スケ君！？死んじゃだめだよ！！」

「そして、空から思う存分女子更衣室を覗けますように…。」

「生まれて変わってもそれ！？少しは現世で死んだ理由を学ぼうよ！」

虎先輩が逝つたのをみて…

「主よ、虎先輩の汚れなき魂をお救いください…」

「アメン」「アメン」

男子全員で黙祷。

「みんな、虎スケ君を助けてあげようよ！」

虎先輩、ご冥福を祈ります…。

「違いますよ。菜摘先輩、鈴音先輩。虎は先輩方の水着姿に興奮してこうなつたんですよ。」

響先輩が虎先輩の死因を教える。

「えっ。そうなの？」

楠木先輩が驚き…

「はい。そうですよね？虎」

(コクコク)

虎先輩が反応する。生きてて良かったです。

「興奮…」

白石さんがなにやらつぶやいた。

「リュウ？」

「なんだ？ミユ？」

「えい。（ズボツ）」

「うおっ！？何しやがる！！（ダラダラ）」

白石さんの指がリュウの鼻に突っ込まれ、鼻血を出した。

「だって、リュウは私の水着姿で興奮しないとだから…」

なるほど、それで実力行使か。

「お待ちせ…」

ん？新しくやってきたのは…梢先輩と椎先輩か。

梢先輩は競技用の水着のようなものを、椎先輩は水着の上にTシャツを羽織って登場。

「あはは。虎のやつ、死んでもーてる。」

「お姉ちゃん、縁起が悪い…」

そして…

「お待たせ〜！」

ミアが登場。

白のビキニ姿だった。

…プイッ

オレは咄嗟に顔を逸らした。海に初めてきて、しかも好きな子の水着姿。耐性のないオレには、刺激が強すぎるのだ。

「あれ？なんでレイは顔を背けてるの？」

「…なんでもない…」

「もしかして、私の水着姿が見れないとか？」

ミアが意地悪く言う

ミアめ、分かっているなら言うな。恥ずかしいんだから。

「せつかくこの水着、レイのために買ってきたのに…ね？ミュちゃん！」

「そう。私もリュウのために買ってきた…。」

「ばか、そんなことされても嬉しくねえよ!」

しかしリュウ、嬉しくないなら鼻血の勢いは強くないよな？

「レイ!」つち見て!」

(プイッ)

「レイ!」

(プイッ)

「レイ!」!

(プイッ)

ミアの攻撃をよけるオレ…。ミアは業を煮やしたのか、
「む。楠木先輩、お願いします!」

「ハイハイ」

ガシッ (楠木先輩がオレの頭を掴む音)

楠木先輩に援護を頼み…

「レイ!どうかな?」

オレに水着姿を見せた。

白の水着がミアによく似合っていてとても可愛い…。

……ブシャアアアアアア!……!!

バタツ (オレが倒れる音)

「!?!レイ!?!」

ミアの水着姿を見て、オレも赤い華を盛大に咲かす。

……オレは10分ほど、気絶していた。

海と王様と鼻血…（後書き）

夢幻

「零牙く大丈夫か？」

零牙

「…（グツ）」

夢幻

「零牙がしゃべれないようなんで、次回予告は私が…」

龍之介

「次回 『本格推理委員長会』おとまビッ」

ドゴウ!!!パラパラ…

夢幻

「ふう、危ない…よし、次回 『本格推理委員長会』 お泊（ゴウ！）」

…か、体が燃えてる〜！」バタバタ…

スタイル

「ふう、これでよし。気が晴れた。」

インデックス

「次回 『本格推理委員長会』 お泊まり」

当麻

「お楽しみに〜」

夢幻

「また言えなかった！」

お泊まり(前書き)

今、今後のストーリー展開に悩んでいます…。

感想 レビュー お待ちしてます！

お泊まり

10分後、オレは目を覚ました。

海でミアや先輩達が楽しそうに遊んでいる。

さて、アクシデントはあったが思いっきり遊びますかー！

「おーい。みんな」

オレは手を振り、みんなのところまで行った。

「あー！レイ起きたんだ。大丈夫？」

ミアが心配して駆け寄ってくる…嬉しいな。

「ああ大丈夫。それより何をしていたの？」

「先輩達とビーチバレーをしてたけど、そろそろスイカ割りをしよ
うって。」

さて、このスイカ割り…順番はくるときにやった『UNO』と同じ。

先輩達は全滅し、今は小等部の人達に順番が来ている。

ミアが失敗したので次は白石さん。

ガスッ！

リュウの言葉を信じたのだろう…白石さんもスイカにかすって終わり。

次はリュウ。

目隠しをして、木刀をもち動き始める。

そしたら、ミアが小声で話しかけてきた。

「ねえ、レイ。この水着…どう？」

「どづつて…似合っているよ。」

「もっと言っただけいいな…」

感想を言っただけ少し不満なのかむくれてしまった…

それならば…

リュウが終わったことにより、スイカ割りはおれの番に…

スタートラインに立ち、スイカとの距離を見て記憶。

あとは何歩進めば良いか計算した。

こんなところで才能使うのって…まあやりやすいから良いか。

目を閉じてゆっくりと前進を始める。『レイ！そこから右だよ』

『零牙、そこから一步左だ』

『レイ、そこから五歩後ろだ！』

『零牙君、真っ直ぐ前進です』

…みんな面白がっているな？まあおれは今回、スイカを割らせていただきますしよう！

「やっ！」

カッン！

よし、手応えあり。これは取った！

目隠しをとると、スイカに見事に当たっていて
気分が上がった。

「よっしゃー！」

「おめでとう！レイ」

「よく当てたな。」

「流石、オレの親友。」

みんな口々に誉めてくれて正直嬉しかった。

その後、スイカを食べたりビーチバレー（第二ラウンド）をしたり、水泳対決したり…海を満喫した。

そして夕方頃。

「はあゝ疲れた〜」

「遊んだ〜」

「焼けた〜」

遊び疲れたオレたちはあざみ先生の別荘へ戻った。

「みんな〜終わった〜？」

あざみ先生が別荘のベランダから手を振って聞いてきた。

オレたちは手を振って

終わったことを知らせた。

「じゃあ、すぐに来て〜バーベキュー大会始めるよ〜」

と言ったので、オレたちは別荘に急いで戻り、ベランダに集合した。

「じゃあ、城崎君！後は頼んだ！」

ベランダにみんなが集まるや否やあざみ先生はそんなことを言った。

「はあ…、どうせそうだと思いましたよ。」

城崎先輩がボヤキながらバーベキュー用のコンロに向かう…

…なぜだろう。

(犯罪者面の)先輩がお料理していると…

「似合わねえな」

「なんか言っただか、零牙？」

城崎先輩に睨まれた。

迫力満点だなあ…正直怖い。

「えー、おほん。それでは今後も『本格推理委員会』の存続と、事件が起こらないことを願って…乾杯！」

「『『『『乾杯！』』』』」

城崎先輩の料理の上手さに驚いたり、

あざみ先生が酔っ払って手に負えなくなり、委員長がアタフタしたり、

リュウが白石さんにピンク色の毒々しいジュースを飲まされたり、

楠木先輩と椎先輩が梢先輩とミアに（激しい）スキンシップを取っていたり、

虎先輩が城崎先輩と響先輩に「…後で女湯覗こうぜ！」と真剣に言ったのを二人が無言で虎先輩の鳩尾に拳を入れていたり…。

みんな、楽しそうだった。

それを見て、オレもついに笑ってしまふ。

「…プツ、ククク、アハハハハハ！」

それを聞いてみんな一斉にオレの方を向く。

「アハハハハハ…」

…あれ？みんなどうしてオレを見るんでせう？」

ちよつと疑問に思った。そしたらミアが

「レイが…レイが笑った！」

城崎先輩が…

「ああ、いつも笑わない零牙が…」

リュウが…

「笑つても作つたような笑い方のレイが…」

白石さんが…

「普通に笑つた…」

と言っていた。オレが笑つたのがそんなに珍しいのだろうか…？まあここ数年、「楽しい」なんて思ったことなかったからな…。

「オレだって笑いますよ。楽しいときは…」

「じゃあ、レイは今、楽しいんだね！」
ミアが嬉しそうに言う。

「ああ、楽しいよ。みんなと一緒にいれて本当に楽しい。」
オレは口元を緩めてそう言った。

「良かったね！レイ。『楽しい海の思い出』が出来て！」

そう言えば、そんなこと言ったような覚えがある。

そうか…ミアや先輩達はオレに『楽しい海の思い出』を作ろうとしてくれたのか…。

「ありがとうございます。先輩、ミア」
オレは笑って言った。

「良いつてことよ。」

「楽しいことは、ええことや。」

「が、頑張ったかいが合ったね！」

初めて感じる『仲間』の絆…それは恐らくオレが一番求めてたもの

であり、一番、手に入れられないと諦めてたものだった…
今、『仲間』との絆を確かに感じとったのは他でもない。オレ自身
だ…

…そしてオレは密かに決意した。

(もし、『天地逆転』や他の魔術組織がきたとしても…

…オレが全部守ってやる！オレの『失いたくないもの』、全部！)

そう、オレが今までしたことのない『何かを守る覚悟』を決めた。

…

さて皆さん、ここに来てなんです…

オレは今、最大の危機&好機が同時に来ている。

そう…今、オレは…

ミアと一緒にベッドで寝ていた…。

なんでこうなったかは最初の方を見ていただきたい。

オレはてっきりベットは「シングルベット×2」

かと思っていたが…実際は…「ダブルベット×1」だった。

最初オレはソファアーに寝ようかと考えていたが、ミアが「一緒のベ
ットに寝て！／＼／＼」

と言ったため、一緒のベットに寝る決意をしたが…

（ドキドキして眠れない！）

純情な少年^{オレ}の心^{ハート}には刺激が強すぎた。

（くそっ！せっかくミアと一緒にベットに寝れたんだ！なんか話で
もして…）

夏＋お泊まり＋一緒の寝室＝恋バナ

（恋バナしか思いつかねえ！！！なんでだあ！！！！）

今、オレとミアは背中合わせ（お互いの距離10センチ）

この状況が続いて約一時間…正直、かなりキツイ！

どうやってこの状況を打破する！？教えてくれ誰か！

とオレがかなり錯乱状態に陥ったとき、ミアが…

「あ、あのさ、レイ…」

ミアが話しかけてきた。

オレはこの状況を打破するべく、ミアと話をすること…

「な、なんだ？ミア…」

「…」

ミアが黙ってしまふ…。ヤバい、また沈黙の空気が…！

「あ、あのさ、レイには…その…、好きな子とかいる？」

「…」

驚きすぎて声が出なかった。ああ、顔がドンドン赤くなる…！！

「い、いるよ。好きな子…／／」

「ど、どんな子？／／」

ミアの事をそのまま言つと爆発しそうなので、遠回しに言うことにした。

「そ、そいつはいつもニコニコしているけど、人見知りで知らない人に極端に怖がるやつで…」

それで、照れている顔や笑っている顔が魅力的な子かな？／／

「…」

「ミアにはいるのか？好きなやつ…」

「…」

ああ、なんでオレこんな質問しちゃうかな！？
これで振られたら最悪の状況になるじゃないか！

「…い、いるよ。好きな男の子…／／」

オレ敗北決定。明日から毎日枕を涙で濡らすことになるだろう…

「ど、どんなやつ？」

せめてそいつには惨たらしく復讐してやる…！

「え、えつとね、その子は前に私を助けてくれてかつこいいなと思うところもあるし…」

隠し事をしてて、それを教えてくれない意地悪なところもあるし…

でも、本心から出た笑顔がとっても素敵な男の子だよ！／＼／＼」

誰だ…そいつ？オレはミアが教えてくれた情報に従って憎き復讐相手を検索した。

1 前にミアを助けた

該当者 オレ

2 ミアに隠しごとをしている

該当者 オレ

3 笑顔が素敵な人

該当者 …オレ？

以上の結果より出されたミアの好きな人 オレ

…まじっすか？

『ミアがオレのことが好き？』
考え始めたら顔がドンドン赤くなってきた…！

このことを確かめるべきか？いや、確かめないべきか…？

………

ええい！一か八か聞いてやる！！（注意・興奮してろくに考えていません）

「「あ、あのミア（レイ）」

オレとミアは同時に振り向いていた。

顔の距離が近い…！しかもミアの顔が赤いし…。混乱しそうだ！）
注・すでに混乱しています）

しかしここまでできたからには…聞いてやる！

「あ、あのさミア…」

もしかしてだけど…ミアの『好きな人』って…オレ？」

「~~~~~っ！／／／／」

ミアの顔がトマト以上に赤くなる。そして俯いてから

コクン

とても小さく頷いた。

…う、うおーっ！！体の至る所が熱い！！！！

「レ、レイの好きな人は………わ、私？」

…オレは小さく頷いた。

コクン

「~~~~~っ!!! / / / / /」

べっぴんもオレと同じような状態らしい。

…こうなったら、キスするしかない！

そう思ったオレはミアに顔を近づける…。

ミアもオレは顔を近づけているような…

そして、唇と唇が触れるかどうかの瞬間

ボタン！

「レイ！助けてくれ！」

「…リュウ、…逃がさない」

リュウと白石さんが乱入した。オレとミアは慌て顔を離す。

「レイ！ミュがオレと一緒にベットで寝た写真を撮って、『お父さんに見せる』とか言いやがる！どうにかしてくれ！」

…あまりにもバカバカしい内容だったのでリュウを見捨てることにした。

「リュウ、お前も男なら腹きめろ…」

「頑張つて！ミユちゃん！」

「…うん。頑張る。」

「レイ！恨むぞお！！」

リュウが何か言ったようだが気にしない。

その翌日から、オレとミアは暗黙の了解でカップルとなっていた…。

続く。

お泊まり(後書き)

夢幻

「良かったね、零牙。無事思いを告げられて。」

零牙・雅

「…(ポツ)」

夢幻

「雅ちゃん、大切にしろよ?」

零牙

「当たり前だ! / /」

夢幻

「雅ちゃん、零牙を支えてやってね?」

雅

「う、うん。 / /」

夢幻

「さて、次回は『とある科学の超電磁砲』とのクロスオーバーです。

頑張って上手く書きたいと思いますので、皆様、期待しててください!
い!」

零牙・雅

「次回 本格推理委員会
『学園都市』」

学園都市（前書き）

今回からセリフの前にキャラクターの名前をいれました。

パートの見分け方としては零牙のセリフが『オレ』の時は零牙メイ
ン。

その他は零牙、以外の人物とします。

なお、今回から『白井美雪』のことを『ミュ』と主人公達は言いま
すので気をつけてください。

学園都市

学園都市……そこは東京都西部を開拓してできた、人口230万人中、約八割が学生という『学生の街』である。

学園都市と外部は高い外壁で覆われ内部の情報はほとんど外部に入っていない。

学園都市は高い科学技術があり、その技術を使って『超能力者』を生み出している。

そんな、外部の人間にとって《未知の場所》となっている学園都市にオレ・ミア・リュウ・ミュの4人は踏み入れようとしている……。

門番「はい、木ノ花学園からきた速水零牙君、管原雅さん、早川龍之介君、白石美雪さんだね？」

^{ゲスト}臨時発行のIDを発行しました。どうぞお進みください。」

本格推理委員会で海に行ってから約一週間後、オレ達は学園都市と外部をつなげる門の中にいた。学園都市での身分証明書・《ID》を発行してもらい、いざ学園都市の中に

「「「うわあ」」」

「「おお〜」」

学園都市の中は外とはまるで別次元の世界が広がっていた…。

驚きのあまり、感動を覚えるオレ達

ミア「まさか、学園都市に入れるなんてね。」

ミュ「運が良かった…」

リュウ「日頃の行いが良かったからだな！」

オレ「ほら、感動ばかりしないで時間がないから行くぞ。」

「「「は〜い」」」

今回、オレ達が学園都市に入れたのは、全くの幸運である。

木ノ花学園の《総合的な学習の時間》で生徒はいろんな事を調べるのだが、（歴史・文化・自然など色々）資料集めや情報収集のため様々な場所に見学に行く。

そして、今年は学園都市の学校にも見学でき、そしてオレ達が運良く選ばれたのだった。

オレ「さて、待ち合わせ場所に行くためのバスは…」

ミア「あれ？レイ、待ち合わせ場所ってどこだったけ？」

オレ「ん？『常盤台中学』だよ」

ミア「ありがとう！」

オレ「どういたしまして」

こうしてオレ達は常盤台中学に向かった…。

.....

さて、ところ変わって常盤台中学。『超電磁砲^{レールガン}』の異名を持つ御坂御琴は常盤台中学の校門で、待ち合わせをしていた。

御琴「遅いわね。道に迷ったのかしら？」

その隣で御坂御琴と同じく待ち合わせをしているツインテールが特徴の白石黒子は…

白井「さあ…やはり私達でお迎えに上がったほうがよろしかったのでは？」

「「うーん…」」

時刻は10時10分。待ち合わせ時間は10時なので、10分間相手は遅れていた。

流石に心配になってくる時間である。その時

レイ「す、すみませ〜ん。」

声がしたので、そちらの方をみたら…
こっちに走ってくる少年少女達の姿があった。

レイ「す、すみません。えっと、ここは『常盤台中学』ですよね？」

御坂「そうだけど…もしかして『外』からのお客さんってあなたたち？」

レイ「はい。木ノ花学園小等部の速水零牙って言います。え〜っと…」

御坂「ああ、私は御坂御琴みさか みことそっちのツインテールの子は」

白井「白井黒子しろい くろこと申しますの あなたたちのお名前は何と言いますの？」

走ってきた少年少女達は自己紹介を始めた…

レイ「その青い髪の毛が早川龍之介」

リュウ「どうも」

レイ「その後ろの黒髪の子が白石美雪さん」

ミュ「こんにちは」

レイ「そしてオレの後ろに隠れているのが管原雅です」

零牙君の後ろでもじもじしている女の子がひとり…人見知りなのかな？

ミア「あ、えつと、その…」

御坂「恥ずかしがらなくても大丈夫だよ。」

そういうと、管原さんは少しだけ前に出てきて

ミア「か、管原雅です…」

と言ってまた隠れてしまった。

レイ「ミアは極度の人見知りなんで…」

零牙君が申し訳なさそうに言った。

御坂「いいわよ。そういうのってしょうがないから。」

一段落ついたと思ったのか、零牙君は

レイ「えつ」と、今回は僕達のために時間を割いてくださり、ありがとうございました。これからよろしくお願いします！」

「「「よろしくお願いします。「「「

全員、きちんとお辞儀をした。偉いなあ…

御坂「はい！これからよろしく。ま、ありきたりな挨拶だけど…」

御坂・白井

「「ようこそ、学園都市へ（ですわ）」「」

それを聞いて、小さなお客様達は笑みを浮かべた。

- - - - -

御坂さん達とオレ達が挨拶した後、早速オレ達は学園都市の案内をしてもらったことにした。

御坂「じゃあまず…ゲーセンにでも行きますか！」

オレ達

「「「「へっ？」「」

白井「お姉様…お客様にいきなりゲーセンに行くというのはいさよか問題ありませんの？」

御坂「良いじゃない黒子ゲーセンと立ち読みは私の趣味なのよ」

…あれ？常盤台中学ってお嬢様学校じゃなかっただけ？そこに通うお嬢様の趣味がゲーセンと立ち読みって…

リュウ（レイ、お嬢様の趣味がゲーセンと立ち読みってどう思う？）

オレが疑問に考えていると、リュウも疑問に思ったらしい…目で話しかけてきた

オレ（さあな、しかし個人の趣味に口出しするのはタブーだろ？）

リュウ（そうだな。ここはツッコまないようにしよう）

オレとリュウは御坂さんの趣味にツッコミを入れないことを決めた…しかし

ミア「何見ているんですか？御坂さん。」

御坂さんがカエルを模したマスコットをガン見している。

ミア「御坂さん、もしかしてこのマスコットキャラクターが好きなんですか？」

オレ・リュウ

((そんな訳ないだろ))

白井

「お姉様：いい加減ゲコ太に興味を持つのはお辞めになっは？」

御坂

「く、黒子！わ、私はゲコ太なんかに興味なんかいわよ！」

リュウ

「でも、さっきゲコ太をガン見してましたよね？」

御坂「うっっ！」

リュウのツッコミにたじろいでしまう御坂さん。

御坂「そ、それは、ちょっと目についたからで…！」

オレ「そうですか。じゃあそのカバンに付いているかわいらしいマスコットは一体何なんでしょうね？」

御坂「うっっっ！」

オレのツッコミに更にたじろいでしまう御坂さん。

白井「お姉様！零牙さん達までその趣味は『子供っぽい』と言われ
てしまいましたわよ！」

これを機にゲコ太とスパッツを履くのはお辞めください!!」

御坂さんが顔を赤くして反論した。

御坂「く、黒子！スパッツは今関係ないでしょ！！それに零牙君達は『子供っばい』なんて言ってないわよ！」

オレ・リュウ

「いえ、十分子供っばいと思います…」「」

オレとリュウにダメ出しをくらいうなだれる御坂さん。

それを見ていたミアとミュは…

ミア「そ、そういえば学園都市にはおいしいクレープがあるって聞いたことがあるな。」

ミュ「食べに行きませんか？」

これは好機チャンスと思ったのか「うんうん！行こ行こ！」とミアとミュの手を握って走り始める御坂さん…

それを見てオレとリュウは

オレ「ちよつと言い過ぎたかな？」

リュウ「だな…」

白井「お姉様…この黒子必ずお姉様からスパッツをとり、私だけのものにしてみますわ…。」

なぜか白井さんの言葉を聞いて御坂さんが気の毒に思えたのは気のせいではないだろう。

.....

ところ変わって常盤台中学も含めて、様々な学校が立ち並ぶ《第七学区》の自然公園。

そこでオレ達はクレープを食べていた。

ミア「ん〜、クレープおいしい」

ミュ「食べ比べしない？ミアちゃん」

リュウ「クレープうまー！」

オレ「モグモグ」

ミア「ミアちゃんのもおいしい!」

ミユ「ミアちゃんのもおいしい!」

リュウ「レイ!オレ達も食べ比べしよう!」

オレ「...オレのもお前のも同じだろ」

リュウ「はっ!そうか。それじゃあ意味ない...

ってなんでオレのもくってんの!?!」

オレ「モグモグゴクン。ごちそうさま」と

リュウ「あっ!もう全部食いやがった!」

オレ「しかし、ここは機械だらけだな...。」

リュウ「しかも聞いてねえ...」

御坂「みんな仲良しだね。」

白井「お姉様っ！私達のクレープも食べ比べいたしましょう！」

御坂「黒子、私のもアンタのと一緒じゃない。」

白井「黒子のばか！黒子のばか！」

ミア「し、白井さん！？いきなり地面に頭を打ち始めて大丈夫ですか！？？」

佐天「あれ？御坂さん何やっているんですか？」

クレープを食べている最中、二人の少女が話しかけてきた。一人は頭の上に大きな花飾りを付けていて、もう一人は花を模した飾りを付けていた。

御坂「ああ佐天さん、いやね、学園都市に見学しにきた子を案内しているのよ。」

「「「「「どつも」」」」」

オレ達はとりあえず挨拶した。

佐天「そうなんですか！あ、私は佐天さてん 涙子なみこよろしくね」

初春「私は初春ついはる 飾利かざりつて言います。」

オレ「オレは速水零牙です」

リュウ「早川龍之介つて言います。」

ミュ「私は白石美雪と申します」

ミア「あ、えっと、管原雅です。」

佐天「うんうん。可愛いね。」

初春「佐天さん…ロリコンにでも目覚めたんですか…?」

初春さんはかなりひいていた。

佐天「いやいや！ただの比喻だよ！」

慌て誤解を解く佐天さん

ミア「良かった…椎先輩や菜摘先輩みたいな人じゃなくて…」

御坂「何か言つた？」

ミア「いいえ！なんでも…」

ミアよ。先輩達になにされているんだ…？

ミュ「…」

黒子「何見ているんですか？えつと…白石さん？」

ミュ「はい、ええつと…あそこの店、なんで昼間からシャッターなんか降ろしているんでしょう…？」

それを聞いてオレ達（+御坂さん、白井さん、佐天さん、初春さん）はミュの目線の先を追った。
どうやら、銀行が防犯シャッターを降ろしているらしい…。あれ？
この展開って…

ドオン！

突然、防犯シャッターが内側から弾け飛んだ。

「」「！」「」

その爆発音を聞いて白井さんは持っていたクレープを一口で食べ、

白井「初春！」

公園のフェンスを飛び越えスカートのポケットから腕章を取り出した。

その腕章は三つの線に盾のマークが描かれていた。

白井「『警備員』（アンチスキル）の要請と怪我人の有無の確認！
急いでくださいな！」

初春「は、はい！」

御坂「黒子！」「いけませんわお姉様。」

御坂さんが駆けだそうとしたのを白井さんが止めた。

白井「学園都市の治安維持は私達、『風紀委員』（ジャッチメント）
のお仕事……。大人しくしててくださいいな。」

初春「はい。第七学区《ふれあい広場》前の銀行で強盗事件発生。
警備員の出勤を要請します。」

白井さんの言葉に従う御坂さん。

「おら！グズグズすんな！さっさとしねえと…」お待ちなさい。」
「！」

銀行強盗犯はどうやら三人。白井さんを目の前に立ち止まった。

白井さんは右腕に付けた腕章を左手で見せつけるようにした。

白井「風紀委員ですの。器物破損及び強盗の現行犯で拘束いたしました。」

その姿をみた銀行強盗犯の三人は笑った。

たかが小娘一人しか駆けつけていないこの状況を余裕とと思っているのだろうか。

そしてそのうちの一人が「おらお嬢さん、とつとどこかに行かねえと怪我するぜえ！」白井さんを殴ろうとした瞬間、

白井さんはひらりと突き出された拳をかわし、左足を蹴り上げて宙に浮かした。…見事な手際だった。

白井「そういう三下のセリフは死亡フラグですわよ？」

ミア・ミュ

「す、すいー！」

仲間の一人が倒され、まずいと思ったのか、強盗犯の一人の手のひらから炎が出来た。発火系能力者と言うやつだろうか？
パイロキネシスト

「今更後悔してもおせーぞ。こうなった以上、テメエには消し炭になつて」

発火系能力者の男が話している最中、白井さんは発火系能力者から離れるように走った。

「!!!逃がすかよ!」

男の手のひらにあつた炎は白井さんのいた場所に当たった。

「誰が逃げますの?」

白井さんは自身の能力『空間移動』テレポーターを使い、一瞬で発火系能力者の鼻の先に立ち、
今度は後ろに空間移動してドロップキックをあたえた。

さらに倒れた男の衣服に自分の太ももに巻き付けてある金属棒を空間移動。身動きを封じた。

「テ、空間移動能力者!」テレポーター

白井「次に何かをしようと思ったなら、今度は直接、金属棒こねを体内に空間移動させてあげますわ。」

たるかもしれないし、

切り札の『超電磁砲』レールガンもコインを取り出せない…。万事休すだった。

私が歯噛みしていると、零牙君が

レイ「おい、オッサン。ミアを離せ。」

と言った。今挑発しても管原さんの命の危険がまずだけなのに！

「離すわけないだろ！クソガキ！さあ、そこの風紀委員、大人しくしてろよ、さもないと…」

その男の手のひらからも炎が出てきた

管原さんがその炎を見て怯えている…。くそっ、あの男だけなら一秒で倒せるのに…

レイ「御坂さん！」

そう思っていると零牙君が話しかけてきた。

レイ「タイミングを合わせてヤツに攻撃してください！」

そう言つて零牙君はどこからか日本刀を腰に差し、左足を軸に回転した。

「はっは、何をやっているのかな？僕？」

白井「お待ちなさいな」

強盗犯が護送車に乗る前に白井さんが引き止めた

白井「あなたの炎…なかなかのものでしたわよ。強能力者（レベル3）といったところですね。能力に溺れるあまり、道を違えてしまったようですけど…今一度よく反省して、もう一度出直してきなさいな」

白井さんの言葉をどう思ったかはわからないが、強盗犯はそのまま護送車に乗った。

オレ「はあ、結局今日は、風紀委員の仕事が見られたぐらいか」

リュウ「そう落胆すんなよ。一週間滞在するんだからまだまだ大丈夫さ」

オレ「そう言ってくれると助かるよ…」

御坂「ねえ！」

オレとリュウが話していると御坂さんが話しかけてきた。

御坂「スツゴくかつこよかったわよ。速水君。」

そう言ったら御坂さんの後ろからミアが現れて、

ミア「た、助けくれてありがとう…／＼」

オレ「む…。あ、ああ…／＼」

恥ずかしさのあまり、少し目をそらしてしまった。

白井「お姉様あゝ！」

突然の白井さんの声：御坂さんの後ろにいたと思ったたら空間移動を使い、御坂さんに抱きついていた。

それを見て唾然とするオレ達。

ミア「白井さんは同性愛者なのかな…？」

ミュ「そうだと思う。」

オレ「初春さん。白井さんって『変態』ですよね？」

初春「う、うん。かなりの変態…」

白井「何か言いましたか。初春？」

初春「い、いえ！何も言ってますん！」

その様子を見て笑っているオレ達。

ミア「あ！そうだ！」

ミアが何かを思いついたらしい…一体何だろうか

ミア「御坂さん、白井さん、初春さん、佐天さん、私達のことを名前と呼んでくれませんか？」

どうやら名字ではなく、名前で呼んでほしいらしい…。

それを聞いた御坂さんは御坂「わかったわ。管原さん…いや、雅ちゃん。」

と笑って言った。

こうして、オレ達は御坂さん達に名前で呼ばれることになった。

続
く

学園都市（後書き）

夢幻

「今回はゲストを出演しました。」

御坂「こんにちは。」

零牙「あ、御坂さん来たんですね。」

御坂「零牙君、なんかお便りが来ているよ？」

零牙「えっ？はいはい。」

R・N「強面兄さん」より

「作者！オレ達の出番はどうなるんだ！！」

と書いてあります。夢幻、どうするつもりですか？」

夢幻

「大丈夫。これ終わった後で出番あるから心配しないでくれ。」

零牙

「そのときオレ達は？」

夢幻

「学園都市に行っていることにする。」

零牙

「なるほど。城崎先輩、安心して良さそうですね。」

御坂

「そろそろ、次回予告したら？」

夢幻

「そうですね。御坂さんお願いします！」

御坂

「次回 本格推理委員会

『学び舎の園』」

零牙

「科学と推理が煌めく時、物語は動き出す！」

学び舎の園（前書き）

学園都市編は長くやります！（少なくともテストが終わるまでは！）

学び舎の園

オレ達が学園都市にきた次の日、オレ達は学園都市の中から更に隔離された『学び舎の園』前の関所（？）に来ていた。

レイ「常盤台中学の白井黒子さんに呼ばれてきました。速水零牙です」

リュウ「早川龍之介です」

ミュ「白石美雪です」

ミア「か、管原雅です…」

門番「はい、確かに確認しました。通って良いですよ。」

ピーガチャン！

関所にある部外者用のゲートが開き、『学び舎の園』に入った

「「「「おお〜!」「」」」

学び舎の園の中はヨーロッパのような作りになっていた。

ミア「す〜い!中は外と全然違うね!」

ミュ「新婚旅行はヨーロッパに行こうかな…?」

リュウ「ミュ、そう言ってなぜオレを見るんだ?
言うておくが、オレはお前と結婚する気はないからな?」

ミュ「大丈夫。どんな手を使っても結ばれるから」

リュウ「本人の同意を必ず得てからにしろ!」

… なんと云う仲良し夫婦の言葉を聞きつつ、オレは周りを一瞥して

オレ「なんだ?このエセヨーロッパは?」

と吐き捨てた。

ミア「あれ?レイは『学び舎の園』嫌い?」

レイ「おかしなやつだな。普通ここは『綺麗だな』って言うところだぞ？」

ミュ「本場はもっと違うの？」

レイ「いや、外観はイギリスっぽいけど足りないものがある」

ミア「足りないもの？」

レイ「『教会』がない」

.....

リュウ「...それはしょうがないと思っぜ？レイ」

ミュ「学園都市には宗教的なものがまるでないから」

レイ「...ま、しょうがないか...」

オレはしぶしぶ受け入れた。

ミア「さて、白井さんのところに行こう！」

そして、ミアのこの一言でオレ達は移動を開始した。

.....

御坂「黒子のやつ…待ち合わせに来ないで何しているのよ…?」

ミュ「あっ！御坂さん！」

リュウ「良かった。見つかった！」

ミア「(ブルブル)」

レイ「…」

私が零牙君達を見つけた時、雅ちゃんは怖がっていて、零牙君は「
機嫌斜めだった…何があったんだろ?」

御坂「おはよう。って雅ちゃん大丈夫？」

ミア「ブンブン(首を横に振る音)」

リュウ「さつきからいろんな人がオレ達を見ているんですよ」

ミュ「それで怖がっちゃって…」

御坂「ああ…。ここじゃ、みんなの服が珍しいからね。で、零牙君は？」

リュウ「レイはなんかご機嫌斜めっす。」

ミュ「しょうがないよ。イギリスはレイの故郷だから。」

御坂「えっ！零牙君ってイギリスにいたの!？」

レイ「…イギリスで神父をしていました。」

御坂「そうか～。まあここには教会なんてないものね。」

白井「お待たせしましたわ」

零牙君が不機嫌な理由を聞いた後、黒子が現れた

御坂「どこ行っていたのよ？黒子、遅いじゃない。」

白井「すみませんお姉様。少しお買い物をしておりましたの」

御坂「何を買ったのよ?」

白井「リップクリームですわ。昨日切らしてしまいました…」
そう言つてポケットからリップクリームを取り出した。

白井「さて、今日はこの『学び舎の園』を楽しんでいただくため、この黒子綿密に計画を立ててまいりました。今日はこの黒子にお任せを!」

ポケットから手帳を取り出し、計画を確認する黒子。うん、これなら大丈夫かな?

レイ「…(スッ)」

その時、零牙君が黒子の手帳を取り上げ、今日の内容を読み上げた。

白井「あっ!」

レイ「え〜っと『学び舎の園案内にかこつけたお姉様とのデートプラン』」

その1 ファミレスで親睦を深める

その2 ランジェリーショップに行き零牙さん達の反応をみる（勝負下着購入）

その3 飲食店で食事（飲み物に睡眠薬投入）

その4 零牙さん達排除

その5 眠ったお姉様とホテルへGO！

…と書かれてありますがどう思います？御坂さん？

どう思います？ってそりゃあもちろん…

御坂「く〜ろ〜こ〜」

あなた、今日の案内より自分の変態欲求の方が大事なのか！

黒子の頬をつねりイライラを当てる。

白井「ひはいです、おねえはま。ひはいです」

ミア「あの〜そのへんで許してあげてください。白井さんも悪気はなかったんでしょうし…。」

御坂・レイ

「「いや、100%悪意から来ている(ぞ?)」」

しかし、雅ちゃんに免じてつねるのを止める。

黒子が頬をさすっていた

御坂「で、どこか行きたいところとかある？連れて行ってあげるわよ。」

ミア「はい。」

美雪ちゃんが真っ先に手を挙げた。どこに行きたいねかな？

御坂「はい！美雪ちゃん」

ミア「ええっと、『常盤台中学の女子寮』が見たいです。」

続く

学び舎の園（後書き）

夢幻

「今回は白井黒子さんと呼んでみました」

白井

「どうもですわ。」

夢幻

「いやあ、原作と相変わらずの変態っぷりですね。」

白井

「変態とは聞き捨てならないですわね。私はただ、お姉様と確かな”愛”を紡ぎたいだけですのに」

夢幻

「以上、かなり気持ち悪いセリフに普通に話せる白井黒子さんでした！」

白井

「ちょっと！私のセリフはこれだけのの！？」

御坂

「次回 本格推理委員会 『常盤台中学女子寮』」

零牙

「科学と推理が煌めく時、物語は動き出す！」

白井

「お姉様あゝ！」

御坂

「ちよつと黒子！離れなさいっ！」

初春

「ま、また読んでくださいっ！」

常盤台中学女子寮

ミア「おお〜。ここが常盤台中学の女子寮の部屋のなか!」

ミユ「すごい!」

レイ「よく入れたなーオレ達」

リュウ「だな…」

ここは常盤台中学の女子寮の部屋…御坂さんと白井さんの部屋だ。

さて、なんで男子禁制の女子寮にオレ達が入れたかということ…

…説明が面倒なので続きは回想を読んでください…

…

レイ「あ、女子寮ってことはオレとリュウは入れないじゃん。」

「」「」「あ、」「」

常盤台中学の女子寮前のエントランスでオレがふと言ってしまった言葉。これにはみんな頭の中はなかったようだ。

御坂「大丈夫よ。いざという時は黒子の空間移動があるし。」

リュウ「それじゃあなんか泥棒みたいだな…オレら」

レイ「入れなかったら強行策を使いますよ。」

そうしているうちにエントランスの扉が開き中へ。

その見るからに柔らかそうな椅子に結婚適齢期を過ぎたようなメガネをかけた40代すぎだと思われる女性がいた。

見るからに規律に厳しい感じがする

寮官「どうした？白井、御坂。」

白井「寮官様、こちら学園都市の外から来たお客様です。」

「「こんにちは」

白井「今回、この常盤台中学の女子寮を見学したいと言っていまするんです…。通してもよろしいですわよね？」

寮官「外から来たお客様に男性の方はいらつしやるのか？」

白井「はい、こちらの速水零牙さんと早川龍之介さんですの。」

オレ・リュウ

「「こんにちは」」

白井「速水零牙さんは昨日の銀行強盗犯を拘束するのにご協力いただいた方です」

…常盤台中学の女子寮に入るにふさわしい方だと思います。」

寮官「そちらの早川龍之介さんは？」

オレ「彼は品行方正ではないかもしれませんが、いざとなった場合、僕の頼れる相棒です…。」

彼もあなたのご寛大な心でこの女子寮に入ることを許していただければありがたいです。」

そう言ってオレは頭を下げた。リュウが驚いた表情になるがすぐに「お願いします！」と頭を下げた。

寮官「ふむ…さてどうしたものか…」

寮官様が悩んでいる…どうなるかな？

寮官「いや、やはりダメだな。」

悩む時間、実に約十秒

悩む必要性を感じられない

御坂「どうしてですか！寮官！」

寮官「常盤台中学の女子寮は《男子禁制》の場所。『外』からのお客様と言えど通す訳にはいかない。」

白井「しかし…」

寮官「いかなる者であろうと平常時、この女子寮に入ることは許さ
ん。」

御坂「ですが…」

寮官「どんな理由があるとダメなものダメだ」

オレ」と言うことはミアとミュちゃん…管原雅さんと白石美雪さんは女子寮に入ることを許すと言うことですね？」

まさかの切り返しに驚いた表情の寮官。イギリス清教の異端審問官は事実のすり替えなど簡単に出来るんだぞ？

寮官「…まあ、管原雅さんと白石美雪さんは通すことを許そう。」

よし、ミア達は通すことを許された。オレ達も通してもらおうとするか。

オレ「ありがとうございます。しかし、それでは僕達にある問題が生じます。」

寮官「その問題とは一体何だ？」

オレ「はい、僕達はこの学園都市に来る前に様々な規則を必ず守るよう言われました。《必ず班員は一緒に行動するように》…この規則に反してしまいます。」

寮官「ならば女子寮の見学は諦めるんだな」

オレ「しかし、僕達は5日後にこの学園都市を出て『外』に出ます。

一般の方では入ることのできない学園都市。そして学園都市内部の情報は外部にとても重宝します。

僕は学園都市の科学技術などに関しては漏洩しないと言われましたが、

常盤台中学の女子寮の規則となれば話は別…たかだか一学校の規則、どう理由を付けても外部の人間に話すことは許されるはずでしょう？」

寮官「…」

寮官が探るようにオレを見ている。そして御坂さんと白井さんは驚いた顔でオレを見ている…まだまだこれからですよ？

オレ「そのとき、僕達が今回の規制に関する話をしたらどうでしょう？」

いくら男性と言えどまだ年端もいかない小学生…外のマスコミはこそってバッシングをかけるでしょうね。

そうしたら常盤台中学…いや、もしかしたらこの学園都市が崩壊するかもしれませんよ？

いくら学園都市と言えど外部の協力なしには何も出来ないでしょう

しね。」

寮官「なら、常盤台中学の見学はなかったことにすれば良いじゃないか？」

オレ「常盤台中学は学園都市でもお嬢様学校として知られる言わば今回の見学の中心となる場所…」

それに僕達の案内をしていたらいる御坂さんと白井さん、お二方の通われている学校を紹介しなければ不自然だと思いますが？」

寮官「では、学園都市の見学した内容を発表しなければ良い。」

オレ「それでは見学した意味がないでしょう？」

見学した内容を外部の人間に発表しなければ、それはそれで何らかのバッシングを受ける可能性がありますよ？」

寮官「…」

オレ「もちろん、僕達も《常盤台中学》が外部に伝えて欲しくない内容は伏せますので、なにとぞ『特例』で僕達二人を見学させてください。」

そう言ってまた頭を下げた

寮官「ふむ…確かに君の言うことは理に適っているな…

…わかった。速水零牙さん、早川龍之介さんを『特例扱い』として、この常盤台中学の女子寮に入ることを許そう。」

オレ「ありがとうございます。」

長い討論ばいきりゅうの末、おれは寮官に勝った。

ちなみにこの討論が常盤台中学の中で伝説化されたのは、また別の話…

.....

御坂「しかし、あの寮官を言い負かすとは…」

白井「零牙さんは高度な話術をお持ちなんですね…」

オレ「あれぐらいどうってことないです。」

ミア「流石、IQ200の頭脳を持っているだけのことはある…」

ミュ「あんな不利な状況から切り返せるのがすごい…」

リュウ「しかもオレまで…一体いつ、そこまでの交渉術を？」

オレ「あれぐらいの話術がないと、布教なんて出来ないだろう？」

そのとき全員が「ああ、なるほど。」と言う顔をした。

実際には布教もだけど、異端者を拷問するときに必要なんだけどね！

御坂「あ、着いたわよ。ここが私と黒子の部屋。」

御坂さん達の部屋に着き部屋の中を見る。

流石お嬢様学校の女子寮、内装もかなりおしゃれだ。

ミア「おお、ここが常盤台中学の女子寮の部屋のなか！」

ミユ「すげー！」

オレ「よく入れたなーオレ達」

リュウ「だな…。」

ミア「わあ〜ベットもふかふかだあ〜！」

ミュ「ちゃんとのりが利いている…。」

ミア達がかなりはしゃいでいるな…。やはりお嬢様に憧れを持つものなんだな…。

そう考えていたら、御坂さんが…

御坂「さて、あんまりロクな物がないけど、お茶にしようか！」

「」「賛成！」「」

続く

常盤台中学女子寮（後書き）

夢幻「今回もゲストを呼びましたー。」

初春「ど、どうも」

零牙「作者よ、あらずじに書かれていることのせいだ、

今回のクロスオーバー（とある科学の超電磁砲）の企画を早く終わらそうとしてないか？」

夢幻

「いやだなー零牙くん。まだ長く続ける予定だよ？」

初春「どれぐらい…？」

夢幻

「ん〜。まだ未定。でもあと1ヶ月はやるよ！」

零牙

「信じらんねえな」

初春

「すみません。風紀委員の仕事が入ったのですぐ向かわないと…」

夢幻「だってさ。零牙くん。次回予告をやって頂戴！」

零牙「ちっ！わかったよ

次回 本格推理委員会

『飛天御剣流VS最強の電撃使い（エレクトロマスター）！！』

初春「ご期待ください」

飛天御剣流VS最強の電撃使い（エレクトロマスター）！！（前書き）

前回、募集したアンケートに誰も答えてくれません…。

この小説を読んでくださっている皆様、どうか意見をお聞かせください…m（＿）m

お願いします！

飛天御剣流VS最強の電撃使い（エレクトロマスター）！！

御坂「そういえば、零牙君が使う剣術って何かの流派なの？」

御坂さん達の部屋で優雅にティータイムを満喫していると、御坂さんがそんなことを言ってきた。

オレ「『飛天御剣流』っていう流派です。」

御坂「へえ〜。それってどれくらい強い？」

なせだろう。御坂さんの目が獲物を狙う虎のように思えるのは気のせいだろうか。

白井「お姉様：まさか零牙さんと勝負するおつもりですか？」

前言撤回。あれは獲物を狙う目だ。

御坂「だって、昨日、刀一本で能力者と戦って勝ったのよ？私が全力で戦ってみても大丈夫だと思うんだけどなあ。」

白井「お姉様：確かに超能力者（レベル5）のお姉様とともに戦える相手がいないのはわかりますが、零牙さんはまだ小学生。勝負にならないと思いますが？」

リュウ「でも御坂さんとレイ、どっちが強いのか気になるな。」

ミュ「…確かに…」

おいおいリュウとミュちゃん。オレを殺す気か？普通、最強の電撃使い（エレクトロマスター）御坂さんになうはずないだろ！

ミア「だ、ダメだよ！危ないよ！」

ミア、オレの心配してくれてありがとう。

白井「とにかく！ダメですよお姉様！能力者相手に普通の人間がかなうはずありません！！」

御坂「うーん。零牙君はどうしたい？」

オレ「良いですよ。」

ミア・白井さん

「レイ！（零牙さん！）」

でも、やっぱり最強クラスの能力者がどれくらい強いのか気になるから…。オレはこの勝負を受けた。

御坂「よし！じゃあ早速始めましょう！」

ここはどこかの河川敷。周りに人はいない。いるのはミア達だけだ。白井さんは勝負の立会人を務めるらしい。

オレ「ここでやりましょう。ここでなら思いっきり戦える。」

御坂「ええ…」

御坂さんはやる気まんまん。早く始めたいと思っているのがわかる。

白井「お姉様！零牙さんを感じ死させませんよう、気をつけてくださいね！」

ミア「レイ。死んじゃあダメだよ！」

オレ「大丈夫だミア！死ぬ前に絶対勝つ！」

ミア「そういう意味じゃない！もう！」

ミアがしぶしぶ座った。

戦いを始める前に言っておかないといけなことがあったな

オレ「御坂さん、ハンデとして刀を使わせてもらいますよ？」

御坂「それじゃあ、私が死んじゃうじゃない！」

御坂さんの意見は最もだが…この刀なら大丈夫。

オレ「大丈夫ですよ。この『逆刃刀』なら！」

どこからともなく刀を取り出して、刀身を見せた。この刀は峰と刃が逆に付いているのだ。

ちなみにこの『逆刃刀』は、特別製で電撃を寄せ付けないようにしてある

御坂「なるほど…それなら大丈夫そうね。じゃあ始めましょうか！」

飛天御剣流VS最強の電撃使い、勝負開始！

.....

レイ「行きます！」

零牙君は取り出した刀を鞘に収めて刀を抜く構えをした。

そして・・・姿が見えなくなった。

御坂「!!！」

突然姿を見失って慌てて姿を探す…しかし

レイ「ここですよ？」

零牙君は私の真下に来ていた。そしてそのまま・

レイ「飛天御剣流！『龍翔閃』！」

顎を刀の峰で突き上げられ、思いつきり顎に痛みが・

レイ「まだですよ。飛天御剣流！『龍追閃』！！」

来る前に頭に衝撃が走った。意識が一気に朦朧となる。

そのまま後ろに倒れてしまう…

レイ「どうします？降参しますか？」

着地をした零牙君が不敵に笑う。そう言われたら勝ちたくなっちゃうじゃない！

御坂「ここからは…私の攻撃よ！」

私は『磁力』を使い、周りにある砂鉄を剣のような形にした。

レイ「刀でオレに勝負を挑む気ですか？…良い度胸ですね。」

零牙君は不敵に笑う。

御坂「残念だけど…本当はコツチなのよね！」

砂鉄の剣を鞭に変え、零牙君に遠距離攻撃を仕掛ける。

レイ「そこなくては」

零牙君は余裕で鞭を避ける。けど！

御坂（まだまだ甘いわよ！）

避けられた《砂鉄の鞭》の切っ先の形状を変化させ、後ろから零牙君を突き刺した。

レイ「バレバレですよ？」

零牙君は体を翻し、向かってきた《砂鉄の鞭》を刀で受けとめる

御坂「背中ががら空きよ！」

もう一つ《砂鉄の剣》をつくり零牙君に攻撃を仕掛けた。

レイ「だから、バレバレですって。」

零牙君は自分が受け止めてた《砂鉄の剣》を高く跳ぶことで回避し、攻撃してきた《砂鉄の剣》にぶつけた。

御坂（なるほど。やるじゃない。でも、私の方が強かったようね！）

私は左手に能力^{ちから}のため、そしてできた電撃の槍を投げた。

空中にいるため回避は不可能…。まともにデングキを受けたようね。

白井「お姉様ツ！零牙さんを感電死させないよう、言っただはずですわ！」

御坂「大丈夫よ黒子。ちゃんと手加減したから」

白井「そう言う問題ではありませんわっ！」

ミア「レイ！」

ミアちゃんが零牙君の元に駆け寄ろうとする…

しかし。煙の中から零牙君が現れた。

手加減したせい、まともに電源を食らったのにまだピンピンしている。

レイ「…少し見くびっていました。」

電撃を受けたのか体から煙が上がっている。しかしなんとか大丈夫そう。少し安心。

御坂「当たり前よ。昨日の能力者と同じにしないで。」

レイ「ええ…ですからここからは…」

おっ、本気のスイッチが入ったかな？

そう思い私は身構えた。いつでも電撃を放てるように。

レイ「本気でいきます。」

ドッ！！

零牙君はまた見えなくなり姿を消した。私は自分の周りの土を見た。剣術である以上、必ず相手は自分の近くに來なければならぬからだ。

しかし

どこの土も削れてなかった。

レイ「どこを見ているんですか？」

零牙君の声が聞こえた方向に向くと既に目と鼻の先に零牙君はいた。

しかし、足は地面に着いていない。

御坂「!!！」

レイ「飛天御剣流 - - 『龍巢閃』!!!!!!」

体のあちこちに衝撃が走った。速さも上乘せされた剣術は相当な威力だった。

御坂「~~~~~!!！」

痛みのあまり悶えてしまう…。

そうすると攻撃の後に距離を取った零牙君は

レイ「『奥の手』出したらどうです?」

切り札を出すように言ってきた。私と零牙君の間には数メートルの距離がある。完全にみくびっている。一回本気を見せた方がよさそうね。

御坂「ええ…。これで最後よ!」

そう思い、私はポケットからコインを取り出しを上に弾いた…

御坂「この技は結構危ないから…降参するなら今の内よ？」

私は念のために忠告した。しかし零牙君は刀を鞘に収めていつでも抜刀できる体制で

レイ「どんな技でしょうと、全部見切ります。」冷静にそう言った。

御坂「じゃあ…気をつけてね！」

そして…コインを電撃に乗せて…撃った。

ドオン！

零牙君のいる辺りが土煙を起こした。音速の三倍で飛ばしたコインは『超電磁砲レールガン』となつて一直線に零牙君に当たった。

…と思われた。

レイ「今の一撃なかなか効きました。…オレも全力で応えましょう。」

┌

零牙君は土煙の中から出てきて技を放とうとする。――既に刀は抜か
れている

レイ「飛天御剣流！！『九頭龍閃』！！！」

技の発動と同時に零牙君の気迫に襲われて身動きが出来なくなった。

ヤバイ――これは本当に死ぬ――

目をつぶり、恐怖から逃れようとする。しかし体を引き裂くような
衝撃が――

……

衝撃が来ない。

御坂「??？」

不信に思った私はうつすらと片目を開けてみた。

そこには刀の切っ先を私の喉に向ける零牙君の姿が……そして

レイ「オレの勝ちですね」

勝負はついた。

飛天御剣流VS最強の電撃使い（エレクトロマスター）！！（後書き）

夢幻「アンケートが来ないよう……」

零牙「募集をかけるのが早すぎたんじゃねえか？」

御坂「そうよね……。ストーリー展開を見てみると結構先よね……」

ミア「無計画！」

白井「全く……。我々の出番が終わってからでも良かったのでは？」

夢幻「とりあえず、『どんなキャラクターのセリフ』を先に作らないといけないだろ？」

初春「それでも早すぎのような……」

ミュウ「……言い訳厳禁」

リュウ「自分の非を認めようぜ？作者。」

夢幻「読者の皆様！アンケートに是非お答えください！でないとなんか誰をメインにしたら良いかわかりません！」

佐天「結局、あらすじと言っていること変わらないじゃん。」

夢幻「うっ…！」

白井「そんな作者は置いといて、次回予告をしますわよ。皆様、準備はよろしいですわよね？」

皆「はい！（ええ）」

佐天「零牙君！ビシッと決めちゃって！」

零牙「次回 本格推理委員会 『甘いものもほどほどに…』」

皆「（せ〜のっ）ご期待ください！」

夢幻「『科学と推理が煌めく時、物語は動き出す…！』」

甘いものもほやほやに！ (前書き)

テスト前だけどやってて良いのかな…？

とにかく本編へGO！

甘いものもほやほやっ！

ミア「ハア〜」

御坂さんとレイの勝負はレイが勝った。しかしため息をついた理由のはそうではない。

ミア（死ななくて良かった）

とにかく、レイが生きていたのでホッと一安心。

御坂「あちゃー。負けちゃったか〜」

レイと御坂さんがこちらに来た。レイの服があちこち焼け焦げていた。

白井「もう！お姉様ったら…勝手に勝負を申し込んで負けてしまわれるなんて…」

御坂「まあまあ黒子、負けは負け。完敗だわ。だけど一つだけ教えて。」

御坂さんは白井さんをなだめるとレイの方を向いて聞いた。

御坂「最後の『九頭龍閃』ってのはどんな技なの？」

レイが最後は放ちかけた技『九頭龍閃』について聞いた。

レイ「…『九頭龍閃』は剣術に置ける九つの攻撃箇所、全てに攻撃する技です。」

「「「「「??」」」」」

レイが何を言ったのかわからなかった。

レイ「うーん。やって見せた方が早いな。リュウ、そこに立ってくれ。」

リュウを使って実演してくれるらしい。リュウは少しびびっているようだ

レイは逆刃刀ではなく、木刀を取り出し

レイ「剣術に置ける九つの攻撃箇所……

まずきに『唐竹』」

そう言つてリュウの頭に当たる寸前まで振り落とした

レイ「弐に『袈裟斬』」

今度は右斜め上から左斜め下まで斬るようにして

レイ「参に『右薙』」

次は右から胴を斬るよう構え

レイ「四に『右斬上』」

右斜め下から左斜め上に斬るようにして

レイ「伍に『逆袈裟』」

袈裟斬とは逆に下から上に斬るようにした。

レイ「陸に『左斬上』」

そこから、さつき見せた箇所と左右反対に打ち始めた。

レイ「漆に『左薙』、捌に『逆袈』」

レイ「最後に玖に『刺突』…以上です。」

白井「それでどうするんですの？」

白井さんが胡散臭そうにレイに聞いた。

レイ「剣術は全てこの九つに攻撃するように出来てあり、また防御もそれによって展開されます。」

…リュウ、動くなよ。」

リュウ「へ？」

スツ…ドオン！

レイが木刀を構えると一瞬でリュウの後ろにいた。

「…しかし、『飛天御剣流』の神速を生かしてその九つ全てに同時に斬りつける技…これが飛天御剣流『九頭龍閃』の正体です。」

…つまり要約すると、剣術の弱点全てを一瞬で攻撃する技らしい。

レイ「『九頭龍閃』は『龍巢閃』と同じ乱撃術ですが、一撃一撃がそれぞれ必殺となり、しかも突進術でもあるため回避も出来ない…

まさに『無敵の技』何ですよ。」

そう言ったレイは少し笑った。

御坂「なるほど…これが飛天御剣流の『奥義』か。」
御坂さんがポツリと呟いた。

レイ「さて、勝負にも結局が着きましたし。これからどうしましょう？」

そういえばレイの勝負に気を取られていて予定を考えてなかった。
…どこへ行くところ？

ピリリリリリ！

白井「ああ、すみません。私のですわ。ちょっと失礼。」

白井さんの携帯が鳴り電話に出る。話の口調から相手は初春さんかな？

リュウ「レイ…技使うんなら先に言えよな。めちゃくちゃビビったぞ」

レイ「すまん。」

「ミユ」……で、これからどうするっ？」

ミア「うーん。超能力についてはさっきお茶した時に聞いたし……」

リュウ「常盤台中学の校舎は？」

レイ「そういえばまだ見学していないな。」

ミア「見に行こう！」

「」「オー！」「」

と言うことで常盤台中学の校舎を見学することに決めた私達。でも……

白井「すみません皆様、私、今から風紀委員のお仕事がありました。案内が出来なくなっていました。」

御坂「じゃあ、さっきの電話は初春さん？」

白井さんが風紀委員のお仕事で案内が出来なくなっていました。

白井「ええ、至急会議を始めたいらしいので、来て欲しいと言われ

ましたの」

御坂「じゃあしょうがないわね。零牙君達は私に任せて行ってらっしゃい。黒子。」

その言葉を聞いた白井さんは…

白井「お姉様！お姉様はそこまで黒子のことを……感激ですわ〜！」

御坂「さっさつと行ってきなさい（怒）」

ビリビリビリ！

御坂さんが白井さんの顔を掴んで電撃を食らわせる…なんで白井さんは平気な顔しているの！？

白井「そ、それでは行ってきますの。」

そして白井さんは姿が見えなくなった。

御坂「さて、黒子もいなくなったことだし。次はどこへ行く？」

それならもう決めてある『常盤台中学の校舎の見学』…実は少し楽しみにしている。

ミュ「『常盤台中学の校舎』に…」「風紀委員の支部へ行きましょー！」「……」

リュウとレイがミュちゃん言葉を遮って言った。

ミア「ち、ちょっとレイ！さっき常盤台中学の校舎を見学するって決めたじゃん！ー！」

校舎の見学を楽しみにしている私は猛抗議した。

リュウ「いやーミアちゃん、常盤台中学の校舎の見学はいつでも出来るけど風紀委員の支部なんてなかなか見れないぜ？」

レイ「ミアすまん。オレも風紀委員の支部の見学がしたい。」

ミア「むっ！ー！！風紀委員の支部の見学もいつでも出来るじゃん！ー！」

レイ「うーん。そうだな。まあ、どっちも見学したいから…どっちを先に見学するかだな」

ミア「はい！常盤台中学の見学に一票！」

リュウ「風紀委員の支部の見学に一票！」

私とリュウは真っ先に手を挙げた。でも大丈夫。こっちはミュウちゃんがいるはず……

ミュウ「リュウが行くなら……」

まさかの裏切り。でもレイなら！

レイ「ま、オレは風紀委員の支部の方だから……三対一でオレ達の勝ちだな。」

レイも裏切りうなだれる私。そんな姿を見てレイは……

レイ「まあミア、落ち込むなって。見学が終わったら必ず常盤台中学の見学に行くから。」

ミア「……レイがそういうなら我慢する。」

しびしび我慢することにもまあ常盤台中学の見学は出来るからそこで我慢するわけでもないが。

御坂「じゃあ案内するね。この私に付いてきなさい！」

御坂さんの案内で私達は歩き始めた

.....

御坂「なんかお腹空いちゃったな」

風紀委員の支部に行く途中、御坂さんがそんなことを言った。

まあ、小腹が空いていることは確かだけど…

レイ「じゃあ、ファミレスとかで何か食べに行きますか？」

レイの案にみんなが賛成し、ファミレスに立ち寄ることになった。

.....

ミア「私は『ショートケーキ』が良いな。」

ミュ「……私もそれが良いな。」

リュウ「オレは『チョコケーキ』で

ファミレスで何かを食べることになり、雅ちゃんと美幸ちゃんがショートケーキを、龍之介君がチョコケーキを頼むことに

龍之介君は『チョコケーキ』を頼んだ。これだと零牙君も『チョコケーキ』かな？

レイ「じゃあオレは『ジャンボびつくりパフェ』と『三色アイス』と『ショートケーキ』と『チョコケーキ』とそれから・・・」

ミア「ち、ちょっとレイ！食べ過ぎじゃないかな!？」

雅ちゃんが慌てて止めに入る。確かに食べ過ぎだ

レイ「『クリーム白玉アンミツ』と『フルーツパフェ』をお願いします」

雅ちゃんの注意を無視してさらに頼んだ零牙君。・・・食べきれないだろうか？

リュウ「レイ・・・いくらなんでも食べ過ぎじゃね?」

ミア「そうだよ!いくらなんでも食べ過ぎだよ!」

レイ「いやーつついっ頼んじゃうんだよね。本当はもっと頼みたかったんだけど・・・」

つついつて…

御坂「た、食べられる分だけ頼んでね？」

念のため注意した。私だって持っているお金には限度があるのだ。

レイ「へえ…じゃあ食べられる分は頼んで良いんですね？」

零牙君が不気味な笑みを浮かべている。ヤバい。本当にヤバい。お金っていくらあったっけ…？

レイ「まあ、今日は見学もありますし、もう頼みませんよ」

逆に言えば『見学がなかったら頼んだ』ということだ。まさか、本当に頼む気だったの…？

そうしている内に頼んだものがテーブルにきた。…零牙君の周りだけものすごく華やかである

レイ「いただきます」

零牙君がスプーンをとり、三色アイスに手を着けた。…ものすごく幸せそうだった。

ミア「プッ」

その姿を見ていると雅ちゃんが笑い始めた。何がおかしかったんだろっ？

ミア「に、似合わない…」

雅ちゃんの笑いの理由は《似合わない》らしい

一体何が似合わないのだろう？

リュウ・ミュ

「プッ」

そしたら龍之介君と美雪ちゃんまで笑い始めた。

訳のわからない私は零牙君を見てみることに

御坂「…プッ」

なるほど、確かに《似合わない》。私もついつい笑ってしまった。

レイ「…みんな何笑っているんだよ？」

零牙君がみんなが笑っている理由がわかってない様子。

ミア「だ、だってレイの顔でパフェ食べているのって…プツ」

レイ「…なるほど、昔神裂がクレープ食べているオレを見て笑う訳がわかったよ」

零牙君が小声でそんなことを言った。

その後、零牙君はパフェやアイスを全て食べきり私の財布を薄くした。

.....

レイ「いやあ、食べた。食べた。」

ミア「本当によく食べてたよね。」

リュウ「見事な食べっぷりだったな」

レイ「《甘いものは別腹》ってよく言うだろ？」

零牙君は満足そうな顔で言った。一方、意外に出費がかさんだ私は…

御坂「あと、野口が三人だけ…」

ミュ「大丈夫ですか？」

一応大丈夫だが、やはり一葉が去る時、ものすごく悲しい気分になった。

ビキバキ……バキン！

その時、ファミレスの看板がミアちゃんめがけて落下してきた。

レイ「ミア！リュウ！」

咄嗟に零牙君の神速で私達のところまで移動した零牙君達。

しかしファミレスの看板はこちらに向かって倒れてくる！

レイ「っ！」

零牙君が慌てて刀をとりだすが…

ドオン！

すでに『超電磁砲』で解決済み。看板は衝撃で粉々になった。

その様子を見た零牙君達はホツとした様子。

- - しかし、なんでいきなり前触れもなく、ファミレスの看板が落ちて来たんだろう…？

続く

甘いものもほよほよ!! (後書き)

零牙

「いやあ、食べた食べた。」

夢幻

「零牙よ。いくらなんでも食べ過ぎだぞ?。」

零牙

「疲れた時には甘いものが食べたくなるんだよね。」

御坂

「一応、私の財布の具合も考えてね...?。」

零牙

「御坂さん、お嬢様なんだからどこぞの”無敵の右手を持つ貧乏高校生”のようなこと言わないでください。」

夢幻

「だからといってまあ...。まあ、終わったんだからしょうがないか。」

そろそろ次回予告するか」

御坂

「ちょっと！私にも文句の二つや二つ言わせて。」

零牙

「次回 本格推理委員会

『狙われた来訪者』」

夢幻

「お楽しみに」

御坂

「ちょっとー！」

狙われた来訪者（前書き）

最近寒くなって布団から出られなくなりました
夢幻

狙われた来訪者

白井「それでは、なんの前触れもなく看板が落ちてきたと言っんですの?」

ファミレスの看板が落ちてきてから数分後、白井さんと初春さんがオレ達のところにやってきた。

初春「白井さん、これで五件目ですね…」

白井「そうですね。一体誰がやったのでしょうか?」

初春さんと白井さんが犯人について模索している間、オレとミアは落ちてきた看板を観察していた。

オレ「うーん…。」

ミア「レイ、こここのボルト、何か変だよ。」

オレ「ん…そうだな。この切れ方だと何か刃物で切った感じだな。」

ミア「この太いボルトを切ることで不可能だよな？」

オレ「ああ、普通にやったらな。でも」

ミア「超能力なら話は別…かな？」

オレ「そ。あとはどんな能力か、なんだよな。」

ミア「うーん…。どんな能力だと思う？」

オレ「空気使い（エアロハンド）、空間転送^{テレポーター}」

…わからないな。やっぱり白井さん達に任せた方が良いな」

ミア「流石のレイでも超能力はお手上げか」

オレ「ああ、『餅は餅屋』って言うしな。」

超能力に関してはわからないことだらけなのでこの事件は白井さん達『風紀委員』に任せる方向で行くことにした。

リュウ「何かわかったか？」

オレ「いや超能力で起こった現象以外、何もわからなかったよ。」

ミユ「……これからどうする?」

ミア「予定通り、常盤台中学の見学で良いんじゃないかな?」

オレ「ああ、初春さんに聞いたところ無差別に攻撃しているようだし……。」

少し遠いところにいたりユウ達と話し、予定通り、常盤台中学の見学に行くことに……

そうすると御坂さんや白井さんがこっちにやってくるのが見えた。

御坂「みんななにやら話していたようだけど……これからどうする?」

ミア「予定通り、常盤台中学の見学に行きたいんですけど……。」

ミアがこれからの行動を言った。

白井「《学び舎の園》内なら安全でしょう。私達も念を要して、零牙さんを護衛いたしますわ。」

白井さんが護衛してくれば大丈夫だろう。
そう思ったオレ達は《学び舎の園》に行った。

「????」チツ…やはりあれぐらいじゃ意味がない。もっと酷い目に
遭ってもらわないと…」

………

ミア「やっぱり怖い…」

《学び舎の園》に入った途端、ミアがオレの後ろにしがみついていた。

オレ「ミア…。三度なんだから少しぐらい耐性が…」

ミア「(ブルブル)」

オレ「…付いてないな…」

ミアの人見知りは相当な物なんだと改めて認識したオレだった。

リュウ「しかし…どんな能力で狙っているんでしょう?…」

白井「それについては、《該当する能力》が多すぎて絞り込めませんわ…」

御坂「正確に言つと《該当する能力を使う人》が多すぎるんじゃない？」

白井「ええ、せめてもう少し、使用できる能力を絞り込めさせれば…」

ミュ「風紀委員も大変なんですね。」

白井「全くですの。せっかくお姉様とのデートの最中に仕事が入るのが、一番腹立たしいですわ」

この言葉に共感したしたのか、ミュちゃんが頷いて

ミュ「…私もリュウとデートしている最中に、用事が入ると悲しくなる」

リュウ「むしろそれは喜ばしいことじゃないか？

というかまだオレ達はデートにすら行ってないだろ！」

ミュ「…大丈夫。これからいろんな所にデートに行けば自然とわかってくる」

リュウ「オレはお前と付き合う気なんて毛頭ないからな？」

ミュ「ちょっとひどい…」

御坂「リュウ君！女の子を泣かせちゃダメだよ！」

白井「女の子を泣かせる男は男じゃないですわね」

白井と御坂がジト目でリュウを見る。さすがにリュウもこれには堪えたようである…

リュウ「ふ、ふん。ミュとだったらオレは、レイと争いになってもミアちゃんを取りにいくな！」

オレ「…なんだと？よく聞こえなかったからもう一度言ったみる…。

」

ミアに手をだす輩がいるならば（たとえ親友でも）このオレが血祭りに上げてやる…

ミュ「リュウ、ミアちゃんはレイのものだからダメ…」

リュウ「はん。それでもお前よりはマシ…」

ガシッ！

ミュ「これ以上言ったら許さない…。」

リュウ「ぐお！ミュ！アイアンクローは止める！」

…いいぞミュちゃん。そのままそいつの頭をかち割ってしまえ…

御坂「ふ〜ん。リュウ君はミュちゃんと、レイ君はミアちゃんとすでに出来ている訳かー」

白井「仲睦まじいカップルですこと。」

ミュ「…まだまだ、白井さんとミアちゃんには及ばないです…。」

ミア「ミ、ミュちゃん…恥ずかしいよ…。」

白井「私とお姉様ほど、お互いを求め合う究極のパートナーはいないと思いますわ。」

ミアが恥ずかしがり、白井さんは誇らしげにそう言った。

その時”見えない犯人”は前を歩いている六人に攻撃した…

リュウ「ゲアツ!!?」

突然、リュウが声を上げたと思ったらリュウの腕に深い切り傷ができていた。一体どこから攻撃してきたんだ?

ミュ「リュウ!!?」

ミュちゃんが慌ててリュウにかけていたアイアンクローを外し、駆け寄った…

その時、二人の後ろの石畳の一部に切れ目がついた。
ガキン!

オレは二人の後ろに立ち、持っている刀の鞘で見えない攻撃を受け止めた

オレ「白井さん!リュウとミュちゃんを病院に転送してください!」

白井「わ、わかりましたわ!」

オレ「オレ達は逃げるぞ!目的地まで走っていこう!」

ミア「わ、わかった!」

御坂さんだけが状況を理解出来ずに立っている。

御坂「えっ？へっ？」

オレ「御坂さん、走ってください！」

御坂「なんだか良くわかんないけど…。わかったわ！」

オレとミア、御坂さんは常盤台中学に走って行った。

そして常盤台中学に着き、御坂さんが一室の小部屋を借りて私達は休憩していた。

白井さんとミユちゃんもここにいる

白井「迂闊でしたわ…。まさか《学び舎の園》で攻撃を仕掛けるだなんて思いも寄りませんでしたわ。」

御坂「別に黒子のせいじゃないわ。私だって油断してたし。」

御坂さんが白井さんに優しく声をかける…

ミユちゃんはリュウのことが心配らしい。そわそわして落ち着きがない。

レイ「大丈夫だよ」

そんなミュちゃんにレイが優しく声をかける…。

レイ「あいつは大丈夫だ。オレが保証する。」

ミュ「うん…。」

レイ「それにどんな能力を使ってリュウに傷を負わせたかわかったしな」

レイが確信のこもった声で力強く言った。

白井「それはどんな能力なんですか？」

レイ「おそらく、《真空を作る》…そういう能力でしょう。」

白井「《真空を作る》…？わかりましたわ。すぐに初春に調べてもらいますわ。」

オレ「よろしくお願いします。」

ミア「真空を作ってそれをどうしたの？」

オレ「正確には《真空波》だ。真空を鋭い刃状にして、それを打ち出したんだ。」

御坂「それが龍之介君を傷つけた《見えない攻撃》の正体？」

オレ「ええ、普通の人間じゃまず出来ませんが。」

白井「…ええ、わかりましたわ。ありがとうございます。初春。」

ピッ

白井「ビンゴですの、能力名は『バキュームプロダクト真空製造』」

そして真空を真空波にして攻撃するレベルとなると少なくとも大能力（レベル4）クラスはあります。

大能力の『真空製造』の能力を持っているのは一人。神無月高校三年、『闇城 藤次』ですわ。」

御坂「よし！じゃあそいつをとっつかまえて…」

白井「しかし、闇城は”男”なんですよ。お姉様」

御坂「えっ？じゃあ…」

オレ「何らかの方法で《学び舎の園》に侵入した。…ということですね？」

白井「ええ、それがわからないと闇城を捕まえられません。」

御坂「そんな…。どうにかならないの？」

オレ「その点は大丈夫です。《学び舎の園》への不法侵入で捕らえれば良い。」

ミア「でも、白井さん達の管轄内なの？《学び舎の園》って。

確か《風紀委員》は管轄が決まっているんじゃない？」

白井「今、初春が”上”からの許可を取っていますわ。」

オレ「白井さん…。理由がなくても捕まえる気でしたね？」

白井「零牙さん……。学園都市での事件は必ず我々、風紀委員が解決するんですよ?」

オレ「フツ…そうでしたね」

御坂「じゃあ、早速闇城をとっつかまえにいくわよ!」

続く

狙われた来訪者（後書き）

夢幻「祝　ユニーク1000人突破！」

零牙「まだ1000人じゃねえかよ！」

雅「それで『祝！』って速すぎない？」

夢幻「だって……。こんな作品をたくさんの方々に読んでもらって嬉しいんだよ！オレはさあ！」

零牙「まあ、喜ばしいことだからな。良かったな作者、だから……」

夢幻「だから？」

零牙「後々来るであろう（テストの成績による）地獄に負けんなよ？」

夢幻「な、ななな何の事かな零牙君！オレは君が何を言っているか皆目見当も……」

零牙「さて、次回予告お願いしますーす」

御坂「次回 本格推理委員会 『犯人を追跡せよ!』」

ミア「お楽しみに〜」

夢幻「大丈夫、大丈夫、きっと大丈夫…（ブルブル）」

犯人を追跡せよ！（前書き）

テスト終わった〜（いろいろな意味で…）

さて、これから少しだけ更新を早く出来るようにします！

それでは本編へGO！

犯人を追跡せよ！

「……あいつら……まだ、あんなところでウロウロしてやがる……。」

路地裏で一人、目を見据えている男は『闇城藤次』

今、彼の目には二人の少女達が写っていた。

そう、お昼に青い髪の少年を攻撃したときに一緒にいた少女達だ。

闇城「痛い目に遭ってもらった……。」

闇城はその身にある能力、『真空製造』で真空波を作り、少女達めがけて放った……

「……何をやっているのかな？闇城藤次。」

その時、突如後ろから声をかけられた。

振り向くとそこには一人の白い髪の少年が立っていた。そう、お昼にあの少女達と一緒にいて、真空波を止めたあの少年だ

レイ「木ノ花学園六年の速水零牙だ。『本格推理委員会』としてここにきた……あなたが今、何をやるうとしていたのか話してもらえ

さあ、楽しい鬼ごっこの始まりです。

.....

闇城はオレの数メートル先を走っている。

追いつくことも可能だが、所定の場所に追いつく作戦なので、見失わないように走る。

闇城「どけ!」

闇城が前を歩いていた常盤台中学を突き飛ばして前に走った。

突き飛ばされた少女達は文句を言うが闇城は必死に逃げ続ける。

オレ「どいてください!」

オレは少女達の肩スレスレを走り抜けた。

闇城「ちっ!」

闇城は追いついてきたオレに真空波を放つ。

ガキン！

オレ「オレにはあんたの能力は通用しない。」

冷静に鞘で受け止める。下手によければ周りの人に当たる可能性がある
あるので全弾受け止める。

…それから五分走りつづけた。

闇城の走る速度が遅くなってきた。そろそろこの鬼ごっこも終わり
だな。

闇城が公園の中に入って行った…

その中に最強クラスの能力者がいるとも知らず…

ゆっくり中に入ると闇城は御坂さんの存在にたじろいでいるようだ
った。

闇城「なっ…。」

フォン

そこに白井さん、オレが現れて、もはや絶対絶命…逃げることはできない

闇城「くっ…」

白井「風紀委員ですの

《学び舎の園》に無断侵入した疑いで拘束いたします。抵抗は無駄ですわよ?」

闇城「くっ…。おおおっ!」

闇城が全方位に真空波を放った。しかし…

オレ「飛天御剣流 『飛龍閃』!」

『飛龍閃』で肝臓を突きK・O。

うづくまる闇城を見て白井さんが手錠をかけ、

白井「初春、犯人を拘束いたしましたの。警備員アンチスキルに連絡してください

いな。」

事件は解決した。

.....

オレ「さて、闇城藤次、あんたはどうやって《学び舎の園》に入っ
たか、白状してもらおうぜ？」

オレは今回の事件の確信”どうやってこの《学び舎の園》に入った
かを聞くことに。

闇城「オレが白状すると思うか？」

闇城は白状する気がないらしい。ならば…

オレ「白状しないんなら片方、目が見えなくなるな。」

オレは逆刃刀の刃の部分で闇城の目の寸前で止めて威嚇した。御坂
さんと白井さんがじっと見つめている。

闇城「…わかった…白状しよう…」

闇城が声を震わして言った。ちよろいな。

白井「では…どうやってあなたは《学び舎の園》に入ったのかしら？」

闇城「オレは男と一緒にいただけだ。嘘じゃない。」

白井さんの質問に淡々と答え始めた闇城。次はオレである

オレ「その男はどういった方法で中に入ったんだ？」

闇城「わからない。ただ…」

御坂「ただ、なによ？」

闇城「そいつは門番の前でなにやら呟いていた。《神の威光は人を惑わさせる》とかなんとか…」

御坂「なにそれ？嘘つくんだったら、もっとマシな嘘つきなさい。」

闇城「本当だ。信じてくれ。」

御坂さんが疑わしい目で闇城を見ている…

オレ「闇城…。その男の特徴は？」

闇城「全身黒いコートで顔は見えなかった…。ても…」

オレ「でも？」

闇城「そいつは確か自分のことを『天地逆転』とか言っていた。」

驚きが隠せなかった。まさか『天地逆転』が学園都市まで根を伸ばしているとは…

その時、《警備員》が来て闇城を連れていった…

《天地逆転》は何をしようとしている…？

続く

犯人を追跡せよ！（後書き）

夢幻「いや〜やっと事件が終わったー。」

零牙「そうだな…。」

御坂「どうしたの零牙君？元気ないけど…。」

零牙「いや…、なんか最近疲れてきてね…。」

夢幻「あー。飛天御剣流の使い過ぎか〜。ちゃんとマッサージ店と
か行つてコリ直せよー。」

零牙「ハイハイー」

御坂「じゃあ、そろそろ次回予告に行くわね。

次回 本格推理委員会 『不可解な暗号』

夢幻「お楽しみに」

不可解な暗号（前書き）

今回からまた新しい事件です！

不可解な暗号

・ ・ 必ず帰ってくる。だから、待っていてくれ。

そういつて彼は暗い 闇 の中に消えてしまった。

私は、ただ見送ることしかできなかった。

それが別れへの序章だったのに ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

佐天「初春〜！遊びに来ったよ〜！」

ここは風紀委員177支部が入っている建物。

ここに配属されている風紀委員の一人、初春飾利の親友、佐天涙子は爽やかな笑顔で177支部の扉を開けた。

すると、目の前には一枚のメモ用紙に向かってなにやら真剣に目を

凝らしている親友と、友達である白井黒子の姿が…

「うん…」

佐天「なぐにしているのかな？初春。」

初春「あつ！佐天さん！遊びに来たんですか？」

白井「佐天さん…。風紀委員の支部は待ち合わせ場所ではありませんわよ？」

佐天「ごめんごめん。で、何やってるの？」

初春「ああ、今朝、風紀委員に対してこんなメールが届いたんです。」

「
そう言うと初春は自分の机にあるパソコンを操作して、今朝送られたというメールを画面に出した。」

『無能な風紀委員諸君に告ぐ。我々は明日午後三時、とある場所に爆弾を爆発させる。』

もし、学園都市を守る能力があると言うならこのメールに添付されている暗号を解いて、爆発を止めてみせる。

爆弾が爆発した場合、学園都市は崩壊することになるだろう。』

初春「…で、これがその暗号なんです。」

また別の画面が出てきた。

そこには『原罪の下』
と書いてあった。

佐天「うーん…。オカルトっぽいなあ。」

初春「でしょう？でも、どんなに調べても意味が分からないんですよ」

白井「ま、所詮オカルトなんて眉唾ものでしょうけど。」

と、根底からオカルトを否定する白井さん…。オカルトは絶対あるの…

初春「白井さん、零牙さんに相談しませんか？零牙さんなら何かわかるかも…」

白井「初春…あなたには風紀委員としての誇り（プライド）はありませんの？

一般人…ましてや『外』から来たお客様である零牙さん達を本来事に巻き込まないことが我々《風紀委員》の成すべきことですの…」

佐天「でも、分からないんなら相談するだけ良いじゃない。学園都市を守るためなら零牙君も協力してくれるでしょうし」

白井「しかし…」

佐天「そうと決まったら相談しに行きましょう！」

初春「お…!!」

強引に白井さんの意見を無視して零牙君達のところに行くことに。白井さんはため息をついてからしぶしぶついてきた。

- - - - -

オレ「…よし。学園都市のプレゼンテーションはこんなんで良いん

じゃないか？」

ここはオレ達が学園都市に滞在している間、泊まることになっているホテルの一室。

オレ達は学園都市の調査した結果を簡単にまとめ、それを木ノ花学園で発表する予定なのだ。

リュウ「意外に早く終わったな。」

ミュ「あと四日、どうやって過ごす？」

ミア「みんなで遊園地に行かない？」

遊園地に行くことを希望したミア。

昨日は結局、常盤台中学の見学ができなかったし、今日はミアの意見を汲むことにしよう。

リュウ「良いんじゃないか？なあ、レイ」

レイ「ああ、じゃあ今日は遊園地に行きますか！」

「「「おー!」「」

「ミュウ……リュウと初デート。楽しみ」

「ミュウちゃんのその一言でリュウが慌てて……」

「リュウ「レイ!御坂さん達も呼んで良いよな!?!」」

「ミア「ダメだよ。御坂さん達も忙しいだろうし。」」

「オレ「そうだとリュウ、オレはミアと一緒に周るからお前はミュウちゃんと一緒に行ってこい。」」

「リュウ「くそ……。オレの味方はないのか!?!」」

「無駄だリュウ。諦める……」

「ピリリリリリ!」

「その時、誰かの携帯が鳴った。確かめてみるとオレの携帯だった。えーっと相手は……白井さん?」

「オレ「すまん。電話にでるぞ。」」

ピッ。

オレ「もしもし？速水です。」

白井「もしもし？白井黒子ですの。零牙さんに至急、相談したいことがございまして… 昨日、お姉様と一緒に来店したファミレスに来てくださいな。」

零牙「今日じゃないとまずいですか？」

さすがにミアとデートに行きたい気持ちがあるし。断るつもりでいた。

白井「いや…今日でなくともまた別の日で…。」

佐天「いや！今日じゃないとダメ！学園都市の危機なの！お願い。協力して！」

白井「ちょ…ちょっと！佐天さん!?!」

初春「私からもお願いします！とにかく、ファミレスで待っていますから〜！」

ブツ…ツーツーツー

いきなり切れた…。でも、佐天さんが言っていた《学園都市の危機》って一体…？

リュウ「誰から？」

オレ「白井さんからだが…。初春さんと佐天さんの声も聞こえた。」

ミア「何のようだったの？」

オレ「さあ…？なんか《学園都市の危機》だとか言っていたなあ。」

ミュ「…行った方が良くないんじゃない？」

オレ「うん…。」

遊園地に行くのも楽しみだし…どうしよう？

ミア「行くろう！白井さん達のところだ！」

オレが悩んでいると、ミアがそう言った。

リュウ「ミアちゃん…遊園地は良いのか？」

オレ「そつだぞミア、別に無視しても…」

ミア「遊園地は明日行く！だから、今日中に事件を解決する！」

ミアはそう宣言した。まるで、何かに誓っているようだった。

ミュ「じゃあ、私達も行く…。」

リュウ「そつだな。オレ達だけ楽しむのはなんか気が引けるしな…」

リュウ達もオレ達と一緒に来ようとするが…。

ミア「ミュちゃん達は遊園地に行って、どんなアトラクションがあるか偵察してきて！」

なんか、リュウ達をどつやっても遊園地に行かせようとしていた。

ミュウ「…でも、」

ミア「いいの！ミュウちゃんは先にリュウ君とデートしてきて！私とレイは『本格推理委員会』の名にかけて必ず事件を解決してくれるから！」

なぜだろう。いつものミアはここまで強く言わない。…何があったんだろう？

ミア「さっ！行くこうレイ！」

ミアがオレの手をグイグイと引っ張って行くこうとする。

オレ「あ、ああ。リュウ！そういう訳だからミュちゃんとデートに行つてこい！」

リュウ「遊園地なんかにはオレは行かぬぞ！」

ミュウ「…どんな手を使つても行く…！」

…リュウの悲鳴が聞こえた気がするが気のせいだろう。

- - -
で、待ち合わせ場所のファミレス。

今、オレの前には『ゴールデンデリシャスミラクルパフェ（税込み
5250円）×3

ミアの前には『デラックスアイス（税込み1200円）』が置かれ
ていた。

おかしい…おかしすぎる。まるでなにかの接待だ

初春「えー…本日は御日柄もよく…」

オレ「あの一…オレ達は何の用で呼ばれたのでしょうか？」

佐天「あ、あれ？あとの二人はど、どうしたの？」

ミア「リュウ君とミュちゃんは遊園地でデートです。」

.....

オレ「白井さん、一体何の用で…」

白井「こんなこと、本来あなた方に頼むべきではないのですけれど…

事件解決のために協力してくださいませか？」

白井さんが真剣に尋ねてきた。どうやら部外者のオレ達に協力してもらうのが不安だったらしい。

オレ「協力してくださいませか？って…そりゃあもちろん…」

ミア「協力しますよ！」

どんな事件も解決するのが私達『本格推理委員会』ですから！」

ミアが高らかに宣言する。その意志はどこから来るのだろうか？

白井「ご協力感謝いたしますわ。それで相談したい用件とは…」

ミア「用件とは？」

白井「…このメモ用紙に書かれている暗号を解いて欲しいんですの」

そう言うと白井さんはポケットからメモ用紙くらいの大きさの紙を取り出した。その紙には『原罪の下』と書かれていた。

ミア「『原罪の下』…？」

初春「お二人はそれを見て、どんなものを思い浮かべますか？」

佐天「やっぱりオカルトだと思うよね!？」

佐天さんが目をキラキラしながら言った。どこの街にもこういう人いるんだな。

ミア「『原罪の下』…『原罪』だけなら聞いたことがあるなあ…。
どこだっけ？」

オレ「…この暗号に書かれてある『原罪』は恐らく《知恵の実》…
《リンゴ》を意味します。」

ミアが思い出せないようなので、オレが答えを言った。白井さん達はポカンとしている。

オレ「初春さん、学園都市で《リンゴ》に関係ある場所はどれくらいありますか？」

初春「あ、ち、ちょっと待ってください!」

初春さんは持っていたゲーム機(?)のようなもので調べ始めた。

初春「検索終了しました。該当する場所は数百カ所あります。…とても調べ切れません。」

白井「雅さん、零牙さん。もっと場所を特定するようなものはありませんの?」

オレ「じゃあ…『蛇』をお願いします。」

初春「該当箇所はまだ数十件あります…。」

オレ「くそ…。『エデンの園』であと関係ある言葉って一体…?」

オレが悩んでいるとミアが何か閃いたような顔をした

ミア「初春さん。該当箇所のなかに『今は使われてない場所』ってありますか?」

初春「えっ?わ、わかりました。ちょっと待ってください…。」

オレはミアの質問に疑問を持って聞いてみた。

オレ「ミア、なんで『使われていない場所』なんだ?普通逆じゃないか?」

ミア「レイ……どうしたの?『エデンの園』は最終的に『失楽園』になっただよ?だから…。」

オレ「なるほどね。気付かなかったよ。」

初春「該当箇所一件。場所を特定しました！第19学区の公園ですね。」

白井「では、早速そこに行きますわよ」

白井さんは現場に急行したが…

佐天「ふ、二人とも私にもわかるように教えてくれない？全然話に着いてけないんだけど…」

佐天がSOSを出してきた

オレ「じゃあ、今オレ達が解いた暗号をを簡単に説明しますよ。

昔、神様はこの地球に『アダム』と『イブ』と言う二人の人間を作り出したんです。」

オレ「神様は二人に『エデンの園』と言うところに住ませたんですけど、一つだけ禁忌を作ったんです。

それは『知恵の実であるリンゴを食べてはいけない』

と言う禁忌です。」

佐天「はい！なんで食べてはいけないんですか」

オレ「…それを言うと話がずれるんで話さずに置きますよ？」

リンゴを食べたアダムとイブは『エデンの園』を追い出されます。

そして『エデンの園』は『失樂園』になってしまった。

…っていうのがこの暗号に書かれていることなんですよね」

初春「この暗号にはそんなこと全然書いてないんですけど…」

ミア「暗号に書かれている『原罪』はアダムとイブがリンゴを食べたことで生まれた人類全員の罪なんです。」

佐天「なるほどね」

初春「佐天さん、理解出来たんですか？」

佐天「全く！」

それを聞いて苦笑いするオレ達。

しかし解せない。なんで宗教的な情報がまるでないこの『学園都市』で

こんな暗号が送られてくるんだ？

続く

不可解な暗号（後書き）

夢幻「新しい事件だぜい〜。」

零牙「今回は宗教がらみの暗号だったな。」

御坂「ねえ、私の出番は後であるのよね？」

夢幻「それは読んでのお楽しみさっ！（キラッ！）」

御坂「お・し・え・な・さいっ！（ビリビリ！）」

夢幻「上条バリアー！！！」

上条「うおおっっっ！さ、作者！なにしゃがるんだ！死ぬかと思っ
たじゃねえか！」

夢幻「うるさい！オレにはお前のような能力は無いんだよっ！っつて、
うわっ！み、御坂さん…、ビリビリはやめてーっ！」

御坂「お・し・え・な・さいっ！」

上条「くっ…、作者！今のうちに次回予告を！」

夢幻「わ、わかった！零牙頼むっ！」

零牙「はあ、はいはい。わかりましたよ。

次回 本格推理委員会

『怖い夢』

雅「お楽しみに」

御坂「ちよっとーっ！（ビリビリー！ー！）」

夢幻「ぎゃあーっ！！（ブスブス…）」

怖い夢（前書き）

皆様、更新お待たせしました！

では本格推理委員会 『怖い夢』 お楽しみください！

怖い夢

白井「ここですわね」

テレポルト
空間移動を使い、いち早く現場に着いた白井は周囲を探索し始めた。

白井（確か《リンゴ》がどうか…言っていましたわね）

リンゴ、リンゴと今は使われていない寂れた公園でリンゴを探したら案の定すぐに見つかった。

食べかけのリンゴの彫刻がドカンと公園の真ん中に置いてある。

そのリンゴの下を探索したらビニール袋があった。その中を探ってみると中には一枚の紙が…しかも『666“F859“KG』と訳のわからない暗号まであった。

白井（今度は数字…何かしらの法則に従っているのかしら…？）

あくまで科学的に暗号を解こうと模索する白井黒子。しかし既存する法則の中に暗号を解読できるものはなかった。

白井「やはりオカルトの類ですわね…。はあ、オカルト非科学なんて物のどこに価値があるのやら…」

と一人ため息をつく白井だった。

.....

初春「白井さん。何かありましたか？」

オレ達が公園にたどり着いた時には、公園はすでに「keep out」と書かれたテープで包囲されていた。

白井「ええ。今度はこの『666』『F859』『KG』と書いてありましたの」

初春「今度は数字……。何かの法則ですかね？」

白井「いえ……。私の知っている法則に当てはまるものではないようですの」

ミア「うーん……。わかる？レイ？」オレ「ちょっとまで……。今、暗号を解いてる……」

白井さん達が信じられない顔でオレを見ている……

この暗号は答えが無数にあるからたちが悪い。

必死に頭の中で暗号の答えを模索すること数分。

ミア「レイ…?」

初春「零牙さん?」

佐天「零牙くん?」

白井「零牙さん?」

オレ「……」

長い思考の末、導き出した答えは……

オレ「…わかりました。次の暗号の答えは《第23学区にある駅》です。」

初春「《第23学区にある駅》?」

オレ「ええ。早く行きましょう。」

白井「お待ちになって。一体どんな解読法を使ったのかしら?」

白井さんがたまらず聞いてきた。

オレ「あの暗号の最初に書いてあった数字…《666》は、カバラに伝わる『ゲマトリア』を使い、と言う意味だったんです。」

佐天「『ゲロマリア』?」

オレ「『ゲマトリア』です。それには特定のアルファベットに数字が当てられているんです。」

まず、真ん中の『F』はアルファベットで7番目の文字です。これはおそらく、“七文字の英単語を作れ”という意味。

そして、残る『859』をゲマトリアに当てはめ、七文字の英単語になるようにすると、対応するアルファベットはそれぞれ

『S』+『t』+『a』+『t』+『i』+『o』+『n』となり、
一つにすると『Station』…つまり《駅》を意味します。

佐天「もしかして、最後の文字も?」

オレ「はい。《KG》はゲマトリアに当てはめると《23》に成ります。つまり、

白井「《第23学区にある駅》になると言っ訳ですね?」

オレ「そついつことです。」

オレはフフンと鼻を鳴らして言った。

初春「でも、第23学区にある駅は無数にあります。特定出来ますか？」

オレ「暗号で最初にあつた“666”は“獣の数字”と呼ばれています。」

動物の銅像とか置いてある駅とかありますかね？」

初春「うーん。そんなのありましたっけ白井さん。」

白井「確か…。『第23学区ターミナル駅』にあつたような記憶がありますの。」

ミア「じゃあ、早速…」

佐天「『第23学区ターミナル駅』に向かいますか！」

.....

そして、第23学区に行く途中のバス内にて…。

初春「ミアちゃん、気になる事があるんだけど…聞いて良いかな？」
唐突に初春さんがミアにこう言った。

ミア「な、何でしょう…？」

初春「うん…。いや、余計なのはわかっているんだけど…」

白井「初春、早く言いなさいな。」

初春「あ、はい。いや…ミアちゃんは零牙くんのどこが好きなのか
な…って…？」

ミア「えっ…。そ、それは…。(チラッ)」

オレ「ん？どうした？」

ミア「ううん。何でもない…」

ミアがオレを見て急に俯いた。しかも顔は真っ赤だ。

白井「初春、そういう質問はやボって言うものですわよ。」

例えどんな相手でも一度好きになってしまえば、後はどんな所でも好きになっていくものですわよ?」

オレ「…白井さん、言う時は言いますね。かつこいいです。」

白井「オホン。そうでしょうございましょう?」

オレ「…いや、経験者だからそう言えるのか?」

白井「零牙さん…。褒める時はキチンと褒めてくださいな…。」

後に言ったオレの一言で白井さんが完全に意気消沈している…とりあえず謝っておこう。

オレ「すみません。」

佐天「あ、着いたよ。『第23学区ターミナル駅』」

佐天さんが席近くのボタンを押した。

- - - - -

オレ「さて、暗号の場所に来たわけだが…」

ミア「こんなにあっさり見つかるなんてね。」

バスを降りて『第23学区ターミナル駅』のシンボルとなっている犬の銅像を目の前にしてオレ達は啞然となった。

そう。例の暗号が銅像の口の中に堂々と入っていたのを見つけ出したからである。

佐天「なんか、意気込んでいたのが空振った感じ……」

初春「で、でも、暗号を見つけ出したから、早速解きましようよ!」

という訳で暗号の入っている封筒を取り、中身を見る。そこには……

『666”E920・H88”G』と書かれていた。

白井「また『ゲマトリア』ですね」

オレ「またか……はあ、面倒だな。」

ミア「レイ!頑張つて!」

オレ「へいへい。ちょっと時間が掛かるかもしれないから、なんか

甘い物買ってきてくれない？あんパンとかでいいから」

ミア「わかった！佐天さん、この辺りにコンビニとかってありますか？」

佐天「うーん。確かあっちの方に有ったかな？案内するよ。」

ミア「はい。」

ミアと佐天さんがコンビニに行った。さて、オレは暗号を解くと思いますか。

.....

佐天「ねえ。ミアちゃん。」

佐天「なんですか？佐天さん」

コンビニであんパンとかジュースとか買って戻る途中、佐天がこんな事を聞いてきた。

佐天「いや、バスの中の続きだよ。実際、零牙君のどこが好きなの？」

ミア「ふえ！？」

やっぱり「う」質問は返答に困る…。

好きになった理由を話すのは恥ずかしいので、秘密にしてみらおう…

ミア「そ、それは秘密です！」

佐天「え、教えてくれたって良いじゃない。」

ミア「秘密は秘密なんです！…でも」

佐天「でも？」

ミア「レイは…。最近私を遠ざけているような…そんな気がするんです。」

そう、レイは私を遠ざけて何かをしている…。そんな気がする…あくまで《気がする》程度だが

佐天「ええー？それはないよ。」

ミア「そんな事はないですよ。しかもあんな夢まで見ちゃったからなあ…。」

佐天「あんな夢？」

ミア「はい。今朝、真つ暗な闇の中でレイが消えていく夢を見ちゃったんです…。」

なんか、二度とレイが帰って来ない感じがして止めようとしたんですけど、煙のように消えちゃって…。凄く怖かったです。」

あの夢は妙に鮮明^{リアル}だったから本当に怖かった。

ミア「それに妙な胸騒ぎがするんです。何もなければ良いんですけど…考え過ぎですかね？」

すると佐天さんはアツハツハッと笑って

佐天「ふーん。まあ、あんまり難しい事はわかんないけどさ。私が思うにミアちゃんがやるべき事は一つだと思う。」

ミア「???私がやるべき事?。」

佐天「そう。やるべきこと。それは、零牙君のそばにいたことなんじゃない?多分。」

ミア「それってどういう…。」初春「佐天さ〜ん。お菓子買ってきてくれましたか〜?。」

初春さんが両手を振って佐天さんに呼びかけた

佐天「心配しなくてもちゃんと買ってあるよ〜！」

そう言っつて初春さんに駆け寄っつていく佐天さん

レイのそばにすることが私のやるべき事何だろうか…？

続く

怖い夢（後書き）

夢幻 「次回 本格推理委員会 『遠い思い出』」

お楽しみに!」

零牙 「待て夢幻。まだオレ達が出てないぞ。」

夢幻 「たまには良いだろ?こんなあつさりとしたあとがきも」

雅 「よくないよ!このコーナーに出られないと、どんどん影が薄くなっていく人もいるんだよ!」

「「「そうだそうだ!」」」

夢幻 「あー、じゃ次回のあとがきでオレが影が薄いな、と思った人を呼ぶよ。それでは次回をお楽しみに!」

零牙 「ちよっ…まだ話は終わってな…」

遠い思い出(前書き)

零牙の過去がほんの少しだけ出ます。

本格的に零牙の過去をやるのは、まだ決まっていないのでそれまで待ってください

それでは本編へGO!

遠い思い出

白井「それで零牙さん。暗号は解読出来たんですの？」

白井さんが「飲むおしるこ」を飲みながら聞いてきた。

オレ「ああ、はいはい。次の暗号は多分、『操車場』でしょう。」

初春「どうやって解いたんですか？前と同じなら暗号にあった E と H は分かるんですけど。」

オレ「全く同じ方法ですよ。暗号の真ん中は『train-maintenance』となって・・・」

白井「『train』は《電車》、『maintain』は《整備する》という意味で『電車を整備する場所』＝『操車場』という訳ですわね。」

白井さんが残りを全て説明してしまった：

初春「確か、第17学区にある操車場にはシンボルとして動物の動物が置いてあります。」

初春さんがゲーム機(?)を操作しながら横目で白井さんを見る。

白井「ええ。では早速」

佐天「第17学区へ行きましょう！」

.....

電車やバスを乗り継いで数時間。隠された暗号を見つけ出したオレ達は近くのお店で暗号の入った封筒を開けた。

白井「さて、今度の暗号は」

佐天「どんなのだろうね！」

オレ「また『ゲマトリア』は嫌だな……」

初春「じゃあ、開けますよ〜それっ！」

さて、今度の暗号は……

ミア「『アザゼルの刑』かあ」

佐天「『アザゼル』って何かの偉人？」

白井「ま、オカルトの偉人なんて頭のイカれている人何でしょうけど」

白井さん、それは職業差別ですよ。少なくともオレや神裂、インデックスはまともな方ですし。

(多分)

初春「白井さん。零牙さんはイギリスで神父さんだったんですよ？今の発言は職業差別ですよ。」

初春さんが半分怒ったように、半分非難する感じで言った。フォロ―ありがとう。

白井「それはすみませんでしたわ零牙さん。」

オレ「いえいえ。オレ達の中にも《イカれている連中》はいますから、そう見られてしかたありませんし。」

《あの人》もそうだった。オレの人生を変えたあの人もイカれていた。と想いにふけていたらミアが

ミア「大丈夫？」

と言った。言った後で顔を逸らして俯いてしまったが……。一瞬、心を見透かされたと思った。危ない危ない

佐天「それで、暗号は解読出来た？」

オレ「あ、はいはい。今度の暗号は『第2学区』か『第22学区』のどっちかですね。はい」

オレが初めて二つの答えをだしたのが意外だったのか、全員の顔がキョトンとしていた。

しかし、すぐさま白井さんが真剣な顔になり

白井「今回は断定できませんの？」

オレ「ええ。『アザゼル』って言うのは旧約聖書に出てくる『墮天使』の一体で、人間に武器を与えたって言う伝説があります。」

佐天「ふむふむ。」

オレ「それで、アザゼルに与えられた武器によって人は争いを始めてしまったために、アザゼルは地下に落とされ、地獄の業火で焼かれ続けているんです。」

初春「つまり、『アザゼルの刑』って言うのは『生き埋め』の刑だ
という訳ですね。」

オレ「はい。しかし…」

白井「しかし…、なんですか？」

オレ「アザゼルは『人間に武器を与えた』ことで有名です。

もし、この暗号にその意味が入っているのなら、武器や爆発物を扱
っている『第2学区』に。入っていないなら地下に開発が進められ
ている『第22学区』になるんです。」

ミア「なるほど、だから答えが二択になっちゃったね。」

オレ「そういって。」

ミアの言葉を返すと白井さんが、一手に別れて行きましょう、と言
って割り振りを決めた。

しかしそこで…

ミア「白井さん！私はレイと一緒にいきたいです！」

とミアが言った。…本当に普段ならこう言わない。何かあったんだろっ…？」

白井「そうですね…じゃあ、初春は零牙さん達と一緒に行動してくださいな。私と佐天さんは第22学区に行きますので」

お気をつけて…と最後に言って、白井さん達は『空間移動』で虚空へと姿を消してしまった。その様子を呆然と見たオレ達は

初春「じゃあ、私達も向かいましょう。」

移動を開始した。

- - - - -

オレ「ここが『第2学区』か。」

ミア「外壁に囲まれてるね…」

第2学区についたオレ達は騒音を聞きつつ、高い外壁を見上げながら感想をもらした。

初春「第2学区は学園都市が開発した爆発物や兵器の試験場で、
アンチスキル警備員ジャッジメントや私達『風紀委員』の訓練場にもなっている学区なんです
よ。」

ミア「へえ〜。じゃあ、初春さんもここで訓練を受けたんですか？」

初春「うん。ここで研修をしたときは大変だったな。」

懐かしいのか初春さんが思い出にふけっている…

そつえば一つ気になっていることがあるんだよね…

オレ「ところで初春さん、オレ達は第2学区に入れるんですかね？
入れないんじゃ、元も子もないですよ？」

初春「大丈夫！事前に許可は取ってあるから！」

と、拳でグーを作りながら言った。風紀委員も大変だなあ。

そんな話をしていたら第2学区の門（関所？）まで来た。

門番「もとい受付で申請して、入場の許可をもらうのだが、ここで
問題が発生した。」

初春「え？入れない？」

門番「ええ。風紀委員の初春飾利の入場は許可出来ませんが、《ゲス

ト》のお二人は入場をお引き取り願いたいのです。」

ミア「なんでですか？」

門番「それは…」

オレ「『学園都市の外に出るオレ達に、学園都市の最新兵器の情報を漏らしたくないから』…でしょう？」

門番は目を丸くしていたが、すぐに正気に戻り

門番「全くもってその通りなのです。我々も情報漏洩には嚴重な注意を払っていますので、ご理解いただけるとありがたい。」

と門番は申し訳なさそうな顔をして奥に行ってしまった。

初春「どうする？二人はここで待ってる？」

オレ「ええ。ご心配には及びません。何も起こらないでしょうから。」

初春「わかった…。じゃあ、そこでじっとしててね！」

そして初春さんは第2学区の中に入って行った…。

~~~~~

オレ「…」

ミア「…」

初春さんが第2学区に入ってからオレ達はずっと無言状態になってしまった…。何故にこうなったんだろう…？

オレ「…」

ミア「…」

気まずい雰囲気が続く…ヤバい。空気が重過ぎるっ…！なんとかこの空気を変えないと…！

オレ「なあ、ミア。」

ミア「…何？」

オレ「あのさ…。リュウ達どうしているんだろうなって」

ミア「…多分、楽しくやっているんじゃない？」

オレ「そ、そうかな？」

.....

ちなみにその頃、うわさの二人は…

ミュ「…リュウ、今度はアレに乗る」

リュウ「なあミュ、だったら関節を極めるのは止めてくれないか？」

ミュ「…カップルはみんなこうしている。」

リュウ「違う！カップルだったら手を繋ぐとかだ！決して関節を極めたりはしない！！」

ミュ「…そう、じゃあ手を繋ぐ。」

リュウ「やっと解放されたか…。まあこの際どう転ぼうと仕方がない。」

ガシツ ギュツ

ミュ「…逃がさない。」

リュウ「ミュ、今度は手が握りつぶされそうなんだが。」

ミュ「…カップルはみんな手を繋ぐって言ったから。」

リュウ「いや、だからと言って握り潰すほど握らなくても…」

ミュ「…次のアトラクションに乗れなくなる。」

ミュ「痛い痛い痛い！少しは握る力を弱めてくれえ！」

さて、元に戻ってあの二人は…？

-----

オレ「…」

ミア「…」

オレ（くそう！会話が弾まない！空気が重過ぎる！かといって話題が見つからない！なんなんだこの三重苦はよう！？）

オレ「…。」

ミア「…ねえ。」

オレ「！」

ミアが話を始めた…。とにかくこの三重苦の空気から脱出せねば！

オレ「…ん？」

ミア「あのさ…。レイって兄弟とかいるの…？」

オレ「…いないよ。」

…その質問はオレにとって最も辛い質問だった。

ミア「じゃあ、イギリスに住んでいた頃の話を…」「オレには「…？」

オレ「オレには…家族がない。誰一人として…」

『家族』

…それは、これくらいの子供なら誰しもが持っているはずのもの。ただ、オレにはない。オレは…

ミア「…ゴメン。」

オレ「…謝ることないよ、ミア。大丈夫、オレは、全然気にしてないから」

ミア「それでも…ゴメン。」

ミアが申し訳なさそうな顔でオレを見ている。そんな顔でオレを見て欲しくない…。そう思ったオレは少しだけ、昔のことを話した…。

オレ「オレは…、赤ん坊の頃、教会に捨てられていてな。生みの親の顔は生まれてこの方、全く知らないんだ…。」

ミア「…」

オレ「オレの育ての顔はその教会の神父さんだ。面倒見の良い人で、近所でも評判の神父さんだったんだ…。」

ミア「…」

オレ「…でも、その人も二年前に死んでしまったな。オレの家族は、もう…。」

静かに空を見上げる…。懐かしいあの頃は、二度と戻ってくること



はない…。

視線を細めて空を仰いでいたら、ミアがそばにやってきて、オレの手を握り

ミア「…大丈夫。私がそばにいるから。辛い事があつたらいつでも頼ってきて、良いから…」

オレ「…」

この時、オレはどう返事をしたら迷ってしまった。こんなにもオレを支えようとしてくれていたのに…、オレは答える事が出来なかった。

初春さんが戻ってくるまで、オレはミアと手を握りながら、暗い灰色の空をずっと仰いでいた…。

続く

遠い思い出（後書き）

夢幻「さて！前回予告した通り、影の薄い人物をだしました！」

修「ふう。なんか久しぶりの出番だな」

椎「せやな。まあ仕方ないことやけど。」

菜摘「それより夢幻、”アレ”は大丈夫なの？」

夢幻「”アレ”？」

鈴音「学園都市に行っている間、私達はどうすんの？」

夢幻「あー、はいはい。ちゃんと考えてありますよ。」「心配するな（笑）」

梢「具体的に言っと？」

夢幻「スピンオフで事件を解決してもらいます。（多分）」

修「零牙達と接点はあるのか？」

夢幻「それは読んでのお楽しみ。」

椎「守秘義務固いなあ」

梢「事件について少しだけ教えて。」

夢幻「それはお楽しみで」

菜摘「梢ちゃん。こんなやつ相手にしてないで、次回予告しちやあ？」

梢「わかりました。」

鈴音「じゃあ修君よろしく！」

修「次回 本格推理委員会 『謎・謎・謎』」

本格推理委員会一同

「「「お楽しみに」」」



## 謎・謎・謎（前書き）

どうも、お久しぶりです。これで暗号解読事件（？）は解決します。またあとがきで会いましょう

## 謎・謎・謎

初春「お二人さーん。暗号見つけたよ。」

初春さんが小走りに走りながらやってきた。オレ達は繋いでいた手を離し、初春さんに向き合った。

オレ「暗号にはなんと書かれていましたか？」

初春「まだ確認してないからわからないけど、佐天さんと白井さんが来てからでもいいかな？」

オレ「はい。じゃあ白井さん達に連絡しないと……」

白井「大丈夫ですわ。零牙さん。私達はもう着いていますので。」

突如白井さんの声が聞こえたと思ったら、すでにオレの真後ろにいた。

全く気配を感じなかった……。恐るべし、テレポート空間移動。

佐天「初春」。私達も来たんだし、暗号を教えてちょうだい！」

初春「ハイハイ。じゃあ開けますよ〜。」

初春さんはポケットに入れてあつた封筒を取り出し、封をあけ、中身を取り出した。中には…

ミア「『ルシフェルの名』だね。」

佐天「『ルシフェル』って?」

オレ「『ルシフェル』…または『ルシファー』と呼ばれる墮天使のことですね。」

白井「しかし、暗号の意味が矛盾していますわ。『ルシフェル』とというのがその《墮天使》の『名』なんでしょう?」

白井さんが眉をひそめて言う。まあ、普通はそうなんだが…。

オレ「正確に言うと『ルシフェル（ルシファー）』という墮天使はいないんです。」

みんなが一斉にオレを見ている。その顔には、何を言っているんだか…この人は…、と思っっている顔だった。

しかし、構わず話を続ける。

オレ「旧約聖書の一つ《イザヤ書》の一節にある言葉をラテン語に変えた時に、訳語として、初めて『ルシフェル』という名が出るんです。」

佐天「じゃあ、元になった名前があるんだ。」

初春「その名前はなんて言うんですか？」

オレ「それは、『…どうしてお前は天から落とされたのか、明けの明星、暁の子よ。どうしてお前は地へ切り落とされたのか…』」

この一節にある《明けの明星》という言葉が『ルシフェル』の名前の元なんです。

…ここまでくれば、だいたいわかんないかと思んですけど…、わかりますか？」

皆

「「「全然わかんない」「」「」」

…しょうがない、ヒントを出してあげますか。



オレ「常盤台の白井さんは知っているとありますが、太陽系の中で地球よりも太陽に近くにあるために、地球からは『明け方』と『夕方』にしか見えない惑星の名前……。それが『明けの明星』の答えです。」

佐天「白井さん！太陽系で地球に近いその惑星の名前って一体なんですか！？」

佐天さんが白井さんに助けを求めた。一方、助けを求められた白井さんは……

白井「うーん。確か……。」

覚えがなさそうだ。しかしここで初春さんが。

初春「『金星』ですよ？明け方に見えるのが『明けの明星』、夕方に見えるのが『宵の明星』って授業で習いました。」

オレ「その通りです。ですから今度の暗号の答えは『金星』って事になります。」

初春さんが正答を言って、暗号の答えを出した。答えを言われた白井さんは頭を垂れてうなだれていた。

ミア「答えが『金星』なら場所は宇宙関係の施設のある『第23学区』かな？」

オレ「ああ、多分そうだと思う。」

ミアが場所を聞いてきたので肯定して返す。

しかし、初春さんがなにやら思案顔になっている……。何か思いつくような事でもあったんだろうか？

オレ「初春さん、なにか引つかかるところとかありましたか？」

初春「うーん。確か最近、金星とかのニュースをやってたような……。うーん。」

白井「そう言えば……。確か最近、金星とかのニュースが流れていましたわね。どんなニュースでしたっけ……？」

初春さんだけでなく白井さんまでが思案顔に。しかしここで佐天さんがポツリと一言。

佐天「確か最近、金星の環境を調べるために学園都市が飛ばした口

ケットが、戻ってきたんじゃあなかつたけ？」

初春・白井

「「それです！佐天さん！」」

佐天「へっ？」

初春「白井さん！確かその調査結果って『外』の人たちに発表する  
んでしたよね！？」

白井「ええ。確か『第3学区』で発表すると最近、ニュースでやっ  
ておりましたわ。」

初春「という事は第3学区に次の暗号が？」

白井「可能性は捨て切れませんわね。初春！発表会場の特定、出来  
ますわよね？」

初春「はい！ちょっと待ってください！」

佐天さんの一言で一気にヒートアップした二人。ミアと佐天さんは  
状況が分からず目をパチパチしている。

ミア「なんか話に付いていけないんですけど…?」

そう言っつてミアはオレの方を見てきた。どうやら説明して欲しいらしい。

オレ「つまりだな、学園都市は最近、金星の環境を調べるためにロケットを飛ばして、その調査結果を外に発表する会場を調べているんだよ。」

ミア「あ、なるほど。」

佐天「そういうことね。」

ミアはともかく、学園都市にいる佐天さんは分かったんじゃない? という言葉を心の中でポツリと呟く。

それから一分と経たない内に初春さんが検索結果を出した。

初春「わかりました!場所は第3学区にある『中央展示場』です!」

初春がもの凄く興奮している。ならついでに…

オレ「ちなみにその発表って何時いつからですか?」

初春「ええつと、明日の午後3時からですね。」

白井「明日の午後3時と言えば、確か風紀委員に当てられたメールにあった…。」

オレ「爆破予告の時間ですね。」

佐天「ついに爆弾の在り方を見つけたね！」

ミア「爆破予告の時間と発表が重なるなんて、まるでドラマみたいな展開だね。」

みんなが意気揚々と話を盛り上げる。まあ、でもまずオレ達がやるべきは…

オレ「それじゃあ、早速第3学区の中央展示場に…。」

初春「行きましよう!」

.....

さて、今オレ達は第3学区の中央展示場前にいる。ここに爆弾が仕

掛けられているらしいが――

ミア「白井さん。このただっ広い展示場を探すのって不可能なんじゃない……。」

佐天「普通に考えて人手が足りないよね。」

――そう、中央展示場の広さはオレ達5人で調べるにはあまりにも広過ぎる大きさだった。

白井「大丈夫ですわ二人共、調べるのはほんの一部だけですから。」

オレ「まあ、多分、発表会場とかに置いてあんだろ。ベタにさ。」

そんな感じでオレ達は中央展示場に踏み入れた。

――

オレ「……で、なんでこうあっさりと見つかるんだ？」

ミア「さあ……？」

オレ達5人の前に発見した爆弾が5つ。

角度や火薬の量（目測）で全部爆破した場合、充分、発表会場のホールが全体に爆発の影響を受けるが、なぜか簡単に見つかった。本当、不自然なくらいに。

白井「作者の能力が低いせいでしょうか？」

佐天「まるで『見つけてくださいっ！』って言っているぐらい、あっさりで見つかったよね。」

初春「で、でも、爆弾なんですから早く解体しちゃいましょうよ。」

初春さんが戦々恐々と佐天さんの後ろに立って爆弾を眺める。その時。

黄泉川「はいはい。子供達、爆弾発見ごころーじゃん。」

後ろから全身を武装した女性がやってきた。

『ジャケット  
アンチスキル風紀委員と同じく、学園都市の治安を守るもう一つの組織……』  
警備員』の登場だった。

黄泉川「君たちが今回の暗号解読に協力してくれた子供達だね？」

協力、感謝するじゃん。」

オレ「いえいえ。そんな大層な事はしてませんよ。」

ミア「そうです。私達はただ、白井さん達に手伝っただけです。」

黄泉川「そこまで謙遜しなくても良いじゃんよ。でもま、ひとまずは、」

『警備員』の人は一回、爆弾を見てそしてまた、オレ達の方を向いて、

黄泉川「ひとまずは、あの爆弾を解体するじゃん。後は私達に任せて、学園都市を楽しむじゃん。」

笑って、楽しそうにそう言った。

.....

オレ「これで、明日の発表は大丈夫ですね。」

白井「ええ。」



ミア「依頼完了…、かな？」

白井「零牙さん、雅さん。私達からもお礼を言わせていただきますわ。本当にどうもありがとうございます。」

白井さんが頭を下げて言った。初春さんと佐天も続けて頭を下げる。

オレ「いえいえ。ま、いろいろと見学も出来たし…、一石二鳥かな？」

ミア「顔を上げてください。私達も事件を未然に防げて嬉しいんですから。」

そう言うと白井さん達は顔を上げて、オレ達の手を掴み、

白井「では、せめてものお礼にホテルまで連れて行きますわ。一度、超能力の凄さも体感してくださいな。」

それでは行きまわすよ？と、次の瞬間にはオレ達の目の前から佐天さん達が消え、別の風景が現れた。

そしていつの間にか、オレ達が滞在しているホテルに着いた。

ミア「あれ？いつの間にな…？」

オレ「これが超能力か…」

白井「では、私は事件の報告書などを作らないといけませんので、これにて失礼。ではまた。」

そう言うと白井さんはオレ達の前から消えてしまった。

ちよつとだけ珍しい体験が出来たオレ達はただ、お互いの顔を見て微笑んでいた。

しかし彼らはまだ気付いていない。

あの暗号の《真の意味》を - -

続く

謎・謎・謎（後書き）

御坂「作者あ！」

夢幻「（ビクッ）な、なんでしょう?」

御坂「今回私の出番全然ないじゃない！」

夢幻「いや、すみません（笑）。上手く書けなくて」

雅「しょうがないよ。御坂さん。次で出れるよ。きっと…」

夢幻「そうそう。次回から『禁書目録』みたいにやるから…」

御坂「私の出番は?」

夢幻「ないよ。（高速で土下座に移行）」

御坂「うう…『超電磁砲』のクロスオーバーなのに、出番が少ない

…。」

夢幻「ごめんなさい。また出番ですから…」

リュウ「おいおい作者。オレ達の出番はあるよな？」

夢幻「まあ…。あるかも」

ミュ「……微妙に間が空いた。」

零牙「みんな大変だなあ…。」

リュウ

「主人公は気楽で良いよな！！おい！」

零牙「まあ、そんな事は置いて…。」

夢幻・零牙・雅以外の全てのキャラ

『そんな事で済ませるな！！』

零牙「…次回予告しましょう。ミアよろしく〜」

雅「次回 本格推理委員会 『ゲヘナのゲート』」

夢幻「お楽しみに」

《ゲヘナのゲート》（前書き）

なんか本格推理関係ない話になってしまいました…。

## 《ゲヘナのゲート》

白井さんと別れた後、リュウとミュちゃんが来たので、感想を聞いてみた

オレ「…それで、1日デートは楽しかったか？」

リュウ「幾度なく関節を極められて痛かった。」

恋人とデートに言った感想としてはおかしい言葉が返ってきた。普通は「楽しかった」じゃないか？

ミュ「…お化け屋敷は怖かった。思わずリュウに抱きついてしまった。」

ミア「良いことも有ったんじゃない。リュウくん。」

リュウ「騙されるなミアちゃん！こいつはお化け屋敷に入っても顔色一つ変えなかったぞ！」

…まあ、ミュちゃんそういうの強そうだからな

オレ「他には？」

ミユ「ジェットコースターに乗ったり、観覧車に乗ったり。」

ミア「おもしろそうだね〜」

これは意外。まさかリュウが観覧車に乗るとは…

よく、ドラマとかで見かける定番のワンシーンみたいな展開を、一番避けようとするはずなのに…

オレ「リュウ、よく観覧車に乗ったな。お前なら全力で嫌がると思うが。」

リュウ「移動中は肩関節を極められて逃げられなかったんだ…」

ある意味可哀相だが、それでもしないとコイツは入らないだろうしな。

リュウ「…で、レイ、お前はとうだったんだ？」

オレ「あん？」

リュウ「事件の方は解決したのか？」



ミア「ばっちりだよ！いろんな学区に行って面白かった。」

ミュ「…どの学区に行ったの？」

ミア「えーっとね…」

ミアが学園都市の地図を出して説明し始めた。

ミア「まず『第19学区』でしょ、次は『第23学区』で、『第17学区』、『第2学区』、『第3学区』の順で回って来たんだ」

ミアは一ヶ所ずつ指で指して、どんな事件だったのかを説明し始めた。

ミア「…でね。1111の暗号は…」

ミュ「…フフっ」

ミュちゃんがミアを見ながら笑っていた。何がおかしいんだろうか？

ミア「…？ミュちゃんどうしたの？私の顔に何か付いてる？」

ミュウ「…ううん。そうじゃなくて、『楽しそうだな』って思っただけ。」

ミア「?????」

ミアが困惑した表情で見つめる。するとミュちゃんはニッコリ笑って

ミュ「ミアちゃん、零牙くんの話をしている時、本当楽しそうだな  
〜って思ったの。」

ミア「へっ?」

リュウ「つまり、本気でレイに惚れているんだな〜って思ったんだ  
よ。な?ミュ。」

ミュ「(コクン)」

ミア「わ、私はただ何があったか言っただけで、た、楽しそうにな  
んか…/ / /」

リュウが直球で言った言葉に頬を赤らめて反論するミア。そこまで  
あからさまに反論すると、返って恥ずかしいな…。

リュウ「(ニヤニヤ)でもレイは嬉しそうだぜ?」

ミア「へっ？／＼／」

ミアがゆっくりとオレの方を向いて、お互いの顔を見つめる。

オレ・ミア

「「……（ポツ）／＼／」」

ダメだ。直視できないっ！

リュウ「ありやりや？お二人さん顔が赤いんですね？」

ミュ「…お互いに愛し合える恋は、どんな恋よりも勝る。」

オレ「う、うっせーな／＼。リュウ達だって良いカップル…いや夫婦だろっが」

ミュ「…」

リュウ「ミュ、なんだ、その期待の眼差しは？」

ミュ「はあ…。恋って難しい…」

ミア「しょうがないよミュちゃん。リュウくんは、感情表現がひねくれているから。」

オレ「本当はミュちゃんの事が大好き - - 愛しているのにな。」

オレ達の反撃に結構たじろいだリュウは慌てふためいて否定した。

リュウ「そ、そんな事実はない！オレはミュの事が - -」

ミュ「...嫌い、なの...?」

おお、ミュちゃんがしょんぼりと空気を醸しながら先手を打った。これなら普通の人は『嫌い』だと答えられないだろう。

リュウ「オレはミュの事が『大嫌い』なんだ！」

...どつやらリュウは、オレが思ってた以上に外道らしい。

あれ？ミュちゃんからなんかどす黒いオーラが見えるぞ？

ミュ「...リュウ...?」

リュウ「なんだ！ミュ！」

ミュウ「…さっきの言葉、本気？」

あ、これ下手するとリュウの奴死んだな。うん。恋する乙女の怒りは最凶だからな。

リュウ「ああ、オレはお前の事が『大嫌い』だ！」

ミュウ「…そう。じゃあ…お仕置きしないと…」

ミア「ミュウちゃん！？顔がものすごく怖いよ!？」

リュウ「はん。別にお前のお仕置きなんて恐くもなんとも…」

ドスッ

ミュウ「…言い訳は向いっついで聞く…」

~~~~~はひくお待ちください~~~~~

ミュウ「…でも、ちょっとおかしい。」

リュウのお仕置きを終えたミュウちゃんが、オレ達の所に戻ってきた。ちなみにリュウは気絶している。時々痙攣しているから生きているはずだ。…多分。

ミア「おかしいって、どこがおかしいの？ミュウちゃん。」

ミュウ「…宗教観が極端に薄い学園都市で、宗教に関する暗号が5つもあつたなんて、不自然。」

言われて見れば確かにそうだ。宗教観がない学園都市なら暗号は最後の一個だけで充分なはず。なんで5つもあつたんだ？

オレ「まさか、別の意味があるのか…？」

もしそうだとしたら、どんな意味だろう？　なんで5つも暗号を作る必要があつたんだ？

その時、オレの目にさつきミアが、ミュウちゃん達に説明する時に使った、地図が目に入った。確か暗号があつた場所は…

- ・『第19学区の寂れた公園』
- ・『第23学区のターミナル駅』
- ・『第17学区の操車場』
- ・『第2学区のどこか』
- ・『第3学区の中央展示場』

これらの場所を『点』として表し、さらにそれぞれの『点』を繋げると…

オレ「魔法陣…？」

学園都市の丸い境界線と線を繋ぐことで現れたいびつな星はまるで何かの魔法陣のように見えた。

オレ（までよ。今日解いた暗号には…）

- 最初に解いた暗号には「原『罪』」があり
- 次に解いた《ゲマトリア》を使う“666の黙示録の獣”には頭に「七つの大『罪』」を表す冠があり

…《武器を与えし者》^{アサゼル}は人に武器を与えた『罪』で墮落し

…《光を掲げる者》^{レシフェル}は傲慢の『罪』で地に落ちた。

オレ（ま、待て。まさか、こんな魔術を発動しようつてのか!?

もし発動しちまったら、本当に学園都市は『崩壊』…、いや『消滅』するぞ!…!）

ミア「…どうしたの?レイ?顔色が悪いよ?」

ミアが心配そうにオレの顔を覗き込む。そうだ、今ここには《オレが守りたい人》がいるんだ。だったら…

オレ「なんでもないよ。ミア。それより、ちょっと用事を思い出したから、出かけてくる」

そういつてオレは立ち上がり出かける用意をする。

ミア「レイ。その用事って明日じゃダメなの?」

ミアはオレを咎めているのか、行かないでと、懇願しているのか、

正直分からなかった。でも

オレ「ゴメン。必ず明日には帰ってくるから。だから…」

ミア「…だから？」

オレ「…だから、待っていてくれ。」

ミアの頭に手を乗せてそう言った。必ず、帰ってくると誓いを立てて。

ミア「…わかった。じゃあ、必ず帰ってきてね…？」

ミアの泣きそうな顔を見てオレは微笑み、夜の学園都市へと足を踏み入れた。

.....

..そして、どこともわからぬ場所にて

オレ「ステイルか？お前に聞きたいことがある」

スタイル「君が掛けて来るなんて、どうかしたのかい？」

オレ「インデックス禁書目録の住所が知りたい。教えてくれ。」

スタイル「…なんでもの子の住所なんて知りたいんだい？」

オレ「今、学園都市で『とある魔術』が発動しようとしている。それを、食い止めたい。」

スタイル「…その、『とある魔術』ってなんなんだい？」

オレ「《ゲヘナのゲート》。」

スタイル「!!!君はそれを、本気で言っているのかい？」

オレ「ああ。教えてくれ、スタイル。刻一刻と時間は過ぎていくんだ、オレは《ゲヘナのゲート》の発動を食い止めたい」

スタイル「…わかった。彼女の住所を教えるが、しかし」

オレ「わかっているさスタイル。インデックスに危険が及ばぬよう、出来るだけ配慮する」

白髪の少年と、とあるツンツン頭の少年の出会いの始まりは、これ
だった

白髪の少年はただ、守りたい者を守るために、闇の中を走り始めた
――。

続く

〈ゲヘナのゲート〉（後書き）

零牙「おい夢幻、なんか本格推理委員会っていうタイトル変えた方が良いんじゃないか？今回の話読んで思ったんだが…」

夢幻「すまん…。流れが完全にバトルパートの流れだよな…」

雅「なんか推理関係なくなってきたね…」

夢幻「…とりあえず、次回予告を」

御坂「次回 本格推理委員会 『守りたいもの』」

┌

夢幻「グダグダになってますが、ご期待ください」

守りたい者（前書き）

グダグダです…

早めにこのバトルパートを切り上げますので、皆さんしばしご辛抱を…！

守りたい者

当麻「あゝ、明日の朝ご飯は何にしようかな？」

私、『上条当麻』は学園都市に住む普通の高校生である。

学園都市に住んでいるため、超能力開発は受けたが、センサー機械共がオレに下した能力判定は『無能力者（レベル0）』、つまりは能力は何一つ持っていないのだ。

「いや、能力はある。オレの右手には『幻想殺し（イマジンプレイカー）』という能力が宿っていて、“超能力“だろうが”魔術”だろうが、それが《異能の力》何でも打ち消せるのだ。

インデックス

「とうまとつま、私はたまにはこの前テレビでやってた『焼き魚定食』が食べたいな」

そう隣で言う銀髪銀眼の少女の名は『インデックス禁書目録』。本名は私、上条当麻はとある事情により記憶喪失なので手覚えていないが、成金好みのティーカップのような修道服を着ているあたり、なんとも胡散臭い少女である。

彼女は学園都市の外からやってきた人間で『イギリス清教』に属するシスターさんでもある。

彼女は”完全記憶能力”という体質を持ち、世界中に散らばる10万3000冊の魔導書をその身に記憶しているトンデモ少女だ。

今は分け合って私、上条当麻の部屋に居候の身なのである…。

当麻「つーかインデックス。『焼き魚定食』ってなんなんだよ。オレは食堂のおばちゃんか？」

インデックス

「テレビでやってるアレだよ、とうま。」

そう言って指差したインデックスの先には、なにやら食堂で食べている人々の姿があった。どうやら何かのドラマのワンシーンらしい。

そこでふと、冷蔵庫の中身を思い出す上条。確か冷蔵庫の中には…

当麻「あゝ、どっちにせよ冷蔵庫に魚がないから無理だ。諦めろインデックス」

という至極当然な上条の発言にインデックスは

インデックス「じゃあ今から魚を買ってくれば良いかも！そして朝早く当麻が料理すれば大丈夫なんだよ！」

当麻「インデックスさん！？あなた様は居候の身でありながら、家主さんに対する礼儀がなっていないのでは！？というか、そんな事したらウチの家計が大打撃を受けます！」

上条が悲鳴にも近い声で言ったにも関わらず、異常な食欲を持つ少女、インデックスは己の赴くがままに

インデックス

「うっ。食べたいったら食べたいの！」

ガブリと上条の頭を噛みつく。上条も「痛い痛い止めてください！インデックスさん！！」と言っているが、これが上条当麻の日常なので仕方がない。

ピンポン。

そんな時、不意にインターフォンが鳴った。

当麻「誰だろ？」

上条は噛みついていているインデックスを器用に剥が、玄関のドアを開

けると目の前に一人の少年が立っていることに気付いた。

走って来たのか、少年は息を切らせている

レイ「えっと…、夜分お訪ねして申し訳ございません。あなたが『上条当麻』さんですよね？」

当麻「そうだけど。君は誰？」

レイ「オレの名前は速水零牙って言います。イギリス清教の魔術師で…」

上条「イギリス清教!？」

すぐさまインデックスを隠し、臨戦態勢になる上条。

イギリス清教はインデックス自身が所属している組織だが、魔術的なというものを使う(らしい)人間には”核兵器”にみたいな扱いを受ける『魔導書の原典』、その原典10万3000冊分を頭の中に記憶している彼女は、いろんな魔術組織から狙われているのだ。

もちろん、彼女の所属しているイギリス清教だって例外ではない。核兵器みたいな扱いを受ける魔導書、それを記憶する彼女を自身の手元に置いて、いつでも監視出来るようにしたいと思うのは当然だ

ろう。

レイ「そんなに強張らないでください。僕はただ協力して欲しいだけなんです。」

上条「…何を協力して欲しいんだ？」

上条は訝しい目で少年を見た。すると少年は真剣な眼差しでこう言った。

レイ「学園都市にとある魔術が発動しようとしているんです。それを、止めるのに協力して欲しいんです」

インデックス

「その魔術ってどんな魔術なんだよ？」

突然後ろからインデックスの声が聞こえて驚く上条。魔術師と名乗る少年は、インデックスの顔を見て《ゲヘナのゲート》と言った。

その言葉を聞いて最初は驚いた表情をしていたインデックスだったが、すぐさま真剣な顔つきになった。

インデックス

「…それは本当なの？」

レイ「はい。あまり時間がありません。早く説明したいんですけど……。」

インデックス

「とうま、この人を家に入れてあげて。」

インデックスの真剣な表情に、わかったと頷いた上条は少年を家の中に入れた。

お邪魔します。と少年はご丁寧な事に靴を揃えて家に上がっていった。

当麻「……で、今日はインデックスにどんな用があつて来たんだ？」

上条さんがベットに腰掛けてオレに聞いてきた。

オレ「はい、実は学園都市に《ゲヘナのゲート》という魔術が発動しようとしているんです。」

インデックス

「……ちなみに聞くけど、君は《ゲヘナのゲート》にがどんな魔術か、知っているんだよね？」

オレ「はい。」

当麻「インデックス、その《ゲヘナのゲート》って言う魔術はどんなものなんだ？」

上条さんが困惑した顔で言った。そんな上条さんにインデックスさんが説明する。

インデックス

「《ゲヘナのゲート》って言うのは簡単に言うと『消失魔術』だよ。特定の空間を丸ごと消しちゃう、とっても危険な魔術なんだよ。」

当麻「消失…？」

どうやら上条さんはいまいちピンと来ない様子。インデックスさんがちらりとオレを見た。どうやら説明しろと言いたいらしい。

オレ「上条さん、かいつまんでこの魔術について説明しますから、よく聞いててください。」

上条さんは「頼む」と言っておレの話の話を聞く体制になった。

オレ「まず、《ゲヘナ》って言う単語は十字教に置ける仏教の《地獄》にあたります。」

《ゲヘナのゲート》というのは《ゲヘナ》って言う地獄に繋がる”門”のことなんです。」

当麻「うんうん。」

オレ「この魔術はその”門”を強制的に地上に出現させることで、術者が設定した空間を全て『なかつた』ことにしてしまうんです。」

当麻「うんうん。」

オレ「今、何者かがその魔術を学園都市で発動しようとして、学園都市そのものを『なかつた』ことにしようとしているんです。」

当麻「うんうん。」

オレ「あの…、理解出来てます…?」

さつきから「うんうん。」としか言っていないから理解しているかとても不安になる。

当麻「まあ、細かいところは分からなかったけどさ、」

前言撤回。全く理解してない。説明のしがないなあ…。

当麻「要するに、その魔術が発動すると、学園都市が消えてしまうかもしんじゃないだよな？」

オレ「『消えてしまう』『じゃなくて』『消える』んですけどね…。」

当麻「でも、お前の説明を聞くとその魔術が発動すると、魔術師の消したい場所が自由に消せるんだよな？なんで今まで、そんな魔術が使われなかったんだ？」

それは…、とオレが説明しようとしたらインデックスさんが先に説明し始めた。

インデックス

「『使われなかった』『んじゃなくて、『使えなかった』』んだよ。当麻。」

当麻

「その理由は何なんだ？インデックス。」

インデックス

「普通に考えてみて、当麻。そんな魔術をもし発動したら、今度は

自分のいるところが消されちゃうかもしれないでしょ？」

なるほどな。と納得してくれた上条さん。さて、ここからが本題だ。気を引き締めたオレは、インデックスさんに協力を要請した。

オレ「インデックスさん、《ゲヘナのゲート》を解除するには、あなたの“知識”が必要です。オレ自身が持っている『闇の魔術』だけでは分からないところを、サポートして欲しいんですが…」

インデックス

「そんなにかしこまらなくても大丈夫なんだよ。10万3000冊の魔導書を記録する『魔導書図書館』の私になんでも聞くと良いかも！」

そう言っつて胸を張るインデックスさん。そして上条さんも…

上条「魔術ってことは、オレの右手も役に立つかもしれないな。オレも協力する。」

オレ「ありがとうございます」

当麻「別にお礼を言われることはまだしてないよ。それよりインデックス、その魔術を止めるにはどうすれば良いんだ？」

インデックス

「うん。こういう魔術の場合、大抵は術式の発動の要になるポイントがあるはずだよ。」

そこに行つてその要を当麻の右手で破壊すれば良いんだよ。」

オレ「とりあえずは一緒に行動しましょう。相手がどの程度いるかわかりませんから。」

そう言つてインデックスさんを見る。

.....

時を同じくして、学園都市と外部を繋ぐ『門』にて、

そこでは血の雨が降っていた。おびただしい量の血が流れていた。

その中を歩く男が一人。銀髪を血で濡らし、右目は色を変えているのか、異様な金色をしていた。その男、容姿は二十歳前後の賢そうな面持ちでスーツ姿をしていたが、それに似合わぬ全長2メートルはあろうかという巨大な刀を片手で持っていた。

???「ふむ、『パワーズ』から連絡が入り、どの程度の警備を敷いているか見てみたが、弱いな。学園都市とはこの程度の警備しかないのか。」

その男、悠々と、まるで敵が来ても全て倒せると思つほどの余裕を見せながら、悠々と、歩いていった。

「???」まあ、私はさっさと目的物を回収して帰るとするか。さて、どこにいるのだろうか…」

その男、スーツの内ポケットから一枚の写真を取り出した。そこに白髪の少年が黒い修道服を着て写っていた。

「???」『速水零牙』、お前を我らが“神”のお告げに従い、この『ドミニオン』がお前を迎えに来たぞ。」

その男・・・『ドミニオン』は白髪の少年を探す為、夜の学園都市を歩き始めた。

.....

パキン！

あれから時間は過ぎ約一時間半後、

オレ「これで一ヶ所目ですね。」

当麻「まだ一ヶ所か。」

オレと上条さん達は第3学区の操車場に来ていた。上条さんの右手

にある『幻想殺し』という能力で魔法陣の要となる、要所要所の魔術を破壊してもらったためだ。

オレ「しかしその右手、便利な能力ですね。超能力どころか魔術まで消してしまうなんて…」

当麻「いやいや。この右手で出来ることなんて要はそれだけだし、後は何も無いんだよね」

そう言っつて右手を見る上条さん。何の反動もなしにそんな能力を振るえるのはやっぱりすごいな。と思っつていたが口にはしなかった。

インデックス

「一応これで、『ゲヘナのゲート』の発動は阻止出来たけど…まだ安心しちゃダメだよ。とうま」

当麻「???なんだインデックス。その煮え切らない言い方は？」

インデックス

「『闇の魔術』の恐ろしいところはね、完全に魔法陣が完成しなくても魔術が使えるちゃうところなんだよ。」

当麻「…?どついう意味だ?魔術つてのは元々そんなんじゃないのか?」

オレ「魔術って言うのは回路みたいなもので、完成してないと発動しないんですよ。」

上条さんは困惑した表情でオレを見る。科学が一般的にある上条さんにも分かるよう、オレは乾電池と電球を使った説明を始めた。

オレ「乾電池にコードを繋いで、電球を光らせる実験を思い浮かべてください。」

まず、魔術に置ける《有り得ない事象》…上条さんの右手で打ち消せるものが、さっきの電球の実験に置ける“電球”にあたると考えてください。」

当麻「ああ。」

オレ「で、電球を光らせるには言わずともエネルギーとなる”電気”が必要です。」

魔術を使う時のエネルギーになるのは術者の 魔力 です。」

当麻「うん。」

オレ「で、電気を使って電球を光らせるには”回路”を作る必要がありますよね？」

『魔法陣』はその回路にあたるんです。

…ここまでわかりましたか？」

一応、ここまでのことを理解してもらわないと次の説明が出来ないので確認をとる。

当麻「だいたいな。つまり、『電球』魔法、電気』魔力、回路』魔法陣』っていうことだろ？」

オレ「はい、そこを理解していれば大丈夫です。

さっきの説明の続きです。じゃあもし、実験の中で『回路』に欠陥があつたら…例えば、コードの中の銅線が切れていたら、電気を流しても電球は着きますか？」

オレの質問に上条さんはさも当然だと言うように
当麻「着かないな。最悪、ショートする危険もある…」

オレ「そうです。大抵の魔法はさっき言った実験と同じような仕組みで出来ますが、『闇の魔法』は違う。

例え、回路が未完成でも魔法は発動するんです。しかも、完成した魔法の発動よりもより凶悪な結果になりやすい。」

当麻「…つまり、どういうことだ？この状態で魔術を発動すると、どうなるんだ？」

オレ「そうですね…。何が起こるかわからないんですが、例えば学園都市だけでなく他の地域も『なかった』ことになる…とかですかね。」

当麻「マジかよ…。じゃあ早く、他の魔法陣も破壊しないと。次はどこにあるんだ？」

オレ「ええつと…、第19学区の公園が良いかと。」

当麻「よし、じゃあ行くぞ。」

と歩き始めた矢先、後ろから突然声が聞こえてきた。腕に『風紀委員^{ジャッジメン}』の腕章をつけた少女だった。

風紀委員「あなた達何しているんですか！？『特別警戒宣言発令中^{コートレックステ}』ですよ！今すぐ寮に帰りなさい！」

上条「すみません。ちょっと探し物してまして…」

上条さんがほぼ反射的に返した。ちょっとすごい対してオレは

オレ「『特別警戒宣言』って確か、対テロ用の警戒宣言でしたよね？何があつたんですか？」

- 学園都市には異常事態が起こった場合、五段階に別れた警戒宣言が発令される。今発令中の『特別警戒宣言』は五段階のうち一番上。つまりかなり危険な事態が起こっているのだ。

そんな警戒宣言が発令中なのだ、何があつたのか気になってくる。

風紀委員「…学園都市に侵入者がでたの。今、『警備員』と『風紀委員』で対処しているけど、かなり強いらしくて…」

上条（学園都市に侵入者…）

オレ（十中八九、魔術師でしょう。インデックスさんが目的でしょうか…）

オレも上条さんも口には出さず、目で会話した。

そんなオレ達を見て、風紀委員の人は一つ質問してきた。

風紀委員「そういえば…あなた達、『速水零牙』っていう子を知らない？

侵入者がその子を差し出せって言っているのよ」

オレ「え？今なんて…」

オレは耳を疑った。まさかと思って信じたくなかった。

風紀委員「速水零牙って子知らないか？って聞いているのよ。…その様子じゃあ知らないようね。寮に帰りなさいよ！」
そう言ってオレ達から去って行った風紀委員をオレはただ呆然と眺めていた。

オレ「くっ！」

風紀委員が見えなくなっからオレは走りだした。しかし…

上条「待て。」

上条さんがオレの腕を掴みオレを止める。

オレ「なんですか上条さん！」

上条「待てよ。お前、一人で魔術師のところに行って戦う気か？」

オレ「ええ。」

上条「そつちは警備員と風紀委員がなんとかしているらしいから、オレ達は魔法陣を破壊した方が良くないんじゃないか？」

上条さんが聞いてきた。オレは声を荒げて反論した。

オレ「そうはいきません。オレは自分のせいで誰かが傷つくのを、黙って見ていられない。」

上条「でもお前一人行ってどうなる？さっきの風紀委員の話だと、一人じゃあまともに戦える相手じゃない。」

上条さんの意見は最もだが、オレは - -

オレ「それでも戦います。ここで逃げたら、オレの信念に反する。」

オレの言葉をどう思ったのか、上条はしっかりとオレの目を見て

上条「…その信念は譲れないものなんだな？」

この問いにオレはただ一言、「はい」と答えた。

上条「なら…行ってこい。魔法陣の方はオレ達に任せろ。」

上条さんのその言葉を聞いてオレは頷いた。

オレ「魔法陣の方は任せます。場所は…わかっていますよね？」

大丈夫だよ。とインデックスさんが返す。そして上条さんが頷いたのを見て、オレも再び頷き――

オレ「待ってるよクソ魔術師。すぐにぶっ飛ばしてやる。」

オレは闘いの場へ走り始めた。

守りたい者（後書き）

御坂「作者が都合によりあとがきを進行出来なくなっただから、今日
のあとがきは」

黒子「お姉様と私が進めてまいりますわ！」

御坂「作者のやつ…主人公の私をほとんど出さないまま、この企画
終わらそうとしてない？」

黒子「全くもって気に入りませんわ！まさか『禁書目録』の方を出
そうだなんて…」

御坂「本当そうよね！しかもあのバカが出てきたし…」

黒子「お姉様…、そう言っている割には妙に嬉しそうなのは私の気
のせいですわよね？」

御坂「く、黒子！私は別に嬉しそうになんか！」

黒子「ですわよね。まさかお姉様にそんなお相手など、いるはず

がありませんわよね」

御坂「そ、そうよ！私にはいないんだからね！

……じゃあ黒子、そろそろ次回予告をするわよ。」

黒子「わかりましたわお姉様。では、どうぞ！」

御坂「次回、本格推理委員会 『戦う理由』」

黒子「お楽しみ！ですわ！」

戦う理由(前書き)

バトルパート入れるんじゃないかなかったと後悔しています…

戦う理由

ミア（遅い…）

レイが出て行ってから二時間は過ぎていた頃、私はベッドでそう思った。

レイを信じていない訳ではないが・・・いや、信じているからこそ不安になってきた。

惚れた者に対する理由なき不安。それが私の心にどんよりとした雲のように広がっていた。

ミア（レイ、何やっているんだろっ…？）

そう思っているよ…

コンコン

誰かが部屋の扉をノックした。

ミア（誰だろ？）

ミユちゃんかな？と扉を開けるとそこには、パジャマ姿をしたかわいらしい女の子ではなく、全身に装備を固めた大人が三人ほど立っていた。

アンチスキル
警備員A「夜遅くゴメンね。ちょっと部屋の中を調べさせて頂戴ね。」

「
私が返事をする前に残っていた二人が部屋の中に入り、部屋の中を荒らし始めた。」

ミア「ちよっ…、あなた方は一体誰なんですか！？というか、勝手に部屋に入らないでください！」

状況を上手く飲み込めていない私は反射的に叫んでいた。するとさつきとは別の人が

警備員B「勝手に入ったんじゃない。さつき断りをいれたから。」

突き放すようにそう言った。声の高さからして女の人らしいが、それでも調べられるのは恥ずかしい。

警備員C「部屋の中にはいないようね。ねえそのあなた、」

部屋の中を搜索していたもう一人が話掛けて来た。

警備員C「『速水零牙』君はどこにいるの？」

えっ…？何言っているんだろう？この人達…。まず最初に浮かんだ疑問は、私の曇っていた心に確かな疑問を植え付けた。

ミア「レイが何かしたんですか？」

警備員A「ううん。実は今、学園都市に侵入者が来てね。その人が『速水零牙はどこだ？』って言うのよ」

警備員B「で、なにか起こる前に私達が保護しに来たわけ、わかったか？」

つまり今レイは学園都市に侵入した人から狙われているらしい、でも…

ミア「なんで今襲うんですか？私達は週末に学園都市を出て行くのに…」

この疑問はすぐに湧いた。しかし、魔術を知らない彼女達は答えを出すことができなかった。

警備員B「知るかよ、そんなの侵入者に聞け。」

その言葉を聞いて私の曇った心に、『不安』と『恐怖』の二つが嵐となつて襲いかかった。

ミア（まさか・・・あの夢が現実に・・・？）

底知れない不安は私が考える前に一つの行動を起こした。

ポケットから携帯を取り出して電話を掛ける。

・・・お願い、出て。

荒んでいく心に、ただひたすら無事であることを願つて。

.....

オレ「さてと、こつちが戦場かな。」

夜の学園都市を走っているオレは、戦場への道を確認ながら走っていた

その時、ポケットにしまった携帯が鳴った。

画面には「ミア」

と表示されていた。

オレ（出るべきか…？）

頭に浮かんだこの迷いに対する答えは、考える前に体が答えを出していた……

黄泉川「おい！もつと弾頭をもつてくるじゃん！！」

鉄装「は、はいいい！！」

黄泉川（くそつ。いくら攻撃しても当たらないなんて、こいつ、外から来たたくせに能力者なのか！？）

ここは『学園都市』に侵入した侵入者を食い止めるための前線部隊の中。

侵入者、『ドミニオン』は自分に向かってくる弾丸を物ともせず、周囲の『警備員』に対してこう言う。

ドミニオン

「話を聞いてもらえないか？私は『速水零牙』さえ差し出せば、君たちに対して何もしないのだからな。」

ドミニオンは持っている大きな刀を横雑に振るった。

次の瞬間

黄泉川の左右にあったビル群がまとめて倒壊した。

黄泉川「くっ、退却！自分の命を優先するじゃん！！」

ドゴオオオツツツ！！！！

目の前に迫ってくるビルの欠片…、それは正に自然の雪崩や土砂崩れに勝る壮絶な光景だった。

鉄装「ま、待ってくださいーい。」

そこに逃げ遅れたのだろう、警備員の一人が走っている。

黄泉川「何ちんたらしてんじゃん！早く来いじゃん！」

鉄装「はあはあ…きゃっ！」

逃げ遅れた警備員は落ちていた鉄骨に躓いて転んでしまった。

鉄装「痛てて…。はっ！」

警備員は慌てて上を見る。．．もうビルの欠片はすぐにでも彼女に当たってしまいそうならいまでに近づいていた。

黄泉川「鉄装オオオ！」

鉄装と呼ばれた警備員は迫りくる痛みから逃れようと目を固く瞑った。

しかし、痛みはこない。

目を開けると、茶髪のツインテールの女の子がいた。腕には『風紀委員』の腕章が付いている。

白井「遅れて申し訳ございませんわ。．．ですがここからは、我々『風紀委員』も参戦いたしますわ。」

近くには、ツインテールの子と似たような腕章を付けた子供がたくさんいた。

命掛けの攻防戦は第二幕を迎える。

．．．．．

ピッ。

運が良かったのか、レイと連絡が取れた。

レイ『どうしたミア？オレの用事はまだ終わりそうに……』

ミア「今どこいるの!？」

レイの言葉を遮り、何も考えず大声で叫ぶ。

ミア「お願い、今すぐ戻ってきて！お願いだからっ……」

最後は目に涙が浮かび、さっきとは裏腹に弱い声で言った。

レイ『…なにがあった？』

私の叫びを聞いたレイは低い声でそう言った。

その声を聞いて私は今、レイが狙われていることを伝えた。

レイ『…そうか、わかった。オレは狙われているんだな。』

ミア「そうだよっ…、だから、帰ってきて。」
一刻も早く帰って欲しかった。もう一度、あの顔が見たかった。しかしそんな私の思いとは裏腹に――

レイ『でもゴメン。だったら、なおさら帰れない。』

ミア「な、なんで!？」

レイ『オレは、自分のせいで他人が傷ついていくのを、黙って見ていられない。』

ミア「レイ…」

レイ『だから今オレは、その人達のいるところに向かっていている。相手がオレを狙っているんならなおのこと、逃げたくない。』

ミア「…」

レイ『最悪、オレが身代わりになってその人達がそれ以上、傷つかないようにする。』

オレが居なくっても、別に誰も悲しまないからな』

ミア「私が悲しむよっ！」

レイが言った一言は私の心を深くえぐった。私はレイにとって『大切な人』だと思ってたのは、わたしの独りよがりだったらしい。

しかしそれ以上の感情が私に言葉を発せさせる。

ミア「レイがいないんじゃ、私が悲しむよっ！お願いだから帰ってきて！お願いだから…」

様々な感情が私を取り囲んで、目から涙が落ちた。

ミア「お願いだから…、死なないで…。また、私の前に、生きて帰ってきてよ…。レイ…」

伝えた言葉はたったそれだけ。その言葉がレイに届くか分からなかったが、ただ私は泣きじゃくっていた。

レイ『…泣くなよミア…。泣かないでくれ…』

レイの言葉は酷く弱々しいものになっていた。

- - -
さて、ところ変わって第17学区。ここで魔法陣の破壊をしている
上条達は

パキン！

また一つ、オレの右手で魔法陣を破壊した音が響く。

インデックス

「これで三ヶ所目だね」

当麻「ああ、次はどうする？どこに行く？」

インデックス「地理的に第3学区で良いんじゃないかな？とうま」

そうだな。とインデックスの案に従い、オレは第3学区へ足を進め
ようとしたとき。

????「ちょっと待ってください。」

誰かがオレ達を引き止めた。その男は銀髪で右目が不自然な金色を
していた、そしてその目は、片眼鏡モノクルがしてあった。

上条「あんた誰だ？」

パワーズ「私の名は『パワーズ』。あなた方が破壊している魔法陣を作った人間ですよ。」

「『!』」

その言葉を聞いて戦闘体制になる。そしてパワーズと名乗った男は右手をかざし

パワーズ「『abilis095（我が能力は神のために）』」
その手から緑色に光り輝く閃光を放った。

- - - - -

リュウ「なあミアちゃん…。」

ミア「なに？」

リュウ「これ、俗に言う”軟禁状態”ってやつだよな？」

ミュ「…”人質”という捉え方もある」

レイとの電話の後、私達は警備員アンチスキルから『敵が攻めてきた時の護衛』という名目で、いわゆる”軟禁状態”に近い状態になっていた。

部屋に来た警備員の数は三人。いずれもアサルトライフル（なのだろうか？）に手榴弾を所持して、なんともおっかない雰囲気である。

警備員は私達を見張っているようで、定期的に見張りを変えている。

しかしそんな事は私にとってはどうでも良かった。今、私の胸にあるのは -

ミア（『オレがいなくなっても誰も悲しまない…』か。）

レイが言ったあの一言。その言葉が私の胸に深い傷を作っていた。

ミア（少しはレイの事、わかっているつもりだったのにな…）

例えばお弁当を作った時。レイは本当においしそうに食べてくれた。

例えば海に行った時、レイは私の水着姿で倒れたりした。

例えば今日。

レイは『家族』がない。その辛さと悲しみを垣間見た時、ほんの少しレイについてわかったような気がしてた。

ミア（でも、違ったた。

…私はレイにとってどんな存在なんだろうな…。）

自然と湧き出た疑問を胸に抱えながら私はレイの帰りを待った。

.....

さて、侵入者『ドミニオン』を迎撃するために作られた《警備員》アンチスキルと《風紀委員》ジャッジメントの合同前線では…

白井（この方、見かけ以上に強い！しかも、外の人間なのに能力に對して、何の動揺もないなんて！）

火、雷、光、風、土…様々な能力が飛び交い、そして白井のような突然の攻撃も含めて全ての攻撃を侵入者は防いでいた。

ドミニオン

「こんなことをしても無駄だ。早く『速水零牙』を差し出せ。そうすればこれ以上攻撃はしない」
そして今度は…

ドミニオン

「resemblyz269（我が力は神の如く）」

次の瞬間

凄まじい爆発音と共に”何か”が起こった。

そして最前線で戦ってた《風紀委員》の面々が倒れていた。

体からはいくつもの切り傷があり、早く手当てしなければ死んでしまつとわかっていた。

しかし

動くことが出来なかった

意味不明な攻撃など、能力者と戦っていればいつでも起こるのに、

なぜか、動けなかった。

それもそうだろう。何十人という能力者を相手にして、かすり傷一つ負わせない敵に対して、

いつまでも《戦う意志》が灯る訳はない。

・ ・ ・その時、大多数の『風紀委員』の胸中にあつたのは《恐怖》。

得体のしれない敵に対する《恐怖》、死に対する《恐怖》、何より倒せる自信がなくなる事から生まれてくる《恐怖》が彼らを蝕んでいた。

「倒せるのか？」 「一度体制を立て直したほうが良いんじゃないか」
「逃げよう、勝ち目がない！」

白井の周りから、そんな声が聞こえてくる。

白井（諦めてはいけませんわ。ここで諦めたら、何もかも終わりで
すわ）

白井はそう自分に言い聞かせてなんとか戦意を保っていた。

しかし

ドミニオン

「ふむむ、どつちやら差し出す気はないようだな。ならば、」

そう言つて侵入者は近くにいた『風紀委員』の一人をつかみ

ドミニオン

「差し出す気がないなら今度はお前たちの仲間を一人ずつ殺していくとするか。」

持っていた刀をその一人に向かつて振り下ろした――

・・その瞬間

レイ「おい」

聞いた事のある声が響き、ゆっくりと後ろを振り向く。

そこに白髪の少年――『速水零牙』の姿があった。

白井「零牙さん！なんでこんなところにいらっしやるのですか!？」

現れた少年に向かつて白井は叫んだ。守るべき人が戦いに参加しては守る意味がなくなってしまうからだ。

白井「零牙さん！あなたは今自分がどんな状況にあるかわかっていらっしゃるんですよ！？ここは私達に任せて早く安全なところに避難してくださいな！」

しかし、少年は白井を見ていなかった。少年はただ、己を狙う敵を見据えて歩いていった。

レイ「テメエ、今なにやっているんだ？」

とてつもない怒りを隠さしめせず、ただ敵を見据えていた。

ドミノオン

「ふむ。自分からやって来るとは結構。さて私は用を済ますとしよう。」

そう言うとドミノオンは持っていた『ジャッジメント風紀委員』をまるでゴミのよう
うに捨てた

ドミノオン

「『速水零牙』、貴様を我々『天地逆転』の仲間にしたい。

ここにいる薄汚い者達ではなく、我々と共にあることで、貴様は最も良い人生を送ることになるだろう。」

レイ「…なるほどな。つまりテメエはオレをスカウトしに来たってことか。」

少年はそこで一度目を瞑り、再び目を開けて

レイ「ふざけんなよクソ野郎。誰かテメエらみたいな組織にはいるかよ。」

鞘から抜きだした逆刃刀をドミニオンに向かって突きつけて更に続けた。

レイ「いいか、オレは自分以外の人間がどうなるうが知ったことじゃない…。だがな、そんなオレでも守りたいものがある」

少年が怒る理由はただ一つ。自分を支えるくれる人を信じられない『今』も、大切なものを失った『昔』も、変わらず少年を突き動かすたった一つの信念――

レイ「オレは必ずミアの元に帰る。オレの譲れないたった一つの信念――『絶望しかない人に、再び希望という光を与える!』この信念と共に!」

ドミニオン

「…そうか、それが貴様の答えか。」

少年の譲れない信念を聞いたドミニオンは二メートルはある巨大な刀を構え

ドミニオン

「ならば、貴様を半殺しにしてでも連れて行くだけだ。」

静かにそう告げた。

- - - - -

パキン！

パワーズが繰り出した緑色の閃光を打ち消した上条はパワーズの右側面に走っていった。

しかしそんな状況にも関わらず、パワーズは笑っていた。

上条「しっ！」

そして上条が右頬を殴ろうとした瞬間、

パワーズ「素人が。寝てろ」

パワーズの重い拳が上条の腹にはいった

上条「グッ！！ガハッ……」

更にパワーズはこう唱えた。

パワーズ「『神の威光は人を惑わす』」

そして……パワーズの姿が消えた。

ガッ！

音も気配も姿も、何も感じない風景の中から、パワーズの上段蹴りが上条の顎に入り、倒れ込んでしまう。

インデックス

「とつま！」

上条「来るなインデックス！」

上条に近寄ろうとしたインデックスを上条が止める。相手が見えない以上、インデックスに危険な目に合わせられない。

パワーズ「存外弱いものだね。」
夜の闇の中から現れたパワーズのが、さも面白いもの見るように言った。

闇の中から現れたパワーズに向かって上条は一つ聞いてみた。

上条「あんたに一つ聞きたい！なんで《ゲヘナのゲート》なんて言う魔術を発動しようとしたんだ！」

パワーズは笑って答える

パワーズ「明確な目的があった訳じゃないよ？ただ消したかっただけさ。」

強いて理由をいうなら、とパワーズは上条を見て言った。

パワーズ「イラついたんだよ。学園都市こくえんで笑っているやつらがさ、だから消そうと思った。それだけさ」
パワーズはまるで玩具で遊ぶ子供みたいな理由で学園都市を消そうとしてた。

上条「たった…それだけ？」

上条は目を見開いて敵の姿を見る。その姿をみたパワーズは口を歪めて

パワーズ「ああ。そうさ。それだけの理由さ。」

飄々と言った。その言葉を聞いた上条の中から生まれたのは《怒り》。

怒りのままに上条はパワーズに向かって叫ぶ

上条「ふ、ざ、けんなよテメエ!! そんな自分のエゴのために、みんなを傷つけようとしたのか!!」

パワーズ「ああ。そのどこがいけない？」

またしても飄々と返したパワーズに向かって、上条は拳を握って叫んだ。

上条「ふざけんじゃねえ!。お前の勝手な理由エゴのせいでみんなが傷つくってんなら...まずはそのふざけた幻想をぶち殺す!!」

少年達は戦う。

守るための拳を、戦うための刀を握って。

譲れない信念を胸に抱いて

苛烈な戦いが、今、始まる。

戦う理由（後書き）

上条「さて、今回はオレ達か。」

インデックス

「とうま、作者はどうしたんだよ？いきなりいなくなるし…」

上条「さあ…？そのうち帰ってくんだろ。」

インデックス

「それととうま、お腹減ったから何かちょうだい」

上条「インデックス、無理を言っでは言っていないかん。無理を。いくら何でも無理だ」

インデックス

「うー、お腹減ったお腹減った！！！」

上条「ぎゃああああ！」

ミュ「……次回、本格推理委員会 『鉄と青銅の鎖』」

リユウ「お楽しみ〜」

鉄と青銅の鎖（前書き）

バトルです！

上手く書けなかった…っ！

鉄と青銅の鎖

オレ「うおおおっ！」

雄叫びと共にオレはドミニオンに向かって走り出した。

それに対し、ドミニオンは横に構えた二メートルはある刀を反対側に向かって切り返す。

ドン！

その音と共にオレはドミニオンの懐に全力で突っ込んだ。飛天御剣流の”神速”なら次の攻撃がくる前に一撃をたたき込めるからだ。

ただし、

それは普通の戦いだっただらの話だ

ドミニオンは持っている刀を上段に構えた。二メートルもある刀の圧倒的な質量で切り裂くために

ゴウ！

圧倒的な質量を持った刀がオレの上に振り下ろされる……！

オレ（……その攻撃を待ってたんだよ！）

オレは体を半歩横にし、刀を回避。

そしてその勢いを殺さぬまま……

オレ（飛天御剣流！龍巻閃！）

逆刃刀をわき腹に叩きつけた。

ドミニオン「ぐっ！」

しかしまだ攻撃は続く

オレはすぐさま逆刃刀を持ち直し、ドミニオンの顎に『龍翔閃』を、間髪いれずに今度は『龍追閃』を繰り出す。

一度の隙で飛天御剣流を一気に三撃、普通の人間なら確実にここで気絶する。

しかし、ドミニオンはまだ意識を失わない。

ドミニオン「ふんっ！」

右足を移動させ、左足を軸に二メートルはある刀を振り回す。

オレ「!!」

右からきた凶悪な一撃を空中にいるオレは避けることができない

オレはとっさに逆刃刀を巨大な刀にぶつけるが、いくら強いからと言ってもまだ12歳の体。簡単に吹き飛ばされてしまう。

一気にバランスを崩し、遠くに飛ばされる。

ドオン！ガッ、ゴロゴロ…

受け身を作る間もなく、地面に激突した。しかし、すぐに立ち上がり敵を見据える。

ドミニオン

「ほお…。私の『斬馬刀』の攻撃を受けてもまだ立ち上がるか。」

『斬馬刀』

戦国時代、馬ごと相手の武将を斬るために生まれた刀である。

しかし、あまりの大きさと重さによって『斬馬刀』を持たず、ましてや使いこなせた者は当時いなかったという『超重武器』の一つである。

ドミニオン「まあ今は魔術も使っていないからな。波状攻撃による連撃は逃れたか。」

オレ「何が波状攻撃だ。その斬馬刀の柄にある天使の彫刻に『天使の力』^{テレスマ}を流して刀の刃の部分から斬撃を撃つたんだろ。」

オレは苦々しげな表情でドミニオンを睨みつける

ドミニオンは薄笑いを浮かべ

ドミニオン「流石は『闇の魔術師』。あの事件で生き残った頭脳は伊達ではないな。しかし戦いは机の上の紙とは違う。一分一秒が以前の運命を決める」

対するオレも笑みを浮かべ、自分の頭を指でトントンと叩き

オレ「この頭は別の使い方だってある…。例えば、瞬時にテメエの攻撃を回避する方法とかな」

ドミニオン」ならば試して見ると良い。貴様の希望の儂さをな」

『resembli2269』・・・ドミニオンは再び、己のもう一つの名を名乗った。

ここからは魔術師としての戦いを始める、と暗に告げて

『hopli666』・・・少年も、たった一人の少女の元に帰るといふ覚悟を込めて、もう一つの己の名を名乗った。

魔術師の戦いは第二幕を迎える。

.....

パワーズ「神の威光は人を惑わす」
・・・また消えた。

上条は必死に辺りを見回し、気配を探る。しかし、気配すらも消してしまうこの魔術は、その意味すらない。

だが、彼の目的は別にある。

最も簡単に効果的にパワーズを捕まえる方法、それを実行するために

パワーズ（私の姿は誰にも見えない。このままさっさと撲殺するつもりです）

決して見えない魔術を使う魔術師は、闇の中で思う。そして・・・上条の腹を殴った。

上条「ぐはっ!?!」

上条は不意の攻撃に身をよじる。しかし、これぐらいで攻撃は止めない。続けて顔面に回し蹴りをしようとしたところで・・・

ガシッ!!

腹に拳がめり込んだ上条の手によって、自らの拳を掴まれる。

上条の『幻想殺し（イマジネブレイカー）』の効果でパワーズの魔術が打ち消され、姿が現れる。そして、上条が左手でおもつきりパワーズの顔面を殴った。

パワーズ「ガハッ!」

斬馬刀なら、その質量か、切れ味で相手は確実に殺せるからだ

ドミニオンは斬馬刀を振り下ろした。しかし零牙は避けようとしな
い。

ドミニオン（???何を狙っている?）

ドミニオンがそう思った矢先、零牙の姿が消えた

あまりの速さに一瞬戸惑ったドミニオンだが、すぐに目で追いか
始める。

しかし彼の目には、速水零牙の姿を追いかけるだけで精一杯だった。
あまりの速さに刀を振るうのを躊躇うドミニオン

オレ「しっ!」

逆刃刀の一撃がドミニオンの体に入る。

ドミニオンは攻撃が来た方向を狙って刀を振るう。が、しかし

オレ（次は左切り下げの攻撃）

ブン！

オレ（続いて横薙、逆胴）

ブン！

オレは攻撃を見切っていた。そして――

オレ（ここで斬る！）

ドミニオンの右肩に一撃入る。

痛みがはしつたのだろう、ドミニオンの顔がわずかに歪む。

オレ「どうした？手負いでもこれぐらいは出来るぜ？」

更に攻撃を見切つてすんでの所で回避。再び距離をとった。

ドミニオン（こいつ…なんて速さだ！常にオレの死角ギリギリのところにはいやがる！）

オレは遠近左右、ドミニオンを錯乱させるためにあらゆるところを

走っていた。

ドミニオン「くそっ！」

ドミニオンが斬馬刀を振るも難なく回避され、そして目にも止まらない速さで攻撃する。

オレ「『龍巻閃！』『龍追閃！』『龍巢閃！』『龍翔閃！』」

この攻撃は確実にドミニオンを追い詰めていた。

しかし、

ドミニオン「なめるな！クソガキがあああ！！！！」

ドミニオンから眩い光が放射され目が眩んだ。

そんな一瞬の間隙についてドミニオンは『魔術』を振るう。

ドミニオン「『聖なる光は闇を浄化する！』」

斬馬刀に乗せて放たれたその魔術はオレの身体を引き裂いた。

さて時は少し戻り、
軟禁状態にあるミア達は…

アンチスキル
警備員A

「なに！？もう一度言ってみる！」

ミア（何かあったのかな？）

なにやら無線機を持って驚愕の表情を浮かべている警備員を見て私はそう思った。

ミユちゃんとリュウ君も同じことを考えたらしく警備員の様子を見ている。

警備員B「何があった？」

警備員C「『速水零牙』が見つかった。現在、侵入者と交戦中らしい。」

警備員A「う、嘘でしょ！？なんで自ら危険な目に会いに行くの？」

酷く狼狽する警備員。まさかレイになにか…？

リュウ「なにかあったんですか？」

リュウ君が警備員に聞く。するとその警備員は腹立たしげに

警備員B「速水零牙が侵入者と交戦しているんだよ。しかも、ほぼ互角らしい。」リュウ「すげえな」

ミュ「…流石。」

二人が感嘆の声を上げるが、私はただただ心配でしかたなかった。

- - もしかして、大怪我して帰って来るかもしれない。

レイに冷たい事を言われたが、それでも心配してしまう。

- - 私ってバカかな

ふと思う、そんな考え。

でも今はただ無事でいることを願うしかない

白髪の少年の無事を祈ってただ少女は待つしか出来なかった。

.....

オレ「かはっ…、げはっ…」

ドミニオン「ほう、私の魔術をもろに食らってまだ意識があるか。」

ドミニオンの魔術を食らったオレは血を吐いていた。斬馬刀で体を切られるのだけは回避したが、身体に力が入らなくなって、戦えそうにない。

ドミニオン「さて、お前も私の魔術の影響で力が入らないようだが…。どうする？今からでも我々の仲間にならないか？」

ドミニオンがそう言った。しかしオレは

オレ「断る…」

血反吐を吐きながらも、必死に立ち上がった。

オレ「オレは…約束したんだ。『必ず帰る』って…、だから…断る！」

ミアとした、たった一つのちっぽけな約束。しかしオレはそれを破ることが出来なかった。

ドミニオン「そうか…、ならば予定通り、貴様を半殺しにしても連れて行こう。」

そう言ってドミニオンは斬馬刀を持ってオレに突進してきた。

逃げられない…

あまりの速さに動くことも出来なかった。思わず目を閉じてしまうオレ。

そして、斬馬刀の凶悪な一撃が入る瞬間、

フォン

オレの体は虚空へ消え去り、姿を消した。

そして、

黄泉川「総員、打てえええ！！！！」

少し遠くから聞こえる警備員の声。オレは、どうなったのだろうか…。

白井「全く…、格好良く決めたんですからあっさりと勝って欲しい
ものですわ。」

恐る恐る目を開けるとそこには白井さんの姿があった。

白井「けど、あなたのおかげで私達ももう一度戦う気力が戻りましたわ。」

…その目にはもう、さっきまでの恐怖はなく、使命感溢れる『諦めない心』が宿っていた。

白井「ここからは私達に任せてくださいな。必ずあなたの約束を守り通してみせますわ」

近くでは必死にドミニオンを止めようとしている大勢の人間がいた。

- 彼ら一人一人の顔に『恐怖』の色はない。

オレ「はっ…！さっきまでびびってた人に言われたくないね…。」

そんな白井さん達を見ていたオレは、なぜだかわからないが急に力が湧いて来たような気がした。

自然と笑みが浮かび、しっかりと両足で立ちあがり――

オレ「――でも、おかげでアイツを倒す方法を見つけました。」

オレはその言葉に揺るぎない自信と確信を得てこう言った。

オレ「――やりましょう白井さん。もうアイツの好き勝手にさせない。ここから一気に逆転してやる。」

魔術師と能力者

相容れない存在である二つは今一度、倒すべき相手のために手を取り合った。

――

当麻「ーったく、どうするかなー？」

さて、こちらはあっけなく『天地逆転』の魔術師、パワーズを倒した上条とインデックス。

今は倒したパワーズをどうすべきか考えている。

上条「うーん。やっぱりなんか縛った方が良いか？」

インデックス

「でも縛るものなんてないんだよ。とつま」

うーん。と再び思案顔になってしまいう上条。

そうしているうちに…

パワーズ「う…うう…」

上条（やべっ！目を覚ましやがった！）

とりあえずうつ伏せに倒したパワーズの上に乗り、右手で関節を極めて身動きが出来ないようにした。

パワーズ「くそっ…！」

目覚めて身動きが出来ないのがわかったのか、パワーズは悪態を付くだけで何もしようとしない。

上条（…変だな？普通こうなったら抵抗するものじゃないか？）

パワーズの不自然なくらいの無抵抗さに違和感を覚えた上条だったが、その答えを出すことはなかった。

ドスン×2

???「…間抜けだなパワーズ。」

まさかこんな高校生のパンチ一発で気絶するなんてさ」

パワーズ「私はインドア派なんだよ。こつこつ拳を交える戦いは嫌いなんだ」

???「はっはっは！お前は自力で学園都市から出る。オレはドミニオンの方を確認してから出る」

パワーズはちらつと気絶しているインデックスを見て

パワーズ「インデックス禁書目録はどうする？連れていくか？」

???「いや、そいつを連れて行くとイギリス清教に睨まれるから止めておこつ。」

パワーズ「あいよ。」

そう言つて、パワーズは学園都市の夜の中に消えて行った。

「……さて、ドミニオンの方はどうかな？」

.....

吹き荒れる弾丸風雨の中、警備員達は不思議な気持ちでいた。
アンチスキル

さっきと同じ敵と戦っているはずなのに、さっきみたいな恐怖が
気にならなかったからだ。

ドミニオン「くっ……」

そしてそれはドミニオンにも伝わっていた。

さっきとは違って今度の攻撃は、

わずかだが確実にドミニオンを追い込んでいた。

ドミニオン「しっ……！」

再び魔術で『見えない斬撃』を打ち出し、近くにいた敵をまとめて
なぎ払う。

しかし、彼らに恐怖が襲ってこない。

むしろ攻撃の間を止めようとはせず、戦意をさらに燃やしていた。

ドミニオン（『希望』…）

ドミニオンはわかっていた。この現象を生み出したのは『速水零牙』だと

ドミニオンは戦いが始まる前に零牙が何を言っていたかを思い出していた。

レイ

『絶望しかない人に再び希望の光を与える！この信念と共に！』

ドミニオン（あのガキ…本当に希望を与えやがった！もう戦えないと思っていた連中にここまでやらせるとは…）

ドミニオンは齒噛みして周りを見る。どの顔にも『絶望』なんてものは感じられない。

ドミニオンは思索する。本当に彼らを倒せるのか？と、

しかしその答えを出す前に異変が起こった。

警備員が攻撃を止めたのだ。

どういう訳だ？と訝しむドミニオンだが、その答えはすぐにでた。

オレ「言ったよな、『絶望しかない人に希望を与える』って。」

警備員の包囲網から少年が出てきた。 - - そう、白髪の少年、『速水零牙』が

オレ「ここにいる奴らの希望は戻った。 - - 後はミアの希望を失わないようにするだけだ。」

∴諦めるドミニオン。お前の幻想うたかたは実現しない。「

ドミニオン「∴だからといって私が諦めるとでも？」

ドミニオンは少年に向かい合って刀を構える

ドミニオン「私を諦めさせたいのだったら、力づくでやってみせろ」

オレ「∴わかった。」

魔術師の死闘は終幕を迎える。

一方、ホテルにて軟禁されているリュウ達は…

リュウ「しかし考えて見るとさー、オレ達って何も知らないよな。」

ミュ「……何が？」

リュウ「レイの事だ。アイツ、自分について何も語らないだろ？」

ミュ「……確かに」

リュウ「アイツ、何か隠しているっばいからさ。気になっているんだよなあ……」

ミュ「……零牙が何も話さなくても、私達は友達。」

リュウ「まあな」

ミュウ「……多分、話したくない理由があるんだと思う。だから、無理やり聞いちゃダメ。」

リュウ「…そうだな。今はアイツの昔の事よりも」

ミュウ「……零牙が帰ってくる事を祈った方が良い。ミアちゃんのためにも」

リュウ「ああ。」

少年が無事である事を願い、友は少年の帰りを待つ。

……
オレ「しっ……」

オレは上空に跳んでドミニオンの真上をとる。

ドミニオン（まともに『龍追閃』を放つつもりか？この斬馬刀相手に！）

ドミニオンにとって上空うへを取られることは危機ではなく、好機と見
ていた。

なぜなら

零牙の体重なら、上空からの攻撃は斬馬刀で弾き落とせるからだ。

オレ「『飛天御剣流!』」

ドミニオン（その攻撃は読めている!）

ドミニオンは斬馬刀を零牙のいる上空へ振るった。

しかし

そこに零牙の姿はなかった。

オレ「『龍巻閃!』」

代わりにドミニオンの左側から激しい痛みが襲う

ドミニオン「くっ…!」

すぐに斬馬刀を左薙に振るう。しかしそこには零牙の姿はなかった。

オレ「『龍巢閃!』」

今度は後ろから痛みが襲う。

ドミニオン（さっきと同じ手を使っているのか！ならば…）

ドミニオン「『聖なる光は闇を浄化する！』」

今度も光によって目眩ましをしようと思わせる。

眩い光がドミニオンから放射される…

だかしかし

オレ「効かねえよ！！」オレは逆刃刀を振るい、ドミニオンの顎に向かって逆刃刀を振るう。

攻撃に入る前、逆刃刀を鞘に戻して一撃必殺の抜刀術の状態にし、さらに体を目一杯捻り、回転による遠心力を上乗せして渾身の一撃を叩きこむ…！！！！

ドミニオン「はあああつつつつ！！！！！！」

対するドミニオンは斬馬刀を上段から振り下ろし対抗する…！！！！

ガキン！！！！！！

二つの刀が交じり、凄まじい衝撃が起こった。

- - - - -

???「ここか。しかしまあ人がわんさかいるなあ。」

謎の魔術師は学園都市の闇の中で密かに笑う。

???「さて、逃げる時に追いかけても面倒だ。周りにいる連中はしばしの間、眠ってもらおうか。」

闇の中の魔術師は行動に移った - -

- - - - -

二つの刀が交じり、凄まじい衝撃が起こった後、

バキン!!!

ドミニオンの斬馬刀だけが折れた。

オレの逆刃刀はひび一つ入っていないにも関わらず。

ドミニオン「なっ!?!」

ドミニオンはただ驚きしか浮かばなかった。刀の中でも最大級の質量を持つ斬馬刀が、ただ峰と刃が逆なだけの刀に破壊されたからだ。

ドミニオン「貴様…何をした!?!」

オレ「…お前はこの『学園都市(この街)』を舐めすぎている」

刀を突き付けながらオレは説明し始めた。

オレ「あの瞬間、オレの逆刃刀がテメエの斬馬刀に触れる瞬間、斬馬刀に”楔”を打ったのさ。」

どんな武器だろうが一点に集中すれば破壊できるからな。」

ドミニオン「バカな…、貴様が斬馬刀に楔を打つ暇などなかったはずだ!」

オレ「楔を打ったのはオレじゃない。白井さんだ」

白井さんの能力は『テレポート空間移動』、三次元的な制約を無視した一二次元の攻撃が出来る。

その能力でテメエの斬馬刀に楔を打ったんだよ。」

そこで一度目を瞑り

オレ「テメエの負けだ。オレの事は諦めて大人しく帰れ。」

わかりきっている勝利宣告をした。

ドミニオン「ふん…。」

しかしドミニオンは不敵に笑う。まだ戦えると言わんばかりに。

ドミニオン「貴様はバカか？私にはまだ魔術がある。私はまだ負けていないのだよ。」

そして右手をオレの前に突き出した。その顔は勝ち誇った表情をしていた。

オレ「いや。」

しかしオレは逃げなかった。――なぜなら逃げる必要がないからだ。

オレ「テメエの負けだよ。ドミニオン」

ジャラ…

突然、ドミニオンの周りから鎖が擦れる音が聞こえた。

ジャラ…ジャラ…

…そしてその音は次第に大きくなり

ジャラジャラ！ピン！！

地中から数本の鎖がドミニオンの体を縛り付けた

ドミニオン「ふん…。こんな鎖がどうした？こんな物、私の魔術で…」

ドミニオンは自らの魔術で鎖を破壊しようとした。

しかし、鎖は壊れない。それどころか魔術すら発動しない。

オレ「なあ、『ダンテールの幻』って本、知ってるか？」

ドミニオンがなんとか鎖を破壊しようとしているのを見て、オレは語り出した。 - 自身が使った魔術について

オレ「12世紀ぐらいにでた本なんだけどさ、その本の作者は夢で『ルシフェル』が板に鎖で縛り付けられて地獄の業火に焼かれているのを見たらしいんだ。」

オレは、まるで子供に童話でも聞かせるように笑って語っていた。

オレ「考えてみる。確かに『ルシフェル』は『ミカエル』に負けたが、元々『ルシフェル』は天使の中でも最高位の『熾天使』だったんだぞ？

その熾天使でさえ破壊できない鎖 - 『鉄と青銅の鎖』を人間が破壊できる訳ないだろう？」

ドミニオン「だとしても貴様はどうやってこの鎖を構成^{つく}った！

とても個人の魔術師が構成できる範疇^{レベル}を超えている！！」

ドミニオンは声を荒げて言った。しかし零牙は冷静に返した。

レイ「バカかテメエは？今が”夜”だって忘れたか？

夜は『闇の魔術』が使いやすくなる。

そして、イギリス清教にはアイツがいる。世界で20人といない聖人のアイツがな」

ドミニオンは驚愕の表情をしていた。その表情はまさに”予想外”だと露骨に語っていた

オレ「そう、《神裂火織》だ。

神裂が使う『天草式』の魔術の特徴 - その場にある全てを利用した『多重構成魔法陣』を利用したのさ。

魔法陣一つ一つは脆弱なものだが、それらで更に大きな魔法陣を描いて、魔法陣の意味そのものを変質させた。

更に言うとな、ここにある武器や破壊した建物にある魔術的意味も最大限利用させた。おかげで無事に発動できたよ。」

オレは勝ち誇ったな笑みを浮かべた。ドミニオンは悔しそうな表情を浮かべ

ドミニオン「貴様…まさか最初から…」

オレ「よくわかったじゃねえか。…さて、そろそろお終いにするか。『施錠』」

オレが『施錠』と言った瞬間、ドミニオンを縛り付けていた鎖がドミニオンの体を巻き始めた。

ドミニオン「速見…速見零牙アアア！！！！」

オレの名前を言ってドミニオンは鎖で封印された

.....

オレ(さて、コイツどうするかな?)

オレの目の前には鎖で芋虫状態にされたドミニオンがいる。

さっきの会話は魔術を使えるものしかわからないよう工夫しておいたし、『鉄と青銅の鎖』も同じように工夫しておいたので別段問題はないはずだ

オレ(ま、後で拷問して『天地逆転』について吐かせるか)

なんて呑気に考えていたら。

????「まさかドミニオンが負けるとはな。『速見零牙』、なかなか強いじゃねえか。」

突然、オレの前に若い男がいた。

そいつは金髪のミディアムヘアで片目が不自然に金色になっていた。

「????」なに、今日にうちのバカ共を回収しに来ただけだ。戦う気はない」

・・・そして不自然なくらい異様な存在感を出していた。

オレ「アンタ…誰だ？」

ケルビム「私の名は『ケルビム』、ではまた会う時までさらばだ。
速見零牙くん」

そう言っただけケルビムはドミニオンを掴んで去って行った。

その後・・・オレは異様な疲労感に襲われ、そのまま意識を手放した。

続く

鉄と青銅の鎖（後書き）

上条「なあ…インデックス…」

インデックス

「なに？とうま？」

上条「なんか…オレ達の出番、少なくてね？」

インデックス

「とうまはまだいいよ。わたしなんてセリフ一桁なんだよ？」

御坂「あんたら…、出番あるだけ良いじゃない…私なんて出番ナシ
よ。」

佐天「御坂さんはまだ良いじゃないですか。私なんて、『あとがき』
にすら出番ナシですよ…」

夢幻「いやあ、皆さんすみません。出番がなくなってしまって…」

インデックス

「あ、作者。」

御坂「どこ行ってたのよ」

夢幻「次回の構想テロップを考えてた。」

佐天「ふーん。それで？」

夢幻「零牙が活躍しすぎだから、とある方法を使って少し出番を消す」

上条「大胆な告白だな」

夢幻「あとは……、続きを読んでください！」

御坂「作者？私の出番はあるのよね？」

夢幻「ありますあります。」

御坂「ふーん。嘘だったら承知しないわよ？」

夢幻「わかったよ。じゃあ次回予告をよろしく」

上条「よし、ここは本家本元『禁書目録』の主人公たるオレが……」

御坂「いや、クロスオーバーしてる『超電子砲』の主人公である私が……」

「……（睨みあい）」「」

夢幻「…面倒くせーから上条さんよろしく。」

上条「よし！次回 本格推理委員会 『戦いの後……』」

御坂「お楽しみに〜」

戦いの後…（前書き）

そろそろ定期テストなのでお休みさせていただきます…。

戦いの後…

昨夜、ドミニオンの死闘後、オレが目覚めたのはオレ達が止まっているホテルのベットだった。

どうやらあの後白井さんがオレを送ってくれたらしい…。後でお礼を言わないとなあ。

……で、今オレは……

ミア「着いたね。」

オレ「ああ。」

リュウ「（ジタバタ）」

ミュ「（ガシッ）」

オレ「…なあ、ミア…」

ミア「何？」

オレ「一つ聞いて良いか？」

ミア「うん。」

オレ「じゃあ聞くぞ。

…なんでオレの関節を極めている？」

ミア「こうでもしないとレイはすぐどっか行っちゃっから。」

オレ「どこにも行かないよ…。」

ミア「信用出来ない。昨日だってこんなに怪我して帰ってきたもん。」

オレ「……………」

そう言ってチラッと脇腹を見る。確かに包帯が巻かれていて痛そう
だ。

ミア「……………だから今日は離さない。」

はあ…、と諦めのため息をついて関節を極めてまま、昨日の約束を果たすために第三学区の遊園地へ…

単純に考えればデートなのだが、傷のせいで関節を極められて痛い。

うう…せめてもう少し優しく接して欲しい…。

- - - - -

そのとき、零牙達の近くの植え込みでは…

御坂「……行ったわね」

ガサガサガサッ

佐天「ふう〜」

初春「相手にバレないように隠れるって、意外に大変ですね」

白井「そうですね。さて、零牙さん達は…」

そう言いながら植え込みの中から出てきたのは4人の女子中学生。全員、なぜか双眼鏡を持っている。なぜ彼女達はそんな物を持っているかと言つと・・・

白井「今朝方、上層部うへから『これ以上、速水零牙が事件に巻き込まれないように監視してる』なんて命令が来ましたが…、なんでお姉様までここにいるんですの?」

学園都市を守る治安部隊の一つ、『風紀委員ジャッジメントに属する』白井黒子』はそう言つて自分の隣にいる少女を見る。

一方、『お姉様』こと、『御坂御琴』は笑いながら

御坂「こういう監視とかつて、人手があつた方が良いでしょう? 初春さんと黒子だけじゃ大変かなあ、つて思つて来たのよ」

そう言う。しかし本当は、彼女が収集しているカエルを模したマスコット、『ゲコ太』のキャンペーンがやってるの知つたから来たのだが…、そんな事を知らない白井はただひたすら感激の涙を流していた。

佐天「ちなみに私は、なんとなく面白そうだと思つたから来たよ」

とまあそんな訳で、零牙達を尾行かんしする彼女達も遊園地の中に入って

いった。

.....

ミア「遊園地と言ったらまずあれだね。」

そう言っつてミアの目線の先にはジェットコースターがあつた。

ミュ「……昨日乗つた時は結構面白かつた。」

ミア「本当？じゃあ早速並ばー！」

そう言っつてガイガイとオレの（関節を極めた方の）腕を引っ張つて行くミア。

レイ「ミア！あまり早く動くとオレの関節がつ……！！！」

リュウ「なんでオレまで関節を……。」

ミュ「……逃がさない」

まあ、そんな訳で最初はジェットコースターに乗る事に

一方、零牙達を尾行している御坂達は…

佐天「初春、零牙君達はジェットコースターに行つたよ」

初春「了解。このまま監視を続ける」

御坂「…何やつてるの？初春さん、佐天さん…？」

佐天「えっ？なにって普通、尾行することになったらやりませんか？刑事の張り込みごっこ」

双眼鏡を外しながら御坂に言う佐天。言わずともすでに尾行する事にノリノリである。

そんなノリに付いていけないのか、苦笑いを浮かべながら御坂は白井の方を向く。

御坂「アハハ…ねえ黒子、ちょっと聞きたい事が…」

黒子「何してるんですの二人共！早くしないと害者が逃げてしま^{ガイシヤ}い

ますわー!!」

初春「了解です白井さん!」

ザザザザッ!!

まるで本物の刑事（ここでは『アンチスキル警備員』だろうか?）のような速さ
で零牙達を追いかけた白井。

そんな様子にちよつと疎外感を味わった御坂だった。

- - - - -

ミア「…レイってジェットコースター初めて?」

ジェットコースターの待ち時間の中、ミアがそんな事を聞いてきた。

オレ「ジェットコースターどころか遊園地自体初めてだ」

ミア「そうなんだ!」

……「このジェットコースター結構速いらしいよ?」

オレ「頼むから恐怖心を煽る事を言わないでくれ……」

係員「では次の20名のお客様、どうぞ〜!」

係員が呼んだため、オレ達はジェットコースターに乗ることに。う
う…楽しみのような、そうでないような…

ガタン!ガタガタ…

ジェットコースターがゆっくりと最初の山まで進む。

そして…山を越えた瞬間

ミア「イエイー!」

リュウ「イヤッホーウ!」

ミュ「……」

オレ「ノオーツ!」

ジェットコースターは速度を増してレーンの上を進んで行く。

ミア「イェーイ!!」

リュウ「イヤッホーウ!!」

ミュ「……」

オレ「ノオーツ!!ノオーツ!!」

ジェットコースターは一回転したり、右に左に連続で曲がったり、うねうねとした山を登ったり降りたり…

ミア「レイ!!楽しいね!!」

リュウ「最高だぜーい!!」

ミュ「……」

オレ「ノオーツ!!!!」(若干涙目)

…そしてジェットコースターも最後の方になった時、悲劇は起

こった

ミア「そろそろかな？」

オレ「え？なにが？」

リュウ「始まるぜーい！！学園都市の開発したジェットコースターの真の楽しいところが！」

オレ「え？どゆこと？」

ウィーン

・・・突然、ジェットコースターの後ろからブースターが出てきた。

一気にオレの顔色が青くなる。まさか……

ブオオオオオオオツ！！！！！！

ジェットコースター、ブースター発動。

一気に速度上昇。か、かなり怖い……！

ミア「アハハハッ！イエーイ！」

リュウ「イヤッホーツ！！」

ミュ「……」

レイ「……」（気絶寸前）

気絶寸前になりながらもジェットコースター（ブースター発動中）に乗っていたら、

オレ達の前に大きな山が見えた。しかも反対側、つまり落ちるの下にプールらしき物がある。

……そして何より傾斜が10度から15度くらいしかなかった。

オレ（待て待て待て！あれ死ぬだろ！？ちよっ…誰か助け…）

ガタン！ゴウ！！

ミア「風すごーい！！！！」

リュウ「イェーイ!!!」

ミュ「……」

オレ「……（気絶）」

バッシャーンツ!!

ゴウ!!

ミア・リュウ「イェーイ!!」

ミュ「……」

.....

ガタガタ…プシュー

係員「お疲れ様でした。出口はあちらです。」

ミア「はあく。結構楽しかったね！」

リュウ「昨日乗ってみて面白かったな。」

ミュ「……リュウ、怖かった。」

リュウ「嘘付け、全然怖がってなかったろうが。」

ミア「うふふ。レイはどうだった？…ってあれ？」

オレ「……（気絶中）」

ミア「あちゃー。レイには辛かったかな？大丈夫？」

オレ「う……う……はっ！」

（キョロキョロ）……終わってたか。早く出るぞ。次のお客様に迷惑だ。」

係員も迷惑そうな目線で見ているしな。しかしミアは…

ミア「（クスッ）レイ強がってるね。」

リュウ「だな。いい気味だ。」

ミュ「……ミアちゃんに心配かけた罰」

レイ「……早く行こう。ここにはあんまり居たくない。」

恐怖がフラッシュバックする前に去りたい…

ミア「レイ！また乗ろうね？」

オレ「ミアさん……ご勘弁を……」

うう……完璧に面白がっている。

リュウ「次はどこ行く？」

ミュ「……あの塔のアトラクションは？」

ミア「良いね！」

オレ「……もうジェットコースターなんか二度と乗りたくねえ……」

という事で次は『叫びの塔』に

一方、尾行を続ける御坂達は…

初春「あっ！零牙さん達がジェットコースターから出てくるのを発見しました！」

白井「よし、そのまま監視を続けますの。姿を見失わないように注意しますのよ！」

「了解！」

御坂（えーっと、ゲコ太のキャンペーンがやってる所は…）

なんだか、楽しそうだった。

……数分後、『叫びの塔』にて、

…このアトラクションは椅子に座って行つらしい。

オレ達は全員別々に、椅子に付いているシートベルトを装着した。

椅子は個人個人にあり、それを六つで一組となっており、それが四組、上から見れば真四角の形をしていた。

椅子が置いてあるところは四角い部屋になっていて、古めかしい廃墟みたいな雰囲気を出していた

係員「…それでは皆さん！『叫びの塔』をお楽しみください！」

フッ

電気が消え、アトラクションスタート。

グオン…

ゆっくりと椅子が上昇している……

そして、一度止まり…

……ゲオオオオ！

椅子が急降下。

ミア「キヤー！ツ……！」

リュウ「うおっ……！」

ミュ「……（ヒシッ）」

オレ「……（刮目）」

ドスン！ゲオオオオオ！

急降下が止まったと思ったら次は急上昇が始まった

ミア「きゃっ……！」

リュウ「うおっ……！」

ミュ「……（ホッ）」

オレ「ふあゝあ（あくび）」

・・・そして最上階（？）に着いた後

ピタッ…グオオオオオ！！！！

さっきより加速が着いた感じで椅子が落ちる

ミア「……………（フルフル）」

リュウ「うおおおおおっ！！」

ミュ「……………（ヒシッ）」

オレ「……………（刮目）」

グオオオオオオ！ドスン！！グオン…

急上昇&急下降を繰り返し、オレ達に恐怖を与えたアトラクションは終わった…

.....

ミア「…怖かった…」

リュウ「朝食食べた物が喉元まで逆流したぞ…」

ミュ「……（ヒシッ）」

オレ「…みんな大丈夫か？」

ミア、かなりグロッキーな状態になってるなあ…

ミア「うう…なんでレイは平気なの？」

オレ「『飛天御剣流』で慣れた。」

リュウ「ありえねえだろ…、それ。」

ミュ「……ずるい」

オレ「はいはい。次はあれしようぜ？」

そんな感じで、次は『ミラーラビリンズ』と言う、何とも平凡なアトラクションにすることに

.....

佐天「白井さん……」

初春「なんですか？佐天さん」

佐天「思ってたんですけど、なんで私達尾行しているんですか？」

白井「任務だからですわ」

佐天「いや、ただ監視するだけなら零牙君達にバレても良いような……」

初春「何言ってるんですか佐天さん！今の零牙君達はどう見ても”デート”してるじゃありませんか！？それを私達が壊す事なんて出来ませんよ！」

佐天「そ、そうだよね！」

御坂「（あ、あそこのポップコーン屋さんかあ！）よし必ず限定

ストラップGETするわよー!!」

佐天「御坂さん静かに! ってあれ? 御坂さんは...?」

白井「お、お姉様...、お姉様っ! どこに行ってしまったのですか
ー!!! お姉様アアア!!!」

そんな寸劇を繰り返していた。

.....

再び、待ち時間にて...

ミア「次のアトラクションはどんなの?」

ミュ「.....壁が全て鏡になっている迷宮から脱出するゲーム」

リュウ「しかも入り口が10個あって、一人一人別々に入るんだっ
てよ」

ミアが興味津々に聞いて、何かを閃いたような顔で

ミア「へえ〜。じゃあさ、誰が一番早く出るか競争しようよ!」

リュウ「いいね。オレが一番になってやる！」

ミュ「……負けない」

みんなが意気揚々となっているところに

係員「では次のお客様、どうぞ！」

係員が呼んだため、オレ達はそれぞれ別の入り口から入った。

…数分後…

ミア「あれっ！？またここ！？」

リュウ「あれ？ここどこだ？」

ミュ「……どっ？」

……みんな迷子になっていた。

オレ（なるほど、鏡の反射とトリックアートを併用して使っているのか…）

トリックアートとは、壁に見える部分は実は絵だったりする『騙し絵』の事だ。

このアトラクションでは鏡に見える部分は実は通路だったり、通路だと思ふ部分は実は鏡だったり…と、かなり難しい。

オレ（でも所詮は騙し絵。鏡の反射している風景を見て推理すれば、脱出するのは訳ない。）

鏡を見て推理して行くとすぐに出口に着いた。

オレ「ふう。みんなはまだか。メールでも送って脱出した事でも知らせるか。」

【from:零牙

題名:脱出したぜ！（キラーン！）

本文:脱出したよ。鏡にヒントがあるからがんばれよ。【

オレ「ミア、頼むから止めてくれ！オレの関節が一個増えそうだ！」

『ミラーラビリンス』から出たオレは後から出てきたミアに関節技をかけられていた…なぜに？

ミア「みんなを置いて一人でさっさと脱出するなんて…、レイなんか知らないっ！（グイッ）」

オレ「痛い痛い痛い！本当お願いします止めてください雅様！！なんでも言うこと聞きますから！」

ミア「…何でも言う事聞く？」

オレ「あ、いや、何でもってオレの出来る事には限りが…って痛い痛い痛い！！はい！！聞きます！何でも言う事聞きます！」

ミア「じゃあ、私欲しい本があるんだけどなあ」

オレ「買ってさしあげます！！！」

ミア「明日、『学び舎の園』にあるケーキ店の特製ケーキが食べたいなあ」

オレ「奢らせていただきます!!」

ミア「私、観覧車に乗りたいなあ」

オレ「乗りましょう!一緒に乗りますから関節技を…っ」

ミア「はいはい。(パツ)」

ミアが関節技を止めて痛みがなくなる腕、くう…ミアって関節技出来たのか?

リュウ「お、良かった。」

ミュ「……お待たせ。」

肩の調子を確認しているとリュウ達がやってきた

リュウ「レイ、肩どうした?」

レイ「ミアにきつい折檻を受けてな…」

するとリュウはオレの肩をちらっと見て

リュウ「関節技か？」

オレ「ああ。かなり痛かった……」

ミアにここまでの関節技を教え込んだのは一体誰何だろう……？

ミュ「……ミアちゃん、関節技、使えた？」

ミア「うん！教えてくれてありがとね！ミュちゃん！」

ミュ「（ブンブン）」

……今度は中級の関節技を伝授してあげる。」

ふと聞こえたしまった女子二人の会話を聞いて、リュウはオレに向
かって哀れむような目線で

リュウ「レイ、関節技の対処法教えようか？」

オレ「頼む。」

関節技を毎回極められては困るからな…。

ミュウ「ボソッ」……リュウを使って。」

リュウ「レイ、さっきの話は忘れてくれ」

オレ「薄情ものっ！」

ミュウちゃんの一言で即座に裏切る我が親友。涙ぐましい友情に本当に涙が出そうだ。

ミュウ「…そろそろお昼だね。」

ミュウちゃんが腕時計を見ながらそう言うてきた。

オレ「なんか食べるか」

リュウ「あそこのレストランとかは？」

そう言ったリュウは、丸太の外装をしたレストランらしい建物を指差した。ハンバーグとか売っているかな？

ミュウ「……おいしいかもしれない」

ミア「あれ？昨日二人が行った店は？」

「ミュウ……あんまりおいしくなかった。」

と、しょんぼり肩を落とすミュウちゃん。……どれほどまずかったの
だろう？

オレ「……それは残念だったな。で、どうする？いく？」

リュウ「グダグダ考えても仕方がないし、何より腹減った。」

とお腹に手を当てるリュウ。ミア達も特に異論はなかったので、そ
のレストランに行くことになった。

続く

戦いの後…（後書き）

夢幻「やっと更新できた…。」

零牙「お疲れ様」

夢幻「ああ。さて零牙、そろそろ『とある科学の超電磁砲』のクロスオーバーが終わるぜい」

零牙「そうか…、そう言えば夢幻よ」

夢幻「なんだ？」

零牙「一応聞くが、オレが《魔術師》としてまた学園都市に行ったりするの？」

夢幻「多分ないなあ…。お前の能力、チートだし…」

零牙「まあな…」

夢幻「さて、時間予告するか。」

零牙「わかった。」

次回 本格推理委員会

『ミアの想い』

夢幻「いつ更新できるかわかりませんが、お楽しみ〜」

少女の願いと揺れる少年の心（前書き）

どうも！久々の投稿です

なんかシリアスっぽい展開になっちゃったなあ…

少女の願いと揺れる少年の心

ミア「うーん…」

ミュ「……………」

オレ達が入ったレストランはバイクンク形式で、一定の料金さえ支払えば後は食べ放題らしい。

そんな魅惑的なレストランで女子二人がある料理を目にしてなにやら悩んでいる。

リュウ「……………二人とも、何を悩んでいるんだ？」

ミュ「……………ケーキ」

リュウ「は？」

ミュ「……………ケーキ、食べようかどうかで悩んでいる」

そう、彼女達の前には、なんともおいしそうなケーキがあった。二人はそれを見て悩んでいるのだ

リュウ「食べちまえば良いじゃねえか。そんなの」

ミュ「……はあ。」

リュウ「ミュ、なんだその『このバカ、何もわかってない』みたい
なため息は」

ミュ「（コクリ）……リュウは何もわかってない」

リュウ「あん？」

ミュ「……これは、『女の子の悩み』だから。」

リュウ「……まさかお前ら、それが理由か？」

無言のままに頷く二人。やっぱり女の子なんだなあ。としみじみ思
う。

リュウ「はあ……。このままだといつまでも食べられない。レイ、よ
ろしく。」

オレ「はいはい。」

そう言っつてミア達のところまで行き、ためらいなくいくつかのケーキを皿に乗せる。

ミア「あ、あ、あぁ〜！」

ミュ「あ、あぁ…！」

ひよい、ひよい、とケーキを5つほど乗せて離れる。うん。色とりどりとはまさにこの事だろう。

リュウ「…レイ、それは食べ過ぎじゃね？」

オレ「何言っつてんだリュウ。これぐらい普通だろ？」

何を不思議がっている？普通これぐらいは食べてしまっただろうが…？

リュウ「普通ケーキは一度に5つも乗せねえよ。つーか、そんなに食っつてよく太らないな、お前。」

オレ「ん〜？そりゃアレだ。『完全記憶能力』の影響で脳が”糖”を欲してるんだよ。」

憶測で出した考えだが、常人以上の記憶能力を持つという事は、多分脳もかなりの速度でカロリーを消費するんだろう。

リュウ「ケーキも？」

オレ「ああ。それぐらいないと、糖が足りない。」

リュウ「……糖尿には気をつけるよ。」

オレ「もちろん」

糖尿に気をつけないほど糖は摂取してない。

ミア「や、やっぱり食べちゃお（ひよい）」

ミュ「……いただきます（ひよい）」

女子二人も決断らしい。よし！さっそく食べるぞ！！

.....

その頃、物陰に隠れて零牙達を監視している御坂達は…

御坂「……」

白井「お姉様…、もしか最初からそのストラップが目的だったので
すか？」

御坂「えっ？そんな訳ないじゃない。仮にも常盤台中学のエアースと
呼ばれるこの私が、そんな真似する訳ないじゃない。

……それより黒子？そろそろお昼だから、どこかでランチでも食べ
に行かない？」

白井「大丈夫ですわお姉様。すでにランチの準備は済ませてありま
すわ。

…初春っ！アレを出しなさい。」

初春「はいはい白井さん。えーっと、御坂さんは”こしあん”と”
つぶあん”、どっちが良いですか？」

御坂「初春さん…、これってあんパンだよな？」

佐天「監視中のご飯と言えば、やっぱり『あんパンと牛乳』だよな
」。」

御坂「そ、そうなの？」

佐天「はい！」

御坂「ふーん……。そうなんだ……」

白井「安心してくださいなお姉様。私、お姉様のために今まで食べてきたあんパンの中から一番美味しい物を買って来ましたわ。これならばきつとお姉様のお口にも合うことだと、この黒子、確信しておりますわ。」

ささお姉様。一口どうぞ」

御坂「ふーん。それじゃあ、いただきます。(パクツ、モグモグ……)」

黒子「……。(ゴクリ)」

御坂「(モグモグ、ゴクン) ……美味しい。」

黒子「そ、そうでございますよう!!お姉様!ささ、もっとガブツとこっちやってくださいまし!」

自信のあんパンを御坂に「美味しい」と言われ、テンションがほぼ最高潮に達した白井。

なんかもう、監視そっちのけでそれなりに楽しんでた。

.....

オレ「いやあ、食べた食べた。」

ミア「相変わらず良い食べっぷりだったね。」

オレ「まあ、アレぐらい食べないと体が持たないんだよ。うん。」

事実、『完全記憶能力』と『飛天御剣流』で常人以上のカロリーを消費するオレにとってアレぐらい食べないと体が持たないのだ。

ミュ「……次はどうする？」

オレ「ん〜。食べたばかりだし、ゆったりとしたのが良いかな？」

ミュ「……じゃあ、これなんかどう？」

そう言って遊園地のパンフレットを指差すミュちゃん。えっ〜と何々？

オレ「…これ？」

リュウ「ん？ああそれが。」

ミア「どれどれ？」

ミュ「……お化け屋敷」

それは、学園都市には180度似合わない正に場違いな『お化け屋敷』のアトラクションだった。

ミュ「……きつと楽しめると思う。」

自信満々に言うミュちゃん。リュウは昨日の事を思い出したのが、肩関節をしきりに防御していた

ミア「学園都市のお化け屋敷って、どんなのなんだろうね？」

オレ「そりゃあどうせ、チャチな物なんだろう」

リュウ「いや、結構怖かった。」

リュウが小刻みに震えながらそう言う。……お化け屋敷で何があったんだろうか？

ミュ「……絶対楽しめる」

ミュちゃんのこの自信の持ちよう。少し期待してみても良いのかもしれない。

ミア「よし！行ってみよう！！」

……

一方、監視を続ける御坂達は…

初春「白井さん！零牙さん達は、お化け屋敷の方に向かいました！」

白井「……（トリップ中）」

初春「あれ？白井さん？」

佐天「初春！零牙君達を見失っちゃおうよ！！」

初春「あっ！はい！」

白井「美味しい…。お姉様に美味しい…」

……当初の目的を覚えているのはこの中には、誰一人いないだろう…。

- - - - -

ミア「長い行列だね」

リュウ「なあレイ、今から良いから別のアトラクションにしないか？」

オレ「何言ってるんだよリュウ。たかがお化け屋敷だろ？」

リュウ「……ここはただのお化け屋敷じゃないんだ…っ」

なんだろう、何がリュウをそこまで恐れさせているのだろうか？

リュウをなだめつつ、長い行列を少しずつ前に進み、ついにオレ達の番がやってきた。

ミア「やっと順番が来たか〜。」

リュウ「ついに来てしまったか…。」

オレ（何があるんだ？）

ミュ「……楽しみ」

係員「それでは、学園都市ならではの恐怖体験をお楽しみください。」

係員に促され、いざお化け屋敷へ。

.....

お化け屋敷は廃病院を模した内装で、そこそこ雰囲気はでていた。

しかし、『お化け』みたいなものはなく、あるのは…

『ビシヤッ！ゴロゴロゴロ…』

『ギヤアアアッ！』

…といったような雷や女性の悲鳴が不意に聞こえるだけで、内容としては落第点だった。

オレ「なんか、つまんねえな…」

ミア「うん。悲鳴とかにはもう慣れちゃったし…」

リュウ「甘いぞ二人共。……本当の恐怖はこれからだ。」

リュウは怖くはないはずなのに、ものすごく怖がっていた。

ジ…、ジジ…

オレ「ん、なんだ？ノイズか？」

どこからともなく耳障りなノイズが聞こえてきた。

リュウ「ヤバいッ！（ダッ）」

そしてリュウはそのノイズを聞いた瞬間、逃げ出していた。

ジ…ジジ…

『…の、方が…、…だ』

耳障りなノイズの中から音声が聞こえてきた。声質はオレに似ているが、恐らく合成だろう。

オレ（リュウは何を恐れたんだ？）

この時、オレは油断していた。考えれば目の前の危機を察知する事が出来たのに…

『付き合うならやっぱり年上の方が良いな。胸も大きいし、なにより好みだ』

『ああ。そうだな』

…ふと、ノイズがかかっていた合成音声が必要な事を言った。しかも、オレとリュウの声そっくりな声で

ギチギチと、恐る恐る後ろを振り返る。

ミア「レイ……？覚悟、出来てる？」

ミュ「リュウ……、逃がさない」

阿修羅像さながらの怒りを彼女達から感じる。恐らく今捕まったら命の保証はない……！

バン！

タイミングよくお化け屋敷のトラップがはいる。よし、これで正気を取り戻して……

ミュ「……気が利く。」

ミア「お仕置きに持ってこいだね……」

二人は作動したトラップにあつた武器（金属バットと長刀）を手に取った。願わくばあの長刀の殺傷力がないことを祈る。

オレ「なるほど趣旨は180度違うが、死ぬほど怖いっ！」

『『うふ、うふ……』』

それぞれの武器を持って追いかけてきた二人。全力疾走で逃げるが、BGMの雷と悲鳴の音のせいでまるで殺人鬼に追われている感覚を味わった…

オレ「……リユウ、テメエ知ってたんならなんで教えなかった…？」

リユウ「……お前も昨日オレが受けた恐怖を味わって欲しくてな…。」

お化け屋敷に入って三十分後、どうにか二人を説得してお化け屋敷を出た

ちなみに、女子二人は近くのベンチで談笑している。

オレ「えーっと、今何時だ？」

腕時計を見て確認する。ホテルから遊園地までには電車を使うので、最終便（学園都市は学生の街なので、完全下校時刻と同じ）に乗り遅れないようにしなければならない

えーっと今は…

長針が6時を指していて、短針が4時を指しているから…

オレ「4時30分か。そろそろ遊園地から出ないといけないなあ…」
さっき、どこからかチャイムが鳴るのを聞いたから行列に並んでい
る時間も考えると次のアトラクションで最後になる。

オレ「最後、か…」

そういつて観覧車の方を見る。さっきミアと約束しちゃったからな
あ…

オレ「ミアー？」

ミア「はいはい？」

近くに座っているミアに呼びかける。ミアはトテトテをこちらに向
かってきた。

ミア「どうしたの？」

オレ「あー、そろそろ遊園地も出ないとだからさ最後に観覧車乗る

しげっ。」

ミア「あ…うん、そうだね…」

ミアは恥ずかしそうに頬を掻く。少し可愛い。

オレ「よし、行こう！」

ミアの手を取ってオレは走り始めた

.....

リュウ「………たく、レイのやつ、オレにガラでもないことやらせるなよな。」

ミュ「………リュウ、大丈夫？」

リュウ「大丈夫だ。はあ、全くまたお前と2人つきりで観覧車に乗る羽目になるとはな………」

全く最悪だ。後でアイツになんか奢ってもらおうか

ミュ「………リュウ？どうしたの？」

リュウ「あん？学園都市でも事件ばつかしだったからな、アイツにも良い思い出作らせてやりたいんだよ。」

ミュが不思議そうな顔をしていたからぶっきらぼうに言う。オレらしくないなあ……

ミュ「(クスツ)……リュウは優しい」

リュウ「ダアホウ、オレはいつでも優しいんだよ……二人に遅れるな。いくぞ」

ミュ「うん。」

全くガラにもねえ。あんな幸せそうな顔見ちったら、こつするしかねえじゃねえか。

- - - - -

そして、監視を続ける御坂達の方は

初春「白井さくん。カムバックスク(ゆさゆさ)」

白井「……美味しい……。お姉様に美味しい……。」

初春「白井さん！（パァン！）」

白井「はっ！私はいままで一体何を…」

初春「白井さん！やっと目覚ましたか〜。」

白井「初春？その手に持っているハリセンは、どこから持ってきたのですか？」

初春「横に置いてあったんです。もう《使ってくれ》と言わんばかりに」

白井「そ、そうですね…。それより状況はどうなってますの！？」

佐天「今、零牙君と雅ちゃんが手を繋いで観覧車に向かいました。」

御坂「なんか幸せそうだね〜」

白井「チ、チャンスですの！監視と言う名目でお姉様と、一緒に観覧車に乗れますの！（）」

佐天「そう言えば御坂さん、あの観覧車のゴンドラが頂上に達している間にキスすると、幸せになれるっていうジンクス知ってますか？」

御坂「そ、そうなんだ。へえ〜。(もう！なんであのバカの顔が思い浮かんじゃうのよ！)」

白井「……お姉様？まさかもう、あの観覧車と一緒に行くような間柄の殿方でもいらっしやいますの…?」

御坂「い、いないわよ！なに言ってるのよ黒子！」

白井(このあからさまな反応……。やっぱりお姉様にはそんな殿方が……)。

ふっ。誰かはわかりませんが、見つけたら即、この金属矢で体を穴だらけにして差し上げますわ……)

黒い笑みを浮かべる白井。ツンツン頭の少年の未来はどうなるのだろうか？

.....

驚く事にリュウが「オレはミユと乗るから、お前は先にミアちゃん

と乗ってる」「言ったので、オレは今、ミアと2人っきりで観覧車のゴンドラの一室にいる。

ミア「すごい。学園都市の街が遠くまで見えるよ！」

オレ「絶景と言えば絶景、だな。」

夕焼けに染まりつつある学園都市の風景を眺めながら、オレはミアと言葉を交わす。

・・・そしてゴンドラがかなりの高さ上がった時、突然ミアが聞いてきた。

ミア「ねぇ…。レイは何を隠しているの？」

オレ「ん？」

ミア「レイ、私達に何か隠しているかよね」

オレ「ははっ、何も隠してないよ。」

ミア「嘘。絶対隠してる。前に体中に包帯巻いてきた時も、今も、レイは『なんで巻き込まれたのか』話してくれないもん。」

ミアの追及は意外に鋭かった。しかし、これぐらいでボ口を出すオレではない。

オレ「そんなのどうだっていいだろう？あえて言うなら『信念を貫き通すため』、かな？

それよりか外見て見ろよ。綺麗な景色だぜ？」

ミア「レイ？はぐらかさないでちゃんと答えて」

ミアが鋭くオレを見る。オレはその視線から逃げるようにゴンドラの外を見る。

オレ「はぐらかしてないよミア。だから・・・」

ミア「レイ！」

ミアがいきなり大声で言った。その目にはつつすらと涙の膜を作っていた

ミア「教えてよレイ・・・、昨日レイが出掛けてからいきなり『アンチスキル警備員』は来るし、しかもレイが狙われてるって聞くし、やっと帰ってきたと思ったら全身傷だらけだし・・・、

私心配なんだよ。レイ、どこかで無茶やってるんじゃないかって…
傷だらけで倒れてるんじゃないかって。

教えてよ…、レイは何を隠してるの？なんでそんな傷だらけにならないといけないの？私にも…、私にも少しぐらい教えてよ…レイ…。

「

そう言ってミアはづっ、うっ、と泣き始めてしまった。

オレ（……最悪な男だな、オレは。）

- - あなたが心配なのよレイ。だから答えて。

いつだったろうか、遠い思い出の中で似たような言葉を聞いた覚えがある

オレ（ほんと、最悪だよな男だよなあ、オレってさあ…。）

オレは、泣いているミアに対して何も答える事が出来ない。オレはただ、俯いていることしか、出来なかった。

暗いムードのまま観覧車から降りたオレ達。外で待っていたリユウ達に不思議がられていたが、なにも話さなかった。

「オレは、このままミアを騙し続けて良いのだろうか？」

心に浮かんだ罪悪感を抱いて、オレ達は遊園地をあとにした。

「……………」

白井「…どうにか、終わりましたわね。」

佐天「…雅ちゃん、泣いていたけど、何があったんだろう。」

「……………」

その問いには誰も答えることができなかった。やりきれない思いを残しながらも、4人の女子中学生達は任務を終えて、遊園地から去っていった。

「白髪の少年は、いつまで無垢な少女を欺き続けるのだろうか…？」

続く

少女の願いと揺れる少年の心（後書き）

零牙「はあ…。どっしょ」

夢幻「ついに泣かせちゃったな。零牙」

御坂「女の子を泣かせるなんて最低だよ！」

白井「全くですわ。」

零牙「最低だよなあ…。オレはさあ…」

夢幻「えー。主人公がものすごく落ち込んでいるので、次回予告は…」

佐天「次回、本格推理委員会 『学園都市最後の事件』」

初春「作者がテスト終わるまで待っててね！」

夢幻「…さて、勉強勉強。（グスッ）」

学園都市最後の事件（前書き）

ついに最後です！

学園都市最後の事件

オレ「ここはどこだ？」

・・オレは真つ暗な闇の中にいた。深い深い、光も届かないような深海の中みたいな所だった。

オレ「ここになにが・・」

『ぐあああつー！』

ふと、どこからか男の悲鳴が聞こえた。それを皮きりに、様々な悲鳴が聞こえてきた。

『やめろ！やめてくれえ！』

『頼む…、殺さないで！お願いだから！』

『謝る！謝るから殺さないでくれええ！』

『いやああああー！』

『来るな来るな来るなああー！！』

オレ「この声は一体：？」

????「お前が今まで殺してきた者達の声だ」

突如、闇の中から一人の少年が現れた。その少年は・・・オレにそっくりな姿をしていた。

ただし、その少年とオレとは決定的に違う部分があった。

オレの髪の色は『白』に対し、少年の髪の色は、まるでこの闇をそのまま映し出したように『黒く』、

なにより、オレの目の色は『黒』だが、少年の目は鬼灯のように『赤かった』

オレ「お前は誰だ。」

闇零牙「愚問だな。オレは”お前”だよ」

少年は黒い笑みを浮かべせせら笑う。なるほど。オレの、闇、そのものか

オレ「ずいぶんと、懐かしい記憶思い出させてくれたなあ。これは何

かの嫌がらせか？」

闇零牙「いや？最近ぬるま湯に浸かってるお前に気を引き締めて欲しくてね。こつやつて思い出させたのさ。」

オレ「ほお〜？」オレがぬるま湯に浸かってる『ねえ？言ってくれ
るなあ』オレ？」

オレ自身に問いかける。ずっと前にオレは『ミアを欺き続ける』って、固くそう決心したから。

闇零牙「ああ。お前はぬるま湯に浸かってるよ。ミアに優しくしてもらって、本気で『普通の男の子として暮らせたらなあ…』なんて思っているお前はな。」

オレ「……」

闇零牙「わかってるはずだ。お前は幸せになんかなれない。今まで散々、魔術で人を殺めてきたお前はな。」

オレは言い返す事ができなかった。多分、心のどこかでそう思っているからか…それとも…。

闇零牙「わかつたなら、淡い『希望』なんて捨てるんだな。お前が持つてる能力は全部、《人を殺す力》なんだからな？」

オレ「…ああ。」

オレがそう言うのと、『オレの闇』は消えていった。

- - - - -

オレ「ん…」

オレが目覚めた時、すでに朝日は登っていた。

オレ「最悪な夢だったな…」

体を起こして布団から出ようとする。すると布団の横に誰かいる事がわかった。

ミアだ。気持ちよさそうにスヤスヤと眠っている

オレ（『ぬるま湯に浸かっている』か。確かにそうかもな）

イギリスにいた頃、オレを起こそうとした修道女シスターを危つく斬り掛けた事があったなあ…なんて思い出しつつ、そう思った。

オレ「こんな所で寝るんじゃないよ。ミア。」

と、お仕置きも兼ねてミアの頭に軽く手刀を落とす。

ミア「む…。スヤスヤ眠っている女の子に手刀を落とすとは、君は少々常識が欠けてるんじゃないかね？」

ミアが起きてそう言う。開口一番にこれだ。まさか狸寝入りだったのか？

オレ「じゃあなにか？『おはようのキス』の方が良かったか？」

あくびをしながら冗談をかます。こんな事平気で言える小学生なんて、オレだけだろうな…。

ミア「な、なに言って…／＼／」

オレ「なんだ。オレはてつきり、ミアが寝ているオレを襲いにきた

かと思っただが。」

沸騰しそうな程ミアが顔を赤くしている。まさか本当に襲いにきた訳ないよなあ。だってオレ達まだ小学生だし、そう言うのはまだ早いしな。

ミア「ち、違うよ！レイがなかなか起きてこないから、起こしにきただけだよ！！／／／」

しかし何故だろう。この言葉を聞いてものすごく悔しい気持ちが湧いてきた…っ！

オレ「ま、まあ、とにかく着替えるから部屋を出てって欲しいんだけど…」

ミア「あ、うん。じゃあロビーで待ってるよ。／／／」

ミア退室。ふむ、ちょっとからかいすぎたか？

ピリリッ！

とりあえず着替えようと服に手をかけたところで携帯が鳴った。…誰からだろう？

携帯を操作して電話にでてみる。非通知設定にしてあって相手が誰

なのか特定出来ない。

オレ「もしもし?どちら様ですか?」

???「おはよう速水零牙君。よく眠れたかね?」

電話の主の声は男とも女とも判別つかない声でオレの名前を言った。

オレ「…あんた誰だ?なんでオレの番号を知ってる!?!」

アレイスター

「私の名は、学園都市統括理事長『アレイスター』だ。勝手に君の番号を調べてすまない。実は君に頼みたい事があったね」

オレ「…何を頼みたいんだ?」

アレイスター

「それは、私の所に来て話そう…。第7学区の裏路地に私の使いの者がいるから、その者を尋ねるといい。」

オレ「…そいつの特徴は?」

アレイスター

「ふむ。桃色のさらしを胸に巻いた高校生だ。名を『結標淡希』という。一人で来るようにしてくれ。頼むよ……」

ブツ……。嫌な電子音と共にアレイスターとの電話は切れた。

オレ「学園都市統括理事長、か。なんだか知らないが行ってやるよ。」

オレは服を着替え、朝食をとり、ミアにバレないように書き置きを書いて、こっそり第7学区の裏路地に向かった。

オレが裏路地に入っすぐ、一人の女子高校生が目の前に現れた。

胸にさらしを巻いていて、軍用ライトを持っている……。統括理事長とやらが言った特徴と一致するためこいつが『結標淡希』なのだろうか？

オレ「……お前が『結標淡希』か？」

結標「ええそうよ。全く、『あの人』の命令だからって連れてくるのはただの子供か……」

いきなり罵倒。学園都市にはまともな性格な人が若干いないようだ。オレ「まあなんでもいいや。とにかくオレを統括理事長の所に転送してくれ。」

結標「言われなくてもやるわよ。」

結標はオレの肩に手をおいて、どこかに転送した。

.....

その頃、またしても零牙に置いてけぼりを食らったミアは…

ミア「……」

リュウウ（ミアちゃん、むくれてるなあ…）

ミュウ（……むくれてもしょうがない。気持ちは痛いほどよくわかるから）

かなりご機嫌ななめだった。さつきから一言も喋らず、ただムツとしている。

どうしようこの雰囲気…、と頭を巡らして考えるリュウとミユ。し
かしなかなか良い案が浮かばない。

御坂「あれ？みんなどうしたの？」

その時、御坂を始めとした4人の女子中学生がいた。

その姿を見た時、リュウは『助かった！』と胸をなで下ろしていた。

.....

オレ「ここは…？」

結標淡希に転送してもらった場所は、全くもって奇妙な所だった。

壁、天井、床：あらゆる所に機械が置いてあった。

床が光って道を照らしている…。

オレ（こっちに來い…と言ってるつもりか？）

警戒心を緩めずに道を進んでいく。すると、急に開けた場所にでた。
一面機械だらけだが、真ん中に謎の溶液で満たされた円筒形の機械

があり、その中に逆さまになっている人がいた。

アレイスター

「こんにちは速水零牙君。」

逆さまになっている人間は男とも女とも判別つかない声で話す。はつきり言っつてこの中にいるのが『本当に』人間なのか疑いたくなる

オレ「あんたが学園都市統括理事長か…。」

アレイスター

「そうだ。私が学園都市統括理事長、アレイスターだ…。さて、無駄話をする気はない。

早速君に依頼したいことを伝えよう。」

男とも女とも、聖人とも罪人とも見える人間、アレイスターは静かに言った。

.....

御坂「あれ？みんなどうしたの？」

佐天「見たところ、ミアちゃんがものすごく不機嫌なのは分かるんだけど。」

リュウ「いや、本当に不機嫌なんですよね……。マジで」

ミュ「……助けて欲しいです……」

しょんぼりオーラを漂わせて救助を求める。そしてお人好しな性格をしている（ここが彼女の一番の良い点でもあるが）御坂がミアに近づいた。

御坂「どうしたの？ミアちゃん。」

ミア「……レイがまたどっか行っちゃったんですよ……」

相当ご立腹なのだろうか、ムツとしたまま話すミア。一方、なんとなく理由はわかっていた御坂は打開策をうつ。

御坂「だ、大丈夫よ。零牙君、結構強いし。きっと何か訳があったんじゃない？」

ミア「……レイが勝手にいなくなると、決まって大怪我負って帰ってくるんです。全く、看病する私の身にもなって欲しい……」

この言葉を聞いて思わず無言になってしまふ御坂。8月7日の夜の戦いではひどい打撲や切り傷などを負い、零牙君は体に包帯を巻く始末になった。

多分あの日、彼女は心配で心配でしょうがなかったんだろう。そしてやっと帰ってきたら体はポロポロ…。今回むくれてしまふのは当然の事だろう

そんなミアの心情を理解した上で御坂は微笑んで言う。

御坂「大丈夫だよミアちゃん。零牙君は何が何でもミアちゃんの元に帰ってくるから。」

気休めかもしれないが、確かな自信を持って言う。ミアもわかってくれたらしく、静かに頷いた。

御坂「あの…、それでさ、ちょっとミアちゃんにお願いしたいことがあるんだけどさ…」

ミア「なんででしょうか？」

御坂「うん。ちょっと事件の解決に…ね？」

.....

オレ「…………『窃盗物を取り返せ。』だあ？」

アレイスター

「そうだ。君に頼みたい事は要約するとそうなる」

オレ「くだらねえ。まさかそんな事のために、魔術師のオレを呼んだのか？」

『サイエンス超能力』と『オカルト魔術』は仲が悪い。

だから、魔術師のオレが学園都市の事件に首を突っ込むと色々まずいのだ（これまでの事は自己防衛とかでギリギリ理由が成り立っていたので問題はない…はず。）

アレイスターはそんな危険を犯しても取り戻したいものでもあるのだろうか？

アレイスター

「言っておくが君に拒否権はない。君のお友達がどうなっても良い、と言うなら別だがね…。」

オレ「脅してるつもりか？」

アレイスター

「一応そうなる。さて、もう一度聞こう。私の依頼を受けてくれるかな？」

あの余裕っぷり。この野郎、オレが裏切ったら本気でミア達に何かするつもりか…！

オレ「考えるまでもねえ。さっさと事件の資料を出しやがれ。」

アレイスター

「君が私の命令に従っている内は、彼女達の安全は保証しよう。存分に働いてくれたまえ。」

オレ「言うておくが、ミア達に何かしたらオレはこの街ごとお前を消す。」

円筒形の機械に逆さまになっている人間をオレは睨みつける。しかしアレイスターは口元をわずかに歪めて

アレイスター

「肝に銘じておこつ。」

こうしてオレは、魔術師として事件を解決する羽目になった。

続く

学園都市最後の事件（後書き）

零牙「そういえば作者よ。」

夢幻「なんだ？」

零牙「オレ達って、どついつ日程で学園都市にいたんだ？」

夢幻「はいはい。こんな感じだよ」

8月2日 学園都市に入る そして銀行強盗に襲われる。

8月3日、常盤台の女子寮にて伝説をつくる。

御坂さんとバトル

『真空製造』の事件解決

7日 レポート完成。爆弾騒ぎの事件。

7日の夜 ドミニオンとの死闘

8月8日 遊園地にGO!

8月9日 本編

零牙「7日中4日事件に関わったのか…。よく巻き込まれるなあ…。」

夢幻「まあ8月4日から6日までの間は見学だったし、結構大変だっただろうな。」

零牙「一応聞くが…、ちゃんと本格推理になってんだろ…?。」

夢幻「バツチリ?。」

零牙「なんで語尾に疑問詞ついてんだよ…。まあいいや、次回予告するか。」

夢幻「あいあい。さてと次回 本格推理委員会…。」

初春「『動き始めた二人の探偵』。。」

佐天「お楽しみに」

夢幻「セリフ奪われたあー！」

動き始めた2人の探偵（前書き）

テスト終わったぜえ〜い！

これでやっと、更新するスピードが早くなるかもしれません。（笑）

まあとにかく本編へGO！

動き始めた2人の探偵

ミア「……窃盗事件、ですか。」

白井「ええ。ここ最近、頻繁に起こっていますの。」

ミア達は御坂達に連れられて、近くのファミレスに入ってしまった。

ミアはパフェをやけ食いして、少し落ち着きつつある。

初春「ここ一週間、第七学区だけに限定しても十件、同じ物が同一犯に盗まれているんです。」

リュウ「何が盗まれているんですか？」

初春「すべて、ICチップだけだよ。」

ミュ「ICチップだけ…？」

ミュが訝しげに眉をひそめる。その様子を見た佐天は人差し指をたて

佐天「そ。ICチップだけ」

初春「一応、犯人の目星は付いているんだけど…」

白井「犯行が不可能なんですの。」

『シャッジメント風紀委員』の二人は苦々しい表情を浮かべながら事件の内容を話す。

白井「第7学区以外にも五つの学区で盗まれています。盗まれたICチップの数は全部で40個ほど…、短期間に盗んだにしては、さすがに多すぎますの」

ミア「よく盗まれるのはどこですか？」

初春「第七学区だけど…特定の場所を選んでいる訳じゃないみたい。」

白井「現場、時間、すべてバラバラで、共通しているのは盗まれているのがICチップだけ。」

御坂「要は何もわかんないの。零牙君なら何か分かるんじゃないか。って思ってたんだけど…」

リュウ「あいにく、レイは行方不明。携帯も通じねえ状態だ。」リ

ユウは首を振って大げさな演技をする。すると、なぜかミアが腕組みをして…

ミア「レイがいなくても、これくらいの事件、私一人で解決できます！」

と、言い放った。ちょっと気迫が怖い。

初春「み、ミアちゃん？どうしたの？なんか決意しちゃったみたいだけど…」

ミア「私だって『本格推理委員会』のメンバーなんだから、レイがいなくても事件の一つ二つ解決できなくちゃダメだと思ったんです！」

リュウ「本音は？」

ミア「レイを見返してやりたい！」

実にシンプルかつ、個人的な思いで依頼を受けたミア。しかし結果的に、最も安全な選択を選んでいたのは誰も知らない

- - - - -

その頃、レイこと速水零牙はなぜか神父服を着てどこぞのカフェにいた。

オレ「…さて、ミア達のところに行くとなんか起るかわからねえ。自力で解決するしかないな。」

そう言つて零牙はアレイスターから借りた（押し付けられた）電子辞書みたいな電子機器を取り出し操作し始めた。

電子辞書の中には学園都市に関するすべてのデータが記録されている、『書庫』へのアクセス権限がある。つまり、零牙にとってこの電子辞書が、事件に関するすべての情報の源となっているのだ。

オレ「先月、被疑者の家に家宅搜索しているな…名前は「立川南」、『大能力者（レベル4）の空間移動者』か…。」

画面には『搜索対象、発見できず。』と表示されている。どうやら何も見つからなかったようだ。

オレ「立川南の顔は…っと」

また電子辞書を操作して立川の顔写真をだす。茶髪のショートカットで右目の下にほくろがある。

オレ「後は事件を調べるだけ、か。とりあえず全ての事件を見てみるか」

もう一度電子辞書を操作して一件一件の事件の詳細を記憶しておく。

すべての事件の情報が手に入ったため、まずは被疑者だった「立川南」の周辺を洗い直すことに。まず零牙が行く場所は…

オレ「置き去り（チャイルドエラー）特別養護施設『ひのまる園』か。何か掴めれば良いけど。」

立川南が育った場所、『ひのまる園』に行くことに。零牙は「この神父服目立つけど、どうしよう…」と呟いて歩き始めた

一方、「レイを見返してやるっ！」と意気込んだミアは…

ミア「これが事件の資料ですか…」

白井「ええ。全部で25件。調べ上げるのに苦労しましたわ」

ミア「ちょっと見せてください…」

そう言って、初春が取り出したゲーム機(?)を手にとって事件の詳細を知るミア。

その様子を見たりユウとミュは、「ああ。やっぱりミアちゃんも本格推理委員会のメンバーなんだなあ。」としみじみ思った。

そして数分後。

ミア「…この事件、おかしくないですか？」

ミアはある事件が不自然な事に気がついた。白井、初春を始めとして全員が小さなゲーム機(?)の画面に目を向ける。

ミア「この、フリーマーケットで起こった盗難事件。おかしいですよね？」

その事件は第七学区で、『物を大切にしよう!』とかなんとかで開催されたフリーマーケットで起こった。

事件が起こったのは、フリーマーケットに出店していた露店で、目玉商品のようにいくつかのICチップが並んでいる。

初春「??特におかしいところはないけど…」

御坂「そうね。特にこれと言っておかしいところはないようね…」

ミア「そうでしょうか?もっと周りを見てみてください。」

そう言われてICチップを売ってる露店の周りをみる。しかし、あるとすれば高そうなバッグやアクセサリを売っている露店や、ジ

ーンスなどの服を売っている露店、小物類や不要品を売っている露店ぐらい。後は、人がちらほら見えるだけだった。

リュウ「…特におかしいところはないように見えるけど…？」

ミュ「（コクリ）」

佐天「ミアちゃん。はっきり言ってよ。全然わかんないよ？」

佐天が音を上げる。他のメンバーにしても思案顔なので、ミアは答えを言うことに。

ミア「白井さん、なんで犯人はICチップを盗むのか、わかりますか？」

白井「そりゃあ、中のデータが欲しいから…。ですわよね？」

自分の出した答えに自信がないのか目を初春に向ける。しかし、白井の答えを打ち消すように初春は答えた。

初春「白井さん、事件が起こったのはフリーマーケットですよ？中にデータなんか無いと思いますけど…。」

白井「わ、わかってますの！ちょっと試しただけですの！ズバリ、
答えは『お金が欲しかったから』ですわね？」

ミア「はい。でも、このICチップを売ってる隣の露店を見て下さい。
」

ミアが画面上で拡大する。その露店はさっき 説明した高そうなバ
ッグなアクセサリーを売っている店だ。

ミア「普通、お金が欲しかったらこういうバッグとか狙いませんか
？」

御坂「そう言われてみれば…、そうよね。」

佐天「なんでバッグの方を盗まなかったんだろ…？」

うーん。と考えるも一同。しかし考えても答えはなかなか出ないの
で…

ミア「あ、そういえば白井さん。犯人に犯行は不可能って言いまし
たよね？」

白井「え、ええ。」

考えこんでいる途中で、急に話しかけられたのでちょっとビクッとなる白井。他の人は「肝心な所を聞いてなかったのね」と思う。

ミアが持っていたゲーム機(?)を操作し始めた白井。案の定、すぐにお目当てのデータは見つかったらしい。

白井「えーっと、確かこの辺りで…、はい、これが『犯人が犯行を犯せない理由』ですわ」

そういつて再びゲーム機をミア達に見せる。内容は、近くの防犯カメラが映した犯人の逃走の様子だ。

ミア「今、犯人がICチップを盗ったね。」

佐天「気づいた露店の店主が犯人を追いかけていくね」

リュウ「そのままフリーマーケットの会場を飛び出して…」

御坂「あ、近くの裏路地に入っていた。」

ミュ「……店主も続けて入っていった」

ミア「……あれ？裏路地には何も映ってないよ？」

リュウ「店主がきたな……。犯人は『空間移動』テレポートで逃げたのか？」

ミュ「……ここにいる」

佐天「あ、本当だ。えっと……第23学区のカメラだね……」

と、一通り防犯カメラの映像を見たミア達。しかし、どこが『犯行が不可能な理由』になるのか、検討もつかない。

リュウ「えっと……白井さん、どこが犯行が不可能な理由なんですか？」

リュウが困った顔をする。白井は簡単に『理由』を説明し始める。

白井「捜査により、犯人は私と同じ『大能力者（レベル4）の空間移動者』ポータルだとわかりましたわ。

しかし、私でも一度に飛べるのは80メートルが限界……、なのにこ

の方はどう見ても80メートル以上飛んでますわ。」

リュウ「犯人が白井さんより遠くに飛べるんじゃないんですか？」

初春「学園都市全ての学生のデータが集まった『書庫』^{バンク}だと、その人、75メートルぐらいが限界なんです。」

ミア「つまりこの事件は『不可能犯罪』…ということですね？」

白井と初春は沈黙することでミアの言葉を肯定する。

御坂「…ミアちゃん、今更だけど、この事件…「解けますよ」「…」

ミア「解けます、解決してみせます!」

ミアは真っ直ぐな瞳でそう宣言した。自信満々、意気込みは十分だろつ。

ミア「まず、犯人の周辺を搜索しましょう。えーっと…」

初春「犯人は養護施設から出ています。まず、そこを当たってみませんか？」

初春はゲーム機(?)の画面を見て、ミアにアドバイスを送る。色々助けてもらいそうだ。とミアは思う。

ミア「はい。じゃあ早速そこへ……」

御坂「行くのね！」

名探偵は事件を解決するために動き出した。

.....

一方、名探偵……もとい、魔術師の零牙は『ひのまる園』に着いていた。

オレ(……)『置き去り(チャイルドエラー)』……か。(

『置き去り(チャイルドエラー)』

学園都市で起こっている社会現象の一つで、自分の子供が学生寮に入ったのを確認して親が蒸発してしまう……。という現象だ。

学園都市は『学校に入る』学生寮に入る』ため、学園都市の学生は学園都市に住居を持つのが原則となる。

しかし稀に最初から捨てるのを目的として学園都市に入れる親もいる。

親に捨てられた子供を助けるための制度が学園都市にはあるが…、それを逆手にとって危険な人体実験の被験者になりやすいのだ。

オレ（オレと同じ、親に捨てられた子供達…）

オレと同じように親に捨てられた子供を見て、昔の自分と重ね合わせる。

…もし、あの時、オレが捨てられてなかったらどういう人生を送っていたのだろう…？

考えても仕方がないので考えるのをやめる。いくら悔やんだって、過去は永遠に変わらない。

「どちら様ですか？」

オレの姿に気づいたのか、施設の職員が話しかけてきた。

オレ「学園都市統括理事長の命で、とある事件を調べてる者です。この園から卒園した、『立川南』について教えて欲しいのですが…」

電子辞書を取り出してIDを示す。アレイスターが捜査する時に使え、と言った代物だ。怪しげな神父服を着ているが、多分大丈夫だろう。

「あ、はあ…。こちらへどうぞ。」

職員が半信半疑に施設に案内する。ここから事件解決への道のりが始まる

光と闇は平行とせに歩む。

お互いを求めながら、一つの事件を解決へ導くために、止まることなく進んでいく。

続く

動き始めた2人の探偵（後書き）

夢幻「I finished the exam!!」（試験終わったあああ!）」

雅「なぜに英文…?」

白井「テストから解放されて、とち狂ったのでしよう。可哀相に…」

初春「白井さん、そんな哀れむような目で作者を見ないであげてください…。」

夢幻「とまあ、喜ぶのはこの辺にして…」

佐天「切り替え早っ!」

夢幻「次回予告よろしく」

雅「ああ、はいはい。

次回 本格推理委員会

『交差する探偵達』」

佐天・初春

「「お楽しみに！」」

交差する探偵達（前書き）

次回でクロスオーバー終了です！

交差する探偵達

「ただいま園長をお呼びしますので、こちらでお待ちください。」

『ひのまる園』に着いたオレは応接室に案内された。真ん中にテーブル、そして向かい合うように置かれたソファ。後は施設に贈られた数々の賞やトロフィー。

……………暇だなあ。

コンコン

応接室と廊下に繋がるドアがノックされて、50代くらいの中肉中背のおばさんが現れた。

園長「お待たせしました。私が園長です。」

相手が年下だというのにお辞儀してくれた。うーん。あんまりかしまられてもなあ…

オレ「すみません連絡もなしにいきなり押しかけたりして…」

園長「いえいえ。統括理事長の命、という事は色々忙しいのでしよう。どうぞソファアに座ってください。」

そう言つて園長は笑顔でソファアに座るよう勧めてくれた。大人だなあ…と思う。

オレ「すみません。それで用件と言つのは…」

園長「南ちゃんの事ですね？」

園長がズバリと本題を切り出す。『アンチスキル警備員』が来たりして、思い当たつたのだろう。

オレ「はい。『立川南』さんについてです。」

園長「あの…南ちゃんがまた何かやつたんですか？」

オレ「いえ。ただ…盗難事件についてちょっと詳しく調べないといけないものですから…」

園長「そうですね…。それじゃあ、南ちゃんについて何を話せば良いのでしょうか？」

オレ「そうですね…。どんな人だったのか、親しかった友人は誰なのか、とか…とにかく彼女について教えて欲しいんです。」

ものすごく曖昧な表現だが、今は何でもいいから情報が欲しい。園長は少し考えてから、オレに話した。

園長「南ちゃんは…そうね、とても活発な子でした。明るく元気でとても優しく…。親しかった友人は…、特に親しかった子はいなかったけれど、同じ年齢の美帆ちゃんのことをよく気にしていたわ。」

オレ「その、『美帆ちゃん』って誰ですか？」

園長「『乾美帆』。とても大人しい子でね、いつも部屋の隅でポツンと本を読んでいたわ…。」

オレ「その子、今どうしてますか？」

園長「今は…病院で入院してますわ。心臓の病らしくて、個室の部屋で生活してますわ…。」

園長が肩身を小さくして話す。しかし良い情報が入った。来たかい

があつたな。

オレ「なるほど…」

園長「あの…、後はなにか…？」

園長が妙にソワソワしている。園の子供達が気になるのだろう。仕事熱心な人だなあ。

オレ「いえ。これ以上は特に。」

立ち上がってドアノブに手をかける。しかし、どうしても気になった事があつたので最後にもう一度だけ質問した。

オレ「そういえば…」

園長「は、はい。」

オレ「ここ住んでいる子供達は、みんな笑ってますか？」

なんてことのない、ただの質問。しかし園長は驚いた顔してから、すぐに優しく微笑んで、

園長「ええ。」

そう言った。

.....

さて、ミア達の方はどうなっただろうか？

ミア「ここだね。」

学園都市を走るモノレールを使って数十分。ミア達は、犯人が前住んでいた『ひのまる園』にっていた。

御坂「ここに犯人の手がかりがあるのかしら？」

白井「なければ困りますの。なかったとしても、手がかりに繋がるようなものがなくては……」

ミア「とにかく、行きましょう。」

一歩ずつ、確かめように足を踏み出していくミア
そして校門付近の職員に話しかけた。

初春「あの、すみません。『風紀委員』なんです、ちょっとお話を聞かせますか？」

園長「はい…？」

初春に話しかけられた園長は、不意をつかれた感じでこっちに目を向ける

初春「あの、すみませうん。『風紀委員』なんです…」

園長「あら？私の知っている事は、さっき来た神父さんに全てお話ししたけれど…？」

え？と呆気にとられるミア達。しかしすぐさま現実に戻る。

佐天「神父さんって…、今日、私達より先に誰か来たんですか？」

園長「ええ。かわいらしい神父さんが、ついさっきここに来てましたわ」

ミア「その人の特徴は！？」

ミアは驚きと興奮でいっぱいだった。もしかしたら…、そんな希望にすがっている。

園長「髪の毛が白くて、切れ目だったわね。背丈は…、あなたと同じ位じゃないかしら？」

その時、その場にいる全員がああ白髪の少年を思い浮かべた。

リュウ「ソイツ、どこに行ったかわかりますか！」

園長「ごめんなさいそこまでは…」

園長は申し訳ないような顔で言った。ミアはちよつとだけ暗い顔をするが、すぐさま元に戻す。

ミア「ええつと、あの…すいません。その神父さんって、どんな質問をしたんですか？」

園長「『ひのまる園^{ウチ}』に居た「立川南」って子の事を、聞きに来てたわ。」

全員の顔に驚きがはしる。なぜなら、彼女達が解決しようとしていた事件の被疑者の名前が「立川南」なのだから。

御坂「零牙君が…？」

白井「一体誰がそんな事を…？」

疑問に思い、顔を見合わせる御坂と白井。まさか学園都市統括理事長が依頼したとは、誰も思っまい。

ミア「お願いします。その神父さんに話した事、私達にも話してください！」

ミュ「………お願いします。」

リュウ「お願いします！」

そう言つて頭を下げる三人。園長は頭を下げるとは思わなかったらしく、驚いていた。

園長「ええ、全部話しますよ。だから頭を上げなさいな。」

そう言われて頭を上げたミア達。零牙君は良い友達を持ったね。と4人の女子中学生はちよっぴり微笑んでいた。

- - - - -

そんな時、零牙の方は…

オレ「『乾美帆』。持っている能力は『大能力（レベル4）の光学
操作系能力』キヤントリック認識不可』ね。

えーっと？『姿だけでなく、気配すらも完璧に消してしまう能力』
…ってまじかよ。お…、なお、使用可能な時間は制限されており、
最大十分しか持たない』か。」

先程手に入れた『乾美帆』という子の情報を見る。黒のロングヘア
―で整った顔立ち。本ばかり読んでいるらしいが、持った能力はな
かなか厄介なものだな…。

オレ「だがトリックはわかった。後は動機と、どうやっておびき寄
せるか…」

近くの公園のベンチに寄りかかって考える。しかしなかなか動機が
思い浮かばない。ガシガシと頭を掻くが、最終的に諦めた。

オレ「ダメだ…。情報が足りねえ。情報を集めるのが先か…」

よっこらせ、と立ち上がる。とりあえず彼女達の通っている学校に
でも行きますか。と考え、公園から出ようとす。

その時

息を切らせながら、一人の少女がオレの前に立った。

.....

ミア「見つけた...。」

園長さんに話を聞いた後、近隣を探したらすぐにレイは見つかった。

白髪の髪の毛に神父服。園長さんが言った特徴とも一致している。

ミア（レイ...、何を隠しているか白状してもらおうよ！）

レイにそっと近づき様子をつかがう。...ベンチから立った。今だ！

私はレイの前に立ちふさがった。レイは驚いた顔で私を見ている。

ミア「レイ？見つけたよ」

両腕を広げて通さないようにする。レイは必死に辺りを見回し、苦々しく私を見る。

ミア「無駄だよ。御坂さんもいるから、どこも逃げられないよ」

じりじりとレイに近づいていく。捕まえた後で今まで何してたか、隠していることって何なのか、ゆる〜くり話してもらおうじゃない！

レイ「くっ!」

レイは諦めたのか、私に突っ込んでいた。ふふ。ひるんだ隙に逃げようだったって、そうはいかないよ。

レイ「くそっ!」

それでもレイは猛スピードで私に向かってくる。・・・そして、私がひるまないとわかったのか、レイは上に飛んだ。

しかしその先には

御坂「ごめんね零牙君。」

最強の『電撃使い』、御坂さんが待ち構えている！

レイ（一気に駆け抜けぬけてやらあ！）

それでもレイは止まらない。スピードを落とさないうまま、御坂さんに突っ込んでいく。

御坂「悪いけど、抜けさせる訳にはいかないのよね！」

御坂さんは自分の周りに電撃の壁を作ってレイに立ちふさがる。

しかし、それでもレイは止まらない。それどころかむしろ加速している！

御坂（まさか、本当にこのまま突っ込んでくる気！？）

御坂さんが身構えていると・・・レイは突然、姿を消した。

御坂・ミア

「「！！！！」」

後ろから追いかけている私の目の前で忽然と姿を消した。

御坂「一体どこに……」

そして、御坂さんの警戒が緩んだ一瞬の隙に、レイは電撃の壁を通り抜けていた。

ミア「待てえ！」

必死に追いかけるが、再び姿が見えなくなる。

……逃げられた。

私は悔しさのあまり、叫んでしまっていた。

ミア「レイ……どこにいったんだよーっ……!!!!!!」

……

オレ「はあ、はあ、くそっ……、なんでミアがいやがる……!!」

御坂さんとミアの奇襲から辛くも逃げられたオレは近くの路地裏で息を整えていた。

ピリリリッ!

その時、携帯が鳴った。アレイスターが、なにかクレームでも付けに来たか?

オレ「もしもし」

アレイスター

『姿を見られてしまったようだね…』

オレ「だからなんだ?ミア達を連れ去ろっつてか?」

今のオレは妙に勝ち気だ。なぜなら切り札を手に入れたからだ。

アレイスター

『ふむ。わかっているなら良い。・・・で、君はどういった行動をとるのかな?』

オレ「アレイスター、衛星でオレを監視してるんならわかっただろ?」

アレイスター

『なにがだね？』

オレ「こつちには、『超能力者（レベル5）』がいるってことだ。

いくらお前の部下でも、御坂さんに勝てるほど強くはねえだろ？」

思わず笑みがこぼれる。勝ち誇った、引き裂いたような笑みが浮かぶ。

御坂さん、悪いがオレの大切なものを守るためにあんたを利用させてもらうぜ…！

オレ「まあ、だとしてもこの事件は解決させてもらうぜ。やっぱり確実に、安全にあんたの支配下からでたいしな」

アレイスター

『そうか。ではそれまで、せいぜい私の手の上で踊っているがいい。』

ブツ…：そういつてアレイスターとの通信は着れた

オレ「さて、後は御坂さんがアレに気付いてくれれば良いけど。」

闇の中で一人、白髪の少年は歩き始める。

- - - - -

御坂「逃がしちゃったか…」

零牙が去っていった方向に目を向ける。完全に油断していた。

ブブブ、ブブブ

携帯がバイブ音を発し、スカートのポケットの中に手を入れる。おそらく、別方向に行った人からだろう。

その時、クシヤリと何かに手を触れた。

何かと思って取り出してみた。 - - それは雑に丸められた小さい紙だった。

何を書いてあるんだろう…？と、気になって紙を広げる。そこには、白髪の少年の願いが書いてあった。

『ミア達を守ってください。』

走り書きで、ところどころ焦げているが間違いなく零牙のものだった。

御坂はその紙に込められた思いを感じ取り、事件を解決するためにミアの元に向かった。

魔術師と超能力者。

相容れない存在が、再び手を取り合った。

続く。

交差する探偵達（後書き）

夢幻「はい！という訳ですね。ついに後一話になってしまいました！

果たしてラストはどうなるんでしょうか！

次回 本格推理委員会

『相容れない者達の絆』

お楽しみに〜」

学園都市を去る時（前書き）

『とある科学の超電子砲』編、最終回です！

学園都市を去る時

ミア「はあ〜」

リュウ「落ち込まないでくれよミアちゃん。レイがいただけでもめっけものさ。」

ミュ「……大丈夫。またすぐに見つかる。」

零牙を逃がした事が相当ショックだったのか、ミアは公園のベンチでうなだれていた。

リュウとミュが「大丈夫大丈夫」と励ましているも立ち直るのに、ちよつと時間がかかりそうだ。

さて、少し離れた場所では御坂、白井、初春、佐天の4人が、零牙のメッセージを見ていた。

初春「ミア達を守ってください……ですか。」

白井「それが、お姉様のスカートのポケットの中にあつたのですか？」

御坂「ええ。」

佐天「零牙君…、一体どうしたんだろう?」

零牙のメッセージは、確実に零牙が危ない組織に狙われていることを表していた。

御坂「とにかく、ミアちゃん達に危険が及ばないように、私達で守るわよ」

御坂の言葉に後の三人は頷いてかえした。

- - - - -

その頃、零牙はアレイスターから渡された電子辞書で、学園都市内の様子を映し出している衛星の映像を見ていた。

その映像には犯人が映っている。しかしまだ行動は起こさない。なぜなら、オレの目的の物を持っているかどうか分からないからだ。

オレ「ん?これなんだ…?粒みたいだけど…」

オレは犯人の動機に気づき、アレイスターに連絡した。

なに、ミア達に繋ぐとすれば、アイツはすぐに割り込んでくるだろう。

.....

ミア「はあ…、まさかレイも同じ事件に関わっているなんて…」

落ち込みながら呆れる。一体どれだけ事件に巻き込まれやすいのか…

ミア「でも、私も同じ情報を持っているんだ。レイだったら多分、私と同じ推理をしているはず」

推理には自信がある。もし、この事件は犯人が捕まりにくいだけだったのしたら

ミア「さて、今度は自分から来てもらうよ…レイ！」

決意と共に、少女も動き出す。

.....

レイ「…よし。あいつらが動き出した。後はミアがどんな推理を聞かせてくれるかな…？」

衛星の映像を見ていた零牙は、期待を胸にビルの屋上を駆け抜ける。

白井「ミアちゃん。」

ミア「なんですか白井さん？」

ミア達は公園を離れ、人通りの多い街並みを歩いていた。白井は携帯をポケットにしまい、ミアをみる。

白井「例の件、確かに確認しましたわ。確かにその人は、一歩たりとも外に出ていないそうですわよ。」

ミア「そうですか…」

ミアは少し暗い顔をする。自分の推理に自信がないからか、それとも…

初春「ミアちゃん。例の人、動き出したよ。」

続いて初春も報告する。

全てのピースは揃った。後は、作戦を行うだけ。

- - - - -

南「大丈夫？」

美帆「うん…」

彼女達は『立川南』と『乾美帆』、零牙達が追っている事件の被疑者だ。『書庫』^{バンク}に登録されている通りの顔で、彼女達はカフェの椅子に座った。

南「本当に大丈夫？顔色悪いよ？病院行った方が良いんじゃない？」

美帆「本当に大丈夫…。それに…」

白井「ちよつと失礼。」

乾美帆がなにかを言いかける。しかし、タイミング悪く誰かが話しかけてきた。

白井「『風紀委員^{シヤウジメイメン}』ですの。少し…お時間よろしいでしょうか？」

立川南と乾美帆は目を合わせる。行くべきかそうでないか、しばし沈黙する。

南「…わかりました。行きましょう。」

二人はこう判断した。ここで行かないとなると、計画に影響するんじゃないか、と。

白井についていく二人。白井は近くの路地裏に入った。

立川南と乾美帆は何か畏があるんじゃないかと警戒する。

しかし

そこにいたのは

ミア「こんにちは。立川南さん。乾美帆さん。」

たった一人の少女だった。

ミア「では……これからあなた達の行った、アリバイトリックを暴れてみせます。」

最後の事件を解決に導く、一人の少女の推理が幕をあけた。

.....

リュウ「さて、アイツはくるかな?」

リュウは近くのビルの屋上をよく見る。

これは、ミアちゃんの作戦だ。

ミア『私が推理を始めたら、多分……いや確実にレイは私の所にくる。そこを、みんなで抑えて欲しいの。』

なぜか自信に満ちた顔でこの作戦を発表した時は、正直来るはずがないと思っていた。

しかし、こつ始めると否が応でも気になってくる。

白髪の少年の姿を求め、リュウは頭上を見上げている。

南「…あなた誰？」

立川南は警戒心むき出しで言う。いきなり「推理する」とか言われ
ても訳が分からないからだ。

ミア「言い遅れました。私は学園都市の外から来た、管原雅と申し
ます。

今回、『風紀委員』からの依頼であなたが被疑者の事件を調べてい
ます。立川南さん。」

立川南の顔が曇る。だがこうも思っている。あのトリックは当たり
はしない、と。

ミア「今回、あなた達は共犯者です」

ミアの声が路地裏に響く。その声に不安はない。

ミア「今回の事件の鍵となるポイントは2つ。一つは、《どろち
て80メートル以上の距離を飛んだか、》です。」

被疑者の二人はいつでも逃げられる準備をしつつ、静かに聞き入る。

ミア「このトリックはあらかじめ共犯者がいれば簡単です。片方が犯行をしている間、もう片方が監視カメラの視界に入らないようにすれば良いんですから。」

南・美帆「……………」

ミア「お二人の姿を似せる事も可能です。お湯で落ちるカラーズプレーなんかを使って、髪の毛の色を変え、うつむきながら走れば、肉眼ではほとんどわかりませんから。」

美帆「その…、推理には…穴がありすぎるわ。私の髪の長さ…、南の髪の長さはまるつきり違うし、私はその時…、病室にいるのよ。」

心臓を抑えながら、一言ずつ言葉を発する乾美帆。しかしミアはまったくすぐな瞳を彼女へと向ける。

ミア「そのトリックが第二のポイントですが…すでに見破ってます。あなたの能力…『キャントルック認識不可』の力を使えば、堂々と病室から逃げられますし、それに個人の病室にいるあなたは、何もなければ自然と病室にいた。とされますからね。」

髪の毛の長さについては…、髪をまとめ上げる、とかすればとりあえず騙す事は出来るでしょう。」

その瞬間、立川南と乾美帆は思う。まさか本当に見破れているのか？

ミア「つまり、あなた達のトリックはこうです。

？、乾美帆が病室から脱走する。

？、近くのトイレにでも行って、立川南に変装する。

？、犯行に及ぶ。

？、逃亡、タイミングを見計らって電話し、本物の立川南を出現させる。

…とまあ、こんな感じでしょう。あらかじめ打ち合わせをしておけば、出来ないトリックではありません。」

被疑者の二人は自分たちのトリックがバレていると確信する。

南「し、証拠は？私達が犯人だっていう明確な証拠はあるの！？」

せめてもの抵抗で言う。ミアは最後に言葉を紡いだ。

ミア「もちろんありますよ。家宅搜索しても見つからなかった、
つてことは必然的にあなた達が肌身離さず持っている可能性が高い。
私じゃ、身体検査みたいな真似はできませんが、『風紀委員』なら
それぐらいの権限はありますよね？」

南「あなたみたいなお子供の言葉を信じる『風紀委員』が、どこにい
るっていうのよ！」

白井「ここにいますわ」

乾美帆は後ろを見る。そこに、ここへ連れてきた『風紀委員』がい
た。

白井『風紀委員』ですの。連続ICチップ盗難事件の調査で、あな
た方に身体検査を行います。よろしくて？」

まるでタイミングを計ったように、逃げ道に『風紀委員』がいた。
はめられた。二人は瞬間的にそう思う。

南「でも、詰めが甘いわね。確かにトリックはよくできていたけど
。私達に逃げられちゃ、元も子もないわよね？」

背中を合わせて不敵に笑う立川南。すると次の瞬間。乾美帆が立

川南におんぶされていた。

あまりに間抜けな姿なので呆気にとられるミアと白井。しかしそれが彼女達の秘策だった。

次の瞬間、立川南と乾美帆の存在が消えた。

忽然と、まるで最初からそこに存在してないかのように、認識が出来なくなった。

ミア「そうか、乾美帆の『認識不可』で気配ごと存在を消して、その間に立川南が『空間移動』で遠くに移動する寸法か……」

白井「やられましたわね……。でもま、十分後にはその能力も切れるでしょう。衛星で宇宙から学園都市を見れば、どこにいますか一目でわかりますわ。」

そう言っつて白井さんは、携帯を取り出してどこかに電話をかけた。多分、初春さんのところだろう

ミア（そういえば……）

ミアは高いビルを見上げてこう思う。

ミア（レイは来てたのかな？）

すぐ見つかるだろうと、少女は気楽に考えていた

南「よし。もう能力を解いていいよ。人混みに巻き込まれれば、多少は時間稼ぎになるから。」

そう言われた瞬間、女の子を背負った女の子が現れた。背負われているほうの子の名前は、乾美帆である。

南「大丈夫？ごめんね。逃げるためとはいえ、能力を使っちゃって……」

美帆「ううん。大丈夫。これぐらい……どうってことない。」

白井達から逃げる事、約一分。彼女達は路地裏から、人混みのある街中に入ってしまった

美帆「でも、これからどうしよう？学園都市には居られないよ？」

南「大丈夫。とりあえず盗んだICチップを『外』の企業にでも売って、お金を得たらどこかに身を隠そう。で、ほとぼりが冷めたら戻って治療しよう。」

人混みの中で会話する。しかし彼女達は気づいているだろうか。自分たちの周りに起こっている異常が

美帆「でも、今日1日は上手く隠れてないとだよね。…どこに行く？」

南「とりあえず私の家に戻る？今なら人が誰もいないから、すぐに家につくよ。」

その言葉を言った瞬間、彼女達は違和感に気づいた。今はまだ4時ぐらいだ。この時間なら帰宅する人やまだまだ遊んでいる人達で人がごった返しているはずなのに、この辺りには自分たち以外誰一人いないと言つ異常。

まるで、べつの世界に迷い込んでしまったかのような感覚を覚える二人だが、その答えはすぐに出る。

オレ「この辺りに『人払い』のルーンを刻んだだけさ。まあ、君たちには分からないだろうけど」

突然声があったので声のする方向に顔を向ける。そこにいたのは…、一人の少年だった。

南「あなたは、誰？」

オレ「魔術師」

しかし、そこにいたのはミア達と共に行動していた零牙ではなく、

血にまみれ、裏切りと孤独の中で『魔術』ちからを振るう。一人の魔術師
だった。

- - - - -

オレ「さて、こんなくだらないことはさっさと終わらせよう。オレ
は君たちが持っている物を、素直に渡してもらえれば、何もしない
つもりだ。

渡してくれるかな？」

左手を前に出し、オレはICチップを出すように催促する。

南「私達が持っている物って、なに？検討がつかないんだけど。」

しらじらしい。この期に及んでまだいうか。

オレ「さつき、あの娘に言われだろ？あんた達が犯人だってわかってんだ。さつさとICチップを出せ。」

南「さて、なんの事やらさっぱり分からないわ」

面倒くせえ……。さつさと終わらせよう。

オレ「じゃあ、なんであんた達がICチップを盗んだのか、その理由を言ってみようか？」

南「いいわ。もし当てられたら、ICチップをプレゼントしてあげるよ」

余裕たっぷり。まさかコイツ、オレに人道的な心があるとも思っているのか？

オレ「一連の事件の動機。それは、『乾美帆の病を治すため。』いや、病じゃないな。正確には『乾美帆が受けた人体実験の後遺症を治すため。』だな。」

二人の顔が強張るのがわかる。衛星の映像で見た錠剤。もしかしたらと思つて、アレイスターに聞き出した。かつて『立川南』と『乾美帆』が、幾度か人体実験にの被験者モルモットにされていたことを。

美帆「その、理由を知ったあなたは…、それでも私達に要求するの？私の命を見殺しにする気？」

乾美帆が心臓を抑えながらも、懇願してくる。助けしてくれ、と。しかしオレの答えは決まっている

オレ「ああ。それでも要求する。ICチップを渡してくれ。」

オレだってミア達の命を見殺しにできない。全部覚悟した上で、ここに立っているのだから。

南「だったら…、力づくで奪ってみなさい！」

乾美帆を背負い、存在を消す立川南。ふむ、どうしたものか…

オレ（『武器転送アザゼルの魔術』は、発動から出現までに、二・三秒のタイムラグがある。

久々に『アレ』やっているか…）

正直、オレは『アレ』は使いたくない。だが、たまに使っておかないと加減が分からなくなる。

オレ「…かつて熾天使の位にいた、地獄の悪魔長、ルシフェルよ。

今、こうしている間にも立川南は攻撃を仕掛けてくるだろう。しかしそれでも少年は唄を紡ぐ。

オレ「神と共に有りしその心、傲慢によって地に墜ちる。

心は闇で染まり、体は死者の怨念で黒く染まるも、神から授かりしその体は朽ちず。

無限の闇に染まり我が魂。強き身体を望む。

我が心の闇に引かれ、その身体を我が身体にて顕現せよ……ッ
「！」

唱え終わった瞬間、少年の身体に異変が起こった。白い髪は漆黒に染まり、黒い目は鬼灯のように赤く染まった。

その姿はまるで……今朝、少年の夢に出てきた、闇、そのものだった。

南（一体アレは……）

美帆（なにが起こって・・・）

突然の変貌に気を取られる二人だが、その意識は長くは続かなかった。

なぜなら・・・

オレ「龍追閃」

ドゴオツツッ！

手加減も、慈悲すらもない非情の一撃が彼女達を襲う。

オレ「追撃だ」

うつぶせで地面に激突した瞬間、地面から数種類の剣が彼女達の手
足や胴体を串刺しにした。

動かそうとするが血が溢れてきそうので怖く、『空間移動』も余りの
激痛で計算式すら出なかった。

オレ「あーくそつ。ICチップとかって、衝撃に弱いんだっけ。やっぱ使うんじゃないかな。」

少年が地面に着地してボヤいている。しかしもう、元の白髪と黒目に戻っていた。

オレ「おーい。さつさとICチップの在り方言えー。痛い思いしたくないだろ？」

非常に軽いノリで聞いてくる。まるでこれぐらいの光景は見慣れているかと言っているようだ。

オレ「あー、もしも〜し？ダメだ聞いてねえ。こうなったら無理やり聞くしかないか。」

そう言つて、少年は更に刃物を出す。もし、一般的な人が今の少年を見ていれば、こう言うだろう。まるで悪魔のように邪悪だと。

.....

アレイスター

「来たか。」

あの惨劇から数分後、零牙はICチップを持って、アレイスターの

ところにきていた。

アレイスター

「目的のものは？」

オレ「ほらよ」

零牙はICチップを手のひらから出す。ところどころ血が着いているが、気にしない方向でいこう。

アレイスター

「取引成立。それを床に置きたまえ。それで、全部終わりだ」

オレ「置く前に一つ、願い事をして良いか？」

背筋を変えず、伸ばしたまま言ってみる。

アレイスター

「なんだね？」

オレ「彼女達の傷を直して欲しい。もちろん、人体実験の後遺症も含めてな」

アレイスター

「…良いだろう。」

オレ「ありがとう。」

その確認を取ってオレはICチップが入った袋を床に置いて、アレイスターと別れた。

アレイスター

「…速見零牙か。また面白そうなやつが居たもんだ」

逆さまになっている人、アレイスターは確かに笑ってそう言った。

オレ「ただいま」

ミア「レイ？」

アレイスターのところを去った後、ミア達と学園都市と『外』を繋ぐ門の前で待ち合わせた。

リュウ「どこ行ってたんだよう？」

オレ「ん〜、ちょっとヤボ用があつてな」

ミアがとてつもなく怒っているが、目を逸らして現実を見ないようにする

ミア「全く、レイなんか知らない！」

ミュ「……むくれた」

ミアがぷいっと背を向ける。むくれてんだな？

オレ「ゴメン。心配かけて…、本当ゴメン！」

頭を下げて真剣な顔で謝る。

ミア「ふんだ。本当にし〜らないっ！」

ヤバイ。ほつたらかしにしすぎた。ミアがこうなったら機嫌が治るまでずっとこうだ。

御坂「あ〜あ。ついに愛想つかれちゃったね」

白井「そりゃあ、あれだけほったらかしにしてれば、ミアちゃんだって愛想をつかせますわよ。」

初春「零牙くん頑張っただね。」

佐天「ファイト！零牙くん！」

御坂さん達に激励の言葉を受けるオレ。正直、苦笑いしかできない。

ミュウ「……そろそろ時間」

リュウ「だな」

オレ「御坂さん、白井さん、初春さん、佐天さん。この7日間、色々とお世話になりました！」

「「「お世話になりました！」「」「」

御坂「ううん。こっちこそ、色々と事件に巻き込んでゴメンね？」

佐天「外に行っても元気で頑張っただね！」

初春「また、いつでも遊びにきてください!」

白井「また、会える日を楽しみにしておりますわ」

太陽も沈み欠け、辺りが暗くなる前にオレ達は御坂さん達と別れを告げ、外の世界へと戻っていった

あの7日間はきつと、良い経験になっただろう。

『とある科学の超電磁砲編』 完。

学園都市を去る時（後書き）

夢幻「クロスオーバー終了！」

零牙「は〜長かった。」

御坂「結局、私の見せ場はなかったわね…」

夢幻「申し訳ない。もしもまた、出す時がきたらその時に活躍させるから…」

御坂「今となっちゃ、もう諦めてるけど…」

夢幻「さてと、主人公（零牙）とヒロイン（雅）に言っておかないと…」

零牙・雅

「「なんだ？作者」」

夢幻「お前ら、これから出番なくなるから。」

零牙・雅

「「え？」」

夢幻「ずっとじゃないけど、極端に出番消すからそのつもりで。」

修「そういう訳だ。主人公の座、オレがもらい受ける。」

雅「あ、お兄ちゃん」

零牙「なんでですか義兄にいさん！なんでそんなひどいこと、義弟おとうとのオレにするなんて……」

修「まず義兄と義弟という言葉を取り消せ。そして、二十話ぐらい出番すらなかったオレ達の気持ちを思いしれ！」

白井「思いっきり私怨ですわね」

修「いいんだよ。……文字数が足りなくなると困るから、御坂さんよろしく」

御坂「はいはい、零牙君ごめんね」

零牙「え？御坂さん、オレの手を握ってどうする・・・バタッ」

御坂「手加減してやったから、命に別状はないはずよ」

夢幻「ありがとうございます。これ、報酬のゲコ太の巨大ぬいぐるみです。」

御坂「やった〜」

白井「作者？そろそろ次回予告をやった方が、よろしくなくて？」

夢幻「もちろんやりますとも。」

・・・さて読者の皆様、次回からはスピンオフストーリーです。こちらに変なバトルなどありませんので、ご安心を・・・」

修「次回 本格推理委員会 『スピンオフ！ 三人目の名探偵』」

雅「お楽しみに〜」

夢幻「さて、零牙を異空間に封印しないと……」

スピンオフ！ 『外』での一日（前書き）

小説タイトル変更しました！

ごめんなさい！

スピンオフ！ 『外』での一日

- - オレの名前は城崎修

もう十話以上出てないから、読者の皆様からは忘れられているかもしれないが、オレはミアの従兄弟である。

さて、今回のスピンオフは - - 。零牙達がない7日間の間、オレ達の住んでいる不知木町に起こった事件を記したものである。

- - - - -

8月2日 天気（快晴）

今日、オレの従兄弟のミアは、学校の授業の一環みたいなもので『学園都市』に行く。

しかし、オレの毎日の日常の大半は変わることがなかった…。

修「ん。今朝も上出来」朝早く起きてランニング。それから制服に着替えて朝食の準備。

そして小説家の母、城崎カンナの容態をチェックして（ちなみに今朝はゾンビみたいな動きでベッドに入った。）

夏休みだと言うのに収集がかった委員会のために学校に行く。

正直言つて面倒くさい。だがここでサボると、後で顧問からどんな事をされるか…、想像したくもない。

何年も歩きなれた通学路を通つて、『木ノ花学園』に着く。

今年から入つた高等部の玄関で靴を取り替え、悪魔が鎮座している部屋……《理事長室》に向かう。

すると目の前によく顔見知つた女子が歩いていていた。

修「うっす、お久しぶり」

梢「あ、城崎さん。お久しぶりです」

彼女の名前は木下梢。中学生らしいかわいらしい顔立ちだが瞳だけは冷めた大人びている印象を受ける。

修「いやあ、やっとまともな出番がもらえたな」

梢「ええ。これで主人公にいつていた注目を私達に向けさせれば、もっと出番が増えるんですけど」

修「まあ、それは作者がどうにかしてくれないとだなあ…。ところであのバカはどうしたんだ？」

あのバカとは梢ちゃんの姉でオレの同級生、木下椎の事だ。

梢「寝ていましたよ。今日は両親共に不在ですから、多分起きないかと」

修「起こしてこなかったのか？」

梢「いえ。起こそうとはしたんですが、全く起きないんです。」

修「どんな事をしたんだ？」

梢「最終的にフライパンの底をお玉で鳴らしました。」

ちよつと恥ずかしそうに言う梢ちゃん。しかし、長年の付き合いでわかる。あのバカは巨大なアンプにエレキギターを繋げて、大音量で鳴らさないぐらいししないと起きない

すると突然、後ろから誰かが爆走してきたと思ったら

椎「こっずえ〜！おはよう〜！ああ、やっぱり梢は今日もカワイエなあ…」

コテコテの関西弁を話す緩そうな女子が現れた。読者の皆様、この変態が木下椎です。極度のロリコンで、どこでだって寝ることが特技のただのバカです。はい。

しかし、今オレは戦慄している。比喻や冗談ではなく、あれぐらいの事をして初めて目を覚ますコイツが、自分から目覚めてしかも遅刻しないなんて…明日は雪でも降るんじゃないだろうか？

椎「なんや修、なんか失礼な事考えてるやろ」

前言撤回。コイツにはもう一つ特技があった。それはこの恐ろしいほどの勘だ。小等部からの付き合いだが、今まで一度もコイツの勘は外れたことがない。

修「いや特に？しかしよく起きられたなあ前…」

椎「ふふん。ウチやて進歩しているんやで！」

逆に今まで出来なかった事が不思議だが、コイツにそんな高尚な事を求めても無駄なので、あえて言わない事にする。

そうこうしている内に大魔王が鎮座している部屋……『理事長室』に着いた。

ガチャ

修「入りまーす」

鈴音「あ、お久しぶり修君」

相変わらず書類の魔窟となっている理事長のソファアームに座っていたのは、この『本格推理委員会』の委員長、桜森鈴音だ。

肌は白く、鼻の周りに少しだけそばかすが浮かび短い髪は色素の薄い茶色をしている。そして学園一の頭脳を持っており、オレと同じ悩みを持つ者だ。

梢「おはようございます。委員長。」

椎「おはよう鈴ちゃん!」

オレの後ろにいる二人が挨拶する。ちなみにオレと椎は高一で、先輩は高二だ。

そして――窓際のデスクに腰掛けている、世界征服も難無くやっつけてしまっしそうな大魔王、『本格推理委員会』顧問の木ノ花あざみがいた。

あざみ「修君？いま心に思った事、正直に言いなさい。」

修「おはようございます先生。今日も暑いですね」

この人はオレが高等部にはいった時に行った説明会で、マイクスタンドを素手でへし折ったり、体育館のスピーカーを最大にした上で超高音のハウリングをして（爆睡中の椎ですら飛び起きた）一躍有名になったとんでもない先生だ。

あざみ「修君？正直に言わないと、頸椎がそんなしょ――損失するわよ。」

ちなみにこの人、高等部の保険の先生でもある。

修「先生、生徒に向かって殺人予告しないでください。」

あざみ「そう？零牙君は平気だったわよ？」

…時々、あいつが人間なのか疑いたくなる時があるが、今はそんな事を考えている場合じゃない。

修「そういえば菜摘先輩はどうしたんですか？」

あざみ「菜っちゃんは部活よ。終わったら来るって。」

今ここにはいないが、『本格推理委員会』には楠木菜摘という先輩がいる。空手部主将で警察にいろいろと顔の利く人だ。通称：『歩く国家権力』

あざみ「さて、一応全員揃ったし、今日みんなを呼んだ訳を言うわ。」

あざみ先生が真剣な眼差しでオレ達を見る。そして、オレ達を呼んだ訳は……

あざみ「理事長室のお掃除よ」

その場にいた全員がこけた。それ、オレ達を呼ぶほどの事か？

あざみ「もうすぐ夏のお掃除でしょ？でもこの部屋は1日で片付け

るのは容易じゃないから、みんなで片付けて欲しいの」

だったら普段からきちんと整理整頓をしてほしい。と、その場にいる全員が思っただろう。

あざみ「私はこれから会社の方で会議があるから、後よろしくね」

そう言ってあざみ先生は優雅に理事長室から出て行った。

…沈黙する事約一分。

「「「…はあ…」」」

今更追いかけて文句の一つ言おうと、あの人には無駄だろうからため息で処理。桜森先輩の指示でまあまあ広い理事長室を掃除し始めた。

.....

鈴音「じ、じゃあまずは床に散らばった資料を集めましょう。」

と言う委員長長の指示で床の資料（ただのゴミ？）を集める事に。

自分の周りにある資料を一枚一枚を手で広げ、ある程度溜まったらソファの間にあるテーブルに置く単純作業だ。

……、ドサッ。

……、ドサッ。

……、ドサッ。

椎「やっぱりあんた手慣れてるなあ修？」

修「あん？」

黙々と作業する中、椎が話しかけてきた。

鈴音「本当、手慣れてるよね修君。」

梢「確かに。」

修「まあ、家事全般任されてる身ですから。これぐらいは」

城崎家の家事は全てオレが仕切っている。特に台所は小二で完全に

管轄下に置いた。理由は簡単だ。親父は世界を股に掛ける登山家^{アルピニスト}で、母は生活能力がない。オレが包丁を握った理由が母の料理を食いたくないからというのだから、相当なものなのだ。

修「それに、最近ミアも手伝ってくれますから楽ですよ。」

鈴音「へえ〜。ミアちゃんが。」

修「はい。一応料理の方も、家庭的な物は大体教えました。」

椎「今度食べさせてーな。ミアちゃんの手料理…ああ想像しただけで身悶えするわぁ…」

なんか勝手にトリップしたバカ。やっぱりコイツは変態だ。

梢「手料理、って事はやっぱり零牙君に？」

修「なんかそうらしいです。この前お弁当を作ったいたら好評らしくて『もっともっと上手くなるぞー！』って意気込んでいました。」

とまあそんな話をしている事10分。床に散らばっていた資料を全

て拾いつくした。

梢「やっと終わった。」

椎「どんだけあるねん」

鈴音「つ、次はこれを関連付けて分けましょう」

テーブルの上に積み上げられた資料は山となって、何時倒壊するかわからない状態だった。

とりあえず慎重に四等分して分ける。

梢「これがここで…、これがあそこで…」

椎「……………（爆睡）」

鈴音「ええつと…あれ？」

修「……………」

予想以上にきつい。開始5分で椎はソファーにもたれかかって爆睡し始めている。

それにしても、オレ達の扱ってるこの資料、もしかして…

修「…先輩。」

資料を分けながら委員長に問う。

鈴音「なにかな修君？」

修「オレ達がまとめている資料って…」

鈴音「うん。」

委員長が資料を分けながら言う。

鈴音「学校の機密事項だね」

……あの人は本当に理事長なのだろうか？そんな大事なものを床に散らばしておくなんて…

梢「管理適当だね…」

寝ている椎の横で梢ちゃんが呟く。本当、よくこれで理事長務まるよな…

そして分けること20分。学校の機密事項は全て整理され、ホツチキスで止められた。

鈴音「掃除機もかけなきゃ……」

そうやって掃除機を取りに理事長室から出て行った委員長。その間オレと梢ちゃんはまとめた機密を理事長の机に置き、ファイルの整理を始めた。

修「しかしどんだけ情報扱ってんだよ理事長。ファイルだけで山脈が出来てんぞ。」

梢「どうやって情報処理しているんだろ……」

後ろのソファで気持ち良さそうに寝ている椎の、半開きの口に何を入れるべきか考えていると、委員長が戻ってきた。掃除機で絨毯の掃除を始めるつもりらしい。

掃除機のスイッチを入れ、楽しそうに掃除を始めた委員長。家庭部の部長でもあるためか、なかなか様になっている。

そうしてオレ達が理事長室の掃除を終わらせたのはお昼頃だった。

- - - - -

鈴音「うん！後は夏の大掃除の日にやれば良いでしょ。とりあえずお昼ご飯食べよ？」

と、委員長からお許しが出たので理事長室でご飯を頂くことに。

椎「うん。よう寝たわ。お、なんや？お昼食べるんか？」

都合よく椎が起きてきた。狸寝入りという事はないだろうから、本当に都合よく起きてきたものだ。

修「さて、今日のお弁当は…」

きゅりの浅漬けに冷凍物のエビフライなどのおかず。そしてごま塩を振りかけてあるご飯がメニューである。ま、自分で作ったから中身知ってんだけど。

変わって女子二人は女の子らしいお弁当を持ってきていた。お弁当のおかずに唐揚げやミートボールがある時点でランクが違う。

椎「なんや修、今日は手エ抜いてきたんかいな」

修「オレだったたまには手を抜くさ。それより椎、お前のお弁当は

「？」

椎「ん〜。持ってきてへんから少しおかずを恵んでくれるとありがたいんやけど〜」

梢「大丈夫。お姉ちゃんのお弁当、持ってきてあるから。」

そう言ってさらにお弁当を取りだす梢ちゃん。流石姉妹。お互いの事はよくわかっている。

椎「おお！流石梢や、ちゃんとお姉ちゃんのお弁当まで持ってきてくれたか！」

梢「置いてつても、きつとお姉ちゃん忘れるだろうから……」

椎「流石やわー。よし！お姉ちゃんが『いい子いい子』してあげるので〜」

そう言って椎は梢ちゃんの頭をなでる。梢ちゃんは顔で嫌がっているように見えるが、実際はまんざらでもないのだ。

その後、オレ達は早々とお弁当を食べきり、食休みに入った。

鈴音「そういえば修君」

修「なんすか？」

鈴音「ミアちゃん達、今頃どうしてるかなあ？」

修「…さあ？」

梢「案外ゲーセンに行ったりして。」

修「まさか。それはないだろう。」

椎「そやな。あー行って見たかったわー学園都市。超能力とか憧れるしなあ」

そう言っつてミア達が学園都市で何をしているか雑談をする。楽しくやってれば良いんだけどなあ…

.....

その頃、零牙たちは…

レイ「おらあああ！…！」

リュウ「おりやああ!!」

ゲーセンで格ゲーをした。ちなみに戦績は零牙の3勝6敗。結構負けている。そして零牙の画面に《K・O you lose!》という文字が浮かんできた。

レイ「くそおお!!」

リュウ「はっはっは。オレに勝つにはまだ百年は早いな。零牙」

零牙がボロボロに負けたため、ゲーム盤の上で悔しがる。必ずコイツを超えてやる…!と、零牙が密かに決心したのは誰も知らない。

レイ「そーいやあ、ミア達はどうした?姿が見当たらないようだ。」

リュウ「ん?あー、そこら辺で遊んでんじゃね?」

レイ「探しに行くか。」

リュウ「おう」

そう言つて格ゲーのところから離れ、雅達を探し始めた零牙達。しかしなかなか見つからず、クレーンゲームのところにとどり着いた。

御坂「よし…、よし…、そこだあああ！」

そこには名門お嬢様学校に通うお嬢様がクレーンゲームに熱中していた。

「「何やってるんすか御坂さん…」」

思わず呆れた声を出してしまう零牙達。しかし今はそんなことよりも大事な事がある。

レイ「御坂さん、ミア達がどこに行ったか知りませんか？」

御坂「え？さつき向こうの方に行ったのを見たわよ。」

リュウ「ありがとうございます。…よし、いくぞレイ」

レイ「ああ。」

そう言つて御坂の下を去る零牙達。ちなみに御坂はこのクレーンゲームで『ゲコ太』を捕ることを諦めたらしい。

レイ「さて、このあたりらしいが。」

リュウ「どこだろうな?」

辺りを見回し雅達を探す零牙。しかし意外にもすぐ見つかった。

ミア「わ、すごい。ぴったり!」

白井「学園都市の特殊技術ですね。しかしお二人共、本当にそれで良いんですの?」

ミュ「……うん。これが良い。」

なにやら試着室からミア達の話声が聞こえる。そっちの方を見ていると

まるで人形みたいな格好な……メイド服を着ていたミア達がいた。

レイ「なっ……!」

ミア「へ…?」

零牙と雅が目を合わせる。瞬間、零牙は目を逸らし、ミアは縮まっていた。

白井「お手数かけてすみませんわお一方……ってなんで殿方がこちらにいらっしやいますの?」

探しに来たんです。と言おうとしたがその前にミアが白井さんの後ろに隠れてしまったので、かなり気まずい。

その後、リュウとミユで空気を有耶無耶にして、クレープを食べに行った。

.....

さて戻って修達は…

修「委員長。他に仕事は?」

鈴音「特にないわね。今日はこれにて解散でいいんじゃない?」

という事で、今日は理事長のわがまま・・・理事長室の掃除だけで終わった。

しかし彼らはしらない。

重大な事件が彼らのすぐ近くで起きていることを・・・

続く

スピンオフ！ 『外』での一日（後書き）

夢幻「はい！そんな感じで『スピンオフ！』始まりました〜。」

修「イェーイ！」

夢幻「いやあ、やっと本格推理っぽくする事が出来そうだ。」

修「次回から事件だな」

夢幻「イエス。じゃあ次回予告よろしく！」

修「おう。次回 本格推理委員会『消えた小学生』」

夢幻「お楽しみに〜」

スピンオフ！ 消えた小学生（前書き）

M e r r y X m a s !

作中と現実の季節は真逆ですが、そんなのは関係ねえ！…という訳
で本編へGO！！

スピンオフ！ 消えた小学生

8月3日 (快晴) 6時

毎朝のごとく朝食を作っている最中、委員長からメールが来た。

「本文 事件発生！うちの学園の小学5年の子が、昨夜から連絡がとれないらしいから10時に理事長室に集合すること！」

メールを読んだ後、母の容態をチェックするまでもなく小説を執筆しているだろうから声をかけずに家を出る。

さて、こういう事件は早く解決しないとだ。オレは駆け足で学校へ向かった。

理事長室に着くと中にはオレ意外の全員がいた。(もちろん零牙とミアはいない。)

菜摘「ヤッホー。久しぶり修君。」

片付いた理事長室のソファで、一人の先輩が事件の資料を渡しながら話しかけてきた。

彼女が昨日話していた木下菜摘である。空手部のエースで、なおかつ美人。極めつけに菜摘先輩のお祖父さんが元警視総監の影響で、親戚にたくさん司法官僚がいるらしい。実際、菜摘先輩のお父さんはここの県警の本部長だという。

ここまで聞くと完璧な人なのだが、椎と同レベルのロリコンなのでから残念な人である。

修「お久しぶりです、菜摘先輩。」

椎「遅いで修！どれだけ待たせるんや！」

修「まだ三分ぐれえだろ。ってなんで椎がいやがる!？」

ばかな。こいつは確実に遅刻するはずなのに。

梢「昨日、お姉ちゃんが寝たのは9時なので起きて当たり前なのです。」

梢ちゃんが椎の発言にフォローを入れる。それならこの時間にこれでも不思議じゃない。

椎「修？今思った事、全部話しい。」

修「委員長、事件の内容は？」

椎「人の話を聞けえ！」

バカが何か叫んでいるようだが気にしない。菜摘先輩が渡してくれた資料をとりあえず脇に挟み、委員長に事件の説明を頼んだ。

鈴音「あ、うん。メールで書いてある通り、昨日、うちの学園の子が一人、連絡が取れないの。」

今のやりとりで少しいじけていた委員長が、動揺しながら話を始めた。

鈴音「名前は『日森京子』ひのせりきょうこ。小等部の五年一組に入っているわ」

菜摘「なんで連絡が付かない、ってわかったの？」

鈴音「今朝早くに帰宅した彼女の母親が、家の中をくまなく探しても見つからない上に、持たせてる携帯にも出ないことから警察に連絡したそうよ」

梢「手がかりは何かありますか？」

鈴音「ううん。いなくなったその日の彼女の足取りもまだなの」

つまり現段階では手がかりはない。だがあくまで『現段階』ではだ。聞き込み調査をすればある程度の情報は集められるだろう。

鈴音「だから、今日の私達の取るべき行動は『いなくなったその日、彼女に何があつたか。』を調べるよ。

修君と梢ちゃん、椎ちゃんは彼女の家の近所を中心に聞き込みをよろしく。私と菜っちゃんでは彼女の交友関係を調べてみるから。」

修「了解。」梢「わかりました。」

菜摘「OK」

オレ達全員が了承したのを見て、委員長が「それじゃあ、行動開始！」と言ってオレと梢ちゃん、爆睡している椎を連れて聞き込み調査に向かった。

.....

修「資料に書いてある通りなら、この辺りだな。」

理事長室から出て数分後、オレ達は日森京子の自宅周辺にたどり着いた。

修「さて、まずは彼女の親御さんから話を聞いてみようか」

梢「そうですね」

辺りを見回し、日森さんの家を探す。案の定、すぐに見つけることが出来たのでインターフォンを押す。

ピンポーン

チャイム音が流れる…だが、誰一人出てくる様子がない。

もう一度インターフォンを押す。

ピンポーン

しかし、誰も玄関から出てこない。

修「なんで出てこねえんだ？」

「その家なら、いま留守だよ」

オレが疑問に思った時、近所のおばさんが話しかけてきた。

梢「留守…、ですか。」

「そうさね、留守さね。ここの家の親は両方共忙しいらしくてね。なかなか家に帰ってこないそうだよ。」

一人娘の京子ちゃんはいつも寂しそうなんだよねえ。」

修「じゃあ、この家に住んでいる京子ちゃんの様子に、最近変わったところってありました?」

「いんや特に。…ところで、お前さん達誰だい?」

自分から話しかけておいて、オレ達の事なにも知らねえのかよ!…と心の中だけで叫ぶ。

修「この家の京子ちゃんが通っている学校の委員会に、オレ達は所属しているんです。オレは城崎修って言います。」

梢「私は木下梢と言います。」

修「あと、オレの背中で寝ているのが木下椎です。」

「もしかしてお前さん達…本格推理委員会かい？」

自己紹介したらおばさんが委員会の名を言い当てた。オレ達って有名なのか？

「いやあ、よく聞いているよ。あの『神保保』の事件、解決したのはあんたらかだって言うじゃない。」

確かにあの事件はワイドショーとかで話題になったけど…、まさかそこまで宣伝効果があるとは思わなかった。

「って事は…また何か事件かい？どんな事件なんだい？」

おばさんが興味津々になり、身を乗り出して聞いてきた。やばい、どうしよう。

梢「それは秘密です。それより、事件解決のために私達に協力してくれませんか？」

「いいわよ。そのかわり、事件について話してもらったからね？」

梢「ちゃんがフォローし、なおかつおばさんにつまぐ話を聞く事に成功した。これで話が進めやすくなる。」

梢「わかりました。では聞きます。最近、この家の日森さんの身の回りで起こったことを教えてください。」

「さつきも言った通り、この家の親は共働きの上に、忙しいもんだから家になかなか帰ってこないらしいのよ。京子ちゃん、寂しそうな顔してたわ。」

修「昨日、彼女が家から出ていくのを見ましたか？」

「いや。見てないねえ。3日前にリュック背負ってどこかに行ったのは知っているんだけどねえ。」

梢「彼女のご両親が昨日帰宅される前に、最後に帰宅されたのはいつだかわかりますか？」

「母親が二週間前ぐらいに帰宅したかしらねえ……」

修「父親の方は？」

「もう1ヶ月以上も帰ってないわ」

ここまでの話を聞くと、彼女はかなり寂しかったのかもしれない。これでは『いなくなった』というよりも『家出』の方がふさわしい。

「あ！もうこんな時間。ごめんなさいね。あまり役に立たない情報しかわからなくて…」

梢「いえ。こちらこそ、ありがとうございます。」

修「また、お話しをお聞かせくださいますか？」

「私で良ければ大丈夫よ。それじゃあ私、これからパートなので」

そう言って近所のおばさんは、走ってどこかに行ってしまった。

修「……さっきのおばさんの話が本当なら、少なくとも3日前までは日森さんはいたことになる。」

梢「ついでに」両親は家に帰らない。日森さんの両親の仕事って……」

手元にある資料で彼女の両親の職業を確認する。

修「父親は大企業の幹部。母親は…評論家か。」

梢「どっちも忙しい身ですね。」

修「だな。さて次は…」

梢「委員長に報告して、両親の所に行きましょう。」

オレの言葉に梢ちゃんが続ける。正論だが、それは間違いだ。

修「いや。その前に…」

梢「？」

修「このバカ椎を家に置いてこよう。……足手まといだ」

梢「……そうですね」

いつの間にか寝ていた椎は、そんな事も知らずに気持ちよさそうにすやすやと眠っている。

.....

鈴音「うん、うん……。わかった。ありがとう。」

修から電話をもらった鈴音は、電話の内容を書いたメモを見て思う。

鈴音（日森ちゃんは家で相当寂しい思いをしていたのね。修君と梢ちゃんがご両親から話を聞けると良いんだけど。）

ちなみに鈴音は椎の事を忘れている。

菜摘「鈴ちゃん、部活をしている五年生から日森さんについて聞いてきたよ。」

鈴音「ありがとう。……で、どうだった？」

菜摘「うーん。聞いた話をまとめる限り、人付き合いがよくて笑顔が絶えない子だったらしいわよ。」

鈴音「人付き合いのいい笑顔の絶えない子、ね。」

資料の中にいる彼女の写真をみる。赤みがかった茶髪で、にっこりと笑っている。

菜摘「さて、一応学校の生徒には聞いて来たけど…これからどうする?」

鈴音「菜っちゃん、日森さんの交友関係、わかる?」

菜摘「運よく同じクラスの生徒に、話を聞く事が出来たわ。彼女、同じクラス『幸村詩織』という子と大の親友だったらしいわ」

菜摘は資料の中にあつたクラス名簿の一人の名を指差して言う。

鈴音「その子と接触出来た?」

菜摘「ううん。無理だった。」

鈴音「じゃあその子の家に行きましょう。行って、彼女が家出について何か行っていたか聞いてみるよ」

菜摘「ええ。」

そして修達は電車に乗った後、徒歩数分の道を歩いて二十階建てのビルの前に来ていた。

修「おー、ここが日森さんのお父さんが勤めている会社か。デケエな。」

梢「ええ。」

会社に入り、受付で日森さんのお父さんに繋いでもらう。ちなみにアポは取ってある。

受付嬢「日森はまもなくこちらに向かいますので、こちらのソファにてお待ちください。」

受付嬢に案内されたソファで座って待っていると、がっしりとした体格の男性が現れた。腕につけている時計をちらちら確認している所をみる限り、とても忙しそうだ。

誠「はじめまして。私が日森京子の父、『日森誠一』です。…それで、私に一体何のご用でしょう。」

修「お忙しい所をすみません。僕達は木ノ花学園の理事長の使いで

す。さて、お時間もないことですし、単刀直入にお聞きます。

誠一さん、あなたが最後に娘さんに会ったのはいつですか？」

誠一「ええつと、確か…1ヶ月前ぐらいだったと思います。」

修「それ以降、娘さんとは一度も？」

誠一「はい。その頃から仕事が忙しくなり、家にも帰れない日々が続いて…あの、娘に何か？」

隣で梢ちゃんがメモを書いている時に聞いてきた。……知らないよ、知ってた方がいいな。

修「昨夜から娘さんの行方がわからなくなっているんです。」

誠一「え…？」

誠一さんが驚愕の表情でオレを見る。そして急にオレの胸倉を掴んで揺さぶってきた。

誠一「娘は…、京子はどこなんですか！」

修「ちょ…落ち着いて」

誠「落ち着いていられますか！京子はどこにいますか！！教えてください！」

梢ちゃんが慌て、オレの胸倉から誠一さんの手を離すように頑張っている。

修「それをオレ達が調べているんです！だから落ち着いてください！」

大声で落ち着くように促す。しかしこんな大声を出しても、誰一人微動だにしないこの会社の社員っていったいどうなっているんだ？

ともあれ、落ち着きを取り戻した誠一さんはソファーに深く座って頭に手を突いてため息をつく。

誠一「まさか、京子が…。すみません。今日はお引き取り願えますか？」

誠一さんは顔を青くして言う。これ以上聞くのは無理だな。と思いオレと梢ちゃんは会社から出て行った。

-
-
-
-
-
-
-
-

一方、鈴音と菜摘の方では。

ピンポーン

家出…もとい行方不明の日森京子の親友、幸村詩織の家に来ていた。

詩織「はい」

ガチャ

玄関のドアから一人の女の子が出てきた。くりっとした目が特徴的
なかわいい子だ。

菜摘（か、かわええ…）

鈴音「こんにちは。幸村詩織ちゃんかな？」

詩織「そうですけど…誰ですか？」

鈴音「私は、木ノ花学園高等部の桜森鈴音。本格推理委員会って聞いたことない？」

詩織「あ、学校の平和を守るヒーローみたいな委員会がある、って聞いたことがあります」

鈴音「そう、その委員会よ。」

意外な事に本格推理委員会の存在が知れ渡っていることを知った二人。なんか内容の方はおかしくなっているが…、気にしない方向でいっしょ。

菜摘「私は楠木菜摘。あなたとってもかわいいわね」

詩織「あ、ありがとうございます。」

続いてエロ紳士面した菜摘が自己紹介をする。鈴音は「変なことしなければ良いんだけど…」と密かに危惧していた。

鈴音「で、詩織ちゃん。詩織ちゃんに聞きたいことがあるんだけど…、」

詩織「はい。なんでしょうか？」

鈴音「あなたのお友達の日森京子ちゃんと、最後に会った日を教えてください欲しいの」

詩織「京子とですか？」

確か…この前のプールの開放日だったかなあ…」

言葉を濁す詩織。その曖昧さに疑問を持った鈴音だが

菜摘「ああもう！抱きしめてしまいたい家に持って帰りたいーい！ー！」

と菜摘が詩織を抱きしめてしまったのでなだめることに。苦勞しているのだ。

鈴音「ちょっと菜っちゃん、詩織ちゃんが嫌がってるじゃない」

そう言ってしぶしぶ（強制的に）菜摘を詩織から引き剥がす事に成功した鈴音。もう一度言おう、苦勞しているのだ。

詩織「はは…。。で、他に用件はありますか？」

鈴音「ううん。大丈夫、ありがとう。また聞きたい事があつたら聞きに来ていいかな？」

詩織「はい！また来てください！」

にっこりと微笑んで返した詩織。鈴音も微笑み返して引き上げた。

鈴音「小等部五年一組のプール開放日の最終日は…、五日前だね。
菜っちゃんどう思う？」

……菜っちゃん？」

菜摘「ああ…詩織ちゃん、笑顔かわいかった」

さっきの笑顔を見てになっている菜摘。鈴音は「はあ…」とため息
をついて、菜摘に正気を戻させることを始めた。

- - - - -

梢「やっと着きましたね…」

修「そうだな」

日も沈もうとしている夕暮れ時、オレと梢ちゃんは現在テレビ局に
いた。日森京子の母親に会うために、また電車を乗り換えてここま
で来たのだ。

梢「ここまで来るのに大変でしたね。」

修「そうだな。専属事務所になかなか連絡つかなかったり、行くの

に電車賃が足らなかつたり、電車が事故でなかなか来なかつたり。
…大変だったな」

オレは目を細め思い出して言う。梢ちゃんも同じようにして思い出
す。大変だった…。

とまあそんな感じで疲弊しながらもテレビ局に入っていったオレ達。
受付で日森京子の母親に会おうとしたのだが…、

修「え？会えない？」

梢「どうしてですか？」

受付嬢「はあ…、日森様にお繋げしたのですが、『今日は忙しいか
ら明日にして』と申しておられます…」

受付嬢が困り顔で事情を話す。オレ達は話を聞くのは無理だと判断
してテレビ局を出て行った。

修「日森さんのお母さんには、明日会うしかねーな。」

梢「出直しましょう」

その後、委員長達と一度合流して、オレは帰路についた。

続く

スピンオフ！ 消えた小学生（後書き）

夢幻「MerryXmas！」

零牙「MerryXmas！」

修「MerryXmas！ってあれ？なんで零牙があとがきにいるんだ？」

夢幻「それは零牙が十字教徒だからさ！十字教徒にとって、クリスマスは特別だからね。」

零牙「そ。我らが『神の子』の聖誕祭なんでね。作者に頼み込んで出させてもらいました！」

修「なるほどな。…ところで作者、今日はクリスマスだよな？」

夢幻「ああ。」

修「オレ達にクリスマスプレゼントとかってないのか？」

夢幻「ねえな。」

零牙「随分はつきり言っただな。」

夢幻「オレが、小説の中の登場人物にプレゼントを用意するつもりだったのか？」

修・零牙「いや全く」「」

夢幻「随分はつきり言っただな……。まあいいや。少し面倒だが、プレゼント用意してやるよ。欲しい物を紙に書いて持ってこい。」

修「よっしゃあ！憧れのティファールの圧力鍋GET！」

零牙「スピノフ終わるまで、あとがきに出させてもらおう。」

夢幻「はあく。我ながら、欲望に忠実に書きすぎたか？ま、いいや。次回予告やっちゃんおう。」

次回 本格推理委員会

『錯綜する事件』

お楽しみに〜。」「

スピンオフ！ 錯綜する事件（前書き）

Merry Xmas！（二度目）

神様、街中のリア充どもを消滅させてください！なんてのは「冗談（本気）」で本編へGO！

スピンオフ！ 錯綜する事件

8月4日（晴）

今日は珍事が起こった。母が…城崎直子がオレと一緒に朝食を食べ
ているのだ

さて、オレの母の名前は『城崎カナ』じゃなかったけ？と思って
くれた読者の皆さんに説明しよう。

『カナ』と言う名前は母さんの旧姓《管原》と、名前の《直子》
をくっつけて出来たペンネームであり、あだなである。
ちなみに、ミアのおじさんと母さんは兄妹である。

直子「修〜。この味噌汁おいしいね〜」

母さんは顔をほころばせながら言う。母さんは顔が童顔で背丈がオ
シ肩ぐらいまでしかないため、他人から見るとよく兄弟に間違われ
る。

修「どうも。あ、今日も委員会あるからお昼は冷蔵庫の中に入れと
くぞ。」

直子「はいはい」

修「じゃあ、行ってきます。」

直子「行ってらっしゃい。」

食器を水に浸け、歯を磨き家を出る。珍しい事もあるもんだ。

.....

理事長室に着くと委員長と菜摘先輩がなにやら険しい顔をしていた。何があったのだろうか？

修「おはようございます菜摘先輩、委員長。朝っぱらからそんな顔してどうしたんですか？」

菜摘「あ、修君おはよう。いやね、大変なことが起こっちゃって。」

修「何があったんですか？」

鈴音「昨夜、指名手配中の誘拐犯がこの町に入っただって情報が入っ

たの
」

修「え？そんな重要な事、ニュースじゃやってませんでしたよ。」

指名手配される程の犯罪者なら、速報とかで流れてくるはずなのに。

菜摘「当たり前よ。マスコミには発表していない情報ですもの。」

そんな重要な情報をバラしていいのか？

鈴音「で、その誘拐犯が不知木町このまちに入ったのが3日前なのよ。」

修「3日前と言つと…」

自分で言つてハツとなる委員長もオレが気づいたことがわかったらしく、3日前に起こった事を言う。

鈴音「そう、日森さんの最後の目撃情報よ。もしかしたら日森さんは誘拐されたのかもしれないわ」

菜摘「今のところ、犯人からの要求はないけど、近日中に要求がくるでしょうっね」

菜摘先輩が言う。その時、理事長室のドアが開き、椎と梢ちゃんが現れた。

梢「おはようございます。先輩」

椎「おっはーよー。みんなあ」

後で梢ちゃんに聞いた話だと、椎はオレが家に置いて来た後ずっと寝ていたらしい。恐ろしい奴だ。

梢「皆さん、どうしたんですか？」

椎「修？犯罪者面の顔がモノホンの犯罪者になつとるで？」

そう言つて爆笑する椎。心底ムカつくが、委員長達がいるのでガマンガマン。オレが怒りをこらえている間に委員長がさっきオレに説明したことを椎達にも話す。一通り聞いた椎は一言。

椎「『大野渉』：なんて誘拐犯、居たっけ？」

と漏らす。椎がこのまま大野の事を知らないと、今後の捜査に影響が――出るかもしれないので、説明することに。

修「零牙がくる一週間前くらい前に、大富豪の娘を人質に取って、二億ぐらいの金を要求したあげく、警察から逃走する際に近くにいた人に怪我を負わせ、車で逃走した際にひき逃げをした奴だよ。覚えてねえのか？」

椎「昨日の晩飯も思い出されへん奴に、そんな昔の事、覚えてられる訳あらへんやろ！あんたは何年わいと一緒にいんねん！！」

修「人が懇切丁寧に説明したのにキレるなよ！」

覚えてない！と、胸を張って言うバカ。説明なんかしなけりや良かったな。と思っているオレの後ろで、委員長がオドオドしつつも言う。

鈴音「と、とにかく念のため、その誘拐犯の方も調査しましょう。昨日と同じメンバーで良いかしら？」

修「委員長、それはちょっと……」

鈴音「???何か問題でもあるの？」

修「問題つーか…、椎は足手まといなんですよ。コイツと同じチームは嫌です。」

椎「な、なんやとお！」

梢「お姉ちゃん、どつどつ。」

椎が怒りを露わにするが梢ちゃんがなだめる。さっきの仕返しだコノヤロー。

鈴音「うーん。椎ちゃんを扱えるの、修君だけだし…」

委員長が悩んでいる。頼む。お願いします…っ！

菜摘「諦めなさい修君。小等部から高等部までの10年間、あなたと椎ちゃんがいつも一緒のクラスなのは椎ちゃんを抑えるためなのよっ。」

修「くそっ！やっぱりそうなのか！どつりで椎がなにかやらかすと毎回毎回オレが呼び出される訳だ…！」

掃除した理事長室のカーペットに突っ伏すオレ。最悪過ぎる。オレがそんな扱いだとは…。

梢「修さんどつどつ。」

椎「私が修に扱われるなんて不名誉やわあ……」

今まで目を背けてきた事実を告げられる苦しさ。涙が出そうだ。

菜摘「まあともかく早速捜査しましょう？修君、事実は事実。現実を見なさい。」

菜摘先輩に諭されつつ、椎と梢ちゃんと一緒に理事長室を出る。うう…、オレって一体…

そんな理事長室の会話から数分後、昨日会えなかった日森さんのお母さんに会いに行くことに。

ちゃんとアポは取ったけど…、会えるだろうか？

梢「今日は会えると良いですね。」

椎「大丈夫やて梢。流石に大人が、二度もにアポをすっぱかしたりせえへんやろ。」

修「グダグダ考えても仕方ねえ。行くぞ」

と言つわけで日森さんの事務所の玄関をくぐる。

受付で日森さんの母親に連絡する。どうやら今回は大丈夫らしい。

受付嬢「では、こちらへどうぞ。」

受付嬢に案内されてソファーに座るオレ達。そこで数分間待っていたら、顔がぼつちやりしている女性が現れた。この人が日森さんの母親らしい。

「日森京子の母、『日森祥子』です。」

修「こんにちは。木ノ花学園高等部の城崎修と言います。こっちの二人は木下椎と木下梢です。」

「「こんにちは」

お互いに挨拶し、日森さんのお母さん・・・日森祥子さんがソファーに座ったのを見て、本題を切り出した。

修「さて、今日僕たちがあなたの事務所へ訪ねたのは他でもない。娘さんの事です。」

祥子「いろいろ話す前に教えてくれない？君たちはなんで、京子が

いなくなったことを知っているの？」

祥子さんが疑うような視線でオレ達を見る。まず、事情を話す必要があるな。

修「あなたは木ノ花学園に『本格推理委員会』という委員会がある事をご存知ですか？」

祥子「『本格推理委員会』？確か：学園内で起こった事件を解決するのが結成された目的だと聞いたことがあります。」

修「はい。僕たちは『本格推理委員会』のメンバーで、京子ちゃんがいなくなったことを顧問から聞いて、搜索しているのです。」

祥子さんが納得したような顔をする。よし、本題に入ろう。

修「ではお聞きします。8月2日の深夜、あなたが自宅に帰った時にはすでに京子ちゃんはいなかった……これは事実ですね？」

祥子「ええ。より正確に言うなら深夜2時あたりですけど。この時間ならすでに京子はベッドに入って寝ているはずなのに、家中探しても見つからないんです。」

修「その時、なにか違和感を感じませんでしたか？」

祥子「全く。いつも一緒だったわ。」

何も手がかりなし。やばい。捜査が往生するかもしれないな。

椎「あの〜、お一つお聞きしても良いでっか？」

祥子「???ええ、どうぞ」

椎がおずおずと手を挙げて聞いてきた。…何を聞くつもりだ？

椎「最後に京子ちゃん会った時、京子ちゃんがどんな様子だったか教えてくれまへんか？」

椎の奴、なんでそんな事を…

祥子「え?えーっと悲しそうな顔をしていた。かな?」

椎「あ、後もう一つ!」

一つで済まなかったな。

祥子「なんででしょうか？」

椎「京子ちゃんの誕生日・・・7月23日の夜、あんさんらは京子ちゃんとか約束してましたか？例えば、『誕生日は一緒に祝おう』とか、そんな感じの約束」

祥子「え、ええ。その日は京子と、『お父さんとお母さんと一緒に祝いましょうね』って約束してましたか・・・」

椎「あ、ありがとうございます」

椎がへこへこしながらお礼を言う。梢ちゃんは特に質問はなさそうなので、今日はこれで引き上げる事にした。

.....

その頃、鈴音と菜摘の二人は警察署前に立っていた。理由はもちろん、大野の情報を仕入れるためだ。

菜摘「先に言っておくけどね。確実に情報が入る訳じゃないよ？鈴ちゃん。」

鈴音「わかっているよ。運良く情報が手に入れられたらそれで十分

だから。」

警察署の前で『情報を手に入れられるかどうかは運次第』と確認し、二人は警察署の裏口に足を踏み入れた。

菜摘「失礼します。」

鈴音「し、失礼します。」

菜摘が軽快に、鈴音がオドオドしながら入る。菜摘が臆さないのは度胸だろうか、それとも『慣れ』なのだろうか？

山下「あ、菜摘ちゃん」

菜摘「お久しぶりです山下さん。」

通路の奥から出てきたどつぷりと太った男が現れた。彼は『山下清』。不知木町に勤める刑事（警部の位にいる）で、菜摘の情報はこの人から仕入れるのだ。

山下「前に会ったのは『神保保』の事件だったね。」

…ところで、そちら方は？」

菜摘「あ、紹介するね。こちらは我が本格推理委員会の委員長、桜森鈴音ちゃんよ」

鈴音「初めまして。」

山下「初めまして桜森さん。僕は不知木勤務の刑事、山下です。以後、お見知りおきを。」

ぺこりと頭を下げ、挨拶する委員長につこり笑って返す山下。

その様子を見て、もう良いかな。と思った菜摘は本題を切り出す事に。

菜摘「山下さん、それで本題に入りたいんだけど…」

山下「ああ。大野の情報だろ？あざみさんから聞いているよ。」

そう言った山下はまた奥に行き、一つのファイルを渡してきた。

山下「はいこれ。『大野渉が不知木町に入った後の予想逃走ルート』だよ。報酬は…わかってるね？」

菜摘「もちろん。『事件を解決したら、事件の全容を事細かに説明する』だよな？」

山下「わかってるね。行方不明の女の子、見つかるの良いね。」

そう言っつて山下は鈴音達の脇を通り過ぎようとした。

山下「それから、いつも言っているけど」

菜摘「わかってるよ山下さん。『事件を捜査するときは一時たりとも油断するな』でしょ？」

山下「わかってるならよろしい。あざみさんによろしく言っといて」

二人にそう忠告した山下は去って行った。

.....

そして祥子さんの事務所から出たオレ達のほうは…

修「さて、これからどうすっかなあ。」

梢「一度、委員長にどうすべきか仰ぎましょう。」

事務所近くのファミレスで休憩中。ちなみに椎のバカは寝ている。

修「よし、そうしよう。えーっと委員長の番号は…」

携帯を取り出して委員長の番号に電話をかける。

鈴音『もしもし修君？どうしたの？』

携帯に出た委員長はどこか妙に焦っていた。電話の向こうで何が行われているのだろうか？

修「日森さんのお母さんとお話が出来たので、オレ達はこれからどうすべきか、委員長に仰ぎたいんですけど。」

鈴音『わかった。じゃあとりあえず、学校に集合しましょう。私達が得た情報と一度照らし合わせるよ。』

委員長の声の向こうで菜摘先輩がなにやら叫んでいるような気がしたが…、通話が切れてしまったので分からなかった。

修「…ふう。」

梢「委員長は、なんと?」

修「学校に集合して、情報をまとまるってよ。」

梢「わかりました。じゃあ行きましょう。」

修「おう。」

寝ている椎を強制的に起こして、オレ達は学校へ向かった。

続く

スピンオフ！ 錯綜する事件（後書き）

夢幻「Merry Xmas！サンタクロースだよ〜！」

零牙「いや、セリフの前に思っきり『夢幻』って書いてあんじゃないかねーか。」

夢幻「さて、零牙のプレゼントは爆破したところで、みんなにプレゼントだよ〜。」

零牙「オイ作者。今とんでもないことを言わなかったか？」

夢幻「まずは修！『ティファールの巨大圧力鍋』（今後作中にも登場予定）をプレゼント！」

修「よっしゃ！」

夢幻「椎は『携帯用安眠枕』……って、どこでも寝れるなら問題ないんじゃない〜。」

椎「アホやなあ。その枕を持っておけば、もつと快適になるやろ？」

夢幻「ま、いいや。梢には『出番の増加』ね。結構大事なキャラだから、多用するよ？」

梢「主人公変更が望ましい。」

夢幻「そこまで狙ってたとは…。次は菜摘。『美少女』はさすがのオレでも無理だぞ？」

菜摘「じゃあ、美少女キャラ追加をお願いします！」

夢幻「書いているオレが言うのもなんだけどさ、救いようのない変態コンだよなお前。

続いて鈴音。『事件の早期解決』か。本格推理委員会委員長らしいね〜」

鈴音「あの…、私頼んだの違う…。私、最新機種の携帯とカメラ…」

夢幻「最後に雅。『レイの過去を早く教えて欲しい』、か。恋する乙女は一途だねえ」

雅「だって気になって仕方がないんだもん！」

夢幻「それは今後の展開をお楽しみに。さて、次回予告でもする」

零牙「オイ作者。オレのプレゼントは？」

夢幻「零牙、サンタさんからのプレゼントは『良い子』にしか与えられないんだ。お前は作中で何人殺したよ!？」

零牙「ん〜。ざっと30人くらい？」

夢幻「多すぎだよバカ。とにかく次回予告だ。修、よろしく」

修「はいはい。次回 本格推理委員会 『スピンオフ! 検証と事実』」

委員会一同「お楽しみに!」

スピントフ！ わかった事実（前書き）

お正月間近！

今年中に後一本アップできれば良いな…。

スピンオフ！ わかった事実

そして、理事長室にて

鈴音「…全員揃ったね？」

修「はい。」

鈴音「それじゃあ、これまで起こったことを検証してみるよ。菜っちゃん書記お願い。」

菜摘「はいはい」

菜摘先輩がA4サイズの紙とペンを用意して、委員長がこれまでわかったこと簡単にまとめた。

鈴音「これまでわかった情報を元に、明らかにしなければならぬ謎は3つ。」

？ いなくなる前に彼女は何をしていたか。

？ 大野渉が不知木町に入った後は何をしていたか。

？ 彼女がいなくなったことで起こった変化は何か。

大まかな謎としたらこうね。後、もし誘拐犯が彼女を攫ったのなら、

？ なぜ、現金などの要求がないのか。って言うのも増えるけど、まあまだ彼女が大野に捕まった確証がある訳じゃないし、とりあえず保留にしましょう。」

委員長は一通り説明し終わると、理事長室のソファーにもたれかかる。まず、というかやはり、オレ達がやるべきことは。

修「いずれの謎にせよ、情報がまるでないですよね。」

椎「そうやなあ。今んところわかっている情報は、ものすごく部分的な物やしなあ。」

菜摘「そうね。何にせよ、事件解決のためには情報が必要不可欠だわ。」

鈴音「次に私達が取るべき行動は『日森京子さんの最近の行動』と『大野渉の目撃情報の入手』ね。日森さんと大野の写真は渡しとくから、修君達は日森さん家の近所の人達に聞き込みを、私達は近くのスーパー、コンビニの防犯カメラのチェックに行くわ。」

委員長が次の行動を言う。だけど一つ疑問に思う、防犯カメラのチェックって出来るのか？

梢「委員長、防犯カメラのチェックってどうやるつもりですか。」

あ、梢ちゃんが聞いた。

鈴音「不知木町周辺なら、あざみ先生に頼んでおけば大抵の事は大丈夫なの……」

委員長が遠い目をする。一体なにかあつたんだろうか？

菜摘「とにかく、聞き込みに行くわよ！みんな準備は良い？」

菜摘先輩が声を張り上げ、オレ達を見る。言われなくても準備はいつでも万全だ。

そんなオレ達の様子を見て、菜摘先輩はさらに一言。

菜摘「みんなわかっていると思うけど、事件は早期解決が一番だからね。だからといって無理矢理な方法で解決はしない。私達はあくまで日森京子さんを見つけることだからね！」

要するに早期解決が一番だけど、日森さんが見つかることを最優先に。ってことか。そんなの言われなくてもわかってますよ。先輩。

先輩の言葉を胸の中に留めて、オレ達は聞き込み調査に向かった。

修「さてと。手当たり次第に聞き込みをしてみつか。」

梢「そうですね。」

椎「なんか、本物の刑事や探偵になった気分やなあ。」

日森さんの家の前まで来たオレ達は、家の近所にある店や通りがかった人に聞き込みを行ってみた。しかし、そう簡単に情報が集まる訳がない。あつという間に二時間経ち、時刻は十二時半。

椎「疲れた〜。喉乾いた〜。お昼にせえへん？」

椎が音を上げる。もうお昼の時間だ。オレもお腹が減ってしょうがない。

修「そうだな。その店を聞いたら休憩しよう。」

椎「い〜や〜や〜。お昼〜」

梢「お姉ちゃん、どげどげ。」

という感じで入店。そこは日森さんの家から少し離れた駄菓子屋で、昔ながらの駄菓子屋っていう雰囲気だった。

椎「ほえ〜。あ、懐かし！これちっこい頃よく食べたわ〜」

椎は入って30秒でさっきまでの空腹を完璧に忘れ、駄菓子を見入っている。

修「さてと、聞き込みをしますか。」

そんな椎を一瞥した後、足手まといはほっといて、レジ近くにいるおばあちゃんに聞き込みをすることにした。

が、ここで問題が。

修「すみません。ちょっとお聞きしたいことがあるんですけど…」

「はいはい、なんですかね？」

修「ここ一週間で、この写真の子を見ませんでしたか？」

そう言ってポケットから委員長にもらった日森さんの写真を取り出

す。

その写真を見たおばあちゃんは疑わしい目でオレを見てきた。

「あんだ、なんでそんな事を聞いてくるんだい？」

修「実はこの子を捜索してしまして…、この近辺に目撃情報がないか、聞き込みをしているんです。」

「例えあたしが知ってたって教ええないよ。」

修「なんでですか？」

そういうと、おばあちゃんはオレを睨みつけ

「あんだ、その子を誘拐しようとしているんだね？」

と言った。

思わず目が点になる。まさか初対面の人にそんな事を言われるとは思ってなかったからだ。そりゃ、昔から犯罪者面とか言われてきたけど、最初から犯罪者扱いされるのはこれが初めてだ。

「大体、刑事でもないのにそんな事を聞いてくる奴かには口クな奴

じゃないんだよ。ほら、とっとと出ていきな。」

おばあちゃんは『シツシツ』とハエを追い払うようにオレを追っ払う。非常に殴りたい衝動に駆られるが、そんな事したら本当に犯罪者になるのでガマンガマン。

梢「あれ？修さんどうしたんですか？聞き込みは…」

椎に付いている梢ちゃんに声を掛けられる。オレが来た事情を察したらしく、ポンと肩に手を置く。が、すでに慣れて（諦めて）いるので聞き込みを変わって欲しいと言つと『わかりました。お姉ちゃんをお願いします』と言つてさっきのおばあちゃんのところに向かった。

椎「お小遣いピンチやけど買っちゃおう。ってあれ？なんで梢じゃないかって修がおるん？」

修「聞くな。言わせないでくれ…」

駄菓子に目を向けていた椎がオレの存在に気が付いた。椎も事情を察したらしく、梢ちゃんと同じように肩に手を置いて

椎「修、何事も諦めてが肝心や。」

と、諭すように言った。

そして一時間後：

オレはお昼を食べ、先程の犯罪者扱いを記憶から消去してどうにか立ち直った。

そして別働隊として動いていた委員長達と合流し、情報をまとめることに。なので今、オレ達は公園に集合している。

菜摘「どう？収穫あった？」

梢「全くありません。委員長達はどうですか？」

鈴音「結構あったよ。じゃあまずは、私達から発表するね。」

という事でまずは委員長達がわかった情報を言う事に。

鈴音「日森京子さんは5日前、近くのコンビニでスナック菓子を購入してたわ。だけど量がハンパじゃない。カゴいっぱいに入れてたわ。」

次に3日前、日森さんが空色のリュックを背負って歩いているのを防犯カメラが映していたわ。ちなみに大野渉は近くのカメラに映っていた。

最後に、日森さんがいなくなってから今日まで毎日、『とある人物』が家の近くのコンビニで食べ物を購入している…。これくらいかな。

「

菜摘「しかも、防犯カメラに映っていた時間や設置してある場所から彼女がどんな道を通ったかまでわかったよ。ま、これは大野渉にも言えることなんだけど。」

菜摘先輩はそう締めくくった。たった数時間でこれだけの情報を集めたのは、正直感服してしまう。

菜摘「ちなみこれが、日森京子さんと大野渉の移動ルートよ。」

菜摘先輩が地図を広げて指でなぞる。日森さんと大野は一度、地図上では交差しているから、もしかしたら二人は会っているのかもしれない。

鈴音「まあ、ここまでくれば『日森さんがどこへ行くつもり』としていたか』ってというのは、おおまかな予測は立てられるわね。」

修「そうですね。後は『大野渉が日森さんを誘拐したかどうか』さえ分かれば……」

菜摘「事件解決。日森さんも戻ってくるわね。」

日森さんの気持ちになれば、彼女がなぜ居なくなったのかはわかる。あと一歩。あと一歩なのに……！

鈴音「菜っちゃん、山下さんから大野についてまた聞いてくる？」

菜摘「そうね。多分何も得られないだろうけど……」

委員長達がなにやら相談している。聞いてみるとなんでも警察署にいくらしい。警察署か……嫌な記憶しかないんだよなあ……。

椎「警察署ゆーと、あの事思い出すなあ」

菜摘「なになに？椎ちゃん、警察署になにか思い出でも？」

椎が余計な事を言いそうだ。ヤバい、先手を打たないと。

椎「中学生の頃、修とスーパーで買い物していたらな、」

修「オイ椎！それ以上言うなら……ムグウ！」

菜摘「修君は黙ってなさい。」

菜摘先輩に口を封じられる。くそ！このままだとあの事がみんなに！

椎「修がスーパーを出た時に店長に呼び止められてな、店の奥に行つたんよ。呼び止められた理由は万引きやったか疑われたなんやけど……」

修「ムウウウ！ムウウウ！」

菜摘「うんうんそれで？」

椎「修がなかなか白状せえへんから、遂に警察に連絡されて、拘置所に入れられたんよ。」

鈴音「それって災難っていうレベル超えているよね……」

ヤバい！ここで止めないと本当にヤバい！

修「ムウウウ！ムウウウ！」

菜摘「はい暴れたって無駄だよ。」

先輩に肩を封じられた上に口も塞がれている。打つ手ナシか…

椎「一晩拘留所に入れられて、次の日学校にも来ないからみんな大騒ぎして警察署に修を迎えに行ったんよ。」

菜摘「それで？」

椎「警察署から出てきて、警察官から『本当に今まで何もしていないのか？』って最後まで疑われてたんよ。」

その後、修は警察に『要注意人物』^{レットテル}っていう称号を貼られているうちゆう噂が広まって、女子から気味悪がられてたってゆう話や。」

言いやがった。オレの顔で起こったトラウマを椎のバカが言いやがった。結構気にしているのに…

鈴音「修君…、大変だね。」

菜摘「…ゴメン。辛い事思い出させちゃったね。」

委員長と菜摘先輩の哀れむような視線が辛い。この事があるから、警察署には行きづらいんだ…。『自首しに来たのか？』って思われるから…。

菜摘「修君、気にしちゃ負けだよ。ポジティブに、ね。」

鈴音「きっと良いことあるって。きっと。」

修「良いんです。もう慣れましたから…。」

トボトボ歩きながら、みんなと警察署に向かう。警察署行って何もなければ良いんだけどなあ…。

.....

で、不知木町警察署前。

菜摘「じゃあ、入るよ。覚悟は良い？修君。」

修「覚悟もなにも、やましい事なんて一つもしてないんで、堂々と入りましょう。」

てな訳で警察署に入った。

警備員「君、ちょっと良いかな？」

なぜかオレだけ入り口の警備員に呼び止められたけど。

椎「やっぱりそうなるわな。修やし。」

梢「先行ってます。頑張ってください。」

修「待て！せめてオレの身の潔白を証明してから行ってくれ！」

中に入った木下姉妹がオレを見捨てて行った。またカツ丼を食べる羽目になるのは嫌なんだ！

菜摘「大丈夫よ修君。堂々としていれば、すぐに釈放されるわ。」

鈴音「帰りに迎えに行くからね。」

委員長と菜摘先輩もオレを見捨てて警察署の奥に行った。一人残されたオレは。

警備員「身体検査とかさせてもらうからね。さ、こっちに来て。」

何度目かわからない身体検査（強制）を受けるために、別の入り口から警察署の奥に向かった。

.....

菜摘「山下さん。いますか？」

修を入り口に置いて（見捨てて）きた菜摘達は、山下のいる部署を訪れていた。

山下「おー。菜摘ちゃん、今度は何の用かな？」

すると梢の後ろからどっぴり太った山下が現れた。

どっぴりちやうど時のおやつを食べて来たらしい。口元から糖の匂いがする。

鈴音「こんにちは山下さん。」

山下「お、委員長。また来たね。ところで今回はどんなご用で？」

鈴音「大野渉の最新の情報を教えて欲しいんです。」

山下「あー。大野渉は捕まえたよ。ついさっき。」

ボケーツと思い出したように言う山下。どうやら伝えるのを忘れていたようだ。

菜摘「なんで教えてくれなかったの？」

山下「いやあー。連絡しようとしたらアドレスとか知らなくてさ、あざみさんに連絡したんだけど繋がらなくて。ゴメンネ」

アハハと笑ってごまかす山下。その笑い声を聞いて「まあ、いいか…」と思ってしまう委員会メンバー。山下の笑い声には不思議な力があるのだ。

菜摘「じゃあ山下さん。大野渉に日森さんの事、聞いてくれる？」

山下「ああ。取り調べのついでに聞いたよ。『知らない』ってさ。」

菜摘「ウソをついている可能性は？」

山下「僕自身に取り調べをしたけど、あの反応じゃあないだろうね。」

菜摘「ふーん。山下さんが言うなら確かなんだろうね。」

山下「用はそれだけかな？じゃあ僕はこれで。」

そう言っつて山下はに部署の中に入っていった。

鈴音「やっぱり大野は事件に関係なかったね。」

菜摘「予想通りだよ。犯人もわかったているし…椎ちゃん達見つけて行くか。」

鈴音「うん。事件を終わらせに…ね。」

二人は頷いて事件を終わらせに向かっていった…。

続
く

スピンオフ！ わかった事実（後書き）

夢幻「も〜い〜くつ寝ると〜お正月〜」

修「作者、お年玉よこせ」

夢幻「修、人が気持ちよく歌っているのに何を言い出すんだか。つかまだ年明けてねーよ。」

修「じゃあ年明けたらくれるのか？」

夢幻「いや、それはない。」

修「よこせよ（ギロツ）」

夢幻「修、殺人鬼の顔になってるぞ」

修「ちっ…。この守銭奴め…」

夢幻「本編でお正月になったらあげるよ。ほら次回予告しろ。」

修「まだ次回の書き上げてねーんだろ。次回予告なんて出来ねえだろっが。」

夢幻「今回は解決編です！お楽しみに。」

修「結局自分でしやがったし…」

スピンオフ！ 行方不明の少女の願い（前書き）

今日で2010年も終わりですね！

スピンオフ！ 行方不明の少女の願い

椎「いや〜。警察署の中って迷路みたいやなあ。」

梢「お姉ちゃん勝手にどころに行くから…。」

警察署から出て、菜摘達と合流した梢達。どうやら迷子になってたらしい。

菜摘「全く。警察署の中をうろちよろすると、私と鈴ちゃんが起こられるんだから勝手に動かないでよね！」

警察署の中を30分探し回ってやっとのことで椎を見つけ出した菜摘が注意する。ちなみに菜摘が椎を見つけた時、椎はカレーを食べていた。呑気なものである。

鈴音「さて、椎ちゃんへの説教はまた後にして、ご両親に連絡しないと。」

梢「しかし来るでしょうか？二人とも娘が居なくなっただのに、仕事をしているんですよ？」

菜摘「多少脅してでも連れてきなさい。脅し方がわからなかったら、零牙君にでも電話すれば大丈夫でしょ。」

とんでもないことを言う菜摘。時には脅すことも必要なのだ。

椎「よし、そうと決まれば善は急げや。」

そう言つて椎は零牙に電話を掛けた。

プルルル…プルルル…

ガチャ

零牙『はいもしもし?』

椎「あ、零牙君?お久しぶり。」

零牙『お久しぶりです。椎先輩。なんのご用件で?』

椎「せや。ちょっと教えて欲しいことがあるんや。」

零牙『なんででしょう。』

椎『行方不明の娘ほったらかして仕事してはる親を連れてくる脅し方』や。』

零牙『なんでそんな事を…？』

条件反射のようにツッコむ零牙。依頼だけ聞いたら犯罪に関与していると思えない程危ない。

椎『あー。事件でなあ。で、どうやって脅すんや？』

零牙『えーっと、《娘さんが見つかりました。あなた達に会いたいそうです。早急に今言つとこるに来てください。さもなければ、娘さんは永遠にあなた達の目の前に現れることはないでしょう》…これぐらい言えばいいかな？

後、現実身を持たせるためにバックに声が聞こえていると効果的ですな。』

椎『ありがとな。ほなまた。』

ピ。

椎「ふう〜。なんでアイツは脅し方（そんな事）わかるんや…？」

聞いた本人が言える事ではない。

梢「どうだった？」

椎「バッチリや。さて、一気にクライマックスといこか。」

椎達は事件を終わらせるために歩き始めた。

.....

零牙「なんだった一体…？」

通話の切れた携帯に目を落としながら呟く。向こうは向こうで大変
そつだ。

ミア「レイ、どうしたの？」

隣にいるミアが聞いてきた。事件だとか言ってたけど…

零牙「椎先輩が『脅迫電話のやり方を教えてくれ』って聞いてきた。」

ミア「椎さん…、なにがあつたの？」

隣にいるミアが呆れる。オレ達のいない間に委員会に何があつたんだらうか？

レイ「ま、学園都市からでたら聞こつぜ。」

ミア「そうだね。」

.....

さて、戻って椎達は…。

椎「よし。あの両親にも電話したし、後は待つだけやね。」

鈴音「なんて言ったの？」

椎「来ればわかるで。」

とある場所にて日森さんのご両親を待っていた。来るかどうかかわからないが、少なくともあの両親が来ないと事件が解決しない。

そして数十分後…。

誠一「娘が見つかったと聞いたが…どこにいるんだ？」

祥子「早くしてくれないかしら？私、これから生放送なのよ？」

来てくれた。後は少しだけ後押しするだけだ。

鈴音「娘さんはここにいます。…京子ちゃん、出てきて。」

鈴音が呼びかけるとある場所 - 日森京子の友人、幸村詩織の家の玄関から一人の少女が出てきた。今回の事件の当事者、日森京子だ。

誠一・祥子「京子！」

両親が駆け寄って抱きしめる。微笑ましい光景だ。

祥子「どこ行ってたのよ京子。心配したのよ。」

誠一「無事で良かった。本当に、無事で…」

京子「……………」

この光景を見て、大抵の人なら口を噤んでしまっただろう。しかし、覚悟を決めて鈴音は事件の真相を話す。

鈴音「誠一さん、祥子さん。今回、なぜ京子ちゃんがこんなことをしたかわかりますか？」

え？と、二人は振り向いて鈴音をみる。しかし、その言葉を聞いて一番動揺したのは当事者の京子だった。

鈴音「京子ちゃんがこんなことをしたのは、あなた達が原因なんです。」

誠一「いきなり何を言い出すんだ。君は。」

祥子「そうよ。京子が戻ってきたから今回の騒ぎはこれでお終いでしょっ？。」

鈴音「いいえ終わってません。終わったとあなた方が思っている、実際は何も終わってないんですよ。」

誠一と祥子の二人が黙つたのを見て、鈴音は事件のあらましを話す。

鈴音「今回の『事件』……いや『騒動』は、内容はただの《日森京子の家出》なんです。でも彼女が今回の騒動を起こした理由、つまり『動機』が終わってないんですよ。」

誠一「京子が今回の騒動を起こした理由？」

祥子「それは後で私達が京子から聞くから良いでしょう？私、これから生放送だからそこからどいてくれないかしら？」

祥子はひたすら急ごうとしている。そりゃあそうだろう。生放送なのに遅れたら一大事だ。

しかし鈴音は続ける。二度とこんな事が起きないためにも。

鈴音「後で京子ちゃんを叱って、理由を聞きだそうとしても無駄です。あなた方自身で気づかない限り無駄なんです。」

誠一「一体なんだ？その理由とは。」

鈴音「動機は至って単純です……京子ちゃんは寂しかったんですよ。」

二人の顔に驚きがはしる。当事者たる京子は黙って鈴音を見つめていた。

鈴音「あなた方が多忙なことは知っています。その『多忙』が、今回の騒動を引き起こしたんです。」

そう。今回の騒動はただ、両親の不在に孤独を感じた京子が、家出しただけなのだ。

しかし、このままほうっておいて良い事件ではない。一歩間違えれば、更に大事になったのかもしれないのだから。

菜摘「私達は京子ちゃんからなにも聞いてないけど・・・あなたなら知ってるんじゃないかしら。詩織ちゃん。」

京子が出てきた玄関からさらに菜摘、梢、幸村詩織の三人が現れた。今回、詩織は家出した京子をかくまっていたのだ。

詩織は潤んだ瞳で誠一と祥子にお願いをした。

詩織「京子のお父さん、お母さん、もつと京子のそばにいてあげてください。京子は、いつも私に『寂しい。お父さんもお母さんも私より仕事の方が大事なんだ』って言ってました。京子が可哀想です。もつと京子と一緒にいてください…、お願いします。」

最後は泣きながら頭を下げた詩織だった。しかし、京子は無表情でうつむいているだけだった。

誠一「そうだよな。寂しかったんだよな」

永劫とも思える沈黙の後、誠一が口を開いた。そして、京子と真正面から向き合い

誠一「ゴメンな京子。ずっと寂しい思いさせて…本当にゴメン。」

謝り、祥子にも謝るように促した。

祥子「そうよね。京子は何も悪くないのよね。ゴメンね京子。いつも孤独ひびにして…」

二人が謝ったことで、京子が涙ながらに二人に抱きついた。

京子「ごめんなさい。こんな事起こしてごめんなさい。でも私、一人で寂しかった。家で一人でいるのが怖かったんだよ……」

ここで、やっと少女の思いは届いた。これからどうするかは彼らが決めることだが……しかし、もう二度とこのような事件は起こさないだろう。

事件を解決に導いた委員会のメンバーは、優しくそつと微笑んでいた。

.....

椎「いやあ、やっと終わったわ。」

梢「書類作るの大変……」

菜摘「ま、あの家族はもう大丈夫でしょ。書類作ってて思わず微笑んちゃったわ。」

事件を解決した後、事件の書類をとりあえず作り、帰宅することになった椎達。しかし鈴音だけが「うーん」と考えこんでいる。

鈴音「うーん。事件解決したのは良いんだけど、なんか忘れてるよ……」

スピンオフ！ 行方不明の少女の願い（後書き）

夢幻「今日で2010年終わりかあ……」

修「来年はうさぎ年だな。」

夢幻「色々あったなあ……」

修「次回はうさぎにちなんだ事件だな」

夢幻「早めに投稿出来るよう頑張るよ……」

修「おう。」

夢幻「読書の皆様、2010年も今日で終わりです！2011年、皆様に良いお年を過ごせるよう心から願っております。」

委員会一同『良いお年を！』

スピントフー！うさぎはどこへ？（前書き）

皆様。新年、あけましておめでとございませう！

今年も頑張りますので、応援よろしくお願いします！

スピンオフ！うさぎはどこへ？

8月5日（晴）

昨日、拘置所からなんとか出てきたオレは朝食を作っていた。

修「ったく…。拘置所入れられるのこれで何回目だよ…。」

生まれつきの凶悪な顔で過去に数度、拘置所に入れられているオレはボヤキながら大根の味噌汁を作っている。自分で言うのもなんだが、色々と苦勞しているのだ。

修「よし、味噌汁完成」

味噌汁をお椀によそり、テーブルに載せる。今日の朝食の総料理時間13分。まずまずだ。

修「おい。死んでねーか？」

母の部屋を開ける。机と本棚しかない殺風景な部屋には…

直子「……」

生きる屍と化した母がいた。肩を揺らして覚醒を促したが…

直子「書くんだ、まだ書けるんだ、私いいい！」

と、へろへろに起き上がってへろへろの文字を書く。締め切り間近ではなく、いつもここののだ。

修「寝ろ。ベッドに行け」

こうなった母は二語以上理解出来ないので短く言う。しばらくペンとオレを見比べた後、ノロノロとベッドに向かい毛布にくるまった。

修「…ったく、もう少ししっかりしてくれよ。」

部屋を出て行き、扉を閉める。朝食を食べて家を掃除していると、委員長からメールが来た。

「from 委員長」

昨日はゴメンね。また学校で何かあったから、学校に来てくれない？

委員長に『了解。すぐ向かいます。』と返信し、掃除を中断。道具を片付けて制服に着替え、家を出た。

駅に向かい、電車を待っていると改札からドタドタダーツ！と爆走するバカの姿が見えた。そのバカがホームにいるオレの隣に立って息を整えてオレに一言。

椎「久々のカツ丼の味はどうやった？」

とりあえず、ストレートを決めといた。

- - - - -

鈴音「おはよーみんな。ってあれ？なんで椎ちゃんは鼻を押さえてるの？」

椎「修がいきなり殴ってきたんや。」

鈴音「修君。女の子を殴っちゃダメだよ。」

修「殴られて当然の事を言ったコイツが悪いんです。」

梢「委員長、今回はお姉ちゃんが悪いんです。城崎さんを叱らないでください。」

鈴音「…まあ、梢ちゃんが言うなら。」

理事長室にていつもの会話。椎がボケてオレがツツコミ、鈴音と梢がフオローするまるで漫才のような会話が十分程続いたあと、委員長が今回の事件を話し始めた。

鈴音「今日、小等部で飼っているウサギがいなくなったの。」

昨日まではいたらしいんだけど、今日は忽然と消えたらしいから、至急、事件解決に向けて動くわよ。」

との事なので、消えたウサギの搜索スタート。

.....

椎「」

高等部から小等部へ行く途中、椎のバカは上機嫌だった。なんでか
って言うと…説明するのが面倒だ。

椎「はあくかわええ子おるかなく楽しみやなく小等部。」

そんな椎のにやけ顔を眺めながら小等部の動物飼育小屋に着いた。

そこにいたのは――

美咲「お久しぶりですみなさん。」

杏子「お久しぶりです。」

ミアのいる六組の生徒、『藤井美咲』と『一ノ瀬杏子』の二人だ。オレが委員会に入っつてすぐに関わつた事件の関係者でもある。（詳しくは本家の『本格推理委員会』を読んでね）

椎「うひょう！久しぶりやなあ美咲ちゃん、元気やったかあ？」

二人を見た途端に飛びかかった変態を襟首を引っ張って制止する。

鈴音「お久しぶり二人共。元気だった？」

杏子「はい！美咲もこの通り元気になりました！」

美咲「その件については色々とお世話になりました。」

につこり笑ってお礼を言う杏子とぺこりと頭を下げてお礼を言う美咲。態度は真反対だけど、この二人はとっても仲良しだ

修「久しぶりだな。…元気そうでなりよりだ。」

美咲「あ、城崎さん！」

杏子「お久しぶりです！実はミアちゃんの事で色々と話したかったですよ」

修「ミアの奴、クラスでなんか問題があるのか？」

だとしたら早急に手を打たないと…

美咲「違っんです。ミアちゃんが前向きなっつて、クラス…学年中の男子から『彼女にしたい女子ランキングの第三位』に選ばれた事を教えようかと。」

杏子「でも最近は零牙君と付き合っているから女子からの嫉妬の聲がちらほらと上がってますけどね。」

修「アイツってそんなに人気なのか？」

今年の春の終わりあたりに来た零牙がねえ…。

美咲「はい。『彼氏にしたい人ランキング第一位』ですよ！男子から相当反感買ってますけど。」

杏子「まあ、頭脳明晰で運動神経抜群。顔も良いから、女子の憧れの的ですよ？」

頭脳明晰、運動神経抜群、ね。ある意味うらやましい。

鈴音「そういえば修君もモテそうだけど、実際どうなの？」

椎「あゝ全然や。そりゃこのバカが、お料理とお掃除が得意な家庭的スキル満載なのは認めるけどな。全然モテないんや。理由は『顔が怖いから』（グサッ）」

梢「昔から女子の間で噂にはなっているんですけど、『顔が怖いから』告白とか出来ないんですよ。（グサグサッ）」

オレの心に傷が…

苦節15年、将来絶対に整形してやる！と決めた瞬間だった。

鈴音「そうなんだ。修君も大変だね」

委員長がにっこりと微笑んで言う。なんか昨日今日と厄日だ。

修「そんなことより、動物小屋のうさぎが逃げたんだって？」

杏子「あ！そうなんです！昨日まではいたんですけど、なぜか一匹……」

鈴音「そのうさぎはなんて名前？」

杏子「『シロちゃん』です。全身真っ白なんでかわいいんですよ」

美咲「ちなみに残ったもう一匹は『クロちゃん』です。全身真っ黒でおとなしいんです。」

そういつて美咲は自分の後ろにある動物小屋を見せた。なるほど、確かに全身真っ黒なうさぎがいる。

杏子「クロちゃん、独りきりで寂しいんです。早くしないと死んじやうかも。」

美咲「そうことなので、なるべくはやくシロちゃんを見つけ出して
ください！お願いします！！」

美咲が再度頭を下げる。そこへ委員長が一步前へでて優しく声を掛
ける。

鈴音「頭を上げて美咲ちゃん。大丈夫。うさぎのシロちゃんは必ず
見つけ出すよ」

その言葉を聞いてにつこり笑った美咲。その笑顔はかわいかったが、
椎のバカがニタニタして笑っていてちよっぴり引きつっていたのが
わかった。

- - - - -

さて、ドラマとかで警察がよくやる実況検分をすることに。まずは
- - 動物小屋の安っぱい南京錠の鍵穴からだ。

修「特にこじ開けられた後はないですね。」

鈴音「そうね。もしピッキングをしたなら跡があるはずだからね。」

『ピッキング』とは、道具（零牙が使っているような専用の道具）
を使って鍵を不正開錠する技術のことだ。犯罪行為だから決してし
ないように。

修「動物小屋の壁に変な跡はないし…様子見用に設置されているガラスだって破壊されてない。」

鈴音「犯人は鍵を使ってうさぎをとったのかしら？」

うーん。と委員長と考えると、向こうから梢ちゃんがやってきた。

梢「二人に聞いたところ、うさぎの様子は普段と何も変わらなかったそうです。」

鈴音「ありがとう梢ちゃん。あれ？椎ちゃんは？」

修「向こうで寝ています。」

近くのベンチを指差し、そこで大口開けて寝ているバカの姿がある。一応あれでも女子高校生なのだから、少しは周りの目を気にしてほしい。

梢「…お姉ちゃんはほっときましょう。」

修「そつだな。あのまま寝かしとう。」

いても邪魔だし。」

鈴音「で、でも椎ちゃん可哀想じゃない？」

委員長はそういつけど…

修・梢「あれの関係者だと思われたくないんです。」

見事にオレと梢ちゃんの声が八モる。今まで何度、アイツのせいで恥を掻いてきたか…。その苦しみがわかるらしい。

鈴音「うーん。じゃあ私が呼んでくるよ。二人はそこで待ってて。」

委員長が椎のそばに駆け寄り起こそうとする。しかし夢半ばの椎が委員長に遅いかかって…オレ達は目をそらしていた。

.....

修「大丈夫ですか。委員長。」

鈴音「……もう、お嫁にいけない……」

梢「お気の毒。」

委員長が憔悴しきっている。何があったかは、表現すると色々やバいのでご想像にお任せします。
そんな委員長を連れて、オレ達は小等部の職員室を訪ねた。理由は、動物小屋の掃除をした人を探るためだ。

「失礼します。」

小萌「はいはいお待ちしてました。ってわ！」

職員室に入り、オレ達を外向いてくれたのは小学生だった。(＋オレの顔面のリアクション付き)

鈴音「あ、あれ？なんで子供がこんなところに？」

小萌「あ、委員長さんですね？私、六組の担任をしています月詠小萌と言います。よろしくです。」

それと、先生、ちゃんとした大人ですよ？

委員長のツツコミを笑顔でスルー。つーかあり得ねえだろ。先生ってことは、教育免許取ってるんだろ？だとしたら大学にも出ていますはずだし…

修「（ジー）」

小萌「な、なんですか？先生の顔に、何か付いてますか？」

疑い、つい凝視してしまう。本当にこの人教師なのか？

修「そうだ。ミアに聞けば良いんだ。」

ミアは六組なのでこの人が言っていることが真実かどうかは
ず。

電話を取り出し、電話をかける。

1コール。2コール。3コール。

修「あれ？電話に出ねえ……」

ミアがなかなか電話に出ないので零牙に掛けることに。

1コール。2コール。3コール。

零牙『もしもし。』

よっしゃでたっ！

修「もしもし零牙か？」

零牙『城崎先輩。一体何の用で？』

修「ちよっとお前に聞きたい事があつてな。実は・・・」

零牙『先輩、脅迫はダメですよ？先輩がやったらシャレにならないし、ミアが悲しみます。』

零牙がオレの声を遮って言う。そんなのオレが一番わかってる。

修「いや。お前のクラスの担任の特徴を教えてほしいんだ。」

零牙『小萌先生ですか？身長135cmの小学生並みの小ささで、ピンク色の髪をしています。』

∴零牙の言う特徴が完璧に一致する。間違いないらしい。

修「ありがとう。学園都市は楽しいか？」

零牙『はい。今みんなでプールに来てて・・・うおおお！?』

なんだ!?なにが起こった!?

ミア『お待たせ』

零牙『ミア…。すみません先輩。失礼します!』

ブツ…

修『おい!?一体なにが…。切りやがったよアイツ…』

人の妹になにやってんだアイツ!?帰ったら色々聞いてお仕置きしないとな!

梢『どうしたんですか?』

修『いやなんでも。それよりこのちっこい人は先生だ。零牙が認めたらからな。』

梢『あ、零牙君に電話してたんですね。』

なるほど。と梢ちゃんは合点がいったようだ。
あと、委員長がまだ疑っているようだから誤解を解いておこう。

~~~~~数分後~~~~~

鈴音「えーっと、それでは気を取り直して…」

オホン。と一息付いてから話を始めた委員長。オレ達は後ろで待機中だ。

鈴音「小萌先生、昨日の動物小屋の貸し出し人物ってご存知ですか？」

小萌「はいはい。えーっと、山下貴志君と有朋庄助君ですね。二人とも、私のクラスの子です。」

鈴音「どういった感じで鍵を借りに来られたのですか？」

小萌「いたって普通ですよ？職員室に入ってきて、私に挨拶して鍵を持って行って、お掃除が終わったら鍵を返してきました」

梢「それはいつ頃…」

小萌「うーん。10時ぐらいですかね。30分もしたら鍵を返しに来ました」

修「その子達の特徴は？」

小萌「山下君は、まん丸顔が特徴で、有朋君は、つぶらな瞳が特徴ですよ？」

修「ありがとうございます。」

お礼を言って今までの情報をメモする。

次はそいつらを訪ねないとな。

続く

スピンオフ！うさぎはどこへ？（後書き）

夢幻「新年」

零牙「あけまして」

修「おめでとございますー！」

夢幻「はい！予告通り今年の干支、『うさぎ』にちなんだ事件だよー！」

修「ついでに聞くが作者、作中でオレ達のテレビは地デジ化してるのか？」

夢幻「もちろん。」

零牙「2011年7月。地デジ化完了。地デジ化していないみんな、電気店へ急げ！」

夢幻「とにかく、今年も『本格推理委員会』をよろしく願いしま

す  
!

スピンオフ！ え…？（前書き）

春眠暁を覚えず…。朝昼晩眠いです…。

スピントフ！ え…？

小萌先生から鍵を借りたふたりの生徒の住所を聞いて、話を聞きに行った修達。しかし、修にはある事が引っかけかかっていた。

修「零牙と同じクラスの子ねえ…」

鈴音「どうしたの修君、浮かない顔して。」

修「いやあ委員長。以前零牙に学校で起こった出来事を聞いたんですけどね。その、なんつーか…」

梢「零牙君のクラスは曲者揃いっていうか、なんて言うか…」

椎「ある意味最強やからな。」

この三人は以前、零牙がFFF団に処刑されかけた話を思い出していた。

『零牙と同じクラス』FFF団っていう訳わからん団体の一員』という構図である。

鈴音「うーん。まあ、どんな子にせよ、偏見は持たないように。じゃないと、情報が聞き出せないからね。」

委員長が忠告する。でもなあ……。と心の中に微妙なわだかまりを抱えながらも、鍵を借りた生徒の一人、有朋庄助の家についた。

「」「」……「」「」

鈴音「ほらどうしたの？尻込みせずに行くよ。」

そう言つて委員長が家のインターフォンを押そうとした瞬間……

ドオン！

家の中から衝撃波を伴つて爆発音が聞こえてきた。

鈴音「……大丈夫。多分、お料理に失敗しただけだろうから。大丈夫大丈夫。」

委員長がオレ達に……というか自分に言い聞かせてる。微妙に震える指でインターフォンを押す。



ピンポンと言う音が鳴って、中から白衣を来た一人の男の子が出てきた。つぶらな瞳が特徴の、有朋君だ。

有朋「あの…どちら様で？」

鈴音「こんにちは有朋君。私は『本格推理委員会』の委員長、桜森鈴音って言います。ちよつとお話良いかな。」

委員長が優しく話かける。すると奥からまた一人、有朋君と同じくらしい背丈の子が顔を出してきた。

山下「どうした翔太。新聞の勧誘でも来たか？」

まん丸顔で優しい話し方の子 - 山下貴志君だ。

有朋「貴志…いや。委員会だよ。ほら、管原が無理矢理入らされた」

山下「ああ、あの破天荒な理事長が作ったトンデモ委員会ね。」

二人の会話に全くツッコめない。確かにミアは理事長に攫われてきたし、（強制的に入らされた）その理事長はトンデモないからだ。

貴志「…で、その委員会の皆さんが一体何のようで？」

鈴音「昨日から飼育小屋のうさぎがいなくなってね、それで、最後に飼育小屋の掃除をした君たちに話を聞きに来たんだよ。」

山下「なるほどね。しかし無駄ですよ？オレ達は普通に掃除して、普通に鍵を返しにいっただけですから。」

修「その掃除中、鍵はどこに置いてたんだ？」

有朋「ずっとオレのポケットに入れときましたよ。」

そういつて有朋君は白衣の下に着ている制服のズボンのポケットを叩いた。山下君も証言している。…どうやら、手詰まりのようだ。

鈴音「そうなんだ…ありがとう。また聞きたいことがあつたら聞かせてもらっても良いかな？」

有朋・山下「もちろんです。」

いい笑顔で返した二人。やっぱりこんな良い子が、変な組織の一員だなんてある訳がないよな。

椎「ところで、さっきの爆発はなんだったん？」

有朋「あゝ、ちょっと爆薬の精製に失敗しちゃって…」

前言撤回。やっぱり変な組織の一員のような…

.....

修「しかしなあ…手詰まりかあ」

梢「まずいですね…」

鈴音「…ねえ椎ちゃん。今回の事件、どう思う？」

そうか。椎の直感は胡散臭いぐらい当たるから、捜査の方針にしよ  
うって訳か。良い考えだ。

椎「うん。わいはあの南京錠が怪しいと思うんや。」

鈴音「なるほど。南京錠ね。」

修「どんな風に怪しいと思うんだ？」

椎「……さあ？」

……ちよつと期待したオレがバカだった。

鈴音「なるほど。じゃあ調べてみましょう。」

という訳で学園へ戻る事に。…お昼どうしよう。

.....

で、学園にて。

梢「ところで委員長。」

鈴音「なんだい？」

梢「南京錠で何を調べるつもりですか？」

椎の直感を信じてみるといっても、具体的に何を調べるかがわからないからな。

鈴音「うーん。とりあえず、南京錠がすり替えられているか調べてみるよ」

修「けどなあ…先生いるか？」

鈴音「大丈夫だよ。なんかわかんないけど、あの人はいそ那样的気がするから」

なんなんですかその根拠のない自信！

椎「なんか『あなた達が私を必要だと感じたから来たのよ』とか言いそつやな」

梢「まさか…ね」

なぜだろう。あの大魔王がいる気がする

- - - - -

あざみ「やつほ〜お久しぶりね。みんな」

理事長室に着くと凶悪な笑みを浮かべたあざみ先生がいた。いたよ……。大魔王いたよ……。

梢「あざみ先生、お久しぶりです。」

あざみ「お久しぶり梢ちゃん。理事長室のお掃除、ありがとね」

優しく語りかけるあざみ先生。騙されるな。この人は理事長室の掃除を押し付けた人なんだ。

椎「で、今日はどーしたん？仕事は終わったん？」

あざみ「いや。なんとなくみんなが、私を必要としているような気がしたのよ。」

すげえ……。椎の直感大当たりじゃねーか。

あざみ「……で、なんか用が有るんじゃないの？」

鈴音「そうなんです。実は……」

委員長はあざみ先生にこれまでの経緯を説明した。

あざみ「ふうん。なら、私の権限でどうにかなるわ。ちょっと待っててね」

そう言って理事長は学校のパソコンを使い、飼育小屋に使われている南京錠の製造番号シリアルナンバーを教えてくれた。

あざみ「製造番号シリアルナンバー『1452』ね。これだけで良いかしら？」

鈴音「はい。ありがとうございます。」

あざみ「そう。じゃ、頑張ってね」

そう言ってオレ達は理事長室を出た。良かった…何事もなく良かった…。

梢「委員長、飼育小屋の南京錠の製造番号、わかりました。」

鈴音「うん。いくつ？」

梢「『3572』です。」

確定。飼育小屋の鍵は誰かがすり替えたんだ。

修「一体だれが…？」

椎「この状況やと三人しかおらんな。」

つまり小萌先生、有朋君、山下君の内の誰かだな。

梢「一体誰が…」

鈴音「それが分かればねえ…」

はあ…、とため息を付くオレ達。零牙がいればなんて言うんだろうな…。

鈴音「考えてもわかんないから行動しましょう。修君は小萌先生のところへ、椎ちゃんと梢ちゃんは山下君の家へ、私は有朋君の家へ行くわ。」

委員長が切り替えて割り振った。オレはあのミニ教師の所か。…誤



解されないといいなあ…。

- - - - -

まあそんな訳で再び小等部の職員室へ。オレ一人で大丈夫か？

修「失礼しまーす」

小萌「はいはい。あ、さっきの委員会の方ですね？」

小萌先生発見。探す手間が省けて良かった。

修「どうも。また聞きたいことがあって来ました。」

小萌「わかりました。それで、お聞きしたい事とは何でしょう？」

修「飼育小屋の鍵を借りにきた生徒は、本当にあの二人だけだったんですか？」

小萌「はい。先生はずっと職員室にいましたけど、山下君達以外だれも来ませんでしたよ？」

目を見る……。うーん。嘘はついてなさそうなんだよな……。

これ以上収穫は得られないと判断し、先生にお礼を言って職員室から出ていった。

……思い出す。職員室で何度先生に怒られたか……。

~~~~~

オレはあの時小六。いまのミアと同じ年だった。

ピンポンパンポン

……毎日のように鳴り響く校内放送（徴集命令）

『……城崎修君、城崎修君、至急、職員室まできなさい』

修『はあ……』

……そして毎日のようにため息を付く。クラスの友達からの痛い視線。

職員室での椎の引き取り。先生からの辛い視線。

『……修君。椎ちゃんのこと、よろしく頼むよ』

修『お世話になりました』

……そして……

椎『くかあ〜』

……腹立たしい椎、いや、バカの寝顔。

1日1回、ひどい時は3回くらいあった。
それを週5で10年以上。泣きたくなってきた。

~~~~~

修「……思い出したら腹立ってきた。」

妙にムカムカする。次に会ったら裏拳三発くわえておこつ。

ピリリリッ！

その時、不意に携帯がなった。とりあえず電話に出てみる。

鈴音『あ、修君。そっちはどう？』

修「委員長…。ダメです。収穫なし。」

鈴音『そう…。こっちも収穫なしよ。今日は帰りましょう。そろそろ夕方だから、忙しい時間帯でしょ？』

修「すみません委員長。助かります。」

鈴音「良いよ。それじゃ、また明日。」

ピッ

修「…ふう」

委員長の「ご好意で今日の捜査は終了。家に帰って夕飯作らないと…」

修「…夕飯、何にしよう？」

.....

修「ただいま」

見慣れたいつもの通学路を通って下校。ポストに手紙が入ってたからそれも持って帰宅だ。

修「おゝい。生きてるか」

そう言って母の部屋を開けてみる。どうやら執筆中のようで、イヤホンをつけてお気に入りの曲を爆音で聞いている。

直子「あ、修。お帰りなさい。」

オレの存在に気づいた母がイヤホンを取って話し掛けてきた。

修「ただいま。それより手紙来てんぞ。」

直子「ん。どれどれ…。あ！これパパからだ！」

オレの父、城崎岳きのさきがくは世界中を股に掛ける登山家だ。確か前回手紙を  
寄越した時はインドのモルディブにいたとかだったな。

その手紙を見て母がワナワナと震えている。ふむ。あの男、死んだ  
か？

直子「ど、どどどどどうしよう修ー！」

修「落ち着け。まずは手紙を見せる。」

そう言って母から手紙を受け取る。ふむふむ…

修「え…？マジで…？」

直子「どどどどどうしよう？」

親父からの手紙には、ある意味、親父の死の悲報よりも驚くことが  
書いてあった。

修「…まあ、まずはミアが帰ってからだな。それより母さん、夕飯  
は何か良い？」

直子「そうだね。まずはミアが帰ってからね。うーん。オムライス！」

修「オムライスね。分かったよ」

そう言ってオレは母の部屋を出ていった。しかし驚いたな…。

修「まさか…親父が帰ってくるとはなあ…」

一体、城崎家はどうなるんだろう？オレは微妙に不安だった。

修「まあ、どうにかなるだろ」

思考を切り替え、オムライスを作ることに。うん。きっとどうにかなるさ！

続く

スピンオフ！ え…？（後書き）

夢幻「毎度恒例、あとがきのコーナー！」

修「作者、次回で『スピンオフ！』終わりだな」

夢幻「にゃー。大変だったよ…」

修「次回も頑張れ！」

夢幻「おうっ。次回 本格推理委員会 『スピンオフ！』うさぎの  
行方』」

修「お楽しみにっ！」



スピノフ！ うさぎの行方（前書き）

『スピノフ！』最後です！

スピンオフ！ うさぎの行方

8月6日（晴）

毎朝のごとく朝食を作り、今日も昨日の事件を解決するために学校へ登校。

で…、数十分後。理事長室にて

修「失礼します」

鈴音「あ、おはよ修君」

梢「おはようございます城崎さん」

修「おはよう梢ちゃん。委員長」

予想通りバカはいない。きっと寝坊しているのだろう。

鈴音「えーっと、椎ちゃんがないけど進めちゃうね。昨日分かったんだけど、やっぱり有朋君達、嘘を付いてるみたい。だから、あの二人の口を割らなきゃなんだけど…」

修「嫌ですよ委員長」

鈴音「だから修君にあの二人の強迫を……って早いよ修君！私まだ何も言っていないよ！？」

いや、日々『殺人鬼の面』と呼ばれてるから大体予想着くんです。

梢「委員長。それは城崎さんが少年刑務所に送られます」

鈴音「うーん。だよねえ……」

そう言っただけで困り顔になる委員長。……しょうがない腹くるか……

修「……この顔が役立つというなら、協力しますよ……」

鈴音「え！？本当！！」

修「ただし！絶対オレを刑務所送りにしないでくださいね！」

オレは刑務所に行きたくないんだっ！まだミアの成長を見守っていたいんだっ！

梢「……事件の揉み消しの予感」

…でも、出来ればそうならないで欲しい。

- - - - -

そういう訳で今回は山下君の家へ。理由は単純。『落としやすそうだからだ。』

ピンポーン

オレは山下君の家のインターフォンを鳴らす。

……これからオレは強迫をする。そう思うと、どんどん緊張してきた。

山下「はい、どちら様ですか？」

修「や、やあ。お久しぶり」

山下君が出てきた。さて、どうやって落とすか…

修「あれから何か思い出せたかな？なんか、『掃除した後で誰か来

た』とか…」

頼む！これで落ちてくれつ。オレがそう念じていると、山下君がオスオズと声を出してくれた。

山下「あの…。その事で実は…」

修「…何かあるのか？」

山下「掃除した後、うちのクラスの女子が尋ねて来ましたね。『シロちゃんが心配だから鍵を開けてくれる？』って」

修「うんうんそれで？」

山下「南京錠の鍵を開けて、飼育小屋の中に入って行って、シロちゃんをじつ…とみた後、『ありがとう。鍵、私が掛けるよ』って言ったんです。

で、鍵を渡してその子が掛けて、またオレに渡した…それだけです」

なるほどその子が犯人か。しかし気になる。

修「あのさ、その話、なんで昨日委員長と話した時に話さなかったんだ？」

なんとなく理由はわかるが、聞いてみる。すると山下君はこう答えた。

山下「いやあ……。あの場で話たらオレが異端審問に掛けられちゃうから……」

……先生に頼んでミアのクラス変えてもらおうかな……？

.....

鈴音「はい……。はい。ありがとうございます」

ピッ

学校に戻ったオレは委員長に得た情報を話し、『昨日学校で、飼育小屋の近くにいる可能性の高い六組の生徒に電話している。2〜3人ぐらいに絞れると思ったが、10人以上いて、しかもオレが掛けた子全員が『ミアと零牙のラブラブトーク』をするものだから精神的に参ってしまった。

鈴音「やっとうさぎの行方が分かったわ。修君、梢ちゃん、ちよつと出かけるよ」

梢「わかりました」

修「ういっす」

零牙のヤロウ…、オレの見ていないところでイチャイチャしゃがって。帰ってきたら色々恨みを込めて葬ってやる…！

精神的に疲れながらも、零牙の抹殺計画だけは頭の中に出上がっていた。

.....

鈴音「着いたよ」

委員長がオレ達を案内した場所は…動物病院だった。

梢「委員長…。まさか…」

鈴音「まあ、中で容態を聞いてみましょう」

うさぎを攫った女の子が言うには、最近シロちゃんの様子がおかしかったらしい。

どうにかしてあげたい。そう思った彼女は、あのうさぎを動物病院に連れて行こうと決心して、飼育小屋の南京錠と物を買ひ、（近くのホームセンターで購入出来たらしい）

山下君から鍵を借りたあの時に、《自分で買ってきた南京錠》を飼育小屋に掛け、錠を閉めた。

そして山下君には『本来の飼育小屋の南京錠の鍵』を手渡した。

この時点で、《山下君が持っている鍵》では《飼育小屋に掛かっている南京錠》を開けられない。

《飼育小屋に掛かっている南京錠》の鍵はその時彼女が持っていたのだ。

後は、また飼育小屋に来て自分が持っている鍵で飼育小屋の南京錠を開け、シロちゃんを出した後で《本来の飼育小屋の南京錠》を閉めれば良い。南京錠の場合、閉めるだけなら鍵は必要ないからだ。

そうして彼女はシロちゃんをまんまと盗みだし、動物病院に駆け込んだのだ。

修「しかしまあ、今回の事件は学校の獣医師がいなかったから起こったんですよね」



鈴音「そうね。四年前に学校にいた獣医師が高齢でなくなった後、経費削減のために獣医師を雇わなかったのが原因ね」

梢「小学生が考えたとは思えない程よくできてた」

鈴音「ちなみに、このトリック考えたのミアちゃんよ。すごいわね。『これなら委員会の人にもわかんないよ』とか豪語してたらしいわ」

修「全く…。帰ってきたらお説教だな」

おじさん…。一度生き返ってミアにお説教してくれ…。まあ、そんなの不可能な事知ってるけどさ…。

梢「…で、シロちゃんの様子は？」

鈴音「それはお医者さんに聞かなきゃね…」

病院の受付を済ませ、待つ事十分。オレ達の名前が呼ばれた。

看護師に案内され、獣医師の人にシロちゃんの容態を伺った。すると

獣医師「じゃあ、見てみますか？」

と、言われたのでシロちゃんの状態を見ることに。シロちゃんはガラス張りのケースの中にいた。

鈴音「かわいい〜っ！」

梢「かわいい…」

五匹のかわいいうさぎの子供と一緒に。

獣医師「いやあ、最初来られた時は驚きましたよ」

獣医師は笑ってそう言った。ちなみに、病院に来た日の夜に出産したらしい。結構危ない状態だったそうだ。

修「これでうさぎが七匹か。やれやれ。世話すんのが大変だぞ？」

鈴音「名前もつけなくちゃね」

梢「小、中、高等部に募集かければたくさん来ると思います」

赤ん坊うさぎを見ながら言う。獣医師の言うことには、『ちゃんと歩くことが出来たら学校にお返しします。』との事だった。

修「…っていつかこの事件、学園中に防犯カメラつけられればすぐ解決出来たんじゃね？」

鈴音「うーん。それは色々とまずいんじゃない？PTAとか、教育委員会とか」

梢「流石の理事長も難しい」

学園への帰り道、『木ノ花学園監視カメラ計画』を立ててみたが…  
実現は無理そうだ。

以上が…速水零牙が学園都市に行っている間に起きた、事件のすべてである…。

『スピンオフ！ 三人目の名探偵、城崎修の事件』 完

スピンオフ！ うさぎの行方（後書き）

修「終わってしまった…。オレの栄光の一時が…」

夢幻「まあまあ、出番がなくなる訳じゃないんだからそんなに落ち込むなって」

零牙「この小説の主人公は、オレだぁーっ！」

夢幻「とりあえず今は黙っとけ零牙」

雅「こんな時、私はどうすれば良いんだろう…？」

夢幻「次回予告よろしく」

雅「う、うん。次回 本格推理委員会 『木ノ花学園 夏の大掃除』

夢幻「次回から本編ですよ。零牙が主人公ですからね」

木ノ花学園 夏の大掃除（前書き）

三学期始まったんで更新スピードが遅くなっちゃいます…。すみません！

## 木ノ花学園 夏の大掃除

木ノ花学園 - 木ノ花グループが経営している一貫校である。総生徒数七千二百人余り。関係者を含めると軽く一万人を超えるマンモス校だ。

まあ、常日頃から七千人越えの子供が通うので、学校の総面積も相当でかい。東京ドーム2、3個分はあるらしい。

もちろんそんな学校の全体を大掃除しようとするれば、全生徒数と教師を含めても相当な時間がかかる。とても12月にやるだけでは時間が足らなすぎる

と、いう訳で...

- - - - -

小等部、六年六組

リュウ「『第53回！木ノ花学園、夏の大掃除大会イイイイッ！』

」

『イエーイーイッ！』

木ノ花学園には『夏の大掃除』と『冬の大掃除』があるのだ。小中高等部全生徒を駆り出して行う本格的な大掃除なのだ。







オレ「須山…うん。どうでも良い。」

須山「チツ…これだから彼女持ちは…」

『チツ…』

クラスのみんなからくる妬みと嫉妬の目線。身体に穴が開きそうだ。

小萌「みんな〜お久しぶりなんですよ〜」

そこへ小萌先生登場。良かった。みんなの視線が先生の方へ向かった。

小萌「今日は夏の大掃除なんですよ〜。みんな頑張ってお掃除してくださいね〜」

『はい〜！』

小萌「それじゃあお掃除頑張ってくださいーい」

トテトテトテ〜！と先生は走って向こうに行った。うーん。先生

の身体で掃除なんて出来るのか？

須山「…ふう。じゃあ大掃除開始だな。まずは…」

オレ「須山、オレ達はどこを掃除するんだ？」

須山「お前とリュウの処刑からだ。」

ドスッ！

オレとリュウの鳩尾に拳が入り、気絶させられる。う…、意識が…

須山「裏に連れていけ。」

FFF団A「ハッ！すでに穴は掘ってあります。」

山下「即刻異端審問を開く。鎌とマシンガンの準備を忘れるな」

FFF団「ハッ！」

ミア「あっ…！レイ！」

杏子「はいはい。ミアちゃんはこっち。」

美咲「零牙くんとどんな事したか、たっぷり白状させてあ・げ・る  
」

ミア「た、助けてっ。レイーッ！」

すでに大掃除どころでない六組だった。

.....

その頃、高等部一年二組では…

虎「今年も来たよっ。『第53回！木ノ花学園、夏の大掃除大会イ  
イイイ！』」

『イエーイ！』

虎「さっさと終わらせてみんなでカラオケ行くぞおおっ！」

『イエーイ！！』

虎スケの呼び声で志気を高めていた。

修「…虎スケの呼びかけで女子が来るか？」

響「十中八九ないでしょうね」

虎スケの本質<sup>エロ</sup>をしるオレと響さんはすっかりスター気取りの虎スケを見つめる。虎スケ：世の中には無謀というものがあるんだぞ…？

修「とにかくこれも学校行事の一つです。真面目に取り組みましょう。」

修「そうだな。でも、その前に…」

響さんの言葉には大いに賛成だ。だがしかし…

椎「ふあああ…。ねむ…」

寝る気満々のアイツをどうやって掃除に参加させよう…。

.....

『諸君、ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『よろしい。これより・異端審問会を開催する！』

目を覚ますとオレ達は十字架に掛けられてた。

須山『判決、死刑』

オレ「待て須山！色々重要なところが抜けたぞ！」  
いきなり判決だけを言う裁判（審判）は世界中どこを探したってない。

須山『なんだ速水。何か言いたいことがあるのか？』

オレ「大有りだ！判決だけ言わずに罪状の読み上げからきちんとやれ！」

有朋『うるさいっ！つべこべ言わず火にあぶられるか、火にあぶられるか、火にあぶられるかしらっ！』

オレ「『火にあぶられる』しかねーよ！」

このまま殺されてたまるか！オレはミアとキスしたり、色々な事をしたいんだ！

そう思っていると、さっきまで気絶してたリュウが目覚めて急に語り出した。

リュウ「須山！せめてオレだけは見逃してくれ！この男は管原と一緒に観覧車に乗って熱いキスをしたんだ！」

オレ「待て！オレ達の思い出をねつ造するな！キスなんてしてねよ！」

リュウ「それから一晩同じベッドで寝たんだ！添い寝してもらおう形で！」

オレ「お前オレを殺す気か！？なんかみんなスーパー イヤ人みたいになつてんぞ!？」

リュウ「しかもクレープの食べ比べもしたぞ！」

管原に『あーん。おいしい？(ニコツ)』って言われながらな！」

オレ「ヤバいつ！みんなが殺気と嫉妬で未知の生物と化しているっ！」

みんなからフーザ様を瞬殺出来そうな気迫を感じる。オレ…諦めたほうが良いのかな？

オレ「待ってくれみんな！」

FFF団『『零牙死ねえええっ！』』

オレ「『墮天使メイド』の写真を見たくはなかいかつ！」

咄嗟の作戦を思いつき、みんなを引き止める。うんうん。みんな欲望に素直だね。

須山『異端者速水。話を続ける』

オレ「ああ。最近みんな、『堕天使メイド』っう衣装を知ってるか？」

FFF団『『当たり前だ！』』』

オレ「先日、その『堕天使メイド』の衣装を買ったんだが……」

リュウ「レイ、それは誰に着せるつもりだったんだ？」

オレ「……」

オレが説明を続けようとするリュウがイタい所をツッコんできた。そんなの、答えられる訳ないじゃないか……。

リュウ「……そうか、お前は、そういう趣味だったか……」



リュウが『しょうがないしょうがない。人の趣味嗜好はそれぞれだからさ』とでも言いたげな顔で言う。くううう…ム力つく…

有朋『…それで、その『墮天使メイド』がどうした？』

オレ「前にみんなに見せた、『クレープほおばっている女性』を覚えてるか？」

山下・須山『…！ま、まさか…っ！』

勘がいいな。須山、山下。そう、あれを見れば誰だって墮ちる。

…恐ろしい攻撃力だろう…

オレ「そいつが着た墮天使メイドの写真をくれてやる。アングルによつて種類は20種類。」

あと、ミアのメイド写真（学園都市で撮った）と菜摘先輩の体操服写真をセットでどうだ？」

FFF団全員『…』言い値で買おう！…！『…』

…よし。臨時収入ゲット。後もう一つ。

オレ「ただし条件としてオレとミアの交際を認める。言っておくがオレはミア以外に手を出す気は毛頭ない。」

須山『…本当か？』

オレ「ああ。嘘じゃない。オレからは手は出さないし、告白されても付き合わない。」

山下『ずいぶんと良い話だな…何かウラでもあるのか？』

山下が疑っている。…オレはミア以外に手は出さないって言うのは本当なんだかな。

オレ「ウラなんてない。ただ、ミアとの交際を邪魔させて欲しくないだけだ。」

FFF団『『『……『『『

吟味か…。オレの言葉を信じるか否かで迷ってんな？

そして話し合いが行われて数分後…

須山『よし。良いだろう。我々FFF団は管原雅と速水零牙の交際を認める…これに意義あるものは？』

FFF団『異論ありません！』

須山『では、速水を解放し、早川を処刑しろ』

FFF団『ハッ！』

リュウ『！！待てレイ！オレを見捨てる気か！？』

処刑されそうになったリュウが叫んできた。見捨てる気？そんなの

-  
-

オレ「当たり前だ。あの世でまた会おう、親友よ。」

リュウ「零牙くうううん！見捨てないでくれえええつ！」

親友を見捨てて、更にオレは強く成長したのだった…

.....

ミア「はううう……。や、やっと解放された……」

六組の女子全員からの尋問を逃げてきた私は、学園の裏の雑木林で立ち止まっていた。みんな恐ろしかったな……。

ミア「だけど良かった。レイの私服姿三枚で解放されて。」

オレ「良かった……。ミアのメイド服姿で解放された……」

私がホツと一息ついていると、近くからレイの声が。どつやらFFF団から逃げてきたらしい。

オレ「はあああ……。でもミアのメイド服、引き合いに出さなければ良かったな……。」

ミア「???メイド服？」

レイの大きめの独り言をばつちり聞いていた私は声をかける。レイは意表を突かれたようで、後ろに飛び退いていた。

オレ「ミアさん!?!いつの間に!?!?」

ミア「最初からだよ？」

キョトンとした顔で返す私。レイは冷や汗をダラダラ浮かべ弁明を始めた。

レイ「あ、あのですね、雅さん。私、速水零牙はあなた様のメイド服を盗撮していたんじゃないですよ？決して『鼻血が出そうなくらい可愛くて、思わず撮ったんではありませんよ！』」

もはや弁明ではなく盗撮している事をバラしているような気がする。そうか：かわいいかったんだ。ちよつと嬉しい。

ミア「そういえばリュウくんは？一緒に逃げ出したんじゃないの？」

レイ「いや。あいつは『オレを見捨ててお前だけ生きろっ。』って言うって死んでった」

ミア「レイ、嘘はいけないよ」

少なくとも私は、レイとリュウくんの関係は『オレを見捨ててお前が囷になれっ。』って言うような関係だと思っているから。

オレ「まー。そんなことはどうでも良い。六組（オレ達）の担当区

域ってどこだ？」

ミア「雑木林で良いんだよ」

そう言っつて私達は雑木林をみる。思えば、ここは私達の思い出の場所だ。

レイ「あの日、この森で、オレははじめて本格推理委員会として事件を解決したんだよな」

ミア「うん」

レイ「んでもって、オレがミアの事を『ミア』って言っつようになつたのも、あの事件の後だった」

ミア「うん」

思い出す。たった2、3ヶ月前なのに、10年も昔のことのようだ。

レイ「そういえばさ……。ちょっとミア聞いてみて良いか？」

ミア「なに？」

レイが頬を赤らめて目を逸らしている。よほど恥ずかしいことを思っているようにだけど…

レイ「あの日の…、あの帰り道でさ、オレとお前ん家の前で別れる時にその、あの…、」

ミア「????？」

レイ「ミアは…オレにキスしたか？」

ほんのわずかな空白の後、ぶあつ！と汗が噴き出す。そういえばそんな事もしたっけ…。

ミア「あ、あれはノーカン！ね？ノーカンだから！」

今思えば大胆な事をしたなあ。って思える。

それを聞いたレイは一回深呼吸をしてから

レイ「まあ、前座はさておき」

私とのキスが前座なの!?

レイ「ミアに…冗談抜き一つ聞きたいことがある」

なにやら真剣な面持ちになり、気が引き締められる。たっぷりと余白を取った後、レイが口を開く

レイ「ミアは…」

ピリリリッ!

しかしタイミングよく(本当、憎たらしいほど)携帯がなる。一体誰よ!

レイ「もしもし。なんでしょうか委員長。」

電話の相手は委員長ね…全く、もう少し遅く電話してほしかったよ。

レイ「はい。…はい。はい。わかりました、すぐ向かいます。」



ピッ

ミア「委員長からどんな用？」

レイ「さあ……。何でも良いから早く理事長室に来てね」

ミア「ふーん……。ところでレイ」

レイ「なんだ？」

ミア「さっき、なんて言おうとしたの？」

気になる。レイは私に何を聞きたいんだろう。

レイ「…それはまた今度な。それより理事長室に急ごうぜ？あざみ先生に何されるかわかったもんじゃない」

ミア「……わかった」

気になったけど、あざみ先生のこともあったし、その時は心の片隅に置いてしまった。

……本当に、一体なんだったんだろ？

続く

木ノ花学園 夏の大掃除（後書き）

零牙「久しぶりの出番だああ！」

雅「良かったね。ところでレイ」

零牙「なんだい？」

雅「いつの間に撮ったの？私の…」

零牙「メイド服か、それはあれだ。こっ…パシャリと」

リュウ「アバウトだなあ…」

零牙「うっせー」

ミュ「…リュウ、私のは？」

リュウ「はっ！誰もお前のメイド服なんかに興味なんかねーよ！」

零牙「えーっと、確かここに…あったあった。ミュちゃんのメイド服」

雅「ばつちり撮ってんじゃんリュウ君」

リュウ「人の携帯勝手に使うなっ！」

ミュ「リュウ…うれしい／＼／」

リュウ「お前は頬を赤らめるなあああ！／＼／」

夢幻「…えーっと、とりあえずまだ『夏の大掃除』は終わってないので、読者の皆さんそのつもりで…」

三学期始まって更新スピードが大幅に遅れますが、わかっていただけるとありがたいです！

それではまた次回、『木ノ花学園 夏の大掃除？』のあとがきでまた会いましょう！」

木ノ花学園 夏の大掃除？（前書き）

皆さんごめんなさいっ！

『楠木菜摘』の名前ですが、僕は「なてき」とルビを振ってしまいました。正確には「なつみ」でした！ごめんなさいっ！

そして指摘してくれた朧月さん、ありがとうございます！それでは本編をお楽しみください！！

木ノ花学園 夏の大掃除？

そして理事長室にて…

オレ「失礼します」

鈴音「あ、来たね〜ラブラブカップルさん？」

久々に会う委員長にいきなり茶化される。結構恥ずかしい…。

ミア「……（ノノノ）」

ミアがマジ反応。うれしいけどあんまり照れんな。

修「おつ。来たな零牙。怪我大丈夫か？」

梢「ミアちゃんに聞いて心配した」

オレ「お久しぶりです。城崎先輩、梢先輩。怪我の方は大丈夫ですよ」

そう言つて笑顔で返す。怪我の心配してくれるなんてうれしいな。

オレ「あれ？椎先輩と菜摘先輩は？」

先輩達が揃えば、久々に委員会が全員集合するんだけどなあ…

修「あーあの二人はここだ」

そう言つて城崎先輩が見せてくれたのは…縄で体を縛られ、布で口と目を封じられた先輩方だった。

修「こうしないと獣になつちまうんだ…。ミアに会えなかったから欲求が溜まつてんだな」

零牙「なんかオレの周りつて欲望が歪んでいる奴とか多いなあ…」

神は一体なにを考えているんだろう？そんなに混沌に歪んだ世界が好きなのだろうか…？

オレ「ま、まあこれで一応全員揃いましたね」

鈴音「このメンバーが揃うのって、なんだか久しぶりだね」

なんて言っていると理事長室のドアがボタン！と勢い良く開けられた。もちろん開けた人物は - -

あざみ「みんな揃ったわね？」

大魔王、あざみ先生だ。ここで先生を大魔王だなんて言おうものなら、それこそ酷い死を実現させられる。(断言)

あざみ「しっかし、このメンバーで集まるの久しぶりね。あ、そうだ」

なんだ！？何を言い出すんだ！？

あざみ「零牙君は何の担当にしよう」

ミア「担当？」

修「まさか先生…オレが最初ここに来た時に言ったアレっすか？」



あざみ「ええそうよ。だって、役割分担出来てた方が分かりやすいでしょ？」

アレってなんだ？

梢「城崎さん、担当って？」

あざみ「誰か何を担当するかに決まってるじゃない。今んとこ……」

そう言ってあざみ先生は近くに落ちてた紙に何かを書いた。どれどれ？

知識担当 『桜森鈴音』

国家権力を盾にした暴力担当 『楠木菜摘』

超推理担当 『木下椎』

最強の使いっ走り担当  
『城崎修』

トリック担当 『菅原雅』

嘘を見破る千里眼担当 『木下梢』

あざみ「って今んとこみんなの担当が決まってるのよ。わかったかしら？」

『とりあえずツッコませてください！』

ふふん。と胸をはるあざみ先生に委員会メンバー（獣も含め）全員でツッコむ。  
なんだこれ？

菜摘「私そんな事しないわよあざみちゃん。ってか鈴ちゃん以外の担当おかしくない？」

椎「ワイのは勘とちゃうで！ちゃんと考えてる時もあるんや！」

オレ「先輩、それは『大抵は勘です。』と明言しているようなものです」

椎「あんたは黙るとき！」

修「オレの担当は特におかしいだろっ！なんだよ『使いつ走り担当』って！」

「「そこは正しい！」」

オレ「高校の先輩方、おかしいと認識してください」

ミア「私の『トリック担当』って一体…？」

あざみ「ミアちゃんは『犯人がどんなトリックを使ったか』を考えるのを担当よ」

ミア「あ、なるほど…」

梢「私の担当そのまま…」

あざみ「上手く思い付かなかったのよ」

修「先生、せめてオレの担当を変えてください。『使いつ走り』から『情報集め担当』とか」

あざみ「それは不可能よ」

先輩…あざみ先生に対しては諦めが肝心ですよ？

あざみ「それで零牙はどうしようかな。ん〜。」

深き地に眠りし魔王サタン様、お願いしますからオレの担当をまともなものにしてください。お願いしますっ…！

あざみ「これで良いかな？」

『対テロ組織担当 速水零牙』  
はやみれいが

オレ「テロ組織って…」

あざみ「零牙君、常人以上の強さを持っているから妥当だと思うわ」

確かに飛天御剣流は常人以上の剣術だけど…だからってそう言われるのはなんかむかつくな…。

あざみ「さて、みんなで理事長室の大掃除よ！」

……とりあえず、先生に（割と本気の）一撃叩き込むことにした。

-----

修「…大丈夫か？零牙」

オレ「良かった…もう少しで冥界の門をくぐるところだった…」

梢「臨死体験」

椎「先生に一撃叩き込もうとしたのはスゴいけどな」

菜摘「はつきり言ってバカよね」

膨大な量の書類を整理しながら先輩達と話す。あれ？ドミニオンと戦った時以上の包帯をしているぞ？

ミア「レイ、大丈夫？」

オレ「なんとか…な！うわっ！」

ファイルをちよつと高い所に無理やり押し込んだら別のファイルが出てきた。これは…

鈴音「アルバムみたいだね」

古めかしいアルバムだった。もしかしたら先生のか？

あざみ「へえ、懐かしいものを見つけたわね」

先生が現れてアルバムをパラパラと捲る。もちろん、気になった委員会メンバーがどれどれ？と脇から見ている。

鈴音「この人のは？」

あざみ「崎守結菜。私と同じ保険医の仕事をしてて、よく情報交換してるわ」

菜摘「この顔が可愛い人は？」

あざみ「早崎麻里。子供が大好きで、そういう方向に関しては私も認める天才なのよ」

あざみ先生の大学時代の友人はスゴい人だらけなんだなあ…

あざみ「そして、これが大学時代の私よ」

ミア「おおっ」

鈴音「綺麗…」

大学時代のあざみ先生は確かに綺麗だった。ここで先生が過去を懐かしむように言った。

あざみ「あの頃も良くモテたわ」

オレ「やだなあ。そこは『あの頃も』じゃなくて『あの頃は』でしょ？」

なんて冗談を言うと、先生はニコツと笑ってオレを見る。なぜだろう。臨死体験の予感。

~~~~しばらくお待ちください~~~~

あざみ「全く、もう一度言ったら殺しちゃうぞっ」

修「だ、大丈夫か零牙！」

オレ「……………」

梢「返事がない。ただの屍のようだ」

鈴音「それはツツコミ待ちと捉えて良いの梢ちゃん!？」

ミア「こ、呼吸してない!じ、人口呼吸しなきゃ…/ / /」

菜摘「ミアちゃん、なんか嬉しそうな顔してない？」

オレ「死んでたまるかーっ!！」

あぶない…!ギリギリで死地から復活。

ミア「あ、レイ…!」

オレ「まだ死ねるか…オレはまだやり残してることが沢山あるんだ!」

ミアがとても残念そうな顔しているのが気になったけど…今は言わずにおこう。

あざみ「よし!零牙君が生き返ったところで掃除を続けるわよ!」

椎「終わったで!」

あざみ先生が出端を挫かれる形のナイスタイミングで椎先輩が登場。
…あれ？FFF団から感じられる黒いオーラをあざみ先生から感じられるぞ？

修「先生ストップ！零牙は自業自得だが椎は悪くない！」

梢「お姉ちゃん逃げといて…」

城崎先輩と梢先輩が全力で止めている。…対テロ用担当、なんだよな。オレって…。

あざみ「ま、良いわ。それじゃあ今日は解散！また次回ね」

そう告げられ、オレ達は元の掃除場所に戻った。

.....

オレ達が雑木林に戻ってきた時にはクラス全員が真面目に掃除していた。

オレ「やばっ。手伝わないと…」

ミア「うん」

急いで箒を受け取り、落ちているゴミを掃除し始める。この雑木林の一部は普通に遊歩道として使えるため、学校側としては『クリー
ンな学校』というイメージを出しているのだろう。

オレ（こうしてると思い出すなあ…イギリスでの大掃除）

~~~~~

一年前、真冬のロンドンのとある公園にて

オレ「だーっ！落ち葉集めんの面倒じゃーっ！」

インデックス

「お腹減ったんじゃー！」

ステイル「同感だね。全く、こんな落ち葉くらい僕の炎で燃やせる  
のに」

落ち葉の掃除をオレ、ステイル、インデックス、神裂でやっていて  
もう三時間。馬鹿でかい公園の落ち葉掃除は全く終わらなかった。

オレ「よしステイル。全部燃やしちまおう。インデックスの知識を  
使って、オレと神裂で延焼を防ぐ」

インデックス

「了解したんだよ！」

グツと親指を立てる魔導書図書館、インデックス。食欲が限界にまで達しているんだろう。

ステイル「そういえば神裂はどこへ行ったんだ？」

神裂「???私はこちらですか？」

近くの落ち葉を真面目に掃除していた神裂を説得して、歴史上最も無駄な方法で魔術を使うことに。

数分後、ステイルの炎で落ち葉に発火し、インデックスに教わった術式でステイルの炎を上手く操り、ものの数十分で掃除完了。いやー、疲れた。

オレ「よし帰ろう。言っとくが今の事は」

ステイル・インデックス「内密に、だろ?（でしょ?）」

オレ「その通り。神裂もバラすなよ」

神裂「……はあ……」

真面目人間である神裂は胸がモヤモヤするんだろうが…終わったことは仕方がない！ふはははーっ！

~~~~~

オレ「楽しかったなあ。あの時は…」

昔の思い出を思い出していると周りにみんながいない。よくよく捜してみると、一点に集まっていた。

ミア「か、かわいい！」

杏子「だね」

リュウ「なんか強そうだなコイツ」

山下「そうだな」

「うふふ。そうかしら?」

どうやら散歩中の子犬と親だろうか、大型犬に触っている。なるほどなるほど。

ミア「あーレイ!こっちおいでよ。かわいいよ」

オレ「え、遠慮しとく」

リュウ「んだよ遠慮なんかしないでこっち来いよ。コイツ結構かわいいぜ?」

オレ「いや、いいから」

オレとみんなの距離は5メートル程。しかし近づきたくない。なぜなら――

ミア「もしかしてレイ、動物だめなの?」

そう、オレは動物が嫌いなのだ。

リュウ「神様は完璧な人間を作らねえって言うが…本当だったんだな」

ミア「ゆ、勇気をだして！ほらっ！」

オレ「げっ！こっち来るなっ！」

ミア「あ！待てえ！」

オレ「来るなあああ！」

動物なんかに触ってたまるかーっ！

.....

オレ「ぜえ、ぜえ。そ、掃除するぞミア」

ミア「レイ、今度は動物園か水族館にデートしよ？」

オレ「絶っつっつ対嫌だ！」

あれから逃げる事30分。気を取り直して雑木林の掃除を再開。
次のデートは映画にしよう。

リュウ「しっかしまあ…殆ど終わってんだよなあ。やることもう

ない」

オレ「え？マジ？」

リュウ「ああ。今やっている所は別のクラスの担当だ。早く終わら
したいからな」

平然とそう告げるリュウ。なるほど、確かにそうすれば早く終わる
な。

その時

「「「きゃあーっ！」「」「」

どこからか、女の子の悲鳴が聞こえてきた。

続く

木ノ花学園 夏の大掃除？（後書き）

夢幻「はい！毎度恒例のあとがきのコーナーです！」

修「作者アアア！」

夢幻「どうしたんだよ修、そんな血走った目をして」

修「オレの担当名変える！二次創作なんだからそれぐらいできるだろ！？」

夢幻「いやあ。やっぱり原作設定は大事にしないとでしょ？」

修「い・い・か・ら・変・え・ろ・っ！！！！」

夢幻「おほん。修？人生、何事も諦めが肝心だよ」

修「諦められるかポケエツ！！早く変えやがれ！」

夢幻「雅〜次回予告して〜」

雅「はいはい。次回も夏の大掃除編です！」

夢幻「また次回のあとがきで会いましょう〜」

修「作者アア！勝手に終わらせんなアアアア！」

木ノ花学園 夏の大掃除？（前書き）

夏の大掃除編、ラストです！

木ノ花学園 夏の大掃除？

「「「きゃあーっ！」「」」

突然聞こえた女子の悲鳴。それを聞いてオレとリュウは声のした方向へ駆けだしていた。

全力疾走約3分。声のした場所には、顔を赤くしている複数の女子と虎先輩がいた。

…ん？虎先輩がいる？

リュウ「あの野郎、白昼堂々小さい女の子を襲ってやがる…！」

リュウが義憤に駆られ、虎先輩に特攻をしかける。…くそっ！でもまあ、悲鳴の理由は大方察しは付くからいいか。

虎「で、君たちと《ピー》とか《ズキーン！》みたいな《バキーン！》を…」

「「「も、もう止めて!」「」」

虎「で、《ピー!》で《バキューン!》な《ズキューン!》をしながら《ドカーン!》をしようよ!」

「「「も、もう止めて…(フルフル)」「」」

放送禁止用語をエロ顔で下級生に話し、涙目にさせる虎先輩を見て、オレ達の思ったことは一つ。

『再起不能にしてやる』

リュウ・オレ「くたばれえーっ!」

まずは顔を真っ赤にしながら耳を塞ぐ下級生に、放送禁止用語満載の話をするために屈んでいた虎先輩の顔面を上を殴り上げる。

虎「げふっ!?!」

さらにリュウはのけぞった先輩の腹にに渾身のストレートをかます。そしてオレは虎先輩の後ろに周りこみ、本気で後頭部に『龍翔閃』を打ち込む。後ろに倒れ込んできた虎先輩の後頭部は狙いやすかった。

……この間わずか30秒。手際良く虎先輩を殺ったオレ達は……

オレ「ふう。もう大丈夫だよ。だから向こう行ってて」

リュウ「オレ達二人で高等部の所に運んで行くからよ」

そう告げて下級生をその場から離れさせる。姿が見えなくなったその後でオレとリュウはさらに先輩をボコボコにしといた。

~~~~~数分後~~~~~

修「まったく虎スケの奴、どこに行ったんだか……」

オレ・リュウ「すみませ〜ん」

修「ん？この声…零牙達か？」

そう言ってグラウンドの草取りを中断して声の聞こえた方に行つて見ると、顔面が元の二倍に膨れ上がった虎スケとそれを担いでいる零牙とリュウ君の姿があった。オレは慌てて虎スケの所に駆け寄る。顔面が二倍に膨れ上がるなんて、どれだけ殴られたのだろう。

修「どうしたんだ虎スケ！誰にやられた！」

虎「……」

修「気絶してやがるな」

零牙「修先輩、虎先輩がこうなったのは理由がありまして……」

修「零牙話してくれ。この虎スケもどきは今の今までなにをしてたんだ！」

零牙「はい。実は……」

零牙は今までの経緯を全て話してくれた。うん。つまり総合すると

……

修「虎スケが下級生をナンパ（？）しているのを見たお前らは、虎スケを止めるために全力で殴りかかった。って訳だな？」

零牙・リュウ

「「はいそうです」」

修「お前ら……手加減しろよ。虎スケの顔が無惨じゃねーか」

聞いてて呆れる。確かに虎スケのバカ行動は目に余るが、それでも零牙達のやったことは完全な暴力だ。

リュウ「すみません…途中からなんか日頃の鬱憤とか、不満を解消するために殴ってました」

零牙「許してね」

修「とりあえず零牙、ミアに後で折檻受けてもらうからな。んでもってリュウ君、鬱憤が溜まってるからって人殴っちゃダメだからな？」

ミアに関節技のフルコースをやってもらおう。零牙が絶望的な顔をしているが気にしない。

リュウ「すみません…まだ殴り足りないので虎先輩殴って良いですか？」

修「さっきのオレの説教聞いてたか!？」

見事なまでのスルーだ！聞いてたのだとしたらより性質タチが悪い！

修「…まあ良いや。今回は見逃してやる。虎スケにも責任あるしな。

こんなこと、もうやるなよ?」

零牙・リュウ「はい」

オレが忠告すると二人は虎スケもどきをオレに預けて、小等部の方  
向へと去っていった。

修「…さて、虎スケ（コイツ）どうするかなあ…」

とりあえず放置しておけばいつかは目覚めるだろ。…多分。

.....

戻って小等部にて

オレ「さてと、みんなは一体何をしているのかな?」

リュウ「ん〜。みんなならアソコでエロ本漁ってる」

そう言っってリュウは学校のゴミ集積場を指差す。みんな目が本気だ  
…。

オレ「まったく、女子が見てる前でよくやるぜ」



リュウ「そう言う女子は向こうで男子の写真をオークションしてんぞ。今はお前の写真だな」

そう言うてリュウは女子が大勢集まつてる場所を指差した。…オレの写真って高く売買されてんだな。

オレ「…たびたび思うけど、このクラスのみんなって欲望に忠実すぎる奴多くないか？」

リュウ「そこはもう諦める。それより男子が女子のレア写真の売買をやり始めたぜ、いこう」

オレ「遠慮しとく。もう少しマトモな人間になりたいからな」

リュウ「そうか、後で後悔してもしら『管原の体操着姿、一枚200円だ！買っ奴いるかー！？』」

オレ「ネガごとよこせ！」

前言撤回。やっぱり欲望には素直にならないと！我慢はいけないよねっ。

リュウ「……はあ」

この時、『せめて自分だけは比較的マトモになるっ』と想ったりユウだった……。

-----

さらに戻って高等部のグラウンドにて

虎「う……うっ……はっ！」

修「虎スケ！起きたかつ」

虎「あれ？今までオレ、何してたんだっけ……？」

顔を腫らしながらも、起き上がった虎スケはホッと一安心するオレ。良かった良かった。

虎スケ「たしか、小等部の子に話しかけていて……ダメだ思い出せない」

修「思い出せないなら仕方ない。さっさと掃除終わらせるぞ」

虎スケ「あ、ああ……」

響「こんな所にいましたか虎」

虎スケの姿を見て響さんが竹箒片手にコツチに向かってきた。……  
響さんなら誤解される心配はないだろう。

響「今の今まで何してたんですか。それよりもその顔はどうしたんですか？正直、笑えない状態になっていますよ」

虎「え？ちよ、修鏡貸して！」

修「持ってねえよ」

虎「じゃあ響さん！」

響「生憎私も」

虎「くそ……一体どうなってんだ……？」

椎「ん？そんなところに集まってどないしたん？」

虎スケが苦悩し始めた所へちりと片手に椎<sup>バカ</sup>が登場。間抜け面は相変わらずである。

虎「丁度いいところに！椎ちゃん鏡持っていない？持ってたら貸して！」

椎「別にええけど…ショック受けると思うので」

一応女子高校生だから、手鏡を持ってた椎。うーん。てつきり持っていないかと思ってた。

虎「どれどれオレの顔面は…って誰!？」

お前だ。

虎「一体だれだ！オレの美貌にこんなことした奴は!?!?……っ！ま、まさか……」

どう思ったか虎スケは、おそろおそろオレを見てきた。釣られて響さんとバカもオレを見る。

虎「まさか…おま「違えよ」「ですよね」

あらぬ疑いをかけられる前に否定しておく。しかし椎が余計なことに

椎「アンタやなかったら誰が犯人なん？」

修「零牙とリュウ君だ。本人からそう聞いている」

響「なるほど。あの二人は武術を修めているようですから、虎を気絶させるのも容易いでしょう」

虎「なるほど。…先輩に手をあげるとは…、これは一度先輩の恐ろしさをその身をもって体感させる必要がありそうだな…。」

修・椎「「やめとけ、返り討ちにあうぞ？」（やめとき、返り討ちにあうぞ？）」「」

リュウ君は知らないが、零牙は無理だな。うん。ボコボコにされるのが目に見えている。

虎「そうだよなあ…無理だよなあ…」

響「諦めなさい。時には諦めも肝心ですよ？」

虎「うん。そうするよ」

虎が復讐を諦めた所で一緒に話しながら掃除を再開。大丈夫だ虎。零牙にはキツイお仕置きが待ってるから。

- - - - -

ピンポンパンポーン

現在午後二時。大掃除が始まってから六時間経過した頃、グラウン  
ドに『大掃除終了』との放送が入った。ふいふやっとか…

オレ「やっとな終わった〜」

リュウ「だな。これでやっとな…」

オレ「掃除から解放されるな」

リュウ「小萌先生に『良い子良い子』されるな」

真顔でそう言う我が悪友。そういえば今朝そんな事言ってたな…

他の男子の口々から『やっと、至福の時間が…』『ああ。よく頑張ったな、オレ達』という声が聞こえてくる。うーん。そんな事言ってるからお前らモテないんじゃないか？

と、思っていたらそこへ小萌先生がやってきた。

小萌「皆さんお疲れ様なのですよ〜」

『お疲れ様です！』

小萌「そんなみんなに先生、ジュースをプレゼントしたいんですけど…」

『おおおっ！ジュース！』

小萌「先生、前日にお金使っちゃって20人分しか買えなかったのです」

オレ達六年六組は総勢41人。つまり半分しかジュースがない。

小萌「誰が飲むのか、皆さんで決めて欲しいんですけど…」

そう言つて顔を見合わせる六組（オレ達）。厳肅なる審議の結果 -

- - - - -

（小等部グラウンド）

オレ「第一回！」

リュウ「最強王者決定戦！」

オレ・リュウ「ガチンコ、ドッチボール対決 - つつ!!」

みんな「イエーツ！」

厳肅なる審議の結果、ドッチボールで勝つた方がジューズを獲得することに。みんな喉が乾いて（お金がないので）目に炎が灯っている。

オレ「ルールは簡単！このコート内にいる相手チーム全員に当てれば勝ち。外野選手が相手チームを当てた場合は当てた人はコート内に戻ることができません。なお、首より上にボールが当たった場合は



セーフとします！」

リュウ「男女混合の出席番号順で20番より前の奴らがAチームとする！以上、説明終わりっ」

『おっっ！』

ちなみに、Aチームにはミア、有朋、須山が。Bチームにはオレ、リュウ、山下がいる。うっん…ミアとは敵対したくないんだけどなあ…

小萌「それでは始めますよ？それっ！」

小萌先生のかげ声と同時にボールが上空に投げ出される。さて、ボールはどっちの手に

Aチーム『よっしやああ！ボールゲットオオツ！』

Aチームに渡り、すぐさま臨戦態勢に。ボールに当たってたまるかああ！

………数分後………

現在、Aチームにはミア、有朋、須山の三人。Bチームにはオレ一人。大ピンチです。

Aチーム『よっしゃあ！そのまま零牙をアウトにしろおお！』

Bチーム『零牙ああ！何が何でもボール捕りやがれええっ！』

外野の声援（？）を聞きながらAチームのボール投手を見る。相手は…

ミア「まさかこんな所で出るなんてね…」

Aチーム『行け行けミアちゃん！零牙の首をとれー！』

オレ「ミアか…勝負だな」

オレはキャッチの態勢になり構える。さあ、どこからでも来いつ！

ミア「うーん…エイッ！」

可愛らしく考えてからボールを外野に投げ渡す。……それを待っていた！

フツ…バシッ！

オレ「サンキューミア。助かった」

<sup>ッ</sup>神速 で高速移動してボールをキャッチ。フッフッフツ…余り『  
飛<sup>オレ</sup>天御剣流継承者』を見くびるなよ！

オレ「リュウ！と見せかけて山下！」

山下「うっし！おりゃあああ！」

バスッ

有朋「くそっ！」

有朋アウト。Aチーム残り二人。

須山「よくも有朋を…死にクサれええっ！」

零牙「よっと…お返しじゃああああ…」

ドゴッ

須山アウト。Aチーム残り一人。

ミア「むうっつー！よくもみんなをつー！」

オレ「後はミアだけだな…」

神のいたずらかオレVSミアの構図に。ちなみに、ボールはミアの手だ。

ミア「うーん…ここは勝負かな？」

そう言つと、ミアは全力でボールを投げてきた。なるほど、さっきより若干はやい。だが…

オレ「悪いが…これで終わりだっ！」

ボールを受け止め、間髪入れずに投げる。

ミア「きゃっ！」

すると余りの豪速球だからか、ミアが頭を守るように背中を向け、ボールが当たる。…手加減したから痛くはないはず。

小萌「ピピーツ！勝者、Bチーム！」

『よっしやあぁー！』

小萌先生のホイッスルの音で、ドッチボール対決は幕を閉じた。

-----

小萌「みんなお待ちかねのジュースですよ。勝ったBチームのみんなは自由に選んでくださいね。」

『はいー！』

ドッチボール対決で勝ったBチームのオレ達はジュースを一本ずつ選んでいく。一方、負けたAチームはそれを羨ましそうに見ている…

オレ「いやあく疲れた〜」

ミア「……………（ムスツ）」

オレがミアの隣に座るとミアはムクレて黙ってしまった。

プシュ！とプルトップのフタを開け、サイダーを飲む。うん！うま  
いっ！

ミア「……………（ムツス〜）」

その様子を見て、ミアはさらにムクレてしまう。…このままだとさ  
すがに可哀想なので…

オレ「…飲むか？」

オレは飲みかけのサイダーを手渡した。ミアはサイダーを受け取ると

ミア「……………」

ちょっと黙っていたかと思っていたら、グビグビーツ！と残っていた  
サイダーを全部飲み干した。ってちょっとーっ！？

ミア「……ごちそうさまでした」

オレ「ミア……普通全部飲むか？」

ミア「いいの！全く……気づいてないの？／＼／」

ミアは顔をそらして頬を赤らめる。その瞬間

須山『……これより、異端審問会を開催する』

十字架に張り付けにされ、異端審問会にかけられる。……相変わらず目にも映らない速さだな。

有朋『被告人、速水零牙は我が六組生徒、管原雅と間接キスしたため拷問して死刑！』

FFF団『死ねええつ零牙ああ！』

オレ「待て待て待て待てええいいい！」

理不尽すぎる！いや、コイツら理不尽なのは分かってるけども！弁明しなければ明日がない！

須山『なんだ速水、この期に及んでまだ悪あがきをしようのか』

オレ「当たり前だ！っかお前ら、オレとミアの交際は認めるんじゃないのか！？」

今朝の契約の事を言うと、FFF団は声を揃えてこう言った。

『『『それでもムカつくんだよこの野郎！！！！』』』

オレ「くそっ…！こうなったら逃げるしかないっ」

須山『待て速水、！大人しく処刑される！』

FFF団『『『サーチアンドデース！！！！』』』

オレ「死んでたまるかあああああ！」

命を懸けた鬼ごっこは、オレが全員気絶させるまで続いた…。

- - - - -



そして帰り道にて…

オレ「つ、疲れた…」

ミア「お疲れ様」

オレ「つたくあいつら…本気でオレを殺す気かよ」

ミア「でもみんなが羨むのは仕方がないのかも…。私もコツテリ絞られたし…」

そういえば途中、女子がミアに近づいていったなあ。何が起こつてたんだろ…？

オレ（しかしまあ…平和だなあ）

今ミアと話していると心底そう思う。こんな何気ない平和を感じる日があるなんて、《あの頃》は想像もつかなかった。

それに…ミアは姉さんに似てるからか一緒にいると、とても落ち着く。

……やっぱりミアにはあの事を話すべきだろうか？

オレ（でも、拒絶されたらどうしよう）

あの冬の日のことを話したら、ミアはオレを拒絶してしまうだろうか？

それが不安で、結局話せずじまいでいる。

オレが・・・姉さんと親父を殺したあの日の事を。

オレ（もし、あの事を話して、ミアに拒絶されたらオレは・・・どうなるんだろっな・・・？）

少年の「闇」に触れたとき、少女はどう答えを返すのだろうか。少年はただその答えを模索し、苦悩していく。

その時、

少年と少女に向かって、一人の少女が現れた。

彼女は一体誰なのか・・・？

続く

木ノ花学園 夏の大掃除？（後書き）

夢幻「夏の大掃除編終了」

零牙「…オイ夢幻」

夢幻「なんだい零牙」

零牙「なんでアイツが来てんだよ！」

夢幻「良いだろ？お前の本質が出るんだから」

零牙「テメエ…」

夢幻「次回は割とシリアスで行きます。お楽しみに」

## 突然の来訪者（前書き）

作中の英文はパソコンで翻訳したので、文法的に間違っていると  
思います…

## 突然の来訪者

オレ「お前は…！」

学校の帰り道、ミアと話しながら帰っていたらとある少女にあった。少女は顔を俯けたままじっとしている。

ミア「レイ、知り合い？」

ミアが聞いてきたが返事が出来なかった。ただ、目の前の現実が受け入れなかったからだ。

なぜなら…

「お、」

顔を俯けたまま少女が言葉を発した。しかし言葉は返さない。

そして…

「お兄ちゃああん！」

黒の修道服を着た、歳が一年違いの少女は、オレに飛びついてきた。かわいらしい顔付きで短い茶髪をしたこの修道女はオレの、自称妹、『姫野真優』だ。

マユ「会いたかったよおおおっ！」

ガシッ

とりあえず飛びついてきた。自称 妹の頭を片手で抑える。ジタバタと抵抗するが虚しさだけが生まれる。

マユ「お兄ちゃん…久々に再会したのにその態度はひどくない？」

オレ「まずはその『お兄ちゃん』という呼び方を止める。そしてなぜお前がオレの前にいるのか30字以内で完結に述べる」

おかしい。こいつはイギリスで魔術の勉強をしていたはず。

マユ「お兄ちゃんをお兄ちゃんと呼ばないのは無理だよ。だってお兄ちゃんはお兄ちゃんである以上、妹が『お兄ちゃん』と呼ぶのは至極当然なんだよ！そしてお兄ちゃんの前には現れた理由は『お兄ちゃんに会いたかったから』なんだよお兄ちゃん！」

オレ「お兄ちゃんお兄ちゃん」うるせーよ、このミルクボーイス  
！つか、そんな理由のためにイギリスからはるばる来たのかお前！」

もしそうだとしたら宅急便でイギリスに送り返してやる。

マユ「そっだよお兄ちゃん！お姉ちゃんに言ったら連れてきてくれ  
たんだよっ」「」

オレ「は？お姉ちゃん？？」

神裂「私ですよ。彼女をここに連れてきたのは」

真優の『お姉ちゃん』発言に一瞬ポカンとなったが、近くの物陰か  
ら長い黒髪をポニーテールにし、上は白い半袖のTシャツ…だがへ  
そが見えるように余分なところを縛っていて、下は着古したジーン  
ズ…なのだからなぜか片足が太ももの付け根が見える程大胆にぶつた  
斬つてある変な服装をした女が現れた。彼女の名は『神裂香織』。  
以前現れた『ステイル』マグヌス』と同じく、オレの同僚である

神裂「お久しぶりですね零牙。相変わらず元気そうで何よりです。  
ところで、彼女は一体誰ですか？」

そういつた神裂の視線の先には口をパクパクして今の状況を飲み込めてないミアの姿があった。…ミアの存在を忘れてたな…。

オレ「あー、彼女は『管原雅』。オレの友人だ」

そういうとミアは徐々に『人見知り』というスキルを発動し、オレの背中にしがみつき『ど、どうも』と言って隠れてしまった。うーん。身動きが取れなくなってしまったぞ…。

神裂「そちらのお嬢さんは人見知りが激しいようですね」

オレ「まあな。ってなわけで『仕事』の話はオレん家で頼むわ。場所は知ってるよな？」

神裂「ええ。妹君も連れていった方がよろしいでしょうか？」

オレ「頼む。すぐに行くからよ。…ほらマユ。先にオレん家行ってる」

マユ「…わかったよ。お兄ちゃんに抱きつくのは我慢する」

オレ「…神裂、早く連れてってくれ」



わかりました。行きますよ？と言って神裂はマユを引っ張っていった。はあ…毎回毎回抱きつかれるのは勘弁して欲しい…

オレ「ミア？大丈夫か？」

ちらつと後ろにいるミアを見る。ミアはオレの肩に手を乗せて、しっかり握っていた。

ミア「レイ…？」

ミアは不安げにオレの名を言ってきた。多分、ミアの脳裏には、ドミニオンと戦った後のオレの姿が浮かんでいるのだろう。

オレ「帰ろうミア。大丈夫だから」

曖昧に笑ってオレはそう答えた。

そうしか、答えられなかった。

.....

さて、場所は速水家のリビングに移り零牙と神裂がテーブルに座っている。ちなみにマユは、近くの黒いソファでくつろいでいる。

神裂「さて、今日あなたに会いに来た理由は三つあります」

神裂がそう切り出してきた。零牙も真剣な顔で神裂を見据える。

神裂「一つは彼女<sup>マユ</sup>に関してです」

オレ「……」

神裂「彼女はイギリスで基礎的な魔術を習得しました。これから専門的な事を学ばないといけないのですが、生憎イギリス清教の魔導師は手一杯な状況なんです」

オレ「つまり、オレに魔導師になれと？」

ご理解が早くて助かります。と神裂が言う。

ここで話は変わるが、魔術師と魔術についてちょっと説明しよう。

一口に魔術師、といっても様々な形がある。

例で言えば西欧圏の神父、東洋圏の陰陽師、と言ったところだ。

魔術また然り。

東洋圏なら『陰陽道』、西欧圏なら、『ルーン』が有名だろう。零牙が専門としている『悪魔学』だって有名だ。

魔術師となるものは基礎を学び、専門的な知識を覚え、更に自己流のアレンジを加えることで魔術師になれる。

今のところマユは基礎的な所……どの魔術にも通用する基礎を学びきった段階だ。

そこから『悪魔学』を極めるか、『ルーン』を極めるか、はたまたそれ以外を極めるかは、自身で決めないといけない。

さて、東西共通して魔術師にはちよつと変わった役職がある。『魔導師』という役職だ。

簡単にいえば『魔導師』とは魔術の先生だ。『魔術師』に専門的な知識を教える人をさす。

さつき神裂が言ったことは、『イギリスにいる『魔導師』が少ないから、代わりにマユに魔術を教える』という事である。

オレ「神裂。まさかお前、マユに『悪魔学』を教える。だなんて言うつもりじゃないだろうな？」

神裂「いいえ。彼女には『普通の魔術』を教えてください」

オレ「……神裂、話が矛盾している。オレは『悪魔学』しか教えられないぞ？」

零牙がしかめっ面して言う。

つまりはこういう事だ。『数学』を専門とする『数学者』に、『考古学』は教えられない。それと同じで専門外の事を教える、だなんて言われても無理なのだ。

神裂「不可能、とは言わせませんよ？あなたの魔術は対策が練られやすい。だから、あなたは必ず自分の魔術に対する対策の対策を練るはず。そのために、専門外の魔術についても一通り学んでいるはずでしょう？」

オレ「…チツ。《最大主教（あの野郎）》の入れ知恵か」

神裂「さあ、それはどうでしょう？とにかく、彼女に魔術を教えてくださいませんか？」

オレ「わかったよ。責任を持って教えるさ」

神裂「ありがとうございます。二つ目の事は『天地逆転』についてです」

神裂の言葉で急に空気が重くなった気がした。

神裂「先日、イギリス清教のポストにあなた宛の手紙が届いていました……これです」

そう言うと神裂は封筒を取り出した。封筒を受け取り、封を切って中を見た。中の手紙には、こう書かれていた。

『Game is over』

next time we really』

オレ「『遊びは終わりだ。次からは本気でいく』か」

神裂「我々が彼らについて知っていることは全くと言って良いほどありません。ステイルとの共闘後、何か進展はありましたか？」

神裂が真顔で聞く。ステイルとの共闘後、『天地逆転』と関わったのは学園都市で戦ったあの時くらいだ。だが…



な」

神裂「…なるほどそうですね。ちなみに、対抗策は何か？」

オレ「ない訳じゃあない。が、オレがデフォルトで使える魔術は『アサセル武器召還』と『ルシフェル肉体強化』のみ。しかも、色々と制約があるから工夫次第ってところか？」

神裂「…そうですね。まあ、あなたが簡単に死ぬとは思えませんし、三つ目に入りましょう。三つ目は管原さんについてです」

オレ「ミアに何か問題でも？」

神裂「いいえ、問題はあなたの方ですよ零牙」

神裂は目を細めて零牙を見つめる。言葉にとげが見られるため、その視線にはわずかに軽蔑も混じってたのかもしれない。

神裂「あなたと管原さんは『親しい友人』という部類カテゴリーではありませんせんね？本当は『恋人同士』じゃないのですか？」

オレ「参ったな。見破れてたか」

神裂「私を甘く見ないでください。あなたは自分の立場がわかっているのですか？わかってて彼女と恋人になったのですか？」

オレ「わかってるさ。オレは『スパイ』だ。どんなにミアと上手くいっても待ち受けるのは《最悪の結末》バッドエンドだってことぐらいわかってる」

神裂「だつたらなぜ？」

オレ「さあな…わからねえ。でも、オレはミアを守りたい。ミアのいる世界（平和）を守り通したい。多分、これがオレがミアを好きになった理由…」

神裂「……」

オレ「だからミアの世界は汚さない。例えどんな犠牲を払ってても、な」

零牙にとって、あの夏の一日の平和は何事にも代え難いものだった。心の底から『守りたい』と思えるぐらい大切なものだった。その平和を守るためなら、零牙は躊躇なく魔術師を殺すだろう。例え、いくら自分が傷ついたとしても。

神裂「あなたはそれで良いのですか？」



オレ「自分の事なんざどうだって良い。ミアの世界を守れるのなら、どんな手だって使ってやる」

神裂「…そうですか。そこまでの覚悟があるのですか。私からは以上です。あなたからは何かありますか、零牙？」

オレ「ああ。お前にしか頼めないことがある」

神裂の質問が終わったので今度はオレの番。っても、質問じゃなくてただのお願いだけど…

神裂「何でしょう？」

オレ「ああ。簡単なお願いさ。この『堕天使メイド服』を着て写真を撮らせて欲しい」

そう言っでどこからともなく『堕天使メイド服』を取り出して神裂に見せる。すると、神裂は異常に拒否し始めた。

神裂「いいい嫌ですよ！そんな服を着るのも嫌なのに、しかも写真を撮るなんて絶対嫌です！」

オレ「ま、そうくるだろうな。つー訳で…実力行使に移らせてもらおう！マユー！」

マユ「わかったよお兄ちゃん！」

マユを呼び、何が何でもメイド服を着させるようにする。というか、着てくれないとオレの命がなくなる…！

神裂「ちよつと二人共！？冗談ですよ？冗談なんですよね！？  
つて零牙！？鎖分銅なんて出して何する気ですか！」

オレ「もちろん（オレの命のために）お前にメイド服を着せるためだ」

マユ「お姉ちゃん覚悟おおっ！！！！」

神裂「い、いやあああああ！！！！」

神裂の悲鳴が家中に響き渡った瞬間だった…

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

久々の兄妹コンビで神裂に堕天使メイドを着せ、写真を撮った。いやぁ疲れたー。

オレ「…さて神裂は帰ったし、これからどうしようか」

マユ「晩御飯ー！お腹減ったよお兄ちゃんー！」

マユが「お腹ペコペコだよー！」とジタバタする。確かにそろそろ夕飯を作らないとだな。

オレ「そうだな。今日の夕飯はお前の好きな物にしよう。…でもその前に」

マユ「お買い物だね！」

オレ「ミアに現状報告でもしておくか」

真向かいに住む一人の少女に向けて、オレは電話した。

.....

ミア「ムーームー！」

家に帰った私は、鞆を机の上に置くとベッドに横たわってゴロゴロ

し始めた。…なんだろう、この気持ち。モヤモヤする。

ミア「零牙…」

ふと呟いてみる。私の事が好きで、そして命を救ってくれた少年の名を。

だけど知っている。レイは、私には言えない。何かがある。そして、それを知られるのを嫌がってる。

ミア（…知りたい。私は、レイの抱えている物を全部知りたい。知って、受け止めたい。）

私がレイに惚れた理由は、『強いから』とか、『命を救ってくれた恩人』だから。ではない。

似ていたからだ。昔の私と…お父さんが、お母さん…とは言えないけど、戸籍上私の継母だった人を殺して死んでしまった、あの過去と向き合ってたあの頃の自分と。

ミア（レイは表面じゃ笑ってるけど、どこかぎこちない。私の場合は、あの時を深く考えないように思考を退行していただけだったけど…もしかしたらレイは、逆にその事が原因で歪んでいるのかも。）

論理も理屈もない推理だが、自信はあった。そして同時に思う。

ミア（もし、歪んでいてそれで苦しんでいるんだったら…助けたい。  
私は、レイが苦しんでいるのを見たくない）

ピリリリリッ！

その時、不意に携帯電話がなった。相手は…

ミア（レイ！）

私はすぐさま電話に出た。

零牙『……もしもし、ミアか？』

ミア「……レイ、どうしたの？」

零牙『……いや、ミアに神裂の事を話さないといけなと思ってな』

ミア「……そうなんだ」

零牙『いま話しても良いか？ちょっと長くなるかもしれないし…』

ミア「じゃあ、私の部屋に来て」

重要な話なら面と向かって話したい。なにより、レイの事をもっと知りたい。そう思った私は語句を強めに言った。

零牙『……わかった。すぐに行く』

そう言って、レイは電話を切った。

.....

ミアが『部屋に来てほしい』というのでオレは電話を切ってミアの部屋へ行った。ミアは部屋に案内すると、オレと向き合って座っている。

オレ『……』

ミア『……レイ』

どこから話せばいいかわからない。目を落として黙っていたオレに、ミアが話しかけてきた。

ミア『レイ、どこからでも良い。ちゃんと全部話して。神裂ってい

う人の事も、レイの事も全部」

真っ直ぐな目だった。本当に真っ直ぐで、濁りのない綺麗な目だった。

その目に諭されるように、オレはマユの事を話した。だけど・・・

ミア「まだあるでしょ？」

ミアに看破された。もうないよ。とオレは言ったが、ミアは食い下がった。

ミア「まだあるよね？前に私がレイをビンタした時にレイが言った、闇　ってやつが。レイは、その、闇　が私に危害を加えるかも。って謝りに言った時に言ったよね？」

正直言っただけ驚いた。本当に似ていたからだ。生前の姉さんと…。オレが家族と思えた人で、そして殺してしまったあの人と…。

ミア「教えてレイ。例えどれだけの、闇　だったとしても、私は全部受け止める。その上で私はあなたを好きになりたい。だから話して」

ダメだ。とその時オレは思った。この甘さに甘えてはいけない。と。そして確信した。オレはミアの世界を守りたい。例えどれだけの犠牲を払ってもコイツだけは守り通したい。

だから・・・

オレ「ごめん・・・」

その一言を言うのに百年は掛かるかと思った。こんなにも胸が苦しくなるとは思わなかった。ミアの悲しそうな目に耐えられず、視線を落としてしまった。

オレ「……………あのさ」

ミア「……………なに？」

でも、これだけは聞きたい。オレが傷ついたら泣いて心配してくれ  
たから、オレの闇を受け止めると言ってくれたから、なにより、オ  
レが本気で好きになったから聞きたい。

オレ「一つだけ聞いていいか？」

ミア「うん・・・」

オレ「ミアは・・・」



ピンポン

そこに、なんとも良いタイミングでインターフォンがなった。城崎先輩は夕飯の買い出しに行ってるらしいので、ミアと一緒に玄関に行くことにした。

ミア「はい。どちら様で・・・」

ミアが玄関を開けたその先にいたのは・・・

ミア「…………おじさん」

次回、波乱が幕を開ける……

続く

突然の来訪者（後書き）

マユ「THE・あとかきのコーナー！」

夢幻「いえーい！」

マユ「やっと出れた！」

夢幻「ゴメンな。なかなか執筆の時間がなくてさ……」

マユ「そんなのどうだっていいよ。それよりこれで私もレギュラー、……は無理だとしても準レギュラーぐらいにはなるよね？」

夢幻「それはオレの気まぐれだな」

マユ「むうー。速水家での漫才は私たちでやるんだよね？」

夢幻「まあね。ま、そこそこ使い勝手の良いポジションだから、多用させてもらっつぜ」

マユ「何かあったらお兄ちゃんに言いつけよう…。ところで次回の内容は？」

夢幻「零牙に引き続き、ミアの親類が登場。ま、もうバレてるけど」

マユ「早めに投稿しようね」

夢幻「努力します…。次回もお楽しみに！」

お(義)父さん出現！(前書き)

最後の方ちょっとシリアスです。

まあ本編へGO！

お（義）父さん出現！

ミア「おじさん…」

インターフォンの鳴った城崎家の玄関に現れたのは、無精髭を生やしたスリムな男だった。しかし、スリムな肉体には引き締まった筋肉があり、背中に重そうなザックを背負っていた。

岳「ミアか…久しぶりだな。見ないうちに大きくなっ たなあ」

そう言うとザックを背負った人はミアの顔の高さに顔を出してニカツと笑った。…ミアが『おじさん』って言うんだから、もしかしてこの人…

修「ただいま～。って親父、来てたのか」

岳「おお修！見ないうちにさらに凶悪な顔になったな！」

修「帰って早々にうるせえよ！誰のせいでこんなに酷い顔になったと思っ てんだ！…」

岳「さあ…神様なんじゃないか？」

修「ちっ…とにかくそこをどいてくれ。せっかく買った食材が腐っちゃう」

岳「ああ悪い。ところで修、一つ聞きたいんだが…」

やっぱり城崎先輩のお父さんか。そういえばアルピニストで、海洋冒険家なんだっけ。

岳「その白髪の少年はだれだ？」

修「ん？なんだ、零牙来てたのか。コイツは速水零牙。ミアの彼氏だ」

岳「…ほお、ミアの彼氏ねえ…」

若干状況に着いていけずにいたら、城崎先輩のお父さんがオレに笑顔で話しかけてきた。

岳「こんにちはは零牙くん。いつもミアがお世話になってるよ」

しかしオレは騙さない。あの笑顔の後ろで殺気がこもっているのが手に取るようにわかる！だって、右手に鉈を、左手にピッケル（山の岩肌に打ちつけてロープの支点をつくるための道具。先端部分が鋭い）を装備しているからだ！

オレ「い、いえ。僕の方がお世話になって……うおっ!？」

だから急に振り下ろされた鉈をギリギリ回避出来たのだ。アブねえ……！

ミア「ちょっとおじさん!？何をしてるの!？」

岳「止めるなミア……お前のお父さんから頼まれたことなんだ」

修「管原おじさんからか？」

岳「ああ。以前一緒に飲みに行った時に『オレにもしもの事があったら、オレの代わりにミアの彼氏を討つといてくれ』ってな」

修「なるほどな。娘を愛するが故に、か」

オレ「納得してないで助けてください先輩!ってうわっ!」

鈍とピツケルの連続攻撃を避け続けながら思う。なんて攻撃速度だ。FFF団並のスピードだぞ…

ミア「おじさんストップストップ！一旦攻撃中止！」

岳「っ！ミアに当てる訳にはいかないな…」

ミアがオレの前に出てきてくれたおかげで攻撃がやんだ。助かった…

修「零牙への制裁は後にして、とりあえず家に上げられ」

岳「それもそうだな。チツ！」

直子「なんだなんだ、騒がしくて原稿に集中出来ないよ」

そこへ城崎先輩のお母さん、城崎直子さんが現れた。執筆中すみません

岳「おお母さん！ただいま。今帰ったよ」



直子「あらあらお帰りパパ！え、えつとこんには零牙くん」

城崎先輩のお父さんに対しては普通に、オレに対しては恥ずかしそうに挨拶してきた。ううん…ミアに似ているところがあるなあ…

オレ「どうも、お邪魔してます」

直子「今日はまたどうして…ハッ！まさかミアとイチャイチャして…」

岳「殺す」

お義母<sup>かあ</sup>さんの発言でお義父<sup>おとう</sup>さんの声かに殺気がこもる。ストップ。義息<sup>オレ</sup>に何する気ですか。

オレ「何もしてませんよ！」

修「とりあえずオレを家に入れろ…食べ物腐る…」

そんな訳で、一旦リビングに行くことになった

.....

修「しっかし親父、なんで帰って来たんだ？」

岳「その言葉を聞くと、オレが帰ってこない方が良かったみたいだな修？」

城崎家のリビングにて、先輩が岳さんに質問した。ミアの話だと、岳さんは年がら年中山か海にいるらしい。

修「そうじゃねーよ。ただ、スポンサーとの契約を打ち切られたのかどうか聞きたいだけだ」

ミア「???スポンサーって？」

直子「登山家はスポンサーからお金をもらって海外の山に行くんだよ。」

例えば、『コーヒー豆の生産をしているキリマンジャロ山の案内ガイドをしてほしい』って言われたら、パパは会社から取材で来た人達へ、キリマンジャロ山の案内ガイドをするの」

修「さらに言うと、『グアム島近くの無人島に案内してくれ』とかって言う仕事もしているんだ。

簡単に言うと、『水陸問わずの案内人』って言うのが、親父の仕事みたいなものだ」

城崎母子の解説を聞いてミアは「ふうくん。そうなんだあ」と言っ  
て返した。そんな様子を見たあと、岳さんが再び口を開いた。

岳「そのこと何だかな修。心配はいらない。スポンサーとの仲は良  
好だよ」

修「じゃあなんで？」

岳「先日、モルディブで契約している会社の社長が『君、家族がい  
るんだって？離れ離れで寂しくないのかい？』ってオレに聞いたか  
ら、『はい。寂しいですけど、しっかり者の息子がいるんで大丈夫  
ですよ』と返したんだ。そしたら、『たまには家族サービスという  
ものをしてあげなさい』って言って、半年間、新人育成の仕事を  
頼まれた」

修「なるほど。スポンサーの会社の社長さんがそう言ったから、家  
に帰ってきた訳ね」

岳「そゆこと」

岳さんが笑顔で言い、城崎先輩が淹れたコーヒーを啜る。城崎先輩  
も納得したらしい。うんうん。やっぱり親子なんだな。…コーヒー

を啜る顔がそっくりだ。

すると

マユ「お兄ちゃんお腹減ったよ……」

玄関からマユの声が聞こえてきた。あ、忘れてた……

ミア「レイ……忘れてたね？」

オレ「……ああ……」

修「なんだ零牙。お前、妹がいたのか？」

オレ「ええまあ……『妹』っても血は繋がってないし、戸籍上でも繋がってない。ただ、イギリスでよく世話をしたっただけですけど」

直子「十分『妹』と呼べるじゃない。零牙君って家族がいたのね」

岳「いけないな。家族は大切しないとだぞ？」

直子さんと岳さんが諫める。まあ……アイツも家族と言えば家族だよなあ……

マユ「お…兄ちゃん（バタツ）」

オレ「マユ…そんなに腹が減ってたのか」

玄関までマユを迎えに行き、リビングに連れて行ってコーヒーを差し出す。マユはゴキユ、ゴキユ、ゲフ。と一瞬で消化。そこまで腹が減ってたのか…

マユ「お腹が減ったよお兄ちゃん…なんか作って!」

オレ「ん〜今冷蔵庫の中空っぽ何だよ。買い物してからじゃないといけないから、もう少し待て」

マユ「え…、私もう限界だよ…このままじゃ飢える…」

オレ「大丈夫。人間簡単に餓死しねえから。ちょっと待て」

マユ「もう…無理」

塩をかけた青菜みたいにしておれてしまったマユ。うつん…困ったな…



匠なんだよ」

修「今度はミアにもやってもらおうぜ。一度おばさんの超辛口評価を受けてみると良い」

オレ「なんか…すごそうな人ですね」

後で聞いた話だと、木下おばさんは昔超一流レストランで修行していたらしい。なので、料理に関しては誇りと情熱を持ってるような

直子「私も久しぶりだよ」なにわ屋に行くの」

修「母さんの場合、普通に食べに行くが久しぶりなんじゃないか？」

岳「オレも久しぶりだ」

ミア「おじさんの場合は日本に来たのが久しぶりなんじゃ…」

マユ「私もお兄ちゃんと一緒に食事するの久しぶりだよ」

オレ「ゴメンな仕事が忙しくて…」

三者三様の反応を見ながら一行はなにわ屋へ向かう。

.....

で、なにわ屋にて

木下「いらっしゃーい！ってカンナ！どうしたん！？」

直子「ヤッホー。食事にきたよ」

木下「カンナが人前に入るなんて…明日は天変地異が起これるとちやうか？」

修「いやいやおばさん。気持ちは痛いほど分かりますが、普通に食事をしに来たんですよ」

木下「そか。ならええ。今日は修とミアちゃんとカンナの三人か？」

修「いや。六人ですよ親父が帰って来たんで」

木下「そか。とりあえず席に座れや…おーい梢！カンナ達を案内し



い！」

梢「わかった。城崎さん、こっちへ」

オレ「…あれ？なんで梢先輩がいるんですか？」

さも居て当然のように振る舞う梢先輩に疑問を感じていると…

修「なんで、って…ここは梢ちゃんの家だぞ？」

オレ「へ〜。……ってえええ！？」

ミア「まさかレイ、知らなかったの？」

オレ「あ、ああ……」

驚いた。梢先輩の家が『なにわ屋』なら、あのユルい椎先輩の家でもあるって事だからだ。

岳「お久しぶり梢ちゃん。しばらく見ないうちにまたかわいくなっ  
たね」

梢「ありがとうございます岳さん。お姉ちゃんを呼んできましょう  
か？」

木下「止めたって梢。店が潰れるよ」

木下さんが料理を運びながら言う。あんまり長話していると失礼なので、裏メニユーのお好み焼きを頼むことにした。……家族ぐるみの付き合いだからよく知っているんだな。

「「「「「ごちそうさまでした！」「」「」「」

木下「はい！お粗末様でした」

オレ達がお腹いっぱい食べ終わった時には、既にお客さんはまばらで店もすき始めていた。

木下「ふいふ。ちよつと暇やから話すで」

直子「ちよつといいの？洗い物とかあるんじゃない」

木下「大丈夫。梢が代わりにやってくれてるから」

とのことで、木下さんがオレ達の座っている席の近くに座った。

木下「ところで、君が零牙君かいな？」

オレ「あ、はい。オレが速水零牙です」

木下「ふーん…」

唐突にオレの事を聞いたと思ったら、今度はオレの体を足のつま先から頭の頂点まで眺めて

木下「顔は合格やな。体つきも悪くはない。頭もエエ聞いてるし…」

なんかブツブツ呟いてからミアの方を向いて

木下「ミアちゃん、零牙君と結婚しい。私の見立てでは、絶対出世すると見たで！」

と、腕組みをして「うんうん」と唸っている。

ミアは顔を真っ赤にして

ミア「ちょ、おばさん！ななな何言って…」

木下「私の見立てでは、零牙君は絶対大企業の社長になれる器を持つてる。顔も良いからいろんな人から言い寄れるだろうし、今の内に婚約決めとき。将来安泰やで」

なんか自信満々に宣言している木下さん。なんだろう。嬉しいような、恥ずかしいような…

修「おばさん、それくらいにしといてください。ミアが沸騰寸前で  
す」

木下「なんや。これからが面白いんやけど…」

直子「あんまりからかわないですよ…まだ結婚なんて早すぎるよ」

マユ（そういう問題じゃないような…）

岳「ま、どっちにしてもオレが認めん限りは無理だな」

オレ「最悪、駆け落ちって手も…」

マユ「お兄ちゃん！？真剣な顔して言わないで！冗談に聞こえない  
から！」

木下さんの爆弾（？）によって一気に賑やかになったオレ達。ああ  
…これが、家族なんだな。

修「あ、一応これ割り勘な。零牙」

オレ「うそっ!?!」

.....

そして、自宅にて…

マユ「お腹いっぱい食べた〜!」

自宅の黒いソファーに座ってマユが「うーん」と背伸びをした。

オレ「おいしかったな。また行こうか」

マユ「うん!あ、でもこれから修行か…」

オレ「今日は今までの復習でいいよ。明日から修行開始な?」

マユ「はい!」

そういつて、オレとマユはお風呂に入り、マユはどこから取り出したか布団をオレのベッドの脇に敷いて、すぐに寝てしまった。

マユ「すう…すう…」

オレ「相変わらず寝付き良いな…」

マユの寝顔を見て思う。さて、オレも寝よう…

.....

閻零牙「久しぶりだな」

気が付いたら、オレは一面が深海のような闇に覆われたところにいる。

オレ「……一度と会いたくなかったな」

閻零牙「そう言つな」

目の前にいる《オレ》は笑ってそう言う。そして目を細め

閻零牙「さて、やっぱり甘い幻想を抱いてるお前に言ってる。…

…淡い希望は持つなと言ったはずだ』

オレ「一々お前に指図される覚えはねえよ」

闇零牙『まさかだと思いが、本気で「管原雅」がオレを受け入れると思っっているのか?』

オレ「ああ」

〃オレ が苛立った口調で聞いてきた。何故だろう。根拠はないけど、なぜだか分からないけれど、自信を持っていえる。

闇零牙『人殺しに幸せが訪れるとも?』

オレ「もちろん」

闇零牙『散々人を殺しておいて、自分は幸せになろうってか!?!』

オレ「それは違うな。オレはただ、ミアにお前の事を話すだけだ」

闇零牙『話してどうなる。拒絶されるに決まってる!』

「オレが喚いて言う。やっぱりコイツはオレらしい。オレの不安を強く表現している。」

オレ「だとしても話したい。それで、ミアがオレを拒絶しようともな」

闇零牙「話して何になるんだ。何も意味がないだろ」

オレ「そうだ、何も意味がない。でも隠したくないんだ。もう、ミアの泣き顔は嫌だからな」

そう。ただそれだけの理由。でも、自分の過去と向き合うには十分すぎる理由だった。

闇零牙「……後悔しても知らないぞ」

長い間オレを睨みつけて、オレは消えた。

白髪の少年は一人の少女のために、自らの過去と向き合う事を決めた。

少女が少年の過去を聞いた時、どんな答えを出すのかは…誰にも分



からない。

物語は進んでいく。

過去と向き合い、そして何が見えるのか  
それは向き合った先に、きつと見える。

お(義) 父さん出現！(後書き)

夢幻「眠っ…」

零牙「だったら早く寝ろよ！」

夢幻「力の続く限り、オレの起き続けるっ！」

零牙「なに熱血バトル漫画によく出てきそうな台詞言ってるんだよ…」

夢幻「まあ、アレだ。アレ書かないとだからな」

零牙「アレか？まあ…スケジュール的にそうだけど」

夢幻「思いっきり伏線だけど、まあ上手く作るよ」

零牙「頑張れ」

夢幻「って訳で皆さん！次回をお楽しみに」

コラボ事件！　　孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師？（前書き）

今回は朧月　琥珀さんの

『浮世絵町　孫と孫の血を引く者』のコラボです！

僕のような五流作家で上手く表現出来るかどうか分かりませんが、  
上手くやってみます！

それでは本編をどうぞ！

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

陰陽師…平安の頃より陰陽道を修め、都の平安を守りし者。

大陰陽師、安倍晴明が極めし後、西と東で二つの陰陽師の大家が  
来た…

片や東の都、帝を守る事を使命とした安藤家。片や西の都、あらゆる災厄を祓う事を使命とした花開院家。

妖怪の信仰が失せれつつ現代も、闇に巣くう妖怪を祓うために戦い  
続けている…

そして、闇に巣くう妖怪もまた…時代を流れてなお、今も生き続  
けている。

ここ、浮世絵町にも百鬼を連れ、多くの妖怪をまとめる妖怪がいた…

人々は、百鬼をまとめる主を、畏敬の念を込めてこう呼んだ

『妖の主、ぬらりひょん』と…

-----

浮世絵町。とあるアパートにて

昌彰「ゆら、起きろ。」

ゆら「ううん。あと5分…」

この何気ない朝の会話をしている二人は陰陽師。『安藤昌彰（あんどうまさあき）と』花開院ゆら』の二人である。血は繋がってはいないが、二人は兄妹で、婚約者である。

昌彰「起きろ〜ゆら〜」

ゆら「ううん…ふああ。おはようお兄ちゃん」

昌彰「おはようゆら。早く朝ごはん食べてくれ。」

ゆら「あ、うん」

そう言ってゆらは布団から出ていき、朝食を食べ始めた。

昌彰「さてと。朱雀、布団の片付けを頼む」

昌彰は自身が肌身離さず持っているお守りを握って、式紙・・『十二神将』の一体を喚びだした。

朱雀『ハア…』

外見が十七歳くらいに見える燃えるような赤毛に金色の瞳を持った少年の神将が溜め息と同時に顕現する。

彼は十二神将の一人『朱雀』。戦闘においては身の丈ほどある大剣を振るい、十二ある神将の中で唯一『同族殺し』を許されている。

昌彰「どうした朱雀？天一と何かあったのか？」

朱雀『いや、雑用に使われるのが習慣化してしまっただけ…』

そう言っただけまた溜め息をつく朱雀。どうやら毎朝呼ばれて習慣化したらしい。ちよっと可哀想である。

昌彰「…じゃあ、いつものように布団を畳んでくれ。湿気がこもらないようにな」朱雀『わかってる…』

そう言っただけ朱雀は炎の神気を使って布団を乾かし始めた。

その様子を見た昌彰は台所に向かう。既にゆらは席に着いて朝食を食べていた。

昌彰「どうだ？うまいか？」

ゆら「もぐもぐ…」（コクン）もぐもぐ…」

昌影「そうか。良かった」

そういつと、昌彰も自分の席に座り、箸を取って黙々と食べ始めた。

ゆら「ふい〜。ごちそうさま」

昌彰「食べ終わったか。だったら食器を片付けて着替えてこい。おしはもう済ませてあるから」

ゆら「わかった」

ゆらは自室に向かった。ちなみに、朱雀は既に雑用を済ませて霊符に戻っている。

昌彰「ごちそうさま。よし。天后！」

天后『お呼びでしょうか』

長い銀髪に翠色の瞳をして、菩薩のような服装を着た神将が現れた。彼女もまた十二神将の一人、『天后』である。

昌彰「天后、片付けを頼む」

天后『かしこまりました』

天后がそういうと、シンクにあった食器が絡まって一分も経たないうちに食器がきれいになった。

天后『終わりましたよ昌彰様』

昌彰「ご苦労様。いつ見ても流石だな」

天后『どういたしまして』

ぺこりとお辞儀をして天后は霊符に戻った。すると、タイミングよくゆらが自室から出てきた。

ゆら「準備出来たよお兄ちゃん」





緒に目覚めるって結構辛いんだぞ!？」

マユ「妹として、正体不明のプロレス技は標準装備なのであります  
隊長!」

オレ「ならその装備を今すぐ外せ!おかげでオレは毎朝毎朝、涙目  
で起床する羽目になってんじゃねえかつ!」

マユ「結論として無理なのであります隊長!」

オレ「くそ…いつか痛い目に合わせてやる。とりあえず朝食の準備  
だな」

痛みと共に起きたオレはお腹をさすりながら朝食を作り、マユと一  
緒に食べたのだった。

マユ「ふいふ。ごちそうさま」

オレ「ごちそうさま」

マユ「お兄ちゃん…これからどうする?」

朝食を食べ終わったオレ達はこれからどうするかを考えることに。

オレ「ん〜。昨日やり残したことがあるから、ちょっとマユ手伝ってくれ」

マユ「それってお洗濯？」

オレ「いや。魔術だ」

そう言ったらマユは身を堅くしてオレを見た。

オレ「安心しろ。魔術ってもお前は防御陣を張っていれば良いから」

マユ「ならいいけど…私を殺さないでね？」

オレ「大丈夫。早めに終わらせたいから訓練所いくぞ」

マユ「OKだよ！」

そんな訳で家の地下室。もとい訓練所にて。

マユ「よし。とりあえず私ができる最大限の防御結界は張ったよ。いつでもこいつ！」

オレ「……この二日間で分かったけど、お前の最大防御結界って『歩く教会』ぐらいあるんだよな……。マジで本気を使わないといけないなあ……」

そう思ったオレは『ルシフェル肉体強化』の魔術を使い、髪が黒く、目のが赤く変化した

オレ「……いくぞ」

逆刃刀を正眼に構えたまま、最速の速さでマユに接近。ありったけの『天使の力』テレスマを逆刃刀に流し込んで、右足を前に踏み込んだ。

オレ「飛天御剣流……『九頭龍閃』!!!」

全身全霊を込めて『九頭龍閃』を放つ。九カ所の同時攻撃である『九頭龍閃』はマユの張った防御結界を破った。

マユ「キャッ！」

逆刃刀の剣先は、マユの体より二回り分大きい所を切っていたので

マユに怪我はなかった。  
……それでも剣圧は効いたらしいが。

オレ「……」

マユの喉元から10cm離れた所で逆刃刀を止め、ゆっくりと刀を下ろす。同時に『肉体強化』の魔術も解除した。

オレ「……ふう」

マユ「お兄ちゃん大丈夫？久しぶりに本気でしたでしょ」

オレ「ああ大丈夫だ。怖い思いさせてゴメンな」

マユ「気にしなくていいよ。それよりその逆刃刀、すごいね。さっきの一撃に耐えるなんて」

オレ「先祖代々使われてるものだからな。簡単には碎け「ビキッ」……」

刀から変な音がしたので見てみる。すると、逆刃刀の刀身にひびが入ってるのがわかった。

ビキッ、バキッ…バリントッ！！

そして、逆刃刀の刀身が粉々に砕け散った。

オレ「……………」

マユ「……………」

沈黙が流れ、オレとマユは砕け散った逆刃刀を見る。

長い沈黙の後、マユがポツリと呟いた。

マユ「砕けた……………」

オレ「ああ。やっぱり限界だったか……………」

マユ「ど、ど、ど……………」

オレ「どうするもこうも、打ち直してもらっしか……………」

マユ「アテはあるの?……………」

オレ「前に土御門が、武器を作るスペシャリストがいるって言った…。そいつを訪ねるしかないな」

マユ「どこにいるか、わかってるの？」

オレ「確か、『安藤』って名字の一族がそついうのを得意にしてるらしい。居場所は…浮世絵町だ」

- - - - -

その頃、速水家の真向かい。城崎家では

「「「暑い…」」」

私達全員、ぐったりしてた。

岳「大丈夫かみんな。ぐったりしてるぞ？」

……おじさんを除いて

ミア「流石おじさん…日本以上に暑いところに行ってるから、この猛暑が苦にならないとはね…」

修「くそ…クーラーさえ直れば…」

直子「……………」

今日はうだるような猛暑日。神様は私達の事が嫌いなのか、そんな日にまさかクーラーが壊れた。

私の部屋だけでなく、お兄ちゃん、おばさん、お父さん、そしてリビング…言っちゃえば城崎家のクーラー全てが同時に壊れた。

直子「あ…うう…暑いよ…」

修「ふ、不幸すぎる。暑くて気力が削がれる」

アイスを食べ、団扇片手に（家に扇風機はなかった）涼をとる。あ…うう…暑い。

岳「そんなに暑いなら、図書館にでも行ってくれば良いじゃないか」

おじさんがアイスコーヒーを飲みながら言う。でも残念なことに…



修「親父…家から図書館までどれくらい距離あるかわかってんのか？」

岳「…さあ？」

ミア「片道20分…自転車がないからその20分間は地獄なんだよおじさん…」

家から図書館までの距離が遠い。つまりは打つ手なし。暑さのせいで頭が回らない…。

照りつける太陽の光と、短い一生を生き抜こうとする蝉の音を聞きながら私達が言うことは一つ。

「暑い…」

これだけだった。だがしかし。

直子「ああ…家から近くて、私達が長時間いても怒られない、快適な冷房空間は近くにないのかなあ…」

おばさんのその一言でお兄ちゃんと私は気づいた。まだ、オアシス

はあつたのだ。

残った気力を振り絞って玄関へ向かう。行き先は――真向かいの家。

――

戻って速水家

オレ「……って訳だからお留守番頼む」

マユ「わかったよお兄ちゃん！」

砕け散った逆刃刀の修復のために家を空けることにしたオレ。しかし、先日の『天地逆転』の手紙の事もあり、マユはお留守番させることにした。

オレ「助かるよマユ。さて、安藤さんを見つけるまでどれくらいかかるかわからないから、旅行の準備をしなくちゃ。『ピンポーン』」

椅子から立ち上がって旅行の準備をしようとしたら玄関からベル音が。気になって玄関のドアを開けると

ミア「レイ〜助けて〜」

オレ「どうしたミア。そんなぐったりして。家のクーラーでも壊れたか？」

修「流石だな零牙。その通りなんだ。分かったなら早く家に入れてくれ」

そういつて城崎家の皆さんは、オレの家のリビングに入っていき

「「「快適い」」」

くつろいだ。

ミア「涼しい〜レイの家涼しいよ〜」

修「最高だ〜」

直子「ミアが彼女で良かったよ〜」

ソファアに寄りかかってまったり気分になってしまった城崎家。いや、まったりになるのは良いんだけど…

ミア「あ〜もう家に帰りたくない」

修・直子「「同感」「」

ミア「レイの家をクーラー直るまで居させて〜?」

修・直子「「頼む〜（お願い〜）」」

なんて言い出してしまった始末。困ったな…

オレ「別に良いですけど…」

「「「やった〜」「」」

オレ「オレ、明日から旅行に行つてきますんで、マユの事お願いします」

ミア「え!?!レイいないの…」

ミアが驚愕した。ちなみに城崎母子はまだまったり中。

オレ「ミアも来るか?...炎天下の中、歩く羽目になるけど」

ミア「いくー！」

マユ（ちょっとお兄ちゃん！？）

オレ（頼むマユ！オレとミアの婚前旅行を邪魔しないでくれ！）

マユ（婚前旅行って…最初から結婚できないことわかってるくせに！）

オレ（良いんだよ！お土産買ってくるから我慢してくれ！）

アイコンタクトで繰り広げられる兄妹の会話。欲望には忠実に、ね？

916

修「ん〜でも小学生二人で旅行はダメだぞ…？」

直子「そうだよ〜そう言うのは高校生になってからね〜」

そこへ常識的な城崎母子の言葉。…やっぱりダメか。

直子「ま〜でも、修が付いていくのなら、良いけどね」

修「ま、それならね」

そう言われて顔を見合わせて相談するオレとミア。そして・

.....

オレ「ミア、行くぞ」

ミア「はい」

修「慌てるなよ二人共、時間はまだあるんだから」

岳「修、ミアのことを頼むぞ」

マユ「お兄ちゃん、ミアさんに襲いかかっちゃダメだよ？」

オレ・修「わかってるよ！行ってきます！」

こうしてオレとミア、城崎先輩は浮世絵町へ行ったのだった。

続く

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？（後書き）

夢幻「朧月さんすいませんでしたああああ！」

零牙「作者…お前アホか！なんでオレの方が出番多いんだよ！普通逆だろ！？」

夢幻「じ、次回はお前の出番薄くなるから大丈夫！」

零牙「まったく…朧月さん、もとい昌影さんに失礼のないようにやれよな…」

夢幻「どうにかなるさ！という訳で次回もまたよろしく」

コロボ事件！ ～孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師？（前書き）

コロボ事件第2回！

……終わりがまた……



コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

ミンミンミンミン...

響き渡る蝉の音

キラッ！

照りつける太陽

そして...

昌彰・ゆら」「暑い...」「

本日8月14日。陰陽師、安藤昌彰と花開院ゆらは猛暑によって苦しめられていた。

というのも無理はない。朝の天気予報で今日の最高気温は38。アスファルトの熱も加えて体感する暑さは異常とも言える。

ゆら「お兄ちゃん...暑いよ...」

昌彰「頑張れゆら。白虎達が戻ってきたらアイス買ってやるから…」

白虎『呼びましたかな』

昌彰がゆらをなだめていると目の前に亜麻色の総髪にくすんだ灰色の目をした大きな体躯をした神将が現れた。  
十二神将の一人、『白虎』である。

昌彰「白虎か…」

白虎『昌彰様、情報の収集が終わりました』

昌彰「そうか…どうだった？」

白虎『ダメです。気配すら察知できません。恐らく、他のみんなも……』

昌彰「分かった。白虎、オレとゆらにそよ風を吹かしてくれ」

白虎『承知』

白虎が了承すると昌彰とゆらところに涼しいそよ風が吹いてきた。

細かい風を操る事が出来る白虎の力である。

ゆら「うーん。気持ち良い」

昌彰「そうか。良かった」

笑顔のゆらを見て思わず微笑んでしまう昌彰。最近色々忙しかつたため、その笑顔に癒やされていると…

天一「あら？ちよつとタイミングが悪かったわね」

朱雀「ラブラブだな」

太陰「お似合いだね」

玄武「うぬ。もう少し様子を見てからくるべきだったな」

四人の神将達が姿を表した。ものすごくタイミングよく現れたため、昌彰は顔うつむいてボソツと聞く。

昌彰「……情報は集まったか？」

朱雀『おや？ワナワナ震えてるけど大丈夫か？』

天一『仕方ないわよ。私だって朱雀とデートしている時には邪魔されたくないもの』

と、濃い朱色の髪をした神将、『朱雀』に次いで言ったのは陽の光のような金の髪に晴れ渡る冬空や淡く凍てついた湖のような瞳をした神将『天一』。

十二神将の一人であり、朱雀の最愛の恋人である。

玄武『朱雀よ。日頃の鬱憤が溜まってると言っつて、あまりいいるなよ？』

と、見た目は漆黒の双眸と髪をした十歳くらいの少年の神将が、重々しい口調で諫めた。

十二神将の一人、『玄武』である。

太陰『でもさ、こつこつこのをいじるのが楽しいんだよね』

そこへ桔梗色の瞳をし、栗色の髪を耳の上でツインテールにしている少女の神将が言う。

十二神将の一人、『太陰』である。

昌彰「……で、情報は？」

朱雀『そう焦るな。お前を十二分にいじった後で……』

昌彰「……今度から天一に朝の布団畳みをしてもらおう」

朱雀『悪かった。だから勘弁してくれ』

昌彰が呟いた瞬間に態度を翻した朱雀。天一を愛しているが故に大変な事はさせたくないのだ。

朱雀『えーっと、オホン、はっきり言って何もなし。浮世絵町近辺の山々もくまなく探したけどどこにもいない』

天一『気配の一欠片も感じないわ。奴ら、相当隠れるのが上手いわ』

玄武『ああ。しかし奴らの歩んできた道のりを鑑みれば、容易に想像できる……。やっぱり見つけるのは至難かと思う』

太陰『奴らを感じ取れたらすぐわたしを喚んでね。全力で送るから』

そういつて五人の神将達は霊符に戻ってしまった。昨日の夜から探させてたので疲れたのだろう。

昌彰「みんなご苦労様。しかし弱ったな…手掛かりが掴めないなんてな」

ゆら「占術で占ってみたら？」

昌彰「やってみたがダメだった。くそ…一体どこにいるんだ…」

昌彰は青空を見上げて隠しきれない焦る気持ちを呟いた。

昌彰「奴ら…『吸血鬼』の連中は一体…」

.....

オレ「着いたか…ここが浮世絵町…」

「「暑い…」」

電車を乗り継いで浮世絵町駅に着いたオレとミア、城崎先輩は日本の暑さの影響を受けていた。

オレ「ホレホレどうしたミア。いつもの元気元気はどうしたよ？」

ミア「暑いからそれどころじゃないんだよ……」

修「はやくホテルにチェックインするぞ……もう辛いからな」  
そう言つてトボトボ歩き始めたオレ達。日向には行つた瞬間、『うっ……』とミアと城崎先輩が軽く悲鳴を上げた。

オレ（ま、それにしてもミアとお泊まりか。なんかラッキーだな）

なんてオレが思ったのもつかの間。その幸運は、《非常識》よつて容易く碎かれる事になる。

ギーン！

オレ（！！なんだこれ……誰かが、魔力を練つて魔術を使おうとしてる……？）

微弱な違和感を感じたオレは辺りを見回す。しかし、いるのは人、

人、人。特に変わった様子はなかった。

オレ「あれ？勘違いか…」

ミア「レイ〜行くよ〜」

オレ「…まあ気に止めるほどでもないか。ミア〜待ってくれよ〜！」

その時、オレはまだ吸血鬼の存在を気づいてなかった…。

???「チツ、陰陽師か…厄介だな」

- - - - -

そして、あつという間に夜である。

イギリス清教御用達のホテルに泊まってるため、料金は格安で泊まれるから便利だ。……便利なんだけど…

ミア「またレイと同じベッドだね！」

何なんでしょうか。オレは心底「ダブルベッド」と縁があるらしい。しかも《最大主教（あの女）》の余計な口出しで城崎先輩だけ別室



……つまりはオレとミアの2人つきり。

ミア「なんか委員会のみんなでお泊まりしたのを思い出すね」

オレ「ああ…そだな」

ミアが楽しそうにベッドに腰掛ける。うん。かわいい。そしてオレの理性がヤバい。

ミア「それにしてもなかなか見つからないね。安藤さん」

オレ「一応、友達（土御門）から教わった住所を訪ねたけど…今日は留守だったな…」

まさかあの野郎、オレにガセネタ教えたんじゃないやねーだろうな…。なんて土御門抹殺計画を考えていたらミアがこんな事を聞いてきた。

ミア「……ねえ、その逆刃刀…だったけ？それってそんなにすごいものなの？」

オレ「ああ。飛天御剣流に受け継がれるものだからな。百年以上使われているのに切れ味最高だしな」

ミア「大切なものなんだ」

オレ「ああ。個人的にも思い入れのある刀だからな」

ミア「ふーん…」

ミアは一通り聞くとベッドに横たわってゴロゴロし始めた。うん。かわいいな。

さてと、とりあえずご飯食べに行こう。ここはバイキング形式だから、料金さえ払えば大丈夫らしいし」

ミア「なんか優遇されてるって感じだね」

オレ「まあな。流石は国家宗教なだけはある」

借りた部屋を見回してみると豪華な装飾だどつくづく思う。普通に借りればいくらするんだろっとな…

ミア「バイキングか」。はあ…食べ過ぎないようにしないと…」

オレ「お前も大変なんだな…。あーそうだ、オートロックだから鍵<sup>ルームキー</sup>を忘れるなよ？」

ミア「うん。わかったよ」

そうしてオレとミアは、大ホールへ夕飯を食べに行ったのだった。

- - - - -

浮世絵町のとあるアパートにて…

昌彰「……」

夕飯を済ませたあと、ゆらはお風呂に、昌彰は星見をして吉凶を占っていた。

昌彰（星をみる限り…運勢は悪いな。今夜辺りにでもまた出るかもな）

星見をして得た情報より、『吸血鬼』が今夜辺りに出ると予測する。昌彰達が『吸血鬼』をなかなか捕まえられなかった理由は、奴らは二人一組で行動して陽動や攪乱などを使い、上手く逃げているのだ。

ゆら「お兄ちゃんお風呂空いたよ」

昌彰「わかった」

星見を止めて風呂場に向かう。今夜は、気を引き締める必要があり  
そうだ。

- - - - -

オレ「ん…」

深夜、ホテルに泊まっているオレは不意に目が覚めてしまった。目  
の前にはミアの寝顔。すう、すう、と規則正しく呼吸している。笑  
っているから良い夢でも見ているんだろう。

オレ（眠っ…）

全身を支配する眠気に襲われてゆっくりと瞼を閉じる。しかし、

その時

ギイン！

オレ（！！！！魔力！）

強い魔力を感じたオレは目を覚まして飛び起きた。感じられる場所はこのホテルの中。一体誰が…

オレ（……明らかに人外の者。発する魔力が半端じゃない）

ミアを起こさないよう、静かに着替えて部屋を出た。念のため、ルーンで結界を張っておこう。

ランプの光で照らされた廊下を伝い、魔力が発生している場所に向かう。廊下は見通しがよく、人一人いない。

静かに廊下を伝い、魔力が発生している部屋へと着いた。予想通りオートロックなので『13ある犯罪行為を犯す道具の一つ』《強制解除、黒いPC》を使い、ロックを外す。

キィ…

中に光が漏れないよう、静かにドアを開ける。中には二人の男。魔力はこの二人から感じられる。

目を細めて様子を窺う。すると、一人の男が口を開いた。特徴的な  
- - 鋭く長い犬歯が目映る。

そして鋭く長い犬歯を出しながら、一人の男がベッドに寄り添う -  
-。

バン!!

オレ「おいおい。魔術師<sup>オレ</sup>目の前で大胆ですねえ」

その瞬間オレはドアを開けて「吸血鬼」を睨みつける。一瞬怯んだ  
吸血鬼達は即座に窓から飛び降りた。

オレ「チツ。待て！」

オレは暗闇に紛れる吸血鬼を追い始めた。

- - - - -

一方、浮世絵町のとあるアパートでは

昌彰「!!!来た!!!」

ゆら「お兄ちゃん！」

昌彰「ああ。太陰、朱雀、玄武、勾陣、白虎！来てくれ！」

陰陽師の二人は妖気を感じ取り、式紙を喚ぶ。今度こそ吸血鬼を捕まえるために。

白虎「現れたか」

昌彰「ああ。二時、四時、七時、九時、十一時の方向に行ってほしい。オレ達は十二時の方向に行く」

朱雀「わかった……ってちょっと待て。何かおかしい」

昌彰「なにが？」

朱雀「……十二時の方向に奴らとは違う。何かがいる。この感じは人というよりも……」

玄武「妖……なのか？それも違う。何かがいる」

人より感覚が鋭敏な神将達は零牙の存在を感じ取った。しかし、零牙の存在を知らなかったため、『異様な存在』として処理した。

昌彰「…そうか。気をつけておこつ」

太陰『二人は私が送るね』

昌彰「頼む」

昌彰とゆらは太陰の操るちよつと荒々しい風に送られ吸血鬼を追い始めた。

- - - - -

タッタッタッタッ

オレ「逃げ足は早いですねコノヤロー」

ホテルから追いかけて約10分。オレは目の前に逃げている吸血鬼を追いかけていた。

途中で吸血鬼が二手に分かれたため、片方逃がしてしまつたが - -



まあ大丈夫だろう。

「く、くそ……」

吸血鬼は行き止まりの路地についた。さて、袋の鼠だ。

オレ「さて、鬼ごっこは終わりだ……」

『hoppliss666』

魔法名を名乗り、一步吸血鬼に向かって踏み出す。

オレ「『刃物よ……』」

「く、くそがあああ！」

オレ「『その刀身を敵の血で濡れよ』」

ザシュガシュザシュ……ドスン！

吸血鬼が襲いかかってきたが、たった一言の詠唱で全身に刃物が突き刺さる。さすがの吸血鬼もこれで死んだだろう。

オレ」さて、これからどうするか…」

吸血鬼は不死身と言われるくらいしぶとい。確実に殺しておいた方が無難だな…

なんて、吸血鬼の後始末を考えていると

昌彰「やっと見つけたぞ。吸血鬼!!」

ゆら「今、アンタを滅したる!!」

魔術師と陰陽師。

ついにこの二人が交錯する。

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？（後書き）

夢幻「はあ…」

零牙「夢幻…しょうがない流れだったとは言え、また悲劇を繰り返す気か？」

夢幻「もう、ドミニオンの過ちは繰り返さない！」

零牙「間違えなければ良いんだけどな…」

ガチャ

昌彰「お邪魔します」

零牙「あ、昌彰さん。こんにちは」

昌彰「こんにちは」

夢幻「おいちよっと待て。なんで君此処にいるの!？」

昌彰「暇だからやってきた」

零牙「つーかオレが呼んだ」

夢幻「零牙！何勝手にやってんの！？それから昌彰さん！頼むから『浮世絵町』孫と孫の血を継ぐ者（元の世界）に帰ってくんない！？」

昌彰「どうせ作者は気づかないよ。気づいたとしてもオレの問題じゃない」

夢幻「うわあああん！朧月さんすいません！今すぐ送り返します！」

零牙「どうやって？」

ピポパ…プルルル…

夢幻「あ、もしもしゆらさん？うん。君のバカ亭主を連れ帰ってほしい。うん。今すぐに。それじゃあよろしく」

ガチャン

昌彰「おい夢幻…今ものすごく聞き捨てならない言葉を聞いたよう  
な…」

ガチャ

ゆら「あなた…お兄ちゃん！いくら暇だからってやって良いこと  
と悪い事があるよ！」

昌彰「つてゆら！？今お前オレの事『あなた』つて…」

ゆら「良いから帰るよ！」

ガチャ

夢幻「ふう。なんとかなったな」

零牙「なんかゆらさん、スツゴい赤面だったな…」

夢幻「まあ、あの二人は許可取ってから出演させよう…」。

今回はバトルパートになります…まあ短めにしますよ」

零牙「読者の皆様、どうかこの駄作者を見捨てないでください！」

夢幻「それでは次回をお楽しみに」

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？（前書き）

バトルパートです…

うまく書けない…

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

太陰『よつと…ここでいい？』

昌彰「ああ。ありがとう太陰」

太陰『どういたしまして』

吸血鬼の存在を感知した昌彰とゆらは太陰によって近くの道路まで送られた。

ゆら「お兄ちゃん早く！」

昌彰「ああ！」

アパートにいた時よりも吸血鬼に近くいるからか、吸血鬼の居場所が手に取るようにわかる。もちろん、『異様な力』の存在も。

流れでる妖気を追いかけて、吸血鬼の居場所へ走りだす。



そして

昌彰「あそこか…」

ゆら「吸血鬼の妖気が弱まってんなあ…」

行き止まりの路地にさしかかる前に状況が変化したことを感じた二人。しかし、そんなことは気にせず吸血鬼の所へ駆け抜ける。

昌彰「見つけたぞ吸血鬼！」

ゆら「今度こそ、アンタを滅したる！」

式紙の札を持って路地に着く。そこには白髪の少年がいた。だけど昌彰とゆらはソレが人間だとは到底信じられなかった。なぜなら…

昌彰（妖…とは違う気だな。リクオみたいな存在とも違う。人間のよくな気もするが、妖の気の方が強い）

ゆら「お兄ちゃん…」

昌彰「待てゆら。ちょっと確認したい」

今にも式紙を放ちそうなゆらを止める。念のため、身元を確認する。

昌彰「そこの君！君は一体誰なんだ！」

零牙「（……ここで疑われても仕方がないな……）  
オレは『イギリス清教 第零聖堂区』ネセサリウス《必要悪の教会》のメンバー、  
速水零牙だ」

昌彰「イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』……？」

イギリス清教、という言葉にはゆらも昌彰も聞き覚えがある。だが、  
『必要悪の教会』と言うことは聞き覚えがなかった。

ゆら「アンタも陰陽師なんか？」

零牙「いや。オレは魔術師だ」

昌彰「魔術師だと……ふざけているのか？」

零牙「いや。事実なんだが…」

そう言つて零牙は目を逸らす。

第零聖堂区、『必要悪の教会』、魔術師。

意味不明な言葉を聞いただけでなく、あからさまに怪しいこの少年に対して、昌彰とゆらが出した結論は…

ゆら「なんか訳わからんことを言ってるけど…コイツが吸血鬼を倒せる程の強い奴うちゆうことはわかる」

昌彰「ああ。しかも妖気に近い気を持つてる…。もしかしたら吸血鬼が化けたのかも知れないし、はたまたソレ以外かはわからないが、とりあえず人間じゃなさそうだな」

ゆらは式紙の札を、昌彰は退魔の剣を構えて宣言する。

昌彰・ゆら

「「安藤家（花開院家）の名において、お前を滅する！」」  
アンタ

.....

オレ（おいおいマジですか！？）

零牙は内心焦っていた。素直に話したのに、なんか戦闘体制に入ってしまったからだ。

オレ（見たところ吸血鬼を追いかけてきた、って感じだな。協力出来れば良かったんだが、どうやって説得する！？）

ゆら「貪狼！ソイツ喰ってしまいー！」

オレ「っ！くそっ、力づくでやるっきゃない！『hopliss66  
6！』」

少女の陰陽師が狼の式紙を放ったため迎撃することに。魔術で日本刀を召還し、手に握る。

オレ「しっ！」

前進しながら『貪狼』、と呼ばれた式紙の首をはねる。しかし…

昌彰「ゆら。援護する」

少年の陰陽師が何やら唱えている。どんなの魔術を使おうと……！  
！？

昌彰「『風刃！』」

オレ「風で作られた刃か！んなもの効くかよ！！」

見えない風の刃の位置を予測して剣で弾き返す。しかし

昌彰「…かかった」

オレ「！？ぐあああ！！」

上空から現れた無数の矢がオレの体を貫く。途中から刀で弾き返したが、少し傷を負った。

ゆら「挟み撃ちや…『武曲！』」

いつの間にか後ろに回り込んでいた少女の陰陽師が、新たな式紙を召喚した。落ち武者の姿をした式紙はオレに向かって切りかかって

くる。

だが…

「血イイイイイ！」

先ほどオレが串刺しにした吸血鬼が起き上がり、鋭い犬歯を少女の陰陽師の首筋に目掛けて食らいつた――

――

昌彰「！！ゆらぁ！」

ゆら「コイツまだ生きとったんかいな!？」

謎の妖気をまとう少年を滅している最中、敵の後ろに回ったゆらの後ろから刃物で串刺しになった男――吸血鬼が起き上がった。鋭い犬歯をゆらに向けて突き出てくる。

武曲はすでに少年の方に向かって今からでは間に合わない。新たな式紙を喚ぼうにも時間が足りない。呪符に関しては財布から取り出さないと使えない。

かといってオレが攻撃しようにも呪符じゃ届かないし、『風刃』じゃ、ゆらに当たってしまう。十二神将達は手元にいない。

万事休すか……？

零牙「銃器よ、銃口より出でる弾丸にて敵に死を与えよ！」

オレが歯噛みしていると白髪の少年の手に拳銃が握られていた。そして銃口をゆらへ……

昌彰「させるか！」

オレが退魔の剣を少年に向けて横薙に振るう。しかし、

パン！

銃声が路地に響く。そして、断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

ただし悲鳴を上げたのは……

「ぐああああああ！」

零牙「鈍器よ、その重みにて敵を永劫の闇へ突き落とせ！」

ドゴオオオン…という轟音と共に銃弾を受けた吸血鬼がコンクリートの下敷きになる。

……白髪の少年はわずか数秒の間に吸血鬼を潰し、そしてオレの剣を抜刀してない刀の鞘で受け止め、武曲の攻撃を避けていた。

ゆらは何が起こったのか飲み込めておらず、オレの方を見つめていた。

太陰「昌彰！」

朱雀「何もなかったから急いで戻ってきたら…」

天一「一体何が起こったの？」

空から声が聞こえてきたと思ったなら朱雀達が戻って来ていた。白髪の少年はオレと距離をとり、刀を構える。

昌彰「いや…あの少年が妖気を持っていたから、てつきり妖怪だと思っただけとゆらで滅していたら、いきなり吸血鬼がゆらの後ろに現れて…」



匂陣『あの少年に助けられた。ということか?』

昌彰「ああ」

肩に着かない程度に切りそろえられた漆黒の髪に、黒曜の瞳を持つ十二神将で二番目に強い神将、『匂陣』が姉御口調で昌彰に言う。

退魔の剣を構えて呪符も取り出す。十二神将達が戻ってきた以上、これで戦いは終わる。

昌彰「朱雀、あの妖怪を滅してくれ」

朱雀『それはオレ達の理に反するから無理だ』

昌彰「ちょっと待て。十二神将の理に反するって事はつまり・・・」

白虎『あやつは人間だ』

昌彰「だが、アイツの持つてる気は・・・」

白虎『限りなく妖気に近いが、紛れもなく人間の気だ』

朱雀や白虎達から告げられる事実<sup>に</sup>耳を疑った昌彰。しかし、十二神将達の言うことに間違いはなさそうだ。

零牙「……どうやら、戦う気がなくなつたようだね……」

少年は刀を下ろし、ため息をつく。最初から戦う気がなかつたようだ。

白虎『お主に聞く。お主はなんと云つ者だ?』

零牙「オレは、イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』<sup>ネセザリウス</sup>の魔術師、速水零牙だ」

太陰『「必要悪の教会」……あれ?どつかで聞いた事があるような?』

玄武『たしか、西欧の方で魔術師なる者がいると聞いた事がある』

零牙「それぞれ。その魔術師」

白髪の魔術師は気楽に答える。まさか陰陽師に似たような奴がいるとは知らなかつた……と昌彰は思った。

零牙「なあ、一つ聞きたいんだけど、『安藤』っていう陰陽師を知らないか？知ってたら教えて欲しい」

昌彰「……お前はソレを知ってどうする気だ？」

零牙「オレの逆刃刀を直してもらいたい」

そう言つて少年は抜刀していない刀を抜いた。その刀は刀身がなく、柄までしかなかった。

昌彰は白髪 of 魔術師を見つめて名乗るべきか考えた。そして…

昌彰「お前が探している『安藤』はオレだよ」

名乗った。魔術師、という者はまだ信じられないが、少なくともコイツは吸血鬼を倒し、ゆらを守った。だから信用しても良いと思う。そう、昌彰は考えた。

ゆら「ちよっ、お兄ちゃん!？」

昌彰「大丈夫だゆら。コイツは信用できる」

ゆら「……まあ、お兄ちゃんが言うなら……」

句陣『とりあえず、自己紹介から始めよう』

-----

昌彰「オレは安藤昌彰だ。さっきはいきなり攻撃してしまってますまなかつた」

ゆら「私は花開院ゆら。本当、すまんなあ」

十二神将が現れて数分後、どうにかオレが妖怪だという誤解は解けて、昌彰さんとゆらさんは自己紹介をしてくれた。

オレ「オレは速水零牙。気にしないでください、誤解だったんですし」

昌彰「心が広いな君は……そう言えば君、何でオレの事を知ってたんだ？」

オレ「あー。『必要悪の教会』の知り合いに安藤さんの事を聞いてたんですよ」

昌彰「なるほどな。で、オレに逆刃刀を直してほしい。」と

零牙「ええ。……お願い出来ますか？」

昌彰「まあ、君にはゆらを助けてもらった礼があるし。すぐに直すよ。」

…『天空』！来てくれ！」

昌彰さんが符を使って式紙を呼び出した。

灰白色の長い髪を頭頂部で結い上げ、口元と顎に蓄えた白いひげは胸にまで届く老人の神将が現れた。

十二神将の一人『天空』である。

天空『……』

ゆら「……あれ？今までほっといたけど、お兄ちゃんって天空と匂陣喚べるようになったんやっけ？」

昌彰「匂陣はこの前の四国妖怪での戦いで傷ついた青龍と六合の代わりに喚べるようになったんだ。天空はコラボだから特別出演」

オレ「そんな身も蓋もない…」

つーかネタバレしてるし…良いのかコレ？

天空『……昌彰、ワシを喚んだ理由は何かな？』

昌彰「ああ悪い天空。お前の能力でこの刀を直してほしい」  
ちから

天空『わかった。ちょっと刀を貸してくれ』

式紙『天空』の手にオレの折れた逆刃刀が渡り、じっと刀を見つめる。そして…

天空『うむ。この刀はワシが鍛えておくからしばし待っておくれ』

オレ「え？ああはい。よろしく願います」

天空『なるべく早く返すからの』

そう言って式紙『天空』は姿を消し、霊符に戻ってしまった。

オレ「…………ふう。ま、刀は喚びだせるから良いか。それよりも……」

オレはコンクリートの塊に押し潰された吸血鬼を見る。

オレ「一体、浮世<sup>こよ</sup>絵町でなにが起こっているんですか？」

続く……

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師く？（後書き）

夢幻「ふう。まだ？か。一体どれほど続くのやら」

零牙「まあ、がんばれ」

夢幻「これからもよろしくお願いします！」



コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師く？（前書き）

やっと前座終わった…

そして眠い…

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

オレ「ふあ……」

現在午前一時。昨夜の陰陽師との死闘後、吸血鬼の事を聞こうとしたが、ホテルにいるミア達にオレの不在がバレると色々厄介なので、駅の近くにある喫茶店で日を改めて聞く事にした。

オレ「ねむっ……」

こっそりホテルに戻り、そして元の部屋に戻った。ミアは……良かった。熟睡している。

オレ「抜き足差し足忍び足……」

音を立てないよう細心の注意を払いながら服を脱ぐ。パジャマに着替えてベッドへ侵入。

オレ「……変な事考える前に寝よう」

ミアの愛くるしい寝顔を見て、理性のたががはずれないうちに寝ることに。陰陽師との戦闘で疲れていたのか、すぐにオレは寝てしま

った。

.....

ミア「ん……」

現在午前六時。私が目を覚ましたら目と鼻の先にレイの寝顔があった。

ミア「……寝顔は年相応なんだね」

前に委員会で海に行った時は最終的に「オレ……やっぱソファーで寝るよ／＼／」って言ってたから寝顔までは解らなかった。

でも、今は目の前にレイの寝顔がある。

……。

……。

……。

……ハッ！ダメダメ寝込みを襲うなんて！！女の風上にも置けない！

危うく本能で動きそうになったので理性で押しとどまる。首を小刻みに横に振って妄想を取り払う。

零牙「ん…?」

すると、レイが目を覚ましてしまった。目の下をゴシゴシとこすってぼーっとしている。そしてしばらく私を見た後。

ギョッ

なんて効果音が似合いそうな感じで抱きついてきた。

ミア「ちょちょちょ…零牙くん!? 何しちゃってるの!?!?!」

とっても嬉しい。とっても嬉しいから心臓がバクバクなってヤバいと、私が頬を赤らめながらちょっぴり抵抗すると、レイはますます私に抱きついてきて

零牙「ねむ…」

ミア「ひょっとして私は抱き枕代わり!? ちょ、離れて! 眠れないよー! / / /」

零牙「すう…すう…」

私の叫びも虚しく、レイはまた夢の世界へ旅立ってしまった。

-----

ゆら「ふぁ…」

現在午前十時。ゆらは朝の日差しに当てられて目を覚ましてしまった。むくりと布団から起き上がって、眠い目をこすりながら部屋を出る。

ゆら「昨日は色々あって疲れたわ…」

洗面所に行き、顔を洗ってシャキツとしたゆらはふと、同居している昌彰の部屋をみる。毎朝毎朝起こしてもらっているけど、今日限りは昌彰もまだ寝ているようだ。

ゆら「たまには私が起こしてあげよ」

そっ…と昌彰の部屋を開けて忍び足で昌彰のベッドまで近づく。ゆらの予想通り、昌彰は爆睡中だ。

ゆら「……………」

人の寝顔という物は不思議な物である。なぜだかわからないが、じつ…と見てしまう。

ゆら「……………ハッ！アカンアカン！ちよつとトんでしもた！」

ゆらはぼーっとした頭を振って正気を取り戻す。そして優しく昌彰を起こし始めた。

ゆら「お、お兄ちゃん？起きて〜？」

体を揺さぶってみると、案の定昌彰は「ん……」と即座に目を覚まし、背伸びをして覚醒した。

ゆら「おはよお兄ちゃん」

昌彰「ん…おはよゆら。よく眠れたか？」

ゆら「うん。お兄ちゃんは？」

昌彰「大丈夫だ…朝ご飯は食べたか？」

ゆら「あ、まだや」

昌彰「じゃあちよつと待て。すぐに作ってやるからな」

ゆら「あ！私も手伝うで！」

こうして二人は仲良く朝食を作り始めたのだった。

.....

ミア「」

修「…なんでミアは朝からそんなに上機嫌なんだ？」

オレ「…さあ？」

現在午後一時。オレとミア、城崎先輩の三人は昨夜の約束のために駅の近くにある喫茶店へ歩いていった。が、なぜかミアはものすごく

上機嫌でハミングまでしている。

……昨日、オレ何かやったか？

オレ「うーん…何も思い出せない。寝ぼけてたのかもな…」

修「ミアに聞いても『秘密だよ』って言って教えてくんねーし。何だかなあ…」

上機嫌なミアを先頭にオレ達三人は歩道を歩いていた。すると、ミアが内装がアンティークな喫茶店の前まで来ると

ミア「あ、レイが待ち合わせしている喫茶店ってココじゃない？」

オレ「ああ」

修「さすが完全記憶…。一度も地図を見ずに目的地にたどり着いたな…」

場所を確かめ、周囲を見渡す。約束の時間はもうすぐだからそろそろ来てるはずだけど…

オレが周りをキョロキョロして見ていると、長い黒髪を一束に括っ



た少年がオレに近寄ってきた。

昌彰「どうも。君は速水零牙君で良いんだよね？」

オレ「ええ。こんにちは安藤昌彰さん」

個人的なワガママだが、昨夜の事は秘密にしたいので、昌彰さんは『共通の友達を介して、名前だけは知っている関係』で挨拶する。と言っても昨日会ったばかりだけど…

ミア「えっと…レイ、この人が安藤さん？」

オレ「そうらしい。昨日、オレの友達を介して連絡が取れたから多分間違いないよ」

ミア「ふん」

よし、怪しまれてない。後ろにはゆらさんも居ることだし、このまま自然な成り行きで喫茶店に向かおう。

昌彰「立ち話もなんだから、店に入って話そうか」

オレ「そうですね」

そうしてオレ達は喫茶店に入ってたのだった。

.....

昌彰「で、今回の依頼なんだが…」

喫茶店に入った昌彰、ゆら、零牙、雅、修の五人は互いに自己紹介をした後、昌彰がこう切り出した。

零牙「どうなんです？」

昌彰「逆刃刀の修復だよ。知り合いの頼みでもあるし引き受けるよ」

零牙がほっとした表情を作る。ただし、と昌彰は付け加えてこう言う。

昌彰「最近この町で起こってる事件を解決してほしい」

ミア「事件、ですか」

昌彰「そう。その事件を解決してくれたら、逆刃刀を直してやって  
も良い」

昌彰とゆらは、昨夜零牙が聞けなかった『浮世絵町の異変』を語り  
始めた。

ゆら「最近、この町のホテルで不可解な事件が多発しているんや」

修「と、言いますと？」

昌彰「最近なぜか、この町のホテルに泊まった女性客が次々と部屋  
で殺されているんだ。しかも、全員死因は失血死」

零牙「もうちょっと具体的に言えますか？例えば、どんな状況だっ  
たのか。とか」

昌彰はカップに注がれた紅茶を啜るのを止め、さらに詳しく状況を  
説明し始めた。

昌彰「……ここ数週間、この町のホテルで殺人事件が起こっている。  
被害者は全員20代の若い女性客。死因は失血死。頸部に何かに噛  
み付かれたような跡があったらしい」

ゆら「事件が起こったのは深夜一時から二時。被害者が泊まったホテルは、全て監視カメラにオートロックちゅう防犯対策はしっかりしているホテルで起こった」

ちなみに、昨日、零牙達が泊まったホテルもオートロックに監視カメラがついている。しかし監視カメラが付いているのだから…

ミア「だったら監視カメラをチェックすれば…」

昌彰「それが誰も映っていないんだ。犯行があったらしい時刻、誰も被害者の部屋へ通じる通路に誰一人映っていなかったそうだ」

ゆら「しかも、被害者の部屋は外部からの侵入は不可能で窓は壊された形成はなかった。だから必然的にドアから侵入するしかないんやけど…」

修「誰も映ってない。つまりコレは…」

零牙「『不可能犯罪』、ということですか。」

正直、厄介な事件だな。と零牙は思った。いくら犯人が吸血鬼とは言え、微々たる量でも魔力が使われたのなら、いくら睡眠中でも零牙は気付くからだ。

つまり、不可思議な魔術を使わない - 物理的な方法でカメラに映らずに犯行現場にたどり着いたということだ。

昌彰「オレ達は陰陽師なんぞでな。不可思議な事件があると、お祓いとかでよく駆り出されるんだ。そこで、事件の事を知ったんだ」

ゆら「物騒な事件やから早く解決して欲しいんよ。頼めるか？」

昌彰とゆらも、零牙と闘った昨夜のような事は伏せておくつもりらしい。

修「ってもな…それだけじゃ手がかりもありやしなしいし…」

雅「だよねえ…」

零牙「……」

それに対し、修達は少々困った表情になる。事件を解くためには様々な情報が必要なのだが、毎度の如く情報がない。

そんな二人の隣で、零牙は目を瞑って数秒考えるそして、修に菜摘

を通じて今回の事件の情報を手に入れて来て欲しいとお願いをした。修は嫌がっていたが、どうにか説得して不知木町に帰って行った。

零牙「……ミア。城崎先輩が帰ってくるまでの間、オレ達の方でも調べておくぞ」

ミア「え、どうやって？」

オレ「事件が起こったホテルに共通点があるかもしれないだろ？発生した区域が近ければ、犯人の居場所も限定できる」

ミア「あ、そっか」

零牙の言葉でミアも調査の方向性がわかったらしい。するとそこへ

昌彰「オレ達も協力するぞ」

ゆら「何かあったら守ったるからな」

零牙「（クスッ）ありがとうございます」

昌彰とゆらも調査に協力する意志を示した。喫茶店の椅子から立ち

上がって代金を支払い、とりあえず店を出る。

零牙「そうだな…ミアはゆらさんと一緒に居てくれないか？オレは昌彰さんと一緒に行動するから」

雅「わかった。事件は全部で五件起こったから、最後の五件目…このホテルで待ち合わせしよう？」

零牙「ああ。ゆらさん、ミアの事よろしくお願いします」

ゆら「任しとき零牙くん。ほな雅ちゃん行こか？」

そう言っつてミアは零牙と待ち合わせ場所を決め、ゆらと共に調査に向かっていった。

その姿が見えなくなつた後、零牙は小さくため息を付く。

零牙「ふう…」

昌彰「昨日言つてた『オレが魔術師だと知るとマズい人』って彼女の事か？」

零牙「ええ。オレが魔術師だつて知ると、ミアに魔術師からの危害が及ぶ可能性がありますから」

昌彰「彼女の事、大切に想っているんだな」

零牙「そりゃ好きですから」

零牙は笑って言う。そして一変、真剣な表情になり

零牙「行きましよう昌彰さん。オレは…オレ達は、あの笑顔を守るために力をつけたのですから」

昌彰「そうだな」

そう言っつて零牙と昌彰は、ミア達とは逆の方向へ歩き始めた。

続く



コラボ事件！　　孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師？（後書き）

夢幻「ふいふやつと本題に入れるZE！」

零牙「まだまだ物語は続きますね…」

夢幻「なるべくページ数多くするよ…」

零牙「ま、頑張れ」

夢幻「オホン。ではでは…。読者の皆様、感想ドシドシお待ちしております  
まゝす！」

コロナ事件！ ～孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師？（前書き）

今日はバレンタインデー！

……ぐわっ

本編へどうぞ…

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

オレ「しかし解せねえな…」

零牙はミアとゆらさんから別れた後、昌彰と一緒に二軒のホテルの情報をしながらポツリと呟いた。

昌彰「なにが解せないんだ？」

オレ「吸血鬼の事ですよ」

手に入れた情報を片っ端から頭へ入れながら言う。昌彰は訳が分からない、といった風な顔をしているので、零牙は説明することにした。

オレ「吸血鬼、って言うのは大抵は村とかに固まって住んでいるんですよ。それに吸血鬼ってのは結構強い。それこそ、普通の魔術師…陰陽師よりずっとね」

昌彰「つまり…どついう事だ？」

オレ「ここ数週間で五件…最初の一、二件は昌彰さん達の存在を知らなかったから普通に事件を起こしていたと思うけど、流石に三件以上だったら昌彰さん達のことを知っているはず。」

わざわざ自分が滅されるかも知れないのに、同じ町で危険を冒してまで血を求めるでしょうか？」

昌彰「捕まらない、っていう自信があったんじゃないか？」

オレ「だとしたら捕まらないようもつと数が多くなるはず…でもなんで二人しかいないんだ…？」

零牙は状況を分析して考えてみる。すると結構疑問があることに気づいた。しかし、解決のための糸口が見当たらない。

昌彰「だがしかし…。オレ達が事件絡みで集められるの情報はこれぐらいが限度か…」

零牙「そうですね…」

ファミレスのテーブルに散らばった十種類以上の資料を見ながら、一般人に集められる情報の限度を感じた二人。これ以上の情報は警察と協力しなければ手に入れられなさそうだ。

昌彰「朱雀達にも搜索させているけど、多分情報はないだろうな…」

零牙「万事休す。こつちから吸血鬼達を追いかけるのは無理なのか  
…？」

零牙は椅子にもたれかかって天井を見上げる。昌彰はちょっと沈黙  
した後

昌彰「……もしかしたら情報が手に入るかも知れないな」

零牙「え？心当たりでもあるんですか？」

昌彰「目には目を、妖怪には妖怪を。ってね」

昌彰は携帯を取り出し、ある人物へ電話を掛けた。

- - - - -

リクオ「むっ！」

バカでかい屋敷の中にある池のほとりで、一人の少年が杯に並々と  
入れられた酒の水面をじっと見ている。

- - 彼の名は『奴良リクオ』。妖怪、ぬらりひよんの血を四分の一  
継ぎ、妖怪仁侠一家『奴良組』の若頭である。

リクオ「……はあ。上手くないか」

河童「リクオ様〜毎回毎回、何が上手くないんですかい？」

と、池の中から河童が現れる。リクオは河童に気付いて「うん……」  
と呟き、

リクオ「『明鏡止水』よりも強力な技がなかなか出来なくてね……。この間の四国妖怪みたいなのが、いつまた来るか分からないから特訓してたんだ」

河童「リクオ様も大変ですね〜」

リクオ「うん。でもきつとやってみせる。だから「リクオ様〜電話ですよ〜」……え？電話？誰からだい氷麗こほり！」

と、リクオはバカでかい屋敷の廊下にいる雪女、『氷麗』に問いかける。すると氷麗は少々トゲのある口調で

氷麗「それは……陰陽師からです」

リクオ「陰陽師？昌彰さんかな……」

とにかく電話なので屋敷の方に走り始めたリクオ。近くに置かれた杯は河童が美味しくいただきました。

リクオ「お電話代わりましたリクオです。あ、やっぱり昌彰さんですか」

リクオの予想通り電話の相手は昌彰だった。一方、昌彰はリクオの言葉に驚いたようで

昌彰『やっぱり、と言うとオレが電話掛けてくると分かってたのか？』

リクオ「いやあ…なんとなく」

昌彰『そうなのか。まあ本題に切り替えるぞ。今からお前の家に行っても良いか？』

リクオ「え…？」

リクオはドキツとした。それもそのはず。リクオの屋敷にはたくさんの妖怪達がいる。そして昌彰は妖怪の天敵である陰陽師だ。さっきの氷麗も含め、妖怪達は昌彰を家に入れることを快く思っていないのだ。

昌彰『ちよつと協力者が現れてな。ソイツの紹介をしたいんだ』

リクオ「それは…陰陽師なんですか？」

リクオは探るように言う。しかし昌彰は珍しく齒切れの悪い答えを返した。

昌彰『いや…陰陽師じゃない。人間だ』

リクオ「え…人間なんですか？」

昌彰『そう…だと思っ』

リクオ「??あの…どっちなんですか？」

昌彰『すまない。正直言って分からない。容姿は人間なんだが、持っている気が妖気に近い』

リクオ「ボクみたいな存在なんですか？」

昌彰『いや。お前のは違う。十二神将達は人間だと言ったがどう



も信じられない……。ともかく、そっちに新手の妖怪だと勘違いされないようにソイツを紹介したいんだ。大丈夫か？」

リクオ「わかりました。氷麗達はどうか説得します」

昌彰『すまない。今からそっちに行く』

ブツ…

リクオは昌彰からの電話を切った後、受話器を置いて後ろを見た。

そこにはリクオの側近の氷麗、青田坊、黒田坊の三人がいた。

青「リクオ様…陰陽師が来るんですかい？」

リクオ「うん。なんでも、吸血鬼退治に協力してくれる人を見つけたから紹介したいって」

黒「陰陽師が見つけた協力者ですか…信用に足る人物なんですかね」

リクオ「それは会ってみないと分からないよ。氷麗、みんなに陰陽師が来るって言うておいてくれない？」

氷麗「あ、はい！わかりました」

氷麗と青田坊と黒田坊は屋敷の中にいる妖怪達に『陰陽師が来るから隠れてる』と伝えると、雑鬼たちは逃げるように屋敷のアチコチに隠れて始めた。

リクオ「ボクとは違う妖気を持つ人間か…。どんな人なんだろ…」

リクオの呟きは誰にも聞かれる事なく、すぐに霧散してしまった…。

-----

オレ「ここですか？」

昌彰「ああ」

昌彰さんの心当たりを頼りにして、心当たりのある人の家へと行ったオレは、その家…というか屋敷の大きさにド肝を抜かれていた。

オレ「こんな屋敷に住んでる妖怪って一体…」

昌彰「驚いている最中悪いが、中に入るぞ」

昌彰さんが開けた大きい門の前でオレを呼ぶ。呆気にとられてたオレはハッとして昌彰さんの後を追いかけた。

オレ「ん…？」

巨大な門をくぐった瞬間、庭のアチコチから気配が感じられた。…  
…なんだろうか。

オレは庭を見渡して気配のする池の方に向かった。

納豆小僧（ヤバイヤバイ見つけた！）

家鳴（どどど、どつしようー！）

雑鬼（滅される！間違えなく滅される！）

と池の近くで慌てる小妖怪達。そんな事を知る由もないオレは池の近くまで寄るが…

昌彰「零牙、どうした？」

オレ「あ、昌彰さん。あの、なんかこっちから気配が…」

昌彰「あゝ気にしなくても大丈夫だ。それより紹介したい奴がいる。付いて来てくれ」

オレ「わかりました」

昌彰さんに呼ばれたオレは池の周辺に近づくのをやめ、その後を付いていく。……さっきの気配はなんだったんだろうな。

納豆小僧・家鳴・雑鬼

(( (た、助かった) ))

ちなみに、池のほとりで納豆小僧達が密かにホッとしてのは誰も知らない

そして、奴良家の玄関にて…

昌彰「久しぶりだなリクオ」

リクオ「久しぶりです昌彰さん」

氷麗「久しぶりですね。陰陽師」

玄関先で挨拶する昌彰とリクオ。相変わらず、そばにいる氷麗だけは昌彰に向かってトゲのある口調になる。

昌彰「リクオ、コイツが電話で話していた《協力者》だ」

零牙「速水零牙です。こんにちは」

リクオ「こんにちは零牙君。ボクは奴良リクオ。よろしくね」

リクオは零牙に手を出して握手を求めてきた。零牙も「よろしく」と手を出して握手をした。

その様子を一瞥した氷麗は昌彰の方を向いて本題を聞き出す。

氷麗「それで、今日は一体何の用件なんですか、陰陽師」

昌彰「色々だね。まあ、まずは零牙の紹介かな」

氷麗「まずは？」

昌彰「ああ。本題は、『吸血鬼』の情報だ」

氷麗「……………吸血鬼」

吸血鬼、と言う単語に反応を見せる氷麗。やはり吸血鬼が奴良組の治めてる土地で好き放題やっているため、氷麗達も知っていた。

昌彰「オレはリクオに頼んで吸血鬼の隠れ家を調べてもらっていたんだが……」

リクオ「それに関して何ですけど……」

リクオがおずおずと話しかける。

リクオ「不思議な事に全く分からないんだよね……。吸血鬼の尻尾が全く掴めない」

昌彰「奴良組でもダメなのか……」

昌彰は万事休すという顔をする。どうやら、最後の頼みの綱だったらしい。

その時

昌彰「……ん？電話か」

昌彰の携帯に着信が入った。電話の相手は同級生の家長カナだ。

昌彰「もしもし安藤です」

カナ『ま、昌彰くん！？良かった通じた！』

電話口からカナの声が聞こえてくる。走っているのだろうか、息が荒い。

昌彰「どうした家長、なにか」ま、町に化け物が現れて、ゆらちやんが闘ってるの！お願い、助けに来て！』

昌彰「家長、場所はどこだ？」

カナ『商店街の裏路地！お願い早く……キャッ』

昌彰「！？おい家長、どうした、返事しろ！……くそっ切れたか」

リクオ「なにかあったの？」

リクオが昌彰に聞いた。昌彰は内心焦りながらも状況を説明した。

昌彰「家長から、町に化け物が現れてゆらが応戦しているとの連絡が入った」

氷麗「化け物？」

零牙「恐らく吸血鬼。…って昌彰さん！さっき誰が応戦しているって言いました!？」

昌彰「誰って、ゆらだ」

零牙「ゆらさんが応戦しているって事はミアもいるのか…!」

零牙は歯噛みする。最愛の人の危機に気づけなかった自分に腹が立っているのだ。

昌彰「とにかく早くゆらの所に行かないと…白虎!」



白虎『お喚びで』

昌彰「オレをゆらの所に送ってくれ！」

白虎『御意』

昌彰は式紙、白虎を喚びだし、風でゆらの所まで送るように指示を  
だす。そこに

零牙・リクオ「昌彰さん、オレ（ボク）も連れて行ってくれ（く  
ださい）！」

零牙とリクオも連れて行って欲しいと、願い出す。二人の戦う意志  
を感じた昌彰は

昌彰「……わかった。白虎、二人も頼む！」

白虎『御意』

白虎の風に送られ、三人はゆらの下へ急行する。

.....

時はすこし前に戻り…

カナ「へえ、雅ちゃん、彼氏いるんだ」

ゆら「白髪で、顔はそこそこ良いで」

商店街を歩きながらカナとゆらは話している。ミアは顔を赤くして黙っている。

……零牙と昌彰から別れた後、ミアとゆらの二人は事件のあった二軒のホテルを巡り、情報を収集した後待ち合わせ場所である三軒目のホテルに向かおうとしていた所、ゆらの同級生の家長カナに遭遇。ゆらがカナに事件の状況を話していたり、ミアの事を紹介したりしている内に、カナと一緒に買い物をしてしまつて……現在に至る。

カナ「だけど良いの二人共？待ち合わせのホテルに行かなくて……」

ミア「レイの場合、一人で勝手に動いちゃうんで多少遅れても大丈夫なんです」

ゆら「お兄ちゃんも、多分許してくれるやろ…」

ミアは気楽に、ゆらはちよつと不安げに答える。

ミア「……あれ？あそこに人だかりが出来てる…何かあつたのかな？」

ミア達の目の前に、ビルの入り口で沢山の人が長蛇の列を作つて何かを待っている姿が見えた。

何かと思つてミアはその列に近づくが…

ゆら「止めとき、あれは新手の新興宗教や」

ゆらがミアの肩に手を掛けて新興宗教に近づけさせないようにする。

カナ「近づくとすぐに入らされるって、もっぱらの噂なんだよ」

ミア「そ、そうなんだ…。危なかった…」

ミアがホツと一息付いていると、ビルの奥から白い和服姿…陰陽師が着るような服装した男と、側近の男が4人ぐらい現れて、信者達に熱弁を振るっていた。

本物の陰陽師であるゆらは、ゲテモノでも見るような表情になり、ミア達に「近づかん方がエエから向こうへ行こ?。」と言って今まで歩いてきた道へ引き返そうとする。

しかし

「ちょっとそこのお嬢さん方、お待ちください」

運の悪いことに、側近の男に呼び止められてしまった。

それでも無視しようとするが、道を塞ぐように側近の男がゆらの前にたった。男はニコニコと笑ってゆら達に話しかける。

「すみません。ちょっとお話しでもよろしいですか?」

ゆら「私達、今とっても急いでるんや。そこをどき」

「そこをなんとか」

ゆら「ダメや」

「ほんの数分で終わりますので…」

ゆら「そんなの知らへん

側近の男はなおも食い下がるが、ゆらは片手で払いのける。そんなやり取りが数分続く。

しかし、後ろから残り側近の男達がジワジワとゆら達に近づいて囲むように動く。

「…今ご入会いただくと素敵なサービスが」

ゆら「興味あらへん」

「ではお客様には更に…」

ゆら「いい加減にせえ！こっちは急いでるんや！アンタらに付き合ってる暇なんかあらへんのや！」

いい加減しつこい側近の男に遂に怒ったゆら。側近の男は笑顔を崩さぬまま、地面に視線を落とす。そのニコニコと笑うその笑顔が、ゆら達を不快な気分らせていた。

「………そうですか、わかりました。では…」

ゆら「ミアちゃん、こんなのに構わずお兄ちゃん達の所に行くで」

「無理矢理にでも、我々の仲間になってもらいましょう」

- 瞬間、4人の側近は鋭く尖った犬歯をむき出しにして、四方向からゆら達を襲った。

そのあまりにも恐ろしい変化に、ミアは悲鳴を上げて気絶してしまった。

カナ「ミ、ミアちゃん！」

ゆら「こいつら…吸血鬼や！」

ゆらはとっさに呪符を取り出して目の前の吸血鬼に攻撃する。爆発した呪符にひるんだ吸血鬼の一瞬の隙を突いて、ゆらはカナとミアを連れて裏路地に逃げる。

ゆら（最悪や…こっちは一人なのに、向こうは四人。どうやって戦う…？）

裏路地を駆けながら、ゆらは必死に戦う策を練る。しかし

「ガアアアアアツツ!!!!」

ゆら「もう見つかったか！」

現れた三人の吸血鬼を相手に、式紙『武曲』、『貪狼』、『禄存』を喚び出し防御。しかし吸血鬼の力が強く、若干不利な状況になってしまう。

ゆら「クツ…カナちゃん！」

カナ「あ、はい!？」

ゆら「私がコイツら食い止めてる間に、お兄ちゃんに助けを呼んで！」

カナ「わ、わかった！」

カナは携帯を取り出して電話を掛ける。ゆらは三体の式紙で吸血鬼の猛攻をなんとか耐えているが、そう長くは保ちそうにない。

ゆら「クツ…お兄ちゃんが来るまでみんな頑張って！」

三体の式紙にそう言い、自らを鼓舞する。胸にあるのは……絶対勝つという、自信のみ。

そんなゆらの思いが通じたのか、三体の式紙が吸血鬼のわずかな隙を突いて反撃を始めた。

よし勝てる……そうゆらが思った瞬間

カナ「キャッ！」

ゆら「！！カナちゃん！」

カナが残っていた最後の吸血鬼に後ろを盗られてしまった。吸血鬼は犬歯をむき出しにし、今にもカナの首筋へ噛み付こうとする。

「陰陽師！コイツを救いたければ式紙をしまえ。さもなければコイツを喰らい、生き血を啜るぞ……」

ゆら「そんなん誰が……！」

「ほづ。ならば、この女とそっちの寝ている女は死ぬことになるな」



ゆらは新たに式紙を喚び出して戦おうとするが、カナとゆらの二人を見捨てる訳にはいかず。黙って式紙をしまった。

「よし。約束通り、この女達は生かしてやる。だが、お前には死んでもらおうか……」

ゆらはさっきまで式紙と闘っていた三人の吸血鬼に羽交い締めになれ、身動きが取れぬまま無理矢理頭を横にされ、首筋を露わにする。

カナを離れた吸血鬼は鋭く尖った犬歯をゆらに見せつけながら、ゆらに近づく。

「しかしまあ……なんでオレ達は、こんな奴らをビビってたんだろうな」

「もう片方の奴がとんでもなく強えんだよ」

「なるほどね」

ゆらの顔を見ながら吸血鬼達は話し合っている。ゆらは、せめても  
の抵抗で目で反抗していたが、吸血鬼達はそんなのお構いなしに最  
悪の計画を練る。

「そういえば…お前といつも一緒にいたあの陰陽師、お前とどうい  
う関係なんだ？」

「あん？ただコンビ組んでるだけじゃねえの？」

「いや、逃亡していた仲間が言っただけを集めると、ただコンビ  
組んでるって感じじゃない。もっと親しい関係…」

「我々で考えるよりも、彼女に聞いた方が良いのでは？」

「それもそうだな。…オイ、正直に答える」

ゆらの眼前にいる吸血鬼は、ゆらの顔を覗き込みながら聞いてくる。  
ゆらはいつも見たく暴言を吐きたかったが、カナ達を危険な目に合  
わせる訳にもいかず、正直に答えることにした。

ゆら「ただの兄妹や」

「……へえ」『ただの』兄弟ねえ…」

ゆらの答えに満足したのか、吸血鬼は妖しく笑う。そして…

「決めた。コイツは殺さない」

「それは『人質する』、という事ですか？」

「いやあ。もつとえげつない事さ」

吸血鬼は下卑た笑みを浮かべた。

「コイツを吸血鬼にして、あの片割れの陰陽師に殺させる。つてのはどうよ」

ゆるらの背筋に冷たいものが走った。昌彰と闘い、死ぬ。それは昌彰にどれ程の傷を負わせるのか、考えたくもなかった。

「今の答えを聞いて分かったぜ…コイツともう一人の陰陽師は兄妹以上の絆で結ばれている。恐らくは婚約者とかそんな感じだろ」

「最愛の人を手に掛けさせるのですか。なんとまあ…えげつない」

「だろ？だが一番効果的だ。そんな訳だから…しっかり体、抑え

ておけよ」

吸血鬼は大口開けてゆらに噛み付こうとする。ゆらは身動きが取れないまま、首筋を露わにしている。

ゆら（嫌や！嫌や！お兄ちゃんと闘って殺されるなんて…そんなの、ここで殺された方が何倍もマシや！）

目尻に涙が浮かび、悔しさがこみ上げてくる。目を固く閉じて抵抗するも、強い力で抑えつけられて動けない。

ゆら（助けて…お兄ちゃん…）

ゆらが強く願った瞬間、空から誰かが降りてきた

ダダン！とコンクリートの地面に着地した人を確かめようと、ゆらはわずかに目を開ける。

そこにいたのは

昌彰「ゆら……。助けにきたぞ」

ゆらの危機ピンチに駆けつけた、昌彰ヒロだった。

続く

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師く？（後書き）

ここは『あとがきの部屋』。壁は真っ白でドアが一つついているだけの

なんとも無味乾燥な部屋だ。

ここにオレ、夢幻は毎回あとがきの進行をしている。

夢幻「今日はバレンタインデー。愛を捨て、哀に生きる男達が殺戮の権化となる日である」

零牙「おい作者、オレ達をここへ呼び寄せた意味を教える」

リユウ「そうだ。なんでオレは両手両足を鎖で縛られてここにいるんだ」

昌彰「FFF団なんて目じゃないが、オレ達の状況分かっているんだろ？」

朱雀「しかもなんでオレ達も？」

玄武「さあ…？」

青龍『怪我人まで喚んで何を始める気だ…』

騰蛇『オレの出番はまだ先だと思っていたんだがな…』

あとがきの部屋には七人（？）の男達。今日は用件を伝えず集合するようにといつてある。

夢幻「まあまあ。これでも見てみるよ」

男子勢「『？』」

夢幻「女子のみなさん。出て来てくださーい！」

ソロソロ…

男子勢「『！？』お前らなんているの！？どついう事だ作者（夢幻）

『！』

夢幻「ん？みんながバレンタインデーのチョコを渡したいと言うから一肌脱いだだけさ」

ミア「そうそう。作中じゃFFF団の監視厳しいし」

ミュ「……リユウを確実に捕まえられる」

ゆら「一人で渡すのなんか恥ずかしいしな……」

天一「チョコなんて使わずとも、朱雀と私は相思相愛なんですけどね」

太陰「初めて作ったけどなかなか上手く出来ないもんだね……」

匂陣「大丈夫だ。大事なはその人への思いだからな。なあ天后？」

天后「ええ」

夢幻「ん〜悪いけど、そろそろチョコ渡してくれない？」

女子勢「『はい』」

女子から男子勢へチョコが一つずつ渡る。



夢幻「……うん、目から水が落ちてるのは気のせいだろう！良かつたなお前ら！よく味わって食べよう！」

オレが目から心の汗を流していると、零牙がもらったチョコを凝視している……。そして

零牙「……ミア、このチョコ……今食べて良い？」

ミア「……いい、良いけど／＼／」

零牙「じゃあお言葉に甘えて……。いただきます」

モグモグ……

ミア「……どっつ？」

零牙「ん。お、美味しいよ／＼／」

ミア「（ホッ）良かった！」

昌・騰「『……（ジー）』」

夢幻「……二人共、気になるなら食べたらどうだい？」

昌・騰「『いただきます』」

ヒョイ、モグモグ…

ゆら・匂陣「あー！」

昌・騰「『……旨い！（ビッ！）』」

ゆら・匂陣「『（ホッ…）良かった』」

夢幻「他のみんなは食べないのか？」

青龍「『後で食べるぞ』」

玄武「『うむ。ゆっくり味わっていたかくとする』」

夢幻「『そうか。しかしみんな、チョコもらえて良かったね…』」

ドガンッ！

その時、あとがきの部屋の壁が爆破された。

一同「！！！？」

須山「みんなもらえて良かったね。だと…？そんなの、そんなの…」

FFF団「『良いわけあるかボケエエエ！』」

壁の向こうには怒りと嫉妬によって、すでに『人間』という種族の概念を超えた者…悲哀と憎悪の権化、『FFF団』がいた。

リユウ「うおっ冥府の使者『FFF団』！」

山下「コラボだがなんだか知らねえが…全員皆殺しじゃああああ！」

FFF団「『この男の敵がああああ！！』」

FFF団は武器を持って零牙達に襲いかかる。正直言ってハンパな

く怖い。

零牙「げっマジかよ……」

リュウ「今のコイツらを止めるのは至難だぞ！」

昌彰「とりあえず……逃げよう！」

一同「賛成！」

昌彰の案で零牙と朱雀、騰蛇の三人がFFF団数名と拳で語り合った後、颯爽と逃げていった。

有朋「追え！細胞のひとつかけらも残さず始末しろ！」

FFF団『『ぶっ殺おおおおすっつ！！！』』』

……

さて、FFF団からスルーされたオレは一人であとがきを締めることにした。

夢幻「ふう。騒がしい奴らなだ。さてと！読者の皆様、  
楽しみに〜」 次回をお

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？（前書き）

最後は甘々です…。

甘く書きすぎたか…？しかし後悔はしていない！

という訳で本編へGO！

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？

ダダン！

昌彰さんの式紙、白虎の風によってミアの所にたどり着いたオレ達。一人戦っていたゆらさんが吸血鬼に噛まれそうになっている。

昌彰「ゆら…助けに来たぞ」

オレの前で鋭い視線を吸血鬼に向け、すぐさま呪符を撃とうとする昌彰さん。しかし

「新手か…しかし遅いつ」

ゆら「…！お兄ちゃん！」

昌彰「つ！『裂破！』」

昌彰さんが吸血鬼に攻撃を加える前にゆらさんが噛みつかれてしまった。

しかし間髪入れずに昌彰さんが吸血鬼に攻撃。吸血鬼はゆらさんから離れ、オレ達と距離を取る。

オレ、「鈍器よ、その重みにて敵を奈落の底へ突き落とせ！」

オレは喚びだした鉄骨で吸血鬼を吹き飛ばし、ゆらさんから距離をとらせる。

昌彰「朱雀、白虎！」

朱雀「わかってるさ！」

白虎「承知」

昌彰さんが白虎と朱雀に指示をして吸血鬼を攻撃する。オレも魔術で追撃して吸血鬼を瞬殺した。

昌彰「っ！ゆらー！」

昌彰さんがゆらさんの所に駆け寄る。吸血鬼から解放されたゆらさんはぐったりしてて顔色が悪い。

昌彰「ゆらー！おい、しっかりしろ！ゆらあー！」

ゆら「く……じゅ……」



顔を引きつらせながらもゆらさんは意識を取り戻した。オレ達がホツと一安心したのもつかの間、ゆら「ぐ…うがああああっ!!」

突然苦しみ始めた。聞くからにとても痛そうな悲鳴を上げ始めた。

ゆら「お、おいゆら!!」

白虎『吸血鬼化が始まったのか!?!』

オレ「いや、これは…」

見るとゆらさんが吸血鬼に噛まれた箇所から黒い斑点が浮かんでいる。しかも、それは徐々にゆらさんの体を覆い始めている。

オレ「アイツら…助からないと思ってゆらさんをじわじわと苦しめて殺すことにしやがったか!!」

昌彰「くっ…呪詛なら天一に!!」

朱雀『それだけは止めてくれ昌彰!いくら何でもそれじゃあ天貴が死んじまう!!』

昌彰さんが新たな式紙を喚ぼうとしたのを朱雀さんが止めた。あの

様子からして移し身の術なんだろう。

昌彰「そうか…くそっ、なにか打つ手はないのか…」

式紙を喚ぶのを止め、苦しそうに呻くゆらさんを抱える昌彰さん。  
この状況を打開出来るのは……。オレの出番だな

オレ「いや、まだゆらさんを助ける方法はありません」

オレはゆらさんの顔を見ながら、どんな魔術かを判断し、助かる見込みがあることを告げる。

昌彰「！！それは本当か零牙！」

オレ「ええ。今、回復魔術の魔方陣を書くんで、ちょっと待ってください」

オレは持っていたチョークを使ってアスファルトの地面に魔法陣を描いた。でも…

オレ「……でも、このままじゃ使えない」

昌彰「なっ…。ダメなのか？」

オレ「オレじゃコレは使えない…」

そう、オレは通常の魔術は使えない。アスファルトに描いた魔法陣を見ながらオレは悔やむ。後は、危険な賭だ…！

オレ「昌彰さん、残りをお願いします」

昌彰「なっ…！オレじゃコレは使えないぞ！？」

オレ「大丈夫です。残りは魔力 - - 霊力を注ぎ込むだけで発動しますから」

昌彰「だが…っ!？」

その時、昌彰は気づいた。零牙は、顔を俯けているから表情はよく判らない。が、体を震わせ歯を食いしばっているように見えた。

この状況で、一番悔しがっているのは零牙であることを。

オレ「大丈夫です。昌彰さんの強い思いさえあれば、ゆらさんを助けられる。後は、任せます」



だ。

「???」「そうね：メリットはあるわ。もし居場所を教えてください、あなた達の大切な人を生き返らせてあげる」

女は優雅に足を組んで椅子にもたれかかる。妖艶な笑みを浮かべる。

「悪いが、そんな話は信じられない。人を生き返らせるだと？バカバカしい。冗談も休み休み言え」

「???」「冗談なんかじゃないわ。あの人が蘇った暁には、必ず人は蘇る。どんな人でも、生前の記憶と一緒にね」

「だから、吸血鬼の居場所を教えろと？悪いが、なんと言われようが居場所を教える気はない。帰ってくれ」

男は手を振り女に『帰ってくれ』と催促する。しかし女は艶やかな唇に更に笑みを浮かべて

「???」「うふふ。そこまで嫌なの。ならば・・・」

「何度も言わせるな。いい加減帰ってくれ」

「……」言わせたくさせてあげるわ

「……」

男がいきなり心臓を抑えて倒れた。

「ぐっ……っ……あっ……」

「……」あらあら、心臓なんか抑えてどうしたの？

その様子を見て女は心底楽しそうな満足そうな笑みを浮かべる。

「……」

「……」うふふ。教えてくれるかしら？

「わかった……わかったから早く……！」

「……」

パチンと女が指を鳴らすと男は汗をびっしょり掻きつつも、ゆっく  
りと立ち上がった。

「???」うふふ。家畜の分際で人間に逆らった罰よ。さっさと教え  
なさい」

「くっ…。屈辱だ…」

「???」なにか言ったかしら?」

「ま、待て！教える、教えるからっ」

男が小声で愚痴ると、女は指を組む。男は怯えながら吸血鬼の居場  
所を教えることにした。

「あ、あそこの山。あの山の山中にいる」

「???」そうかしら?気配が感じられないけど」

「いつもは気配を徹底的に消しているが、近寄れば気配を感じられ  
る。と言っても薄くだがな」

「???」で、どうやって見つけるんだ?」

「霊力の気配が濃くなるほうに向かえば、吸血鬼の隠れ村に繋がる岩がある。そこを無理矢理突破すれば吸血鬼達がいる」

「???」で、どうやって従わせるのかしら?」

「わ、私は取引で従わせたただけだ。後は自分でやれ」

「???」ふう〜ん。ま、良いわ。目的の情報は集まったし。じゃ〜ね」

「ま、待て!」

女は立ち上がってその場から立ち去る。が、男が質問する。

「お前は一体何者だ、陰陽師でもない奴が、吸血鬼の気配を探ることなんてっ…!」

「???」そうね…冥土の土産に教えてあげるわ。 - - 私は魔術師。あなた達よりも高度な力を振るう者よ」  
女はそう言って去っていった。



……闇の中で、事件は大きく動いていく。

.....

オレ「おい。ミア、起きろ」

吸血鬼に襲撃されて数分後、オレ達は近くの公園にいた。

で、気絶しているミアを起こしている最中なのだ。

オレ「おい。起きろ」

ミア「うう……」

オレ「ダメだ。起きない……」

昌彰「そりゃいきなり吸血鬼に襲われたんだからな。無理もない」

いくら揺すってもミアは起きない。さてどうするか……。

ゆら「ど、どうにか出来るやる？零牙君？」

昌彰「あまり喋るなゆら。傷口に響く」

ちなみに、ゆらさんは一時的に吸血鬼化したせいで昌彰の背中でごったりしてる。

オレ「そんな事言われても…。仕方ない。最終手段だ」

仕方ないのでオレはミアの耳に口を寄せて、こっ囁いた。

オレ「早く起きないとキスしますよ〜」

ビクン！とミアが小さく体を揺らし、みるみるうちに顔が赤くなっ  
た。

オレ「……おい。起きてんのはわかってんぞ」

ミア「……すう、すう（ま、まだかな？）／／／」

オレ「……昌彰さん、ゆらさん、ちょっとあっち向いてください」

昌彰「あ、ああ……」

ゆら「だ、大胆なんやなあ……」

昌彰さんとゆらさんが背中を向いた後、オレはミアに顔を近づけていった。

オレ「さて、眠り姫を起こしますか……」

ミア「すう、すう……！（キ、キターッ）（（）

オレの唇とミアの唇が合わさ……

オレ「本当にすると思ったのかバーカ」

……る少し手前で唇を止め、デコピンする。するとミアはガバッと起き上がって

ミア「むっ……（怒）」

むくれた。ああ……可愛いなあ……

オレ「おはよミア。よく眠れたか？」

ミア「…ぶう」

オレ「ったく…」

ミアがむくれているので、オレはミアに抱きつく。

ミア「ちよっ…レイ！／／／」

オレ「無事で良かった…」

ミア「はうう…！！／／／」

ミアが更に顔を真っ赤にして俯く。ああ可愛い…本当にキスしちゃうそつだ。

オレ「さてと…こんなところでいちゃつくのは止めにして、ホテルの情報を見せてくれないか？」

ミア「…うう…（キスして欲しかった）」

ミアがとても残念そうな顔をしながら、調べてくれた事を話してくれた。

-----

零牙「…なるほど。予想通りだ」

「「「え？」「」

零牙がそう言うとミア達は驚いていた。警察組織が解けないトリックが12歳の少年に解けたのだから。

昌彰「ま、まさかもトリックが分かっているのか？」

零牙「まあ大方。最初に話を聞いた時からね。ワイヤーなどを使わず、被害者の部屋に行く『隠された道』が」

ミア「それって一体…」

オレ「ま、それはまだ秘密だ」

零牙は片目を瞑ってそう言う。昌彰はちょっと自分で考えてみる。

昌彰（事件のあったホテルの共通点と言えば、被害者の部屋が道路に面している事ぐらい。零牙はそれだけで事件を解いたのか？）

考えに集中するが、一向に考えが浮かばない。昌彰は潔くトリックの答えを諦めた。

昌彰（ま、後でどういつトリックなのか教えて貰えば良いか…）

零牙「今日はもう帰りませんか？ゆらさんの容態もそうですが、何より疲れた…」

そう言うと零牙は大きな欠伸をした。昌彰が時計で時間を確認すればもう結構な時間だった。

昌彰「そうだな。今日はもう良いだろ。後少しで事件も解けそうだし」

ゆら「まさかこんな早く事件が解けるとは思わなかった…」

ミア「たった1日で事件解決しちゃうなんてね…」

零牙「ミア〜早くホテルに帰ろっぜ？もうクタクタだ…」

ミア「はい」

こうして零牙とミア、昌彰とゆらは別れたのだった…。

.....

そうしてホテルに戻った零牙とミアは…

零牙「疲れた〜！はぁぁぁ…」

零牙が盛大にベッドにダイブし、気を落ち着かせる。ミアは仰向けに寝た零牙にの横に寝た。

ミア「ねえレイ」

レイ「ん〜？」

ミア「キスして」

レイ「んなっ！？／＼／」

零牙は思わず飛び起きる。ミアもゆっくり起き上がって、言葉を続ける。

ミア「公園の答えはムカつくから今キスして。今なら2人つきりだから良いでしょ？」

零牙「あ、あのなミア…（考える！この場を凌ぐ会話を考える！）」

零牙は赤面しながらも必死に頭を回転させる。本当は零牙もキスしたいのだが、自分がスパイだという事実がネックになって、ミアとキス出来ない状態なのだ。

ミア「なに？」

零牙「良いかミア、キスって言うのは〴〵誓いだ。そうやすやすとやって良いものじゃないとオレは思っている」

ミア「うん。じゃあ何か誓って？」

オレ「いやいきなり『誓って？』言われてもな…」



ミア「じゃあ、一生私を愛して。…誓ってくれる?」

オレ「はう！（出来る！出来るんだけど出来ないっ！スパイだからこれ以上親密になっちゃうと後々大変だし…）」

ミアの言った一言で本気で気持ち揺らぐ零牙。スパイの悲しい性さがである。

ミア「…誓えないの?」

オレ「う…!」

雅の無垢な瞳に困ってしまう零牙。それを見たミアは残念そうな顔になり

ミア「そうか…無理なんだね…?」

零牙「いや無理っていつかなんて言うか…うわっ!」

ドサツ、業を煮やしたミアが零牙を押し倒した。そしてそのままマウンドポジションを取って…

ミア「……本当はレイにしてもらいたかったけどしょうがない。こ  
うなった私が一方的に……！／／／」

零牙「ちよっ、なんで今日は強気なんですか雅さん！／／／」

ミアがポジションを取って零牙の顔に徐々に近づいていく。そして  
今回は二人の唇が――

「失礼します。お客様、花瓶のお花をお取り変えに……」

そこへタイミングよくクラークがやってきて、二人の様子を見た。  
一、二秒の沈黙のあと

「申し訳ございません。どうぞ、お続きを……」

零牙「ちよっ！気まずいから！なんかオレ達、アンタの性で気まず  
くなっちったから！この空気どうかしてから行ってくれええっ！」

悲痛な零牙の叫びは空しく響いた……

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

一方その頃ゆらと昌彰の方では…

昌彰「…ふう。やっと一息付けたな」

ゆら「そ、そやね」

家に帰って体を休めることにした二人は夕飯を済ませ一息つく。昌彰が式盤で占うも、悪い相は出ていないので今日はしっかり休むことにした。

昌彰「ん？どうしたゆら。なんか顔が赤いぞ？」

ゆら「な、なんでもない！大丈夫や大丈夫…」

しかし、吸血鬼化の反動状態から回復したゆらが終始顔を赤くしっぱなしなのである。ゆらが心配でしょうがない昌彰は気にかけているのだが…

昌彰「いやでも、熱とかあつたら大変だし…」

ゆら「大丈夫やいうてるやる！」

昌彰「そ、そうか。なら良いが…」

ゆら「う、うう…」

ゆらは吸血鬼の一件を気にしていた。実を言うと昌彰が魔法陣でゆらを助けた時、魔法陣を通じてゆらに昌彰の想いが伝わっていたのだ。ゆらは意識を取り戻してから、ずっとその事を気にしている。

ゆら（うう、さっきからお兄ちゃんあのセリフしか浮かばへん！  
心で思った言葉だから真剣味があつて事実、嬉しかったけど！でも  
やっぱり恥ずかしい…っ！）

突然ゆらが顔を歪める。吸血鬼に噛まれた後が痛いのだ。当然昌彰は心配して…

昌彰「どうしたゆら？傷跡が痛むのか？」

ゆら「いや、もう収まったから大丈夫や」

昌彰「……なにかあつてからじゃ大変だ。ちょっと傷跡見して…」

ギョ

昌彰がゆらを心配して、吸血鬼に噛まれた後を見ようとしたら、ゆらが抱きついてきた。突然の事で昌彰は戸惑っている。

昌彰「ゆ、ゆら、どうした?」

ゆら「……」

ゆらは昌彰をしっかりと抱きしめていた。もしかしたら、二度と手には入らなかつたこの光景を、ゆらは昌彰の温かみを通じて実感していた。

昌彰「お、おいゆら? 顔がすごく真っ赤……うわっ!」

いつの間にかゆらは昌彰を押し倒していた。昌彰の言つとおり顔を真っ赤にしたゆらは、今あるこの『幸せ』を胸に抱きながら……ちよっとだけ、勇気をだして昌彰に言った。

ゆら「お兄ちゃん……ありがとう」

二つの影が一つになった。

続く

コラボ事件！　く孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師く？（後書き）

ミア「夢幻く」

夢幻「んだよミア」

ミア「なんでゆらさんはキス出来て、私は出来ないのさ！」

夢幻「そういう設定なんだ。ゴメン」

ミア「くっく」

ゆら「（ポン）大丈夫やミアちゃん。きっと話が進めば出来るから  
く」

ミア「くっく」

夢幻「さて、今回はこの辺で。感想をお待ちしてまゝ」

コラボ事件――孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師？（前書き）

とりあえず事件パートは今回で終了です。

コラボ事件！孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師？

現在午前10時、浮世絵町駅にて。

修「……で、オレのいない間に何があった」

不知木町から帰ってきた城崎先輩の第一声はそれだった。

オレ「特にこれと言ってなかったよな？」

ミア「うん。特には」

その先輩を前にオレ達はそう言う。実際にあの後は何もなく、普通に一緒に寝たのだ。

修「……本当にか？」

オレ「疑い深いなあ先輩は。本当に何もありませんでしたよ」

疑い深いなあ先輩。根拠でもあるのだろうか？



修「おつかしいなあ…椎の奴が『あの二人なら、修のいない間にキスぐらいしていると思うで』なんて言ってるやがったのに…」  
椎先輩の直感に戦慄を覚えた瞬間だった。あ、アブねえ…！なんて直感なんだ…！

修「アイツの勘が外れる訳ないと思うんだが…まあ良いや。それよりホレ。頼まれた資料、持ってきてやったぞ」

オレ「あ、ありがとうございます。……なるほどな」

オレが城崎先輩に持ってきてもらった資料とは、被害者のプロフィールと、最近の行動だ。その中に見覚えのある人物がいて、思わずにやつく。

ミア「と、解けたの？事件の謎が！」

修「もう解けたのか！？」

オレが笑った事で、ミアが嬉しそうな声を出すが…

オレ「いんや。大事な情報が欠けている。まあでも大方予想通りだろうがな」

後一つ、トリックの鍵である『監視カメラの映像』だけはどうしても手には入らないだろうとオレは踏んでいた。だからこのトリックかどろかは半信半疑で、自信がなかったが…。

修「それってもしかして…」

修先輩が資料をだした鞆の中を探る。そしてメモリースティックを取り出した。

修「この、監視カメラの映像か？」

零牙「なんでそれを…」

修「菜摘先輩が『これがあれば推理の助けになるでしょ？』って言って渡してくれたものだ」

オレ「菜摘先輩…恩に着ます！」

これで全ての鍵は揃った。

オレ「後はこのメモリースティックをチェックして、ゆらさんにこ

れを見てもらえば……」

全部カタが着く！

-----

同時刻。とあるアパートの一室にて

昌彰「……」

ゆら「……」

陰陽師、安藤昌彰と花開院ゆらの二人は黙々と朝食を食べていた。  
理由は簡単。それは――

昌彰・ゆら（キス、しちやっ たなあ……）

と、二人して恥ずかしがっているのだ。忘れていると思うが、この二人は夫婦である。

朱雀『オイオイどうした二人共？そんな黙々と食べて』

天一 『体の具合でも悪いのでしょうか…』

そこへ、十二神将の中でも特にラブラブな朱雀と天一が現れる。毎朝の光景と違っているので心配しているのだ。

昌彰 「いや、オレもゆらも体調は良い。万全だ」

天一 『ではなぜ…』

昌彰 「それは…」

朱雀 『……！なるほどねえ』

昌彰の表情と、歯切れの悪さを見た朱雀は状況を察したようでニヤリと笑う。天一はまだ訳が解らず疑問顔で止まっている。

朱雀 『戻ろうぜ天貴。病気とかじゃないなら大丈夫だろ』

天一 『でも朱雀…』

朱雀 『それに、それはお前でも移せん病気だよ』

そう言うと朱雀は姿を消し、霊符に戻った。朱雀の言葉を受けて、同じく状況を飲み込んだ天一も同時に姿を消す。

昌彰「アイツ…絶対他の神将達に言うつもりだ…！」

ゆら「なんか、私生活がバレバレなんやなあ…私達」

と、さっきとは変わって自然に話し始めた二人。朱雀のおかげで、さっきの空気はうやむやになったようだ。

そうやって二人が楽しく談笑していると

ピリリッ！

突然昌彰の携帯がなった。相手は零牙だ。

昌彰「はいもしもし」

零牙『おはようございます昌彰さん。ゆらさんの唇はどっつでしたっ？』

昌彰「んなっ…！／／／」

電話越しで零牙が昨日の事を一発で当てた。昌彰は一瞬、零牙が式紙でも飛ばしたかと思った。

零牙『その反応だと、した ようですね…良いなあ…』

この発言からすぐにカマをかけられたことに気付く。反応で様子を見抜く辺り、流石は拷問に長けたイギリス清教の人間だと思つ。

昌彰「……で、今日は一体何の用だ？」

零牙『事件の資料が届いたから、ゆらさんに少々確認したい事があったんですよ』

昌彰「ゆらにか？」

零牙『ええ。もしかすると、一気に事件が解決するかもしれません』

昌彰「本当か!？」

零牙の一言に昌彰は驚嘆の声を上げる。事件の事を話してまだ1日なので、異常な速さだと思う。

零牙『もしかすると、「、」ですよ？それに…』

昌彰「それに？」

零牙『いえ。続きは会ってからにしましょう。今が10時だから…30分後に、昨日の喫茶店で待ち合わせしましょう』

昌彰「わかった」

零牙「それじゃあまた」

そう言って零牙は電話を切った。

昌彰「ゆら、急いで着替える。零牙君と30分後に喫茶店に待ち合わせだ」

ゆら「え！？ちょっとお兄ちゃんいきなり言わんといて！」

.....

その頃、浮世絵町より少し離れた山中にて

「????」なるほど。あのジジイ嘘は付いてなかったようね」

とある女が山中でさまよっていた。否、吸血鬼を探していた。

「……しかしどうやって吸血鬼達を支配させようかしら。こんな事になるなら『ヴァーク』の奴を連れてくるんだったわ」

女は吸血鬼達の気配を捉えた。後は、探し当てるのみ。

「……さて、どうやって従わせようかしら……」  
山の中で、女は一人妖しく微笑む。

.....

オレ「……さて、メモリースティックの中身を見るかな」

昌彰さんに連絡をしたオレは、手に持った一つの小さなメモリースティックを見る。オレの推理が正しければ……

ミア「でもレイ、どうやってパソコンがないと読み取れないよ？」

オレ「大丈夫。仕事で使うちっさいパソコンで見れると思うから」



そう言つてオレは《13ある犯罪行為を犯す道具の一つ、黒いPC》を取り出した。

オレ「……………」

ミア「…どっつ?」

オレ「…よし、読み取れた。カーソルを合わせて…再生!」

メモリースティックから読み取つたファイルを開いて再生する。すると、画面が縦2つ、横3つに分割された。画面が表示された。画面は5秒〜10秒程で次のカメラの映像に変わるようになっている。

ミア「当たり前だけど…誰も映ってないね」

オレ「いや。画面よく見ると人がいるのはわかるぜ?」

オレがそう問いかける

と、ミアは画面をじつ…と目を凝らして右上の画面を指差した。

ミア「あ!もしかして…この角?」

オレ「そう。ここから影が伸びているだろ？まるで隠れているみたいに」

ミア「この影の主が犯人？」

オレ「ああ。どんな奴なのかは、ゆらさんが来てからだな」

そう言っただけはファイルの再生を中止し、昌彰さん達が来るのを待った。

…で、30分後

オレ「すみません昌彰さん。いきなり電話したりして…」

昨日会った喫茶店で、オレは昌彰さんに謝罪しておく。しかし昌彰さんは別段気にしてもいないようだ。

昌彰「事件が解決するためだ、気にするな。それで、ゆらに聞いた事って一体なんだ？」

零牙「あーはい。コレです」

そう言つてオレは、城崎先輩からもらった被害者達全員が最近接触した《とある人物》の写真を取り出す。ゆらさんが写真を手にとつて、《とある人物》の顔を凝視する。

ゆら「ん〜？この顔どこかで…」中々思い出せないようなので、助け舟を出す事にした。

零牙「もしかして、昨日会いませんでしたか？」

ゆら「そうや…。そう言われると確かに、昨日会ったアノ男に似ている」

昌彰「！それは確かなのかゆら！」

オレ「やっぱりな」

修「零牙、いい加減話してくれ。犯人はどうやって被害者の所に行つたんだ？」

城崎先輩が、待たされるのはもううんざりだと言う風に伝える。今のゆらさんの裏付けで確証が持てた。

オレ「そうですね。話しましょう。今回の事件のトリックを」



ミア「そんなベタなトリックを使ったの？」

零牙が淡々と事件のトリックを解き始める。使われたトリックがあまりにも単純だったので、ミアは意表を突かれていた。

零牙「単純だからこそこのトリックなんだ。誰でも考えつくから、自然と『こんな単純な筈がない』と思って、見過ごす。だから盲点になる」

修「…でも、どうやって監視カメラが映ってない事を知るんだ？」

昌彰「そうだ。監視カメラの映像でも見ていないと、カメラが機能していないかわからないじゃないか」

零牙「それは、事前にカメラが機能しないタイミングを調べていれば良い。例えば、『カメラBは、カメラAが動いてから二秒後に機能を停止する』とかね」

ゆら「でも、それって《一つでもタイミングを間違えたら失敗する》《うちゆう事やる？そんなの成功するんか？》」

零牙「そこは腕時計に細工して置くんです。監視カメラが機能していない時間を、カメラごとに色で分けておいて腕時計の文字盤に塗っておく。後は、秒針が色の塗られている間を通っているうちにカメラの前を通り過ぎれば良い」

零牙は昌彰達の反論もことごとく突破した。しかしここで問題が残る。

ミア「でもさ…どうやって監視カメラの映像のタイミングとか調べたんだろ。それに、被害者がホテルに泊まることだって…」

零牙「組織的で計画的な犯行だったら可能だよミア。全く持って恐ろしい犯行さ…。何せ、被害者達は数ヶ月前から狙われていたも同然なんだからな」

さらりと零牙は言うが、修とミアはその事実には恐怖していた。なぜなら、彼らもまた、組織的に人生を崩壊こわされた人を知っているからだ。

零牙「まあどつちにせよ後は警察の仕事だ。オレ達の出番は終わり。後で菜摘先輩にでも結末を教えてもらえば万事解決、結果オーライです」

そう零牙は事件の概要を締めくくる。しかし、何とも後味の悪い感じが修とミアの中に広がる。

修「なんか…後味悪いな」

零牙「大抵の事件はそんなものですよ先輩。それより昌彰さん、これでオレの逆刃刀は直してもらえますよね？」

零牙は昌彰の方を向いて質問する。昌彰は、その質問の真意を読み取ってこう答えた。

昌彰「ああ。実はもう直してある。鍛冶場に置いてあるから一緒に来てくれ」

オレ「わかりました。ってな訳でミア。先にホテルで待っていてくれ」

ミア「うん…。なるべく早く帰ってきてね？」

オレ「もちろんだよ」

ミアの心配する言葉に零牙は笑って答えた。そして、昌彰とゆらと一緒に昌彰の鍛冶場へ向かった。

- - - - -

オレ「悪いミア…。嘘なんか付いちまって」

昌彰「仕方ないさ。うそも方便と言っただろ？」

現在、オレは昌彰さんとゆらさんと一緒に歩道を歩いている。あの喫茶店で言った鍛冶場のくだりは全て嘘だ。ミア達を守り通すための嘘。しかし、オレは言いようのない罪悪感に襲われていた。

ゆら「私は、そこまで気にする事じゃないと思うで」

オレ「え…?」

ゆら「アンタの気にする事は、さっさとこの事件を解決してミアちゃんの下に帰ること。そやる?」

落ち込んでいたオレにゆらさんが声をかける。……そうだよな。それが一番だよな!

オレ「よし!ちゃっちゃとアイツらぶちのめして、ミアの下にさっさと帰るのが、オレのやるべき事だ!」

ゆら「そうや!あのムカつくエセ陰陽師を退治して、吸血鬼達も全



員滅するんや！」

そう、オレとゆらさんが盛り上がっていると、昌彰さんがオレとゆらさんの間に割り込んできた。

昌彰「盛り上がっている中悪いが、先に逆刃刀を返しておく。退魔の力も付加していた」

オレ「ありがとうございます。……やっぱり手にしっくりくるな……」

逆刃刀を握って感触を確かめる。壊れる前と同じ感触で、少し感動してしまつ。

零牙「……よし、感動の再会はこれぐらいにして、気を引き締めな  
いと」

逆刃刀を腰に差して眼前のビルを眺める。そう、オレ達のやるべきはたった一つ。

「「「殴り込みだ！（や！）」「」」

数分後…

ドタドタ…

「…最悪だ。まさか花開院の人間がこの町にいるなんて！」

陰陽師が着るような服を着た男は怯えていた。かつて自分が破門された花開院の人間がいることにただひたすら怯えていた。

「これじゃあ私のやってきた事が全て水の泡…」

ドバンツ！

ゆら「悪行なんて自然と水に帰するものや。堪忍しい」

「ひ、ひいひい！」

みつともない教祖の悲鳴と共に、新興宗教はあっけなく壊滅した。

…

オレ「さて、お前に聞きたい事がある」

新興宗教をゆらさんが数分で壊滅させ、オレはその元教祖の男に吸血鬼の事を聞き始めた。

オレ「吸血鬼の居場所を教えろ、さもなければ…」

「わかった！わかったから殺さないでくれ！」

元教祖の男が怯えながら話し始めた。しかしこいつ、ビビりすぎじゃないか？

「あそこだ！あそこの山に隠れて住んでいる！もう良いだろう！だから私を殺さないでくれ！」

オレ「おいアンタ、なんでそんなにびびって…」

フッ…

ゆら「！なんや！？敵襲か？」

昌彰「落ち着けゆら。急に辺りが暗くなっただけ…?」

オレ「嘘だろ…」

オレ達を襲った《異常》。その正体は…

オレ「なんで《夜》になつてんだ！」

外の景色が急に《昼》から《夜》に変わっていたからだ。今の時刻は1時。時間的に有り得ないはずなのに、外の景色は《夜》だった。

ゆら「一体どうやったらこんな出来んねん…」

昌彰「さあな…しかし嫌な予感がする。とんでもなく嫌な予感が…」

昌彰とゆらの予感は、残念ながら的中する事になる…

.....

青「若！大変でさあ！」

一方、リクオの屋敷では、リクオの側近である青田坊が慌ててリクオの部屋に入っていた。しかしリクオは冷静だった。

リクオ「うん。わかってる空が…」

青「ええ…。一体誰が…」

リクオ「わからない…。けど、嫌な予感がする」

リクオが星が瞬く夜空を見てそう呟いた。するとどこからか「若あゝ！」と叫びながら誰かが走ってきた。

黒「若！一大事です！」

リクオ「どうしたの黒田坊」

黒「何者かが、双良組のシマで暴れております！」

リクオ「なんだって!？」

黒「敵の数はざっと150。幸い、まだ死傷者は出ていませんがこのままだと…！」

リクオ「くっ…！四国妖怪を倒したすぐ後なのに…！」

リクオは考える。この間四国からきた妖怪達を倒すのに、共に戦ってくれた組のみんなをどうやって守るのか。しかし、全く考えが浮かばない。

リクオ「どうやって…。どうやってたらみんなを守れるんだ…！」

歯噛みしてリクオは不吉な夜空を睨みつける。しかし、どこからか声が聞こえた。

- - オイオイ、情けねえなあ《昼のオレ》。そんなの、考えるまでもないだろ？

その声の主をリクオは知っていた。自らの血に流れる人間とは別の  
- - ぬらりひよんの血が、それを語っていた。

- - みんなを守るのなら戦うしかない。ここは- - オレに任せておけ。

リクオ「……………そうだね。君に、任せるよ」

黒「……………リクオ様？一体誰と- -!？」

黒田坊は話の途中で息をのんだ。なぜなら、目の前にさつき別の妖怪、『ぬらりひょん』の血に目覚めたリクオが立っていたからだ。

夜リクオ「…青田坊、黒田坊。一つ頼みがある」

青「なんでございましょう?」

夜リクオ「組の中で、オレと共に戦う意志のある者を連れてきてほしい」

青・黒「はっ!」

青田坊と黒田坊は、同時に屋敷の中へ消えていった。

夜リクオ「…吸血鬼か。例えどんな奴であろうと、オレのシマを荒らす奴は許さん」

速水零牙、安藤昌彰、双良リクオ。

三人の主人公が、守りたいもののために、共に戦う時がきた。

続く

コラボ事件！〜孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師？（後書き）

昌彰「おーい夢幻？…たたくもつあとがきだぞ？…一体どこに…」

ヒラヒラヒラ…

昌彰「ん？上から紙が…えーっと何々？『眠いからあとがきよろしく』。…ってアイツ、唯一の仕事放棄しやがったよ。」

『次回でコラボ作品は終了です。主にバトルパートですが、結構重要な場面でも…』

結構曖昧だな。

『なお、完成度は期待しないでください』

何を今更言うんだか。

『朧月琥珀先生の、「浮世絵町 孫と孫の血を継ぐ者」もぜひ読んでくださいオススメです』

これは自分で言えよ。

『あー眠い。お休み…』



ってコレは冒頭でもやったよな！？つか、オレはこのために呼ばれたのか！？

『昌彰君がそろそろ役割を自覚しているだろうからそろそろ終わりにします』

オレはこのために呼ばれたのか！つか、このネタパクリだろ！！

『P S 朧月さんパクってごめんなさい。昌彰君を弄るのって楽しいですね』

ってオイ！両者ともオレを弄るのは止める！呪符で殺すぞ！

『ぐうぐう。疲れたよう』

コレをメモに書く必要は無いはずだ！つか夢幻！やっぱりお前は殺してやる！」

これからも『本格推理委員会』をよろしく願います。

コラボ事件！～孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師？（前書き）

コラボ事件最終回です！

コラボ事件！〜孫と孫の血を継ぐ者と白髪 of 魔術師？

昌彰「…くそっ！一体何が起こってんだよ！」

ゆら「わからへん！でも、とりあえずヤバい事は起こっていることは確かや！」

オレ「『アストロインハンド天体制御術式』か…。魔法陣が展開されちゃいないから、ただ景色を夜にしただけか？」

現在、オレ、昌彰さん、ゆらさんの三人は浮世絵町の中を走り回っている。今現在、空は妖しい夜空になり、町の人は――

オレ「町の人は全員気絶しているし…。無事なのはオレ達ぐらいか？」

昌彰「なんでオレ達だけ無事なんだ…？」

オレ「耐性の違いでしょう。オレ達は魔術や陰陽術でこういう《異能の力》に対して多少なりとも耐性がある。一般人にはない耐性があるね」

ゆら「どっちせよ、この状況を変えるには私らしかないっちゅう  
ことだね…」

まだ見ぬ敵を追い求めて、オレ達は街中を走り回る。

.....

「さあて、いい感じに追い立てし、最後の仕上げも済ませた  
し、どつするのかなあ？」

吸血鬼を探していた女は山の中で楽しそうに笑っていた。まるで、  
新しい玩具を与えられた子供のよう。

「速水零牙ア。アンタの実力を見させてもらおう」

不気味に笑う女は眼下にある街を見下して、一人の少年の動向を探  
る。

.....

一方、ぬらりひよんの血を覚醒した双良リク才率いる双良組達は…

黒「リク才様！」

夜リクオ「ああ…。見えたな」

女に焼き付けられた吸血鬼達を眼前にしていた。その数…約300。

夜リクオ「野郎共…覚悟は良いか」

リクオは自分に付いてきた百鬼達を見る。

青「覚悟なら、とっくに出来ています！」

氷麗「みんな、覚悟をした上でリクオ様に付いております！」

その問い掛けに対して、血気盛んな答えを返す百鬼達。リクオは自分の問い掛けが愚問だったと心の中で思う。

夜リクオ「…野郎共、いくぞ！」

『『『『おおーっ！』『』『』』』』

リクオを先頭に、百鬼達が吸血鬼達に武器を持って駆け出した。

対する吸血鬼達も和洋様々な武器を携えてやってくる。もちろん、

魔術を使う者もいる。

一見、数の多い吸血鬼達が有利に見える。が、

青「ふううんっ！」

双良組特効隊長、青田坊の拳の一撃が吸血鬼をまとめて二、三人吹き飛ばす。

妖怪仁侠一家、双良組は戦いの経験で数を補っていた。

青田坊だけでない。暗器を使って吸血鬼を倒す『黒田坊』、吸血鬼を凍らせて身動きを封じる雪女、『氷麗』も戦いに参加している。もちろんリクオも、祖父から譲り受けた長ドスの『祢々切丸』で戦っている。

「おおっ！」

黒「拙僧に武器で挑んでくるとはな…はあっ！」

氷麗「『我が身に纏し眷族よ氷結せよ！客人を…冷たくもてなせ！』」

「くっ…ガアアア…」

夜リクオ「はあああつ！」

「ギヤアアアアツ！」

戦いなれしている双良組が次第に優勢になり、すぐに吸血鬼との戦いは決着が着くかと思われたが、そうはいかなかった。

「ふ…ぐううう…！」

黒「…嘘だろう」

「が、あアアアアツ！」

氷麗「な、なんで!？」

「はあああ…！」

夜リクオ「…バカな。致命傷は与えたはず…」

傷を負って倒れた吸血鬼が復活し、再びリクオ達に襲いかかった。  
-。

- - - - -

一方、零牙達は…

オレ「…しっ！」

朱雀『はあああっ！』

「「ぐあああ…」「」

街中で二人の吸血鬼に襲われ、朱雀と零牙で滅していた。

昌彰「すまない零牙、朱雀、助かった」

朱雀『良いつてことよ』

零牙「礼には及びません」

零牙と朱雀はそれぞれの剣をしまい、昌彰達の方に向かう。



しかし…

「うがあああつ！」

倒したはずの吸血鬼が後ろから襲いかかってきた。

朱雀「なっ！？コイツ！」

零牙「確実に殺したはず…！？」

零牙は日本刀で倒した吸血鬼の体を見る。零牙が付けた致命傷となる傷が、跡形もなく塞がっていた。

吸血鬼達は自身のもつ膨大な魔力によって、致命傷の傷を一瞬にして癒やしていたのだ。

零牙（ヤ、バ、殺され…）

昌彰「臨める兵 闘う者、皆陣列れて前に在り」

零牙が吸血鬼に襲われそうになると、昌彰が九字真言を放って吸血

鬼を仕留める。しかし、その傷も見る見るうちに回復してしまふ。

ゆら「ど、どうなってるんや！攻撃が通じへん！」

昌彰「何かの術の効果か…」

零牙「でも、致命傷の傷を一瞬で治す魔術なんて…！」

ハツとして、昌彰と零牙は同時に空に広がる夜空を見る。まさか…

昌彰「この空…妙に不自然な夜空だと思っていたら、そういう事か…！」

ゆら「ど、ど、どという事なんやお兄ちゃん！」

昌彰「この不自然な夜空…。この夜空そのものが、術の正体なんだ…！」

朱雀『ど、ど、どやったらその術を解除できる！？』

零牙「術式を発動している術者を殺すか、術式そのものを破壊する

かすれば大丈夫ですが…！」

二人の吸血鬼の猛攻を防ぎながら三人は戦うが、如何せんすぐに回復してしまつので、キリがない。

昌彰「くっ！」「白虎」！」

白虎「喚んだか？」

昌彰「『風読み』で、あの夜空を作っている奴を突き止めてくれ！」

白虎「御意」

昌彰に白虎喚ばれた白虎は、ふわりと上空に浮かび、目を閉じて風を読み始めた。が、すぐに目を開けてしまい。

白虎「昌彰、すまんが無理だ」

昌彰「なに！？」

白虎「『風で突き止めようにも、双良組の妖気と吸血鬼の妖気が混じ

りあつて探せない』

どうやら昌彰達とは別の場所で戦っているリクオ達のせいで、白虎の風読みが上手くいかないようだ。

頼みの綱を絶たれた昌彰は悪態をつく。

昌彰「くそっ！」

そんな様子を見た零牙は、吸血鬼と戦いながら必死に考え続ける。

零牙（考える…。この状況を覆す、逆転の一手を！）

零牙は戦いながら気づいた。夜空の術式は破壊出来ない。だが、作り替えることなら出来る。

零牙「昌彰さん！」

昌彰「どうした零牙!？」

零牙「オレに考えがあります!一分…三十秒で良いので、吸血鬼の相手を任せて良いですか!」

昌彰「…わかった！白虎、頼む！」

白虎『御意』

零牙が吸血鬼の剣を弾いた瞬間、零牙の前に白虎が現れて、零牙の代わりに吸血鬼と戦い始める。

零牙は、昌彰達から距離を取って

零牙「ふう…。まさかコレを使う羽目になるなんてなあ…」

その手に握られているのは一冊の本。魔導書の原典だ。

零牙「魔導書『月の書』よ。我が声に応じて夜空の星を入れ替えろっ！」

魔導書の蒼い光と共に、夜空に変化が起こった…。

.....

その頃、双良組では…

氷麗「『呪いの吹雪 雪化粧』！」

「ぐあああ…！おおおつ！」

氷麗「きやあつ！」

夜リクオ「氷麗！」

倒しても倒しても回復し、襲いかかってくる吸血鬼相手に劣勢になっていた。そして今、雪女の氷麗が吸血鬼の持つ武器で斬りつけられる。

青「コイツら…何度も何度も…っ！」

黒「キリがない…！」

序盤は優勢を保っていた、青田坊と黒田坊の二人もしつこく襲いかかってくる吸血鬼相手に思わず愚痴る。

終わりの見えない消耗戦を誰しもが覚悟したその瞬間

ドン！

妖しい夜空が揺れ、星が動いて魔法陣を描いた。

夜リクオ（なんだ…？吸血鬼達の攻撃か？）

リクオは吸血鬼達の攻撃に備えたが、吸血鬼達の様子がおかしいことに気づいた。

まるで、吸血鬼達が動揺している…そうリクオは感じられた。

夜リクオ（まさかこれは…）

リクオの考えが急速に変わる。

夜リクオ（吸血鬼達の攻撃じゃ、ない！）

動揺している吸血鬼を次々切丸で切り倒す。回復は…しない。

吸血鬼達が回復しないことを確認したリクオは、自ら率いる百鬼達に聞こえるように大声で叫んだ。

夜リクオ「野郎共！！今のうちにたたみかけろおおおつ！！！」

その一言で我を戻した百鬼達は、一斉に吸血鬼達を攻撃する。少し遅れて我を取り戻した吸血鬼達達も再び応戦し始める。

しかし、全ての傷を癒している吸血鬼に対して、僅かながらも傷を負ってしまった双良組は僅かに押されてしまう・・・。

夜リクオ「くっ…！」

氷麗「リクオ様！」

リクオが体勢を崩しわずかに呻き声を上げたため、氷麗は慌ててリクオのそばに駆け寄ろうとする。

「グオオオオツ！」

背中を向いた氷麗を攻撃しようとして、体躯の大きい吸血鬼が斧を振り下ろした。

鈍重な武器が氷麗の頭上に突き刺さる・・・



「『鈍器よ、敵を永劫の闇へ突き落とせ!』」

が、突然飛来してきた鉄骨によって吸血鬼の体勢が大きく変わり、斧は氷麗に触れることなく空を切った。

リクオと氷麗は声の主を見ようと、声のした方向に顔を向ける。

そこには、

魔術師と陰陽師 - 頼れる援軍が立っていた。

- - - - -

昌彰「…さて、吸血鬼の妖気を追いかけてここまで来たが…」

ゆら「零牙君、大丈夫かいな？」

零牙「なん…とか…」

魔術で氷麗を助けた零牙は、魔導書の使用によって頭を抑えていた。今、彼の頭には魔導書の《穢れた知識》が流れ込んで来ているのだらう。

零牙「何、心配ないですよ。これぐらいならまだ戦える……！」

昌彰「そうか。無茶はするなよ」

零牙「そつちこそ」

昌彰は霊符を取り出し、朱雀、白虎だけでなく新たに勾陣、玄武、太陰の三人を喚んだ。

零牙は魔法名を名乗り、『ルンフェル肉体強化』の魔術を使用。髪が黒く染まり、目が赤くなった。

昌彰「さてと、準備万端。それじゃあ早速……」

零牙「吸血鬼退治と行きますか！」

零牙と昌彰、十二神将達は戦いの中に身を投じた。

「行けえええつ！あの子供ガキ二人の首を取れえええつ！」

「「「おおおつ！」「」」

吸血鬼達が零牙達の方に押し寄せる。……が、零牙と昌彰は敵の懐に潜って『退魔の力』を持つ剣で斬りつける。

零牙「遅え！」

昌彰「滅しろ！」

「ぐあああつ……！」

二人は襲いかかってくる吸血鬼次々と斬り倒していく。そんな二人を見て、恐れを成した吸血鬼達は…

「あっちの女のガキの方を先に殺れ！」

と、ゆらの方に襲いかかる。だが…

ゆら「滅しろ！妖怪！」

武曲、貪狼、禄存の三体の式神を喚びだしたゆらに、簡単に倒された。

「バカな！あのガキは弱いはずじゃ……」

昌彰「あんまりゆらを甘く見ると、痛い目に会っぞ吸血鬼！」

ガキン！と昌彰は吸血鬼の一人が持っていたサーベルを弾き、退魔の剣で斬りつける。

「ガアッ！このガキ…！」

零牙「よそ見してつと死ぬぞ！」

そこへ零牙の容赦ない『龍槌閃』が加わり、吸血鬼を倒す。お互いがお互いをフォローしあって、隙のない攻撃を繰り返す昌彰と零牙は、一撃で吸血鬼4、5人を一気に倒していた。

「く…、このっ…！」

夜リクオ「オレ達の事も忘れんなよ」

「へっ…ギヤアアアッ」

そこへ更に双良組も加わった。多少傷ついているが、戦局が傾いた上に『陰陽師に負けられない』という誇り（プライド）が働いて、再び戦い始めた。

昌彰「リクオ！怪我しているようだが大丈夫か！？」

夜リクオ「昌彰！こんな怪我でオレが倒れる訳ない事は知っているはずだ！」

零牙「さっきまで死にかけだった人が何を言うんだか！死んだって、知りませんよ！」

三人はお互いに背中を任せながら、次々と吸血鬼を切り倒していく。そこへ、先ほどの体躯の大きい吸血鬼が斧を振り下ろしてくる！

「死ね！ガキ共！！！」

リ・昌・零「「お前がな！！！！」」

斬！

斧が振り下ろされる前に懐に入り込んだ三人は、吸血鬼を三方向に斬る。コンビネーションは抜群だった。

「「「「キエロ！！！！」」」」

すると、二本の短刀を持った吸血鬼がリクオに、ロングソードを持った吸血鬼が昌彰に、ツーハンデッドソードを持った吸血鬼が零牙に襲いかかってきた。

リクオは顔目掛けて繰り出される短刀を後退しながらさげ、突いてきた所を祢々切丸で短刀を弾いた。

昌彰は振り下ろされたロングソードを障壁で砕き、相手を完全に無防備にした。

零牙は、二方向から攻めてくるツーハンデッドソードを刀と鞘で防御し、一旦ソードの攻撃が及ばない所まで逃げると、刀を鞘に収めて神速の抜刀でツーハンデッドソードを二本まとめて折った。

「「「あつ…！」「」」

一瞬で自分の武器を無力化された吸血鬼達は絶句する。そして…

リ・昌・零「「「終わりだ！」「」」

斬！

リーダー格の吸血鬼が倒された事で、吸血鬼達はたちまち戦意を喪

失し、戦いは終わった…。

-----

???「ウフフ…やっぱりやるわねえ速水零牙」

吸血鬼をけしかけ、ビルの屋上から双眼鏡で戦いを覗いた女は笑う。

???「ウフフ…でも、これならどうかしら？」

女が妖しく笑ったその時、地面が揺れた…。

-----

オレ「ぜえっ…ぜえっ…ぜえ…」

吸血鬼を全員倒したオレは、『**肉体強化**』の魔術のタイムリミット時間限界によって魔術が自動的に解除され、膝について倒れていた。

昌彰「だ、大丈夫か零牙？」

オレ「はあっ…ぜえっ…はあっ、な、何とか」

元々、オレには使いこなす事が出来ない飛天御剣流（通常は生存本能で全力の10%程を出すのが限界）を、『肉体強化の魔術』で無理矢理100%の力を発揮するようにしているため、タイムリミットである十分を過ぎると、オレは自立で立ち上がる事すら出来なくなるのだ。

オレ「はあっ、ぜえっ、はあっ…」

昌彰「ほ、本当に大丈夫か!？」

オレ「どうにか…ね…」

ゆら「何もなければええけど…」

四つん這いになって必死に呼吸しているオレは気づかなかったが、十二神将達は何やら上を見上げている。

朱雀『…なあ昌彰』

昌彰「なんだ朱雀」

朱雀『吸血鬼アイツ倒せば、この夜空は消えるんだよな…』



昌彰「ああ。そうらしい」

朱雀『じゃあ、何でこの夜空は消えないんだ？』

昌彰「なに！」

朱雀さんの一言で、オレも顔を上げて空を見る。空は・・・まだ星が瞬いていた。

昌彰「一体どういう事だ・・・？何で夜空が消えない！」

零牙「まさか・・・ぜえ、この夜空を・・・はあ、作ったのは、吸血鬼（奴ら）じゃない・・・？」

疲労と激しい頭痛で、ろくに回らない頭を回して考えようとする。

だが、

答えは考える前に現れた。

ゴゴゴゴゴゴッ！

黒「な、なんだあいきなり！」

氷麗「じ、地震…！」

昌彰「くっ…白虎、太陰！オレ達を空中に浮かせられるか!？」

白・太「任せる！（て!）」

身の危険を感じたオレ達は、風を操る神将である白虎さんと太陰さんの風で空中に浮かぶ。しかし、揺れはものの三秒ほどで終わってしまった。

ゴゴゴ…

勾陣「…ふう、揺れは収まったか」

玄武「ん…？今度は霧か…？」

黒「何ともまあ…濃い霧だな」

揺れは収まったが、今度はどんよりした霧がでてきた。ロンドンの霧よりも深いな、とオレは思う。

白虎『!!昌彰!!』

昌彰「どうした白虎？」

白虎『妖気だ!しかもかなり大きいぞ!』

昌彰「なっ…!一体どこから…」

ズウン!

突然、地響きが聞こえた。オレ達は恐る恐る昌彰さんの後ろの方を見る。

そこには

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!」

背丈が優に300メートル以上ある巨人の妖怪…『だいだらぼっち』が、いた。

- - - - -

地響きと共に突然現れたた巨人を見たオレは、とっさにどんな怪物か、想像出来なかった。

オレ「な、なんだありやあ…。巨人か…？」

昌彰「あながち間違っていないが、あれは『だいだらぼっち』って言う妖怪だ」

と、昌彰さんは教えてくれたが、意識が若干朦朧としている上に聞き慣れない日本語だったオレは…

オレ「だ、『ダライ・ラマぼっち？』」

白虎『今はボケてる場合じゃないぞ零牙君』

と、意味不明な言葉を作り、白虎さんにツッコまれた。記憶を遡って昌彰さんの言葉を正しく発音する。

オレ「すみません。…だ、『だいだらぼっち』？」

昌彰「そう、古来より日本に伝わる妖怪で、富士山を作ったり、浜名湖を作ったりしたと伝えられる妖怪だ」

ゆら「また、山や湖沼を作ったとされる伝記が多い事から、元々は国づくりの神やったんやないかとも言われているんや」

昌彰さんとゆらさんがスラスラとあの巨人について語る。他の人（妖怪？）も『そうそう。そういう妖怪』と無言で納得していた。

……なんだろう、この疎外感……。

昌彰「だが、なんでこんな奴がいきなり現れたんだ？」

夜リクオ「なんかの拍子に目覚めたんじゃないか？」

零牙「そんな事よりも、あの巨人はほつといて大丈夫……!？」

その時、急に背筋に悪寒がはしった。まさか、とは思って、夜空の魔術を作っている者の魔力を辿って見ると……

朱雀『どうしたんだ零牙君？顔色が悪いぞ？』

オレ「くそが……。そういう事が……!」

太陰「ねえどうしたの？いきなり慌て始めて」

オレ「どうしたもこうしたも…。あの夜空を作っている張本人は、あの妖怪なんだ…」

一同「えっ！？」

オレ「空の景色を変える。なんて、神様が天使ぐらいしか出来ないが元、神様なら納得がいく。……あの妖怪を滅しない限り、あの夜空はなくなるなら…」

この夜空の状態は、一種の結界の役割があるためどうにか破壊しないといけないのだが…

昌彰「そうか…。だが、あの巨体じゃ滅するのも大変そうだな…」

衝撃の事実には昌彰さんが顔をしかめる。確かに、あの巨体を倒すのは骨がいらそうだ。

夜リクオ「…オレに任せろ」

黒「リクオ様！？一体何を！」

夜リクオ「まあ黙って見てな」

そういうと、リクオさんは大きい杯に並々とお酒を入れ、吐息で水面に波紋を起こした。

何を始める気だ――？

夜リクオ「『明鏡止水・桜花繚乱』」

波紋の起こった水面が光ったと思ったら、突然巨人の体に青白い炎が灯った。これは――

夜リクオ「……この技は水面の波紋が消えるまでの間、相手の妖気を削ぎ落とす技だ。長く波紋が続けば続く程――」

「ガアアアアアッ！」

夜リクオ「――相手は妖気を失い、弱くなる」

「アアアアアアッ！」

青白い炎が灯った瞬間から、巨人の体がどんどん小さくなっていった。  
そして――

夜リクオ「…終わりだ」

あれだけ巨大な妖怪が、跡形もなく消え去った…。

――

???「ふうん。速水零牙は手を出さず、か。それにしてもあの二人もなかなかやるねえ」

ビルの屋上で零牙達の様子を窺っていた女は、予想外の収穫に口元に笑みを浮かべる。

???「『安藤昌彰』に『双良リクオ』か。一応気をつけておくかな。さて、速水零牙の戦闘データも取れたし、帰ろつと」

謎の女は姿を眩ました…。

――



昌彰「…本当に帰るのか？」

オレ「ええ。一応家族が待っていますし」

ゆら「もう少しゆっくりしていてもエエんちゃう？」

ミア「うーん。そうしたいけど、あんまりおばさん達に心配かけられないから…」

吸血鬼・だいだらぼつちとの連戦の後、オレとミア、城崎先輩は駅に来ていた。現在午後5時。用事が済んだので、ミアを直子さんの下に返さないとし、何よりミュがオレの帰りを待っている。

修「結局、オレは出番がなかったな…」

オレ「？何か言いましたか城崎先輩」

修「いや何も」

オレ「…ふん？」

なぜか城崎先輩の背中から哀愁が漂って来たのは…気のせいだろう。

昌彰「事件を解決してくれてありがとうな零牙君。助かったよ」

オレ「こっちこそ、逆刃刀を直してくれてありがとうございます  
昌彰さん」

今更ながら、オレ達は握手を交わしておいた。信頼と、友情の証として――。

修「零牙ー、ミアー。そろそろ電車来るからトイレ行っておけ」

ミア「はい。…ゴメン、ちょっとトイレ行ってくる！」

ゆら「お兄ちゃん、ついでに私も行ってくるわ」

城崎先輩の一言で、ミアとゆらさんがトイレに行き、オレと昌彰さんだけが取り残された。タイミングが良いので、オレは携昌彰さんとアドレスを交換しておいた。表の白い携帯と、裏の黒い携帯の両方に。

昌彰「…しかし、本当に良いのか？観光の一つもしないで」



昌彰「あ、デジカメ…」

オレ「待つて待つて乗りまああああすつ！」

こうしてオレはデジカメを昌彰さんに預けたまま、不知木町に戻ったのだった…

- - - - -

昌彰「…行っちゃった」

白虎「慌ただしいな。彼は」

玄武「うむ。すっかり忘れ物もしているしな」

朱雀「昌彰、そのデジカメに何が撮られてんだ？」

昌彰「さあ…。なんだろうな。よいしょっと」

昌彰と神将達は、零牙の忘れ物のデジカメの電源を入れて、データを覗いた。

「『『』』……『』』」

昌彰と神将達はデジカメのデータを見て思わず絶句する。感想は一つ『零牙君つてもしかして変態?』

が、何も言わずに電源を落とす。彼の世間体の為にも、これは早急に返さないといけないと昌彰は思った。

ゆら「なんや、もう行っちゃったんやなあ……。ってアレ?お兄ちゃんそのデジカメ……」

昌彰「零牙君の忘れ物だ。今度、返しに行つてやろう」

ゆら「そつやな」

魔術師と陰陽師。

似ても似つかぬ二つの存在は、ここでひとまず別れを告げる。

しかし、

彼らはそう遠くない時に、再び交差する……。

「コラボ事件 完」

コラボ事件！〜孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師？（後書き）

夢幻「さあ今回はコラボ企画の最終回……という事で特別版スペシャルにして  
みたZ E！」

零牙「どの辺が特別版なんだ？」

昌彰「そうだ。どこも変わってないように見えるか？」

夢幻「今回は『とある魔術の禁書目録』より、天才陰陽師、『土御門元春』を呼んでおります」

土御門「ドモドモ。正確に言えば『元』天才陰陽師、土御門元春  
さん参上ぜよ」

零牙「夢幻、一応言っておくが……」

夢幻「今回はこの四人でお送りします」

零牙「おい……」

夢幻「いやあ。やっと書ききったよコラボ企画」

土御門「お疲れ様だにゃー。ところで、昌まことちゃんの方の作者はどうなっているぜよ？」

昌彰「ぼちぼちだ。っていうか今、ものすごく気になる発言しなかったか？」

夢幻「オレも楽しみだ…。零牙と昌あ…。昌やんのコンビがどうなるのが気になるぜ」

昌彰「今、『昌ちゃん』ってわざわざ言い直したなオイ」

零牙「つつか昌彰さん、ゆらさんと同棲しているんだよねあゝ。羨ましい…」

土御門「落ち込む事ないぜよ零牙。お前は夢幻がどうにかしてくるぜい」

夢幻「どうにかしてやるよ。仕方ねえから」

零牙「ありがとう夢幻…！」

土御門「にゃー。良かったなー零牙ー。ところで昌ちゃん、一つ聞きたい」

昌彰「昌ちゃん言つな。何だ？」

土御門「昌ちゃんは、ギャルゲの中で一番どんな属性が好きぜよ？」

昌彰「……は？」

土御門「やっぱり『ロリ』だよにゃー！より正確に限定すれば『妹』！最高だにゃー！」

昌彰「待て、いつからオレがロリ好きになった」

土御門「え？違つもの？」

昌彰「断じて違つー！」

土御門「じゃあ『妹』かにゃ？」

昌彰「それも違つー！」



土御門「じゃあ何が好き何だにゃー？」

昌彰「オレはゆらが好きなんだ！他の何物でもなく、花開院ゆらと  
いう少女が好きなんだ！」

夢幻「赤っ恥確定のセリフだなオイ」

昌彰「うるせえ！」

土御門「なるほど、すでに一人の女に決めたか…。その精神は、上  
やんに見習ってほしいところだぜい」

昌彰「…？」

土御門「あー。コツチの話だから気にしなくて良いぜよ。しかし、  
『妹』と婚約者とは。この土御門元春、正直言って羨ましいぜよ」

昌彰「『妹』っても血は繋がってないが…。」

土御門「すなわち義理！むしろそっちの方が最高だぜい！」

零牙「それぐらいにしておけ土御門。昌彰さんが困ってる」

土御門「ハイハイわかったぜよ」

夢幻「…ふう。次回はいよいよ二期期辺をスタートさせようと思っています！」

零牙「とりあえずギャグパートを予定しています。それじゃあ次回会いますよー！」

一同「さようなら〜」

一学期早々…（前書き）

どうも夢幻です！

テスト中だけど、投稿しちゃった（　　）

……すみません。悪ふざけです。

ともかく本編へGO！

一学期早々…

今日は9月2日。夏休みが終わって、今日から通常授業が始まる日だ。

リュウ「ああ… かつたるい」

このオレ、早川龍之介はざわついている教室で机に寝そべりながら  
呟く。現在午前8時45分。そろそろアイツら来る。

ガラガラ…

オレ「おはよう」

ミア「おはようみんな」

一同『おはよう』

オレの友人、速水零牙とその彼女、管原雅だ。二人は家が真向かい  
なのもあって、一緒に登校してくる。

リュウ「うっすおはよう、お二人さん。相変わらず仲は良いようだ  
な」

零牙「羨ましいか？」

リュウ「妬ましいな」

一学期から変わらないやり取り。変わったといえば、二人の親近感か？なんか前より親密になって、色んな噂が流れて・・・ああ妬ましい！

零牙「そういえばリュウ。あの後、宿題はちゃんと提出したのか？」

リュウ「家に帰ってソッコで提出したから大丈夫だ。それよりお前はどうかんだ？」

零牙「あん？宿題なら昨日のHRでちゃんと出したぞ？」

リュウ「ちげーよ。雅ちゃんと同棲しているんだろ？」キスの感触はどうだったか』って言う質問なんだが」

と、二人に関する気になる噂の一つを持ち出すと、零牙は「また噂か…。」と一回ボヤいてから答えた。

零牙「同棲はしてねえよ。ついでにキスもしてねえ。」

リユウ「やっぱりそうか。須山達が何の動きも見せない所をみるとガセだ、っちゅう事はわかって《ガラガラ》：ん？小萌先生か」

オレ達六年六組の担任、月詠小萌先生が教室に入ってきた。その小学生と見紛うような幼児体型には不釣り合いな程大量のプリントを持って。

小萌「よいしょ、よいしょ…ふう〜。みなさんおはようございます」

大量のプリントを教卓に置いて、オレ達に挨拶した小萌先生は、黒板にとある言葉を書いた。

『木ノ花学園夏休み明け抜き打ちテスト』

波乱が幕を開ける…

.....

小萌「…と、いう事で今からテストを行います！はいはいみんな筆記用具出して、教科書をしまってください〜い」

と、このオレ『速水零牙』が所属する六年六組は、六組担任の名物  
ミニ教師である『月詠小萌』の突然の《テスト宣告》によって、全  
員が『え…？なにそれ拷問？』というような顔をしていた。

リュウ「ストップ！ストップです先生え！」

小萌「早川君どうしました？」

この、学生としては一大事をとと言えるテストのショックからいち  
早く脱したリュウがテスト用紙を配ろうとしていた小萌先生の動き  
を止めた。

リュウ「何が…と、いう訳で」ですか！なんで抜き打ちテストが  
あるのかちゃんと説明してください！」

『そつだそつだ！』

エマーゼンシー  
非常事態な事態に六組…もとい全クラスが同意した。小萌先生は少  
々困った顔になり

小萌「なんで、って言われましてもですね…。夏休み中に行われた  
職員会議で決まっちゃったんですよ」

リュウ「はあ？なんで？どうして？」

小萌「それはですね」

リュウの（むしろクラスのみんなの）質問に答えようとした小萌先生は――

小萌「……回想で説明するのです！」

『手エ抜くなッ！』

オレの全級友からツッコまれた。

――

「では、早速職員会議を始めたいと思います」

ここは木ノ花学園小等部の職員室。現在、職員会議が行われている。

……さて、ついなので木ノ花学園の職員会議の特徴を教えてください。



木ノ花学園は生徒、関係者を含めると軽く一万人を越すマンモス校だ。それ故、指導する先生の数も多い。

通常の学校より遥かに教師の数が多し木ノ花学園では、一学年ずつに職員会議が行われる。よって、現在行われている職員会議は、厳密に言えば『小等部六年の職員会議』である。

大抵は普通の職員会議と変わらず、学園内での様々な行事を先生方で会議するのだが、先生方から出た時案を審議する場でもある。

で、今回の職員会議で出た時案と言つのが

「生徒の夏休みの実力を計るために、抜き打ち試験の実施を提案します！」

と言つはた迷惑な時案だった。結果として採用。小等部で出された案件は、基本的に『小等部内』でのみ実施されるため、『小等部四年から六年』までの間で実施。それで終わるはずだった。

だが、そうはいかなかった。

小、中、高、と木ノ花学園を統べる理事長にこの事を報告したところ、『どうせなら中、高等部でもやっちゃおう！』と言って中、高

等部にも案件を提示。結果、実施することになった。

これは非常に奇異なことである。木ノ花学園では、校則によって《他学部への干渉は絶対に禁ずる》と書いてあり、例えば小等部の生徒は特別な状態を除いて、中等部や高等部の校舎はもちろんグラウンドにすら入れない。もちろん、それは教える側である教師にも当てはまる。

だが、理事長だけは全学部に干渉できる。

しかしこの権限は殆ど行使されない。なぜなら、余計な仕事が増えるからだ。

とにかく、理事長の嬉しくない権限行使によって、『木ノ花学園夏休み明け抜き打ちテスト』は、全学部に実施されたのである。

余談だが、理事長直轄である『本格推理委員会』だけはこの校則に縛られず、事件発生時は他学部へと自由に干渉出来る。

- - - - -

小萌「…という訳なのですよ。わかりましたか？」

リュウ「まあ、余計な説明もありましたが…。大体」

小萌「では、早速テストを・・・」

リュウ「しかしちょっとぐらいテスト勉強させてください！」

『お願いします！』

小萌先生の回想を聞いて概ね状況を理解したオレ達は、小萌先生に慈悲のお願いをする。しかし小萌先生にっこりと、聖母のような笑みを浮かべて

小萌「却下です」。野郎共！もし、カンニングやテストで赤点を取ったら、猿山先生の楽しい楽しい補習を受けてもらいますよ？」  
無碍にも却下された挙げ句、脅しを掛けられたオレ達は、一旦自分の席に座わる事にした。

リュウ（オイ零牙、少し話がある…）

オレ（なんだリュウ？えらく真面目な顔をして）

リュウ（カンニングさせてくれ！）

オレ（おいおい…冗談だろ？）

リュウ（頼む！お前しか頼れる奴いないんだよ！）

オレ（却下だ。自分でなんとかしろ）

リュウ（薄情者！大切な親友を助けてくれないのか！？）

オレ（オレ達って親友だっただけ？）

リュウ（そこで疑問顔するなあああ！）

と、目で会話するオレとリュウ。小萌先生に怪しまれる前に体勢を元に戻さないと…

オレ（さて、テストの方は問題ないとして…。とぼっちりを受けた先輩方は、一体どうなっているんだろうか？）

完全記憶能力を有する少年、速水零牙はそんな事を思っていた。

- - - - -

今朝、担任の熱血教師…ではなく、副担任兼補習室担当の鳥山が黒板に書いた言葉…『抜き打ちテスト』の文字。

学生にとって『試験<sup>テスト</sup>』の三文字を好む奴はいない。例にもよらず、オレ達はブーイングを実行するも鳥山の『…補習室に、行きたいのか?』という低い声でブルってしまったオレ達はブーイングを止め、テスト用紙が配られるのを待った。

だが…

鳥山「遠藤、これはなんだ?」

遠藤「……最新の、電子辞書です……」

鳥山「ふむ。私には、最新の携帯ゲーム機のように見えるが?」

遠藤「…いえ。外見はそう見えますが、中身は電子辞書なんです……」

鳥山「ふむふむ。では電源を入れても問題ないのだな?」

遠藤「いえ。それはちょっと……」

鳥山「む？見られてはまずい物なのか？それはいけないな。生徒手帳にはキチンと『学園に不要な物は持ち込むべからず』と明記してあるからな。教師に見られてはまずい物を、見逃す訳にはいかないな」

遠藤「……ソーデスネ。ドウゾ、見テクダサイ」

鳥山「では遠慮なく……。……ふむ。これは先月発売された最新ゲームだな。没収させてもらおう」

遠藤「アハハ……。オレノ、<sup>エデン</sup>楽園ガ……。アハハ……」

『抜き打ちテスト』とは別の、『抜き打ち検査』の被害を受けていた。

この案件は高等部内だけらしいが、オレのクラスには要注意人物が一カ所に集まっているからか、寄りにもよって補習室担当の鳥山が検査を行っていた。そして、さっきの遠藤みたいな被害者が男女問わずに続出していたのだ。

正直に言おう。……かなりまずい。

いや、別にオレは学園に不要な物を持ち込んでいる覚えはない。だが、あの鳥山の事だ。何かとこじつけて来る可能性がある。

そんな訳で、オレは内心ビクビクしながら鳥山の査定（間違っ  
てはいないはず）を待っていたのだった。

鳥山「さて次は - - 風間、お前だな」

虎「うい」

何てそうこうしていた間に、次はオレの悪友『風間虎之助』。通称  
『虎スケ』の番。虎スケは特に臆せず堂々と、かばんの中身を見せ  
た。

それに対する鳥山の第一声は…

鳥山「風間、お前はとりあえずここでジャージに着替える」

虎「いきなりっすか!？」

虎スケは、某ラノベの登場人物で『寡黙なる性識者』<sup>ムツリーニ</sup>と言われる人  
物と同等、又はそれ以上に『性』に關しての欲望が強い。

それは中学の時に、卒業していく憧れの先輩に『先輩、最後の思い  
出に乳揉ませてください!』と堂々と宣言し、そして容赦なく殴ら  
れたという伝説を作る程に。

流石に盗聴や盗撮みたいな真似はしていないだろうが、その代わりに学校に持って来ているエロ本、ゲーム機、漫画の量はすごいものだ。なので、見つかったら即没収の品々をどこかに隠しているのだろうが――アイツまさか。

虎「いや先生……。流石に女子がいる前で着替えるのはちょっと……」

鳥山「なんだ。私は普段あんな事言ってるものだから、別段女子の前で着替えるのに抵抗はないと思うのだが」

虎「ま、まあ。流石のオレも羞恥心という物がありまして……」

鳥山「だが、聞いたところによると、お前は小等部の女子小学生の前で堂々と制服を脱いだそうじゃないか」

虎「な！？え、いつの事ですか!？」

鳥山「む？この間の大掃除の時だ。確か、小等部の生徒から苦情が来ていたなあ……」

あー。零牙とリュウ君が虎スケをボコボコにしたアレか……。なんか話が歪曲してんなあ……。



虎「先生！いくらオレにでも節操というものが――《ガタン！》」

「おい虎スケ。なんか裾からゲーム機出てんぞ」

虎「あ、すまん。ありがとう」

と、虎スケは鳥山の目の前で堂々とゲーム機をポケットにしまった。

虎「とにかく！それは誤解なんですよ！」

鳥山「そうだな悪かった。とにかくお前はジャージすら着るな今すぐこの場で制服を脱げ露出狂」

…結局、虎スケはみんなの目の前で制服を脱ぎ、ゲーム機や細々したものを丸ごと没収されたのだった…。

ちなみに、オレと響さんは没収品はない。椎の奴は『携帯用安眠枕』を没収されていた。

鳥山「よし。それじゃあテスト用紙を配るぞ。毎回言ってるが、カンニングやその他不正行為を行った奴は、後で地獄の補習をマンツーマンで行ってやる。しっかりとその脳髓に刻み込んでおけ」

と、鳥山はおよそ教師らしくない言葉を言って、テストを配り始めた。

.....

キーンコーンカーンコーン…

小萌「は〜い。時間ですよ。鉛筆を置いて、後ろの人から前にテストを送ってください〜い」

リュウ「っはあ〜！やっとお昼だあ〜！」

現在、四時間目が終了してお昼休みへと差し掛かった。オレのクラスはオレとリュウを除いた奴全員が、すでに机に突っ伏して身動き一つしていなかった。

オレ「ミア〜。大丈夫か〜」

ミア「う…。。ど、どうにか…」

オレ「……その割には大丈夫そうに見えないが」

ミア「っ、次は何の教科…？」

オレ「次は算数だな。今は昼休みだから、お弁当食べて体力を回復しろ」

ミア「うう…」

ミアはむくりと起き上がって、のろのろとお弁当箱を取り出した。

ミア「……(ジー)」

オレ「……ん？どうした？」

ミア「いや……。なんでレイはそんなに元気なんだろうな。って思っ  
て」

ミアがお弁当箱を取り出したら、オレの方をジーっと見てきた。「  
ああ」と理由がわかったオレは

オレ「ヒント、オレの能力」

ミア「レイの…ああ。そういう事ね…」

試験中、オレは持ち前の『完全記憶能力』で問題を難なく解き、み

んなが苦しんでいる最中一度見直しをして早々に寝てた。

ミア「こういう時、レイの能力ってずるいよね…」

オレ「そういうな。次のテストじゃ苦手な所教えてやっから」

ミア「ぶう…」

何気ない平和な日常（昼休み）が、流れていく。

.....

虎スケ「オレの…秘蔵コレクションが…」

響「虎…あなたって人は…」

修「学校にまでエロ本持ち込むか？フツ」

昼休み、オレと響さんは持ち物検査で大量の没収をくらった虎スケの机に集まる。一方当の虎スケは、机に伏せてさめざめと泣いていた。

椎「…なあ修。こんな時、私はなんて声かければええねん？友人として慰めるべきなんやろか？女子として罵倒すべきなんやろか？」

修「罵倒しといてやれ。喜ぶから」

椎「わかった」

虎スケ「椎ちゃん…。オレを元気づけてくれるなら、ベッドの上でオレと保険の実技を…ブベラッ！」

虎スケは椎の渾身のパンチを食らって悶絶してた。…やっぱりコイツは変「態じゃねえからな修」

響「虎スケ。セクハラ発言もいい加減にしないと、修と一緒に警察のお世話になりますよ？…主に性犯罪で」

修「ストップ響さん。今の言葉はオレが虎スケと共犯者になってい  
る」

虎「兄貴！不出来なオレに、ご鞭撻のほどお願いします！..」

修「虎スケ。今すぐ黙るか、この小説から消滅するかどちらかを選  
べ」

一瞬、虎スケを撲殺してやろうかと思ったが理性で抑えた。アブナイアブナイ。

椎「しかし、安眠枕取られてしもたなあ。どないせよ」

修「もう一度作者に頼めば良いじゃねえか。あとがきで」

椎「そやな。そうしよ」

すでに作者を便利扱い。登場人物キャラクターとして、この力関係は如何なものかと思う。

響「それよりお昼休みなので、食堂に行きませんか？早く食べきって、予習もしたいですし」

修「そうだな……。じゃ、食べにいくか」

虎スケ「今日の日替わりランチは、どんなのなんだろうな」

椎「うー。行くんならよ行くで！」

高等部でも、相変わらずの日常が過ぎていく。

- - - - -

カチ、コチ、カチ…

時計の音が教室に響く。

カチ、コチ、カチ、コチ…

そして。

小萌「……はいはい。試験終了です。鉛筆置いて、後ろから前に集めてください」

五つ目の試験、算数の試験を終えてテストから解放されたオレ達。むう……。ここに来て疲労が…

小萌「今日はこれで下校です。部活もありませんので、速やかに下校してください」

『はい』

ザワザワ…

小萌先生の去り際の一言で、帰りのSHRも終わりみんながざわつき始める。さて…これからどうしようか。

ミア「これからどうする？」

ミアがオレとリュウに聞いてきた。それに対してリュウは即答した。

リュウ「オレとしては、適当に遊んでから帰宅してえ。帰るにはまだ早いしな」

オレ「じゃあ、ミユちゃんも誘ってどこかぶらつくか？」

オレの一言にリュウが「余計な事を！」と睨みつけてきた。おい。おい。

リュウ「あー。確かアイツは今日塾が…」

ミア「電話で確認したけど、ミユちゃん来れるって」

リュウ「管原は行動が早くて偉いなあ…！」



リュウは早々に諦めモードに入りおとなしくオレとミア、ミュちゃ  
んと一緒にWデートに向かった…。

- - - - -

鳥山「テストご苦労様。今日は部活もないからこれで下校だ。テス  
トは後日返却する。以上」

テストが終了し、現在SHR。そういつと鳥山の奴は教室から出て  
行った。これで放課後か…。暇だなあ

虎スケ「これからどうする？」

虎スケが呑気に聞いてくる。

修「久しぶりに遊びに行かねえか？」

響「そうですね。修は何かと忙しくて最近遊べていなかったそうで  
すし」

響さんがカバンを持って帰り支度を済ませます。やっぱりこの人にはか  
なわない。

椎「決まりやな。さーて、どこへ行くか？」

そしてオレ達は、くだらない会話をしながら教室を出て行った……。

平和な日常（まじ）が流れていく。

こんな日常がいつまでも続くと、

誰しもが、思っていた。

……

天井「浮世絵町の件、ご苦労だったオファニム」

オファニム「あら。あれぐらい何ともないわよ」

天井「そういうな。これで奴を手に入れる算段はついた。感謝している」

オファニム「うふふ。そう言ってくれて嬉しいわ」

天井「そこで、次はコイツの所に行つて欲しい」

オファニム「コイツのどこに行つて、どうする予定なの？」

天井「それは、後でのお楽しみさ・・・」

闇を手に入れんとする光が、静かに動き始める…

続く

一学期早々…（後書き）

零牙「どうも。とりあえず久しぶりの投稿ですが、スツゴいグダグダだったことを作者こと《夢幻》に変わってお詫びします」

雅「うう…。夢幻の奴、テストなんてものを出さないですよ…。自分が苦しんでいるからってさ…」

零牙「大丈夫。夢幻は『もう…。あの世に逝くわ…。疲れた…』って言うってたから。」

雅「現実になんかあったの！？まさか…」

零牙「いや、赤点とかじゃないらしい。ともかく『そこはツッコまないで！』と夢幻が言ってたからスルーな」

雅「…そう言われると逆に気になってくるね…。自殺寸前みたいにまで追い込まれるなんて…」

零牙「あ、大丈夫大丈夫。夢幻の奴、明日が『新訳』とある『魔術の禁書目録』の発売日と知るやいなや、『神はまだ…私を見捨ててはいなかった…！』って言って狂喜乱舞してたから」

雅「私の心配を返せ夢幻ンン！」

零牙「ともかく、次回投稿は少なくとも夢幻のテストが終わってからです。読者の皆様、今しばしご辛抱ください」

雅「次回もギャグパート（の予定）です！」

読書って大事だと思う(前書き)

さて、東日本大震災が起りましたが、とりあえず投稿します…。

……本編へGO!

読書って大事だと思う

オレ「ミア、おはよう」

ミア「ん…。レイおはよう」

本日9月6日。一学期が始まってから今日で4日目。一学期と同じようにミアと登校している。

ミア「レイ…」

オレ「どうしたミア？」

と、「いい天気だなあ」と思って呑気に空を見上げていると、いきなりミアが寄りかかってきた。  
どうしたんだろう？なんか顔色悪いし、具合でも悪いのか？

ミア「眠い…」

オレ「なんだ…。眠いのか…」

ただ眠いだけで聞いて、ホッと一安心。ミアの奴、また遅くまで手品の練習してたんだな。

オレ「ホレ起きろ。いつもの元気元気はどうしたよ？」

ミア「うにゅ…眠いよ…」

ミアが瞼をこする。ヤバい可愛い。そして何かわからんけど、オレの心臓がバクバクなり始めた…！

オレ「が、頑張れミア！学校着いたら寝れるだろう！？だから頑張ってくれ！」

でないと、オレの理性が持たない。

ミア「うん…。頑張る…（ギョツ）」

オレ「…！！…ミア…／／／」

オレが励ましたらミアがオレの手を握ってきた。なにこれ！？どこのバカップル！？



ミア「眠いよレイ……」

オレ「うう……！は、早く学校に行こうミア！／＼／」

ミア「うん……」

と、オレはミアの手を引いて、ずんずん道を歩いていく。ああ……！  
ちっちゃい子供みたいな態度のミアをもっと見ていたいけど、理性  
で押さえつけて学校へ向かった。

.....

で、学校

ミア「……すう。すう」

めったに見れないミアの態度を目の当たりにして、危うく理性の危  
機に陥ったオレだが、どうにか学校まで着いた。今ミアは、机に突  
っ伏して寝ている。

オレ「ふう。どうにか学校まで耐え切れた。」

リュウ「登校中に何があっただ…」

ミアを寝かしつけた後、机に座るとリュウが話しかけてきた。…うん。流石に異端審問に掛けられたくないなあ…。

オレ「特になにも。ただ、いきなりオレが発情しただけだ」

リュウ「何も脈絡なしに発情…。もう末期だな。早めにミアちゃんと別れた方が良くぞ？ミアちゃんのために」

と、リュウが気の毒そうにオレを見る。ふっ…。そんなアドバイスは無意味だ！

オレ「大丈夫。理性のたがが外れたところで、人気のないところで押し倒してキスするぐらいだから（キラッ）」

リュウ「（ボソッ）…そこまでやるんならキスで終わらせるなよ…」

オレ「???なんか言ったか？」

リュウ「特になにも」

リュウが最後にボソッと一言は聞き取れなかったが、まあ良いや。

ミア「すう。すう……」

オレ「…ヤバい。椎先輩の気持ちがあったような気がする」

ミアの寝顔を見ていると、毎回妙に興奮する。くそ…。人前でなかつたらキスするの…！

リュウ「…お前って、実は変態だったんだな」

そんなオレの一言を聞いてリュウが更に一言。ほっといってくれ。

とまあ、いつもと違った朝を過ごしていたら…

ガラガラ…

リュウ「ん？小萌先生だな」

オレ「…なんだ？あの大量のプリントは…」

小萌先生が教室に入ってきた。幼児体型には不釣り合いなほどの大量のプリントを持って。

…デジャビュ？

小萌「ヨイシヨ。ヨイシヨ…ふう。流石に疲れたのです」

小萌先生が教壇に大量のプリント物を置いて一息つく。そしてキツ！っと目を開かせて更に一言。

小萌「書き直しです！」

『『『へっ？』『』『』

再び波乱が幕を開ける…

- - - - -

リュウ「ちよっ…。先生！何が書き直しなんですか?!」

9月2日の抜き打ちテスト同様、リュウが小萌先生に質問する。対する小萌先生は少々苛立っているようで…

小萌「どーしたもこーしたも…。始業式の日に出してもらった読書

感想文の事ですよ。」

と、恨めしそうに割と低い声で話す。あれ？少々どころか…マジギレ？

小萌「一学期の終業式の日、先生は言いました…。『毎年、学校が参加している《読書感想コンクール》に提出するための読書感想文は、県指定の本ではなく、皆さんの好きな本の感想で構いません』と。なのに…」

と小萌先生はそこで一旦言葉を切り

小萌「…なのに、どーしてこんな突拍子ないような、ツッコミどころありまくりの読書感想文が出来るのですかーっ!!」

両手を振り上げて、怒り心頭の表情をする小萌先生。ただ、残念ながらあんまり恐くない。

リュウ「せ、先生の言い分はわかりました！ですから、そんな今にも泣き出そうな表情は止めてください！そして、オレ達の読書感想文のどこが悪いのか教えてください!!」

小萌「当たり前です！なので、今日の一時間目の国語の時間は、みんなの読書感想文のどこが悪いのか、徹底的に教えますので、覚悟しやがれなのです!!」

と言う訳で、一時間目の国語は、みんなの読書感想文のダメ出しタイムとなった。

.....

小萌「まずはコレ……早川君の感想文ですよ」

リュウ「おっ。オレか」

感想文ダメ出しのトップバッターはリュウ。リュウは自分の感想文が出されたのに関わらず、自信満々だ。

小萌「早川君。いくら読書感想文が面倒くさいからと言って、ネットの感想文をまるパクリするのは、ダメなんですよ？」

リュウ「…な、何言っんですか先生！オレが他人の感想文をパクるなんて、そんな事する訳ないじゃないですか！」

先生の超ド真ん中直球ストレートな言葉に、リュウは目をそらしながら否定した。……口元が引きつっているぞ、リュウ。

小萌「ふふ〜ん。先生を騙そうとしても無駄なんですよ。さっさとゲロツちゃった方が、楽ですよ〜？」

リュウ「オ、オレが何をゲロツちゃうんですか？先生」

リュウは先生に追求されるも、なお食い下がる。何故だろう。先生の笑みが黒く見える。

小萌「早川君」。『いくら先生でも、ネットの感想文まではチエツクしないだろ』とか思ってたのかもかもしれませんが、甘いのです！先生は、ネットの隅々までちゃんとチエツクしているのですよ！」

と、先生が自分の目を指差しながら、厳しい叱咤をリュウにする。

流石小萌先生、《木ノ花学園一の教師》と言われる事だけはあるな。

リュウ「あはは…。何のことだがサツパリデスネエ…。」

哀れ…。現実から目を背けるのにも限界があるんだぞ…？

小萌「わかりました。早川君がそこまで言わないでしたら、放課後に猿山先生と一緒に取り…コホンコホン！…お話を聞くのです」

リュウ「先生、今生徒に向かって『取り調べ』って言おうとしましてませんでしたか？放課後に何されんのか、今からすっごい不安なんですけど」

小萌「ではでは、次の人の感想文を発表しますね〜」

リュウ「何する気！？放課後オレは何されるんですか!？」

小萌先生の黒笑みと一緒にリュウが撃沈。まあ、自業自得だな。

小萌「次は山下君ですね〜」

山下「ふっ…オレのは、特におかしなところはないはずですよ？先生」

FFF団副会長の一人、山下が自信満々に言う。

小萌先生はハア…。とため息を吐いてから話し始めた。

小萌「とりあえず山下君。…頼みますから…」

そして、みんなの目の前で、山下の読書感想文を広げた。

小萌「……頼みますから、せめて文章にしてください…」

そして、広げた400字詰め原稿用紙の中から、見事な桃太郎のペーパークラフトが出てきた。



山下「どうです？見事な出来前でしょう？我ながら渾身の一作です」

小萌「……なんでそこで、山下君が自信満々に腕組み出来るのが、先生、不思議でたまりません……」

見事な出来前の桃太郎と犬と猿と雉のペーパークラフトを教壇に置いて、先生はまたため息を吐く。

小萌「大体、なんでこんなペーパークラフトなんて物を作ったのですか？先生に教えて欲しいです」

山下「なに。この作文って、コンクールに出るんでしょう？だったら、審査員の目に付くような物が良いかなあ。と思ってる……」。

それで、『もし、読書感想文の原稿用紙から、感想文が飛び出てきたら、ついでに審査員の目も飛び出て良いんじゃないかね？』という結論に達して、制作したんです。はい」

小萌「どうせ作るなら、文章で先生の目が飛び出ちゃうような、素晴らしい作文を書いてきて欲しかったです……」

と、先生は肩をすくめる。諦めてください先生。このぶっ飛んだ思考回路こそが、オレ達木ノ花学園六年六組の……アンタの受け持つ生



小萌「先生、一瞬有朋君の才能にビックリしちゃいましたよ。本当、どうしてこんな事したんですか？」

有朋「まあ山下と同様、審査員の目を惹きつける工夫をしようと考えて、結果としてこうなりました。」

有朋は堂々と小萌先生に理由を言う。山下同様、残念な思考回路だ。

小萌「さてさて〜お次は須山君ですね〜」

須山「お、オレか」

次はFFF団会長、須山章の番。副会長の有朋、山下があのレベルだから…一体どんなキテレツな感想文なのだろうか…

小萌「単純に、須山君のは字が汚くて読めませ〜ん。」

須山「ええ！？そんなあ」

期待していたが、予想以上につまらないオチだった。チッ！

リュウ「……須山、お前にはがっかりしたぞ……」

須山「それであつかりされるのもなんか理不尽な気がする……」

『『『はあ……』』』

須山「なんでみんな、オレから目を逸らすの？ねえ！ちよつと！？」

みんなを期待させといてすべつた罰だ。

小萌「さてと。今度は『自分は無関係いな。』とか思ってそうなの速水君の番ですよ」

オレ「思ってませんよ先生。つか、さっきから男子ばかりじゃないですか。女子のはいないんですか？」

別に読まれても問題はないのだが、面倒な事に巻き込まれたくない。適当に言葉を並べたら、同じ事を思った男子が『そうだそうだ！』とブーイングを始めた。

小萌「む。確かに、インパクトは男子の感想文が強かったんで、男子の感想文ばかりか言ってましたね」。

じゃあ、速水君繋がりで、管原さんの提出物に混じってたコレにしましょう。コレもまた、インパクトはありましたからね。」

……あれ？オレの一言でミアに危機到来？と、内心ヒヤツとしながら、隣の席でスヤスヤと寝ている自分の彼女を見る。

とりあえず、ゴメンと心の中で謝っておいた。

小萌「それじゃあ読みますよ。」

~~~~~雅の日記~~~~~

8月27日。（快晴）

今日はレイとシヨップینگに行った。教会の仕事が一段落して、ようやく時間ができたって言った。なんか大変そう…。あんまり無理しないで欲しいな。

商店街に来た私は、前から気になっていたペットシヨップに立ち寄ってみた。レイは目尻に涙を浮かべつつ、『嫌だ』を連呼しながら、私にしがみついていた。

普段、頼りがいのある姿と真反対の姿を見てドキツとした。可愛か

つたなあ…

レイは筋金入りの動物恐怖症らしい。ペットショップの店員さんから、小さくて、可愛い子犬を『触って見ますか？』と言われも『結構です…』と弱々しく返した。あんなに可愛いのに…

ペットショップから出た私とレイは、近くに店を構えてた移動販売のかき氷屋さんに行ってかき氷を…」

オレ「だああああああああっ！ストップ！それ以上はストップです先生え！」

ついに耐えきれなくなったオレが椅子から立ち上がって叫ぶ。は、恥ずかしくて全身から汗が出てきそうだ。

小萌「そうですか…。まあ、これ以上菅原さんの日記を暴露する訳にはいきません。なので、零牙の感想文に戻りますよ？」

アブねえ…！これ以上ミアの秘密を暴露されずにすんだ…！

っても、オレの感想文はどこが悪かったんだろう？ちゃんと自分で考えたし、文法は間違っていないだろうし…。

小萌「……とりあえず、速水君は夏休みの読書感想文に、何の本を選んだのか言ってみてください」

オレ「え？なんでですか？」

選んだ本の題名タイトルを言えば良いのか？でも、比較的まともな本を選んだつもりだけど……

小萌「いーから言ってください」

オレ「はあ……。わかりました」

オレは軽く咳払いし、みんなに聞こえるようにハッキリと、本の題名を言った。

オレ「『魔女狩りと異端審問　〜イギリスの黒歴史とその真実〜』
つていう題名ですけど」

『 『 『 …… 『 『 『 『

……え？なに、この居心地の悪いな空気。ちよつとみんな、オレを可哀想な子供を見るような目で見ないで欲しいんだけど……。

リュウ「……零牙、お前ガチでその本読んだのか？」

オレ「何言ってるんだリュウ。感想文に書いたんだから、ガチに決まってるだろ」

なにやらリュウが、恐る恐る聞いてきた。目がマジだ。

リュウ「……もう一度聞く。冗談とか、ウケ狙いじゃないだな」

オレ「ああ。……でもなんでそんな事を？」

リュウは「そうか……。ガチか……」と呟いてため息を突くと、オレの肩に手を置いて一言。

リュウ「怖すぎ」

……結局、本のチヨイスミスという事が、後々わかった。

.....

雅「……で、レイとリュウ君は、放課後だというのに補修室で居残りをさせられているんだ」

美咲「そう。帰り際に脱走しようとして、猿山に呆気なく捕まってるね」

現在放課後。午前中の授業を全部寝て過ごした私は、一時間目の国語の出来事を、美咲ちゃんと杏子ちゃんに話してもらった。

雅「はあ……。でも私の日記が読まれてたなんてね……」

杏子「い、意外とデートしてないんだね。ミアちゃん」

雅「うん……。レイは仕事で忙しそうだし、声掛けづらくって」

「こういうのを、『すれ違い』って言うのかな？うーん……」

美幸「……何の仕事？」

雅「神父の仕事だって。教会の運営とか、経理とか」

杏子「零牙君、もう仕事しているんだ……」

美咲「すごいね。でもミアちゃん、寂しくないの？」

雅「う…！」

美咲ちゃんが痛いところを衝いてきた。本当はすごく寂しい。家が真向かいとは言え、簡単に家が上がれないし、何より仕事で忙しそうだからあがりづらい。

美幸「…………寂しいの？」

雅「うん…。ほんのちょっと」

美咲「ミアちゃんって、意外と寂しがり屋？」

雅「うん…。そうかもしれない」

前に進もうと決めて、それからレイに会って自分の意外な一面に色々気づいた。寂しがり屋もそうだけど、独占欲や嫉妬深いところとか…。

杏子「ちよつと意外。あのミアちゃんがね…。」

雅「うん。自分でも思う」

冷たい表情で周囲を睨んでたあの頃と比べると、違いすぎて、違和感すら感じる。

でも、新鮮で気持ち良い。

美咲「そういえばミアちゃん。最近流行ってる噂、知ってる？」

雅「ううん。なにそれ？」

美幸「……もしかして、『屋上の幽霊』？」

美咲「そうそれ！これは、別のクラスの誰かが言っただけだね……。実は……」

物語は進んでいく。

様々な人の「思い」が交差する『事件』の中で

少年の古傷が再び抉られる。

- - 《生き地獄》が、幕を開ける。

続く

読書って大事だと思う（後書き）

夢幻「さて、現実には原子力発電所の爆発とかでヤバいけど投稿しておきます」

零牙「脈絡ねえなオイ」

夢幻「良いんだよ。元々投稿する予定だったし…」

零牙「まあ良い。次回は事件パートだな？」

夢幻「現実のほうが大事件だけどね…」

零牙「そこは気にするな。それでは皆様、感想等お待ちしております」

学校の幽霊（前書き）

事件パートです。

ちょっと無理矢理だったかな…？

学校の幽霊

美空「ねえ、帰ろうよ」

その日、美空は肝試しに来ていた同級生の四人に向かってそう言った。

司「大丈夫だって美空。どうせ噂なんだし」

四人の中のリーダー格、この肝試しの発案者である司は軽い口調で、フェンスをよじ登る。

朱美「美空。ほら。行くよ」

信司「早く来ないと置いていくぞ」

友人の朱美と信司はフェンスの向こう……木ノ花学園の敷地内から声を掛ける。美空は正直降りたかったが、一人でいるのは嫌だったのでしぶしぶフェンスをよじ登る。

朱美「しかし本当なのかなあ。あの噂」

司「だーから、噂に決まってんだろ。そんなのよ」

信司「というか、噂かどうかハッキリさせるためにわざわざ学校へ来たんだろ？」

フェンスを越えた先で三人が話している。

今日、美空達四人が来たのは学校に流れている噂話の真相を探るためだ。

その噂とは、『深夜、風見鶏の音楽室に女の幽霊が現れる』というものだ。

風見鶏とは、小等部にある特別教室塔で音楽室や美術室などが入っている古めかしい建物だ。建物の頂点に風向計である鶏の形をした『風見鶏』があるためそう呼ばれる。

美空「でも、どうやって風見鶏に入るの？あそこって確か、普段鍵がかかっているんじゃない？」

司「ああ。だから鍵を盗りにいくんだ。帰り際に窓を開けといたから、そこから入る」

信司「警備員のオッサン、いつも見回り適当だからな」

と、サラッと行った二人は校舎の方へ歩き始めた。朱美と美空もその後が続く。

そして四人は校舎前で一度立ち止まった。夜の校舎は、圧倒的な存在感を美空達に見せつける。美空は胸がざわつくのを感じた。

怖い。早く家に帰りたい

そんな思いが、どんどん美空の胸の中で広がっていく。

司「…さ、行くぞ」

司が一息着いて促す。朱美も信司もその後についていく。

美空も後に付いていこうとする。

…どっぴり。

生暖かい風が吹き、それに混じって誰かが囁く声が聞こえた。

美空「気のせい、かな」

美空はそう思って校舎に向かう三人の所へ追いかけてよつとする。

美空「あ」

美空は思わず声を上げた。校舎の屋上に人影があつたのだ。その人影は、美空が目視すると同時に、地面へ落下した。

美空は驚きの余り悲鳴を上げることすら出来なかつた。黒い塊となつた人影は、重力の引かれるままに、ドスンと鈍い音をたててグラウンドに激突した。

司「な、なんだ!？」

信司「いま、誰かが落ちてきて・・・」

美空が司達の下へ駆けつける。司達も、今の人影を見たらしい。

彼らはすぐさま駆け上がる。

落下していたのは、髪の毛の長い女だった。手足は不自然にねじ曲がり、頭部は地面にめり込んで大量の血を溢れ出していた。その女性が、もう生きていないことは明白だった。

・・・どつして...

ただ呆然としている彼らの耳に、声が聞こえた。
低く、唸るような声。

彼らは、身の毛もよだつような寒さを覚えた。嫌な予感がする。

・・・どうして...私は.....

声は続く。しかし、さっきまでであった死体がなかった。

彼らは恐る恐る屋上を見上げる。

そこには、人影があった。

そして、また地面へ向かって落ちてきた。

血しぶきが美空の頬を濡らす。そして再び、あの声が聞こえた。

・・・ねえ。どうして...

女性の顔が起き上がった。その目が、美空達に向けられる。

まるで、地獄へと通じる穴のように、どこまでも暗く、絶望に満ちた瞳だった。

- - ねえ。どうして死ねないの？

その女性が口から血を吐きながらいった。

美空「いやあ」

少女の悲鳴が、夏の夜を切り裂いた。

- - 『第二の事件』

- - - - -

あざみ「待ったかしら？」

真希「ええ。30分は待ったわ」

その日の夜、本格推理委員会顧問、木ノ花あざみはバー《セルペ》で、友人に会っていた。

あざみ「元気そうね」

真希「おかげ様で」

大学時代から随分印象が変わったと、あざみは思う。大学時代の彼女は、健康的な印象が強かったが、今は煙草を吸っている。化粧のせいかもしれないが、陰があるようにも見える。

ま、それでも美人な事には変わらない。

真希「とりあえず座ろう?」

あざみ「ええ」

そう言ってあざみが座ろうとすると、向かいの席に見知らぬ男性が二人座っていた。

真一「どうも。こんばんは」

ジャケットを着た三十代前半の男性が、礼儀正しく挨拶してきた。もう一人の、いわゆるB系の格好をした二十代前半の男性も釣られて軽く会釈する。

あざみは真希の肘を突いて説明を求めた。

真希「紹介するね。こっちのジャケットの人が真一さん。それでこ

つちの人が裕太さん。あざみを待っている間に仲良くなったの。二人も良いでしょう?」

あざみは「ええ」とだけ返した。

「何になさいますか?」

黒いエプロンをした、長髪のマスターが聞いてきた。あざみはいつものジンを頼んだ。

・・・これから起こる事も知らないで。

.....

マユ「.....お兄ちゃん。この白くて細いパスタは一体なんなの?」

オレ「.....さあ?」

現在、私速水零牙^{わたくし}は、彼女であるミアに夕飯を誘われ、城崎家にお邪魔している。

今日の夕飯は麺類だ。と言う城崎先輩の言葉を聞いて、オレは『パスタかな?』と胸に期待を膨らませていた。

.....だが、目の前にあるのは先ほどマユが言った通り、『白くて細

いパスタのような食物』^{もの}だった。ついでになんか透明な真っ黒い液体が入った器を目の前に出されたが…ナニコレ？

ミア「そうめんだよ二人共。知らないの？」

「ソーメン？」

聞き慣れない日本語を聞いたオレ達はつい聞き返してしまう。ソーメンってなに？どこぞの新商品かなんか？

修「……そうか。零牙は日本人だけど、育ちはイギリスだったんだよな……」

ミア「私、初めてそのことを実感したよ……」

城崎先輩とミアがなんか実感してる。え？だから、ソーメンってなに？

岳「そうか。そうめんを食べるのは初めてなのか二人共。たくさん食べて良いからな。遠慮なんかするなよ？私達は家族なんだからな」

オレ「お義父さん。やっとオレとミアの結婚を「それは認めていな

い」…くっ！」

岳さんはオレの冗談（半分本気だけど）にツッコむと、ソーメンを真っ黒い液体に浸してズルズルズル！と口へ運んだ。……なるほど。あれがソーメンの食べ方か。

見ると直子さんや城崎先輩、ミアも同じように食べていた。せつかなので、いただきましょう。

「いただきます」

箸を取りみんなと同じようにしてソーメンをいただく。……ふむ。ツルツルとして食べやすい。しかも美味しいな。

かかった
修

ミア（かかったね）

岳（逃がしはしない）

直子（ごめんね零牙君）

新たな新食感に出会えたオレは、黙々とソーメン食べ続けた。意外

に美味い。

でもソーメン。ソーメン…あれ？なんか思い出せないなあ。なんか聞き覚えはあるんだけど…あれ？

ソーメンを食べながら記憶を探る事15分後。沈黙に耐えきれなかった直子さんが『会話しよ！?』と言った一言で始まった会話の中で、城崎先輩がポロツと一言。

修「しかし。零牙達がそうめん気に入ってくれて良かったよ。これで暑中見舞いの分はなくなりそうだ」

ソーメンソーメン暑中見舞い…。暑中見舞い?…はっ！

マユ「…?どうしたのお兄ちゃん。その『面倒くさい事に巻き込まれたぜチクシヨウツ!』って言うような顔は?」

オレ「よくわかってんじゃねえか」

オレの視線の先にはドンドン！と部屋の隅に山積みになされたダンボール4つ。恐らく中身は…ソーメン。

……壮絶に嫌な予感がする。

ギギギと、オイル切れの機械のような動きで、オレは首を隣に座る少女に向ける。

オレ「なあミア。ちなみに聞きますけど……まさかアレを消費するのにオレ達呼んだ訳じゃ……」

修「悪い。ちよつとトイレ」

城崎先輩が極めて平坦な声でそう告げ席を立つ。……向こうでガチャ！と、玄関の鍵が掛かった音が聞こえたような気がしたのは気のせいだと思いたい。

ミア「……ねえレイ。困っている人を見たら救いの手を差し伸べるのが神父さんなんだよね……？」

一旦ソーメンを食べる事を止め、箸を置いたミアが顔を俯かせてオレに話しかける。オレの中で危険信号アラートがけたたましくなり始めた。マズい。

オレ「ま、まあな？」

ミア「実はね。ここ一週間朝昼晩毎日そうめんを食べて、とっても困っているんだ。……頭のいいレイならこの先は言わなくても分かるよね……？」

何でしょうこの他の話題を言わせないような沈黙。そして「イエス」としか答えられないような雰囲気。正直言って……オレは今、脅さ

れてるのか？

マユ「お、お兄ちゃん。なんか空気がスゴく重いんだけど…っ!？」

マユがなんか言っているが無視。先優先事項は、回答一つでオレ達の食事（明日）が変わる今の答えだ！

オレ（どうする!?!早く答えないとドンドン空気が…っ!気まずくなる…っ!）

ミア「レイ…?どうしたの?食べないの…?」

……残念な事に、今なら凍てつく波動も撃てるんじゃないかね?と思わせるほどのミアの冷たい一言によって、答えを導き出す前にオレの心が折れた。

オレ「い、いただきます…」

ミアがニコツと笑う。

……次の日から、オレのご飯は三食全てソーメンとなった…。

.....

真希「あ、ゴメン。ちょっとトイレ」

そう言つて真希はトイレに立った。すると、裕太が「あざみさんつて、彼氏とかいるの？」と聞いてきた。あざみは「いないわ」と返したら、裕太があざみを口説き始めた。もちろんあざみは適当にあしらう。

真希「キヤアアツ!!」

すると、突然トイレから真希の悲鳴が聞こえてきた。あざみ、真一、裕太、マスターの四人は慌てて女子トイレへ駆け込んだ。

あざみ「真希!!」

真希「あ、あざみ…。あ、あれ…!!」

あざみは怯えている真希の体を抱きしめると、真希の指差した方向に目を向けた。

そこには

「ひいひいっ!!」

長い髪を前に垂らした、制服を着た女がいた。バーのマスターが悲

鳴を上げる。そして・・

《死ねえ》

その一言だけ言うと、女は姿を消した。

そこにいた誰もが正気を保つことができずに、悲鳴を撒き散らした
。。。

.....

オレ「……もう、ソーメンやだ……」

ミア「逃がさないよ？」

リュウ「頑張れよレイ」

本日9月6日。現在放課後で、オレは机に突っ伏して、夏休みから
ずっと続いているソーメン地獄に頭を悩ませていた。もう、ソーメン飽
きた……。

オレ「ソーメンって応用力ねえのな……。味の濃い物に混ぜ込んで誤
魔化すしかないとは……」

ミア「日本の風習なんだよレイ。頑張って慣れてね？」

リュウ「諦めるレイ。慣れればどうにかなるぞ」

可愛い顔でミアがそう言うが、正直慣れたくねえ！と心の中で絶叫する。今日の夕飯もソーメンなんだろうなあ…。とちよっぴり泣きそうになっていると、

ピンポンパンポン

『本格推理委員会は至急理事長室に集合すること』

追い討ちをかけるように地獄の呼び出し音が聞こえてきた。……本
当に涙が浮かんできたよ……。

ミア「あざみ先生の呼び出しだね。レイ、行くっ?」

オレ「嫌だ！帰って白米を食べるんだ！」

ミア「はいはい」

リュウ「行ってらっしゃい」

ミアに襟首を掴まれ、引きずられるようにして教室を去るオレ。こ
こんとこっいてないなあ…。

.....

オレ「ういゝす…」

ミア「こんにちは」

逃走したい気持ちを必死に堪え、気分が低いまま理事長室のドアを
開ける。すると

椎・菜摘「ミアちゅあーん！会いたかつ（ブスッ）目が、目があ
ああ！！」「」

修・鈴音「」……」「」

ルン三世のダイブで突撃しようとした二人の先輩（変態）が悶絶
している光景が見えた。何やってんだこの人達…。

梢「ミアちゃん。零牙君。獣けだものが目覚める前に。こっちこっち」

オレ「あ、はあ……」

唯一ソファアに座っていた梢先輩が、冷静にオレ達を呼び掛ける。
……なんか久しぶりに梢先輩を見た気がする。気のせいかな？

梢「所詮。私は影の薄い使い捨てキャラ。……フフフ。」

梢先輩、作者も土下座しているんでその黒い笑みは止めてください。
……怖い。

あざみ「おー。みんな集まっているわね？」

そうしてソファアに座ると、ドアからあざみ先生が入ってきた。出
来うる事なら二度と会いたくなかった。

あざみ「零牙君？心で思っている事がまる分かりよ？」

毎回の如く疑問に思うが、どうして他人心が読めるんだアンタは。
そんな事オレでも出来ねえぞ？

あざみ「まあ零牙君の事は良いわ。それより今日みんなを呼んだ理
由を言うわね。……幽霊を見つけて欲しいの」

オレ「…は？」

修「またツスか先生」

オレは思わず耳を疑った。幽霊？なんでそんな物を探さないといけないんだ？

あざみ「そうよ修君。また（・・・）よ。」

修「一体今度はどんな噂なんですか？まさかまた音楽室の幽霊なんかじゃないですよね？」

あざみ「今度はあの時とは別の噂よ。今から説明するから、よおく聞いててね」

あざみ先生が今回調査して欲しいという幽霊の噂話を聞かせてくれた。

何でも、夜に小等部の校舎の屋上から延々と飛び降りる女の幽霊がいて、自分を見た人に『何で死ねないの？』と聞いているらしい。

あざみ「ざっとこんな感じよ。わかったかしら？」

鈴音「うん。分かるには分かったんだけど……」

菜摘「それで、私達はとうしろと？」

そう。ざっと説明されても肝心な所がわからない。あざみ先生は一体何を調査したいのだろうか？

あざみ「さっき言ったように、みんなにはその幽霊を見つけて欲しいのよ。ついでに除霊とかもね」

ミア「除霊って…そんな事、出来るわけじゃないじゃないですか」

あざみ「大丈夫よ。そこら辺は零牙君に任せるから」

オレ「は？」

いきなりあざみ先生に名前を呼ばれて思わず聞き返してしまうオレ。今なんて…

あざみ「零牙君は十字教徒。なら、悪魔払いとかできる知り合いとかいるんじゃないの？」

随分と自信に満ちた憶測だ。まあオレがそうなんだけど。

オレ「まあ…いるにはいますよ」

あざみ「そう。じゃ決定。零牙君あとよろしく。それじゃあ解散」

そう一方的に決めつけたあざみ先生は手をひらひらさせて理事長室から出て行った。……やれやれ。面倒くさい事になったなあ…。

椎「そんで？零牙君これからどうするんや？」

ロリコンの椎先輩は小等部に行くチャンスや！とか思っているのか、目がランランと輝いている。

オレ「そうっすね…。とりあえず今日は」

幽霊を見つけるにせよ、みんなと一緒にじゃ何かとやりづらいと考えたオレは

オレ「帰りましょうか」

瞬間、椎先輩が崩れ落ちた。

- - - - -

あざみ「もしもし。あざみだけど」

早足で理事長室を出たあざみは、携帯電話で真希に電話を掛けた。先程委員会のメンバーに説明している時に着信があったのだ。

呼び掛けても返答がない。携帯電話からは荒い息だけが聞こえてくる。

あざみ「もしもし、真希。聞こえてる？」

真希『……あざみ？』

震える真希の声があざみの耳に飛び込んできた。

あざみ「どうしたの？何かあった？」

真希『部屋に誰がいるの……。怖い。怖いよ。お願い。助けて……』

誰かがいる……。真希の勘違いだったとしても、昨晚の事がある。放っておけなかった。

あざみ「真希、今どこにいるの？家？」

真希『うん。お願いあざみ。うちに来て……！』

あざみ「わかった。すぐいくから。ちょっと待っててね」

あざみは携帯電話を切って走った……。

……

マユ「……で、お兄ちゃんは何が見えるの？」

オレ「……ああ。」
現在オレは小等部の校舎前にいる。空はすでに暗くなっており、月が登っている。

マユ「しかしお兄ちゃんがこつこつという依頼を受けるなんて……。意外」

オレ「言うなよ。仕方なくだ。」

小等部の屋上を見上げながら幽霊の様子を見る。……古い制服を着ている。ここの生徒だったのか？

マユ「どんな幽霊が見えるの？」

オレ「制服を着た…髪の毛の長い女。見たところ高校生っぽい」

マユ「……どんな気持ちを持っているの？」

オレ「……深い悲しみ。そして絶望……。」

見ただけでその感情が伝わってくる。この幽霊は、生前に何かあったんだろう。

マユ「悲しみと絶望……。早く助けてあげないと……。このままじゃ可哀想だよ」

オレ「そうだな……。マユ、万が一の事も考えて、とりあえず見えなように結界張つといてくれ」

マユ「はい」

マユが結界を張る。あの幽霊を助けるには、まずは幽霊の事を知らなくては…。

- - - - -

あざみは車を走らせて真希の家に行った。真希のマンションは九階建てで、コの字形をしている。

マンションのエレベーターは一番端にしかないらしく、長い外廊下を歩かなければならない。

二つ角を曲がった先の、一番奥の部屋が真希の部屋だ。

あざみは部屋の中に入った。真希は落ち着きなく周囲に視線を走らせ、何かに怯えていた。

あざみ「大丈夫？」

あざみは声をかけながら真希に声を掛けた。真希はあざみの顔を見るなり、ぐちゃぐちゃと表情を歪め、涙ながらにあざみにすがりついてきた。

真希「出たのよあざみ…！」

あざみ「落ち着いて真希。何が出たの？」

真希「昨日のバーの女…。うちはマンションの九階なのに、あの女は窓の外に立って笑ってた…」

真希はあざみの後ろにある誰もいない窓を指差した。すでに真希は恐怖で過呼吸になったように不規則に肩を揺らしている。

あざみ「大丈夫だから。落ち着いて深呼吸して」

あざみは、自分が模範をみせるように、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。

しばらくして、落ち着きを取り戻した真希は顔を上げて話を切りだした。

真希「私ね。本当に怖くて霊媒師に相談したの」

あざみ「霊媒師って…。信用できる人なの？」

真希「大丈夫。これから除霊してもらおうの。」

真希がすぎるような目で見つめる。あざみが判断に迷っていると、ピンポンと玄関からチャイムがなった。

霧山「こんにちはは工藤真希さん。お電話頂きました霊媒師の霧山きじやまと申します」

- - - - -

オレ「さてと…。あの学校で何があったのか、ちょっと調べるか…」

家に帰ってきたオレは、《黒いPC》を開いて昔、木ノ花学園あそこで何か起こった事件を調べる事にした。

オレ「狙うは警視庁のデータベース…。世界中のアクセスポイントを経由して…侵入開始！」

警視庁のデータベースに侵入してから、逆探知されるまでおよそ三分。それまでに知りたい情報を知らなければアウトだ。

オレは数々の罫トラップや壁ファイアウォールを、時には避け、時には強引に突破し、データベース（目的地）にたどり着いた。

オレ「ちよろいな。まあこんな綱渡りは二度としたくねえけど。それより事件のことだ。」

データベースの検索ワードに『木ノ花学園』と打ち込んで検索を開始した。

…… 検索結果は二件。

一件は『風見鶏』の音楽室で、一人の女子高生（17歳）が、鍵盤の蓋に指を挟んで骨折した事故。

もう一件は小等部の屋上から一人の女子高生（18歳）が自殺した事件。

オレ「これか」

オレは二件目の事件の方の情報をクリックして、詳細をみた。

オレ「被害者の名前は宮島理子^{みやじまうし}。当時は木ノ花学園高等部の三年生……。今から18年前、被害者は小等部の屋上から転落死。遺書はなし。状況から自殺と認定。なお、被害者は……え？」

そこから先は信じがたいものだった。正直言って認めたくなかった。無機質な画面にはこう書かれていた。

『なお、被害者は数ヶ月前に強姦の被害に遭う。その後捜査に協力した後、転落死。』

霧山「…なるほどわかりました。安心してください真希さん。恐らくあなたが遭遇したのは”浮遊霊”だと思われます」

真希の部屋を一通り見た霧山が、そう話し始めた。

真希「浮遊霊…？」

霧山「はい。大きく分けて霊は“地縛霊”と”浮遊霊”に分類されます。

“地縛霊”とはその名の通り、死後その霊が特定の場所や物に縛られている霊のことで、悲しみや憎しみ、怒りと言った負の感情によって現世に留まってしまふんです。

もう一つの”浮遊霊”とは成仏出来ずに彷徨さまよっている霊なのです。自分の死を自覚出来ていなかったり、自分の存在を誰かに知らせたい願っている場合が多いです。

恐らく、浮遊霊がたまたまバーにいた時、お二人がその姿を見たのでしょう。そして真希さんは、ご自分でも気付かないうちに、その浮遊霊を連れ帰ってしまったんでしょ…」

真希「あ…、あのっ！私…本当に大丈夫なんでしょうか…？」

霧山の説明の後、真希は霧山の肩を掴みますが、そのような視線を向けた。

対して霧山は「大丈夫です。安心してください」と繰り返す。

あざみは騙されたような気分になってしまった。必要以上の恐怖心を抱いてしまっていたために拍子抜けしてしまったのかもしれない。

だが、漠然とした不安が胸の内に広がっていったのも事実だった。

本当にこれで終わりなのか――。

続く

学校の幽霊（後書き）

夢幻「という事で再び事件パートです」

零牙「現実がヤバいくせに、よく投稿する気になったな……」

夢幻「うるさいよ零牙。ってか、そのネタもうやったよな？」

零牙「うっさい。まあ良いや。読者の皆様、感想お待ちしております
す」

夢幻「今更ですが、これからも『本格推理委員会』をよろしく願
いします」

消失する被害者（前書き）

事件パート2です。

ちょっとづづ投稿します…。

消失する被害者

次の日。『宮島理子』のことを直接警察に聞くために、オレは菜摘先輩と一緒に警察署まで来た。

菜摘「山下さんに何を聞きたいの零牙君？ミアちゃんとの下校をけつてまで重要な事なんですよ？」

オレ「それは秘密です」

ここに来るまでの間、菜摘先輩に何度も同じ質問をされた。が、適当に言葉を濁して返す。これはむやみやたらと話していいものじゃない。

そんなやりとりをしている間に警察署まで着いた。菜摘先輩に案内され、裏口から警察署の中に入る。中では、警察官が慌ただしく動き回っていた。

菜摘「山下さん。いますか？」

菜摘先輩は『捜査一課』と書かれた部署の中をのぞき込む。……なんかヤクザみたいな顔のおっさん達がいっぱいいる…。

山下「おお～菜摘ちゃんお久しぶり～」

少し待つと、部屋の奥からどっぴり太った男が出てきた。この人が

山下さんなのか…。一応警部らしいけど、そんな風には見えないなあ…。

菜摘「お久しぶり山下さん。今日は私の後輩が、山下さんに会いに行きたいって言うから連れてきたの」

オレ「菜摘先輩の後輩で、速見零牙と言います。お会い出来て光栄です山下警部」

山下「ははっ。『警部』だなんてよしてくれよ。山下って呼んでくれ。堅苦しいのは嫌いなんだ」

山下さんはオレの頭を撫でながら笑ってそう言った。人懐っこい笑顔だ。

山下「それで？君は僕に何のようかな零牙君？」

笑って聞いてきた山下さん。うーん…。菜摘先輩の前だと言いつらいんだよなあ…。

それに、やっぱり事件の事を本職の刑事に話すのは気が引ける。万が一あの事件を担当していたら、あまり思い出したくないもしれないし…

山下「…………ん？どうしたんだい零牙君。遠慮なんかしないで言ってみてごらん？」

オレ「それじゃあ、単刀直入に言いますよ……『宮島理子』の事件です」

名前を聞いた瞬間、山下さんの顔がニコニコしたものから驚きの表情に変わった。そして声を低くしてオレに聞いてきた。

山下「……その名前、どこで知った？」

オレ「今ここで言っても良いんですけどね……」

そう言っただけでオレは菜摘先輩を見る。山下さんも菜摘先輩を見て「ああ」と言った。事情を察してくれたらしい。

山下「菜摘ちゃん。零牙君は後で僕が送っておくから、君は先に帰っててくれないかな？」

菜摘「えっ、ちよっ…なんで!？」

オレ「すみません菜摘先輩。明日になったらちゃんとみんなに話しますんで、今日の所は、二二で」

菜摘「納得としないわよ。なんで話してくれないの?」

オレ「それは…まだ話せないからです」

疑問を持った菜摘先輩に、オレと山下さんと家で帰るように催促する。菜摘先輩も、最終的にはしぶしぶ納得してくれて帰ってくれた。

山下「…さて。向こうの休憩室で話そうか」

オレ「そうですね」

菜摘先輩の姿が見えなくなると、山下さんが小声でオレにそう言うてきた。さあ、どんな話が出てくるんだか。

- - - - -

零牙「さてと。色々聞きたいことはありますが、何から聞かせてもらいましょうかね…。」

山下「教える少し前に聞かせてくれ。どうして君はこの事件を調べているんだ？どうやって君は、彼女の名を知ったんだ？」

山下さんの低く、重みを持った声が、誰もいない休憩室に鋭い声が

響く。さすがに『ハッキングした』なんて言うわけにはいかないの
で適当にごまかす。

オレ「最初の質問の答えは、あざみ先生の依頼です。次の質問の答
えは、知り合いの新聞記者に頼んで教えてもらったんです」

山下「……なるほどね。君はそういう知り合いが多いのかな？」

オレ「これでも一応神父さんですから。人脈は広いんですよ？」

オレは笑って、嘘の説明に区切りを付ける。……どうやら、山下さ
んも納得したようだ。

山下「そうか……。じゃあ、どこから話そうかな……。」

山下さんが目を瞑って考える。やがて、うつすら目を開けた。その
表情には後悔の二文字があった。

山下「……事件の事を知っているなら、彼女が自殺する半年前に強
姦の被害に遭っている事は知っているね……？」

オレ「ええ。当時高校生三年生。もうすぐ卒業でしたね」

昨日読んだ調書には『アルバイトの帰りに車で拉致され暴行を受け、公園に捨てられる。顔には激しく抵抗した跡と思われる痣が複数見受けられた。』と、書いてあった。

被害を受けた後の彼女の顔写真は、正直見るに耐えないほど酷く、左目の周りには青い痣がいくつもあった。

……だが、そんな酷いケガを負いながらも、彼女の目には強い『意志』が宿っていたことが印象に残った。

山下「普通、被害者達はずらい記憶のために口を閉ざし、早く忘れようとするものだ。だがしかし……」

オレ「彼女は捜査に協力した」

山下「そう。強姦は親告罪で、犯人が複数である場合を除けば、被害者の訴えがなければ警察は動けない。
普段は泣き寝入りするところだけど、彼女は強い意志で協力してくれた」

オレ「……しかし、彼女は捜査中に自殺した。なぜです？」

捜査に協力したということは、自分の被害を世間へ公表したという事。

つらい記憶を世間に知られるという事は、相当な覚悟が彼女の中にあっただけ。なにがあったんです？教えてください、山下さん」

山下「……」

山下さんはゆっくりとオレに背を向き、窓の方へ歩いて窓枠に手を掛けると、ポツリポツリと事実を話し始めた。

山下「……零牙君は『セカンド・レイプ』って言葉、知っているかな？

事件後に警察の事情聴取や心無い人の誹謗中傷によって行われる精神的レイプの事だ。

………彼女の場合は、警察の取り調べがそうだった」

零牙「最低ですね……。警察がそんな事をしたんですか」

山下「ああ事実だ。当時、彼女の担当だったのは僕の相棒だった女刑事だったんだ……。しかし、捜査初期に外されたよ。丁度事件のあった次の日に、アパートから他殺死体が見つかって、僕と彼女はそっちに回されたんだ」

山下さんは悔しそうに唇を噛む。そして更に言葉を続ける

山下「代わりに彼女の担当になったのは新人の男刑事二人だ……。そこで彼女は酷い罵声を受けた。『自分から誘ったんだろ』『見られ

たかつたんじゃないのか?』『初体験はどうだった?』

……とても被害者に対する言葉とは思えない。そして……」

オレ「彼女は自殺した」

山下さんは小さく「ああ」とだけ告げ、歯を食いしばっていた。オレは胸に広がるどうしようもない怒りを静めるので精一杯だった。

腹が立つ。犯人もそうだが、彼女を死へ追いやった警察にも同じくらい、いやそれ以上に腹が立った。

山下「……くそっ!なんで僕はあの時反抗しなかったんだ!反抗していたら、彼女は……」

山下さんは拳を壁にぶつけて怒りをぶちまけている。今更になって、後悔の気持ちが押し寄せてきているのだろう。

オレ「……今更悔やんだって過去は変えられません。ならば、オレ達が今出来ることをやりましょう……」

呟くようにオレは言う。そうだ。どうあがいても彼女の命は戻らない。ならばせめて、その魂を救ってやるのが神父オレの役目だ。

山下「そうだね……。零牙君、事件のことは僕の方でも調べておくよ。

なにかわかったら連絡するよ」

オレ「ご協力感謝します山下さん。……もっ日が暮れている。早く家に帰んねえと……」

空はすでに漆黒に塗りつぶされていて、星がキラキラと輝いている。早く帰らないと、マユが心配するな……。

山下「じゃあ、僕が家まで送ってってあげるね。あ、いつでも連絡が取れるようアドレスも交換しておこう」

オレは山下さんと携帯のアドレスを交換し、家に帰った。

ちなみに、オレが家に帰った後、マユにガミガミ怒られたのはいまでもない。

- - - - -

樋村裕太はソファーでまどろんでいた。

裕太は、この何も考えず、何もしない水に浮かんでいるようなこの感覚が好きだった。

隣ではこの部屋の主である村田真一がコップに酒入ったを酒を飲んでいる。

裕太は父親と反りがあわない。どう話しかけたらいいかわからず、お互いに気まずくなる。家に帰ってもつまらないため、ここに住んでいるのだ。

真一も、『2LDKの部屋に一人じゃ虚しいからな』と、心良く住まわせてくれている。

- - いつか、恩返しをしたい。

そんな事を考えていると、突然部屋がフツと暗くなった。裕太と真一は驚いて辺りを見回す。すると、わずかに開いていたカーテンの隙間から、女の姿が見えた。

- - 制服を着た、髪の毛長い女。

- - 《死ね!》

女がそう叫ぶと、部屋の電気が明るくなり、女も姿を消した。

裕太と真一は互いに顔を見合わせ、悲鳴を上げて部屋を飛び出した。

- - - - -

……時を遡り、零牙が警察署に来た頃。あざみは……

あざみ「……くそっ！ やっぱインチキだったじゃないあの霊媒師！」
猛スピードで車を走らせていた。家に帰ろうと車を走らせていたら、真希から電話があったのだ。

また真希の部屋に女が出たらしい。部屋を出ようにも鍵が掛かって出れないとか。

ドアに鍵を掛けたのは真希本人だろうが、錯乱している今の状態じゃ何を言っても逆効果にしかない。そう判断したあざみは、車をUターンして、真希の家へ向かった。

昨日の嫌な予感が当たってしまった……。

あざみ「（ギリッ）あのインチキ霊媒師、今度会ったらただじゃおかないわ……」

猛スピードで車を飛ばした結果、すぐに真希のマンションに着いた。来客用の駐車場に車を駐車させ、すぐにマンションのエントランスに向かう。

あざみ「真希？真希？大丈夫？」

真希『…………あざみ？』

弱々しかったものの、真希の声を聞いたあざみはとりあえずホッとした。とりあえず、正面のオートロックのガラス戸を開けるよう真

希に言ったところで、誰かが後ろから近づいてきた。

あの男 - - 霊媒師の霧山だった。

霧山「あざみさん！あなたも真希さんから電話を…？」

あざみ「ええ。でもいったいなぜ？除霊はして、もう心霊現象に悩ませる事はないってあなた言ったわよね？」

あざみは霧山に食いかかるように敵意をむき出しにする。いつもの彼女を知っている者なら、違和感を抱いただろう。

霧山「…：…とにかく、彼女の部屋へ向かきましょう！」

霧山が開いたガラス戸の向こうに行く。悔しいが、霧山の言とおりにだ。と思ったあざみも走ってガラス戸の向こうへ駆け出す。

エレベーターののって九階のボタンを押す。

ピリリッ！

あざみ「真希！」

あざみがすぐさま電話に出る。

あざみ「大丈夫？今、エレベーターに乗ったところ」

真希「た、たすけ…」

あざみ「もしもし真へきやああああ！！」

悲鳴が上がったと同時に電話が切れる。あざみの中で、言い知れぬ不安が急速に広がる。

チン。という小さな音と共にエレベーターのドアが開いた。霧山が開くと同時に駆け出す。あざみもその後続く。

人が一人やっと通れるほどの狭い通路。

エレベーターを降りて真っ直ぐ外廊下を走り、三部屋通り過ぎたところで右に折れる。さらに三部屋過ぎたところでまた右に折れる。

霧山「真希さん！大丈夫ですか!？」

霧山がインターフォンを押しながら声を上げ、ドアノブをガチャガチャ回す。

霧山「……駄目だ！鍵が掛かっています！」

そう言った霧山を押し分け、あざみが前に出る。霧山はよろけたが、あざみは気にしない。

あざみ「真希？いるんでしょ真希！？」

ドンドンとドアを叩き、ドアノブをガチャガチャ回すも、鍵が掛かっている。携帯で電話を掛けるも、中からコール音がするだけで真希の声は聞こえない。

あざみ「くっ…！」

霧山「僕は管理人から合鍵を貰ってきます！」

霧山がエレベーターの方へ駆け出す。あざみはその間、必死に中にいるはずの真希に向かって叫び続ける。

数分後、霧山が管理人から鍵を貰って戻ってきた。あざみは急いで合鍵でドアを開ける。

あざみ「真希…！」

玄関を通り、リビングに向かう。電気は点いていた。争った形跡はない。

あざみはリビングに駆け込んだ。しかし、リビングには誰もいなか

った。もぬけの殻。

あざみ「あ…！」

あざみが声をあげ、床の一点を見る

。ベッド脇のカーペットの上。そこには、血で真っ赤に染まった携帯電話が落ちていた。まだ、かわいていない。濡れた血…。

あざみ「真希！真希！」

あざみと霧山は必死で家の中を搜索する。風呂場、トイレ、キッチン、ベランダ…しかしどこにも、『工藤真希』はいなかった。

あざみ「真希が、消えた…」

あざみは呟くように言い、そして膝から崩れ落ちた…。

.....

バー《セルペ》のマスターはトイレの便器をゴシゴシと磨きながら、バカバカしいと思っていた。

従業員を雇うお金はない。ギリギリの経営なのだ。

今まで金に困ったことなんてなかった。親に頼めばいくらでも湧いてきた。

しかし今では仕入れから接客、トイレ掃除まで全てやらなければならぬ。

いくら望もつが昔の生活が戻ってくるわけではないが、最近臨時収入があった。

過去の遺産とっていた物が、まさか金に化けるなんて思いもしなかった。

一気に出すと価値が下がる。チビチビ出して、小遣い稼ぎをさせてもらおう。

《チリンチリン》

すると、店の方から鈴の音が聞こえてきた。お客さんか？とマスターは店内を見るも誰もいない。不思議に思ったが、とりあえず掃除道具を片付けようとトイレに戻る。しかし

女がいた。制服を着た、髪の毛長い女が、トイレの壁からこつちを見ていた。

…《死ねえ！》

女はそう叫ぶと消えていった。マスターは恐怖に耐えきれず、悲鳴を上げて床に縮こまった。

.....

山下「………ここか……」

零牙を送った後、山下はあざみ先生に電話で指示された場所に着いた。コの字形をした、おかしなマンションだ。

管理人にエントランスのガラス戸を開けてもらい、四階の一番奥の部屋まで歩く。人ひとり通るのがやつとの、狭い通路だ。

奥の部屋まで着くと、あざみに部屋のドアを開けてもらって中に入った。リビングには、あざみの他に長い黒髪を後ろで束ねた男がいた。不審に思った山下はあざみに質問した。

山下「あざみさん、そちらの男性は……？」

霧山「こんにちはは刑事さん。私は霊媒師の霧山と申します。」

霧山があざみの代わりに説明する。

この人が霊媒師か……。山下は、ここにくる途中であざみから電話で聞いた今までの経緯を思い出しながらそう思った。

………霊媒師か。胡散臭いな……。だが今はそんな事は後回しだ。

山下「あざみさん、この部屋に何か、手がかりになるような物は残されてませんでしたか？」

あざみ「ベッド脇のカーペットの上にコレがあったわ……」

そう言ってあざみは、ハンカチの中から血液の付着した携帯を取り出した。山下はそれを受け取る。よく見れば、血に染まった指紋も残っている。

山下「（後で畠さんに検査してもらおうか……）あざみさん、この部屋の鍵はありましたか？」

あざみ「あそこよ」

そう言ってあざみが指差した方向には、クマのストラップが付いた鍵があった。

ピンシリンダータイプの鍵だ。このタイプの鍵は、鍵山が複雑な造りになっているため、複製が困難なのだ。

山下「窓の鍵は掛かっていましたか？」

霧山「はい。内側からしつかりと鍵が掛かっていました」

霧山が答える。山下は目であざみに聞いてみたが、あざみも頷いた。間違いはなさそうだ。

霧山「それに、例え窓からベランダに出たとしてもここは九階です。飛び降りたり出来る高さじゃありません。さっき確認しましたが、隣のベランダとも繋がっていません」

霧山が言葉を続ける。なら、他に可能性があるはずだ。人が消えるなんて有り得ない。

山下「エレベーターに乗っている間に連れ去られた可能性は？」

霧山「ありません。エレベーターからこの部屋の前に到着するまで、三十秒強。その間に真希さんを連れ出し、私達の前から完全に姿を消すなんて不可能だと言うことは、私より刑事さんの方が分かっていると思います」

霧山が淡々と事実を述べる。本人に自覚はないのだろうか、山下には皮肉に聞こえた。

山下「一つの可能性として言っただけです。それよりあなたは今日、どうしてここにいらしたんですか？」

山下は霧山に聞く。はっきり言って彼が一番怪しい。霊媒師なんて殆どがインチキだからだ。

霧山「私はつい先ほど、この部屋の主である工藤真希さんから『再び部屋に心霊現象が起こったから、もう一度除霊してほしい』と、電話で依頼されたためにここにやってきたのです」

霧山は淡々と答える。山下はその間、ずっと霧山と目や仕草を見ていたがどこにも不審な所は見当たらなかった。なら、次の質問だ。

山下「除霊。と言いますと、具体的にあなたはどんな事をするのですか？」

霧山「そうですね…。そうになると、まずは『死者の魂』の定義から説明しなければなりませんね…」

霧山はそう言っただけで私に幽霊の定義とやらを説得した。

なんでも『死者の魂』 - 俗に言う《幽霊》は、新種の妖怪や怪物ではなく、元は生きた人間の強い感情の塊のようなものらしい。

元は生きた人間なのだから、彼らと会話しそこに留まっている原因を知れば、その原因を取り除いてあげれば自然といなくなる。この事だった。

霧山「要は、私は彼ら（幽霊）を説得しているのですよ。私はこの方法で、何人もの魂を救ってきた」

霧山の説明は、正直胡散臭いと切り捨てるのには難しく、妙に説得力があつて納得してしまつた。

と、山下は思つた瞬間、急に部屋の明かりがフツと消えた。

山下（なんだ？何が起こつた…？）

混乱する山下の視界に、突然人の姿が飛び込んできた。

制服を着た、長い髪の女…。

薄暗い部屋の中で、窓のところにいる彼女だけが、発光して見えた。

…《死ね》

女がそう言つと、急に部屋の明かりが戻つた。急に眩しくなつたため、一瞬目を閉じる。そして再び目を開けた時には女の姿はなかつた。

山下（どこに、行った！？）

山下は窓を開けてベランダに飛び出る。しかし、そこには人のいた痕跡などまるでなかった。

霧山「追っても無駄ですよ。彼女は肉体を持っていない」

霧山が無表情のまま言う。何の迷いも感じられない。

これは怨念よって人が消えたのか――？

続く

消失する被害者（後書き）

夢幻「さあて、もう春休みだなあ……」

零牙「今のうちに沢山書いとけ」

夢幻「おう。色々おわたし、やっと安心して書けるからな」

零牙「それでは皆さん。次回更新お楽しみに」

幽霊が見える眼(まなこ) (前書き)

事件パート3です。

長かったな…

幽霊が見える眼（まなこ）

さて、さらに次の日。あざみ先生に『宮島理子』の除霊を頼まれて三日目。いつもの理事長でオレは、委員会のメンバーから昨日までの事を聞かれている。

……しかし読者の皆さん、ちょっと考えてほしい。

今回の除霊の相手、宮島理子は生前に強姦の被害にあっている。

そして、委員会のメンバーはオレと城崎先輩以外は全員『女の子』である。

話しづらい、言いたくない。という気持ちがあって、みんなになかなか話せない心境にオレはなっている。

そのため、現在オレは――

菜摘「零牙君。いい加減話さないと、右腕が取れちゃうよ?」

ミア「レイ?正直に話して。話さないと左腕が取れちゃうよ?」

うつ伏せの状態で見摘先輩に左腕を、ミアに右腕を極められて激痛の最中にいた。

ちなみに下半身は城崎先輩が重石となっていて寝返りを打てない状態。

つまりは、話したくても話せない状態だった。

オレ「ンーッ！ンムグググッ！ングーッ！」

菜摘「ホラ、早く話さないと！（グイッ）」

ミア「腕が取れちゃうよっ！（グイッ）」

菜摘先輩とミアが、両腕をもう取れるんじゃないかと思うくらい引っ張ってくる。もうここまでやると、ワザとやっているとは思えない。

オレ「ンーッ！ングーンググ（ボギッ）……ング（気絶）」

鈴音「……………ね、ねえ菜っちゃん？零牙君、なんか気絶してない？」

菜摘「え？あ……………本当だ。ごめん零牙君。加減間違えた。今直すね」

……………しばらくお待ちください……………

オレ「痛てえ……………両腕の感覚がまだ戻らねえ……………」

ミア「関節技掛けた私が言うのも何だけど、大丈夫？」

オレ「オレよりこんな寸劇を急に見せられた読者に謝れよ……………」

菜摘先輩に上手く入れてもらった肩関節をさすりながら言う。ミアの関節技の切れ味が増してきている……………。こりゃ下手に逆らえないな……………

菜摘「で、本題は忘れてないわよね？零牙君」

オレ「……………ハテ、何ノ事ヤラ」

菜摘「……………どうやらもう一回関節ハズす必要がありそうね」

オレ「冗談です。話しますからオレの腕を掴まないでください!!」

自然な流れでオレの腕を掴む菜摘先輩。あれか。これが柔道部エースの実力か。

オレ「話しますけど、ミアには席を外させてください。お願いします」

ミア「ムッ。私には聞かせないってどういう意味なのかなレイ？」

鈴音「ダメだよ零牙君。ミアちゃんも委員会のメンバーなんだから、仲間外れはいけないよ？」

せめてミアだけでも。と思ったが失敗。だがまだ諦めない。こんな事、ミアは知るべきじゃないんだ！！

零牙「……仲間外れがどうか、そういう問題じゃないんです……。ミアには、知ってほしくないんです……！」

梢「……そこまで、ミアちゃんには知られたくない内容なの？」

オレ「『知られたくない』んじゃない。『知ってほしくない』んです梢先輩」

オレの言葉に込められた意志を感じ取ったのか、先輩達は黙ってしまっただがしかし

ミア「レイ…お節介だよ」

ミアだけは反論してきた。真っ直ぐな眼差しでオレを見つめて、芯の通った声で言う。

オレ「ミア…」

ミア「どんな事でも、それを知って後悔するかどうかは私が決める事だよ。それに委員会の一人として、何よりこの事件に関わった者の一人として、事件の行く末を見届けなきゃいけない」

オレ「……」

ミア「それに、私はレイやお兄ちゃん達が支えてくれているから大丈夫！どんなに辛い事実だって受け止められるよ。だから、安心して話してほしいな」

そしてニコツと可愛らしい笑顔で締めくくった。オレも思わず顔が

ほころぶ。

ま、最初の寸劇からこうなる事は、なんとなくわかってたような気がしてただけだな。

オレ「そうだな。お前は、オレが思っているよりずっと強い奴だったよな。ゴメン」

ミア「分かれば良いんだよ。……で、本題は？」

オレ「……先に言っておくが後悔するなよ。実は……」

オレは昨日まで調べ上げた事の全てを話した。みんなは黙って聞いていたが、山下さんが話してくれた辺りのところは握り拳を作ったじつと怒りに耐えていた。

オレ「……以上が、オレの知る全てです」

委員会の中に沈黙が流れる。ああ……やっぱり話すべきじゃなかったか……

菜摘「（ボソツ）……許せない」

今更ながら話した事を後悔し始めると、菜摘先輩が呟くようにそう言った。

菜摘「許せない！犯人もそうだけど、なんで警察が被害者を追い込むのよ！」

鈴音「なんで守られるべき被害者が、逆に傷つかれないといけないの？普通有り得ない！」

椎「デリカシーっちゅう言葉知らんのかそいつらは！！」

梢「……腹が立つ……！」

修「心の底からこんなに腹が立ったのは久しぶりだ……！」

ミア「ムカつく……！」

菜摘先輩を皮切りに、委員会の全員が怒りを露わにした。普段ニコニコしている委員長ですら怒りの表情を隠していない。

鈴音「みんな！この事件、あらゆる面から徹底的に調べ上げるよ。亡くなった宮島さんのためにも、絶対に真相を白日の下に曝すよ！」

委員長が堂々とそう宣言すると、みんなは力強く頷いた。オレはち

よつと呆気にとられたが、頼もしい仲間を手に入れてちょっと嬉しくもなった。

鈴音「零牙君。調べる事があつたら何でも言つて。協力するから」

オレ「……ああ。わかりました。じゃあ、一つ質問させてください」

菜摘「何？」

オレ「彼女の自殺の原因は『強姦の被害にあつた事』と、『警察の事情聴取』。どっちにあつたと思います？」

男のオレには女の気持ちは分からない。だから、委員長や菜摘先輩に《女性》として答えを聞いてみた。すると「零牙君にしては愚問だね」と委員長が言った。首を傾げて解説を聞いてみる。

梢「……答えは片方じゃない。どっちも原因の一つ。」

オレ「……どっちも、ですか？」

菜摘「そうだね。一つ一つはバラバラに見えても、総合すると十分納得出来る理由になると思うよ」

椎「人間の心は法則で決まってる訳やあらへん。いろんな事の積み重ねによって、心が限界に達したんやろ」

オレ「……様々な要因が複合的に彼女が追い詰めていったのか…」

鈴音「そうだね。もしかしたらこの他にも、私達の知らない要因があったのかもしれない」

ようやく理解出来た。そうか。全ては積み重ねか…。

零牙「…そうか。わかりました。ありがとうございます。では、みんなに手分けして調べてほしい事があります」

椎「よっしゃ！どんと来い！」

オレ「まず、宮島さんの学生時代。学校の先生方で誰か知っている人がいれば良いんだけど…」

梢「…じゃあ、それは私とミアちゃんで行ってくる」

ミア「委員会の権限がこんなところで役立つなんてね…。行ってきます」

ミアと梢先輩が理事長室を出て行く。さて、まだ知りたい事はある。

オレ「じゃあ次は・・・《ピリリッ!》…すみません。ちょっと出ますね」

携帯を持って一旦理事長室から出る。相手は…山下さんだ。

オレ「もしもし」

山下『もしもし零牙君?色々調べが着いたから報告しておく。』

まず警察の事情聴取だが、当時の捜査官にそれとなく聞いてみたが、やはり上からそう言う命令があったらしい』

オレ「訴えを取り下げないようにしろ。と命令されたのですか?」

山下『そんなハッキリとしたものじゃなく、そういうニュアンスの命令だったんだ。』

進まないから次に行くよ。彼女が自殺した時、現場に遺書があったらしい。運良くその担当が知り合いだったから、簡単に聞けた』

オレ「遺書…？そんなのなかったって聞いてますけど…」

頭の中の調書を思い出してみる。そこに遺書の事は一言も書かれていなかった。

山下『ああ。調書にもそんな事は書かれていない。…考えたくもないが、誰かがかすめ取ったんだ。警察内部の誰かがね』

オレ「まさか…。それじゃ本格的に組織ぐるみの隠蔽ですか？もしそうなら、真相は相当根の深いところにあるはずですね」
思わず引き裂いたような笑みが浮かぶ。面白い。こうなったら本気で真相を暴いてやる。

山下『怖じ気づいたかい？』

オレ「まさか。背中がゾクゾクしてますよ」

山下『じゃあこれで最後だ。犯人の岩村隆文は冤罪の可能性がある』

オレ「というと？」

山下『宮島理子の死後、彼女の両親が《娘は警察に殺された》と言つて騒ぎ立て、マスコミが面白おかしくかき立てた。それからだ。

警察は本格的に捜査に乗り出たのは。

そして、彼が逮捕されたのは五日後。たまたま飲酒運転の検問に引っかけた、車内から犯行のものとされる写真が見つかった。

……これも、警察内部の人間なら簡単に加えられるものだ。』

山下さんは哀しそうに言う。恐らく今回の事件で一番辛い思いをしているのも山下さんなんだろう。なんせ、自分の信じてきたものをわざわざ疑っているのだから。

オレ「それで、裁判の結果は？」

山下「執行猶予なし。実刑三年を言い渡された。

もちろん彼は既に出所している。その後の消息は不明。……僕が調べられるのはここまでだ』

オレ「十分過ぎる程です。よく一日でここまで調べ上げましたね」

今教えられた情報を反芻しながら素直に思う。こんな重大な事をたった一日で調べ上げるなんて所行、普通は出来ない。

山下「大事なのは人との繋がりだよ。警察内部、外部問わず僕は色々な人間と関わりを持っている……。僕みたいなデブが警部になれたのも、そういう《友人達》のおかげなのさ」

山下さんはなんでもないような風に言う。これが当たり前なのだと。人間、どこに才能があるかわらないものだ。

オレ（オレと真逆か。ハッ、素晴らしいとしか言いようがねえな。あからさまに言われると感心しちまつ）

山下『僕が今調べた事はそれぐらいだ。あと、大変だと思うが、君に一つ頼みたいことがある』

オレ「なんででしょう」

山下『詳しいことは後で。今、学園そっちに向かうところだから、校門で待っていてくれ』

ブツ…。山下さんは一方的にそういうと電話を切ってしまった。

オレ（……まあ、先輩達に頼んでも大丈夫だろ。学園内の選りすぐりのメンバーだから、要領は得ているだろうし）

ぼんやりとそんな風に考える。そして

オレ（『信頼』してみるっうのも大事だしな）

嘘つき（スパイ）から最も遠く離れた事をやってみることにした。
馴れないことも、やってみるものだ。

- - - - -

ガチャ…

オレ「ふう…」

修「誰からだっただん？」

オレ「山下さんからです。事件のことを色々調べてもらってたんですよ」

菜摘「収穫はあったの？」

オレ「有りすぎる程にね…。それよりさっきの話の続きです。彼女のご両親のところに行って、話を聞いてきてほしいんです」

鈴音「……それ、相当難しいよね？」

オレ「上手いこと理由をつけて聞いてきてください。……友人の娘とか言っておけばどうにかなりますよ。きつと」

委員長がハハハ…と苦笑いしたのを適当に流す。うん。どうにかなるよ。きつと。

菜摘「随分アバウトね…。ま、私と鈴ちゃんに任せておきなさい。この事件、私にも責任があるしね」

そう言つて菜摘先輩と委員長は外に出て行つた。先輩は先輩なりに責任を感じているのか…。感じる必要なんてないのにな。

オレ「城崎先輩。先輩は出版関係で調べてください。もしかしたら…」

修「情報があるかも、ったか。わかった。母さん経由で調べてみるよ。お前はどつするんだ？」

オレ「山下さんが協力してほしいことがあるって…。いったい何な

んだろ」

修「情報が集まったらオレ達でまとめておく。お前は山下さんの方を手伝ってこい」

オレ「わかりました。そっちの方は頼みます。それじゃ」

そしてオレと城崎先輩は理事長室から出て行く。さて、みんなの情報に期待して頑張ろう。

.....

レイの指示で、梢さんと一緒に生前の宮島さんの事を調べることになった私は、今現在高等部の職員室にいる。

ミア「失礼しまーす……」梢「……失礼します」

私達がドアを開けると、部屋の中にいた先生達が一斉にこっちを見てきた。……うう。恥ずかしい……。

梢「中等部の木下梢です。本格推理委員会として、先生方にお聞きしたいのですが」

ミア「お、同じく小等部の管原雅です……」

梢さんの背中にしがみつかながら自己紹介すると、先生達は「ああ、なるほどね」と一回頷いた。

梢「18年前の事件について調べています。その事について知っている先生を、誰かご存知ありませんか？」

猿山「18年前からこの学校にいる先生となると、校長先生しかいない。校長先生に尋ねてみるといい。今日は出張でいないが、明日聞いてみると良い」

梢さんの質問に、なんか猿顔の先生が答えてくれた。お兄ちゃんが言うにはあれで補習担当らしい。……でも本当に猿に似ている。顔の形が特に。

梢「ありがとうございます。失礼しました」

ミア「し、失礼しましたっ！」

梢さんが冷静にお礼を言って職員室を出る。……うう。やっぱり恥ずかしい。

-
-
-
-
-
-
-
-
-

プルルル…プルルル…

天野『はいもしもし天野です』

修「天野さんですか？城崎です」

零牙の指示で、出版関係…恐らく、雑誌関連の情報を洗うことにしたオレは、母さんの担当である天野さんを頼ることにした。朗らかな優しい人物である。

天野『おお修くん！どうしたんだい？まさか、先生の身に何か…！』

修「それは大丈夫です。相変わらず元気ですよ」

麻薬の中毒者みたいに発狂してたけど。

天野『そうか…なら良かった。それなら、今日はどうしたんだい？』

修「今、18年前のとある事件について調べているんです。その事件についての情報を、出来る限りでいいので調べてほしいんです」

天野『ふ〜ん。で、その事件とはいったい？』

修「宮島理子と言う女子高生の事件です。ご存知ですか？」

『宮島理子』という単語を言った瞬間、天野さんが息をのんだのがわかった。そして、一言一言確かめるように言葉を言う。

天野『……修くんは、あの事件を調べてどうする気だい？』

修「真相を暴きます」

天野『無理だ。あの事件は、警察が介入している。やったところで無意味だ』

修「それでも、オレ達は真実を知らなければいけないんです。」

そこまでオレが即答すると、天野さんは「はあ」と誰にでもわかるため息をついてまいったように続けた。

天野『修くんがこの事件を調べる理由はなんだい？ただの好奇心か、学校の宿題かなんかかい？』

修「理由は言えません。ですが、そんな半端な理由じゃないということはおききます。」

力強くそう断言すると、再び天野さんは誰にでもわかるため息をつけて「やれやれ」と言った。

天野『わかった。まあ、君みたいな頭の良い子があんな事件を調べるのにはそれなりに理由があるんだろうし、僕の方でちょっと調べてみる』

修「オレも手伝います」

天野『そうしてくれると助かる。それじゃ、一時間後に例の喫茶店で会おう』

修「わかりました」

そう言つて天野さんは電話を切った。さあ、調査開始だ！

.....

鈴音「ここだね」

菜摘「うん……」

零牙君に頼まれた通り、宮島理子さんのご家族に会うため、彼女の

実家（意外にも学校から近かった）に着くと、菜っちゃんはすごく悲しそうな表情かおをしていた。

菜摘「……ねえ鈴ちゃん。どうすれば良いのかな？」

鈴音「なにが？」

菜摘「私……。宮島さんになんて顔で会えば良いんだろ……」

ポツリポツリと、咳くようにそう言った。私は菜っちゃんの顔をジッと見つめてから、微笑んで目の前にある家に向き合った。

鈴音「菜っちゃん。私はね、菜っちゃんの思う通りにやれば良いと思うよ」

菜摘「え、それっていったいどういう……」

ピンポーン

私は菜っちゃんのことを無視して、玄関のインターフォンを鳴らした。しばらく待つとドアが開き、白い無精髭を生やした老人がぬった顔を出した。

恐らく、宮島さんの父親……。

鈴音「あ、えっと……あの、ここは宮島さんのお宅でしょうか？」

菜っちゃんの前ではああ言ったが、どうしても緊張して言葉がしどろもどろになってしまう。彼はなにも言わずただ頷いた。

鈴音「あ、こ、こんにちは。私は沢口さんの後輩の桜森鈴音と申します。先日、先輩の話を偶然聞いてお線香をあげさせてもらいたいと……」

彼は鋭い視線で私を睨む。その迫力に圧倒され、言葉が尻すぼみになる。

……まずいかな……。

私は半ば諦めかけていると、彼は軽く舌打ちして家の奥に入ってしまった。

……やっぱりダメか……。完全に諦めの気持ち胸に広がっていく。

しかし、彼はドアを開けたまま家の奥へ入ってしまった。

これって入ってってことなのかな……？

「線香、あげるんじゃないのか？」

迷っていると、部屋の奥から声が聞こえてきた。菜っちゃんを手招きして、一礼して奥の部屋に入る。手入れの行き届いている仏壇の上に、宮島さんの写真が飾ってあった。きりつとはつきりした目鼻立ちで、快活で明るい女性。そんな印象を受けた。

「君たちは、いったい何しに来たんだ？」

仏壇の前に正座して、線香を供えて合掌し終わった私達に向かって、あぐら胡座をかいて座っていた彼が言った。

鈴音「…どうして、そう思うんですか？」

「理子の事件は、18年も前起こったんだ。学校じゃもう偶然聞くなんて出来ないだろう。それに18年も後の後輩が、たまたま近くに来たから線香をあげたい。なんて言うのも不自然だ」

しまった。そう言われてみればそうだ。でも、そこまで分かっているなら……

鈴音「どうして…家に入れてくれたんですか？」

「胸騒ぎだよ。理子が入れてやってくれ。って言ったよような気がし

「ただ」

嘘についてはいけない。ふとそんな風に思った。私は真実を話そうと覚悟を決めた。

鈴音「すみません。私達は・・・」

菜摘「私は、私の父は、警察署長です」

すると、いきなり菜っちゃんが話し始めた。いったい何をする気なの？

菜摘「私達は偶然聞いた小等部の怪談に出てくる幽霊が、宮島理子さんだという事を、調査によってわかりました。」

彼・・・宮島さんのお父さんは、ただ黙って菜っちゃんという言葉を聞いている。それを見て菜っちゃんも一生懸命話し始めた。

菜摘「調査の過程で、あの事件には警察の介入があることが分かりました。」

私は、あの事件の真実を知りたい。闇に葬られた真実を、白日の元に曝さないといけない。

「・・・もしかしたら、娘さんは自殺じゃないのかも知れない」

最後の一言を聞いた瞬間、宮島さんの顔が一瞬ピクツとした気がした。

菜摘「だからお願いします。彼女の話聞かせてください」

菜っちゃんが土下座してお願いする。私もそれに続いて頭を下げる。彼はバカにしたように鼻で笑い、そして突き放すように「話にならん」と言っと席を立てて部屋を出て行ってしまった。

悔しい。自分が傷付くだけなら良いが、もしかしたら彼を傷つけてしまったかもしれない。

私はこみ上げる感情を押しつぶすように唇を噛んだ。

「おい」

声に反応して顔を上げると、さっき出て行った彼が戻っていた。手には青い表紙の手帳がある。

「持ってけ」

彼はぶっきらぼうに言っと、その手帳を菜っちゃんに向かって差し出した。

菜摘「…これは？」

「理子の日記帳だ」

鈴音「そんな大事なものを、どうして…」

「……気のせいかもしれない。だが理子が、信じてやってくれと言ったような気がしたんだ」

そう言う彼は目を真っ赤にして鼻を擦りながら顔を伏せた。

「オレは、理子の自殺したのではなく、殺されたのだと今でも思っている。警察は相手にしなかったがな。理子が自殺じゃないと言ってくれたのは君たちが初めてだ。だから…」

その先は言わなくても分かった。18年経った今でも、彼は娘の事件の真実をしりたがっている。

初対面の私達に、僅かな希望を託してくれた。

菜摘「…お借りします」

私と菜っちゃんは立ち上がり、深々と頭を下げ、部屋を出た。

- - - - -

オレ「…で、山下さんはソイツが怪しいと」

山下「そういう訳だ。で、目には目を。オカルトにはオカルトを。って事で君に協力してもらったんだ」

現在オレは、山下さんが運転する車であざみ先生の友人がいなくなった事件を、山下さんから聞かされた。にしても、『霊媒師』ねえ…。

オレ「一応言つときますけど、僕ら『十字教』では幽霊の存在を認めていませんから」

山下「『人は死ぬと魂だけの存在になり、冥界にて審判をくだされる』ってやつかい？」

オレ「分かってんじゃないですか」

十字教にのみならず、『幽霊はいない』という原則はどの宗教においても当てはまる。しかしオレは、いないはずの幽霊が見えている。…オレの見えているものは幻なんだろうか？
時々疑問に思うが、いまだ答えは見つからない。

山下「とにかく、君に頼るしか方法がない。矛盾なりなんなり突き詰めて、奴の化けの皮を剥がしてくれ」

そうしていると、とある一軒の家に着いた。表札には「霧山」と書かれている。

山下「刑事課の山下だ」

山下さんがインターフォンを押して、家から黒い服を着た男が現れた。

これが話の霊媒師か。

山下「警察の人間じゃないが、同席させたい者がいる。」

と、山下さんが言い終わるとオレは前に出た。霧山が少し驚いた表情をしたが今は無視だ。

そんな訳でオレと山下さんは十畳程の広さのリビングに通された。事務所として使っているのか、生活感がまるでない。

霧山「……さて、私が何者なのか、それを知りたいんですね」

冷たいお茶をオレ達の前に出した霧山はストレートにそう言った。

山下「そういう事だ。今回の事件の中であなたの存在が一番不明確なんだ。……色々質問させてもらっても良いか？」

霧山「構いません」

山下「あなたはいつから霊媒師なんてやり始めたんだ？」

霧山「17、8年くらい前ですかね…。驚くかも知れませんが、霊媒師になる前は高校の教師だったんですよ。確認してもらっても構いません」

山下「……なんで霊媒師になろうとしたんだ？」

霧山「以前は私も、死者の魂なんて見えなかったんですが、ある日突然激しい眩暈めまいに襲われましてね。過労からくる心不全で、一時生死の境をさまよいました。そして目が覚めると、なぜか私の左目が金色になっていたんです」

そこまで霧山は話すと、一旦お茶を一口に含んだ。

「普段は黒のカラーコンタクトで隠しているんですが、その金色の目にはなぜか死者の魂が映っていました。この新しく備わった能力を生かしたいと思って、霊媒師になったんですよ」

そして霧山はオレの方を向いて意味深な笑みを浮かべた。

霧山「もしかして、君にも見えるんじゃないのか？私と同じものが」

オレ「どうしてそう思うんです？」

霧山「なんと言えば良いのかな……。感じるんだよ。君の周りから、私と同じ感じがするんだ」オレ「バカバカしい……」

オレが呆れていると、霧山は「ふふふ……」と口元で笑みを浮かべる。

霧山「いやあすまない。本当は、私は君を知っているんだ。速水零牙君？」

オレ「……！！なぜ、オレの名を……」

霧山「つい先日、仕事で埼玉の両神（りょうじんかみ）というところに行った際にね。仕事帰りに、『天井秀一』という男が話しかけてきたんだ。その時にね」

オレ「……」

霧山「彼は君のことをよく知っていたようだが、君は彼のことを知っているのかい？」

オレ「……ええ。色々と世話になってます」

むしろ追っているぐらいだ。

霧山「そうか。彼は敵に回さないほうがいい。あの何を考えているのかわからない感じ。正直不気味だからね」

オレ「……覚えておきましょう」

そう言って、オレは霧山の家から出て行った。

オレ（……この事件は、あいつが関わってるのか？）

頭によぎった悪い勘が当たらないことを、ひたすら祈りながら……。

続く

幽霊が見える眼(まなこ)(後書き)

THE、あとがきの部屋。

夢幻「やっと終わったあああつ！」

零牙「お疲れ夢幻」

雅「地味に頑張ったね」

夢幻「おうよ！ようし。とっておいたケーキを食べるかな？」

椎「な！なんやてえ！」

修「おい夢幻！なんで自分だけケーキを食った！オレ達にも分ける！」

夢幻「はっ！誰がやるかよ！」

梢「私達だって頑張った」

菜摘「そうね。夢幻が頑張った！私達も頑張ったってことよね。
…

…だからケーキを寄越しなさい！」

鈴音「そつだよ。私達にも分けてよ夢幻！」

夢幻「断る！これはオレがバイトして得たお金で買ったケーキなんだ！だからオレの物ーっ！」

一同『私達（オレ達）はお前の妄想から出来てんだから、結局私達（オレ達）にも貰う権利はあるよね（な）？』

夢幻「なにその理不尽な理由！？くそっ！こつなつたら意地でもお前らに食わせてやるか！」

ガチャ（冷蔵庫の扉を開く音）

一同（……ケーキを出したらすぐ奪ってやる！）

夢幻「……あれ？ケーキが……ない」

一同『…え？』

突如として夢幻の冷蔵庫からケーキが消えた。

犯人は誰なのか、そしてケーキはどうなったのか。

気になる真相は、次回へ続く！

零牙「……いや。誰も気にしないんじゃないか？」

闇の先にある光（前書き）

事件パート4です。

だるい…。

闇の先にある光

零牙達が様々な思いを胸に行動をした日の翌日、9月10日の深夜、あざみと山下はバー《セルペ》に着ていた。

理由は簡単。夕方頃に霧山からここに集まるよう言われたからだ。山下は「刑事にいてもらった方が良い」とのことと呼ばれた。

山下（……零牙君は調べものがあるとか言ってたから呼べないな。ここは僕がどうにかしないと……）

バーの中に入ると、霧山と裕太、真一、マスターの4人がいた。他に客はいない。貸し切り状態のようだ。

霧山「皆さん集まりましたか……。さて、」

霧山がパンと手を打って話し始めた。

霧山「先日、皆さんはここで心霊体験をした。間違いありませんね？」

その問いに答える者はいなかった。しかし、沈黙がその問いを肯定

する。

霧山「すでにご存知かも知れませんが、真希さんが二日前から消息不明になっています。密室の部屋から突然……」

霧山は一拍の間を空け、全員を見渡す。

真一は不機嫌そうにタバコをふかし、裕太はしきりに貧乏揺すりを繰り返している。

霧山「……消えたのです」

真一「……バカバカしい。人が消えるなんてそんなバカな話あるわけない」

真一が灰皿にタバコを押し付け霧山を睨む。しかし霧山は怖がりもせず、変わらない態度でいる。

霧山「いいえ。嘘ではありません。これは強い怨霊のなせる業です。証人もいます。そうですね？あざみさん」

そう言つて霧山はあざみを見る。が、あざみはキツと霧山を睨み返す。霧山は自然に視線を逸らす……。

霧山「念のためお聞きしますが、最近皆さんの周りで何か奇妙な現象が起こりませんでしたか？」

霧山のその一言をきっかけに、テーブルに座っていた真一達の動き

に落ち着きがなくなった。

霧山「何か、あったのですね？」

裕太「お、女が…」

真一「よせ裕太」

真一が裕太を制する。しかし、一度声を出してしまった裕太の勢いは止まらない。

裕太「あの女が部屋にいて、『死ね』ってオレ達に…！」

マスター「私も…二日前にあのロッカーで同じ言葉を…」

裕太は顔を伏せ、マスターは顔を青ざめてブルブル震え始めた。

霧山「やはりそうですか…。私の読み通り、皆さんにだけ心霊現象が現れましたか…」

あざみ「…？ちょっと良い？読み通りってどつどつどつと？」

あざみの疑問に霧山は堂々とこう宣言した。

霧山「まさしくその通り、読み通り（・・・）なのですよ。私は、現象の原因である幽霊を突き止め、そして皆さんがその関係者であることを突き止めました。」

霧山はそう宣言すると、一回目を閉じ深呼吸をした。まるで、ここからが大事だと言う風に。

霧山「その幽霊の名は宮島理子…。この近辺で死んだ者です」

山下「！！なぜ、彼女の名が出てくる！？」

山下は驚愕してしまう。霧山は「おや」と山下の方を向いて話を続ける。……口元はニヤリと笑って自慢げに話しているようにも見えた。

霧山「ご存知なのですか？」

山下「質問に答えてくれ。まさか、宮島理子が一連の幽霊騒動を引き起こしているのでは？」

しかしそんなところではない山下は、ほとんど叫ぶように言う。霧山はオホン、と一回咳をしてから話を続けた。

霧山「まさしくその通りです。真希さんは彼女のチカラによって、苦しみに満ちた死後の世界へと連れ去られてしまった…」

山下「そんなもの、あなたの妄想に過ぎない！」

霧山「私は冗談で言っているのではないのですよ？あなた方には見えませんか？彼女の苦しみが。そして痛みが」

霧山は一度俯き、左目を手でこじ開け、何かを取り出した。

霧山「……私には見えます」

その左目は、眩い金色に輝いていた。全員が、その左目に意識を向ける。

霧山も全員の顔を見渡すように顔を一人ずつ向ける。

霧山「私は、あの日皆さんがここに集まったのは、偶然でないと考えています。この中には、彼女の憎しみの原因となっている人物がいる……。無論、すぐに名乗り出る必要はありません。

しかし、このまま行けば確実に真希さんの二の舞になる……。本人に

は分かっているはずですよ。本当の真実が明らかになれば……」

そこまで霧山が言うと、突然店の明かりが消えた。裕太が「ひいいいっ！」と情けない声を出す。

ボウ……。と何か浮かび上がったと思ってカウンターの方を見たら女がいた。制服を着た、長い髪の女だ。

――《死ね》

それだけ恨めしそうに言うと女は消え、部屋に電気が戻った。

山下は目眩ましをされたような格好になり、目を閉じる。山下が再び目を開けた時には女の姿は最初からなかったようにきれいに消えていた。

霧山の言うとおり、何か起きようとしているのは紛れもない事実だ……。

「……皆さんにも見えたでしょう。深い憎しみを纏った彼女の姿が」

「うわああああ」

霧山が言い終わると同時に叫び声が響いた。見ると、真一が腕を押さえつけてうずくまっている。

あざみ「大丈夫ですか？」

山下「どうしたんです？」

あざみと山下が駆け寄り、他の者も近寄ってきた。真一は、たくし上げた右腕を押さえていた。

山下「誰にやられた」

真一「わからない…。気がついたら…」

そう言つて真一は手を離して右腕を見せる。右腕には、十字架に蛇が巻きついている刺青いれずみが彫つてあった。そこから血が滴り、蛇に生贄の血を与えているような光景だった。

.....

その次の日、9月11日（土）の夜。

『本格推理委員会』のメンバーは、零牙の家に集まっていた。

菜摘「へえ〜。ここが零牙君の家か〜」

椎「意外にきれいなんやなあ〜」

梢「掃除が行き届いている。とっても綺麗」

鈴音「本当、^{ホント}妹さんと二人で住んでいるとは思えない」

玄関先でが感嘆をあげるメンバー。しかし…

マユ「こ、こんばんは」

椎・菜摘「美少女はっけーんツツツ……!!」

修道服を着て挨拶をしに来たマユに、ロリコンの二人の美少女レィダーが反応。マユに飛びついた。飛びつかれたマユは、驚きで硬直し、二人になすがままにされてしまう…。

マユ「な、なんですかいきなり抱きついて!!」

椎「肌スベスベしとるう〜。可愛い〜。持って帰りたいわ〜。ハアハア…」

菜摘「フードに隠れた可愛らしいうなじも最高だわ〜。ハアハア…」

マユ「ちょ…！どこ触って…！あつ…そこは…だめえ…」

あまりの状況の変化に、処理能力が追いつかなかった修と鈴音がハッ！とする。まずい、このままじゃ規制に…

零牙「はいそこまで。離れるロリコン共」

引っかかる寸前で、零牙が容赦なく蹴りを加えて椎と菜摘を引き剥がした。引き剥がされた二人は「ふぐう！」と床にうづくまる。

マユ「お、お兄ちゃん…」

零牙「っーか何してんすか先輩。昨日に引き続いてこんな寸劇を…作者共々殺しますよ？」

珍しく零牙が静かに怒りを見せ、ちよつとだけ殺気をだす。鈴音は「ヒッ！」と怖がっていたが、未だに玄関にいるミアはヤレヤレと言った風に話す。

ミア「レイ…。先輩達に変態なのは今更しようがないから、話進めよ？」

零牙「チッ…。どうぞあがってください。お話はリビングで聞きます」

と、零牙は若干不機嫌ながらもメンバーを家にあげた。

……速水家は、リビングとダイニングが一体化している。

カウンターキッチンのそばに木のテーブルと四脚の椅子があり、壁際には黒張りのソファとその前には小さいガラスのテーブル、向かい合うようにあるのは32インチのTV、もちろん電話もあるし、小さい十字架などオカルトグッズも少々ある。(あとで追加するかも)

まあ、よくドラマで見る一般的なリビングだと考えてもらえば良い。

ミア「(ポフッ)(このソファに座るのも久しぶり)」

梢「……いつも来ているんじゃないの？」

修「あー。いつもじゃないんだ」

梢の素朴な疑問に修が答える。

修「零牙は神父の仕事で、土日は家にいないことが多いんだ」

ミア「でも、家にいるときは一緒にTV見たり、お料理したり、お買い物に行ったり、そのついでにアイス食べたりしてるんだ」

マユ「もうラブラブなんだよう。見てるこっちが恥ずかしくなるくらい」

零牙「ハッ。せっかくの休日なんだから、可愛い彼女と過ごしたいだろ？」

ミアは頬を赤らめ、マユは呆れるように。零牙に至っては自慢しているように言う。顔の恐さが原因で、彼女が出来たことのない修は小声で「羨ましい…」と呟く。

鈴音「さて。零牙君の家の見学は後にして、ちゃちゃっと情報交換しましょっ?」

鈴音の一言で、全員がソファーク椅子に座って、一人一人調べた情報を言うことになった。

.....

真一の家で裕太は震えていた。真一は仕事に行き、現在一人。裕太の腹の底から膨らむ恐怖心はすでに破裂寸前で、いつどこにいても誰かに見られているような気がする。

昨日の女の幽霊……。――。

これから一生、あの幽霊に怯える事になるのか？
そう考えるだけでも、発狂してしまいそうだった。

ブルブル……。

いきなり聞こえた音に驚いて周りを見渡したが、それは携帯のバイブ音だった。相手は、昨日交換しておいた霧山のものだった。

恐る恐る電話に出る。霧山『もしもし。裕太さんのですか？』

その声を聞いた瞬間、どっと疲れがわいてきた。同時に、知り合いと一緒にいるという安心感も生まれた。

霧山『裕太さん、実はあなたにとって良いニュースがあります』

裕太「……良いニュース？」

霧山『ええ。私の予想では次の被害者は、残念ながらあなたです』

どこが良いニュースなんだ。むしろ悪い知らせじゃないか。裕太は霧山の言葉を聞いて罵倒してやるうかと思った。しかし、霧山は更に続けてこうも言った。

霧山『ですが、私はあなたを助けたいと思っています』

裕太「助ける？」

霧山『ええ。あなたが望むのであれば、ね』

死を目前にして命が助かるのであれば、人は躊躇いもなくその術すべにすがる。裕太も、また然り。

裕太「助けてくれ……。まだ死にたくない……」

霧山『わかりました。助けましょう。……但し、そのためには……』

その術が、畏とも知らずに……。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ミア「まずは私達からかな？」

という訳で最初はミアと梢先輩になった。ミアは事前に情報をまとめた紙を広げる。

ミア「私と梢さんは、18年前、同時学園の生徒だった宮島さんの話を聞くために、高等部の校長先生のところに行ったんだ」

梢「先生が言うには、同時の宮島さんは活発で人付き合いの良い生徒だったらしい。暴行事件の後もめげることなく学園に来ていたか」

なるほどな。とオレは改めて宮島理子の強さに感服する。普通、強姦にあった被害者は人の多いところにはいけないものだ。やはり、事件のことを言われるんじゃないかと恐ろしいからだ。

しかし彼女はその恐怖を乗り越えて学校に通った。つまり、それだけ芯の強い人だったということなのだ。

ミア「それと、同時彼女はある先生の追っかけだったらしいよ。名前は小山だったけか、檜山だったけか忘れたいけど」

梢「…ここまでしか調べられなかった。まとめた書類は、零牙君に渡しておきます」

そこまで話した二人はソファに座り、まとめた書類を零牙に渡した。

その数枚の書類が、ヤケに重いなどオレは感じた。

菜摘「……次は私達で良いかしら？」

次は菜摘先輩が、一冊の青い手帳を持って椅子から立ち上がった。つられて委員長も立ち上がる。

菜摘「この手帳は彼女の日記帳だったの。宮島さんの父親から借りてきて、中を読んでみると、彼女には彼氏がいたことがわかったわ。その彼と今までどんなことがあったのか、最初は読んでいて微笑ましかった。けど……」

そこまで言つと菜摘先輩は急に黙ってしまふ。見かねた委員長が続きを説明してくれた…。

鈴音「暴行事件のあった日、文章は書かれてなくて、絵だけ描いてあったよ。……この絵だよ」

そう言つて委員長は日記帳のあるページを開いて中をオレ達に見せた。そこには、十字架に巻きつく蛇の絵があった。

零牙「……！」

鈴音「多分これ、犯人の目印だと思う。菜っちゃんと一緒に日記帳を読んだけど、暴行事件のあった日以降の内容はがらりと変わっている…。とつてもつらかったんだろっね…」

そうして二人は耐えきれなくなったのか、悲しげな表情をして椅子に座った。

修「零牙、この家にパソコンあるか？」

オレ「仕事用に使うやつならありますけど…」

修「悪い。持ってきてくれないか？」

オレ「あ、はあ…」

どうやら次は城崎先輩が言うらしい。

オレは自室から書類制作用のノートパソコンを持ってきた。城崎先輩は礼を言うと、パソコンの電源をつける。そして「うーん…」とたつぷり三分ほど悩んで話を切り出した。

修「……オレは母さん経由で、知り合いの雑誌記者に今回の話を聞いてみたんだ。その人は事件のことを色々知っていて、今もその事

件を追っているらしい。

で、その雑誌記者が調べたのが……」

先輩はパソコンでインターネットに繋ぎ、アドレスを打ち込む。開いたページは、黒い背景に女性の顔写真と名前が幾つかあった。

つまり、エロサイトである。

『……………』

城崎先輩に向けられる白い視線。あれ……さっきまでの重々しい雰囲気はどうなったんだ？なんか今度は息苦しいつつつか肩身が狭いつていうか……

修「……………言っておくが、勘違いするなよ」

椎「勘違いするな言われてもなあ……」

鈴音「修君も年頃なのはわかるけど……」

ミア「お兄ちゃんキモイ……」

調査の結果とは言え、エロサイトを開いた城崎先輩に対する態度は辛辣なものだった。あれ…？何だろっ城崎先輩が小刻みに震えている…。

修「…グズ。で、その雑誌記者が言うにはだ。」

あ、頑張っつて説明続ける気だ。城崎先輩はページを下にめぐりながら更に説明を続けた。

修「普通、こっついうサイトでやるやつは大抵ヤラセなんだが…」

『……………』

ああ！城崎先輩がいたたまれなさすぎる！今にも泣き出しそうなんですけど…！

修「……………その雑誌記者曰わく、ここにあるものは全部本物のらしい。証拠に…」

そしてとある画像にカーソルを合わせる。そこには《宮島理子：屈辱にじつと耐える姿が堪らない。後日学校から飛び降り自殺》と虫酸のはしるコメントが記載されてあった。

菜摘「…！！いったいどこのバカがこんな真似をするのよ！！」

あ、雰囲気戻った。城崎先輩が開いたページを見て菜摘先輩が溜まらずテーブルを叩いて怒鳴り声をあげた。それは零牙も――いや。その場にいる全員が怒りを覚えていた。この事件をきっかけに自ら命を絶った女性が、死してなお辱めを受ける。こんなこと、許されて良いはずがない。

零牙「……」

修「オレも同感です」

そして城崎先輩は動画の再生ボタンをクリックして一定時間進めると、ストップした。

画面はちょうど犯人がアップしている所だった。顔はニット帽を被っていてわからない。

修「ここ。犯人の腕にある刺青を見てください」

パソコンを操作して犯人の左腕をアップする。そこには十字架に蛇が巻きついている刺青があった。

それは、宮島さんの日記帳に書かれていた絵と同じだった。

修「オレが調べられたのはこれぐらいだ。ありがとな零牙。パソコン

ン貸してくれて」

オレ「いえ…。さて後は山下さんの調査ま《ピリリッ！》…ん？」

パソコンの電源を落として頭の中で情報をまとめると、山下さんから着信がきた。

物語は、もうすぐ終幕を迎える。

樋口信也は身体を引きずるようにして自宅に帰った。

この疲労感からくる身体が重さは、ここ何年も張り付いたまま動かない。

樋口信也は刑事課長だ。感情を殺し、組織のために貢献する。

いつそ組織に縛られず、感情を爆発出来たらどんなに楽か…。

樋口「ただいま」

玄関のドアを開けるとリビングに明かりがついていた。あいつが帰ってきている。彼は、一瞬躊躇してしまう自分がいることに気付いた。

・ ・ ・自分の息子に何を遠慮する必要がある。

彼はそう思うとリビングの扉を開けた。一対のソファーに座っている自分の息子、裕太の姿があった。

裕太「父さん」

樋口「帰ってたんだな」

元々家にいることは知っているはずなのに、なんでこんな会話しているんだろうな…。樋口はおかしな会話だと思う。

裕太「父さん、話があるんだ」

樋口「なんだ？小遣いならやらんぞ」

裕太「違う。そういう問題じゃない」

裕太は目尻を下げて困った顔になる。そんな表情が自分そっくりだな。と、彼は思った。

裕太「オレ、呪われてるんだ」

樋口「何をバカなことを。今のご時世、そんな事あるわけないだろう」

裕太「本当なんだ」

彼は息子の言い知れぬ雰囲気何か嫌な予感を感じ取った。そう、
とっても嫌な予感が――

――

山下「いきなり呼び出してすまない。仕事の都合が着かなくてなかなか連絡が取れなかったんだ」

修「前口上はいいので何があったんですか？つか、なんであざみ先生がいるんすか？」

現在、修、椎、梢、ミアの4人は山下さんの車に乗せられて、とあるマンションの前まで着ていた。

コの字形をした、おかしなマンションだ。

山下「昨日、霧島が僕たち事件の関係者全員を呼んで幽霊に会った

んだ。
あいつを捕まえたいんだけど、確証がない。その確証を見つけ出すのに、みんなの協力が必要なんだ」

ちなみに零牙以外のメンバー全員、あざみや山下が関わった失踪事件の事は知っている。ここに来るまでの間に、車中で話したのだ。

山下「なあ、今の話で何かわからないか？あいつの犯行の証拠となるような、何かを」

修「…今のだけじゃわかんないっすよ山下さん」

梢「うん。確証がなさすぎる」

エレベーターホールで、エレベーターが来るのを待ちながら、修と梢は頼りない返事をする。山下はオロオロとしてしまい、こんな情けない声をだしてしまっ。

山下「そんな…。君たちが最後の頼みの綱なんだ。どうにかならないのか？」

ミア「それをどうにかするために、今から検証するんです」

ミアがそう言うと同時に、エレベーターがやってきた。全員がそのエ

エレベーターに乗り込む。

梢「ミアちゃん。時間計つといて」

ミア「わかった」

ミアが携帯電話を取り出して時間を計り始めた。

修「……電話が切れた。何秒だ？」

ミア「十一秒」

修はわかったとだけ返事をする。山下には何がなんだがわからない。そうしているうちに九階についた。

すると、修、椎、梢、ミアの順で次々に飛び出した。山下も後を追う。

エレベーターを出て真っ直ぐ進んで右、そしてまた右。

修「よし着いた。今何秒だ？」

ミア「四十五秒」

梢「電話が切れて三十四秒。不可能な数字じゃない」

修達は納得したようで、部屋の鍵を開けようとする。そこへ後から歩いてきた山下がやって来た。

山下「どうしたんだいみんな？なにか、わかったのかい？」

修「ええ。この消失事件はトリックです」

山下「！！ほ、本当か？それは！」

修「ええ。山下さんに説明する前に、ちょっと最後の謎も解きます」

修が山下と話していると、梢が部屋の扉を開けていた。修達はなかに入りこむ。

修「……あの辺りですよね？幽霊が現れたのは」

山下「あ、ああ……」

修はガラス窓の一部を指差して山下に確認をとる。そして、椎が懐

中電灯みたいなものを取り出して、そのガラス窓に青白い光を当てた。

すると・・・

山下「な、あ、あれは…！」

すると、制服を着た、長い髪の女がいた。あの時と同じである。

山下「な、なんであの女が急に…」

修「この懐中電灯、実はブラックライトなんです」

ブラックライト。

作りは蛍光灯と一緒にだが、青紫色のガラスを使う事で一定値の可視光線をカットする道具。

簡単に説明すると、普段は見えない特殊な蛍光塗料で描いた女の絵は、ブラックライトを当てることによって発光して見えるようになっていたのだ。

つまり、女の幽霊はトリックだったのである。

山下「だが、こういうのは……」

ミア「昔は白だけだったけど、最近は透明なものも出ているんですよ。多分、それを使ったんじゃないかな？」

椎「時間が短かったんのも、幽霊が絵だとバレへんようにする演出上のミソやったんだなあ。うんうん」

山下の疑問にミアと椎が答える。だが、更に別の問題も浮上してくる。

山下「ちょっと待ってくれ。元々この部屋にそんな仕掛けがあったということとはつまり」

梢「もちろん。工藤真希さんも知っている」

修「最初から狂言ドッキリなんすよ。この消失事件は」

そう言いながら修は誰かに電話をかけていた。相手はおそらく、別行動している零牙君だろう。

修「もしもし……。ああ。予想通りだ。お前はとうするんだ？……救

ってこい。どんな命だろうと、見殺しにされていい理由にはならな
いだろう？……ああ。わかった。オレ達も今から向かう」

ピッ

修「山下さん、例のバーに連れてってください。そこで、すべて終
わります」

山下「……わかった」

そうして、修達はバー《セルペ》に向かった。

.....

一方、修達と別行動している零牙、あざみ、鈴音、菜摘の四人は霧
島の家に着ていた。

あざみ「よし着いたわよ」

菜摘「……今更思っけど、本当にここに居るの？」

零牙「ちあ」

菜摘の疑問に零牙はあっけらかんと答える。鈴音は、余りの適当さに苦笑いを浮かべてしまう。

零牙「それは家の中に入ってからにしましょう」

あくまで気楽に答える零牙は、玄関の鍵穴を覗き込む。緊急事態なため、常識人の三人は見てみぬふりをする。

零牙「久々登場。『13ある犯罪行為を犯す道具の一つ！』潜入
ピッキングツールツツツ!!!」

高々とそう宣言すると、先が色んな形に曲がった針金を取り出す。そして、鍵穴にそれらを入れたところで――

ピリリリッ!!!

ポケットに入っている白い携帯が鳴った。相手は別行動している修からだ。

修『もしもし。』

零牙「城崎先輩。そっちはどうでした？」

修『ああ。予想通りだ。お前はこれからどうするんだ?』

零牙は一瞬、その質問の意味が分からなかったが、少し考えてから言う。

零牙「……どうしましょうね。正直、工藤さんを助けたらこの事件から手を引こうかなとか思ってます」

修『救ってこい。どんな命だろうと、見殺しにされていい理由にはならないだろ?』

零牙はその言葉を頭の中で吟味して、一つの答えを出した。

零牙「……そうですね。やれるだけやってみます。待ち合わせ場所はわかってますね?」

修『ああ。わかった。オレ達も今から向かう』

そこで零牙は電話を切った。話している間にピッキングは済ませたため、静かに家の中に侵入する。

以前来たときと同じく、リビングに足を踏み入れる。

テーブルの上にコーヒーの入ったカップが2つある…。

鈴音「誰がいるね」

恐らく片方は霧山だろう。だが、靴がなかったため、もう片方はおそらく…

零牙「かくれんぼは止めましょう。工藤真希さん」

あざみ「真希？いるんでしょう？」

真希「……」

零牙とあざみがリビングの奥にあるドアに向かって声を張ると、ドアから真希が現れた。

長い髪を後ろでまとめ、生きているのか疑いたくなるほど、真っ青な顔をしている。

あざみ「真希……」

あざみが姿を見せた真希を抱きしめる。しかし真希の目は、絶望に満ちた目だった。

零牙「真希さん。あなたに確認したいことがあります」

真希「……」

零牙「木道真一は、警察の捜査上で宮島理子さんとあなたが被害にあった暴行事件の犯人、岩村隆史ですね？」

真希「どうして、それが……」

零牙「こじつけに近いですけど、あなた達が霧島に協力する理由はそれしか考えられない」

真希「そう……」

真希は零牙を見つめてうなだれる。すると、鈴音が零牙の後ろから恐る恐る質問した。

鈴音「一つ教えてください。あなたが被害にあったのは何年前ですか？」

真希「…16年前よ」

絞り出すような声で真希は答えた。鈴音は礼を言っ
て零牙の後ろに下がった。

だが、零牙は一步真希に歩み寄って話しかける。

零牙「安心してください工藤さん。あなた達の“目的”は達成されます」

零牙の言葉を聞いた真希は、「え…？」と驚いた顔で零牙を見つめる。

真希「…本当に？」

零牙「ええ。形は違いますが、必ず目的は達成させます。だから、安心してここで待っていてください」

真希「…彼はバーにいるわ。事態が変わったから、実行行使に出るって…」

零牙「…そうですね。ありがとうございます」

零牙は真希に礼を言つと、玄関に向かつて歩きだした。

零牙「・・・行きましょう。全てを、終わらせに」

闇の先にある光（後書き）

前回までのあらすじ。

夢幻の冷蔵庫から、突如ケーキ（苺のショートケーキ）が消えた。

消えたケーキは、一体どこへ…

- - - - -

夢幻「……正直に聞く。零牙、白状しろ」

零牙「なんでオレなんだよ！」

ミア「だってレイ、甘いもの好きじゃん。『登場人物紹介』でも明記してあるし」

修「そうだよな。普通に考えて、お前がこの部屋に一番出入りしてたよな。なら可能性も…」

鈴音「零牙君。白状しなさい。怒らないから」

菜摘「さつさと白状した方が良いよ？」

零牙「オレはやってません！」

梢「犯人はよくそう言う」

椎「白状したほうが身のためやで零牙君」

零牙「ちょ…なんでオレが夢幻のケーキを食べなきゃいけないんだ！自分で作るわそんなもの！！」

夢幻「無駄だぞ零牙。実はあれ、苺の中に下剤入れといたから。そろそろ効いてく…」

????「おおおお腹がああああああ！」

夢幻「ほら効いて…え？」

あざみ「い、痛い！急にお腹があああ！」

零牙「あ、あざみ先生？」

修「あー。そういえば一番可能性があるよな……」

ミア「先生が犯人だったんだ……」

鈴音「なんか拍子抜けしちゃったね」

椎「アホらし……帰る帰る」

『帰る帰る』

あざみ「ちょっとー！少しは私を心配しないよーっ！」

夢幻「ちなみにトイレはあちらです」

あざみ「借りるわー！」

ダダダ……

夢幻「……かくして、事件は解決したのだった……」

チャンチャン

零牙「……適当だなあ」

隠された真実（前書き）

事件パート5、解決編です。

ちょっと長めです。しめんなさいm（）（）m

隠された真実

『本格推理委員会』十二名は、バー《セルペ》の前に来ていた。

零牙「ここか…」

菜摘「早くなかに入りましょう？霧山がなにをしているんだかわからないんだし…」

零牙「その前に菜摘先輩、例のお願い、聞いてくれましたか？」

菜摘「一応言つといたから大丈夫だろうけど…」

零牙「わかりました。じゃ、いきましよう」

全員車から出て来て、バーの店の前まで行く。いざ入ろうと、零牙がドアに手をかけたところで…

樋口「おい山下！なんでお前がココにいる？」

後ろから余計な声が聞こえた。

山下「ひ、樋口課長！なぜここに？」

樋口「いや…それは…。とにかく、お前はこんなに子供を連れてなにしようとしているんだ!？」

実を言うと、樋口は零牙に脅されてきたのだ。(もちろん変声器を使って)

どうやって脅したのかは、色々とヤバいので割愛させてもらおう。

零牙「(よし来たな…) 山下さん、この人は？」

山下「刑事課長の樋口課長だ。僕の上司にあたる人だよ」

樋口「質問に答える山下。ここでなにをしようとしている!？」

山下「いや…。それはですね…」

山下はしどろもどろに言葉を濁す。そこで、見かねた零牙が強行策にでた。

零牙「事件を解決するんですよ。意図的に隠された真実を知る者達が、犯罪を起こさないためにね!」

樋口「君はいつたい何を・・・うわっ！」

零牙がピッキングして開いたバーのドアを、零牙が蹴り破る。荒々しい入り方である。

零牙は躊躇うことなく中に入っていった。

ヒュオッ！

零牙が中に入ったと同時に、ドアの脇から男が何かを零牙目掛けて振り下ろした。

だが…

バギッ！ドスン…

零牙「残念。生憎と奇襲には慣れていてね」

ミア「な、なにがあったの!？」

零牙「この人がオレを襲って来たんだよ」

後ろから来た修がドア脇のスイッチを押して、店内に明かりを付ける。

零牙「ね？木道真一さん。…いや。強姦魔、岩村隆史さん？」

真一（隆史）「ぐう…」

樋口「こ、コイツは…！」

樋口が岩村を指差して驚く。零牙は修と視線を合わせ…

ガシッ

修「すみませんね。ちょっと動けなくなってもらいますよ？」

樋口「な、何をしているんだ君は…！」

樋口を羽交い締めにして拘束する。

「じゅう」

どこからか唸り声とも、叫び声ともつかない声が聞こえた。

菜摘「私が行くね」

音の出所にいち早く気付いた菜摘が、バーの隅にあるトイレに行った。

そこには、口をガムテープで塞がれ、両手両足をロープで縛られたマスターの姿があった。

菜摘「大丈夫ですか？」

菜摘は口を塞いでいるガムテープを剥がす。

マスター「女が、女が！こ、殺される！」

駄々をこねる子供みたいにマスターが騒ぎたてるトイレの奥にある鏡に、うつすらと女の幽霊が浮かび上がっていた。

菜摘「こんな子供だまし…エイツ！」

可愛らしい叫びと共に、菜摘はバーの椅子を投げて鏡を割った。け

たたましい音になる。

鈴音「……菜っちゃん、もう少し静かに出来なかったの？」

菜摘「こういうのは思い切りが大事なんだよ。鈴ちゃん」

菜摘は悪びれもせず、むしろ堂々と言う。改めてトイレの奥を見ると、未だに幽霊がいた。

ミア「これ…液晶のモニターだ」

梢「こっちはマジックミラーになっている」

マジックミラーとは、半透過性の鏡で、仕切つてある二つの部屋の片側を暗く、片側を明るくすることで暗いほうはガラスになり、明るいほうは鏡になるのだ。

また、両方明るければただのガラスになる。

菜摘「なるほど？液晶モニターに何の映像も移し出されていないければ、マジックミラーはただの鏡になり、映っている間は女の幽霊が浮かび上がるって仕組みか」

零牙「他の心霊現象も、ブラックライトとマジックミラーを応用したものでしょう。」

……さて、そろそろ出て来たらどうです？霧山さん」

バーの中に零牙の声が響くが、何も起こらない。

零牙「工藤真希さんのトリックは見破った。あなたの霊能力は僕らには通用しない」

そこまで零牙が言うと、カウンターの奥の扉から、霧山が現れた。左目は金色になっている。

霧山「君がここに来ることはわかっていたよ。速見零牙君」

零牙「まずは気味悪いそのコンタクトを外してください」

零牙は自分の左目を指差して外すよう促した。霧山は一回「フッ…」と笑うと左目から金色のコンタクトを外した。だが、実際に山下がコンタクトを外して金色の目を露わにしたところを目撃した山下は驚いた。

山下「コ、コンタクトだと？いつたいなんで…」

ミア「パームっていう、初歩的な手品の技術ですよ。外したように見せかけて、本当は付けたんです。後は、あらかじめ手の中に隠し

ていた黒のコンタクトを見せればいい」

ミアがそこまで説明すると、霧山は笑った。つまり、認めた証拠――

霧山「君は、なかなか手品について詳しいようだね」

ミア「趣味ですから」

霧山は「そうかそうか」と含み笑いをする。そこで零牙が不機嫌になつていたのは誰も知らない。

霧山「しかし君たちは面白いことを言ったね。

』『どうやって工藤さんがあの部屋から消えたのかがわかった……』
か。あれは怨霊の仕業だよ」

零牙「ハン。言ったはずですよ。あれはトリックです。なんなら、
ここで説明してみせましょうか？」

霧山「良いね。ぜひ聞かせてくれ」

零牙「そうですか。じゃあ説明してやる。あれは、簡単なトリック
だ」

零牙はカツンカツンと、一歩ずつ霧山に近づきながら説明する。

零牙「まず、『工藤真希さんがどうやって消えたのか』ってトリックだが……。そもそもそんなトリック自体存在しない。なぜなら、彼女はあなたの協力者だからだ。自分の意志で部屋を出ればそれで済む」

霧山「……」

零牙「あとは推理小説に良く出てくる手だ。

彼女が隠して置いた部屋の鍵をあなたが拾い、ドアを開けるふりをして鍵を閉め、

管理人から鍵を借りてドアを開けてリビングに行く。後は、こっそりテーブルの上に置けば密室の完成

……全く。こんな手でオレ達を騙そうなんて、正直笑えるね」

ガツ！と、霧山の目の前に立って見上げる。なぜか零牙のその目は、哀れんでるような、そんな瞳をしていた。

零牙「霧山、復讐なんてもう止める。こんな事したって、意味がない」

霧山「復讐？はて、なんのことだか」

零牙「しらばっけれんなよ霧山」

零牙は一度そこで言葉を切り、バーの中にいる全員が聞こえるように言った。

零牙「宮島理子は、あんたの恋人だったんだらう？」

え？と、本格推理委員会のメンバーは零牙を見た。正に信じられない。そんな顔を全員がしていた。

ミア「き、霧山が宮島さんの…彼氏？」

梢「有り得ない。例え恋人だったとしても、それじゃ霧山は…」

あざみ「そうよ。あそこにいるインチキ霊媒師は、昔木ノ花学園で先生をしていたわ」

あざみ先生の鋭い切れ目が、霧山を射抜くように見る。

あざみ「悪いけど、言い逃れはさせないわよ。あなたと生前の宮島さんが付き合っていた確かな証拠は、私が握っているから」

霧山「フフ…隠すこともない。そうだ、私は理子と付き合っていた。禁じられた仲だとはわかっていたが、私は理子を愛していた…。彼女は私に、看護師になりたいと言う夢を教えてくれた。私は素直に応援したよ。君ならきつとなれる。理子には明るい未来も、夢もあった…」

霧山はわずかに視線を上に向け、目を細めていた。その脳裏に浮かんでいるのは、宮島理子（彼女）の笑顔だろうか。夢だろうか…

霧山「だが」

霧山は天井に向けていた視線を、バーのマスターと樋口に向けた。その目には、メラメラと憎しみの炎が灯っている。

霧山「あの男に肉体的にレイプされ、あの男によって精神的にレイプされた結果、死んでしまった！！」

君に…君たちにわかるか？愛する者を奪われた者の気持ちか！この胸にたぎる、憎しみと殺意の感情が、君たちにわかるのか！？」

霧山は最後には叫んでいた。それほど強く、強い憎しみが彼の中にあるのだろう。

だがしかし――

零牙「分かってねえのはお前だ霧山」

霧山「……？」

零牙「確かに、オレ達にはお前の気持ちは分からないかも知れない。だが、一つだけ言うておく。

――宮島理子の命を奪ったのは、あそこで這いつくばっているマスタ―（ゲス野郎）でも、あそこにいる樋口（カス野郎）でもない。お前自身だ霧山！」

霧山「君は、なにを言っている？」

零牙「教えてやるよ霧山。彼女がどうして死んでしまったのか。その本当の理由を、『本格推理委員会（オレ達）』がお前に教えてやる！」

だがしかし、彼らは分からなくとも、誰かを救い、守るために真実へと突き進む。

――
――
――
――
――
――
――

零牙「さて、まずはあなたの冤罪から晴らしましょう。岩村さん

霧山に啖呵をきつた零牙は、岩村隆史の方を向いて話し始めた。岩村はビクツとしてオレの方を見る。

零牙「さて、未だに信じられないと言う風な顔をしている樋口さんにご紹介します。整形して顔は変わっていますが、この人は岩村隆史さんです」

零牙は樋口を睨みながら岩村を指差す。瞬間、樋口の表情が明らかに変わった。驚き、いや何かを恐れている表情かおだった。

零牙「そしてこれは、亡くなった宮島理子さんの日記帳です。彼女が暴行に遭った日のページには、十字架に蛇が巻きついている絵が描きこまれました。恐らく、彼女が暴行犯の手がかりとして描いたものでしょう。」

「岩村隆史さん、あなたの腕を見せてもらえますか？」

岩村さんが躊躇うことなく左腕を見せる。そこに刺青はない。

山下「な……刺青がない!？」

あざみ「前に見たのはペイント。しかも腕が左右逆よ」

零牙「彼もまた、霧山さん側の人間です。これは心霊現象を強調する目的と、意図的に刺青を見せる二つの目的がありました。真犯人^{ターゲット}の恐怖心を煽るために。全部知っているのだぞ？というアピールだったのでしょうか。」

……そして、その真犯人とは」

そこまで零牙が言うと、椎は、ロープで縛られて上手く身動きの取れないマスターの腕をとり、その袖をめくった。

そこには、確かに十字架に巻きついた蛇の刺青があった。

零牙「真犯人はあなただ、マスター。あのサイトの動画が何よりの証拠。そして恐らく、犯行現場はバーになる前のこの場所。そして

……」

バーのマスターはぐったりして身を縮める。そして零牙は、続く言葉を一際大きな声で言った。

零牙「岩村さんは冤罪なのです！」

隆史「お前の……お前のせいだ……」

岩村はぶつぶつと言いながら立ち上がった。その顔は血管が浮き出て真っ赤になり、目にはうっすら涙が出る。

隆史「おおおっ！」

突然岩村が雄叫びをあげて、樋口に飛びかかった。あまりに突然な出来事に、修は慌てて樋口から離れる。

修「止める！」

岩村が殴りかかる寸前で、修が押し倒して岩村を抑える。案外簡単に押さえつけることができ、岩村は嗚咽を殺して泣いていた。

その様子をチラッと見た零牙がさらに説明を続ける。

零牙「あそこにいるマスターは、何らかの方法を用いて警察にもみ消しを頼んだ。まあ十中八九、金銭でしょうね」

あざみ「正確には彼の父親よ。彼の父親は元国会議員だった。そして宮島さんの事件は、彼の再選が掛かった選挙中に起こったのよ。

息子の不祥事の発覚を恐れた彼は、知り合いの刑事に事件の内幕を頼り、捜査を依頼した。それが、樋口だったのよ」

ミア「でも、宮島さんは自殺してしまい、マスコミが騒ぎ立てた。警察としては何が何でも犯人を捕まえるしかなかった…」

梢「あそこのマスターを逮捕すれば裏取引が発覚する。だから、適当な人に罪を被せて無理矢理解決させた。これが隠された真実」

そう。全ては、二人の男の欲望から始まった。これにより、多くの人間の人生が狂わされることになった。

隆史「あの事件のせいで、俺の人生はめちゃめちゃになった…」

零牙「いや、あなただけじゃない。もし宮島さんの時点で彼を逮捕していれば、工藤さんは乱暴されずにすんだ。警察は、真犯人を知っていたながら野放しにしたんだ」

岩村隆史が出所したのは18年前から3年後…つまり15年後である。

工藤真希が乱暴されたのは16年前。その後、彼女の人生は大きく歪んでしまった…。

零牙「樋口さん」

零牙が樋口を見る。その目は凍てついでいて、完成に見下していた。

零牙「言っておきますが、物的証拠はありません。ですが状況証拠なら揃ってる……。罪を認めてくれますか？」

零牙はそれでも優しく語りかける。まるで、最後まで救いの手を差し伸べる神父のように。

樋口「……冤罪だと？バカバカしい。そんなことは知らない」

樋口は零牙を見返すが、その目は怯えきっている。零牙は「そうですか……」と嘆息し、さっきよりも楽しそうに次の言葉を言った。

零牙「なら、あなたの息子さんは二度と帰ってきません」

樋口「！！なぜ、裕太のことを……」

零牙「そんな事はどうだって良いでしょう？」

さあどうします？罪を認めて息子を返してもらおうか。それともくだ

らない階級にすぎりついて息子を見捨てるのか。答えは全てあなた次第」

零牙は心底楽しそうに笑う。鈴音達は「あれ、零牙君だよね…?」とか言っているが、イギリス清教の異端審問官モードに入った零牙は、肉体的にも、精神的にもとことん相手をいたぶることに對して何一つ容赦ない。

樋口「……息子を、返してくれ……」

長い沈黙の後、樋口が弱々しく言った。つまり、罪を認めた証拠-

零牙「ですって。どうします霧山さん」

霧山「彼はある新興宗教団体に預けてます。悪魔祓いと言う名目でね」

樋口「む、息子は無事なのか?」

霧山「ええ。至って健康らしいですよ」

霧山がニコニコっと笑って答える。だが、その笑みはどこか黒い。

零牙「……往生際の悪い。まだあるでしょ？」

霧山「気付かれてしまったか。実は彼にお布施として500万円ほど納めてもらったんだ」

樋口「バカな！そんなお金どこから!？」

霧山「刑事課長の息子なら喜んでお金を貸してくれる団体があるでしょう。たしか、十日で一割でしたっけ？」

瞬間、樋口は崩れ落ちた。警察課長の息子が、暴力団から金を借りる。言わずもがな、彼に待ち受ける未来は破滅である。

霧山「さて速見零牙君。これからどうするのかね？」

霧山が勝ち誇ったように言う。

零牙「何がですか？」

霧山「我々は彼らのエゴによって人生を狂わされた。すでに過去の事例は変えられないからそこは諦めよう。しかし彼らは罪を受けるべき人間だ。君も、そうは思わないか？」

霧山の問い、それはこの場にいる全員に向けられたような気もした。皆の視線が零牙に集まる。

零牙「……確かにオレも、コイツらは罪を受け入れるべき人間だと思えます。正直、あなた達が復讐を終えてからでも遅くはない。そう思っていました」

霧山が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。しかし零牙は「だが」と言葉を続ける。

零牙「その前に、彼女の死の本当の理由を言わなくてはならない」

霧山「理子はあの二人によって殺された」

零牙「そうですね。それもあります。」

しかし最後の理由はあなたにある。言ったでしょ。『彼女を死に追いやったのはあなただ』って」

霧山「……何が言いたい？」

零牙「それは、オレからじゃなくて菜摘先輩にお願いしましょう」

零牙と視線を合わせた菜摘は、零牙から日記帳を受け取りこつ咳いた。

菜摘「『あの人に受け入れてもらえないのであれば、私は生きていく価値はあるのだろうか…』」

霧山「それはいつたい…」

菜摘「紛失した宮島さんの遺書の一部です」

霧山の目が大きく開かれる。その顔は驚愕して、絶望しているように見えた。

菜摘「霧山さん、あなたは最後に彼女を女性として拒絶したんじゃないありませんか？」

暴行被害に遭った女性は、自分を汚れた存在だと思い込んでしまうやすいそうです。そんな彼女にとって、愛するあなたに背を向けられたことは、どれだけの苦痛だったんでしょう…」

霧山がペタンと床に崩れ落ちた。目から涙が溢れ、ハハハ…と力なく笑っている。

零牙「言ったでしょう。彼女を殺したのはあなただって」

零牙がトドメの一言を言った瞬間、霧山は天を仰ぎ見ながら泣き始めた。

これが、本当の真相だった。

- - - - -

霧山「私は…何かを恨む前に、彼女を抱き締めてやるべきだった…」

零牙「そうです。そして彼女は今も、あの屋上で苦しみ続けています。救えるのはあなたしかいない。彼女を、助けてください」

零牙は最後の最後に霧山にも救いの手を差し伸べた。どんな人間でも救う。絶望しかない闇のなかで希望の光を照らし出す。

それが、速見零牙が、自らの人生を賭けてでも叶えたい願い…。

霧山「ハハハ…。叶うなら、あの男に会う前に君に会いたかったよ。速見零牙君」

零牙「あの男…天井秀一か！」

霧山「彼は私に理子の魂を見せてくれた。そしてこうも言った。彼女は憎しみに捕らわれている。その憎しみを晴らさぬ限り、彼女は救えないと。だから私はこの復讐劇を計画した。それなのに…」

零牙「希望が必ずあると言うのが戯言たわごとなら、絶望しかないと言うのも戯言です。人の感情が、全て同じ方向に向かうなんて有り得ない」

霧山「そうだな。間違っていたのは私だった…」

霧山は泣くのをやめ、しっかり零牙を見て微笑んだ。零牙もその笑みを見て微笑み返す…。

霧山「だが、それでも私はあの男を許せない」

なっ…。と零牙が気付いた時には、霧山はマスターのそばに近寄り、近くにいた梢達を突き飛ばして、マスターの首に刃物を押し当てる。

霧山「すまない零牙君。私はもう、後に引くことは出来ない」

零牙「いや出来る。まだ間に合う！」

霧山「もう無理だ。私は彼女が乱暴されている映像を何度も見た。

映像の中で、彼女は屈辱に耐えながら何度も私の名を呼んでいた。

しかし、私はどう頑張ってもそのときの、その場所に行つてやることが出来ない……」

霧山は掃除用具入れからポリタンクを取り出して、中身を撒く。店のなかに中に入っていた液体の刺激臭が広がる。

霧山「零牙君、君に許せるか？ただ暴行するだけでなく、その死後も、小遣い感覚で自分の大切な人が暴行される映像を、万人に晒される事が」

霧山はジッポのライターを取り出し、火を付ける。だが零牙は動く事が出来なかった。

さっきの霧山の問い。零牙はすぐに彼女（雅）のことを思い浮かべた。答えはすぐに出る。許せない。だからこそ、霧山の行動を止められなかった。

霧山「君になら、許せるか？」

目の前で、消えかけている命があるというのに、動けなかった。

零牙「……」

霧山「私は、彼女に詫びよう。そして今度こそ、あの世で彼女を受け入れよう」

霧山は持っていたジッポのライターを液体の中に落とす。ジュワッ！という音と共に、店の中に火が燃え広がる。

零牙「！！くそっ！！」

ミア「ちょ！レイ！？」

修「ダメだミア！逃げるぞ！！」

ミア「でも、まだレイが……」

あざみ「このままじゃあなたまで燃えちゃうわ！一旦外に逃げるわよ！」

ミア「でも、でも、レイーッッッ！！！！」

雅や修達はすぐさま店の外に出て行くが、零牙は霧山を助けに単身火の中に飛び込んだ。

零牙「霧山あ！」

霧山「どうしたのかな零牙君。早く逃げないと、死んでしまつよ？」

零牙「お前も一緒に逃げるんだ！早くこっちに来い！」

霧山「……フッフ。やはり君は優しいな」

霧山は寂しそくに笑うと、零牙に向かって何かを投げた。それは、両手両足を縛られたマスターだった。

霧山「連れていけ。私は共にいけない」

零牙「霧山っ！」

霧山「優しい君に一つ忠告しておこう。いずれ彼は、君の大切なものを全て奪いにくる」

零牙「霧山！早くこっちに……」

霧山「君に、出会えて良かった」

その瞬間、霧山と零牙を分かつ火の壁が激しく燃えた。このままじや、零牙自身も燃えてしまう。

零牙（何か、何かねえのか！みんな笑って帰れる、そんな幸福な結末になる、逆転の策はないのか！！）

しかし、そんな策はない。当たり前である。

零牙は、人を殺す魔術ちからは持っていて、人を生かす能力ちからは持っていないのだから。

零牙「……くそっ！くそったれがあああつ！」

零牙はマスターを担いで、急いで店から出て行った。

数分後、炎が店を跡形もなく全て燃やし尽くした。

一人の男の命と共に…

ミア「ちょっと！離してよお兄ちゃん！」

そのころ、バー《セルペ》の外に避難したミアは、修によって腕を捕まれていた。

修「ダメだ！今行ったら、お前まで燃えちまう！」

ミア「でも、まだレイが中にいるんだよ!？」

修「大丈夫だ！あいつは、お前を残して死にはしない！」

ミア「でも、でもっ！」

オレ「大丈夫だミア。オレはこの通り生きてるよ」

轟々と燃える店から、オレはマスターを背負って出てきた。ミアが駆け寄ってオレに抱きついてくる。衝撃で、マスターがアスファルトの地面に落ちた。

ミア「バカ、バカ、バカ!!レイの大バカ!!」

オレ「…なんだよ。オレはちゃんと生きてるぞ?」

ミア「だから大バカなんだよ!うう…。生きてて良かった…」

ミアがオレの胸元で泣く。オレはミアの体を抱き締めて、頭をなでてやった。言葉はいらない。ただ、生きてるだけで良い……。

樋口「…お前のせいだ」

燃え盛るバー《セルペ》を見ていたオレ達の後ろで、樋口がヨロヨロと立ち上がって呟いた。

樋口「お前のせいだっ！お前のせいで、私は、私の人生は破滅した！！どうしてくれる！！？」

樋口はミアを突き飛ばし、オレの胸元を掴んで噛みつくように叫ぶ。その目は充血したように真っ赤になっていた。

樋口「お前さえいなければ、私はあのまま平穏に暮らせたはずなのに！！全てメチャクチャだ！どう責任をとってくれるんだ！？」

オレはされるがままにその言葉を聞いていた。そして

オレ「……うるせえよ……」

オレは樋口の手をほどき、強烈な回転蹴りを樋口の脳天に叩き込んだ。

バランスを失った樋口がアスファルトの地面に倒れ込む――。

オレ、「うるせえよこの野郎！今更テメエに、そんな事を言う資格なんてねえんだよ！」

地面に倒れ込んだ樋口の胸元を掴んで噛みつくようにオレは叫ぶ。

オレ、「テメエのせいで、人生狂わされた人間が何人いると思っ
てやがる！」

テメエのせいで、本来傷つかないで済んだはずの人が傷付き、覚え
のない罪に問われた人がいる！

テメエがのうのうと気楽に人生歩んでいる間に、どれほどの人間が
悩み、苦しみ、傷付いたと思っ
てやがる！

本当はテメエが、あそこの二人に土下座して謝るべきなんだよ！！
それなのに『どう責任をとってくれる』だあ？ふざけんじゃねえよ
！ぶっ殺されてえのか！！」

心の底から本気で怒った。それぐらいの勢いでまくしたて、樋口に
怒りをぶつけた。

樋口はオレの怒りにビビったのか、「ひいひいっ！」と情けない
声を出して後ずさった。

オレ「ふざけんじゃねえよ。今度テメエがそんな事言ったら、あそこにいる霧山に変わってオレがテメエをぶち殺す」

殺気の籠もった声で樋口に告げる。樋口は涙を浮かべ、ガタガタと震え始めた。

楠木「……これは一体何事だ？」

そこへ、遅れてやってきた菜摘先輩のお父さん、楠木本部長がやってきた。

楠木「山下、これは一体何事だ？」

山下「ここにいる樋口刑事課長は、19年前に起きた暴行事件の隠蔽を金銭で依頼され、被害者を自殺に追い込んだ上に、無関係の人間に罪を被せたんです」

山下さんが説明する。楠木署長は最初は驚いたように目を丸くしたが、すぐにオレにビビっている樋口に確認する。

樋口「……申し訳ありません」

樋口が今にも泣きそうな顔で呟くように言った。楠木署長は大きな

ため息をついて立ち上がった。

楠木「……そうか。詳しい話はあとでゆっくりと聞こう。その上で正式な見解を発表する」

楠木署長はあくまで凜とした態度で言う。

そのまま立ち去るとした署長の前に、娘の菜摘先輩が立ちはだかった。

菜摘「待ってよお父さん。まさかお父さんは、今回の事を煙に巻く気？」

菜摘先輩の鋭い視線が楠木署長に当たる。署長は、もつうんざりだという風な表情をうかべる。

楠木「菜摘も少しは考えてみる。こんな事を公おおにしたら、警察組織が大きく揺らぐ」

菜摘「だからどうなの？」

楠木「全国の警察官のためにも、スキャンダルはできるだけ抑えるべきだという事だ」

楠木署長はやれやれと言った感じにそう言う。

菜摘「そう。つまりお父さんは、大利の冤罪は晴らすけど、捜査ミ
スで終わらせる気なんだね」

楠木「そう言う事だ。私が背負っている、全ての警察官のためにも
な」

楠木署長は真つ直ぐ菜摘先輩を見つめてそう言った。それだけ告げ
ると、乗ってきた自動車に向かって歩きだす。

楠木「ああそうそう。今回の事は警察が発表するまで黙っていてく
れ。」

後々君達にも事情聴取をとるから、それも頭に入れといてくれ」

楠木署長が立ち止まって思い出したようにそう言う。そして何もな
かったかのように再び歩き始めた。

オレ「ふざけんなよ……」

そんな署長の態度を見て、無駄だとわかっているながらもオレは叫ぶ。
いや。叫ばずにはいられなかった。

オレ「ふざけんなよ！そんなの、テメエの勝手な理屈だろうが！」

楠木は立ち止まり、後ろから零牙をチラッと見る。

零牙「なにが全国の警察官のためだ！全部テメエの保身のためだろうが！！」

その言葉に楠木は何も返さない。

零牙やみんなが力を合わせて見つけた真実。その真実を、理不尽に変えられることが、零牙は何よりも嫌だった。

自分達の名声なんかどうだって良い。

それじゃあ苦しみ続けてきた被害者があまりにも報われない。

被害者を救うのが警察官の使命なら、嘘偽りない真実を告げるのが正論だろう。

しかし、

楠木「……子供の戯言に付き合ってられるほど、私は暇ではない」

眞実は、いつだって権力にねじ伏せられる。

楠木は、零牙の言葉に耳を傾けることすらせず車に乗った。

車の発信音と共に、後味悪くこの事件は幕を閉じた――。

――

――あの事件から、一週間経った。

懲戒免職に追いやられた樋口は、現在取り調べを受けている。比較的素直に自供しているらしい。

緋村裕太改め、樋口裕太は無事保護された。まああの本人は、自分の意志で入ったのだから、当初はポカンとしていたらしい。

そして今、オレはミアと一緒に屋上に来ている。

ミア「……風が気持ちいいね」

オレ「ああ」

ミア「宮島さんは、霧山さんのところに行けたのかな？」
オレ「……多分な」

ミアとのたわいもない会話。気持ちの良い風に抱かれる中で、オレは確かに“声“を聞いた。

オレ「……はい。わかりました。必ず伝えます」

ミア「…誰と話してるの？」

一瞬だったが、優しい声だった。多分、あれは…

オレ「宮島さんから、父親にと、伝言を預かった」

ミア「なんて、言ってたの？」

オレ「それを、今から伝えに行く」

そう言っただけでオレは、屋上の扉に向かった。

ミア「私も、ついて行って良い？」

後ろからミアが話しかけてきた。もちろんオレは、笑ってこっぴどく答える。

オレ「ああ」

・ ・ ・かくして、学校の噂から始まったこの事件は、幕を閉じたのである。

続く

隠された真実（後書き）

夢幻「はい。第三の事件終了ー！」

零牙「お疲れ様」

夢幻「いやあ、長かった。うん。打つのに大変だったよ」

零牙「そうかそうか。ところで作者。そろそろ新学期だな」

夢幻「オレは明後日からだがな。次は二年生か…。何が待ち受けているやら」

零牙「まあどうにかなるさ。ところで久々に次回予告が出来るそうだな」

夢幻「ニヤー。休み中に書きまくったからねー。次回は一旦キャラクターを整理しようかなー」

零牙「初期との変更点もあるのか？」

夢幻「ん」。あることにはあるかも。でもま、大抵は『初期設定＋新設定』だから。お前を書くの大変だったんだぞ？

零牙「そりゃあなんたって、主人公だからな。うん」

夢幻「乗せるのは主要メンバーとそれに親しい人ぐらいかな。ま、もうちよい編集して載せます」

零牙「という訳で、次回は『登場人物紹介その2』です。なるべく早くあげますので、次回をお楽しみに」

登場人物紹介その2（前書き）

前回のあらすじの通り、メインキャラクターや、その他周辺の重要人物のプロフィールです。

一旦整理！ということですね！！

登場人物紹介その2

《本格推理委員会》

『速水零牙』

・主人公

・特徴：ボサボサの白髪
顔はイケメン。

・小等部六年六組所属

本格推理委員会メンバー

・イギリス清教第零聖堂区 『必要悪の教会』ネセサリウス 所属の魔術師

備考：イギリス帰りの帰国子女。見たもの聞いたことを全て記憶する『完全記憶能力』を有する。

並外れた記憶力にものを言わせて様々な知識を有する。が、その知識はほとんどピッキングやハッキングなどの違法行為に使われている。

運動神経も抜群で、外見を見れば完全無欠の天才少年だが、実は動物嫌い。一番嫌いな動物はねずみ。

幼いながらイギリス清教の神父でもあり、土日はもっぱら仕事に専念している。

真向かいに住む管原雅と交際中。彼女のことを大切に思っており、彼女を守るためなら手を汚すことも厭わない。

本当はイギリス清教のトップ、^{アークヒショップ}『最大主教』の命令で、木ノ花学園に潜入した魔術師。任務は『木ノ花グループの機密事項を盗み出すこと』いわゆるスパイである。

扱う魔術は悪魔崇拜術式。ただし消費する魔力がハンパないため、通常は超人の殺人剣術『飛天御剣流』を振るう。

一撃必殺の白兵戦を信条としている。一度『敵』と見定めたら容赦なく相手を叩き潰す。

魔導書『月の書』を有し、使用すれば星の位置や月の形を自由に変更出来る。

魔術はデフォルトでは『武器召喚』と『肉体強化』のみ扱える。が、状況によっては『鉄と青銅の鎖』のような魔術も使える。

魔法名は『hopliss666』『我が存在が人々の希望とならんことを』

九歳の時、自身を育ててくれた父親と姉を魔術で殺害した過去を持つ。

『管原雅』

・ヒロイン

・特徴：前髪に付けた花飾りと八重歯。笑顔が可愛い美少女。

・小等部六年六組所属

本格推理委員会小等部代表

備考：父親が母親を殺害し自殺する。その後、引き取ってくれた祖父母の住む田舎でいじめに遭うという過去を持つ。

現在は「前に進む」という決意のもと、元気に生きている。

趣味が手品やジャグリングなどの大道芸を極めることで、腕前はプロ級。

意外と独占欲が強く、嫉妬深い。

恋人の零牙が、何かとてつもなくヤバい事に関わっていることに感づいている。

『城崎修』

・管原雅の従兄弟。

・特徴：稀代の犯罪者（例えるならギャングのボスとか）のような顔をしている。

・高等部一年二組

本格推理委員会メンバー

備考：小二にして城崎家の台所を、小四には家事全般を完全に支配下に置いた人。凶悪な顔だが、中身は『頼れる兄貴』という人。

幼少期から推理小説の探偵に憧れ、培った推理力と洞察力は相当なもの。

管原雅の母親が殺害された事件を解決した張本人。

いじめに遭った雅を城崎家で引き取った後、雅のことをとても過保護にしており、シスコンになっている。

零牙と雅の交際は暖かく見守っている。

『木下椎』

・修の幼なじみ

・特徴：コテコテの関西弁で喋り、トロそうな顔にお下げ髪を下げている。が、運動神経は良い

・高等部一年二組

本格推理委員会メンバー

備考：城崎家から二軒隣の和風居酒屋『なにわ屋』の娘。

どこでも寝るズブとさと、百発百中の勘を持つ。

可愛いものを見ると性格が豹変する極度のロリコン。

授業中に寝て説教されているのに、説教中にも寝たというミラクルな伝説をもつ。

『木下梢』

・木下椎の妹

・中等部二年三組
本格推理委員会中等部代表

特徴：クールな雰囲気を持つ美少女。姉の椎とは違い、標準語で喋るまともな人。

備考：姉とは違いしっかり者。時々『なにわ屋』の仕事を手伝っている。
意外に男子から人気がある。
委員会一影が薄い。

『桜森鈴音』

・本格推理委員会委員長

・特徴：小学生と見紛うほど小柄な人で、短めの薄い茶髪をしている。

儂げな印象を受けるが、根はしっかりした人。

・高等部二年五組所属

備考：高等部料理部の部長でもあり、高等部一の頭脳を持つ。

委員会の中で一番まともな人。

『楠木菜摘』

・本格推理委員会副委員長

・特徴：勝ち気な目をしていて短く切りそろえられた黒髪をしている。パツと見だけでも美少女だとわかるぐらい美人。

・高等部二年五組所属

備考：高等部空手部のエースでかなり強い。

親戚縁者に警察関係者が多く、彼女がちょっと涙を見せれば事件の一つ二つはもみ消せるらしい。
椎と同じく可愛いものを見ると性格が豹変する極度のロリコン。

『木ノ花あざみ』

・本格推理委員会顧問

・特徴：FかGはあろうかというぐらい巨大な胸をしている。性格は破天荒で他人を振り回す天才。

・高等部保険医兼木ノ花学園理事長

備考：木ノ花学園を経営する『木ノ花グループ』の一員で、高校二年の時に立ち上げたIT関連の大企業も経営している。
破天荒で他人を振り回すあの性格は、『木ノ花グループ』という大金持ちの家に、彼女という天才がわがまま好き放題に育った結果だと修は推理している。

破天荒な性格だが生徒のことを大事に思っていて、教師らしく生徒を導いてあげることもある。

《速見零牙を取り巻く人々》表編》

『早川龍之介』

・友人

特徴：青い髪でマヌケ面。

・小等部六年六組所属

備考：零牙の一番の親友。家が道場なので腕っぷしは強い。

本人は認めていないが、白石美雪と許婚の関係。そしてリア充という事で、零牙共々FFFF団によく追われる。

《白石美雪》

・友人

特徴：長い黒髪のと風美少女。お嬢様。

・小等部六年五組所属

備考：雅の親友。昔は『お嬢様』でいじめを受けていたが、龍之介が助けてから彼に惚れ込んでしまい、なんやかんやで許婚に。

とても一途で嫉妬深い。小六ながらアイアンクローや関節技を龍之介にして制裁を加える。

友達想いな人で、小等部では雅以上にモテる。

《菊池響》

・修、椎の友人

特徴：小柄で切れ目。頭の回転が早い。ちびっちゃんが筋肉はある。

・高等部一年二組

空手部所属。

備考：ちびっちゃんが、幼い頃より古武術の市販の父親に武術を習った人。成績も優秀なまさに文武両道。

空手部では菜摘に継ぐエースと言われるほどの実力者。

『風間虎之介』

修、椎の友人

特徴：幼い系の二枚目。だが、中身は三枚目という残念な人。

高等部一年二組

空手部所属。

備考：男子から絶大な人気を誇り、女子から軽蔑の眼差しで見られる人。理由は、彼がとんでもなくドスケベだから。

端から見れば「かわいい〜」と女子から言われるのだが、その後で会話になると相手が「もうやめて!」と言うぐらい下ネタ発言をする人。

空手部に入ったのも、菜摘目当て。根性がないのですぐに辞めるかと思いきや、未だに空手部にいる。彼の下心は並大抵のものではない。

中学時、去っていく憧れの先輩に「先輩、最後の思い出に胸を揉ましてください!」と言ってぶん殴られたという伝説を作る。ある意味、男の中の男。

『城崎岳』

・城崎修の父親。雅の叔父にあたる。

・特徴：立派なあごひげが生えている。痩身な体格だが、筋骨隆々。

・世界を股に掛けるアルピニストで、海洋冒険家。

・備考：生活能力はあるが、日常生活がない人。年がら年中世界を渡り歩いている。だが、スポンサーとなっている会社の社長の意向で、新人育成の方に回された。なので、現在は城崎家に住む。

ギターが弾ける。ザ・ブルーハーツ『少年の詩』が十八番。

零牙と雅の交際は表面上認めていないが、抱きつくぐらいまでならOKらしい（キスしたら殺すと決めている）。

『城崎直子』

・城崎修の母親、雅の叔母に当たる。

・特徴：息子の修ですら妹と時たま勘違いしてしまうほど童顔をしている。体格も修の肩ぐらいまでしかない。

・本格中国歴史小説を書く小説家。

備考：小説家のためか、いつも部屋に閉じこもっている引きこもり。社会人失格の36時間生活を営む。

料理の腕は自力で『暗黒物質（ダークマター）』を作れるぐらい。食べた者は軽度で胃炎、重度で呼吸困難に陥る。

コンビニに行くにも汗だくになるぐらい人見知りが激しい。

零牙と雅の交際は暖かく見守っている。

『姫野真優』

自称、零牙の義妹

特徴：黒の修道服。ちなみに赤毛のミディアムヘア。ロリ美少女

・魔術師見習い

イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属

備考：つい先日魔術師見習いになった修道女。零牙を兄のように慕う。

零牙と違い、攻撃的な魔術はドベだが、その代わり防御・回復魔術は天才的な実力を持つ。

兄と違って従順な修道女シスターさん。

あああ！！！！」

そこへ響きわたる、黒い服を着て、鈍器や刃物を振りかざす生徒達の元気な声。今日もまた、平和一日が木ノ花学園で始まる…。

零牙「…ってそんな訳ねーだろがああああ！！」鈍器や刃物を振りかざす『時点で平和もクソもねーよ！少しは状況を見てナレーシヨンしろよこのバカ作者ああああああ！！』

そこへ、澄み切った青空に一人叫び、追われている生徒がいた。

彼の名は、『速水零牙』

ある理由で、黒づくめの男達に命を狙われている小学六年生だ。零牙「って、何さりげく事件っぽい流れ作ってんだお前は！

確かにあってるけどさ！何も間違ってるないけどさ！そろそろ回想シーンを入れるよ！なんでこうなったのか読者の皆様にもちゃんと説明しろよ！」

彼はひたすら逃げながら、青々とした空に向かって叫び続ける。後ろでは、黒服の集団が数台の砲台を準備している。砲弾で彼を狙いうちにする気なのだ。

零牙「ってマジかよおおおおおおお！それ、どうやっても小学生が使って良い代物しずものじゃねえだろうがよおおおおおおお
おおおお！！！！」

主人公は涙ながら広々とした校庭を駆ける。ドゴオン！と言つ轟音と共に砲台から複数の砲弾が発射された。

「なぜ、彼が砲台で狙い撃ちにされるのか、それにはしかるべき理由があつた。

それは、今日の登校時に起きた事が原因だつた――。

――

零牙「だからだなー。サツマイモってのは果物だと思つわけよ。実際に。
スイートポテトしかり、大学いもしかり、焼き芋しかり、調理すればデザートみたいな料理はできるし、甘味料にだつて扱えるじゃん」

雅「でも芋は芋だよ？それを言うなればジャガイモだつて『ふかし芋』があるよ？」

9月16日。速水零牙とその恋人、管原雅は学校に登校しつつある議論を繰り広げていた。テーマは、『サツマイモは果物かどうか。』

ちなみに言うまでもなく、サツマイモは野菜である。

零牙「そりゃあジャガイモは万能食材だからだ。揚げればフライドポテトとか出来んじゃない。コーンスターチなんか『馬鈴薯じゃがいもデンプン』だぞ？料理している最中に一工夫すればあら不思議。主食にも副菜にもデザートにもなる万能食材じゃん」

雅「だからと言って、サツマイモを果物にするのはどうかと思うよ？」

零牙「そういう枠組みに捕らわれるからダメなんだよ。栗なんて『栗ご飯』があるのに『果物』の部類だぞ？サツマイモだって『果物』の部類だと思うんだがなー」

雅「でも芋は芋だから。野菜なんだよレイ」

零牙「だがなー。『サツマイモ』って名前は薩摩（鹿児島県）から伝わったから『サツマイモ』なんだろ？英語じゃ『sweet potato』ですよ？『甘い芋』ですよ？つまり甘い『果物』の一つとして数えても良いわけで・・・」

果てしなく続く零牙のサツマイモ談議。はつきり言っただうでも良いのだが、雅は笑って言葉を返す。そして、小等部の校門を少しくぐったところで事件は起きた。

零牙「・・・元々サツマイモは中南米原産なんだから、《sweet potato》で判断すべきなんだよ。よってサツマイモは果物なのだーっ！」

雅「でも芋だもん。芋は野菜だからサツマイモも野菜なんだよ？」

零牙「でもだなー。そもそも野菜と「あの…」果物の違いというのは「あのっ！すみません！」

零牙の話に割り込んできたのは女子だった。セーラー服を着て、長い銀髪をリボンで纏めている綺麗な女の子だった。儂く、すぐ散ってしまいそんな雰囲気を持つ少女だった。

???「あの…速水零牙さん、ですよね…？」

零牙「そうだけど…君は？」

綾辻「六年の綾辻と言います。あの…、えっと…速水さんに伝えたい事があって…」

零牙は告白の前振りみたいな場面になって、慌てて頬を赤らめて目を逸らし始めた。それは今までは最初にラブレターとかで相手の気持ちを知っていたが、ここまで面と言われたことはなかったからであり、

後ろからヒシヒシと伝わる、雅の独占欲と嫉妬から生み出される殺気が恐ろしかったりするからである。

綾辻「だ、大事な話があるので、放課後屋上まで来てください！／＼」

ああ。なんと清々しい告白の前振りだろうか。綾辻はそれだけ言うと、タタタ…と走って校舎の方まで走っていった。

その様子を呆然と見送った零牙は、「よし」と言って校舎に走り出そうと駆け出した。

ガッ

雅「……ちょっと良いかなレイ？」

が、彼女の手によって阻まれる。

オレ「な、なんでしょーか雅様」

雅「色々とメンドいから単刀直入に聞くな。……いつあの子にフラ

グを建てたの？」

零牙「いや……。そこはさっぱり……」

雅「よぉーく思い出して。さっきの子の顔、覚えてるはずだよ？」

零牙「あの……さっぱりなんです……」

雅「……ほんとに覚えてないの？」

零牙「……はい」

雅の鬼気迫る雰囲気、気圧されている零牙。しかしいくら記憶を探ったって分からない。そんな零牙にミアは「ハア〜」と大きなため息をつく。

雅「……あの子には申し訳ないけど、ちゃんとつってよ？心変わりなんか許さないし、レイは私のものなんだから」

雅はそれだけ言うと、「先に教室行ってるね〜」と零牙に告げ校舎へ走っていった。零牙もそれに続くように、一歩踏み出した。

FFF団団長『……これより、異端審問会を開催する』

零牙「相変わらず速えなオイ」

が、すぐに30人程の黒い装束を着たクラスメイト…FFF団に囲まれる。

FFF団団長『被告人、速水零牙。何も言わねーからさつさと死ね

…！』

ついに罪名すら省いた彼ら。それほどまでに零牙が憎いのだ。

零牙「毎回思うんだけどさあ…こんなことしているからお前からモテないんじゃないかねえか？」

FFF団A『黙れクソ野郎。よくもオレの管原を横からかつさらいやがって…！』

FFF団B『この前オレの工藤を泣かせたよなテメエ…！』

FFF団C『テメエみたいな奴がいるからオレ達はモテないんだ！』

口々に零牙への恨みつらみを言葉にするFFF団。ちなみに、零牙

という訳である。

零牙は飛んできた弾丸を逆刃刀で切り、“神速”で砲台の前まで動き、砲台を丸ごと切り壊す。

零牙「ってアブねえなお前ら！少しは加減っつものを知りやがれ！」

零牙は朝からずっと追いかけてくるFFF団に内心ビビりながらツッコむ。

しかしFFF団の連中はお構いなしに言う。

FFF団F「うるせえ…お前みたいな化け物と渡り合うにはこうするしかねえだろうが…」

FFF団G「オレ達の平穩は、オレ達で取り戻すんじゃないやあああああ
あ！」

FFF団H「遠距離攻撃が効かねえなら、直接攻撃でどうじゃあああ
ああ…！」

零牙「あれだけやり合っておいて、まだオレに直接攻撃が効かねえ
つてことがわかんねえのかお前ら！なら良いだろう。何度でも教え
てやらあああああああ！…！」

一対三十の戦いが始まる。
勝ちの行方は、言うまでないだろう。

.....

零牙が一方的にFFF団を攻撃している最中…

ミアはミュや杏子、美咲と一緒に今朝零牙に告白してきた「綾辻」
という女の子を調べてた…。

杏子「しかしまー。ミアちゃんもミアちゃんだよねー」

美咲「そっだよね。零牙君の一途さ知ってるくせに、わざわざ相手
の子を調べるなんて」

美雪「……独占欲の塊」

雅「い、良いんだよ！不安で不安でしようがないんだから…／／／」

三人（（可愛いなあ…）（）

雅の恥ずかしがる姿を見て、そう思う三人。そんな雅をちよいちよ
い弄りながらも、女子の情報網によって『綾辻』という生徒がいる
クラスへと歩いていく。

雅「あ、ここなんだ」

ヒヨイヒヨイヒヨイト、一組の教室を顔だけ覗かせて中をみる。

いた。教室の一番右下の机で本を読んでいる。

雅「……比較的大人しい子のようだね」

美咲「うん。なんでもお母さんがスウェーデンの人なんだって」

美雪「……珍しい」

杏子「美雪ちゃん？あんまり色眼鏡で見ちゃダメだよ？」

美雪「……わかってる」

教卓側のドアから中を覗き込む彼女達。怪しいことこの上ない。

「そこで何してんだ？」

突然後ろからかけられた声にビックリして体を仰け反らせる四人。

恐る恐る後ろを見ると、いじめっ子みたいなイメージの太っている男の子一人と細身な小悪党みたいな男の子が二人いた。

「ってあれ！？管原と白石じゃねえか！どうして覗き見みたいな真似してんだ？」

「アホか惣一。そんなの、牛島さんを見に来たに決まってるだろ？」

牛島「ほお。オレを見に来たのか。やっぱり速水みたいなヒョロヒョロより、オレの方が男らしいってことだな」

勝手な憶測で判断する小悪党三人組。雅達は相手にせずさっさとそこから去ろうとするが…

雅「キャッ！」

雅は牛島に腕を掴まれてしまう。雅は激しく抵抗するが、牛島はびくともしない。

雅「ちよつと離してよー！」

牛島「そう嫌がんなって。クラスの奴らに言わなきゃなんねーんだからさあ」

雅「言いつて何を！」

牛島「決まってるだろ？管原とオレが付き合ってるって事だよ。お前、速水と別れてオレのここに来たんだろ？」

雅「誰があなたなんかに！」

牛島「恥ずかしがんなって。お前の気持ちはよぉーくわかったからさあ」

グイグイと雅の腕を引っ張って一組の教室に入ろうとする牛島。止めようと美雪達が雅に駆け寄ろうとするが、小悪党AとBが邪魔をする。

ちよつとマズい展開になって焦り始めた美雪達だが――

小萌「コラーツ！そこで何を騒いでいるんですかーっ！」

美咲「小萌先生！」

六組担当の名物ミニ熱血教師、月詠小萌が偶然にも通りかかった。

小萌「コラ牛島君！あなたは嫌がってる雅ちゃんの腕を掴んで、どこへ連れて行く気ですかー？」

牛島「あん？教室の中へ入れてあげようとしてただけですけど？」

小萌「無理矢理教室の中にですか？」

牛島「先生。オレは管原が入るのが他のクラスに恥ずかしいって言うから、入れてあげようとしただけですが？」

小萌「恥ずかしい…。そうだったんですか？管原さん」

雅「違います！この人私をが無理矢理教室の中に入れてようとしたんです！」

「うーむ」と、そこで考えこんでしまう小萌先生。雅はニタニタと笑って顔を見てくる牛島を睨み付ける。

…キーンコーンカーンコーン

小萌「……チャイムが鳴っちゃったのです。もうすぐ五時間目の授業が始まりますので、牛島君は雅ちゃんの腕を離すのです」

牛島「わかりましたよ…。ほらよ」

牛島は掴んでいた雅の腕を離した。美雪達がすぐに駆け寄って「大丈夫？」と声を掛ける。

小萌「皆さ〜ん。急がないと授業に遅れてしまいますよ？」

杏子「わかりました。すぐ行きます。……ミアちゃん行こ？」

雅「うん」

牛島「管原」

雅が杏子に声に従って、早く六組の教室に行こうと駆けだしたが、牛島が声を掛けてきた。雅が嫌そうな顔をして後ろを振り返ると

牛島「またいつでも来いよ」

ニタニタ笑ってそう言った牛島を雅は思いつきり睨み付けて六組の教室へ戻っていった。

- - - - -

そして、遂に放課後。

屋上には綾辻がいる。 が、隠れて雅や美雪達もいた。

杏子（毎回思うんだけどさ…なんで告白現場を覗かないといけないの？）

美雪（…それは、恋人がちゃんとつたかどうかをチェックするため）

なんでチェックするの？
美咲

雅（男は簡単に浮気するからだよ）

と、ボソボソと陰に隠れながら話す四人。 言っておくが、女だって浮気はする。

ガチャ…。と、屋上に続く重い扉を開いて零牙がやってきた。綾辻は、零牙の姿を見てホツとしている。

綾辻「来てくれたんだ」

零牙「生憎と、こういうのはちゃんと話すのが一番だと分かっているんでね」

と、綾辻と零牙は簡単に会話を始める。もちろん雅は見て面白くない光景なので、フツフツと黒い感情が湧き上がる。

美咲（抑えて雅ちゃん！）

杏子（気持ちは分かるけどダメだから！。今は抑えて！）

美雪
……くすくす

零牙（なんか嫌な汗が出てきたんだが…気のせいだよな？）

綾辻「零牙君」

雅の嫉妬心を感じ取ってちょっぴり戦々恐々になっている零牙に、綾辻は覚悟を決めたらしい、儚げな表情ではなく、凜とした表情で零牙に向き合う。

綾辻「私は、あなたのことが好きです。私と、付き合ってください」
ペこりと頭を下げて綾辻はお願いした。対する零牙の答えは決まっている。

零牙「ごめん…」

その言葉を聞いた瞬間、雅はホツとし、綾辻は哀しげな表情をした。

綾辻「どうしても、ダメなの？」

零牙「ああ」

綾辻「どうしても？」

零牙「どうしても、だ」

綾辻の言葉に零牙が答えるたび、綾辻の表情は曇り、俯いてしまう。

綾辻「どうしても、ダメなんだ…」

零牙「ああ。ごめんな」

綾辻「ううん。良いの。分かってたから」

零牙「……………」

綾辻「ねえ零牙君。私があなただの事を忘れられるように、一つだけお願い聞いてもらって良い？」

零牙「……………オレに出来ることなら」

綾辻「ありがとう。じゃあ、言うね」

そこで綾辻は、一生に一度しかないかも知れない願いを言った。

その驚くべき内容は……

綾辻「私に……キスして」

……………

零牙・雅「……は？」

零牙と雅の声が八モる。それだけじゃない。美雪達も啞然としていた。

綾辻「だから、キス…」

零牙「ち、ちょっと待て！それは流石に無理だ！」

綾辻「どうして…？」

零牙「どうしてって…！」

零牙は言葉に詰まらせる。常識的に考えて、そんな簡単にキスなんて出来る訳がない。

綾辻「してくれないの？」

零牙「ああ無理だ！」

綾辻「なんで？」

零牙「……………キスは誓いだからだ」

雅（……………誓い？）

零牙は綾辻に背を向けてキスを“誓い”と言う。雅も今まで何回か零牙に無言で唇を突き出したことがあるが、毎回デコピンを受けてダメだった。

頑なに零牙がキスを拒む理由はいつたい……？

綾辻「誓い？」

零牙「ああそうだ。オレはな、“一生をかけて愛する”って決めた女としかキスしないって決めている」

零牙は屋上の手すりに手をかけて、広い校庭を眺めながら続ける。

……遠い昔を思い出すように

零牙「教会で誓いのキスってあるだろ？オレはキスっていうのはそういう神聖なものだと考えている。」

まあオレ個人の考えだけだな。それに……」

綾辻「それに？」

オレ「……昔、幸せになって欲しかった女がいた。でもそいつは死にしまった。小さいオレを助けようとしてな……」

零牙の脳裏に浮かぶのは血まみれの小さい自分と、幸せになって欲しかった姉。『完全記憶能力』で今でも鮮明に思い出せる。あのドロドロした血の感触。姉の胸から流れ出る赤い血。

オレ「だからオレは決めたんだ。オレが“誓う”女は、どんなことがあるうと一生愛そうって。絶対幸せにしようって。死んじまったそいつのために、二度とあんな思いはしないために」

綾辻「管原さんとキスしないのは、そのため？」

零牙「ああそうだ。オレの勝手なエゴのせいで、ミアを悩ますのはいやだからな」

綾辻「……そう」

結局、零牙も子供なのだ。頭が良くても体が良くて、心はまだ子供なのだ。

更に言うと、そんな子供のワガママを貫き通すために零牙は魔術師になったのだが、そんなことは誰も知る由がない。

綾辻「そう、なんだ」

零牙「すまないな綾辻。抱き締めるぐらいのことならしてやれるけ

ど……」

綾辻「いい。ありがとう。それじゃ……また、学校で」

綾辻はそう言って屋上から去っていった。その目には僅かに涙の膜があつたのは、誰も知らない。

……

雅「はあ……」

綾辻と零牙の話を見た後、雅達は帰宅することにした。四人共なによら「見なきゃ良かったな……」と後悔しているようだが、はっきり言つて自業自得である。

杏子「……“誓い”、か」

美咲「零牙君……。雅ちゃんを一生愛せないと思つているのかな……」

美雪「……そんな事はないと思つけど」

雅「でも、レイは……」

再び沈黙が流れる。誰も黙っているなかで、雅はひたすらある一つ

の事を考えていた。

雅（レイが私にキスしてくれたら…。私はレイを一生愛することが出来るのかな？）

考えても考えても出ない答えに、雅は苦悩するばかりだった…。

- - - - -

綾辻フられた

さて、こちらは零牙にフられた綾辻の帰り道。綾辻はトボトボと帰っていた。

綾辻（明日から、私は学校へ何を楽しみしていけば良いんだろう？）

???。「はぁーい。そのアナタ。ちょっと良いかしら？」

綾辻が考えていると、後ろから車に乗っている女が話しかけてきた。

綾辻「お姉さん、誰？」

???。「私は木道…あなたの望みを叶えに来たわ」

- 怪しい魔の手が、零牙に襲いかかるうとしていた - -。

続く

零牙と雅の動物園デート

ミア「ねえレイ」

オレ「ん？」

ミア「今度さ、新しく開かれる『不知木動物園』って場所知ってる？」

オレ「あー。確か莫大な園内でショーが見れたり、乳搾り体験が出来るっう動物園のことか？今度プレオープンって話の」

ミア「うん。私、今度そこに行きたいな」

オレ「そうだな。確かにあそこ、楽しそうだな」

ミア「でしょ？最近一緒に出掛けてないし、オープンしたら一緒に」

オレ「大丈夫だミア。お前の言いたい事はよくわかってる。そこまで行きたいなら・・・」

ミア「うん」

オレ「今度、ミユちゃん達と行ってこい」

ミア「……えい（怒）」

オレ「ぐあああっ！右足の親指が踏み抜かれた痛みがっ！」

ミア「私とレイの二人で一緒に行くの！」

オレ「オープン直後は人が混み合って嫌なんだ！」

ミア「じゃあ、人が混み合っていないプレオープンのチケット手に入れたら行ってくれる？」

オレ「プレオープンチケット？あれって確か、ものすごく入手困難だって聞いたぞ？」

ミア「行ってくれる？」

オレ「まー手に入ったらなー」

ミア「本当ホントに？」

オレ「あー。本当本当」

ミア「じゃあ約束。もし破ったりしたら・・・」

オレ「あー大丈夫。オレはちゃんと約束を守る男だからな」

ミア「……私がお嫁にいけなくなるような……そんな熱いキスをしてもらおう」

オレ「命を掛けて約束を守ろう」

.....

とある休日の朝。

カーテンの隙間から差し込む陽光によって目を覚ますと、

ミア「レイ、おはよ」

オレのベッド脇にミアがいた。

ミア「今日はいい天気だね」

零牙「ん…。そう、みたいだな」

シャツとミアが開いたカーテンの奥から、暖かな太陽の光が差し込む。

強い光に目を細めながら、まじまじとミアの姿を見る。今日のミアは上は白い長袖のカーディガンで、その下は薄い水色をしたカットソーを、下はフリルをあしらった薄い赤のスカートシンボルを穿いていた。首にこの間プレゼントした、イギリス清教の象徴をかたどった十字架もかけている。

普段は仕事にかまけて私服姿を見ていないからか、なんだかとても新鮮に見える。

オレ「ん…。改めて、おはようミア」

ミア「おはよう」

オレ「どうしたんだ？そんな気合いのこもった服を着て…」

ミア「もちろん、デートに行くためだよ」

そう言つてミアはポケットから二枚組のチケットを取り出した。え
くになになに？『不知木動物園プレオープンチケット』か。なるほど
なるほど…

オレ「『プレオープンチケット』?!?!?」

バカな！マジで手に入れたのか！

ミア「さあレイ！約束通りチケットを持ってきたから、一緒に行く
よ！」

オレ「ま、待て！実言つと今日仕事が」

ミア「あ、約束破るのんだ？じゃあ約束通り熱い口付けを…/ / /」

ミアがベッドに腰掛けて目を瞑つて唇を前に出してきた。

マズい。動物嫌いだから動物園行きたくないのに、行かなかつたら
口付け。コレはある種の地獄だ。

だが落ち着けオレ。冷静になつて、なんとしてもここを乗り切る方
法を - -

- - - - -

オレ「オレは…無力だ…」

あれから数分後、オレとミアは電車を乗り継いで動物園の前まで来ていた。

ミア「えへへ。久しぶりのデートだ」

手を組んで隣に立っているミアが満面の笑みでそう言う。ふむ。ここまで来たかいがあったな。

オレ「よしミア。じゃあ早速」

ミア「うん」

オレ「帰ろう」

ガシッ！

ミア「今更何言ってるんだか。今日は目一杯楽しむよ！」

オレ「待てミア！オレの手の骨がミシミシ言ってる！少し力を抜いてくれ！」

ギューツと手が軋むほど握って入場ゲートに近づいていく。痛い。けど嬉しい

受付「こんにちは！不知木動物園へようこそ！今日はプレオープンですが、チケットはお持ちですか？」

ミア「はい」

受付「はい。確認致しました。ではこちらパンフレットになります。ごゆっくり当動物園をお楽しみください！」

受付の営業スマイルを受け流して動物園の中に入る。プレオープンだからか、中に人の姿はほとんどない。むしろ動物達の方が多いくらいだ。さつきもらったパンフを片手で開き、どんな動物がいるのか見てみる。ふむ。とりあえず絶対に『熱帯雨林』コーナーと『アフリカ』コーナーは行かないように避けよう。

ミア「ねえレイ」

オレ「ん？」

ミア「レイはどんな動物なら大丈夫なの？」

オレ「……全体的にアウト。無理です」

心配してくれてありがとなミア。だが、残念ながらオレの動物嫌いは筋金入りだ。

ミア「むう〜。じゃあ定番のジャイアントパンダとか行く？」

オレ「そうしよう」

.....

ミュ「……リュウ、こっち」

リュウ「あいよ……」

その頃、リュウはミュと一緒に新設のショッピングモールに来ていた。リュウも覚悟を決めたのか、二人の左の薬指には指輪がはまっている。

リュウ「誤解を招く発言すんな作者！これは無理矢理はめられたんだ！オレは全く覚悟なんて決めてねえっ！」

白い雲が浮かぶ青空へ叫ぶリュウ。ほらほら、そんなことしている
と不審者に見えますよ？

リュウ「くっ…！どつりでさっきから妙に視線が痛いと思っただぜ」

ミュ「……リュウ、どうしたの？」

リュウ「なんでもねえよ」

ミュ「……そう。じゃあ、早く来て欲しい」

リュウ「はいはい……」

仲睦まじく早川夫妻は歩いていった…。

.....

さて、戻って零牙とミアの二人はジャイアントパンダの檻の前まで
来ていた。

ミア「お〜笹食べてるね〜」

オレ「そうだな…」

ジャイアントパンダが呑気に笹を食べているのを見てるとなんか和む。あー。平和だなあ…。

ミア「ねえレイ。パンダって、本当はものすごく力持ちだって知ってる?」

オレ「ああ。知ってる。(一回捕まったからな)」

ミア「じゃあじゃあ、パンダは肉食だって知ってる?」

オレ「ああ。知ってる。(そして食われかけたからな)」

思い出すのは10歳の時に来た中国奥地での出来事。そういえばあの時闘ったパンダは、太い竹を棍棒のように操ってたっけ。

ミア「あ!あっちで馬の餌やりしてるよ!行こ行こ!」

オレ「あいよ」

近くにいた馬のコーナーに歩いていくと、すでに馬に人参をあげている人がいて馬はボリボリと食べていた。

ミア「よ、よし！上げてみるよ…！」

馬の飼育員から人参をもらったミアは恐る恐る馬に人参を差し出す。近くにいた馬が「え？何くれんの？」と言ったのかブルルツ、と鼻息を立ててこっちにやってきた。

ミア「は、はい、どうぞ…！」

バク。ボリボリ…

オレ「……ほい」

プイッ

ミア「も、もう一度」

バク。ボリボリ…

オレ「に、人参だぞ」

プイッ

ミア「……ほいっ」

バク。ボリボリ…

オレ「食べてくれ」

バク。ポイツ

……。

ホホオ。なるほどなあ……。オレの人参は食べられないと。ははっん…

オレ「……人参！」

ポイツ

オレ「食べて！」

ポイツ

オレ「くださいっ！」

ポイツ！

……ズーン…

ミア「レ、レイ。大丈夫？」

人に嫌われることは慣れたが、初見で馬に嫌われたのは初めてだ…。

オレ「どうせオレなんて、どうせオレなんて…。人参もやれないよ
うな男ですよ…」

ここまで落ち込んだのは馬に頭ごとかじられて、ねっとりとした馬
の唾液が顔中に付いたアフリカでの仕事以来だ…。

ミア「そ、そろそろお腹減ったね！ご飯にしようか？」

オレ「そーですね…」

多分、この動物園から帰ったら、オレはもっと動物嫌いになってい
ると思う…。…。

.....

一方、リュウの方というと。

ミュ「……リュウ、この店」

リュウ「ったくなんでオレがこんな目に…」

リュウが悪態付きながらも、渋々ミュの後ろについて行く。ミュは店の前で立ち止まって店の看板を見上げている。

ミュ「……ここは、前から来たかった」

リュウ「ふーん。一体何の店……え？」

ミュ「……入ろう」

リュウ「待てミュ。ストップだ」

ミュ「……どつしたのリュウ？」

リュウ「この店に入る意味が分からん」

ミュ「……もちろん。私達の未来予想図の下調べ」

リュウ「だとしてもウエディングドレスなんて気が早え！」

ミュ「大丈夫。見るだけだから」

リュウ「全然大丈夫じゃねえよ。頼むから止めてくれ！」

ミュ「……大丈夫。あと六年もしたら、こんな店に来るようになる」

リュウ「ないからな！？この際だから言っが、オレはお前と結婚する気なんてさらさらねえ！！」

ミュ「……とにかく、入る」

リュウ「ちよっ、待てミュ！」

.....

オレ「……ごちそうさまでした」

ミア「お粗末様でした」

お昼はミアが手作りのお弁当を作ってくれたらしく、「どうせ食べるなら草原の上で食べた方がおいしいよな？」と思ったので、レジヤシートを借りて牧場のはずれでいただいた。あゝ。清々しい風が吹いてるなあゝ。

ミア「ねえレイ」

オレ「なんだ？」

ミア「デート、楽しくないの？」

オレ「え？」

ミアが不安げな顔でオレを見てくる。アレ？おかしいな。結構楽しんでたつもりなんだけど…。

ミア「なんか、いつもより楽しくなそう…」

オレ「そんな事ねえよ。楽しいって」

ミア「なら良いけど…。楽しくなかったら言うてね？レイがつまんないじゃ、私もつまんないよ…。」

ミアが呟くように言った。オレは…こんな良い娘を騙しているのか。そう思うと罪悪感が湧き上がる。でも…

オレ「……………ありがとうな。ミア」

ミア「ふえ？」

オレ「なんでもない。せつかく牧場まで来たんだ。乳搾り体験して
いこうぜ！」

ミア「……………うん！」

でも、ミアが好きなことに偽りはない。だから……ちょっとぐらい
笑い合ってたって、罪にはならないよな？

……………

リュウ「……………なあ、帰らね？」

ミュ「やだ」

リュウ「お前どんだけ見てんだよウエディングドレス……」

ミュ「……………一生に一度の晴れ姿だから、ちゃんと納得したものが良
い」

リュウ「お前、まさか買う気か!？」

ミュ「……それはまだない。買うのは、六年後」

リュウ「まあ、それは個人の勝手だし、相手を間違わなきゃ大丈夫だろ」

ミュ「……大丈夫。私は、間違った選択をしたなんて、思ってない」

リュウ「あのなあ……。お前もそろそろ現実を見る。オレとお前が釣り合うわけないし、第一『あの時』のことは忘れろって言ったはずだ」

ミュ「……そんなの、知らない。知ったこつことじゃない」

リュウ「おいおい……」

ミュ「私は、リュウが好き。だから結婚したい。……この気持ちは嘘なんかじゃないって、証明してあげる」

リュウ「ってちょっと待て!いきなり腕を首にまわすな!何をする気だ!」

「ミュ」……………リュウ。目を、閉じて……………?」

リュウ「一旦落ち着け!こんな往来でやっちゃまず……………」

……………

オレ「ん?」

ミア「どうしたのレイ。いきなり立ち止まって」

オレ「いや…。なんかいきなりリュウの顔を思い出してな…。なに
かが起こったのか…?」

ミア「さあ?」

現在オレ達はアイスクリームを食べながら園内を散歩中。隣の檻の
中で猿達が「オレにもよこせ!」と言っているのか、キーキーうる
さい。黙らっしやい猿共。

オレ「ミアのチョコアイス、うまそうだな」

ミア「食べる?」

オレ「いただきます」

差し出されたミアのチョコアイスをガブツと一口。うん、うまい！

オレ「じゃ、お返しにオレのバニラアイスも」

ミア「いただきます」

ミアもオレのバニラアイスを食べた。ちなみコレ間接キスなわけだけど、ミアは気付いているのか？

ミア「うん、おいしいよ」

オレ「それは良かった」

ミアの満面の笑み。どうやら気付いてなさそうだ。

ミア「あ、着いた！」

オレ「着いたか。サーカスエリア」

ここはサーカスエリア。『不知木動物園』 一番の目玉スポットで、ミアが一番楽しみにしていた場所だ。

そこには大きさの違うテントが三つあり、一番大きいテントはショーを行い、二番目に大きいテントは出演者の控え室。三番目に大きいテントでショッピングが出来る。

ミア「おお〜！本物のテントだ！大きい〜！」

オレ「あれ？大道芸人のくせして、サーカステント見るのは初めてなのか？」

ミア「だってサーカスのチケットって一万以上するんだよ？小学生じゃ買えないよ〜」

オレ「ふ〜ん。じゃあ早く中に入るか。パンフレットとかグッズとか買いたいし」

ミア「善は急げだね！」

ミアと一緒にショッピング用のサーカステントに入る。中はすでにたくさんの方がいて、ごった返していた。

ミア「うわ…出遅れた感じだよレイ…」

オレ「この人混みの中ではぐれたら大変だよな…」

そう思ったオレはミアの手を組んで、ギュツと力を加える。離れないように。

ミア「レ、レイ？」

オレ「離すなよミア。はぐれたら大変だ」

ミア「う、うん…／＼／」

オレ「よし。じゃあいくぞ」

顔の赤くなったミアを連れて、オレは人混みの中へと歩いていった
- - -

オレ「うっわ。もう日が暮れてる」

ミア「あ、本当だ」

サーカスのシヨールを見終わったオレとミアは、まだ明るかった空が一転して真つ暗になっていたことに驚いていた。まあ、時間が経つのも忘れてシヨールを楽しんでたからな…

ミア「早く家に帰らなきゃ…」

オレ「そうだな。星空を見る限り今は8時ぐらいだから、一回連絡しておいたほうが良いな」

ミア「うん。わかった」

ミアが先輩に電話する。うーん。結構遅くなってしまった。今度からは気を付けないといけないな。

ミア「もしもお兄ちゃん?…うん。ごめんなさい。…うん。…うん。…へ?レイに代われ?…うん。わかった…」

ミアが携帯電話をオレに渡してきた。多分お説教だろう。夜中まで年端もいかない女の子連れまわしたんだし、城崎先輩はミアの保護者みたいなものだからなあ…。

恐る恐るオレは携帯を耳に当ててみた。

オレ「もしもし。代わりました零牙です」

修『スウウウ……。ミア連れて夜中までどこほっつき歩いてたんだ
テメエエエエエ！！！』

スピーカーから聞こえた怒鳴り声に思わず耳を塞いでしまう。耳が
…！耳が痛い…！

オレ「すみません城崎先輩！サーカスのショーが楽しくて遅くなり
ましたっ！」

修『小学生二人だけで夜中歩くのがどれほど危険かわかってんのか
お前は！！オレはお前を信頼してミアと2人つきりで行かせたんだ！

それがこんなに遅くなるまで連絡の一つもせず！オレや母さんや
親父だけじゃなくマユちゃんにまで心配かけて！ふざけんじゃねえ
ぞ零牙！！！！』

オレ「う…！」

修『お前がいくら強くたって、みんな心配しまっただよ！

今日、お前が家に帰ってこないってマユちゃんが家に来たぞ。お前
に何かあっんじゃないかって、しきりに十字を切ってたぞ！少しは

心配して家で待っている人の気持ちにもなれよバカ！」

オレ「……………」

修『とにかく今日は帰ってこい。お前へのお説教は後日たっつっつぷりしてやる！だから覚悟しておけ！』

ブヂー！ツーツーツー…

城崎先輩は乱暴に通話を切ってしまった。つまり、それだけ怒っているということだ。

ミア「お、お兄ちゃんものすごく怒ってたね…」

オレ「ああ…。こりゃーちょっとやそつとじゃ鎮まらないな…。反省しておこじ」

ミア「今更だけど、今日は家に帰りたくないかも…」

オレ「諦めるミア。オレはマユにも怒られる」

正直言って怒られるのには慣れていない。前にもいったが、嫌われていることに慣れているために、オレを人間扱いしてくれる人が殆どいなかったのだ。

そう考えれば、怒ってくれる人がいるだけで幸せだと考えることも出来るが、やっぱり怒られるのは怖いな…。

ため息を付いて帰ったオレは、天変地異が起きたと思うぐらいの超お説教と、一週間の謹慎（ミアと一切話すな）という処罰を受けた…。

………はぁ。今度から気を付けよう。

零牙と雅の動物園デート（後書き）

どうにか書ききった…

次回は事件パートです！

一応オリジナル予定です。若干スランプ気味ですが、ま、どうにか
します。

それでは次回をお楽しみに！

噂と決闘と新たな事件（前書き）

久しぶりの投稿です…。

あゝスランプきつかった。

噂と決闘と新たな事件

オレ「頭痛え…」

とある日の朝、オレは学校の机で寝そべって、そんなことを呟いた。理由は分からないが、最近妙に体が重い。疲れているのか？

ミア「レイ…大丈夫？」

リュウ「お前、最近元気ないよな…」

疲れきっているオレの様子を見て、心配してくれるミアとリュウ。心配してくれてとても嬉しいが、オレはぐったりしたまま「うー」と唸ることしか出来ない。なんか悪いな…。

ミア「レイ、最近ちゃんと寝てる？ご飯食べてる？」

オレ「それは大丈夫なんだけどな…。なーんか日に日に疲れが増してきたんだよ。なぜか」

リュウ「それは仕事のしすぎなんじゃね？つか、仕事のしすぎだろ」

リュウの考えは一理あるが、それとは別に『何か』ある。こう、体を蝕んでいくような感じた。

得体のしれない疲労に本気で「病院に行くべきか？」と悩み始めるオレ。

この年で胃痛とかに悩まされたら間違ひなくアウトだ。なんて考えていたら――

杏子「み、ミアちゃん大変！」

ミア「どうしたの？」

杏子「一組の牛島が、『オレは管原と付き合ってる』って言いふらしてるらしいよ！」

オレ・ミア「え？」

……どうやら、そんなオレは不幸に愛ストレスされているらしい。可愛い彼女を持つと、気苦労が絶えないな。本当ホント。

ミア「え？あ、杏子ちゃん？今なんて……」

杏子「だから、一組の牛島……この前のニタニタ笑ったキモい奴が

変な噂を流してるの！」

美咲「『オレは雅と付き合ってるんだー！』って？」

杏子「そうなんだよ。私も今さっき絡まれて本当にキモかった…」

杏子ちゃんが肩を抱いて目一杯アピール。はあ…オレの周りは本当にトラブルが多いよな…

オレ「……はあ。杏子ちゃん。そのはた迷惑な奴にどこで絡まれたんだ？」

いやもうホントさ。休日休日が仕事で消費されているとストレス溜まるわけよ。それをミアとイチャイチャすることで癒しているのに、なんで邪魔されんのかなあ…。

杏子「さっきその廊下で絡まれたんだけど…？」

オレ「わかった、ありがとう」

リュウ「…レイ。牛島の場所なんて聞いてどうすんだ？」

レイ「決まってるだろうリュウ？……牛島の奴に、オレの女に手エ
だしたっう意味を教えてやる」

牛島「へえ。なかなか言うな元カレ」

バキボキと指を鳴らしてそう言うと、教室のドアが開かれて太った
男の子が現れた。…アイツが牛島か。ニヤニヤ笑って気持ち悪いな。

オレ「何の用だ」

牛島「お前には関係ないだろ？そこをどいてくんねーか？」

オレ「……」

「牛島さんが「どけ」ってんだから早く退けよ速水！」

「そつだ！早く退きやがれ！」

オレ「うるせえよ名前ももらってねえモブキャラ共。こちとら仕事
のストレス溜まってイライラしてんだ。口出しすんな」

睨みを効かせて小悪党二匹を怯ませる。すると、金魚のフンの態度
に相応しく、オレにびびって牛島の後ろに隠れた。

牛島「おーおー恐エ恐エ。そんな顔すんなって。もう少し友好的に行こうぜ？」

オレ「だったら変な噂なんか出さずに、正々堂々ミアに告れば良いだろうが」

牛島「いやさ。オレ実はお前の事が気に入らないんだよね。なんか知んねーけど、いきなりやってきてデケエ面しやがってさ。ムカつくんだよ」

なるほど。要はオレを思う存分殴りたい訳か。

オレ「だったらかかってこいよ。返り討ちにしてやる」

牛島「いいね。どっちが雅の彼氏に相応しいか、勝負するとしてようか」

突如として始まった決闘。お互いに火花を散らしながら距離を見計らう。……とりあえず一発ぶん殴る。

リュウ「待てレイ」

……が、後ろからリュウに肩を掴まれて「今はダメだ」と告げられる。確かにもうHRが始まる時間だ。これ以上は無理か…

リュウ「おい牛島」

牛島「あん？」

リュウ「続きは昼休み、風見鶏の裏で勝負を着けないか？」

リュウ「(ニヤ)いいぜ。びびって逃げ出すなよ」

牛島も承諾してくれて教室から出て行った。上等だ。それにやついた顔を殴り飛ばしてやる。

.....

そして昼休み。

予定通り風見鶏の校舎裏に行ったオレは、牛島と彼女^{ミア}を賭けた決を行うことになった。

決闘と言ってもヨーロッパの騎士がやるような上品なやつでも、侍がやるような男らしいものでもない。

決闘のルールは至ってシンプル。お互いに殴りあって一回でもダウンさせたら勝ち。勝った方がミアの彼氏になる。というものだ。

が、むかし『聖人』神裂の一発を喰らったオレにとって、素人の拳一つ、痛くもかゆくもない。

ミア「ううう。なんかとんでもない状況になっちゃったよ」

杏子「ミ、ミアちゃん…。そんな困った顔で言われても困るよ…」

美咲「リュウ君あの決闘を止めさせてよ！なんで黙って腕組みしてんの!？」

リュウ「男には譲れないものがあるんだよ。ここでオレが止めたり加勢したりしたら、オレがレイにボコられる」

なんかミア達がリュウに助けを求めているが、リュウは黙って見守っている。一方、当事者のオレのほうは…

オレ（どこ殴るかなあ…？）

完璧に目的を憂さ晴らし（主に上司への不満）をするためになつていた。オレは加減とかそんなことは考えず、ひたすら殴るポイントを考えていた。ここはやっぱり人体急所の鳩尾だろうか？それとも顔面？

牛島「よし行くぞ。歯ア食いしばれ」

牛島がボクシングのファイティングポーズに構えると、いきなりオレの顔面に右ストレート左フックを繰り出してきた。初手からルール破りかコイツ…！

牛島「おっとすまない。つい手が出ちまったぜ」

しかも笑って悪びれる様子もない。コイツ最低だな…。

オレ「……」

美咲「ちょっと！今二回殴ったでしょ！ルール違反であんたの負けよ！」

杏子「そうだよ卑怯者！」

牛島「ハッ。外野は黙ってな。悪かったって謝ってんだから良いだろ」

美咲「くくっ！あんたねえ…！」

牛島「なんだ？やるのか？」

美咲ちゃんが激怒して一歩前にでるが、牛島の言葉で黙ってしまっ。まあ無理もないよな。

オレ「…今度はオレの番だよな？」

美咲「零牙くん！」

牛島「ああ。どこでも一発殴りな。まあ絶対倒れないけどな」

オレ「……わかった」

牛島が両手をポケットに入れてヘラヘラ笑う。……決めた。顔面を殴り飛ばす。

ミア「レイ……」

オレ「心配するなミア。一撃で沈めてやる」

牛島「へえ。ずいぶん余裕こいて……」

ドゴッ！

オレ「……悪い。つい手が出ちまった」

牛島が話している途中でとりあえず一発。え？卑怯？向こうは二発殴ったんだ。これぐらい良いだろ。

「な……！テメエ卑怯だぞ！普通セリフの途中で殴るか！？」

オレ「うるせえよ個性無き学生A。端役のクセに主人公に口出しすんな」

「お前本当に主人公か！？言っている事は悪役と何も変わらないぞ……！！」

あー。まだ昼飯食べてないんだよ……。早く済ませてほしいんだけ

ど…。

オレ「どっちにしろ、牛島がダウンしたからオレの勝ちだよな？」

「え？あ、本当だ…牛島さん気絶している…」

「これって完璧な負け…。だよな…」

端役二人が牛島の気絶を確認。これで決闘はオレの勝ちだ。

オレ「じゃあなモブキャラ共。今度また変な噂流したら、これじゃあ済まさねえからよく覚えておけ」

「くっ…！チクシヨウ！」

「最後まで罵倒されて出番終了かよ！チクシヨウ！」

そんな負け惜しみを言いながら、端役の二人は牛島を担いで教室に戻って行った。

とにかくまあ、こうしてオレと牛島の決闘に幕は閉じた訳だが…まさかこれが、あの事件の幕開けとなるなんて思いも寄らなかった。

- - - - -

オレ「はあああ……」

リュウ「……今度はどうしたレイ？」

オレ「いやあ……。ここ最近の疲労がピークに達してるんだよね……」

三連休開けて、今日9月21日。オレは机に荷物を置いてぐだあゝと突っ伏す。ダメだ……。なんかもうやる気ねえ……。

ミア「本当に大丈夫？病院行って検査した方が良くないんじゃない？」

オレ「ううう……。ミア、肩揉んで」

ミア「ほえ？わかった」

そう言ってミアがオレの肩を揉み始める。……あ、結構気持ち良い。

モミモミ

オレ「もうちょっと強く…。もうちょっと下の方頼む」

リュウ「なんか言ってる事がオヤジくせえな」

オレ「ほっといてくれ…」

ヤバイ。本当に気持ち良い。

モミモミ

オレ「ふえええ…。気持ち良いよう…」

リュウ「…！レイが今まで見たことのないぐらい幸せな顔してやがる！」

ミア「え！？一体どんな顔!？」

なんかもう気持ち良すぎてしょうがない。凝り固まった筋肉がほぐれて気持ち良い…。ふぁぁぁ…。最高に気持ち良い…。

小萌「はいはい。HR始めますよ。席についてください」

ミア「あ。先生来ちゃった」

パツ

……あれ？さっきまでの快感は？オレの至福の時は？

オレ「……………」

小萌「零牙くん？なんでそんなに先生を睨んでるんですか？」

あんにオレの気持ちがわかるか。ちょっとほっといしてほしい。

オレ「……………なんでもないです。チッ」

小萌「なんか零牙くんがとっても不機嫌ですよー！」

もう授業を受ける気が失せた（元からまともに受けてないけど）オレは、教科書だけ取り出してふて寝を始めた。

小萌「……で、1111の2を……、1111する1111で……」

オレ（無視無視……。教会でもう習ってる）

机に寝そべって、教室に漂う独特の空気に抱かれながらだらけるオレ。『怠惰は罪だ』とか誰かに教わった気がするが、そんなの関係ない。

しかしこうだらけていると、他の事に目がいくなあ。有朋は寝ているし須山は速弁してるし高橋はマンガ読んでるし……。

オレ（六組って不真面目な奴多いな……）

女子はかなり真面目に授業を受けてる……ような気がしたが、中にはノートの隅に落書きしている人もいる。

オレ（教会でこんなことしたら後で説教だな……）

ぼんやりと頭の中でそんな事を考えながら小萌先生の健気な授業態度を見る。……うん。一生懸命頑張ってる子供にしか見えない。

オレ（そういえばさっきから変な匂いするな……）

いつもだらけているオレだからわかる。高橋が実験した後は異臭が漂うが、花を突き刺すような薬品の匂いでも、卵が腐ったような匂いでもない。

オレ（なんだこの匂い？何か焼ける匂い…。まるで学校で火事が起きているような・・・）

オレ「……ってマジかよ」

ミア「???どうしたのレイ？」

ミアがオレの態度に気づいて顔をのぞき込んだ。オレは異臭のことをミアに話すと、ミアは顔をしかめて「確かにするね」と言った。

オレ「どうするミア。授業を抜け出すか？」

ミア「待つて。後三分で授業が終わるから、休み時間に探そう？気のせいって可能性もあるし」

オレは「OK」と言って教科書を片付ける。さっきの異臭はまだ残ってる。むしろ、強くなっているような気がする。

キーンコーンカーンコーン…

小萌「はい。これで算数の授業を終わりにします。次は音楽ですから、遅れないようにしてくださいね〜」

小萌先生が教室を去ると、オレとミアは教室を飛び出て匂いの元を辿った。なぜか匂いは強まっていて、幾人かの生徒は気づいているらしい。

オレ（……くそつたね。なんだこの嫌な予感…）

さっきから胸騒ぎがしてとまらない。悪い予感が当たらないことを祈るけど…！

ミア「クンクン…。どうやらここだねレイ」

レイ「ここは…薬品倉庫か？」

頑丈そうな鉄の扉の上には「第二薬品室」とプレートがある。薬品室で火災…危険極まりないな…。

ミア「どうしよう？この部屋は理科の先生が立ち会わないと入れな

いよっ。」

オレ「緊急事態だ…。先生を呼んでいる間に何かあったら終わりだから、力強くちかぶつこじ開ける」

ミア「え？でもどうやって？」

オレ「こつやっつて…だ！」

オレは鉄の扉の前に立って中段に逆刃刀を構える。学校に刃物を持つてきているなんてあとでバレたら説教確定だな…

オレ「飛天御剣流 - - 『龍巢閃』！」

が、今はそんな事は後回しだ。神速の乱撃術『龍巢閃』で扉をぶち破る！

ビキツ…バガンツ…！！

鉄の扉がバラバラになり、薬品室の中が露わになる。その中には…

ミア「え？」

オレ「牛島!？」

一組の牛島が横たわって死んでいた。そばには消えかけている練炭がある。自殺か…？

オレ「…違う。これは殺人だ。誰かが牛島を殺したんだ…！」

牛島の首の後ろにあるスタンガンの痕。これがそのなによりの証拠。でも、一体誰が…？

続く

噂と決闘と新たな事件（後書き）

オレ「という訳で久々の投稿です」

零牙「今回の事件はオリジナルストーリー。つかよ夢幻。オレ今後の展開知らねえんだけど」

夢幻「ふふふ…。それは秘密だよ」

オレ「なんで？」

夢幻「今後の展開を見ればわかるさ！」

オレ「嫌な予感してきた…」

夢幻「それでは皆さん次回をお楽しみに〜」

虐げられる者の反乱(前書き)

久しぶりの投稿です！

……眠い

虐げられる者の反乱

山下「被害者は牛島剛太。12歳、木ノ花学園小等部六年一組。死因は脊髄損傷による呼吸不全」

零牙の通報を受けてやってきた山下は、亡くなった牛島の遺体を見てそう呟いた。

現場の薬品室は、木ノ花学園で使われる実験用薬品が置かれているものだ。種類もなかなか豊富で、ザツと見ただけで『塩酸』『硫化水素』『硫酸』などなど、様々な危険物が精製できる。

山下「なんで化学薬品使わずに、脊髄損傷なんて方法使ったんだ？」

なんて山下は考えたが、とりあえず今は関係ない。とにかく現場検証だ。亡くなった牛島はまずスタンガンで気絶させられた後、アイスピックのような鋭いもので的確に脊髄を傷つけられていた。

第一発見者は同学部六年六組の速水零牙と管原雅。まあ、知り合いだから説明されなくても分かるけど。

鈴音「委員会発足以来の一大事だね」

椎「もしかしたらテレビに映るかもしれへんなあ」

梢「お姉ちゃん呑気過ぎ……」

修「明日から学校来れなくなるぞ……」

ミア「うう……注目されたくない……」

あざみ「よくわかってるじゃないみんな。はあ……、頭が痛いわ……」

はあ……とため息を付くメンバー。が、そんなことをしに来たのではない。今はやるべきことがある。

あざみ「今、PTAや教育委員会から抗議の電話がひっきりなしにきているわ。まあそっちはどうとでもなるけど、小等部の生徒達が不安でパニックになる方が問題なのよ。みんなにはそれを鎮めてきてほしいの」

零牙「了解です。でも、小等部はオレ達が行ったら本当にパニック

になりかねないよな…」

ミア「うん。まずは下級生や同級生…特に一組に説明しなきゃ」

資料から目を離して、小等部を代表する二人は頭を悩ましていた。部内放送をすれば簡単だが、残念なことに感受性豊富な小学生には逆効果にもなりかねない。やっぱり面と向かって話したほうが安心感を産むのだ。

零牙「でも、グダグダ悩んで仕方がねえ。小等部に行っちゃんと説明しておくか。幸いにも第一発見者はオレ達だから、誰かが質問攻めにあっている心配はないしな」

ミア「逆に言えば、私達が行ったら質問攻めに遭うのは確実なんだけどね」

鈴音「そうね。あんまり事件の情報は話さないように気を付けてね」

一同『了解』

椎「じゃあ私は中等部に行っておくわ。梢一人で説明すんの大変そうやし」

梢「別にいい。お姉ちゃんに心配されなくても大丈夫」

椎「まあまあ。お姉ちゃんいれば少しは安心するやろ?」

梢「でも…」

修「高等部の方は心配すんな。委員長たちもいるし、オレ一人でも
どうにかなるぞ。」

梢「城崎さん…」

修が梢を見つめてそう言う。やっぱり修の本質は『頼れるお兄ちゃん』なのか、梢はそれだけで安心してしまっ。

修「それに、椎は足手まといだしな。いないほうが助かるんだ」

椎「一言多いねんお前は!」

椎のチョップが修に炸裂。そして委員会は一旦解散となった。

.....

山下「どうも。会議中のところ失礼します」

同時刻。山下は小等部の校内を迷いに迷ってやっと職員室に着いた。小等部のみんなはよくわかるよな…と30分も歩いた山下は人知れずそう思う。

「ああ、警察の方ですね。教頭の高梨です。何かありましたか？」

職員室の奥にいた真面目そうなインテリ男…もとい教頭が応答した。山下は監視カメラの映像を見せて欲しいと言い、教頭は「ご案内します」と山下の前まで来て、職員室から出て行った。

「こちらです」

教頭が案内した場所は職員室より奥にある一室…。『生徒立入禁止』と書かれているプレートが掛けてある部屋に来た。

そこには数台のテレビが設置しており、奥には操作用のパソコンがある。テレビの画面には今も監視カメラの映像を映し出されている。

「今年の夏休みに工事を行って取り付けた最新型の監視カメラです。二学期以降の監視カメラの映像はすべて記録してあります」

山下「……見たところ、そう多く設置してあるようには見えませんか」

た罰だな」

生徒達はひそひそと牛島が殺されたことについて話す。半分の生徒は「嘘だと」もう半分の生徒は「真実だと」言うが、本当の事実は誰も気付いていない。

(ひそひそ話しやがって…わざとかつつうの)

(牛島さんが殺されたなんて嘘に決まってるんだろ)

牛島の金魚のフンをしていた二人も同じく。見た目は平静を装っていたが、実際はかなり動揺していた。

と、そこへ

零牙・雅「失礼します」

委員会から零牙と雅が、状況説明をするためにやってきた。

「速水だ…」

「管原も一緒だぞ？」

「先生は今会議中だし…。この状況で零牙君達がくるってことは…」

一組の生徒達は、突然やってきた零牙と雅に動揺している。動揺が静まったのを見計らった零牙は、目を瞑って深呼吸し、ついでに十字も切っておく。

そして意を決して事実を話し始めた。

零牙「今日、一階の薬品室でこのクラスの牛島剛太が死んでいるのを発見した」

あまりにもストレートすぎるその言葉に生徒達はザワザワと騒ぎ始める。

零牙は「静かに！」と声を上げて、騒ぎを鎮める。

零牙「この件は今、警察の方が調べている…。また別の日に先生達から説明があると思うけど、あまり騒ぎ立てたりしないように。以上だ。なんか質問あるか？」

零牙は簡潔にそれだけ言った。嘘はついていない。嘘をつけば、そこから疑心が生まれ信用がなくなる。信用がなくなれば、まとまるものもまとまらなくなってしまう。零牙は『布教』という経験上、相手を不安にさせず、如何に信用してもらおうか、その方法は熟知し

ていた。

零牙「……という訳だ。オレ達『本格推理委員会』も事件の解決に尽力を尽くす。これ以上の被害を防ぐために、なるべく一人にならないようにしてくれ。……しばらくは不安な日が続くけど、安心して学校に来てくれ。」

何人かの質問に優しく答えた零牙は、もう一度クラス全体を見渡す。多少の不安は緩和されたのか、最初に入って来たときよりもみんなの顔が明るい気がした。

「……お前がやったんじゃないのか？」

そこへぼそりと聞こえた声。声を出した子……牛島にまわりついていた小悪党の一人、木村惣一が席を立って零牙を見た。

惣一「……お前が牛島さんを殺したんじゃないのか？速水」

零牙「……なんでそう思うんだ？」

惣一「だって、お前は牛島さんの事恨んでるし、牛島さんよりも強いし、『あいつ』と知り合いじゃないか」

ミア「……『あいつ』？あいつ』って、誰？」

ミアが惣一に聞き返すと、惣一は「しまった」という顔をした。何か大切な秘密がある。・・零牙は直感的にそれを感じ取った。

零牙「おいお前、いったいなにを《六年六組速水零牙、管原雅。至急職員室に来るように》……チツ。事情聴取か」

ミア「とりあえず行こう、レイ」

零牙「ああ」

……が、特に追及もせず事情聴取へと向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

惣一（……そつだ『あいつ』だ）

零牙達が去った後、惣一は思い当たる一人の人間の顔を思い浮かべた。

惣一（『あいつ』が牛島さんを殺したに違いない）

確信はある。理由も思い当たる。『あいつ』なら牛島の油断を誘うことも出来る。

惣一（……問い詰めてやる）

心の中で密かに結論を出した惣一は、亡き牛島に誓う。

惣一（……敵をとる。やられる前にやってやる。油断さえしなければ大丈夫。絶対に）

小さな拳をギュッと固く握って惣一は復讐を誓う。

浅はかな考えだと気付かずに……。

……

オレ「ただいま」

マユ「おかえりー」

あれから数時間後、オレは山下さんの事情聴取を終えて帰ってきた。

知り合いが相手だったとは言え、疲れた。

オレ「マユ、今日はお客さんが泊まるぞ」

マユ「お客さん？」

ミア「おじゃまします」

マユ「あ、ミアさん！こんばんは」

ミア「こんばんはマユちゃん」

オレ「いまさら挨拶なんて必要ないだろ？遠慮なんかしないで上がってくれよ」

ミア「はい」

オレはミアを中に入れて玄関の鍵を閉めた。え？なんでミアがいるの？それ？それは今回の事件で直子さん（あ義母さんかな？）の事に支障をきたさないため。人見知りの激しい直子さんの周りに、大勢のマスコミがいたんじゃ仕事が出来ないだろ？

オレ「ミア、コーヒーと紅茶、どっちが良い？」

ミア「じゃあ紅茶で」

オレ「OK。マユ、キッチン台所にいるなら淹れてくれないか？」

マユ「はいはい」

オレとミアはソファアに座り、マユが淹れてくれた紅茶を啜る。旨い。

マユ「そういえば学校でなにかあったの？ニュースで少しやってたよ」

オレ「マジか…まだ発見して1日と経ってねえぞ…？」

ミア「やっぱり世界的に注目があると変わるね」

マユ「???ねえ、なにがあったの？」

オレ「ああ。実はな、かくかくしかじかこういう訳なんだわ。わかっただか？」

マユ「…ん。わかった」

オレが懇切丁寧に説明すると、マユは『大変なことになったね』と言った。『かくかくしかじか』、意外と便利。

ミア「……タダの手抜きだよね？」

ミアよ。それを言うな。

オレ「ま、説明も終わったし…ミアにマッサージでも頼もうかな？」

ミア「良いよ。レイってコリひどそうだよな」

オレ「可愛い彼女持つと気苦労が絶えないからな。それじゃあよろしく頼むぜ」

ミア「うん」

オレは床にうつ伏せになり、ミアが腰の辺りから指圧してきた。あ…！そこ良い…っ！

ミア「レイ、痛い？」

オレ「…ん…。大丈夫だ…」

ミア「少しずつ上に上がってくね？」

オレ「…ん、はあ…。気持ちいい…」

ミア「レイ、コリひどいよ？整体行ってきたら？」

オレ「…うん…。ミア最高…。眠い…」

あ…疲れが取れていく。良いマッサージは眠くなるとか聞いた事あるけど、本当なんだな…。眠い…

ミア「なんだったら、その…、たまにしてあげよっか？／／／」

オレ「……………たのむ……………スウ…スウ」

オレは睡魔に身を委ね、珍しく人前で眠った。

- - - - -

惣一「……いい加減白状しろ」

その頃、牛島の金魚のフンの木村惣一は『あいつ』に逢っていた。

しかし、惣一と向かい合っている『あいつ』は黙っている。

あいつ『……』

惣一「お前なんだろ？オレ達、いや牛島さんに一番恨みを持っているお前が、牛島さんを殺したんだろ？」

あいつ『……』「だったらどうする？」

惣一「頼む。殺さないでくれ。お願いだ。オレは、まだ生きたい……」

惣一は土下座して命乞いをする。しかし『あいつ』は、その行動を冷やかに見ているだけ。

あいつ『いまさらどの口が言っ……』

そして、ポケットからスタンガンを取り出す。バチ、バチと心臓に

悪い音が出る。

惣一「ま、待て！何でもする！だから命だけは……！」

バチバチバチッ！

あいつ『……もう遅い』

『あいつ』は惣一を気絶させると、最後にそう呟いた。

.....

ピリリリッ！

オレ「ん……？」

誰かの携帯が鳴っている。

携帯の着信音によって目覚めたオレは、音源を確かめべく辺りを見渡す。

ミア達の姿は見当たらない。シャワーの音が聞こえるあたり、浴室だろう。

……あった。オレの黒い携帯……『教会や、魔術に関わる者』専用

の携帯だ。相手は――神裂？

オレ「もしもし……」

神裂『床で寝てしまっなんて、あなたらしくない。寝不足ですか？』

開口一番にコレだ。どこかから覗いてんのか？確かアイツの視力つて8・0だよな……？

オレ「それに日頃のストレスも加えておけ……」

神裂『仕事熱心ですね』

オレ「給料分の仕事は働かないといけないからな」

神裂『フフツ……。土御門に見習わせたいものです。』

オレ「……んで？わざわざ電話なんてしてきて何のよつだ？」

基本的に『必要悪の教会』は忙しい。用もなく他のメンバーに連絡することなどほとんどない。

神裂『天地逆転に付いての情報を持ってきました。近くの公園で資料を渡したいのですが…』

オレ「だるいなあ…。FAXで送ってくればいいのに」

そう言つてオレは電話機を見る。神裂もそうだが、大抵魔術を使う堅物な人間は機械に疎い…。時代に合わせて生きてくつて、やっぱり必要な事なんじゃないか？とつくづく思う。

神裂『FAXは使い方がややこしいので嫌なんです。それに、我々のやり取りする情報は国家機密レベルのものばかり。あとあと大変な事になるのはあなたですよ?』

オレ「へいへい…。今からそつち行くよ。じゃあ電話切るぞ…」

神裂『お待ちしてます』

ブツ…と、通話が切れる。幸いにも外にマスコミはいないみたいだから、ミア達に書き置きを残しておくか。

そう思ったオレは、ミアのマッサージのおかげでいくらか軽くなった体を起こして、『ちよつと公園までぶらついてくる』と書く。さて、行きますか。

リュウ「ミュ、これはどごいう事だ？」

同時刻、リュウは縄で両手両足を縛られ、ミュのベッドに横たわっていた。

ミュ「……夫婦が一緒のベッドに寝るのは当たり前」

リュウ「オレとお前は夫婦じゃねえし、なにより例え夫婦だったとしてもこの扱いはヒドすぎる！」

リュウがジタバタしながら抗議するが、ミュはリュウの上に覆い被さるように動く。若干息が荒いのは、彼女が興奮しているからだろ
うか。

ミュ「……なんとまあうと、今日は一緒に寝る」

リュウ「って、なに普通にオレのパジャマ脱がしている！？お前には、羞恥心とか、躊躇いというモノがないのか！？」

ミュ「……羞恥心よりも、今は好奇心の方が強い」

リュウ「待て待て待て！そんな事より、まだ牛島のことがあるだろ

「！」

唐突に、リュウのパンツに手を伸ばしていたミュの手が止まる。その指先はわずかに震えていり。

リュウ「やっぱりそうか。お前、今とっても震えてるぞ。……怖かったんだな？」

ミュ「……うん」

そうか。と、リュウは起き上がってそう呟いた。

……1年前、リュウの目の前にいる少女、白石美雪は牛島剛太のいじめに苦しんでいた。

いじめ、なんて響きだが、当時を知るリュウはあれは『拷問』だったと記憶している。

バケツの水を掛けられ、教科書や体操着は切り刻まれ、罵声や冷やかし、机の落書きなどe t c . ミュは牛島達三人によって、様々な嫌がらせ、もとい、『拷問』を毎日受けていた。

当時、クラスの中で唯一ミュを守り、牛島達に反抗していた人物がいた。リュウである。

リュウだけはミュを守り、冷やかしゃ罵声を受けても受け流していた。つまりは、味方だった。

ミュもリュウのおかげで日々の『拷問』に耐え抜いた。が、決定的な事件が起こる。

ミュは牛島達にレイプされそうになったのだ。突然部屋にミュを押し込め、カッターを突き出して『裸になれ』と脅迫。

しかし、間一髪の所でリュウが乱入して牛島達を殴り倒した。その時、リュウは牛島に全治一週間の怪我を負わせた。

偶然か必然か。

牛島がミュを脅迫し、リュウが殺しかけた場所は、遺体発見現場の『第二薬品室』なのだ。

リュウ「ミュ、一つ答える。お前は牛島を殺したのか？」

リュウはいつも見せないような真剣な顔でミュに問う。それに対するミュの答えは簡単なものだった。

ミュウ「(ブンブン)……やってない」

リュウ「…そうか。なら、良い」

リュウは安堵してため息をつく。良かった。オレはコイツを疑わなくて済む。

ミュウ「……暗い話はこれくらい。これからお楽しみ」

リュウ「って待て。何事もなかったように事を進めんな！」

ミュウ「……読者サービス」

リュウ「サービスになるか！あつ！ちよっ！やめ…」

……

神裂「早かったですね」

零牙「走ってきたからな」

数分後、零牙は近くの公園で神裂と会った。神裂は夜だというのに、相変わらずの服装だった。なんでオレの周りの魔術師は変な奴が多

いんだ？と零牙は内心呟く。

零牙「んで、天地逆転の情報ってなんだ？早く教える」

神裂「そうせかさないでください。順を追って説明します」

そう言つて神裂は、イギリス清教の領地で不振な宗教活動が行われていること、《^{アークヒショップ}最大主教》の命令で調査・壊滅をしたその組織の名前が《天地逆転》だと言つた。

零牙「天地逆転がイギリス清教の支配下にちよっかい出したのか？」

零牙は正直に驚く。支配下が広すぎて末端まで支配仕切れていないローマ聖教ならまだしも、あの（・・・）《最大主教》が支配している地域に、ちよっかいを出すバカがいたなんて信じられないからだ。

神裂「事の発端はそうなります。我々が捕まえた《天地逆転》のメンバーで『ヴァーグ』と名乗る人物がいました。おそらく『^{パーチュー}力天使』をもじつたものでしょう。で、その人に優しく（・・・）聞いたのです」

零牙「なにが優しく（・・・）だ。阿鼻叫喚の地獄絵図を見せてやっただろ」

神裂「あなたが直接担当した人からしたら、生易しいものですよ。我々の尋問のレベルが『悪魔』と評されるなら、あなたのは『魔王』と評されますからね。精神こころが壊れていないだけマシでしょう」

零牙はいままで尋問したときの事を思い出す。……うん。全員精神に異常をきたすまで追い込んだ覚えがある。周りから『アイツが担当したら確実に心が死ぬ』と言われたこともあった。

零牙「……ま、昔話はそれぐらいにして、『ヴァーグ』が漏らした情報を言ってくれ。こっちは今大変なことになってるんだ」

神裂「そうですね。昔話は置いていて話しましょう。『ヴァーグ』はメンバーの構成に付いて吐露しました。

天地逆転のリーダーは『神』と呼ばれる人物で、『神』から命令を受け、上位三隊と中位三隊のメンバーがそれを実行するらしいです。下位三隊のメンバーはいわゆる下っ端で、資金調達や布教を担当しているらしいです」

零牙「ってことは、奴らの中核を担っているのは上位三隊の三人で、中位三隊の奴らはその他諸々の重要なことをやってんだな？」

神裂「そう言うことらしいです。彼らの現在の目的は、『闇を統べる者の抹殺』……つまりはあなたを狙っているそうです。零牙」

神裂は零牙の事を心配していた。組織からたった一人の……たった12歳の友人が命を狙われているのだ。助けてあげたいと思うのは普通だろう。

傲慢な考えだとはわかっているが、自分は聖人だ。普通の魔術師と比較にならないほど強い。この強大な力は、誰かを守るために振るわれるべきだ。

『salvare000（救われぬ者に救いの手を）』という魔法名（信念）を持つ彼女にとっては、絶対に見逃せない。

……が、それに対する零牙の答えは……

零牙「そうか。奴らはオレを狙ってんのか」

淡白。

というより無関心。まるで興味がない……そんな感じだ。

神裂「……怖くはないのですか？命を狙われることに」

零牙「日常茶飯事だからな。別に今更驚くことじゃないありがとな神裂。お前のおかげで、オレは生きられる確率が上がったよ」

零牙はそれだけ言つと、早々に神裂の前から去っていった。

.....

……で、後日。

今日は小等部の部内説明会…そのため、今は全校生徒が校庭へと出ていた。

零牙「だる…。こんなの、校内放送でよくね？」

ミア「ダメだよレイ。先生方だって疲れきっているなか頑張ってるんだから、そんな事言わないの」

あまりの面倒くささに、零牙はボソツと小言を呟く。ミアが言っている事は「もつともだが、なんかねえ…」

「では、これから説明会を始めます」

そうこうしている間に説明会が始まる。なぜ日本人は長つたらしい前置きをするんだろうか、と零牙はくだらない事でも考えて時間を潰そうと考えた。

零牙（・・・そういえば、あの《陸上部県大会出場！》っ書かれたあの垂れ幕、真ん中あたりに妙な出っ張りがあるような・・・？気のせい
か？）

しかし、

少年のいやな予感は的中してしまうのだった…

続く

なりふり構ってられない(前書き)

テスト終わったああああ！

久しぶりの投稿、行きます！

なりふり構ってられない

山下「なんてことだ…」

ここは屋上。昨日からずっと学校に籠もっていた山下はそう呟く。いや、それしか言えなかった。

山下「昨日の牛島君と同じスタンガンで気絶させてからの犯行…。同一犯として間違いはなさそうだな…」

もの言わぬ骸となった木村惣一の首の痕を見てそう推理する山下。屋上には他の捜査員もいて、指紋採取や現場検証を行っている。

山下（昨日見た防犯カメラの映像には、犯人らしき人物が移っていなかった）

山下は広々とした屋上を見渡しながら、ゆっくりと昨日見た映像を頭の中で再生する。

山下（子供と言えど人間だ。人一人運んで、電子ロックで厳重にロックが掛けられている第二薬品室の中に入れるには相当な労力が必要だ。

……薬品室に入るには科学教師の持つ一般キー、各学部の校長が持

つ特殊キー、またはあざみさんが持つマスターキーじゃないと開けられない。

あの厚さの鉄板を開けるなんて普通は不可能。疑うべきは科学教師か……)

それに加えてさらに今回の事件。山下の思考は更に犯人を狭める。

山下(今回の死体発見現場は屋上。正確には垂れ幕を張るための金具にロープをくりつけて、垂れ幕の中に入れた。昼にこれらの犯行を行ったなら、下から姿を見られる可能性もある。つまり、犯行は夜か)

「警部」

長い間思考の海に浸かっていた山下だったが、部下が自分と呼ぶ声でハツとする。近くにいたのは、入りたての新人なのか、山下も見たことのない刑事だった。

山下「なんだ？」

「先程刑事部長殿からのご連絡がありました。『至急警察署にもどり、状況を説明せよ』との事です。また、マスコミ各社から今回の事件に対するコメントを求められています。いかがいたしましたしょう」

山下は聞いた瞬間に軽い頭痛を覚えた。マスコミは『ノーコメント』で一応は何とかなるが、上司への報告はそうはいかない。『まだ何もわかりません』なんて言った暁には、多分、いや確実にクビだろう。しかも、委員会のメンバーである楠木菜摘の父親は、山下より二階級も三階級も上の上司。下手に報告すれば、ここで人生が終わる。

山下（不幸だ……。現場の状況を全く理解せずに、書類だけで全て済ませようとする奴らにどう説明すれば良いんだ？）

などど心で思いながら口には出さない。とりあえず山下は部下に『マスコミはノーコメントで。報告はわかっていることで軽くまとめおけ』と指示。指示を受けた部下はビシッと敬礼をして山下の元を去った。……動きがまるで機械みたいだ。

山下「しかしまあ、マスコミ各社も行動が素早いなあ」

屋上から校門に集まった記者軍団を見て、山下は毎回思う。捜査中の刑事としてはとても迷惑だが、彼らも仕事なのだから仕方がない。

山下「さて、早く事件を解決しないと」

そう言って山下は現場検証をしている刑事達の方へ向かう。

周りからどう言われようと、やるべきことは変わらない。

.....

その頃、小等部職員室では…

校長「これより、緊急会議を行うっ！」

日頃の不摂生か、それとも今回の事が影響したのか、温水洋一みに禿げ上がった頭の校長が言う。

校長「今回、我が木ノ花学園小等部で二件もの事件が起きたことは先生方も知っていらっしやるかと思われます。そこで来週の月曜日に緊急で保護者会を開き、そこで警察の方から今回の事についてご説明いただきます。なお、生徒に関しては…」

「……大変なことになっちゃいましたね…」

小萌「そうですね…。ついこの間まで何事もなかったのですが…」

職員室の隅っこにいる六組担任、月詠小萌は隣の席に座る五組の担任とヒソヒソと話す。幸い、校長からは死角になっているところなので、少し喋ったくらいじゃわからない。

「確か、殺された二人の男子児童ってあの有名な悪ガキ三人組なんですよ」

小萌「そうです。私は直接関わることは殆どなかったのですが、悪名だけは耳にしていました」

「私もです。私の受け持ちのクラスに、その子達と深く関わった子が二人いるんですが…、大丈夫かしら、あの子達…」

小萌「弱気になっちゃいけませんよ先生。こんな時こそ、私達教師がしっかりしないとイケません」

小萌は小さな声で隣に座る教師を叱咤^{しじた}する。教師は小さく頷いて反応を示すが、依然その目には不安が色濃く出てる。

校長「では六年一組担任の金田先生」

るり子「はい」

一方、会議の方は進展していて問題の一組担任の金田るり子が立ち上がる。今回の事件で一番ショックを受けている人物だ。

校長「金田先生は、生徒一人一人に行く個人面談の際は細心の注意をはらうように。どんな形であれ、今回の事件で一番影響を受けているのは子供達ですから、そのことを頭に入れといてください」

るり子「はい」

「……金田先生も大変ね。最初に受け持ったクラスで事件が起こっちゃうなんて。不運にも程があるわ」

小萌「私達教師陣のなかで、一番ダメージを受けていますからね……私達もなんとか彼女をフォロー出来るように頑張りましょう」

小萌は小学生と見紛うような小さな両手をグッと握りしめて決意する。小さいながらも、なんだか頼れる感じだった。

校長「以上で、緊急会議を終了します」

新たな決意と共に教師（大人）達も動き始める。

.....

その頃、再度緊急収集を掛けられた本格推理委員会メンバーは、理

事長室で被害者二人の情報をまとめたレポートを読んでいた。

もう、なりふり構ってられない。

鈴音「よし。みんな資料は行ったね？これから情報をまとめるよ？」

椎「……無理や。こんな山みたいな情報をまとめるなんて、無駄や……」

修・梢「そこ、弱音吐かない！」

椎「はい……」

山のように積み上げられた書類を見て「この世の終わりや……」と言わんばかりに絶望的な顔をする椎。そんな事は構わず話は続く。

鈴音「さて、まずは最初の被害者、牛島剛太くんの事よ。直接会ったことのある零牙君とミアちゃんはどっいう子が知ってるよね？」

零牙「ええ……。出来ることなら記憶の中に入れてたくなかったです」

ミア「私も……あんまり関わりたくなかったよ……」

ハア。とため息を付く零牙と雅。人見知りをする雅ならともかく、あまり人を嫌わない零牙にしては珍しい。

菜摘「二人がそこまで嫌がる人っていったい…？」

鈴音「うん。私も資料を見ただけで嫌気がさした。資料の3ページ目を見ればわかるよ」

そう言っつてメンバーは一斉に手元の資料の3ページ目を見る。そこには…

修「非道い奴だな…。小四、小五で執拗ないじめをしてたのか…」

椎「しかも一人の女の子相手にやな。男の風上にもおけん奴やなあ」

鈴音「二人目の被害者、木村惣一君も同じよ。毎回度が過ぎる程やらかしていて、先生方の間では嫌がられていたらしいよ」

鈴音がそこまで言うと、ある疑問がメンバーの中に出てきた。度が過ぎる程のいじめをしていたのになんで…

梢「なんでそんな子が退学もされず、しかも進級もされているんですか？委員長」

梢が鈴音に疑問を投げかける。それに対して鈴音は、わずかに沈黙してから口を開いた。

鈴音「……それは、ある人物が彼らを退学しなかったからだよ……
そうですね、あざみ先生」

え？と、零牙以外のメンバーは一斉に机に腰掛けているあざみを見る。目を瞑って腕組みをしていたあざみは、「ハア……」と一息付いてからメンバーと向き合った。

あざみ「そうよ。私が彼らの退学を止めたの。あそこまでの悪ガキを入れてくれる学校がないことは目に見えていたし、なにより私が退学にしたせいで、未来ある子供の将来を潰すような真似は、しなくなかったから」

菜摘「立派な考えだけど、それは無意味に終わっちゃったみたいね。
あざみちゃん」

あざみ「そうね……。結局彼らは同じことを繰り返してしまった。私にしては珍しい黒星よ。ええ認めるわ。彼らは悪い子供だった。本当はあの時に退学すべきだったかもしれないわね」

あざみはそこまで言うと、委員会のメンバーが座っているソファに近づいて、鈴音の小さな肩に手を乗せた。

あざみ「でもね。それはそれよ。今とは関係ないわ。何があっても私達がやるべきことは変わらない。今私達がやるべきことは、みんなわかってるわよね？」

修「……忘れろ、つうほうが無理でしょう先生」

零牙「ポジティブに行きましょう。二件の犯行が行われたなら、犯人も絞れてくるでしょう」

ミア「うん。もうこれ以上は好きにさせない。ここは……私達が守るんだ！」

そう言って勢いよく立ち上がる零牙達。やるべきことは山ほどある。まずは、彼に関わりのある人物をリストアップする事だ。

あざみ「私はこの事件のせいで、表立ってみんなに協力できそうにないけど……。頼みわよみんな。みんなだけが頼りなんだから！」

あざみの激を受けて、本格推理委員会メンバーはもう一度気合いを入れ直す。

みんなを守るために、もう一度。

.....

零牙・修「失礼しまーす」

山下「あんまり遺留品はいじらないでね」

零牙「はい」

で、早速調査開始。

当然ながら役割分担。零牙と修の野郎二人は、事件現場の検証。梢と椎、鈴音の三人は牛島達に関わりのある人物をリストアップ。残る菜摘とミアは、牛島のいじめ現場の検証。

現場百回とはよく言うが、それほど現場には重要な証拠が残る。

「警部……。大丈夫なんですか？子供を現場に入らせて……」

山下「大丈夫だよ。ここは僕が責任を持つから。みんなは自分の仕事を続けて」

「はい…」

しびしびと言った風に山下から離れていく刑事。そんな事はお構いなしに零牙と修は薬品室の中を見渡す。

零牙「突撃した時のまんまですね。記憶と照らし合わせても違和感がない」

修「そうか。やっぱり便利だな『完全記憶能力』そのうちから。ちょっと羨ましいぜ」

零牙「まさか。厄介な事だらけですよ城崎先輩。それより、気になるところはありましたか？」

修「まあな。お前がこの部屋に突撃した時…扉には電子ロックが掛かってた。そうだな？」

零牙「後でわかった事なんですけどね。鍵が掛かっていました」

修「よし。この部屋には窓の類のものはない。出入り口はお前がぶっ壊した扉だけ、か」

そこまで考えて修は扉の方へ近づく。零牙が破壊した扉の――鍵が掛かるはずの鍵穴を凝視する。

修「ん？」

山下「何やっているのかな？城崎君」

修「いや…なんかありそうな気がするんですね」

凝視する事数分。修は「ん？」と、なにかを発見して、ポケットからピンセットを取り出し、《それ》を掴む。《それ》は糸くずらしく、鍵穴よりほんの少し上のほうにくっ付いていた。

零牙「なんだコレ？」

山下「さあ…。とにかく調べておくよ。貴重な物証だしね」

修「わかりました。じゃあ、なにか袋に入れておきますね」

そう言って修はビニール袋（チャック付き）に発見した糸くずを入れて山下に渡す。コレがなんなのかは調査結果が出るまで待とう。

零牙「そう言えば山下さん」

山下「なんだい？」

零牙「監視カメラの映像には誰か映ってましたか？」

山下「いや。誰も映ってなかったよ」

零牙「そうですか…」

山下「まあそう暗い顔するなよ。さて、とりあえず現場の調査はもう良いかな？二人共」

修「はい。あんまりオレ達がいると迷惑でしょうっから」

零牙「次は屋上に行きますか」

三人は頷いて階段を登り始めた。

-
-
-
-
-
-
-
-

一方、被害者二人が行っていた壮絶な『いじめ』の現場だった五年二組に行っているミアと菜摘のほうは、資料に基づいて当時の再現をしていた。

ちなみに、ミアがミュ役で菜摘が牛島役である。

菜摘「えーっと、牛島君はこの辺りでいきなり白石さんをひっぱたいて倒して」

ミア「こんな感じですか？」

菜摘「そうそうそんな感じ。それで、もう一度はたこうとしたところを、その光景を見た早川君が殴りかかってきたと…。つか、リュウ君強いね。三対一で一方的だったって資料に書いてある」

資料を見ながら菜摘は思う。この歳でここまでの強さを持つ子供はそういない。

零牙君と一緒に将来有望な子供がいるなあ。と、菜摘は楽しげな笑みを浮かべる。

ミア「本人曰わく、場慣れしてるっていう理由らしいよ？」

菜摘「そうなんだ。まあ『早川流古武術』の修行をしているんじゃないかな」

ミア「へ？『早川流古武術』？」

菜摘「あれ？知らないの、ミアちゃん？」

ミア「う、うん。だってリュウ君いつも『秘密』。そっちのほうか格好いいだろ？」って言って教えてくれないんですよ」

菜摘「なるほど。じゃあ代わりに私が説明してあげよう。早川流古武術は一言でいうなら『実用的な拳法』。ううん『殺人拳』かな？」

ミア「殺人…『拳』？」

菜摘「そつ。殺人拳。私も一回おじいちゃんに連れられて行ったんだけどね。すごかったなあ。楠木家最強を誇るおじいちゃんと互角に闘ってたんだよね」

菜摘は昔を思い出す。あの闘いはすでに『試合』というレベルを超えて『殺試合』^{ころしあひ}という感じだった。

ちなみに試合の結果は引き分け。というより、これ以上続けたら本当にヤバい。というところまで闘ったので、中断したのだ。

菜摘「一番驚いたのはアレかなあ。『岩砕き』。高さ1メートルはある岩を砕いたんだよね。拳一つで」

ミア「えっ……？うそ……」

それは普通に考えて人間技じゃない。そんな技をサラツと言った菜摘は「絶対嘘でしょ」と疑っているミアに向かって拳を突き出し

菜摘「本当よ本当。拳一つでドガン、って」

ミア「……菜摘先輩も出来るんですか？『岩砕き』」

菜摘「アレは無理だね。うん。下手すれば手が複雑骨折するし、コツを掴むのが無理だよ」

菜摘でも力業で瓦割り10枚ぐらいは出来る。でも早川流の『岩砕き』は次元が違う。早川流の『岩砕き』の場合、砕いた箇所が風化するのだ。

つまり、それだけ威力が高い技である。

菜摘「アレを体得した人は物凄く強いだろうね。リュウ君はどんなのかな？」

ミア「さあ…?」

菜摘「今度試しに聞いてみよつと。もしリュウ君が体得していたら、零牙君と同じくらい強いんじゃないかな?」

菜摘がそんな事を言う。それに対してミアは『ムツ…』と口を尖らせて反発する。

ミア「いくらなんでもそれはないんじゃないかな?だって、レイは無敵だから。」

菜摘「そこまでムキにならなくても良いよミアちゃん 本当、ミアちゃんは零牙君にぞっこんなんだね」

ミア「……(ノノノ)」

菜摘「うんうん。やっぱり頬を赤らめているミアちゃん可愛いね。……ハアハア……」

ミア「…!?!?凄まじく嫌な予感!」

菜摘「もう、我慢出来ない…。零牙君ゴメン。ミアちゃん……イタダきますっ!」「ミア「い、イヤアアッ!」!」

どうしてこうなった。と、聞かれればこう答えるしかない。

すみません。m(|)m

オレ「・・・なにが『すみません』だクソ作者。人間な、やっていい事と悪い事があるんだよ」

アレから数時間後、なぜかミアが菜摘先輩に襲われている光景を見て、菜摘先輩をボコボコにした後、縄で縛って理事長室に隔離してから屋上に行き、なんやかんやで現在家。もう、説明めんどい。

オレ「仕事放棄すんな作者。オホン。あれから屋上に行って、オレ達は警察が調べ尽くしたと思われる屋上を再び隅から隅まで見渡したが、結局何も見つけられずに今に至るわけだ。まあそこまでは良い。そこまでは良いんだが・・・」

ミア「フン、フフン、フン、フフン。フン、フンフーン」

オレ「なんでミアが家にいるんだ！」

ミア「私が家にいたらなにか困るのかな？レイ」

オレ「そうじゃねえが…」

と、オレは隣に座ったミアに目を向ける。ウサギの着ぐるみパジャマに身を包んだミアはとつても可愛くて、例えるならそれはまるで雨の日に可愛らしく鳴く捨て猫のようであり、高原に咲く一輪の儂げなタンポポのようであり、すなわちオレが言いたいのは――

ミア「あ、あの、レイ？その…あんまり見つめられると、恥ずかしいよう…／＼／」

そう言つてモジモジするミアに更に興奮…もとい、欲情する零牙。忘れていると思うが、コイツはメイド服大好きの生粋の変態である。

オレ「いや、そのだな。その…似合つてたからつい、抱き締め…ゲフンゲフン！…見とれてしまったんだ」

さらつと本音が出るあたり、零牙の理性耐久力は残り50。あと数回の攻撃で即死（崩壊）する。

ミア「あう…／＼。ありがとうレイ。とつても…嬉しい」

オレ「ハウツ！（理性耐久力残り30）

……な、なんかお腹減っちゃったな！何か作るか！（ここに居たん

じゃ理性が持たない！」

ミア「あ、うん。そう、だね。うん。何作ろっか？」

オレ「パスタで良いかな？材料あるし」

ミア「わかった」

ソファアから立ってキッチンへ向かう二人。

新婚夫婦に見えるか？と聞かれれば、見えなくもない。

どんな状況に置いても、幸せそうな二人だった。

- - - - -

で、木村惣一が殺された次の週の火曜日。

オレ・ミア「うーん……」

誰もいない図書室で、オレとミアは牛島が殺された時のトリックを

解くのに唸っていた。

いや、正確には図書室の入り口に警察官が二名程いる。

現在、学校の至る所に警察がいて、小等部のあちこちを監視している。

立て続けに二件もの事件が起こったのだ。こういった臨戦態勢を布くのは当たり前だろう。

因みに学校としては今日は登校日だが、保護者の中には『子供を危険な目に遭わせたくない』という理由で、子供を通わせない人もいるらしい。

まあ、当然といえば当然の心理だよ……。親なんてどんなもんなのか知らねーけど。

ミア「うー。わかんないよー」

オレ「状況が状況だからなあ……。結局、まだ『糸くず』の正体は掴めてないし、いつ犯人は死体を運んだんだろ……」

オレ・ミア「……うーん……」

図書室の机の上にある第二薬品室の見取り図とにらめっこすること
30分。一向に良いアイディアが浮かばない。

先輩達はあざみ先生の手伝いや、学校に来ている子達で、牛島と関
わりのある人達を探っている。

警察……山下さんも一生懸命捜査したり、保護者への説明をしたり
などあちこち駆けずり回っている。

つまり、警察もそうだがオレ達『本格推理委員会』も手詰まりで、
人手不足なのだ。

オレ「……はあ。ダメだ。何も思い浮かばない。」

ミア「全然わかんないよう……」

そして弱音を吐いて机に突っ伏すオレ達。おかしいなあ……。今まで
ならトリックぐらいパツと思いつかんだんだけどなあ……

オレ「ああああ……。根詰めすぎて気分悪い……。ちょっと顔洗って
くるわ……」

ミア「わかった。行ってらっしゃい」

オレ「うーい」

一向にトリックがわからないオレは、一旦気分転換にでもと、図書室から出て行く。頭を使いすぎてミアも疲れているのだろう。いつもと違い、返事がおざなりだ。

ノロノロと立ち上がって図書室を出ていく。あー。気分悪う…。

……この時、オレはなんでミアも誘わなかったのだろう。

まさかコレが、ミアと交わす最後の言葉になるなんて…

続く

なりふり構ってられない(後書き)

夢幻「読者の皆様お久しぶりです。五流作家夢幻、やっとテストという現実を乗り越えて帰ってきまし・ブベラッ！」

零牙「作者アアアアアアア！」

夢幻「ちよっ！零牙！久しぶりの登場のところ悪いけど、なんでそんな殺気バリバリ出してんの!？」

零牙「あゝあゝ!?!?なんか言ったかあ？(拳の骨を鳴らす音)」

夢幻「……いえ、何も……」

零牙「良おし、今回の投稿のラストの文はどういった意味か詳しく説明してもらおうか!?!?あん?」

夢幻「そ、それは…(やべえーよ。下手に答えたら死確定だぞコレ!!)」

零牙「それは?」

夢幻「……来週わかるよ」

零牙「死ね！」

夢幻「えっ、ちよっ！ちゃんと峰打ちでお願いしま……」

ザシユ。

零牙「ハア、ハア……。よし、とにかくこれで良いだろう。これであの
変な終わり方の続きは誰にも分からない！これで良いになったんだ。
うんこれで……」

……次回はちよっとシリアス&重め予定。

大切な人…（前書き）

一週間ぶりの投稿っ！

今回も重たいZE！

大切な人…

オレ「はあ…」

図書室近くのトイレまで行って、顔を洗ったオレは何度目かわからないため息を付いた。

備え付けの鏡に映るオレの顔は…なんだか疲れ切っていた。

オレ（ま、疲れ切っていれのは今に始まったことじゃないけどな）

疲れ切っている理由は、事件のことだけじゃない。

オレ（『天地逆転』の狙いはオレ…。今回の事件は奴らが関わっているのか…？）

何度考えても解けないトリック。姿の見えない摩訶不思議なトリック。

もし奴らが魔術を使って犯行を犯したなら…

オレ（いや、それはない）

自分で自分の推理を否定する。どうも、『天地逆転』のことが気になって仕方がないらしい。

魔術師としてしょうがない性さがなのだが、こつも頭の回転が鈍くなる原因となるとイライラしてくる。

オレ「だあああっ！くそっ！わからねえ！」

ガシガシガシガシッ！と、思い切り頭をかきむしる。なんか気分が晴れた…ような気がした。

オレ「はーっ！はーっ！はー！」

いつもと違い、最初から事件に関わっているはずなのに、既に被害者として二人も死んでいる。

死んだのは零牙でも救いよつものなさそうな悪ガキだったが、それでも命を奪われて良い理由にはならない。

オレ「はーっ！落ち着けオレ。冷静になって現場を思い出せ。考え得るすべての可能性を導き出せ。答えは必ずその中にある…っ！」

鏡の中の自分とにらめっこして思考の海に浸る。相手が魔術師だと決めつけるのはまだ早い。例え魔術師だったとしても後で殺せば良い。今は目の前の事に集中しろ……。

リュウ「……なんかお取り込み中悪いんだけどさ。考えるんだつたらトイレ（ここ）以外でやれよな。レイ」

……する前に後ろから見知った声が聞こえてきた。なんだ、いたのかお前。

オレ「リュウか……。学校、来てたんだな」

リュウ「おいおい……。今更気づいたのかよ」

オレ「悪い。事件のことで手一杯でさ」

オレは振り返って親友の顔を見る。いつになく真剣な顔で、リュウはオレを見ていた。

リュウ「レイ、少し話がある……。一緒に来てくれ」

オレ「事件のこと、だな？」

リュウ「ああ」

リュウが頷く。あの牛島達と関係のあるリュウは、まだ『本格推理委員会（オレ達）』から事情聴取を受けてない。

オレを見込んで話してくれるんだろうな…。

オレ「わかった。ミアも連れてきて良いか？」

リュウ「いや。お前と1対1（サシ）で話したい。……ダメか？」

オレ「いや。大丈夫だ。」

リュウ「そうか。じゃあ、付いて来てくれ」

リュウは歩いて、正面の階段を降り始めた。オレもその後が続く。

リュウは、一体なにを伝えたいんだろう…。

- - - - -

ミア「うーん…。わからないなあ」

レイが図書室から出た後、私はもう一回ふたつの事件の状況をおさ

らしいしてみた。

第一の事件

被害者は牛島剛太。死因は脊髄損傷による呼吸困難。

カードキーでしか開かない頑丈な第二薬品室での事件。

カードキーを持っているのは科学教師、又は各校長、あざみ先生。

近くには監視カメラ。節電のためか、SHRが始まると自動で切れる仕組みになっている。

稼働中の記録に不審者はいない。

(なお、薬品室の中は映らない)

不明点：犯人はいつ、牛島を運んだのか。(前日まで登校していた。下校姿も確認済)

そしてなぜ、薬品室などという場所を選んだのか。

第二の事件

被害者は木村惣一。死因は頸部圧迫による窒息死。

小等部屋上での犯行。遺体は、犯行時に屋上から垂れ下がっていたと思われる垂れ幕の中に隠してあった。

不明点：これもまた、遺体をいつ、どうやって運んだのかである。

ミア「う〜ん…。単純に考えて、遺体を生徒の前に堂々と運んだのかな？でも、そしたらバレるよね…？」

るり子「何をやっているのかしら？」

ミア「ひゃい!？」

現場の資料とにらめっこして頭を悩ませていた私は、突然声を掛けられて変な声を出してしまう。

声を掛けて着たのは…、一組の担任の先生だった。

ミア「え…。あ…。う…」

そして私の人見知りスキル発生。こ、声が上手く出てこない…!

るり子「あー。そう強張らないで。私は一組の担任の金田るり子。よろしく」

ミア「ど、どつも……」

おずおずと差し出してきた手を握り返す。ハウウ……。緊張しちゃうよう。

るり子「えーっと、あなた、お名前は何て言うのかしら？」

ミア「か、管原雅です……」

るり子「今、そこで何をしてたの？」

ミア「え、えっと……。ほ、本格推理委員会の活動をしていました……」

もじもじしながらも、なんとか私は言葉を返す。うう……。お兄ちゃんやレイがいないと緊張しちゃう……！

るり子「本格……ってことは今学校で起きている事件のこと？」

ミア「（コクコク）」

るり子「そっかぁ！すごいね雅ちゃん！ねえ、今どれくらい解けたんの？」

ミア「ま、まだ全然…。ってわああっ！資料見ちゃダメですよ！」

私が俯いてもじもじしていたら、先生が資料に手を伸ばしていた。

るり子「え〜？良いじゃない。減るもんじゃないし」

ミア「ダ、ダメです！守秘義務とかあるんです！」

るり子「私事件の関係者よ？これでも科学教師だし」

ミア「もっとダメです！と、とにかく資料を見ちゃダメです！」

私は先生から素早く資料を取り返し、胸で覆って隠す。

すると先生は「じゃあ…」と、もったいぶって重要な話を話し始めた。

るり子「じゃあ、風見鶏の近くにある古い井戸は知ってる？」

ミア「古い…井戸？」

るり子「そう。戦時中に使われていたらしい古い井戸でね。学校からそう遠くない所にひっそりとあるのよ」

ミア「なんでそんなことを…」

るり子「もし、もし（・・・）よ？犯人がこの井戸の事を知っていたら？」

ミア「！！」

るり子「犯行に使った物を、隠すんじゃないかな？って」

私の頭の中で犯行の取った行動がありありと思いつかぶ。確かに、今までの犯行は何か道具を使えば簡単に実行できる。

・ 例えば、袋に遺体を隠して薬品室に置くとか。

・ 例えば、滑車を使って遺体を運ぶとか。

ミア「…………でも、なんでそんな事を私に…？」

教えてもらって失礼だけど、ここまで重要な事は普通警察に言うは

ず。なんで私に言ったんだろ？

るり子「それがね…。先生、あの中で一番疑われてるみたい」

先生が私の耳元で囁く。しきりに入り口を見ているあたり、入り口の人を警戒しているんだろう。

ミア「え？」

るり子「まあ牛島君がいなくなった日は私が宿直だったし、担任の先生だからかな？警察は私を重要容疑者に行っているみたい。

先生はね、何もやってないのに勝手に疑う警察には言いたくないの。それで、本格推理委員会のなかで一番話しやすかった雅ちゃんに話したのよ。ね？雅ちゃんお願い。先生を信じて井戸を見に行つてほしいの」

そこまで言うと、先生は両手を合わせて片目をつむつて「お願い」と言う。まあ、私から警察の人に言えば良いんだし…

ミア「わ、わかりました。調べておきます…」

るり子「ありがとう。先生は警察の人に見張られてるからいけないけど…井戸の場所は、風見鶏の校舎裏の茂みの中にあるわ。すぐ見つかると思うから頑張つて」

ミア「は、はい。任せてください」

私は深々と頭を下げて、事件の資料をまとめ図書室を出る。念のため、レイにも伝えておこう。

.....

リュウ「さて、ここで良いか……」

そう言っつてリュウが連れてきたのは小等部校舎裏。一目に付きにく
いこの場所は、秘密の会話をするにはうってつけだ。

リュウ「ややこしい前置きは嫌いだから単刀直入に聞くぞ。……レ
イ、お前は今回の事件をどう見ている？」

リュウがオレと向き合っつて睨みつける。全く……そんな怖い顔すんな
よな。

オレ「別に？ただ、トリックが解けなくて、容疑者が多いなあ。と
思っているだけだ」

リュウ「じゃあその容疑者の中に、ミユはいるのか？」

リュウはますます恐い顔に……いや、何かを恐れているような顔になってオレを見る。なるほど。やっぱりこれが本題か。オレ「もちろんだ。まあ、オレは、ミュちゃんは殺人なんてマネはしてないと思っっているけどな」

リュウ「……そうか。なら良い。オレの用はそれだけだ。悪かった」

オレ「おっと。まだ話は終わってないぜ」

予想通りリュウの用件は「ミュちゃんの事」。なら、個人的にハッキリさせたい事がある。

オレ「オレからも一つ聞かせるリュウ。お前はなんでミュちゃんの事を気にかけた？ 普段あれだけ逃げ回っているくせに、こんな事すればますますミュちゃんお前に惚れるぞ？」

リュウ「……それは答えなきゃいけないことなのか？」

オレ「ああ。委員会のメンバーとしてお前に聞きたい。一応言っておくが別に嫌なら答えなくても良い」

リュウ「なら、オレは「ただし、その場合はミュちゃんを疑わせてもらう」「……!」」

リュウがオレの方を見る。その目は信じられないようなものを見る目だった。そんなリュウに構わず話を続ける。

オレ「今回の事件、オレはミユちゃんは被害者を『直接』殺害して
いないとは思っている。だが、殺害の手助けはしたんじゃないかと
疑ってる」

リュウ「レイ、お前何言つて「被害者の首もとにあつたスタンガン
の痕」

オレ「あのスタンガンの痕。オレは、ミユちゃんが付けたんじゃないか
かと思っている。ミユちゃんの過去のことは知ってる。あの後、
あいつらとどんな関わりがあつたかは知らないが……。とにかく、牛
島を呼び出せば一瞬でことは終わる。あとは誰かに頼のめば家に居
てアリバイを作れば良い」

リュウ「零牙！ テメエ……！」

リュウがオレにつかみかかる。予想していたとはいえ、効果てきめ
んだな。

オレ「だからオレは知りたい。お前とミユちゃんに何があつたのか。
事実を知って、この『最悪の推理』を否定したい。教えてくれリュウ。
ウ。ちなみこの推理はお前にも当てはまる。頼むリュウ。親友を疑
うオレを助けてくれ」

リュウ「……」

昔から人に恨まれやすかったオレは、疑いだしたらとことん疑ってしまう。

ちくしょう……。イヤな性格だクソツタレ。

リュウ「……お前、本当にオレ達を疑ってんのか？」

オレ「疑いたくはないけどな。容疑者を疑うのは探偵の悲しい性^{さが}だ」

リュウは「そうか……」と悲しそうな顔をして、手を離す。そして大きなため息を付いてから理由を話した。

リュウ「オレがミユを気にかけた理由、か。簡単な事だ。あいつは犯人じゃない。だから無意味な疑いを掛けてほしくない。一年前にも味わった苦しみを、味わってほしくないからだ」

オレ「やっぱり一年前に関係するの……」

リュウ「ああ。一年前、資料じゃあオレはミユをいじめから助けたヒーローみたいになっているだろうけどさ……本当は違うんだ」

オレ「違う？本当は別の人が助けてたとかそう言うことか？」

リュウ「そういうことじゃねえ！そういうことじゃねえんだ…。

…：本当は、オレはミュ（あいつ）のいじめをエスカレートさせてしまった張本人なんだよ…。」

リュウは頭を垂れてうなだれる。それから、普段の大声からは予想できないくらいのか細い声で呟いた。

リュウ「最初はただの偶然だった…。偶然、ミュがいじめられていたところを見つけて、オレが割って入ったんだ…。

それからなんとなく見つけたら割って入って、牛島達を殴って退けて…。それだけだった。オレはあいつのことなんて眼中にもなかったんだよ。」

オレは黙ってリュウの言葉を聞く。リュウの声からは後悔の気持ちを感じ取れた…。リュウは、リュウなりに苦しんでいたんだ。

リュウ「でも、牛島達やミュは勘違いしちゃった。オレのせいで牛島達のいじめはエスカレートしてミュを傷つけたし、ミュ本人はオレに好意を向けてる…。オレはそれを受け取る資格なんてないのにないのにな。

でも、オレは一回助けたミュにまたあんな思いはもうしてほしくないんだ。それが、あの時ミュを助けたオレの責任だ。」

リュウは顔を上げてオレを見る。……おいおい、そんな困った顔されても困るっつもの。

リュウ「だから零牙、オレを疑う分には構わない。だから、せめてミュだけは疑わないでくれ」

オレ「……そんな顔でオレを見るなリュウ。元からオレはミュちゃんを疑ってねえ」

リュウ「……は？だってお前、ついさっき疑ってるって……」

オレ「ダアホ。オレが本気で友達疑う訳ねえだろうが。それになあ、
『オレはミュからの好意を受け取る資格がねえ』？バカかお前は！
っ！かバカだろお前！」

リュウ「はあ！？バカバカ言うなバカ！」

さっきのしんみりした過去の話を聞いて『コイツはバカだ』って本当思った。そんなバカにはちゃんと説明してやらないとな……。

オレ「るせえ！『オレのせいでいじめがエスカレートした』？そう思ってる時点でお前はバカなんだよ！いじめをエスカレートしたのは牛島達だろーが！お前は悪くねえ！」

例えお前のせいだったとしても、お前はきちんとミュちゃん救い出してんだろうが！

お前がミュちゃんのことを気にしていよーがなかるーが、ミュちゃんを助けたっうことに変わりはないだろうが！」

オレの言葉にリュウが驚く。全く…オレとは違ってちゃんと助け出したんだ。感謝こそされても、恨まれる理由なんてないだろ？

オレ「だから胸を張れ。お前は立派にミュちゃんを救い出したヒーローなんだ。いいかげん、つまんねえことに捕らわれんのは止めようぜ、ヒーロー（リュウ）？」

リュウ「……………」

オレ「……………なんだよそのアホ面はよ…。はあ…。じゃあな。オレは図書室に戻る。ミアが心配してるかもしれないねえからな。ミュちゃんによるしく言っといてくれ」

そう言ってオレは歩いて校舎裏から離れる。はあ、さつさと事件解決して4人で遊びに行きてえなあ。

- - - - -

同時刻、特別教室棟『風見鶏』裏の茂みの中で…

ミア「……張り切って来たものの、草が多くて困ったなあ……」

ミアが例の井戸を探していた。が、風見鶏裏の茂みは長年手入れしてないためにか、背丈がミアの肩まである雑草がかなり生い茂っていた。

ミア「うう……。こついつのはお兄ちゃんに任せたいかも……」

草をかき分け、汗を滲ませるミアはそうぼやく。まだ小学生だが恋する乙女。汗だくなるのはあまり好ましくない。

……ま、ぼやくだけで黙々と井戸は探し続けているのだが。

ミア「全く……。レイは出たつきり戻ってこないし、私がこんな汗だくになって必死に捜査しているのに何やってんだか……」

いつの間にやら零牙に対する愚痴へと変わる。そして愚痴をこぼすこと数10分後……。

ミア「あ！あつた！」

ミアは古びた井戸を見つけた。高温多湿な茂みの中にあつたためか、丸く積み上げられたレンガには苔がびっちりくっついている。

ミア「さてと……。井戸の中を確かめないと……」

そうしてミアが井戸の中をのぞき込む。井戸だから当然なのだが、底が深くてなかなか見えない。

ミア「うーん……。ライトがないと見えないなあ……」

そう判断したミアは井戸か顔を上げたその時！

ゴッ！

ミア「うっ……」

鈍い音と共にミアが倒れる。

赤い液体が、地面に広がる……

……

オレ「いない……」

あの後、いきなり後ろから飛びかかってきたリュウと拳で友情を確かめ合ったオレは、タオルで汗を拭きつつ図書室に帰ってきた。

……が、そこはもぬけの殻。人っ子一人いない。

オレ「あれ〜？てっきりまだ図書室にいるものかと思ったが……。先帰っちまったか？」

でも先に帰るんならなんか連絡寄越すよな。と思ったオレは、表の人専用の白い携帯を取りだそうと右ポケットに手を伸ばす。が、

ピリリッ！

その時、反対にしまつてある教会関係者（魔術師）専用の黒い携帯が鳴った。相手は…非通知設定。怪しいな……。でもまあ、とりあえず出してみよう。

ピッ

オレ「もしもし」

????『ハア〜イ。初めましてかな〜速水零牙くう〜ん？』

聞き慣れない声だった。そして直感的に感じる……『敵!』

オレ「誰だテメエ」

オファニム（以降オファ）『誰だ。はないでしょ零牙君？私は天地逆転のNo.2。座天使オファニムと言えは分かるかな？浮世絵町じゃ吸血鬼相手によく健闘してたね？』

オレ「テメエか！カルト宗教の教祖脅して、平穩無事に暮らしてた吸血鬼達を町に追いやったのは!」

オファ『そゝよゝ。あの町にはなかなか面白い人がいたからねゝ。私個人としてはまああなたのそばにいた女顔の少年がお気に入りかなゝ。壊しがいがあって楽しそうだし。アハハハハ!』

狂ってやがる……。オレの命を狙っている奴らとはことん頭がいかれちまっているらしいな……。

オレ「オーケー。そんなテメエは精神病院に入院することを進めるぜ……。ところで、今日は何のようだ狂った人マーダー？」

オファ『ああそうそう…。今とっても面白い画像送ったから、待ち受けにでもしといてって話。じゃ〜ね〜』

ブツ…。心底腹立たしい口調と態度のせいか、オレの顔はピクピクと引きつって動かない。

オレ「あ、の、野郎…！」

みしり、と手の中で携帯が軋む。あまりの怒りに頭の血管が切れるかと思っただ。

ピロリロン

機械的な電子音と共にメールが届く。即座に携帯を捜査してメールを開く。

そこには

オレ「〜〜〜！あ、の、野、郎ツツ！絶っっっ対捕まえてこの世から肉片も残さずにスクラップにしてやる…！」

廊下の窓から飛び降りて白い方の携帯を見る。ミアからのメールが届いていた。内容をみたオレは、すぐさま風見鶏へ向かう。

頼む…。まだ生きててくれよ…！

.....

(レイ…)

薄れゆく意識の中、ミアはひたすら恋人の名を呼んでいた。

(助けて…)

右手に、彼からプレゼントされたお揃いの十字架クロス握りしめてただ祈る。

.....

零牙「ここか！」

オフアニムからの電話を受け、自慢の『神速』を生かしてあつという間に風見鶏裏の茂み前まで来た零牙は、ポケットから一枚のルーンのカードを取り出す。

零牙「『この手には炎 その役は剣』！」

呪文を詠唱して手の中に炎剣を生み出す。そして、草を根こそぎ焼き払う(.....)。

オレ「ミアアア！どこだぁ！居たら返事してくれえっ！」

片っ端から草を焼き切り、血まみれに倒れているはずねミアを探す。
心のどこかで、嘘だと信じながら…

そして

零牙「ミアッ！」

炎剣を手にした魔術師は、愛する少女の姿を目の当たりにする。

辺り一面に広がる赤。そして、目の前で血を流しながら倒れている少女。
その少女の目は、かつて自分が殺した姉のように、虚ろな瞳をしていた。

零牙「う、あ、あ、ああああああっ！…！」

その光景があまりにもそっくりで、

あまりにも衝撃的すぎて、

零牙は、ただそこにずっとまっただけ泣くしかなかった。 -

大切な人…（後書き）

夢幻「さあつて、やっと書ききったぞ。いや。書くのに苦労した」

梢「ちよつと、作者」

夢幻「なんだ梢ちゃん」

梢「逃げた方が良い」

夢幻「んあ？零牙のことか？大丈夫大丈夫。あいつ今、精神崩壊してっから」

梢「違う違う。アレ」

夢幻「アレ？」

コッコッコッコッ！

「作者アアア！」

夢幻「ひい！鬼神二人組（修に岳）！」

修「良い度胸してんなあ作者あ……。まさかあんな終わらせ方とはよ
お〜」

岳「死ぬ覚悟は出来てんだろうなあ……！」

夢幻「ま、ず……。読者の皆さんすみません。ちょっと鬼神が怖いので逃げます！また次回をお楽しみにっ！」

「作者アアア！」

梢「……次回、本格推理委員会『苦惱』」

昔と今（前書き）

今回はチラチラっと出た零牙の過去話が出ます。

事件は次回解決する（予定）

昔と今

・・・だから頼む。自首してくれよ。父さん。

ここはイギリスの片田舎にある古い教会。

今、ひとりの少年と修道女が背を向けている神父を説得している。

・・・今ならまだ間に合うから……。お願いお父さん、自首して……。

しかし神父は応えない。

幼い頃から我が子のように接してきた彼らの言葉にも何の反応も示さない。

・・・悪いが私はもう、戻るわけにはいかない。

神父は振り向いて懐から黒く光る『殺意』を少年に向ける。

その『殺意』は無機質に、ただ機械的に少年を撃ち殺そうと弾丸を放つ。

そして……

.....

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

機械的な電子音が室内に響く。

人口呼吸器を取り付けられ、ベッドの上で横たわっている少女……
管原雅は頭に包帯を巻いて眠っていた。

修「……」

その傍らで修はただ静かに雅の手を握っていた。

まだ、暖かい温もりを感じられる……。その命の暖かさは不安で心は
はじけてしまいそうな修の心を必死につなぎ止めていた。

直子「ミアー！」

岳「ミアー！」

そこへさらに岳と直子が駆け込んできた。すぐさまベッドの脇に駆け
寄る

直子「ミアッ！ミアッ！」

修「少し落ち着け母さん。大丈夫だから。な？」

直子「う、うん……」

岳「修、一体何があった。どうしてミアは……」

修「詳しいことはオレもわからねえ……。簡単な説明を零牙が電話して来て、すぐさまこの病院に来たからな」

岳「そうなのか……」

岳は立ったまま無言で立ち尽くす。直子に至ってはすでに泣いていた。

直子「ミア……ヒック。起きてよう……。ミア……」

岳「……落ち着け母さん。大丈夫だ。ミアは死んだりしない。あの子はトラウマを一人で乗り越えられるくらい強い子なんだ……。だから、大丈夫だ……」

修「そっだよ母さん。ミアはいつも笑ってオレ達を元気にしてくれた。だから、今度はオレ達がミアを元気にする番なんだ。だから……そんな顔すんな」

直子「うう……。そうだね？。大丈夫だよね……？」

うん。と岳と修は今出来る精一杯の笑顔を作って笑う。

全員、不安でしようがないのをこらえて、ただ一人の少女が目覚めることを待つ……

.....

その頃、緊急治療室の外にいる本格推理委員会メンバーは暗い顔をしていた。

そこに、零牙の姿はない。

鈴音「どうしてこうなっちゃったんだろうね……」

菜摘「なんでなんだろうね、鈴ちゃん……。なんでミアちゃんがこんな目……」

梢「……」

椎「……」

その問いに答えられるはずがない。誰も・・・分からないのだから。

あざみ「…みんな、何暗い顔して立ち止まってるの？」

梢「あざみ先生…」

あざみ「行くわよ。ミアちゃんを殴った犯人を見つけに」

あざみは車のキーを持って歩き出す。鈴音と菜摘は一度顔を見合わせてから頷いてその後を追う。

……が、梢と梢は動かない。

あざみ「どうしたの？行くわよ」

あざみは振り返って呼び掛ける。しかし、二人はそこで立ち止まっている。

あざみ「立ちなさい。そこにいたって、どうしようもないでしょ」

梢「……今更動いて何になるんや。そんなん、意味がない」

鈴音「じゃあ椎ちゃんはそこでじっとしてるの？」やる前から意味がない』と諦めて、それでいいの？」

椎「……」

鈴音「私はやだよ。ここで諦めるなんて絶対に嫌だ。絶対に犯人を捕まえて、一発入れなきゃ気が済まない」

鈴音はぐっ、と手を握りしめて椎を見る。その目には、強い意志が宿っていた。

鈴音「もしかしたら意味のない行動かも知れない。でも、だからといってここで立ち止まるわけにはいかないんだよ。こんなに人がたくさん死んだり傷ついたりするのはもうゴメンだよ。だから、無駄かもしれないけど私は最後まで諦めないで足掻き続けるよ」

梢「……先輩」

鈴音「梢ちゃんも起きて。犯人見つけて事件解決したら、みんなでパーティーやる？だから、今は頑張って動いて」

鈴音は椎と梢の両方に手を差し出した。二人がその手を掴むのに、一秒の間もなかった。

・希望を捨てず、最後まで諦めないで、信じて彼女達は動き出す。

・

零牙はミアが救急車に運ばれるのを見届けた後、学校を出て病院にも行かずに歩いていた。

身体が重い。得体の知れない何かが、体に巻きついていると思う。

少しでも歩みを止めればま重さに引きずられて倒れてしまいそうだ。

行き交う人々の笑い声が耳障りだった。

街を照らす街灯の光が不快に思えた。

自分が感じる全てのものを壊した、誰も、何も無い世界に行きたい

・そう思った。

でも、そんな場所はあるはずがない。それは、零牙が一番よく分かっていた。

零牙「また、守れなかった…」

ふと呟く。三年前も、今も、同じように大切な人を傷付けた。

・三年前は死にかけてた自分を救い、育ててくれた姉を。

- -今は、最愛の人を。

守ることが、出来なかった。

零牙「ここは…」

零牙が歩いてたどり着いたのは、町外れにある一つの教会だった。

そういえば、あの時も姉の死が信じられなくて、ただ祈っていた。

零牙「……………」

フラフラと零牙は歩いて教会の中に入る。

絶対的な慈悲をもたらす聖母像が、ステンドグラスなら差し込む月光にさらされて幻想的に輝いていた。

零牙「……………」

零牙は跪いて十字架を握りしめ、祈る。そして、三年前にあったことを少しずつ言葉にしていっていった。

- 三年前、オレは姉を死なせました。もうすぐ婚姻の儀式をするはずだった姉をです。

- 三年前、オレは一つの事件を解決しました。麻薬密売のその事件の犯人だったのは、オレが父親のように慕っていた神父さんでした。

- あの日、オレは姉と共に父に出頭してほしいと説得をしに行きました。
しかし、父はオレを拳銃で撃ち殺そうとし、姉がその身代わりになりました。

- 姉の死を罵倒し始めたオレは憎しみを抱き…父を…殺しました。

十字架を握る手に汗がにじむ。それはまるでドロドロした血の感触に似ていて…気持ち悪かった。零牙「天にまします我らが父よ。オレがこの世で一番嫌いで憎い我らが父よ」

それでも祈りは止めなかった。もはや、そんな事はどうでも良かった。

零牙「どうか、ミアだけは助けてください。例えこの身がどうなる
うと、ミアだけは助けてください」

頭うぶを垂れて零牙は祈る。今の彼には……それしか、出来なかった。

.....

チュンチュン…

修「ん…」

次の日、修は小鳥のさえずりと共に起きた。どうやら、ミアの手を
握ったまま寝てしまったらしい。手が汗ばんで気持ち悪い。

まだ寝ぼけている頭を揺すり、目をこすって心電図を見る・・・ピッ、
ピッと規則正しい電子音が聞こえる。どうやら峠は越えたらしい。
人工呼吸器もいつの間にか外されていた。

修「ミア？分かるか？ミア？」

修はミアの意識を確かめようと、体をポンポンと叩く。が、反応が
ない。というか、「スウ…スウ…」と熟睡している。

修「気持ち良さそうに眠ってやがる…。大丈夫そうだな」

ホツと一安心したところで修は手を上にのばしてのびをする。ふと後ろを見れば、直子と岳が寄り添って寝ていた。看護師さんが掛けてくれたのか、毛布が掛かっていてとても暖かそうだ。

修「……」

とりあえず修は、こんな時でもいちゃついている（少なくとも修にはそう見えた）バカ親を寝かせたまま、目覚めのコーヒーでも飲むと、集中治療室を出る。ミアのあの様子なら、今日中にも一般病棟に移るだろう。

修（そういえば零牙のやつ、ミアが大変な時にどこ行ったんだ？）

昨日電話で連絡をよこしたあの白髪の少年を思い出す。とりあえず後で説教だな。と修はひそかに決意して自動販売機で缶コーヒーを買う。

修（先輩たちは…学校かな？椎のバカはどうせ家で寝てるだろうし。あ、学校に連絡しとくか。どうせ今日は休まないだし）

そんなことを考えながら病院のロビーに備え付けられたテレビを見る。今の時間帯は、どのチャンネルもニュース番組をしているはずだ。修はなんとなくテレビの方を向いて朝のニュースを見る。すると――

「……続いて、木ノ花学園で起こった連続殺人事件の情報をお伝えします」

まるでタイミングを計ったようにこのニュースが流れてきた。修は聞き逃さないように注意してニュースキャスターの言葉に耳を傾ける。

「本日午前八時頃、不知木町警察本部は、当学園の化学教師、月詠小萌を容疑者として本部に搬送しました。なお、容疑者はいまだ事件の具体的な供述はしておらず、捜査当局は事件解決に一層尽力を尽くすと……」

テレビには、頭から毛布を被って車で連行される月詠先生の姿が映し出されていた。

修「うそだろ……」

修は小さく呟く。あまりのことの大きさに、持っていた缶コーヒーを床にこぼしてしまふところだった。

.....

あざみ「これはいったいどういふ事!？」

あざみは学校の屋上で山下を問い詰める。内容はもちろん、小萌先生の逮捕のことだ。

山下「ですから少し落ち着いて・・・」

あざみ「これが落ちていられるか！まだ十分な捜査もしきっていないはずなのに、なぜ逮捕したの！？」

普段のあざみからは考えられないほど大きな声で騒ぎ立てる。山下は、襟首を掴まれながらも必死に説明し始めた。

山下「二件目の、木村君の遺体を運んだと思われる滑車が、例の井戸から見つかったんです」

あざみ「それだけ？」

山下「まだです。一件目の牛島君の事件現場にも入れますし、何より井戸の場所を知っていた。上の連中は、彼女を犯人と断定して逮捕状をとったんです」

あざみ「まだ完全な証拠があるわけじゃないのによく逮捕出来たわね。憶測だらけの推理で、後は無理矢理自白させる気？」

山下「少なくとも上の連中はそうらしいです。奴らは芸能人以上にマスコミを嫌ってますから」

山下はあざみの手をはなして身を整える。そして、忌々しそうに顔をしかめた。

山下「上の連中は今回の事件によるマスコミの騒ぎのように、もううんざりしている様なんです。会議である程度まとまったから早く終わらせようとしています。あいにく、僕も組織の一員である以上、従うしかないんです」

あざみ「言い訳に過ぎないわね。自分の保身のために犯人かどうか分からない人を逮捕するなんて。」

宮島理子の事件で何か変わるかと思っただけ…なんも変わんないのね。失敗から何も学ばない。結局、自分が可愛い連中ばっかじゃない！」

山下「そうです。今回の事で僕はもうあまり動けません。ですから後は…」

あざみ「分かってるわよ。私達の手で必ず真相を暴く。 - -絶対に」

そう言ってあざみは屋上を出て行った。

もう一度と、同じ過ちは繰り返させないために。

続く

昔と今（後書き）

今回はほとんど触れられなかった零牙の過去に触れてみました。

ちなみに、零牙の初めての殺人はこの時という設定です。

この時点で零牙は二度家族を失ってます。マユの初登場時、「妹」と認めてなかったのは、「家族を失う怖さを恐れてた」からなんですよ。基本、零牙は「大切な人を失いやすい」んです。今回しかり。

そして、失った経験全てを自分で背負い込んでしまう…『完全記憶能力（生まれもって才能）』でいつまでも捕らわれ続け、失うまいと学んだ魔術を使っても失ってしまう。そういう、いつももがき苦しみ続ける設定にしました。

余談ですが、堕天使として有名なルシファーは、『試練を与える天使』という一面を持っているそうです。（正確には違いますがここはあえてスルーで）

辛い試練を乗り越えた先に、零牙は何を掴むのでしょうか？

それは読んでのお楽しみということで、次回解決編。お楽しみ〜

目的と真相（前書き）

はい解決編です！

これで下準備完了…。あとは…！

目的と真相

零牙「……………」

日が昇って、教会を出た零牙はぶらぶらと近くの公園まで来た。

頭の中で、何回も姉とミアの姿が重なり、何回も自分の無力さに打ちひしがれる。すでに零牙は、自身の心の傷トラウマによって疲れきっていた。

零牙「オレは、どうすれば良い？どうすればこの苦しみから逃れられる？」

まともな思考回路を失いかけた頭でふと問う。もう散々この苦しみを味わった。だから、解放されたい。誰でも良いから、答えてくれ

綾辻「……………だったら、忘れちゃえば良いんだよ」

そしたら、近くで聞いたことのある声があった。そちらの方にゆっくりと顔を向けると

零牙「綾辻……」

綾辻「おはよう零牙君。隣、良い？」

ああ……。と零牙は力なく答える。綾辻は零牙の隣に立ち、じっとうつむいてる。
二人の間に沈黙が生まれる……。

綾辻「ねえ」

綾辻が零牙に問いかける。零牙は無言で力なくうなだれ、じっとしている。

綾辻「雅ちゃん、救急車に運ばれるのを見たけど……どうしたの？」

零牙「……」

綾辻「もしかして雅ちゃん……死んじゃったの？」

零牙「……」

綾辻「零牙君は雅ちゃんがちゃって、苦しいの？」

零牙「……ああ」

綾辻の一言一言が胸に響く。返事こそ適当だったが、その言葉は鉛のように重く零牙の心にのしかかる。

綾辻「わかるよ。その気持ち。私も、お父さんとお母さんを亡くしたから」

零牙「…そうか」

綾辻「うん。事故で死んじゃったの。だから、大切な人がいなくなっちゃう気持ちはよく分かるよ」

零牙「そうか」

綾辻「今思うんだけどさ、私達って似た者同士だと思わない？大切な人がいなくなった気持ちを互いに理解できる」

綾辻は零牙の顔をのぞき込んでその表情を見せる。淡く澄んだその瞳は、とてもきれいだな。と零牙は思った。

綾辻「私見てらんないよ。零牙君がそんなに苦しんでいたら、どう

にかしてあげたくなっちゃう。ミアちゃんが殺されて、零牙君がそんなに苦しむのなら……私はなんとかしてあげたい」

零牙「綾辻……」

綾辻「だから、元気だして？私が支えてあげるから。ね？」

綾辻はちよっぴり恥ずかしげに微笑んで零牙に手を差し伸べる。零牙はその手を握って……

……

椎「……なあ菜っちゃん」

菜摘「なに椎ちゃん？」

椎「犯人って、何が目的なんやるな？」

菜摘「え？」

その頃、本格推理委員会は最初の事件の犯行現場である第二薬品室にきていた。犯人が捕まった（少なくとも一応は）ためか、警察の姿はなく捜査に使う道具類も見当たらない。

椎「これまでの事件には…犯人には犯人なりの理由があったやん。
神保は『実験』、仙道は『快樂』、霧山は『復讐』…理由にもなら
へん理由やけど、それなりに殺害する動機はあったよな？」

菜摘は椎の言わんとしていることが理解できなかったようで「そう
だね…」と適当に返す。が、鈴音はその意味が分かったらしく、う
んうんと頷いていた。

鈴音「そうだね。椎ちゃんの言わんとしていることが当たってるな
ら、今回の犯人の目的はなんだろうね？」

今までのに例えると、『快樂』だったら手が込みすぎてる。『実験』
だったら遺体の状況は似てくるはず。『復讐』…学校側にしても、
子供達相手だったにしても、もっといい方法があるはず…。
もちろん、他の理由も考えても思い当たらない。『無差別』に殺し
ているのとは違う気がする…。」

つまり椎は「今回の犯人の目的はなんなのかわからない」と言いた
いのだ。鈴音の説明を受けてようやく菜摘もわかったらしく

菜摘「……じゃあ、犯人は誰かを狙って殺したのかな？」

椎「それはまた違う気がするなあ…。多分」

鈴音「椎ちゃんが勘で違うっていうなら、違うんだろうね」

菜摘「そうね」

椎「勘とちゃうで！ちゃんと考えたんやで！」

本人はこういうが鈴音と菜摘は全く気にせず話を進める。どんなに当たっても当て勘は推理には使えないのだ。

鈴音「じゃあ、被害者が殺害されることで得する人物って誰なんだろう？」

菜摘「雅ちゃんだったら…零牙君がらみかな？零牙君っているんな所で活躍してそうだし」

椎「牛島と木村ならいじめの被害者？報復って理由で」

鈴音「あゝ。なるほど。確かにあの二人には理由がたくさんあるよね。でも、まさかねえ？」

アハハハハと苦笑いする三人。しかしその会話を隣で聞いていた梢は、とある結論にたどり着く。

トリックはまだしも、犯行を行った動機としては十分だ。

梢（えーっと、一組で零牙君のことが好きでなおかつ牛島達に関わりがありそうな人って言うところ…）

いた。たった一人、一組の中で零牙に告白した少女が。

その少女の名は…

『綾辻』

.....

零牙「……悪いが、オレはもうクヨクヨしてられないみたいだな」

零牙は綾辻の手を取ってそう言う。さっきまでとは違い、その姿はいつもの力強い眼差しになっている。

綾辻「うん。頑張つて零牙君」

零牙「ああ頑張るさ。が、その前に…」

零牙は大きくのびをしてフウ…。と一息付く。そして

零牙「お前に色々と聞くことがある！」

一瞬で綾辻の腕の関節を極める。一方、関節技を極められた綾辻は訳が分からず困惑している。

綾辻「れ、零牙君なにを……」

零牙「お前、なんでさっきミアを『死んだ』ではなく『殺された』って言ったんだ？」

綾辻「えっ？だって雅ちゃん、誰かに殴られて死んだんじゃ……」

零牙「ほう。よく知ってんな綾辻。事件は昨日起こったばかりで、まだ詳しい調査も行われていない今の状況で！」

綾辻「……っ！」

綾辻の表情が強張る。零牙は関節技を極められて、動けない状態にある腕の関節を内側に向かってさらに圧力を掛ける。

零牙「正直に言え綾辻。誰からその情報を聞いた？」

綾辻「そ、それは……」

零牙「それは？」

綾辻「い、言えない。口止めされているから無理」

零牙「……そうか。なら、もっと痛い目に遭うぞ」

零牙は限界まで曲げられた肩関節にさらに圧力を掛ける。ミシミシペキペキ……人体から聞こえてはいけないような音が肩から響く。

綾辻「痛い！痛い！痛いよ！」

零牙「素直に言えば解放する。言うておくけど、手加減はしねえ」

綾辻が涙をこらえながらとある教師の名を言う。零牙はすぐに関節技を外し、学校へ向かった。

- - - - -

零牙（……考えてみれば簡単な事だった）

公園を飛び出した零牙は全速力で走りながら思う。前の事件で、霧山が最後に言った一言。

『彼はいずれ、君の大切なものを奪いに来る』

零牙（天井の奴がオレと周りの人を狙ってるんだ。アイツらの目的は全部オレにあった訳だ）

ミアを狙った理由は言うまでもない。

牛島と木村を狙った理由はオレの信念を壊すため

零牙（くそつたれ。オレはまんまと奴らの術中にはまったわけか

どうも、アイツらの目的はオレを『精神的』に殺すことらしいな。でなきゃ、ミアを人質にでも取って直接攻撃を仕掛けてくるはずだ）

そこまで分かれば後は簡単。零牙はポケットから白い携帯を取り出して『委員長』のアドレスを呼び出す。

ブルブル…ブルブル…

鈴音『も、もしもし零牙君！？あなた今までどこに…』

オレ「委員長ですか？お説教は後で聞きますから質問に答えてくださいー。」

零牙は鈴音の言葉を遮って言う。鈴音は零牙がそこまで焦っているのを感じたのか、近くにある資料を引き寄せているらしい。

鈴音『……………、何を聞きたいの？』

オレ「一組担任の金田るり子は今どこにいますか！？」

鈴音『えっと……。ちょっと待って。学園の監視カメラを起動させて……』

オレ「じゃあ、見つけたら引き止めてください。犯人は彼女です」

とりあえず犯人だけは伝えておこう。一応確信はあるわけだし。

鈴音『えっ！まさか零牙君、犯人の使ったトリックがわかったの？』

オレ「いえ全く」

通話口の向こうで委員長がこける音がした。オレは犯人はわかった。けど使ったトリックが分からない。だから――

オレ「勝手にですけどトリックは任せます。今のオレじゃトリックなんて思い浮かびません……」

鈴音『ちよつ……何を勝手に……』

オレ「後は任せます」

勝手に切って携帯をしまう。場所が分からないなら魔力（裏技）で追うまでだ。

――

鈴音「……まったくもう！」

やっと連絡がついたと思ったら、一方的に電話を切られた鈴音は珍しく怒っていた。事件解決後のお説教（第二弾）は確定である。

菜摘「誰から？」

鈴音「零牙君だよ。今、こっちに向かってるみたい」

菜摘「そうなんだ。良かった」

菜摘はホッと安堵する。意外にも零牙のことを心配していたらしい。

鈴音「うん。でも、トリックなんかはさっぱり分からないって。だから、私達の方で解いてほしいらしいよ?」

椎「なんや。随分と勝手やなあ」

鈴音「でしょ? まあでも、解かない事には始まらないし何か良いアイデア浮かんでない?」

鈴音はダメ元で聞いてみる。すると、さっきから何やら熟考していた梢が手を挙げた。

鈴音「はい。梢ちゃん何かな?」

梢「……例えばですけど、もしかしたら私達が見落としているんじゃないかって……」

鈴音「…なにが？」

梢「一件目の牛島君の遺体ですけど、もし犯人が彼を何か黒っぽい袋に入れたらどうなるのかな？って…」

鈴音「つまり…背景と同化しちゃって分からない。ということかな？」

梢「はい。……確証はありませんけど」

確証はない。と知っているわりには、梢は自信満々に見えた。

カメラの端とかなら見落としている可能性が高い…。そう思った菜摘はすぐさま理事長室のパソコンを開く。

鈴音「第二の事件については、どう？」

梢「あいにくそれは…」

椎「なあ思ったんやけど…」

ここで椎が何か思いついたらしい。「うーん」と腕組みをして聞い

てきた。

椎「小萌先生が逮捕された理由は…確か、犯行に使われた滑車から指紋が出たからなんやな？」

鈴音「そう…らしいよ。うん、山下さんが言ってた」

椎「じゃあさ、それ以外のは？」

梢「それ以外？」

椎「そや。他の先生や生徒達の指紋。山下さんの言うには、ロクに調べられてないんやろ？もしかしたら…」

椎の言葉を受けて真剣な眼差しになった鈴音は、一秒ほど考えた後

鈴音「菜っちゃん、畠さんの番号わかる？」

菜摘「分かるよ。でも、電話は鈴ちゃんがしてね？私、今忙しいから」

鈴音「う…。わたしあの人苦手なんだよね…。でも、しかたがない

…」

菜摘の携帯を受け取った鈴音はしぶしぶ畠へと電話する。

あの死体好きの監察医は、百人中百人から嫌われるだろう

梢「……後は、殺害方法の不自然さ」

椎「多分それについては、考えるだけ無駄だと思うで。梢」

梢「……そう」

梢はそう返し、目の前にあったお茶を飲む。どうやら、事件は解決しそうだ。

菜摘「あー。確かにカメラの端っこに何か動いてるね…。詳しく調べれば分かるかも」

鈴音「…はい。えっ？なかった？先生の指紋だけで、後はきれいさっぱり？はい…。ありがとございました。……よし、みんな行くよー」

鈴音の一言で、彼女達は犯人の所へ向かった。

魔術師がいる、雑木林へと――

――

るり子「　　」

ここは零牙が初めてミアを助けた雑木林の中。そこで金田るり子は鼻歌を唄いながら歩いていた。

零牙「ずいぶんと余裕そうですね。先生」

そこに白髪の少年――魔術師、速水零牙が姿を現す。すでに左手は腰へとまわしてあり、いつでも抜刀出来る体勢になっていた。しかし、対するるり子はいつさい態度を変えない。

るり子「あら、先生に何か用かしら零牙君？」

零牙「ええ。用ならありまくりですよ。天地逆転『オフアニム』」

――瞬間、周りの空気が一変した。時代劇で見られる、両者引かない膠着状態……ピリツとした空気が二人を包む。

るり子「ふうん。案外、立ち直るのが早かったわね」

零牙「当たり前だ。オレを誰だと思ってやがる？それに、時間稼ぎも出来たしな」

時間稼ぎ？とるり子は眉をしかめる。まさか、イギリス清教から援軍が――？

鈴音「先生！」

そう思つて身構えていたオフアニムだったが、現れたのは何でもない一般人…『本格推理委員会』のメンバーだった。

鈴音「先生…。少し、聞きたいことがあります。どうか正直に答えてください」

るり子「……何かしら？」

鈴音「先生は牛島君が殺された日、宿直でしたよね？その日、第二薬品室に行きましたか？」

るり子「ええ。行ったわよ？どうせ分かっているようだから全部白状するわ。今回の事件は全部私が起こしたの」

菜摘「それじゃあ……」

るり子「そうよ。あの三人に危害を加えたのは私。どうせ目的なんてあなた達には分からないでしょうから、ついでに教えてあげるわ。そこにいる速水零牙を苦しめるためよ」

るり子「オファニムは悪びれるどころか、むしろ堂々と言った。嗜虐的な笑みを浮かべて零牙に聞く。

るり子「どうだったかしら零牙君？大切な人が目の前で傷つけられる気分は？苦しかった？つらかった？」

零牙「……」

るり子「そう。黙っちゃうほどつらかったのね。いい気味だわ」

菜摘「っ！」

るり子の様変わりした態度を見て、菜摘は前が出るが、零牙が片手で制した。

零牙「いいです菜摘先輩。手は出さないでください」

菜摘「でも…！」

零牙「あいつはオレが殺^やります」

すでに腰へと回した鞘からわずかばかりに刀身が見える。触れたら爆発してしまいそうなくらい危険な雰囲気。 - - 今の零牙はまどつていた。

るり子「あら？嫌ね、怒っちゃった？」

零牙「安心しろ。お前が抵抗しないなら楽に倒してやる」

るり子「抵抗するなら？」

零牙「痛めつけてから倒してやる」

そのせりふが言い終わるかどうかの瞬間 - - 零牙はるり子の目の前にすでに抜刀しかけていた。

零牙（飛天御劍流・・『双龍閃』！）

二段抜刀術の双龍閃が神速の速さで放たれる。普通ならほぼ確証に二撃当たるはずだった（・・・・・）。

るり子「あら？危なかったわ」

が、るり子は零牙のいる位置からさらに三メートルほど後方に立っていた。

るり子「ごめんね？今はまだ闘う気はないの。今日はここでさよなら」

零牙「待て！」

るり子「じゃ～ねえ」

るり子は忍者みたいに素早く動いてあっという間に消えてしまった。

零牙は逃げられてしまった悔しさをただただ歯噛みして味わった。

・ ・ ・ ・ ・

コンコン

オレ「失礼します」

ミア「遅い！」

オファニムの事件の事後処理（小萌先生の再任用とか、調書作成）とかで今日はミアが殴られて一週間後の日。この間忙しくてミアの見舞いに行けなくて今日来てみたら、ミアがとても怒っていた。

オレ「えっと…ごめんミア。事後処理とかで忙しくて…」

ミア「ふう〜ん。彼女である私の容態より仕事の方が優先なんだ？今まで一度も来ていないくせに」

オレ「あの…すいませんでした。お土産買って来たので食べてください」

ミア「…それだけ？」

オレが頭下げて謝っていると、ミアはジト目でオレを見る。ああやばい。これは本気で怒っていらっしやる。

オレ「え〜っと…。駅前のケーキ屋さん。三つ」

ミア「……それだけ？」

オレ「じゃあ、五つで……」

ミア「それだけ？」

オレ「……十個でどうだ！」

ミア「……」

ミアは完全にそっぽ向いちゃってオレの事を無視し始めた。ああ……こりゃマズいな……。

オレ「い、今なら何でも言うこと聞きます。ですから……」

ミア「言ったね……？」

ミアがこっち向いてニヤリと笑っている。……もしかして、はめられた？

ミア「何でもかあ……。なにしてもらおうかなあ……？」

オレ「えーつと雅さん？何でも言っても僕に出来る事なんてたかが知れて…」

ミア「あ、言い訳するんだ？一週間も私をほつといていたクセに」

あれ！？いつも立場が逆転してる！つか、ほんの数行前までシリアスだったのになんかもうなかったことみたいになって…

ミア「よし決めた！これにしよう」

つてもう決まったのか！ヤバイ。何を命令されるんだ？某有名マジシャンのショーのチケットか？それとももつと別の…

ミア「えつとね…。キスしてほしいな。ちゃんと唇に」

オレ「…え？」

ミア「だ、だから、レイのファーストキスが欲しいな…／／／」

そう言つとミアは黙って唇を突き出してきた。……え？やるの？冗談抜きで？ホントに？マジで？

ミア「……／＼／」

オレ「……腹くくるか」

仕方ない。出来ることならもうちょっとムードを作って欲しかったけど……。

まあ、そうなりたいたいという想いはあったわけだし。

オレ（誓うんだ。オレはもう二度と、ミアをこんな目には合わせない……！）

オレの手がミアの肩を掴むと、ミアはビクツとしたが、ますます顔の赤みを増してジツと待っていた。

あと10センチ、5センチ、3センチ……！

修「ミア〜。見舞いに来たぞ〜」

椎「ミアちゃん元気か〜？」

梢「お姉ちゃんここ病院……。もう少し静かに」

菜摘「そうよ椎ちゃん。もう少し静かに…」

鈴音「あ…」

神様は何がしたいのだろう？こんなギャグマンガみたいな展開ってアリ？

オレ「アハ、アハハハハ…」

ミア「……レイ、いったいどうし…たの」

沈黙が病室を包む。気まずい空気が場を支配する。どうしよう。こんな時はどうすればいいんだろ…。教えて！ドラ もん！

菜摘「あゝ。えっと、うん。零牙君にミアちゃん。……ゴメン」

ザッザッザッ…バタン

オレ「ちよつとおー！？こんなに空気悪くしたまま出て行かないでくださいよおー！」

薄情っつか…なんたるこの不幸。辛いんだけど。誰か助けてほしいんだけど

ミア「……（グイグイ）」

オレ「……えーっと、なんでございませしょ？」

ミア「……ん／＼／」

……ああなるほど。やっちゃんだね？オレ、どうなっても知らねえよ？

今度こそオレは……ミアの肩に手を優しく置き、そして黙って唇を重ねた……。

宴会！（前書き）

レッツ宴会！

……やりすぎたかなあ。

宴会！

「それでは！事件解決と雅ちゃんの退院を祝って」

「『『かんぱい！』』」

木ノ花学園を騒がした事件から一週間後の今日、本格推理委員会メンバー＋木下家＋城崎家＋速水家の総勢11名が大手有名焼肉店に来ていた。

おばさん「しかし残念やな。カンナもくれば良かったのに」

修「まあ母さんは人見知りか激しいですから。△切前でもありません」

あざみ「ほら、なにちんたら肉焼いてんの！ちやつちやつと焼きなさいよね！」

オレ「へい…」

香ばしく焼ける肉の匂い。カルビ、タン塩、ロース、ハラミ、ホルモン…一般的なメニューが所狭しと鉄板に敷かれている。

菜摘「ほらほら！鈴ちゃんも梢ちゃんもバクバク食べなきゃなくなっちゃっよっ？」

鈴音「えーっと…なんか、食べづらいつていうか…」

梢「良心が咎めるといっつか…」

菜摘「ダメだよ二人とも。こんな機会は滅多にないんだから。いつもの1.5倍は食べなきゃ！」

菜摘先輩は部活帰りというのもあるのだろう。他のみんなと違い、肉を物凄い勢いで喰らい続ける。そう、今日は焼き肉。みんな大好き焼き肉を食べに来ているのだ。しかしオレのテンションは全く上がらない。だって…

椎「しかし、罰ゲームと言えどこんなおいしい罰ゲームに参加出来るなんてなあ」

ミア「あう…！！久しぶりのお肉の味だ…！！」

マユ「お肉お肉お肉ーっ！」

だって…。今日の焼き肉の代金…

あざみ「さあみんなジャンジャン食べなさい！お金は零牙君が出してくれるから！」

『はい！』

全額オレが支払うんだから！（泣）

ミア「おいしい…！おいしいよレイ！」

オレ「あー。そうですかそうですか…」

菜摘「ゴメンね零牙君。ゴチになります！」

修「悪い零牙。ガチでいただきます！」

オレ「どーぞどーぞ」

あざみ「父兄の方も遠慮しなくて大丈夫ですよ。酔いつぶれても後で送っていきますので」

岳「おっ！そうなのか！」

おばさん「じゃあ遠慮なくビール一気飲みっ！」

オレ「アハハハ…。オレの貯金があ…（号泣）」

目の前で消えゆくオレの肉。そして同時進行で消えゆくオレの金。たしか一億ほどの金をやっと 貯めきつたのに…！！

マユ「肉肉肉ー！」

鈴音「アハハハ…。そういえばマユちゃんはお肉食べて大丈夫なの？宗教とかは…！」

マユ「問題なしっ！例え問題があっても関係なしっ！」

オレ「お前の信仰心って肉一つで簡単に揺らぐんだな」

我が妹よ。少しは遠慮しろ。つかそんながつついて食べたらはしたないぞ？

マユ「じゃあー信仰に厚いお兄ちゃんには、お野菜をプレゼントするよ。ホイ」

オレ「いらん！つか野菜もちゃんと食べ！」

マユ「お兄ちゃんは成長期なんだから野菜を多く食べなきゃダメだよ！」

オレ「それはお前も同じだろ！？」

ミア「レイ、ワガママはメッ！だよ？」

オレ「ちくしょうっ！そんなに可愛く言われちゃ食っしかねえじゃねえか！」

次々と肉を焼きながら食べて飲んで…。ああ。やっぱり肉は旨い！

修「次、上カルビお願いします」

椎「あ、特上ハラミも！」

梢「……ついでにコースお願いします」

あざみ・岳・おばさん

「『ビールもう一本つかあつ!』」

うんうん。みんな容赦なく肉を頼むね。……ぐず。また仕事頑張んなきゃ。

菜摘「焼き肉サイコー!」

鈴音「ゴメンね零牙君。本当ゴメンね?」

委員長、そう言いながらも全く箸が止まらない…つか菜摘先輩!皿5000円する焼き肉セットはダメです!ああ…!手持ちの金で足りるか…?

おじさん「うんうん。みんなで食べる焼き肉はおいしいね」

おじさん、そう思ってくれるなら少しは遠慮してください。そのタシ塩はオレのです!

あざみ「ウハハハ!今日は宴会だあー!」

『イエーイ!!』

オレ「アハハハ…。イエーイ…」

みんな食べて、飲んで、笑って…そこには笑顔しかなかった。金はなくなっていくけど、そんなものより大切なものがここにはあった。

オレ(…)…あぁやっぱり(

あの暗い闇の世界じゃ、手に入らないような『大切なもの』 - -

オレ(『日常』って…『平和』って良いな…)

口に広がる焼けた肉の味を確かめながら、オレはそれを噛みしめた。

- - - - -

……であれから小一時間後。

オレ「どーしてこうなった…?」

もう一度言おう。どうしてこうなった？オレの周りにはこんな風景。それは今……

修「オレがなにをしたってんだよー！顔が怖いからってなんだってんだよー！」

梢「まあまあ修さん、そんな事は飲んで忘れましょ」

菜摘「うう……。なにが警察の威信よ……。そんなものより人としてのモラルの方が重要じゃない！ねえ椎ちゃん！？」

椎「そうや！みんな私の事需要少ないとバカにするけどなあ！本当はすごいんやで！それなのに虎スケの奴……」

鈴音「すう……すう……すう……」

ミア「レイ〜キスしよ〜キス〜」

マユ「お兄ちゃん〜白い修道服買って〜。マユあれが欲しい〜」

カオスな風景になっていた。

オレ「不幸だ…。なんだこのカオス空間」

みんながこんなになっっている理由は単純…。酔っているからだ。それもベロベロに。酔ったあざみ先生がひどくオレ達にからんできて、無理矢理酒を飲ませたのだ。……何やってんだ教育者…。

ミア「えへへ〜レイ〜」

オレ「はあ…。頼むミア、オレに抱きつくのは良いが押し倒そうとするのはやめろ」

ミアは酔うと大胆になるらしい。さっきもなんか飛びついて来ていきなり…／＼／

マユ「お兄ちゃん。お兄ちゃんってば〜」

マユはだだっ子に。あれだな、修道服インデックスつてほとんど黒しかないからおしゃれしたいんだろう…。…禁書目録は紅茶のティーカップみたいな服だったよな。

修「なんだってこんな顔なんだ…！なんでこんな顔なんだ…！」

修先輩は泣き上戸に。先輩、良い整形外科師知ってますよ？……確かステイルって顔の表面を焼いて整形する事出来たよな？

梢「良いんですよ修さん。私はわかってますから。私だけは修さんの良いところたくさん知っていますから」

修「うう……！梢ちゃんああん！」

梢先輩は……なぜだろう。お母さんっていうか銀座あたりのスナックのママ……なのか？イメージ的には。とにかく、修先輩が梢先輩の胸の中で号泣している。……オレだけだろうか？この二人を見ている限り、梢先輩が修先輩オトそうとしているような……。気のせいかな。

菜摘「くっくだらねえーことグチグチいつまでもさあ……。本当ああいうのムカつくわね！今度ぶっ飛ばしてやるわ！」

椎「そうや！私は着痩せするタイプなんや！脱いだらすごいんや！それなのに虎スケの奴知ったかぶりやがって童貞のクセイイイ！」

菜摘先輩と椎先輩はなんか愚痴を思いつきりはいていた。つか椎先輩、それ以上言ったら規制引つかかります！

ミア「レイ〜ん」

オレ「待てミア。お前酒入っているからって大胆きなりすぎ！」

ミア「むー。私とするのがイヤなの？」

オレ「いやそうじゃ」「じゃあ良いじゃん」「いや、だからって…んん
!？」

ミア「ん…」

オレからは無理だと判断したのか、ミアは無理矢理オレとキスをす
る。ってまずいまずい！こんな状態岳さんにも見られたらオレ死
ぬ！

岳「グウウウ…」

良かった。思いっきり爆睡している。とりあえずオレの命は助かっ
た…。

オレ「ぶはっ！おおお落ち着けミア！ちょっと落ち着かせてくれ！」

ミア「ん〜もつと〜」

オレ「甘えん坊っ！かこりや重傷だな…」

ミアに酒を飲ませるのは止めよう。オレの理性が持たないから。

オレ（つつか…。酒癖つうと三年前のアレを思い出すな）

三年前。つまり、オレがイギリスにいた頃…正確には、インデックスが記憶喪失になった次の日だった…

！ - - - - -

ステイル「インデックスウウウ！」

オレ「まあまあステイル。今更嘆いたって遅え。今日は飲め」

ステイル「うう…ヒック…うう…！」

イギリスのとあるバーにて、オレはインデックスに振られた（というより勝手に忘れられた）ステイルを慰めていた。

神裂「どうしてあの子はこんなことに…」

オレ「そっいうな。これが運命だ。今日は飲んじまえ神裂。全部おごってやるから」

神裂「恩に着ます…ヒック」

訂正。神裂もいた。二人とも酔っている。

ステイル「なんでこんなことになってしまったんだ…。僕達はあれだけ愛し合っていたというのに…」

オレ「恋人同士は彼女が彼氏の頭に噛みついたり、食べ物ほしさにオレの部屋に入ってきたりしないとと思うけどな」

ステイル「それはインデックスなりのスキンシップなんだよ…。君の部屋に行ったのも飢え死にしそうだっただけで、他意はないんだ」

オレ（その割りには結構オレの布団に潜り込んでいたがな）

をいっいたら多分オレは死ぬと思うので黙っておく。

神裂「あの子はいつも笑って私達を励ましていました…たくさん思
い出もつくったのに…」

オレ「また作れば良いだろ。思い出ぐらい」

神裂「作れませんよ！あの…あの思い出は…」

オレ「……………」

神裂「やっと、やっと一人でお使いに行けるようになったのに！私
がどれだけ頑張って、信号機の渡り方を教えたと思ってるんですか
！」

オレ「そこかよ！…たく…まあ良い。今日は二人とも飲め。飲んで
忘れちまえ」

ステイル「うう…！！！」

神裂「そうですね。飲んで忘れましょう…。マスター、焼酎はあり
ますか？あとおつまみを…」

オレ「マスター、こっちの赤髪にはウィスキーをお願いします。度数高めです」

「あいよ」

.....

オレ（あの後ステイルはうざったくオレに絡んでくるし、神裂は愚痴をずっとオレにこぼすし…オレの周りは酒癖悪い奴ばっかじゃねえか！）

これはこれで不幸な気がする。フォローにまわるオレの身になってほしい。

マユ「お兄ちゃん〜服〜」

ミア「レイ〜ん〜」

左右からオレにねだる声が聞こえる。マユのはまあ良いとしてミアはそろそろいい加減にして欲しい…

あざみ「なによ〜みんな酔うの早いわねえ…。ヒック、もいっほん

つかあつ！」

オレ「それ以上飲んだら死んじゃいますよ先生！」

あざみ「ん〜？じゃあお前飲め」

オレ「え〜！？」

あざみ「飲め！飲まなきゃ許さんぞおー！」

オレ「えええええ！！！」

まずい！なんか知らないけどまずい気がする！

ミア「お酒お酒〜。私がつぎますよ〜」

菜摘「飲みなさい零牙君！飲まなきゃ罰ゲーム続けるわよ〜」

オレ「冗談だろおっ！？」

そんな事をしているうちにビールが運ばれてきた。コップにビールが注がれて…

あざみ「ほらあ飲めえ」

オレ「待て待て！オレまだ未成年…」

あざみ「んだとお！私の酒が飲めねえってのかコンニャロー」

うっわ最悪の上司だ！うっかあんた、保険医なんだから子供に酒勧めんなよ！

ミア「じゃあ私が口移しで飲ませてあげる」

オレ「待てミア！普通に飲むから！だからそんな残念そうな目でオレを見るな！」

はあ…。とため息をついてオレはコップを掴む。全く、不幸だなあ今日は。

オレ「でもま、これも一つの幸せなのかもな」

オレは黄金色に輝くビールを飲む。小麦の匂いが口いっぱいに広が

る。

今日ぐらいはまあ……。何も考えず飲んじゃえ！

夜が深まるなか宴会は続いていた。

そこにはみんなの笑い声しなくて……。オレはそんな笑顔を守りた
いんだなど、改めて実感した。

続く

宴会！（後書き）

え、読者の皆様、お酒は20歳からですので、間違っても！20未満で飲酒は絶対に！しないでください。

この作品はあくまでファンフィクションですので…。

そして感想、いつでもお待ちしております！手軽に送って来てください。

それでは。また次回！

とある1日の風景(前書き)

久々の投稿です。

……ちょっとやりすぎたかな？

とある1日の風景

木ノ花学園は先日、魔術組織『天地逆転』の一人、オフアニムの手によって生徒二人が死亡。一人が重傷を負うという惨事に見舞われた。

そのため、毎年開催されている運動会は中止。理事長、木ノ花あざみの『子供たちがいち早く元の生活に戻るよう、文化祭は実施したい』という発言により、文化祭は実施することになった。

だが当然、事件の舞台となった小等部は文化祭に参加せず、中・高等部の二学部で参加することになる。

そのことから、小等部の生徒は文化祭の準備やその他諸々には関わらないことになった。

……なつたはず、なのだが――

零牙「モデルになれだあ？」

小等部第二会議室でオレは言う。「冗談じゃない。やっと事件の事後整理が終わったってのに、また厄介ごとがやってきた。

しかし、オレの前にいる女生徒、中等部美術部部长『梶林真子』は

まじめな顔でうなづく。

真子「そ。文化祭のしおりの表紙につかうイラストのモデルになってほしいの。引き受けてくれる？」

ミア「へえ〜。面白そう！レイ受けてみたら？」

隣に座るミアが楽しそうにオレを見る。ランランと輝くその目には期待の眼差しが見える。……何を期待しているのか分からないけど。

零牙「なんでオレなんですか。モデルなら別に他の子でも良いですよ？」

真子「君は今回の事件の立役者だからね。前々からデッサンしてみたかったし、良い機会だからやってみたいんだ」

零牙「オレは立役者でもなんでもありませんよ。そんなにあの事件に関係したいんだったら、椎先輩に頼めば良いじゃないですか。事実、事件の謎を解いたんですし」

真子「あ〜。高等部は行きづらいからダメなんだよね」

零牙「……じゃあ、梢先輩は？」

真子「梢ちゃんはずちの部員だし、もう描き飽きちゃったからダメ」

零牙「……はぁ……」

深いため息がでる。なんでモデルなんて面倒な仕事せなやならないんだ。ミアのキラキラとした視線が痛いし――

オレ（……あ。この手があったか）

先輩は引き下がってくれそうにない。オレはモデルなんてヤだから、この手でいこう。

零牙「じゃあオレの代わりにミアで手を打ちませんか？ミアなら良いモデルになりますよ」

ミア「……ちょっとレイ!？」

いきなり話題にあがったミアが動揺する。すまないミア。オレの身代わりになってくれ!

ミア「わ、私はあんまりモデルには向かないって言うかなんとか……」

真子「あら。あなたもなかなか良い素材よ？謙遜なんてしないで」

先輩、よく分かってるじゃないですか。オレはあんたと気が合いそうだ。

真子「そうね…。二人一緒にデッサン、ってことでOKしてくれないかしら？零牙君」

零牙「ミアだけなら良いですよ。オレはやですけど」

ミア「ちよつと！？本人無視して勝手に話を進めないで！」

無視無視。オレは何も聞こえない。

「あら？やめちゃって良いのかしら？せっかくかわいいメイド服を着たミアちゃんが見れるのに？」

メイド服！？

ミア「メイド服！？」

真子「そ。今流行りのロリメイドよー！」

ミア「流行ってません！絶対流行ってませんから！レ、レイからもなに言つてよ！メイド服でデッサンなんて私ヤだよ！

メイド服だと…？オレが何度着せるのに失敗した、あのメイド服をミアに着させるだとおおお！！？

背に腹は代えられん。つか、ミアのメイド姿見れるんだつたらモデルぐらいやってやる！

零牙「……………じゃあしょうがねえ。引き受けますか」

ミア「ちよつと！？」

真子「ありがとう！じゃあ早速始めたいからついて来て！」

オレ「イエッサーッ！」

ミア「え…？ええ…！？」

……………

虎スケ「いやあ〜。色々あったけど、なんとか文化祭実行出来て良

かったな。ってことで、文化祭の出し物を決めたいと思う！誰か意見のある人はいないか！？」

その頃、高等部一年二組の教室では虎スケが壇上にあがって文化祭の出し物の意見を募っていたが……。誰も出さない。というか、ほとんどの人が無視してる。なぜなら……

虎スケ「おいおいどうしたみんな？意見ないんじゃないやメイド喫茶に決まっちゃうよ？」

なぜなら、相手は万年発情期野郎こと風間虎之介。マトモに相手をしたら自分が痛い目に遭うだけだからだ。しかし開始二十分間。一度も意見がでずにこのまま決まらないというのも、いささか問題があるので……

修「とりあえず虎スケ……」

虎スケ「ダメだよ修兄。ちゃんと手を挙げてから発言しないと……」

修「お前チエンジンな」

虎スケ「……？」

虎スケがアホな顔して突っ立っている。コイツ、まさか自覚がないのか？

虎スケ「……………？修兄さん、その言葉の意味は？」

修「司会を辞めた方が良いと言っているんだ。今のままじゃ意見なんか出やしねえ」

虎スケ「な、なんで？」

修「お前が司会だから」

ガーン！と言う擬音が聞こえる程虎スケはショックを受けたらしい。わざとらしく二、三步後ずさってからわなわなと震え始めた。

虎スケ「嘘だろ…修兄…？」

修「……………」

虎スケ「嘘だと言ってくれ！」

なんだろう、この無駄なやり取り。どう考えても行数稼ぎにしか見えない。オレが全無視を決め込んで黙って静観していると、虎スケは勝手に芝居を続けて席に戻って行った。……………なにがしたかったんだ？

虎スケ「じゃあ後はよろしく修兄」

修「だってよ響さん」

響「頼まれたのはあなたですよ修。それに、こういうことは修が一番適しているでしょう？」

修「いや、そんなことないって響さん。こつのは響さんの方が絶対向いてるって」

響「修はそう思っても、周りの人はそうは思っていないようですよ」

修「あん？」

そこでオレは初めて周りの視線の中心にオレがいることに気づいた。その目は黙して語る。「修兄、頑張れ！」と。

修「……わかったよ。やりや良いんだな？やりや」

結局、みんなの注目を浴び続けるのに耐えきれずオレは壇上にあがってしまった…。しかし、あがったからには最後までやるつもりな

ので、意見があるか聞いてみた。

……意外にも、さつきと違ってちらほらと手が挙がっている。

修「ん」。じゃあ高倉」

「オレはお化け屋敷が良いと思う。定番だし、何より城崎がいればそれなりに完成度は高くなるはずだ」

修「お化け屋敷、ね」

理由はどうあれ、とりあえず板書しておこう。大事な意見だし。……さて次は。

修「次、中田」

「オレは劇かな。『13日の金曜日』とかやれば、絶対客受け良いと思うんだよね。」

中田の中じゃ、きつとジェイソン役はおれだろう。是が非でも断りたい。

修「次、金谷」

「オレは喫茶店だ。城崎兄貴が料理長すれば、必ず儲かる」

修「……………」

なぜにオレを理由にあげる…。オレはそこまで注目されるのは苦手なんだがな…。

虎スケ「修兄！修兄！」

修「なんだ虎スケ」

虎スケ「喫茶店やるんだったら断固メイド喫茶を「却下だ」なんだよ！」

修「理由はなんであろうと、これからお前の意見は全部却下だ」

虎スケ「ひどいよ修兄！オレはオレなりに真面目に考えてるのに！」

修「他に意見のある人」

虎スケ「聞けよオイ！」

虎スケがなぜかさめざめと泣いているが無視無視。他のみんなは意見を出し尽くしたのか、誰も反応がない。

修「じゃあこの3つから決めるぞ。お化け屋敷が良い人。……
劇が良い人。喫茶店が良い人。」

結果は僅差で劇になった。劇をやるとなると、重要なことを決めないといけない。

修「劇はなにをやるか……」

オリジナルは作者の想像力が貧困だから不可能。なにか良いアイデアはないか……？

『うーん……』

劇と決まったのは良いが、題目がなかなか思い浮かばない。こんな困った時は……

修「響さん、なにか良いアイデアはないか？」

響「そうですね…。『オペラ座の怪人』なんてどうでしょう?。」

修「『オペラ座の怪人』か…」

『オペラ座の怪人』

映画や劇などで有名な推理小説の一つ。フランスの推理作家が書いた同名小説を原作にした名作だ。

響「あれならホラーな感じもありますし、出演者にメイドをいれることも出来るでしょう。なにより犯人役を修がやればピッタリだと思いますが」

修「オレ、マスク付けんのかよ…」

響「オペラ座の怪人、エリックも醜い顔を隠すためにマスクを付けていたんです。修が適役でしょう」

言外に「顔が醜い」と言われたが響さんだから許そう。救いようのない事実だから。

「菊池が言っただから間違いはなさそうだな…」

「まあ風間ほどでは無いにせよ、女子のメイドを見たいかどうかと

言われればみたいしな…」

「なにより修兄も頷いてるし…」

クラスのあちこちから同意の音が聞こえてくる。どうやら決定らしいな。

修「じゃあオレ達は『オペラ座の怪人』をやるってことで良いか？」

『賛成！』

.....

真子「さあ、ここが我らが中等部美術部の部室よ！」

零牙「おお〜！」

先輩に連れられて私とレイが来た美術部の部室は、異様な光景を出していた。なんとというか……コスプレ衣装部屋？

零牙「すげえ！品揃えがめちゃうちゃ豊富だ！」

真子「ふふん 長年かけて集めたかいがあったわ。この中から自由に三着選んでおいて。あとでまた来るから、そしたらデッサンさせ

てもらっわよ」

オレ「了解しましたっ！」

真子「じゃあまた後でね」

先輩が美術室からスキップしながら出て行った…。ハア、こうなったら地味なの選んでさっさと終わらせよ…。

零牙「三着…！メイド服にあと二着はなんにしよう…！」

ってその前にレイの暴走を止めないと！なんか嫌な予感がする…！

ミア「あ、あのねレイ？私出来れば地味くのが良いなあ」

オレ「まずメイド服は決定として…、二着目にロリータか、ゴスロリにして、三着目は制服が良いなあ」

ミア「いや、だからね、私はそんな恥ずかしい服は着たくないんだけど…」

零牙「でも制服と言っても普段見慣れているやつじゃダメだな…。

カラーリング変えるとか、いつそなんかしらのアニメの制服で…」

ダ、ダメだ！すっかり自分の世界に入っちゃってるよ！というか、レイってそこまでコスプレ好きだったんだ…。ちよっとシヨック。

ミア「あ〜。レイ？」

零牙「ん？どうしたよミア」

ミア「あのね、変にコスプレしないでこの制服で私は行きたいんだけど…」

零牙「……それじゃあつまんなくね？」

ミア「つまんなくて良いよ。とにかく、私はメイド服とかは着ません。コスプレしたいんだったらレイだけでやってね」

あえてきつめの口調でこの話を終わらせる。私にも羞恥心というものがあるのだ。

零牙「似合っと思っのになあ……」

レイがなにやらブツブツ言いながら適当な服を選び始める。よしっ
！これで危機は去ったかな？

零牙「最悪、無理矢理って手もあるか…」

前言撤回。大ピンチです。

私は逃げたい衝動に駆られながらも、なんとなくレイのコスプレ衣装を見てみたかったので、ドア付近の壁に寄りかかって待っていることにした。すると…。

レイ「こんなものか」

ビシッと執事を見事に着こなしたレイが立っていた。ちょっとだけ…カッコいいかも…。

レイ「どうよミア。似合ってるかな？」

ミア「ふえっ！？あ、うん。似合ってるよ…」

レイ「そうか。なら良かった」

レイが照れくさそうに頬を掻く。中身は同じ人なのに、服装が変わっただけでこんなにも違う雰囲気みせるんだ…。

レイ「ん〜。やっぱりこの服装だから、ミアがメイドかお嬢様になつてくれれば結構良い画になるとおもっただよな…。やっぱり着替えてくれない？」

ミア「だ、ダメだよ！その…恥ずかしいもん…」

レイ「（可愛いなあ…）良いんだよ恥ずかしくて。恥ずかしくてモジモジしているのミアの姿がオレは好きだから」

ミア「うう…。レイの変態…」

確かにレイは顔は整ってるからなに着ても似合いそう…。スーツ姿とか。ウエイターとか。

レイ「やっぱりそうだよな…。やっぱりミアがメイドさんになってくれると結構良いよな…」

ミア「え!？」

レイ「やっぱりミア、今からでも良いから着替えてくれない?……」

ハアハア」

ミア「ちょっと！それだけは無理！」

オレ「もう我慢出来ねえ……。やっぱり無理矢理着替えさせてやる……！」

ミア「えっ！？キャッ！！」

レイにいきなり押し倒されて私は床に転がってしまっ……。ってレイ！何やってるの！！服脱がせ始めないでよ！

ミア「レ、レイ！ちょっと、止めてよ！」

レイ「これは学校のためこれは学校のためこれは学校のため……！」

ヤバい。レイの目がマジだ。言葉はもう通じないみたいだね……。

うう……。レイは力が強いから身動きとれないし、このままじゃ本当にマズ……。

真子「二人とも服は決まっ……。たかな」

ナイスタイミングなのかバッドタイミングなのか、私の上の制服が脱がせられかけたその瞬間に真子先輩がやってきた。

……レイの顔面が蒼白くなっている。きっと、「やってもうた」と思ってるんだろう。

真子「零牙君？」

零牙「……はい」

真子「ちょっと、職員室行こうか」

零牙「……はい」

レイが真子先輩に連れられて美術室から出る。その後、レイは生活指導の先生からこっぴどく絞られて、ヨレヨレになって帰ってきた。

まあ今日も、どちらかと言えば平和な日が続いた…。

.....

天井「ケルビム」

ケルビム「なんでしょう？」

天井「例の計画はどうだ？」

ケルビム「抜かりなく」

天井「そうか。次こそはヤツの精神こころを殺せ。期待してるぞ」

ケルビム「ハッ」

闇の世界で不穏な動きが見せながらも、平和な時は流れていく。

とある1日の風景（後書き）

夢幻「はい！やっと最新話更新できました！」

零牙「オレ……。なんてことを……」

夢幻「すまん。なんかやりすぎた」

零牙「テメエ……！」

夢幻「悪い悪い。今度はまともにつくるから」

零牙「本当だろうなあ……！」

夢幻「大丈夫大丈夫。それより、修学旅行とテストがきて二週間ほど更新できなさそうなんだよね」

零牙「またか……。まあ色々終わってからまた来い！」

夢幻「という訳で、しばらくお休みさせていただきます！また次回を

お楽しみに！

委員会の始まり（前書き）

久しぶりの投稿です！

委員会の始まり

ある日の放課後…。

修「……つたく、あの人は整理整頓っ言葉を知らないのか？」

本格推理委員会メンバー、城崎修は、高等部理事長で高く積み上がった書類を整理しながらばやいていた。委員長達が来ないため暇つぶしに始めたのは良いものの、予想以上に量が多かったのだ。

零牙「しょうがないですよ城崎先輩。なんたってあのあざみ先生ですから」

ミア「それにしても、もう少しぐらい整理してほしいよ…」

梢「量が尋常じゃない」

椎「なんでもなあ、最初は委員長が毎日整理してるらしいんやけどな、次の日には全部めちゃくちやになるらしいんや」

理事長の真ん中のテーブルで同じ作業をしている四人もまたぼやく。夏休みにもやったはずなのに、今ももう見る影もない。

零牙「で、委員長は諦めたわけか…。どんだけ散らかすんだあの人

は。」

椎「ここまで来ると散らかすことが趣味なんやな。そう思える」

ミア「そうだね～。…ってあれ？これは…」

零牙「ん？どうしたミア。自分の成績でも見つかったか？」

そう言つて隣に座るミアを覗き込む零牙。ミアの手元には、一枚の写真があつた。

梢「コレは…」

椎「なんや。ただの写真やないか」

修「ああ。でも、コレに映ってるの、委員長と菜摘先輩じゃないか？」

ミアが持つてる写真は、鈴音と菜摘が理事長室のソファアに座つて二人でピースサインをしていた写真だつた。時刻は恐らく夕方頃だろつ。日付は一年前になつてゐる。

零牙「そうみたいです。えーっと、裏には何か書いてないか？」

ミア「え？裏は…」

ピラッとミアが写真を裏返すと、そこには…

『祝 本格推理委員会結成』

と書いてあった。

ミア「『祝、本格推理委員会結成』…ってことはコレ」

零牙「どうやら、この委員会の始まりを記念したらしいな」

修「この委員会の始まりか…」

椎「知りたい…けど知りたくない…」

梢「気になる…」

一枚の写真を覗き込んで色んな思考を張り巡らせる彼ら。あざみ先

生みたいな性格破綻者（零牙曰わく）がこのトングデモ委員会を作ったには、やっぱり何かきっかけがあったのだろう。

零牙「この写真自体はここで撮ったものですね。この汚さ具合から見ても」

修「まあそつだろうな。それ以外に不自然なものはねーな。これ以上の推測は無理か」

椎「やっぱり聞くのが一番やるなあ。どんな話が出てくるんやろ」

ミア「委員長が来たら聞かなきゃ」「こんにちは」「あ、委員長だ」

噂をすればなんとやら。当の委員長がタイミングよく理事長室に入ってきた。なにかの書類を理事長専用の机の上に置いてから零牙達に近寄ってきた。

鈴音「あ、なんだ。みんな来てたんだ」

零牙「まあ全員暇人なもんで。暇つぶしにぶらっと来ちゃいました」

鈴音「ふう〜ん。あれ？ミアが持ってるソレって……」

鈴音がミアの持つてる写真を手にとって見る。「懐かしいな〜」
と鈴音は微笑みながら写真を眺めている。

鈴音「コレどつやつて見つけたの？すごく懐かしいよ」

修「ちよつと書類整理していたら見つかったんです。それより先輩、
やつぱりソレは…」

ミア「委員会に関係あるものなんですか？」

ミアが身を乗り出して聞いてくる。ランランと輝くその目には「面白そう!」と思っっているのがバレバレである。

鈴音「そうだよ。これはね、委員会が結成した記念として撮った
ものでね。私と菜っちゃんタッグを組んで初めて解決した事件を記
念して撮った写真でもあるんだ」

修「へえ〜。先輩が解決したんですか。どんな事件だったんです？」

椎「聞かして〜な〜。なんか面白そうやし」

梢「お姉ちゃん……」

鈴音「うん。あんまりこついつのを自分から話すのって恥ずかしいな……」

自慢話みたいになっちゃうからね。と鈴音ははにかみながら写真を見てつぶやく。

鈴音「あれは、ひどい土砂降りの日だったな……」

涼子「ゼエ、ゼエ、ゼエ。やっと着いた〜！」

鈴音「ハア、ハア、ハアいきなり雨降ってきたから驚いたね〜」

一年前。その日鈴音は、同級生で親友の木舟涼子きふねりょうしと遊びに行った帰りだった。

天気予報では、今日一日中晴れの予報だったのに、いきなり雲行きが怪しくなりポツリポツリと雨が降ってきた。

不幸にも傘を持ってきてなかった二人は本降りになる前に猛ダッシュして駅まで行く。二人が着いた約一秒後、バケツをひっくり返したような豪雨が降ってきた。

涼子「あ、危なかった。危機一髪だね」

鈴音「天気予報もアテにならないね」

涼子「この大雨だと、雨宿りして時間つぶさないと帰れないね」

鈴音「だったら今度新しくできた駅ビル行こうよ！映画館あるらしいから、映画でも見ない？」

涼子「いいね。ジャンルはホラーで良いかな？」

鈴音「ホ、ホラーはダメッ！」

りょうかゝい。と涼子はニツ、と意地悪い笑みを浮かべて切符を買う。鈴音は「もう。子供扱いして…」とムツと口先を尖らせて頬を膨らませる。

涼子「はいはい。そんなに怒らないで。鈴ちゃん」

鈴音「……（ムッスー）」

完全に機嫌を損ねた鈴音に、涼子は必死に謝りながらやってきた電車に乗る。座席に座ろうかと思いきや、座席は全部埋まっていた。

涼子「あちゃー。座れないや。ちょっと長いけど立ってようか」

鈴音「うん」

仕方ないと思った二人は、入り口ドア付近で立って喋っていることにした。二人の目指す駅は終点で、ここから七駅先にあり、着くまでに30分ほど掛かる。

涼子「でね、なんとその子が……」

鈴音「ええっ！うそ意外！まさか南さんが……」

涼子「言っとくけどコレ秘密だからね？」

鈴音「分かってるよ。それで南さんがその後どうしたの？」

涼子「うん。その後南さんは……」

電車の外で降る雨は一向にやむ気配もなく、むしろすごい勢いで降る雨を見て「早く帰ろう」と思った人が大勢いたのか、鈴音達から乗って二駅後には電車は満員になってしまった。

鈴音「んっ…。なんかたくさん人来たね」

涼子「この雨のせいだよ。電車の中でおしくらまんじゅうやってるみたい…」

鈴音「だね。ちょっと暑くなってきたね」

ぎゆうぎゆうに人が混みいつて身動きも出来ない状態でも、二人は周りの迷惑にならないように比較的声を抑えながらさっきまでの話の続きをした。

鈴音「で、今度はその主人公が…」

涼子「アハハ…。学年総出で覗きって…」

鈴音「でしょ？そしたらね…」

しかしそんな二人に魔の手が忍び寄る…。

- - - - -

鈴音「…で、全力でハーレムを目指すその主人公は…」

涼子「ハーレムって…。悪く言えば女たらしだよね？」

鈴音「まあ、そうなんだけど。ある意味すごい才能だよね」

涼子「そう、だね。うん。アハハ…」

鈴音「………？」

鈴音はさっきから友人の表情に疑問を浮かべていた。まるで、なにかに耐えてるような…

鈴音（まさか…痴漢！？）

鈴音はすぐに涼子の後ろの方を見る。そこには、明らかに不自然な動きをした手が一つ、なにかを撫でるようにして動いていた。

鈴音（くっッ！）

見ていて怒りに駆られる。コチラが何も言わないことを良いことに己の欲望まま勝手に…！と鈴音は見ているだけしか出来ない自分に腹が立った。

鈴音「（ボソボソ）……涼子ちゃん」

涼子「な、なに鈴ちゃん？」

鈴音「あんま大きい出さないで…。犯人に気付かれる」

涼子「!!」

涼子は驚いて顔を俯かせる。表情が見て取れないが、多分「なんでバレたの?」と思ってるのだろう。

鈴音「いつから…?」

涼子「えっ…?」

鈴音「いつから触られてたの?」

鈴音は涼子の後ろの方をチラリと見ながらそう言った。現在、電車は六駅目と終点の間を走っている。

涼子「四駅目ぐらいから……。」

鈴音「（つまり三駅分か……）わかった。もうちょっと耐えてて。絶対犯人の特徴見つけるから」

涼子「うん……」

そうは言ったものの、鈴音にはなにも策はない。上手く体勢を変えて涼子の後ろを見ない限りは……

?????」……………」

涼子（……！ちよっ！ヤバいよ。そこは……！）

と思っていたが、涼子の表情が目を瞑って必死に耐えようとしているのに変化したのを見て、鈴音は強攻策に出ることにした。一か八かの賭だが、これ以上好きにさせない！

鈴音「ち、痴漢です！この中に痴漢がいます！！」

ありったけの大声を出して車内をざわめつかせる。効果はあったように、鈴音は涼子を辱めていた手を掴むことに成功した。

鈴音（スーツ！柄はチェックの焦げ茶！右手首に腕時計！）

が、運悪く電車が終点に着いてしまい、人がドツと外へ押し出された。その力に負けて、鈴音は犯人の手を離してしまう。

鈴音「あっ！逃げられた！」

涼子「えっ！？……も、もういいよ鈴ちゃん。逃げられちゃったなら仕方ないよ……」

鈴音「待つて。まだ近くにいるかも……」

鈴音は周りを見渡して特徴と一致する人物を探す。運が良いことに、それらしい人物が見つかった

鈴音「いた！」

鈴音はすぐさま駆け寄ってその人の手を掴む。捕まれたほうはビククリしていたが、鈴音はハッキリと聞こえるように言っていた。

鈴音「私見ました。あなた、痴漢ですよ？ちょっと話を聞きたいんですけど」

.....

駅員「つまり、君たちはこの人が痴漢だと言いたいんだね」

鈴音「はい。私、ハッキリ見ました！この人が私の友達のお尻触ってるところ！」

そして駅員室にて、鈴音は痴漢を指差してハッキリとそう断言した。しかし、「それは濡れ衣ですよ」と相手の男性は言う。

男性「えっと……つまりあなた……というかそちらのお嬢さんの言うことが正しいとなると、その不埒者は『樋山駅』から犯行をしたという事ですよ？なら、私には無理です」

駅員「と、言うこと？」

男性「だって私は、会社を出した後、六駅目の『新羅駅』から乗ったんです。犯行が行われてるはずの『樋山駅』の時点では私はまだ乗ってないんですよ」

男性はそう言っただけで切符を取り出した。確かに『新羅』と書かれた切符だ。これでは、犯行は不可能だ。

駅員「ふむ……。確かにこれでは無理だな」

鈴音「そ、そんな！」

男性「えーっと、疑いも晴れたようですし、もう行っていいですか？」

駅員「ええ。構いませんよ」

駅員はニッコリ営業スマイルを浮かべて「お騒がせしました」と謝罪しておく。男性も「いえいえ。ご迷惑おかけしました」と何事もなかったように歩き始める。

涼子「……………（ギョツ）」

そんな三人を黙って後ろから見ていた涼子は、俯かせて唇を噛みしめている。そんな様子の友達を見た鈴音は悔しさと無念の気持ちでいっぱいになった。

男性「いやしかし、君たちも気を付けるんだよ？今回は私が良い人だったから大事にならないけど、悪い人だったらもつと大事になっちゃうからね」

男性はカバンと綺麗に折り畳まれた傘を持って外に行こうとした。そう、『一度も使われていないような』傘を脇に抱えたまま。

鈴音（・・・！）

その時、鈴音は男性のうそを見破った。やっぱりそうだ。コイツが犯人なんだ・・・！

鈴音「待ってください。まだ話は終わってません！」

男性「なんだい？流石にこれ以上ダダをこねるようなら私にも考えがあるよ？」

鈴音「まだ、説明してもらってないことがあります。その傘についてです」

男性「傘？コレが、どうかしたのかい？」

男性が折り畳まれた傘を持って鈴音に聞く。鈴音は、その傘を指差して一つ聞いた。

鈴音「その傘、濡れてませんよね？なんでですか？」

男性「なんで、って使ってないからだけど」

鈴音「それはおかしいです」

男性「なんでだい？」

鈴音「だって、電車の外は土砂降りの雨が降ってたんですよ？傘もささずにどうやって会社から駅まで来たんですか？」

男性「・・・！」

男性の顔に明らかな動揺がはしる。が、それでもまだ言い逃れをするのか、取り繕うように新たな嘘をつき始めた。

男性「そ、それは雨が降る前には駅に着いていて、校内で時間をつぶしていたためなんだ！だから、傘が濡れてなくても不自然じゃな

い！」

鈴音「……今の台詞、聞いた？涼子ちゃん

涼子「え？あ、うん。『校内で時間をつぶしてた』って……」

鈴音「それは嘘ですよ。だって、あなたが電車に乗ったのは、雨が降るよりもずっと前なんだから」

駅員「え？」

鈴音「単純なことです……この人は私達が電車に乗るよりも、もっと前から電車に乗っていて、ずっと往復してたんですよ」

男性「……アハハッ！君どうかしてるよ。そこまで私を痴漢の犯人にしたらしいけど、私にはホラ、ちゃんと証拠が……」

鈴音「はい。それが『証拠』です。切符の裏にある磁器つて改札を通った時の記録がされるんですよ。つまり、あなたが本当に新羅駅の改札を通った時間が全部分かるんです」

男性「……ッ！」

鈴音「だから……」

鈴音は推理小説の主人公のように、ビツと犯人の顔を指差して言った。

鈴音「あなたが犯人です」

男性「……ッ！」

犯行がバレるや否や、犯人の男はダツシユで駅員室から出て行った。慌てて鈴音と駅員が追いかける……。

……

菜摘「……ふう。ちょっと濡れちゃったなあ」

菜摘はその時、駅の校内で雨に濡れた服を見て呟いた。ビショビシヨとは言わないが、多少なりとも濡れてしまったのは事実。

菜摘「まさか天気予報がハズれるなんてね……」

傘を持ってなかった菜摘は、運悪く雨に塗れてしまい今に至る。

菜摘「ま、今更だよね」

過ぎたることは忘れるべし。自分ではどうすることもできない服を着たまま、早く帰ろうとして改札を抜けると…

鈴音「だ、誰かその人を捕まえてくださーい！」

どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。目の前からは必死の形相でこちらに走ってくる男性が一人。

その後を必死で追いかけている少女が一人。確か…

菜摘（桜森…さん？）

菜摘が前々から目を付けていた子だった。確かあの子、運動が大の苦手らしいけどなんで追いかけているんだろう？

鈴音「その人、痴漢ですう！」

鈴音のその言葉を聞いて、菜摘は「なるほど」と理解すると同時に逃げていた男性の前に立った。

男性「君、退いてくれえええ！」

痴漢の犯人が菜摘に向かって走ってくる。菜摘は向かってきた男の右手を左手でつかみ、

菜摘「ふん！」

そのまま右手で相手の右腕を掴み、男を背負い投げをした。

男性「・・・へ？」

ズドン！と地面に男は叩きつけられ痛みにも身を悶える。菜摘は掴んだ右腕をそのまま後ろに引っ張って動けないようにした。

鈴音「ハア、ハア、お、お見事……」

菜摘「どうも。これで良いかしら？」

鈴音「うん。ありがとう。助かったよ」

菜摘「どういたしまして」

ジタバタと男はもがくが、菜摘の締め技のせいで思うように動かない。

この時、二人は初めて会話をしたのだった。

.....

その次の日。高等部の授業も終わり、さあ部室に行こうとしていた二人に向かってある放送が入った。

『・・桜森鈴音さん、楠木菜摘さん。大至急、高等部理事長室まで来ますように』

昨日の件で何があったのか……？と二人は内心ビクビクしながら理事長室に入っていった。

そこには…

あざみ「桜森鈴音さんに楠木菜摘さんね？私が理事長の木ノ花あざみよ」

目の前に大人の微笑を浮かべた美人が一人立っていた。

鈴音（まずい。なんかわからないけどまずい気がする）

。菜摘（嫌な予感がする。とてつもなく嫌な予感がする！）

あざみ「昨日の痴漢の事聞いたわよ。お手柄ですってね」

あざみは書類に埋もれている理事長室の床をまっすぐ歩いて鈴音達に向かう。鈴音は、

菜摘「あ、ありがとうございます……」

あざみ「そんな勇敢なあなた達を見込んで頼みがあるの。今度新設する『本格推理委員会』に入ってほしいのよ」

鈴音「……？『本格推理委員会』？」

あざみ「そう。本格推理委員会。この木ノ花あざみによって創設され、私の命令によって、この学園の治安を守る組織よ！」

ババーン！と後ろで雷鳴が轟く。あまりの突飛さに、鈴音と菜摘は頭の上に「????」と浮かべて困惑している。

あざみ「この木ノ花学園は常にたくさん人間から狙われているわ。そんな時に学園に事件が起こっても、学校である以上、警察はなかなか有効な捜査を行えない。そこで！我々本格推理委員会の出番なのよ」

鈴音（な、なに勝手に語ってるのこの人！？）

菜摘（ヤバい。この理事長、頭のネジが三本くらい抜けている…）

一歩、二歩としだいに後退していく二人。なんとしてでもここから逃げ出さないといけない…！

あざみ「と、言うわけであな達二人に白羽の矢が立ったわけ。わかったかしら？」

（（そんな事言われても困るんですけど…！））

あざみ「さあこれに署名して頂戴。そうすれば晴れて委員会のメンバーよ」

と、あざみはなんか重要そうな書類を二人に提示してきた。二人は

悟る。アレにサインしたらダメだ。と

あざみ「さあ、サインしなさい！躊躇う理由なんて……」

「「これから部活があるので失礼しますっ！」」

一目散に逃げ出す二人。が、最終的には魔王の手からは逃れられなかった…。

.....

鈴音「……で、あの後あざみ先生に連れられて、サインした後にコシを撮ったんだ」

零牙「へえ。そうだったんですか。大変でしたね先輩。……っていうか、なんで先輩は呆れた顔してるんですか」

修「いや……。なんつーか……。ものすごい既視感デジャヴ感じてな……」

ちなみに原作を読んだ人は分かるだろうが、零牙以外の全メンバーは、あざみ先生によって強制的に委員会に入らされたのだ。（ミアの場合はさらわれてきた）

鈴音「さっ。もう今日は遅いからみんな帰ろ？」

修「いや、出来ればもうちょっと話を聞きたいな〜なんて…」

椎「修、覚悟決め。今日は品評会やる」

梢「あんまり待たせると怖いですよ」

修の料理の師匠である木下のおばさんは、時々定休日の日を使って修の料理の腕前をチェックするのだ。おばさんの辛口評価は修にとつて鬼門なのである。

ミア「お兄ちゃん頑張って。楽しみにしてるから」

零牙「オレも行っついていいかな？」

椎「もちろんや。マユちゃんも連れて来てな」

零牙「わかりました」

ワイワイと騒ぐ後輩を見て、鈴音は密かに思った。この委員会に入られて、良かったな…。と。

続く。

委員会の始まり（後書き）

夢幻「久しぶりの投稿だ〜！」

零牙「なあ夢幻、一つ思うんだが、菜摘先輩あんま活躍してなくねーか？」

夢幻「気にしない気にしない」

零牙「気にしろよ…」

夢幻「さて次回は…。うーん。一応ギャグ回を予定しております。」

零牙「なるべく早くアップしろよ」

夢幻「もちろん。かんばるよ」

零牙「じゃ、次回予告頼む」

夢幻「次回、『零牙の浮気』。みなさんお楽しみに〜」

零牙「…………え？」

零牙の浮気（前編）（前書き）

やっと出来た…（前編だけど）

長く待たせてすみません。

零牙の浮気（前編）

ミア「……………」

管原雅は見つめていた。ただただ真つ直ぐ見つめていた。

まるで獣が獲物を捕まえるためにじつ…と耐えるかのように、ただただ真つ直ぐ、物陰に隠れて目の前の人物を見つめていた。

美咲「や、やっぱりミアちゃん止めた方が良いんじゃない？」

杏子「そっだよ！こんな事したら怒るよきつと…」

それを彼女の親友、一ノ瀬杏子と藤井美咲が止める。

ミア「でも、真実を確かめなくちゃ…」

しかしミアは、そんな親友の言葉を無視して後を追いかけて始めた…。

……………

残暑も終わり、木々の葉も秋の紅葉に近づいてきた今日この頃。

私は久しぶりに親友の白石美幸ちゃん、杏子ちゃん、美咲ちゃんと久しぶりに一緒に遊ぶことにした。

家はこの四人の中で一番大きな家（むしろ豪邸だろうか）を持つ美幸ちゃん家で遊ぶことだったのんだけど……

ミア「え？風邪？」

リュウ「正確には風邪気味だな。なんか昨日から熱っぽいって言うてたし、咳もでるから今日は遊べねえ」

美幸…ミユちゃん家からなぜかリュウ君が現れて、ミユちゃんが風邪（気味）で遊べないと教えてくれた。リュウ君が腕組みをしてさらに説明する。

リュウ「ミユは昔っから季節の変わり目に弱いからな。少しでも無理をするとすぐに風邪引くから、今日は無理だ」

ミア「そうなんだ……」

リュウ君は『ま、いつもの事だ』と言ってあくびをする。

うんうん。やっぱり嫌がついててもリュウ君はミュちゃんの手は気になるんだね。まったく素直じゃないなあ。

美咲「……つてか早川君。それは良いけど、ミュちゃんのお父さんとお母さんはどうしたの？いないの？」

リュウ「ミュの両親は年がら年中海外で仕事。一人娘の看病にも来れないほど忙しいらしい。」

杏子「ちなみに早川君のお父さん達は？」

リュウ「家でダラダラしてる。ミュの看病くらいオレ一人で出来るし、ミュがオレの両親に気をつかって風邪を悪化させたら、元子もないからな」

なるほど。そこまでミュちゃんの家庭環境を知っているリュウ君は、どう見てもミュちゃんと仲睦まじい夫婦に見えるのは、気のせいじゃないようだ。

リュウ「……ミアちゃん、今変な事考えただろ」

ミア「なんのことやら」

リュウ「……まあいいか。とにかく、今日は遊べねえから。じゃな」

リュウ君はそう言って白石家の玄関に入っていった。うん。やっぱりリュウ君は自分の気持ちに素直になるべきだと思う。

美咲「ミユちゃん風邪かあ。それじゃあ仕方ないね」

杏子「でもこれからどうしよう？図書館にでも行く？」

ミア「……そうする？」

どっちにしろ、ミユちゃんが遊べない事実は変わらない。私達三人は、仕方なく図書館へ向けて歩き始めた。

・・・その時。

零牙「じゃあ、今度、僕のオススメの店に行きましょう。あそこのケーキは絶品なんですよ？」

確かにレイの・・・私の恋人、速水零牙の声が聞こえた。しかも、どうやら女の人と一緒にいる。

……おかしい。今日は『仕事だから忙しい』と言っていたはずなのに。

ルシア「あら。それは楽しみですわ。私、甘い物にはそこそこうるさいんです」

零牙「じゃあ、楽しみにしてください。きっと気に入ると思いますから……」訂正。どうやらレイは女の子といちゃついているらしい。なんだろう。胸の中にメラメラと何かが燃えてきたよ？

ミアが考えるよりも先に、からだは自然と次にとるべき行動をとっていた……。

……

……で、今に至る。

ルシア「そのお店とは、どんなお店なんですか？」

零牙「なんて言えば良いんだろうな……。森の中にひっそりと建っている感じで、住宅街にひっそりとあるんですよ。普段は気付かないんですけどね」

ルシア「楽しみになってきましたわ。ウフフッ」

レイが隣の金髪美少女……。(多分年は同じくらい)ルシアさんとケ
ーキの話をしている。それは良い。良いんだけどさ……。

ミア「なにさ。嬉しそうにデレデレしちゃって……」

杏子「まあまあ。零牙くんも男の子なんだからしょうがないよ」

美咲「余程嬉しいんだろうね……。さっきから笑ってばかり……」

レイが他の女の子とあんな楽しそうに……。嫉妬しちゃうよ。全くも
う。

レイ「しかし、ルシアさんが手伝ってくれるなんて思いもよらなか
ったなあ。いつものルシアさん、厳しいから」

ルシア「それはもちろん、イギリス清教徒として当然のことですわ」

零牙「ははは……。お堅い事で」

ルシア「私からしてみれば、あなたは自由奔放すぎますわよ？今の
服装にしたって……」

零牙「チツチツチ。私服だからといって軽蔑しちゃいけないぜ。ちやんと使える色しか着ちゃいけないですよ?」

ルシア「確かにそうですが…」

零牙「こういうのはな、規則さえ守りゃいいですよ。そういうルシアさんだって、可愛い私服を着ているじゃないですか」

ルシア「か、かわ…!」

服装を誉められたルシアさんは赤くなってモジモジしている。レイはそんなルシアさんをからかって笑う…。

……超つまんない。つか腹立つ。

ミア「仕事なんて嘘ついて…。ホントは女の子とデートしてたんだ…。」

超ムカムカする。今はまだ手は出さないけど、帰ったらじっくりと話を聞かなきゃだね…!

杏子「零牙くん…。完全にあの子をオトそうとしてるよね?」

美咲「なるほど。浮気ってこうやって始まるんだね。」

目の前で楽しそうに笑うレイをどうやって懲らしめようか考えていると、レイの前にあの人が話しかけてきた――。

――

オレ（なんなんだろうな！。この悪寒。さっきから震えが止まんないんだけど…）

ミアがミユちゃん家に遊びに行った後、オレ、速水零牙は近くにある教会のシスターの一人、ルシアさんと買い物に出掛けていた。

と言っても、デートみたいなものではなく今日は洗礼を受けてまだ間もないシスター・エリスの誕生会兼交友会を開くのだ。

そのため、ケーキをオレが作ることにになり、その材料を買いに行っているのだが…。さっきから体の震えが止まらない。なぜだろう？

ルシア「どうしましたの零牙さん？なにやら顔色が良くないようですよ…」

零牙「あぁいや。大丈夫です。大丈夫ですよ？」

ルシア「なら良いのですが…」

端から見れば、コレは美少女と2人つきりで買い物というなんとも嬉しい展開なんだが…。

もし、この状況がミアにバレたら確実に《ピー》で《ズキューン！》《みたいなことになるよな…。注意しよ。

と、オレが密かに覚悟を決めたその時…。

修「おつ。零牙じゃねーか。何やってんだ？」

零牙「き、城崎先輩…」

声を掛けてきたのはミアのお兄さん、城崎修先輩。顔はジェイソン並みに恐ろしいが、中身は頼れる兄貴という凄いギャップの持ち主だ。

修「なんか今失礼な事考えたるお前」

オレ「なんのことやら」

修「まあ良い…。ところで、隣の子は誰なんだ？ちょっと詳しい聞かせろ…」

ヤバイ。シスコンの城崎先輩、オレが浮気してると思ってやがる。上手く弁解しないと…。

オレ「彼女はオレが勤めてる教会のシスター、ルシアさんです。」

ルシア「はじめまして。イギリス清教のシスター、ルシアと申します。どうぞ、お見知りおきを…」

オレ「今日は教会で必要なものを買い出しに来たんです。荷物が多くなりそうなので、手伝ってもらうことにしたんです」

修「……なるほどな。勤め先の同僚か」

オレ「そういう事です。(ホッ。上手く説明できたか) そうですねば城崎先輩は今日、どうしたんですか？ 買い物ですか？」

修「ああ。クラスで劇をやることになってな。その買い出『城崎くんーん！』」

なにか声があったら道向かい側から一人の女性が渡ってきた。城崎先輩の同級生だろうか？

????「コレ、『怪人の仮面』。良いのがあったよ」

修「お。サンキューな小山。わざわざ買ってきてくれて」

小山「良いよ。城崎くんの頼みだし。それよりこの子達、誰？」

修「ああ、こっちの男の子が速水零牙。オレと同じ委員会のメンバー。それと、こっちがルシアちゃん。零牙の知り合い」

「「はじめまして」

渡ってきた人は小山さんと言うらしい。茶髪のロングで、顔が城崎先輩のお母さんに似ていて若干ロリ顔だ。背丈が城崎先輩の肩ぐらい…具体的に言えば170cmくらいかな。

容姿だけで言えば、多分城崎先輩好みの人なんじゃないかな？なんてね（笑）

小山「こんにちは零牙くん。ルシアちゃん。私は小山夕夏、城崎くんの彼女だよ」

ホントホント。城崎先輩が好きそうな人だよな…え？

修「なっ！ちよっ、小山！なに言ってるんだよ！／＼／」

小山「ええ〜？良いじゃん別に。城崎くんゲット〜」

そう言つて腕にしがみつく小山さん。え？ナニコレ？現実？

修「ちよつ、ちよつと待て零牙！ミアにはまだ連絡すんなよ！

つか小山！付き合つてもいないのにそういつのは…」

小山「じゃあ付き合つちやう？」

小山さんが城崎先輩の腕にしがみついたままにっこりとそんな事を言う。いや、そんなことがあるはずがない。だってあの城崎先輩が…。鬼を震え上がらせる程恐い顔した城崎先輩が…。

オレ「そんな話あるわけがない…。そうだ。これは夢だ。夢なんだ…」

修「そのあからさまな現実逃避はかなりムカつくが、小山もやめろ！腕にしがみつくな！」

小山「え〜？城崎くん嫌なの？（ギョッ）」

修「いや、いやかどうかと言われると嬉しいが…。ええい！零牙、
ま、また今度な！ミアには言つなよ！！」

小山「あつ！城崎く〜ん。無理矢理引つ張らないですよ」

恥ずかしさが頂点に達した城崎先輩は、居ても立っても居られなくなつたのか、小山さんを引つ張つてどこかへ行つてしまった。

一方、胸を突かれたオレはポツリと一言。

オレ「奇跡つて本当にあるんだな…」

.....

ミア「あ…あ…」

その光景を陰からこっそりのぞいていた私は、余りのことにド肝を抜かれといた。

杏子「ああああれ、き、城崎先輩。だよね…？」

美咲「う、うん。あの顔は間違えようがないけど…。ねえミアちゃ

ん」

まさかお兄ちゃんにそんな人が…。確かにおばさんも「修も顔が良ければモテるのになあ」と言っていたけど、まさか本当にいたなんて…

ミア「これは夢だ…。これは夢なんだ…。お兄ちゃんにそんな人いるはずないもん…。これは夢。絶対夢…！」

美咲「ミアちゃんがものすごく現実から目を背けようと努力しているのはわかるけど…。しっかりしてミアちゃん。コレは現実だよ。夢じゃないよ…！」

ミア「夢…。コレは幻…！」

美咲「ダメだ…。完璧に現実拒否している…」

杏子「ってミアちゃん。そんなことしているうちに、零牙くんどこかに行こうとしてるよっ…」

私はその一言でハッと目を覚ました。そうだ。危うく、目的を見失いかけた。

ミア「レ、レイはどこ!?!」

杏子「あそこのスーパーだけど…」

ミア「追いかけるよ二人!!」

杏子「ええっ!?!」

美咲「本気!?!」

ミア「本気だよ!さあ行くよ二人共!!」

続く

零牙の浮気（前編）（後書き）

夢幻「前回から約二週間…読者の皆様、投稿できなくてすみませんでしたーっ！」

零牙「何をやっているんだお前は…。しかもオレの浮気って…。有り得ないっつもの！」

夢幻「本編を読んだ皆様も思うだろうが、今のお前のセリフには全くといって良いほど信用できないからな」

零牙「大丈夫。オレは皆さんを信じてる」

夢幻「あっそ…。次回は後編。なるべく早く投稿します！二週間待たせてすみませんでした！」

零牙の浮気（後編）（前書き）

後編です。

零牙の浮気（後編）

……で、スーパーの中。

ルシア「それで、具体的には何を買っんですの？」

零牙「一番は卵かな。あとは小麦粉やグラニュー糖とか」

ルシア「……念のためお聞きしますが、零牙さんは本当に私と同じ年ですか？」

零牙「えっ？そっすよ？どうしたんです、いきなりそんな事聞いて」

ルシア「い、いえっ！その…お、お詳しいんですね、お料理」

零牙「まあ、趣味ですから。もし良ければ、今度教えましょうか？」

ルシア「えっ！？い、いいんですの！？」

零牙「良いですよ。うちにも一人、修行中の方がいますから」

レイとルシアさんは、ケーキの材料を見渡しながら楽しそうにおしゃべり。うんうん。本当にタノシソウ。今すぐあの輪に入って、レ

イをボコボコにしてやりたいよ。

レイ「この怒りはちょっとやそつとで済まされると思わないでね。レイ？」

杏子「ミアちゃんがすごく怖いオーラ出してるよ…。」

杏子がなんか言ってるけど無視。私は引き続きレイの浮気（断言）現場を見ていた。

ルシア「お砂糖と言ってもいろいろな種類がありますのね…。迷っちゃいそうですわ」

零牙「そうですね？メーカーごとに味や甘さとかが変わってくるから、『このケーキにはコレ』っていろいろを決めてるんです」

ルシア「それが一番美味しくできるんですの？」

零牙「オレとしては。例えばこの砂糖は…。」

ルシア「この砂糖ですか？」

レイが柵から砂糖をとろうとするとルシアさんも手を伸ばして二人

の手が当たった。ルシアさんは「あっ……」といって手を引っ込めたが、なぜかその顔は赤い。

レイモ「す、すみません」なんていって顔を赤くするし……なに？この桃色ムード。私へ当てつけるの？

ミア「……………」

杏子「ミ、ミアちゃん落ち着いて！ここで刃傷沙汰なんてまずいよ！」

美咲「ほ、ほら！ミアちゃんの好きなオナミンC買ってあげるから！落ち着いて！」

ミア「……………私は至って冷静だよ（平坦な声）」

（絶対冷静じゃない！）

その後、ミアは無表情のまま、零牙達がスーパーから出て行くのを見ていた……。

……………

零牙（なんなんだろうな……。この雰囲気。めっちゃ気まずいんだが

…)

さっきから隣にいるルシアさんはちらちらオレの方を見てくるし…
何かついてんのか？

零牙は自分に降りかかるうとしてしている危機に気付かぬまま、教会へと歩き続ける。するとそこへ…

マリー「あつ！零牙神父！」

ルーナ「こんにちわ神父様」

エマ「そちらも買い出しは終わったようですね。」

装飾の買い出しへ行っていた三人のシスターが現れた。三人は零牙のそばによって一緒に歩く。

零牙「マリーさん、ルーナさん、エマさん、オレ達より先に行つたのにずいぶんと時間が掛かりましたね。」

エマ「ええ。マリーがだだをこねまして」

マリー「してないよ！ただ、おいしそうなケーキがあったただけだよ
！！」

ルーナ「ケーキなら神父様に作ってもらえれば良いでしょう？」

マリー「ルーナはわかってないなあ。お店のケーキもおいしんだよ？」

ルシア「そうゆう欲は、修道女として断ち切らないといけませんよマリー」

マリーさんのいつものワガママを聞いて、ルシアさん呆れる。が、いつも叱られているマリーさんも、今日は反撃に出た。

マリー「む！そうゆうルシアだって零牙神父と一緒に出かけるからってそなにオシャレしちゃってさ！……もしかして、零牙神父を口説こうとしてたんじゃないの？」

ルシア「な！わ、私は由緒正しいイギリス清教徒として、そんなはしたないこと……」

零牙「いや。異性に対してアピールすることは悪いことではありませんよ、ルシアさん。時には聖書の内容を無視しないと得られない大切なものもありますし。例えば……恋、とか」

昔よく姉さんが言っていた。人生、聖書を忠実に守って得られないものの方が重要だって。昔は適当に聞き流してたけど……今はなんとなく理解出来るよ。

マリー「そっだよそっだよ。さっすが零牙神父。わかってらっしゃ

る」

エマ「わかってないくせに…」

マリー「はいそう、口に出さない」

零牙「アハハ…」

ルーナ「……では、神父様は今、恋をしてらっしゃるのですか？」

マリーさん達の漫才を見ていると、ルーナさんがそう聞いてきた。あー。あんまりこつこついう事を言うのはイヤなんだけど…

零牙「ええ。してますよ。」

ルシア「！！それは一体どんな方ですの！！」

零牙「ええつと…。あんまり言うの恥ずかしいんだけど、外見は…
「姉さんみたいなんだよ」そうそう。姉さんみたいな…え？」

バツ、と後ろを振り向く。するとそこには…

ミア「……………（ニロニロ）」

なんか、すごく良い笑顔をしたミアがいた。え？なんで？どうしてミアさんニロニロ…

ミア「ねえレイ」

零牙「は、はい…」

ミア「可愛いシスターさんと1日一緒に、ずいぶんと楽しそうだったね」

零牙「はい…」

ミア「『土日は仕事で忙しい』なんて言ってたけどさ、今日もずいぶん忙しかったんだね」

零牙「はい…！」

ミアがすごく良い笑顔のまま、『後ろに閻魔大王でも居るんじゃないか？』と思うぐらいの怖ろしいオーラを纏って近づいてくる。

ヤバい。足がすくんできた。つか、めっちゃくちゃ怖い！

ミア「砂糖を選ぶ時は随分楽しそうだったねえ。そういえば今度ケーキを食べにも行くんだって？私とは最近一緒に出かけてもいないの」

零牙「はい…」

ミア「ねえレイ。私がとっても、とーっても嫉妬深いのが、知ってるよね？」

零牙「はい…知っています…」

ヒイイイイ！全部知られてるよ！全部見られてたよ！そしてものすごく良い笑顔だよミアさん！
今のオレはまさに蛇に睨まれた蛙そのもの。ヤバい。本当にヤバい。もう恥も外聞も捨ててここから逃げたい…！！

ミア「ちょっと今日のことについてお話ししたいんだけどさ…。いいよね？零牙くん？」

オレの自己防衛本能がアラートを出す。これに付いていったらダメだ。と

零牙「え、いや、あの、すみませんがオレ……じゃなくて僕は、これからケーキを焼かなくちゃいけないくて……」

ミア「お話ししようか」

零牙「だから僕は仕事がまだ……」

ミア「お話、しようか」

零牙「いや、だから仕事が……」

ミア「……もう一度、言わせる気？（ニッコリ）」

零牙「…………お話、します」

ああ、キレイな夕焼けだなあ。本当にキレイだなあ。………もう、見れないんだなあ。この景色。

零牙「………グズ」

ミア「今更泣いたって、許さないからね？」

短い人生だったなあ。もうちょっと、生きたかったなあ…。

荷物をルシアさんに預けて、オレはミアの後について行った。

ああ。夕焼けが、きれいだったなあ…。

本格推理委員会「完」

零牙の浮気（後編）（後書き）

夢幻「えー。読者の皆様。本日、主人公、速水零牙が不慮の事故により死亡されたため、本格推理委員会はこれにて終わりと・・・」

修「待て待て待てえい！こんな中途半端に終わらせんな作者！」

夢幻「なんだよ修。この後『嘘です』と一言入れるつもりだったのに・・・」

修「良かった…。嘘なのか。そうかそうか。」

夢幻「当たり前だ。オレだってちゃんとラストは考えてあるさ。皆さ〜ん。まだ続きますからね〜」

修「良かった…。ならミアは殺人犯じゃなくなるんだな！」

夢幻「心配してたのそっちかよ！」

修。「良かった。本当に・・・」

夢幻「これ以上やるとグダグダになりそうだから次回予告。次回からはいよいよ文化祭編です！一応魔術戦なんでちょいちよバトルが入ります。

それでは皆さん次回をお楽しみに〜」

桜花祭

木ノ花学園は近隣で一番大きく有名な学校である。その広い敷地範圍を使って、年に一度の文化祭、【桜花祭】は地元の商店街や何かしらのグループ、すでに役目を終えたはずの夏祭りの出店など数多くの出し物が並び、開催される二日間はとても賑わう。

そんな中、とある白髪の少年が秋空を眺めながらぼつりとつぶやいた。

零牙「……前回の話で危うく死にかけたが、よく生きてんなオレ……」

ミア「当然の報いだからね？レイ」

オレは前回の話の後の折檻……むしろ拷問を思い出す。ステイル達がオレの事をたまに『拷問部屋の魔王』と呼ぶことがあるが、何となくその理由がわかった気がする……。

ミア「フフーン。今日は全部レイのおごりで、私の言うことは何でも聞くんだからね」

オレが現実を逃避しながらそんなことを考えてると、隣にいるミアは楽しそうにそう言った。前回の罰でオレはここ数日ミアのわがままを聞いてきた。……おかげで何度理性が崩壊しかけたか。

ミア「今日はお兄ちゃんの劇を見たり軽音部のライブを見たり、た

のしみだなあ」

零牙「ああ。そうだな…」

何だろうな。今日は楽しい桜花祭のはずなのに何嫌な予感がする。すごい不幸に巻き込まれそうな予感がする。

零牙「この予感が当たらなければ良いんだがな」

この予感が外れることを祈りつつ、オレはミアの後についていった。

.....

「どうも〜桜花祭へようこそ。こちらがパンフレットになります」

その頃、入場口前に異質な雰囲気をもつ二人組が木ノ花学園に来ていた。

ステイル「ふうん。これが学園祭か。意外とにぎやかなんだな」

神裂「そうですね。文化祭（こういう場所）に来るのは初めてなんです。これがこれほどは…」

魔術師、ステイル、マグナスと神裂火織である。神父服になんかエロい格好でいるミスマツチの二人組は、零牙の同僚である。

ステイル「まあ、パンフを見る限り話に聞く普通の文化祭と変わら
ないね。零牙はいつたいどこにいるんだか」

神裂「この広い敷地から探すのは少々手間が掛かりますね。二手に
分かれて探しましょう。私は右から」

ステイル「じゃあ僕は左からだ」

零牙の嫌な予感は現実のものとなる…

ステイル「さて、どこから行こうか」

一旦神裂と別れた僕は中等部の方に向かいながらパンフを読む。
実を言うと、零牙を探す気など毛頭なく、初めて来た（普通の）文
化祭を楽しもう。と自己完結しているのだ。

ステイル（あの女はすぐに伝えるように。とか言っていたが知った
事じゃない。それにアイツは僕らを見かければすぐに来るから問題
はないはずだ）

しかしさすがは関係者一万人を超えるマンモス校の文化祭、パンフ

をただ目で引くものが多い。さて、最初はどうだったか？

ドンッ！

？「きゃっ！」

しまった。だれかにぶつかってしまったらしい。大丈夫だろうか？

ステイル「すみません。大丈夫ですか？」

梢「…はい。大丈夫です」

目の前の真っ赤なチャイナドレスを着た少女は僕の姿に困惑しているのかめをパチパチさせていた。ん？タバコとピアス以外になにかおかしい所でもあるのかな？

しかし目の前の妙に見覚えのある少女はこういった。

梢「……神父探偵さん？」

ステイル「グハッ！」

梢「えっ？あの、大丈夫ですか？」

ステイル「え、ええ。大丈夫ですよ」

ニコリ。うまく笑って動揺を隠す。そうかこの子『本格推理委員会』の子か！どつりで見覚えがあると思ったよ……

梢「あの、今日はどうかされたんですか？何か事件でも起きたんですか？」

ステイル「いや。今日はただの休日さ。たまには頭を休めないといけないからね」

梢「そうなんですか。じゃあ、私の教室に来て下さい。おいしい飲茶と軽いお食事があります」

そうか。チャイナドレスを着ていると言うことは、中華喫茶でもやっているのだろう。しかし、僕はどうしても中華喫茶にはいけない。なぜならいまの僕は神父服だ。そんな格好でチャイナドレスの着た娘がいる所にも行ってみる。間違はなく【HENNATAI】のレットルの貼られてしまう。そんな不名誉なレットルは零牙と土御門の二人だけで十分だ。

ステイル「ああ。お気遣いありがとうございます。機会があったらよろせても

らじゆ

梢「いえ。今すぐ来て下さい。今ならハーレムですよ？かわいい子
いっぱいいますし」

ステイル「残念ながら僕は『ハーレム』みたいなものには興味ないん
だ。これでも神父だからね。だから・・・」

梢「えっ？女の子に興味がないんですか？じゃあ…もしかしてホモ
？うわぁ…」

目の前の少女は僕と距離をとって軽蔑のまなざしで見てる。まず
い。このまま引き下がって零牙にでも伝えられると後々面倒なこと
になりそうだ。アイツ、ネチネチ人いたぶるの好きだからなあ…姉
に似たせいで。

ステイル「いや。別に僕はホモじゃないんだ」

梢「じゃあ…バイ？」

ステイル「ぼくはバイでもない。普通の人間だ」

梢「そんな顔している時点で普通かどうか疑わしいですけど…。そ

うですね。たしか、幼い容姿をしたシスターさんが好きなんですよ？……」のロリコン野郎」

ステイル「いやね、ぼくはホモでもバイでもロリでもないんだけど」

だんだん笑顔が引きつりだした。くそう！零牙のやつだな、僕に対してここまで悪意ある情報を漏らしたのは！見つけたら炎剣持って追いかけて回してるっ！！！！

梢「本当にそんなんですか？じゃあ私の教室に来て下さい。そして信じます」

ステイル「わかった。僕が極めて普通の人物だと証明しよう」

後で思えば、このときの僕はどうかしていたとしか思えない

.....

神裂「さて、どこから行きましょうか」

ステイルと別れた私は、パンフレットを見ながらどこ店に寄ろうか……ではなく、どこに零牙がいそうか考え始めた。姉の悪影響を受けているためか彼は神出鬼没な面がある

あざみ「……！そのあなた、ちょっと良いでしょうか？」

神裂「私のことでしょうか？」

あざみ「ええ。あなたの事です」

私はスーツをきっちり着た女性に呼び止められてしまった。見た感じ教職員の方らしい。

しかしその人は私を見るなり「ふむ……」と私の体をじろじろ見始めた。

神裂「あの…なにか？」

あざみ「ああ、すみません。いきなり呼びかけたりして。私は木ノ花あざみと申します。以後、お見知りおきを」

神裂「か、神裂火織と申します」

あざみ「神裂さんと言つもですか。良いお名前ですね」

ニコッ。とあざみさんは笑って「よろしく」と手を握ってきた。こ

の人…何者だろうか？

あざみ「ところで神裂さん、すこし、お聞きしてもよろしいでしょうか」

神裂「な、何でしょう？

あざみ「神裂さん、コンテストに出てみませんか？」

神裂「……………はい？」

あざみ「ですから、コンテストですよ。コンテスト。せっかくすばらしいプロポーションをお持ちなのですからどうでしょう？一回」

どうでしょう？と言われても答えなんて決まっています。わたしは修道女なのですから、それらしい行動をとるまでです。

神裂「いえ、私はお断りさせて…」

あざみ「そうですか！では早速衣装部屋のほうへ行きましょう！」

神裂「え？いや、私はそんな気はな」

あざみ「コンテスト優勝目指してがんばりましょう！」

神裂「ちよつとーっ！！！！？」

今になって思います。なぜ、あの時無理矢理にでも逃げなかったのかと

.....

零牙「で、結局ミアはどこに向かってんの？」

ミア「お兄ちゃんの教室だよ。お兄ちゃん、今日のお弁当忘れたんだって」

零牙「へえ〜。あの先輩がねえ」

現在オレは高等部の校舎の中。ミアが腕を絡ませて一見すればタダのバカップルだ。

ミアが関節技をきめてなかったら、な。

オレ「こんな姿、神裂達には見せられねえな」

神裂「誰に見せられない、と?」

オレ「いや、だからお前だよ、神ざ……きさん……?」

後ろを振り向くとそこには見知った顔があった。なんであなたがいるんですか、神裂さん（ねーちゃん）

あざみ「ヤッホー。デート中かな二人とも」

ミア「あ、あざみ先生」

零牙「……おい神裂。なんでお前があざみ先生と一緒にいる?」

神裂「えーっと、それはですね」

神裂が視線を明後日の方向に向ける。まさかコイツ、あざみ先生を仕事に巻き込んだとか」

あざみ「コンテストに出場するためよ。零牙くん」

零牙「……それは本当ですか、神裂さん」

神裂「……………」

神裂は無言のまま明後日の方向を見ている。ああ、そういうことか。あざみ先生の強引な勧誘にまけたのか、ねーちゃんは。典型的な《NO》とは言えない日本人だからなあ…。

ミア「コンテストってあれですよ。あざみ先生のワガママで急遽企画した「華ざかりの君たちへ」コスプレ パラダイス」っていい…」

神裂「その企画名には色々ツツコミを入れなければならないような気がするのですが」

零牙「諦める神裂。オレ自身、作者のネーミングセンスにはついていけない」

あざみ「そうよ。そのコンテストに出てもらおうの。もちろん、やるからには優勝を目指すわ」

あざみ先生はグツと拳を握る。自分で企画させたコンテストに優勝しようって…。自分が出た方が確実なのに。災難だな、神裂。

あざみ「ねえ零牙くん、神裂さんには何を着せたら一番似合うと思う?。」

零牙「そうですね。和服も良いんですが、ここはメイド服、なんてどうでしょう?。」

神裂「まじめに考えないでください零牙! ああ、本当にこういう時ってあなたいきいきとしますよねえ!。」

まあ、姉さんがアレだったからなあ…。うん。トラウマに引つかかるからもうやめよう。

あざみ「メイド服…。一般的にいう《ギャップ萌》ってやつね。たしか、男ってだいたいこういうの好きなんですよ?。」

零牙「一概にNO、とは言えませんが。まあ、大抵の男はメイド好きですよ。」

ミア「好きなのはレイみみたいな変態か、オタクだけだと思っけど…」

大丈夫だミア。今現在出ているキャラで変態以外のキャラは(作者を含めて)そんなにいないから。うん。みんな同じ穴のむじなだから。

零牙「だがしかし！オレはあえて王道を選びます！でも和服じゃインパクトが薄い！よって巫女を推薦します！！」

神裂「堂々と真顔でそんな事言わないでください零牙！あ、あざみさんも「なるほど…」とかいって納得しないでください！」

零牙「いやでもどうだろう。神裂はいざステージに立つと結構恥ずかしがってモジモジするはず…。ここは某アニメの秋さんよろしくナース服や学校の制服という案も…」

ミア「レイ、いい加減にする」

零牙「くぺっ!?!」

ミアがオレの頸動脈を的確に絞めてきた。ヤバい。これは…ヤバい。

ミア「じゃああざみ先生、私たちはこれで」

あざみ「引き止めてごめんねミアちゃん。それじゃあ、私達も行きましょうか、神裂さん」

神裂「いや、ですから私は…」

そこからの意識はない。オレは、ぐったりしてミアに引きずられて
いった。

.....

その頃、一年二組の教室では

「ちょっと！そこのはさみ取ってくれる？」

「おい。シャンデリアのセットはもう行ったか？」

「予備のダンボール、どこにあるの？」

劇に向けて最後の仕上げに入っていた。ただし修など役者メンバー
はセリフの最終チェックをしている。

ミア「こんにちは〜」

修「ん？ミアじゃねえか。どうしたんだ？零牙と手をつないでいる
からデート中じゃ……」

ミア「う、うん。お兄ちゃんにお弁当持ってきたの。今朝忘れてっただでしょ？」

修にからかわれてちょっぴり恥ずかしがるミアと零牙。そんな二人を見て、修は楽しそうに笑っている。

と、そこへ

椎「ミアちゃんあああんっっ！！！！」

ミア「うわぁ！？し、椎さん！いきなり抱きつかないでください」

椎「ああミアちゃんや。本番前にこの独特の感触を味わえるなんて最高や！」

零牙「あの〜椎さん。ミアがけっこつ苦しそうにしてるんですが…」

椎「黙つとき主人公！私はこんな時にしかミアちゃんを抱けないんや！それを毎回毎回見せびらかすようにミアちゃんと手エツないで！ハグして！キスして！もう羨ましくてしょうがあらへんのや！こんなときぐらい私に譲りいっ！」

零牙「わ、わかりました。どうぞ…」

椎が乱入してきた。椎はミアを抱いて「ああかわええなあ…持ち帰りたいなあ…」と溜まっていたうつぷんを晴らすように愛おしく撫でる。ミアは「あうー！」と修に助けを呼ぶが、修は見ても見ぬ振りをしている。

響「おや？零牙くんですね。お久しぶりです」

虎「久しぶりだねえ。元気だった？」

そこに修の親友の響と虎スケが来た。二人とも何か配役があるのか、衣装を着ている。

零牙「お久しぶりです、響先輩、虎スケ先輩。きれいな衣装を着てますが、何か配役でもあるんですか？」

響「ええ。私は公爵役を」

虎「オレは子爵…。というか主人公役だぜ！」

零牙「先輩。いくら出番がなかったからと言って嘘ついちゃダメですよ。ねえ響先輩？」

響「いえ、残念ながら……」

修「本当、なんだよなあ……」

修が遠い目をしている。一方の虎スケはどや顔で自信満々。……この二人の配役、顔で決めたのか間違いだったかなあ……

虎「いや合ってる！合ってるから作者！修兄には怪人役以外務まらないから！」

修「ああ。俺の《怪人役》は満場一致で決まったよなあ」

零牙「まあ、先輩が怪人役は一番はまり役だと思います。それにあの小説の真の主人公は多分怪人だったと思いますし」

響「私も同感です。あの怪人ほど悲劇の主人公はいないと思います」

虎「まさかの怪人主人公説！？」

ここで話についていけない読者にちよつと解説。《怪人》と言うのは『オペラ座の怪人』における謎の人物であり、作中で起こる事件の犯人である。ちなみに虎スケ演じれば《主人公》は歌人の謎を追う間抜けな貴族である。

虎「マヌケというなコラッ！」

響「ま、修はこの土壇場で春がきましたからね」

零牙「え？」

虎「あゝ。小山さんね。あれはびっくりだったね」

零牙「え？え？」

ミア「お兄ちゃんに何があったの!？」

虎「ああここだけの話実は・・・」

修「!!おい虎スケ!それは「ちよつと黙ってましよう。修」もががっ!!」

ミア「お兄ちゃんが・・・?」

ミアは前々回のはなしを思い出す。まさか、あの時の人が…？

虎「小山に告白された後、無理矢理キスさせたっていう…」

修「もががあああ！」

響「黙りましょうね？修」

響が強制的に修を黙らせる。修は弁解しようともがき続けるがほとんど無意味に終わっている。そして、修の義妹とその彼氏は…

「「うわあ…」」

ドン引きしてた。二人とも意外とマジな恋愛をしているため、身近にいた外道とあんまり関わりたくないのだ。

零牙「城崎先輩…。無理矢理はちょっといかんでしよう」

ミア「お兄ちゃん最低エ…」

ステイル「……（もぐもぐ）」

ボタン。スタスタスタ……

ミア「どうしたのレイ？なんか悪いものを見たかのように顔色が悪いよ？」

零牙「ちよつと……色々見えてな……」

おかしい。ステイルよ。君はなぜ神父服のまま中華喫茶でゆうゆうとゴマ団子を食べている！？しかもちよつと満足げな顔で！

零牙「ミア、頼むからここの店は止めよう。お願いだからここだけはやめてくれ。後でキスしてあげるから……！」

ミア「……本当に、何が見えたの……？」

零牙「聞かないでくれミア。オレとあの変態「だれが変態だつて？」が関わりのあ……え……？」

突然聞き慣れた声があったので後ろを振り向くと、そこにはステイルが立っていた

スタイル「やあ零牙。久しぶりだね」

零牙「あ、ああ。久しぶりだ」

ニヤツと挑発的に笑いを浮かべるスタイル。マズい。アレは仕事の時にみせる笑みだ。つまり……めっちゃキレてます。

スタイル「なあ零牙。ちょっと良いかな」

零牙「な、なんだ？」

スタイル「この店員に僕のことを知っている娘がいてね。その娘、僕を【ロリコン野郎】と言ったんだ。なにか、心当たりはあるかい？

零牙「ア、アハハ〜ソナノアリマセンヨ」

そういえば前にスタイルが好きなシスター話をしたっけ……。まあ、確かにインデックスはロリ体型だからあってる……よな……？

スタイル「そうかいそうかい。しらばっくれても無駄なのはワカッテルヨナ？」

零牙「ステイル！まずは落ち着こう！冷静になって話せばきつと…」

ステイルは「問答無用」といって俺を追いかけ始めた。

命を懸けた鬼ごっこが始まった…

- - - - -

ステイル「ハア、ハア、ハア…」

開始30分後、ステイルの息が上がったので鬼ごっこ終了。ふ。この俺の逃げ足が早いことは元から知ってるはずだがな！ステイルよ！

零牙「ステイル…ざまあ…」

ステイル「今すぐ炎剣を額にぶち当ててやろうか」

零牙「それは勘弁…」とところで、今日は何のようだ？また上からの命令か？」

ミアと上手く離れられたので、今日の本題を切り出す。神裂は先生

もいたから無理だった。

するとステイルはタバコを一本口にしてい服し始めた。

ステイル「君は本当に切り替えが上手いよね…。聞きたくもない仕事のこと、ちゃんと聞こうとしているあたりがなんとも」

零牙「おだてたってなんもねえ。さっさと本題教えろ」

ステイル「ああ。実は…。《ピリリリッ！》……悪い、電話だ。ちよつと出るよ」

ステイルの携帯（に見せかけた魔術）に着信が届いた。恐らく、あの女からだろうな…。

ステイル「もしもし…。…はい。はい。こっちは順調です。…はい。え？それは本当ですか？…はい。はい。分かりました。」

ステイルが通話を切る。しかし出たときの違い、今のステイルはとて真面目な…仕事の顔をしている。

零牙「なにがあった。ステイル」

ステイル「ああ。この学園に魔術師が侵入したらしい。僕達でそいつらを捕まえなくちゃならなくなつた」

……続く

桜花祭での攻防戦（前書き）

魔術師戦第一話です！

桜花祭での攻防戦

零牙「魔術師が、学校に？」

零牙がステイルにそう問う。ステイルはタバコをふかしながら「そうだ」と続けた。

ステイル「どうもイギリスのほうで『天地逆転』の動きを察知したらしい。案の定、君の周りにチェックをかけたところ反応があった訳だ。敵の数は三人。目的、使用魔術、現在位置どれとも不明だ」

零牙「こちらに援軍は？」

ステイル「ないだろうね。こちらにはすでに君と神裂…聖人クラスの間が二人いるんだ。これ以上の戦力はいらないうて上が判断するよ」

零牙「それもそうか…」

零牙は記憶を手繰って、これまで歩いたところになにか手がかりになるようなものがないか思い出してみる。……が、敵の情報が少なすぎて、どれが手掛かりなのかが全く分からない。

神裂「遅くなりました」

ステイル「神裂じゃないか。今までどうしてたんだい？君が来るのにこんなに時間がかかるなんて珍しい」

神裂「詳しいことは黙秘します。魔術師がこの学校に侵入したしか聞かされてませんが」

ステイル「ああ。それがだね」

ステイルが神裂に状況を説明し始める。その間に零牙は魔術師の目的をいくつか考えてみた…。目的が分かれば、使用する魔術も自然と絞られてくるからだ。が、依然としてはつきりとした答えは出ない

ステイル「と、いう状況なんだ」

神裂「敵戦力は未知数。こちらには援軍はない…厄介ですね」

零牙「そうだな…。なあ神裂、お前が信仰している【天草式】ってたしか、十字教以外の宗教を取り入れてしまつて、独自性のある宗教になつてんだよな？」

神裂「ええ。それが？」

零牙「だつたら、十字教以外の宗教の視点で見て、木ノ花学園はどつ見える？」

零牙は自身の魔術の対抗策として、十字教以外の宗教を学んでいる。

が、それはあくまで『ちょっと勉強しました』程度なのだ。だから、零牙より神裂のほうが知識の保有量としては多い。

神裂「そうですね…。魔術的に考察すると、ここは龍脈がほんのわずかに漏れ出ていますね」

零牙「龍脈…たしか、地球に張り巡らされている巨大なエネルギーだったよな」

神裂「そうですね。ここはそれがわずかに漏れ出ている…。わずかとはいえ、漏れ出ているエネルギーは我々人間からしたらとても大きく大きいですが」

零牙「それが悪用された場合はどうなる？」

神裂「……考えたくもありませんが、例えば爆発させた場合は、最低でもこの学校とその周囲がまとめて吹き飛びますね」

神裂のいった被害はあくまで『最低』でだ。被害がもっと拡大する可能性が大きい。つまり、今回の魔術師の目的は【無差別大量殺人】かもしれないということだ。

零牙「なるほど。つまりオレたちは、この桜花祭に来ている推定約一万人の人間の命をかけて戦う訳か。スケールでけえな」

スタイル「びびったのかい？」

零牙「むしろやる気が出たよ。今度こそ誰一人失うことなくここを守って見せる」

スタイル「そうかい。なら、さっそくやつらの使う手を潰すとしてよ。土御門に連絡するからちよつと待ててくれ」

スタイルが携帯を取り出して土御門を呼び出す。学園都市にいるスパイは案外早く電話に出てきた。

土御門「やあースタイル。久しぶりだにやー。今日はどうしたよ？」

スタイル「土御門、陰陽師のエキスパートとして君に聞きたいことがある」

土御門「にやー。悪いけど後にしてくれないかにやー？小萌先生の補習が始まっちゃうんだが…」

スタイル「……はあ。そんなもの、サボればいいだろ」

土御門「いやあ今回はかしは無理だぜい。今日サボれば留年確定だからだにやー。補習終わったらかけなおすぜい」

ステイル「なっ！？ちよつと待て土御門！！おい！」

ステイルは勝手に通話を切った土御門にリダイアルしてみる。が、流れてきたのは『この携帯は電源が落とされているため、通話できません。』というアナウンスだった。

ステイル「土御門め……。こんな時に補修なんてふざけているのか！もっと真面目に授業を受けろよまったく……」

ステイルは荒々しく携帯をしまうと、怒りを紛らわせたためか、また煙草に火をつけた。……………ケムい。と零牙と神裂は思う。

神裂「土御門は無理ですか。どうやら、我々だけで対処するしかないようですな」

ステイル「ああ。そのようだ……。つて零牙、こんなときに誰に電話しているんだい？」

零「ちよつとな。まあ今回の切り札かもな」

敵がどこで聞いているのかわからないからまだ正体は明かさない。しかし、なんも手掛かりがないんじゃないでしょうか。ここはセオリー通りに……

零牙「このまま土御門の連絡待ち、っていうのは敵を野放しにすることになる。三手に分かれよう。小等部はオレ、神裂は中等部、ス

テイルは高等部を探してくれ。なにかあったらすぐに連絡を取り合おう」

「「わかった（わかりました）」」

オレ達は分かれて敵を探すことにした。さて、敵はどこにいるんだか…」

「「ここだな…」」

その頃、とある人物が雑木林を歩いていた。

その人物の手には、なにやら奇妙な文字の書かれた鉄釘と金槌を持っていた。

「いまに見てる…目のもの見せてやる…」

金槌で釘を打つ、甲高い音が鳴り響いた…

マユ「　　」

その頃、木ノ花学園の入り口に一人の修道女が来ていた。

零牙の義妹、姫野真優である。

彼女は入り口でパンフをもらうがそれを見る前にギュッと握ってしまふ。マユの今の心情は…

（なんかすごく楽しそうっっっ！）

めちゃくちゃ有頂天である。有頂天すぎて目がキラキラとひかっている。

マユ「よし！お兄ちゃんが珍しく『毎日がんばってるからはしゃいでいいぞ。はいこれおこずかい』って言うてくれたおこずかい（二千円）持ってきたし、まずはどこによろうかな」

さつき握ったパンフを見つつ、「とりあえず高等部のフリマに行ってお洋服買っちゃおう！」と鈴音達が経営しているフリマに行くことにした。

ちなみにそこは、菜摘の広い人材力をいかして、『なんか…洋服店じゃね？』と思わせるほど品そろえがよかつたりする。

マユ「よし、高等部に行こう！私だってこんな地味な修道服じゃな

ければ、けっこうかわいいんだってお兄ちゃんに見せつけてやるっ
！」

ミア「ずいぶん意気込んでいるようだけど、どうしたのマユちゃん
？」

マユ「うわっ！……ミアさんでしたか……。はああ……。びっく
りしたあ」

ミア「ごめん。別に、驚かせるつもりはなかったんだけどさ……」

マユ「い、いえ……。そこまで謝れると私も困るんですけど……」。

……そ、そういえばお兄ちゃんはどこなんです？今朝、お兄ちゃ
んの手をがっちりつかんで出て行きましたけど……」

現在、ミアは零牙の家に同居中だったりする。零牙曰わく『だって
…なるべく一緒にいたいたもん。って可愛くお願いされたら、オレ
は頷くことしか出来ないんだよな…』だ、そうだ。

ミア「あー。あの浮気者ね。なんかイギリスから知り合いが来たら
しいから案内するってどっかいちゃった。はあ、恋人より友達優先
らしいねあのバカ」

マユ「…………お兄ちゃん…………」

自らの義兄の行動にもものすごく呆れてしまう妹。ミアに限っては「ま、明日は何が何でもずっと一緒にいるけどね」と無理やり自分を納得させていた。

ミア「だからマユちゃん、一緒に桜花祭見よ？1人でいるのもなんだし、服選んであげる！」

マユ「本当ですか？じゃあ、お願いします！」

ミア「よし決定！目一杯楽しもう！」

マユ「おっっ！」

ミアとマユは腕を上げて気分を上げる。零牙はこの風景を守るために、戦い始める。

しかし、天地逆転（敵）は二重、三重と用意周到に罠を仕掛け始めていた。

零牙は、みんなを守れるのだろうか…？

続
く

桜花祭での攻防戦（後書き）

夢幻「さあ始まりました。久々のあとがきのコーナー！」

零牙「今回はやけに短いな」

夢幻「現在が忙しくなってきたから、とりあえず最初だけ。続きはまだ打ち込んでないし」

零牙「そうか。早くあげないと斬るぞ」

夢幻「逆刃刀を突きつけながら言わないでくれるかなあ！？頼むから！」

零牙「次回更新にちょっと時間がかかりそうらしい。読者の皆様、暖かい目で更新を待ってください」

桜花祭での攻防戦？（前書き）

遅くなりました！！

桜花祭での攻防戦？

スタイル「さて、なにかないかな？」

高等部にきたスタイルはさっそく調査を開始する。といっても普通に雑木林の中を歩いて、なにか魔術による物品　霊装がないかどうか目視で確認するだけなのだが。

スタイル「ま、そう簡単に見つかるはずがないよな……」

そう思っていたスタイルだったが、それはわずか一分で切り替わった。

なぜなら、

ヴァーク「やあ」

見知らぬ人物が話しかけてきたからだ。その青年は、ここに似つかわしくない服を……神父服を着ていた。

スタイル「……誰だい君は」

スタイルはルーンのカードを取り出して敵を見る。すでに臨戦態勢になっているスタイルに対して、青年は何気なしに一言。

ヴァーク「ぼくは名はヴァーク。君たちの敵さ」

スタイル「！！」

スタイルは《敵》という言葉に反射的に反応。即座に炎剣を作り出し、息もつかせぬ間に斬った(・・・)。

はずなのだが、

ヴァーク「うーん。敵ならば容赦なく斬る。か。良いねえ、情けも加減もない、まさに魔術師、って感じだね」

ヴァークは全く痛がってない。それどころか斬れてさえいない。

スタイル「これは……」

スタイルは自身の炎剣を見る。摂氏3000度の炎の剣はいまも「うご」と燃えている。

つまり、これは、

ヴァーク「ああ。言うておくけど、今僕に攻撃しても無駄だから。
この結界の中じゃ僕は無敵さ」

ステイルは気づかぬまま敵の術中にハマってしまった訳だ。目の前にいるはずのヴァークは、本当にそこにいるのかわかない【幻影】なのだ。ステイルは感じた。

ヴァーク「さて、今はまだ、お話しただけなんだけれども、どうやって切り出そうか」

ステイル「……………」

ヴァーク「そう睨むなよ。僕の話ってというのは簡単な取引のことさ」

ステイル「……………取引だと？」

ステイルはますます怪しむ。わざわざイギリス清教の監視がある木ノ花学園で、こんな事件を起こした相手が自分に攻撃もしないうちに【取引】なんていうとは思ってもみなかったからだ。

ヴァーク「そう。取引。こちらの要求はたった一つ　速水零
牙を渡してほしい。それだけだ。この取引が成立したら僕らは二度
と君らやこの学園には手を出さない。お金も領地もいらぬ。ただ
それだけなのさ。どうだい、なかなか破格の条件だと思うけど？」

ステイル「断る」

敵の要求に対しステイルは間髪いれずに断った。ヴァークはステイルがこういう反応をしたのが予想外だったらしく面喰っている。

ヴァーク「……一応理由を聞こうじゃないか」

ステイル「理由も何も、君らの要求に僕らが答える必要なんてない。それに、僕は二度とあいつを売るような真似をしたくない」

ヴァーク「……ふうん」

ステイルのきつぱりとした答えに、ヴァークはつまらなそうにそれだけ返した。

ヴァーク「それじゃあ交渉は決裂だね。後で後悔したって遅いよ？君は個人的な理由で、この文化祭に来ている一万もの人々の命を見捨てたんだ」

ステイル「好きにほざいてる。君らはぼくらが必ず捕まえる」

ステイルは結界の中……敵の手の上でいつ殺されるかわからないこの状況下でも強気でいた。対するヴァークは舌打ちをしてステイルを睨む。

ヴァーク「なんであいつはこんなに好かれている……。淘汰されるべきはずなのに……！」

ステイル「……？なんだい？負け惜しみか？」

ヴァーク「うるさい！零牙に伝えておけ。『偽りの仮面をつけた舞台で、誰かが死ぬ』とな！」

ステイル「！？待て！それはいったいどうゆう？

ステイルが気づいた時にはすでにヴァークは消えていた。

ステイルは、ただ呆然と立っていることしかできなかつた。

神裂「さて……敵の動きが分からない以上、用心しないといけません

ね

少し時をさかのり、中東部に行った神裂は…

神裂「敵がもし、陰陽の術を使うのであれば術者には陰陽師の特徴があるはずです。」

もちろん、敵もわからないようにカモフラージュはしてあるのだろうが、ここで神裂の【天草式】の出番である。【天草式】は日本で昔行われた弾圧から逃れるために、聖母像や十字架などを日常生活の中で使われるものにカモフラージュしてきた組織だ。そのため、常日頃から周囲に溶け込むことを意識している。

ならば、

逆にいえば周囲から浮いている存在が分かるということだ。どんなに取り繕っても隠しきれない特徴を頼りに、神裂は敵を探していた。

神裂「しかし敵はなぜ、執拗に零牙をねらうのでしょうか・・・？」

十字教徒において、零牙の存在を嫌うものは多い。十人いたら八人は嫌いと答えるだろう。イギリスにいたころは突然殴りかかってきたり、刃物を振り回されたりすることは日常茶飯事で狙撃されかけ

たこともある。

そこまで嫌われているとしても、今は《アークヒシヨッフ最大宗教》直々の任務中だ。狙うとしたらタイミングが悪い。

それなのに、なぜ…

神裂「……今ここで考えても意味がありませんね。あとあと零牙と一緒に話しましょう」

ここで神裂はいったん考えを中断した。戦うべき敵が、目の前にいたからだ。

神裂「すみません。ちょっといいですか？」

????「……え？オ、オレか？」

神裂「ええ、あなたです。ちょっとお話してもよろしいですか？」

????「か、かまわねえけど、オレ急いでいるから早くしてくれよな」

神裂「はい。あまりお時間はとりません。ただの確認ですから」

???「な、なんだよ？その確認って」

神裂「簡単なことです

あなたが腰に隠している小刀を見せていただけませんか？

???「！！」

神裂が声をかけた青年はあわてて神裂と距離をとり、小刀を取り出して身構える。対する神裂は愛刀、七天七刀に手をかける。

神裂「自己紹介が遅れましたね。私は神裂火織と言います。あなた方ですつところの敵です」

???「神裂・・・あなたがアイツがいつていた『聖人』ってやつか」

神裂「もう一度聞きます。あなたの名前は？」

???「くさくさいまじな工藤真だ」

神裂「工藤さんですか。では工藤さん、私はあなたと戦いたくない。戦う前におとなしく降参していただけませんか？」

工藤「おとなしく降参していただけませんか？」か。上から目線で偉そうに言いやがって」

神裂「私に魔法名を名乗らせないでください。私は、もう二度とアシを名乗りたくない」

工藤「はっ！知るかそんなこと！オレはお前らみたいなのが嫌いなんだ。少しばかり努力したかって周りからちやほやされる天才ってやつが！」

神裂「……あなたの言い分は後で聞きます」

神裂は抜刀に見せかけて鋼糸ワイヤを操り、工藤を拘束しようとして試みる。

……が

工藤「あぐっ！」

ボン！と音を立てて工藤は消えた。いや、紙の人形になった。

工藤「悪いが、オレはここで負ける訳にはいかないんでね。ひとまず退散させてもらう」

神裂「メッセージですか…。最初から偽物だったのですか…」

工藤「首を洗って待っている。――復讐してやる絶対に」

紙の人形から最後に聞こえた言葉は、生々しい恨みがこもっていた…

零牙「どうだ？何か見つかったか？」

現在午前10:30。魔術師捜索から50分たったころ、オレはステイル達に連絡をとってみた。オレのほうでは何も見つからなかったのだ。

ステイル「こちらステイル。《天地逆転》の一人、ヴァークと接触

した。が、すまない、逃げられた』

神裂『こちら神裂。同じく敵と接触しました。が、逃げられました』

零牙「…って逃げられたのかよお前ら。ちなみにオレは収穫なしだ」

どうやら敵は相当オレたちを警戒しているらしい。プロ三人がいれば一人ぐらい見つけれられると思ったんだがな…

ステイル「すまない。少し油断していた。しかしやつらの目的が分かった。やっぱり君のようだ。ぼくに取引を持ちかけてきたんだから間違いはないだろう」

零牙「やっぱりそうか…。あいつら、オレを捕まえてどうする気なんだ？」

ステイル「さあね。大方きみの魔術のことか、頭の固い上層部に売り飛ばして大金を得るのが目的なんじゃない？」

まだ12歳なのに、つくづくたくさんの人間から命を狙われるなオレ…。ま、魔術師なら全員血祭りに上げるだけだか。

神裂「こちらは工藤真という人物に会いました。おそらく、彼が陰陽師でしょう」

零牙「そうか…。やっぱり陰陽師が絡んでたか…」

神裂「ですが、彼は十字教徒ではないようです。魔術師であることは間違いないでしょうが…」

零牙「……十字教徒ではない、魔術師か…」

安藤昌彰、開花院ゆら。

オレの逆刃刀を直してくれた恩人であり、何度も共闘した頼れる友人たち。

彼らもまた、オレが知っているものとは違う方式で陰陽術を使っていた。

まさか…

零牙「おいおい冗談だろ。まさか今回の一件に昌彰さんたちが絡んでくるのか？ただ今絶賛コラボ中なのに」

神裂「……とりあえず、宣伝が目的ならあとがきでしたほうがいいかと思いますが」

零牙「……それもそうか」

ステイル「話は終わったかい？僕は君の友人がどうなるかと知ったことじゃないから、話を続けさせてもらおうよ」

零牙「なんだステイル？まだなにかあるのか？」

ステイル「ああ。僕と接触したヴァークが、消える間に君に伝えるところと言ったんだ……。『偽りの仮面をつけた舞台で誰かが死ぬ』ってね」

零牙「偽りの仮面をつけた舞台……？」

オレは、これから高等部体育館で行われる劇をの内容を思い出していた。確か、あの劇の中には -

ピリリリッ！

すると、いきなり黒いほうの携帯が鳴った。相手は……切り札ジョーカーか。な

にかあったのか？

零牙「はいもしもし？」

????「もしもし？あ、いま取り込み中だった？」

零牙「全然大丈夫だ。で、どうだった？」

????「調べてみたけどまだちょっと時間がかかりそう。一応霊装らしきものは見つけたんだけどね」

零牙「……！そうなのか。解除できそうか？」

????「うーん。まだわかんない。でも任せて。なんとかかしてみる」

零牙「そうか。じゃあ、そっちは任せた。」

????「りょーかい」

ピ。

零牙「……………ふう」

どうやら頼んで正解だったようだ。向こうは順調にいつているらしい。—安心—安心。

神裂「……………零牙、さっきは聞きませんでした。今連絡した『切り札』とはいつたい誰なのですか？」

ステイル「そうだね。僕らにも内緒で、君は一体誰を、この件に巻き込んだのかい？」

零牙「それは最後まで秘密だ。今ここでばらしたら、切り札じゃないからな」

今回の一件は、オレが標的なだけあつてうかつに動けない。最悪、ミアに危害が及ぶのは何としても避けたい。

だから、今回のオレたちの勝因はほとんど切り札が握っている。ステイルや神裂はすでに面が割れてるしな。

零牙「……………お前にオレの大切なもの、全部預けるからな…」
『切り札』ジョーカー

オレは、空を見上げてそう呟いた。

桜花祭での攻防戦？（後書き）

夢幻「遅くなりました！」

零牙「遅え！！」

夢幻「うう！悪かったよ零牙。これから善処するから許してくれ！」

零牙「……まあいい。こんなんじゃ、いつまでたっても本題に入らん」

夢幻「そくだよ宣伝！！という訳で零牙後よろしく」

零牙「はいはい……。え〜オホン！！以前、オレたち本格推理委員会とコラボしました朧月琥珀さんの『浮世絵町〜孫と孫の血を継ぐもの〜』のほうで、コラボストーリー【白昼夜〜交差する探偵と魔術師と陰陽師〜】がはじまりました！」

夢幻「このストーリーは、【コラボ事件！孫と孫の血を継ぐ者と白

髪の魔術師」の後の話です！あの事件があった後、木ノ花学園で起こった不可思議な事件とは……？」

零牙「ぜひぜひ、ご一読ください！！」

桜花祭での攻防戦？（前書き）

お待たせしました第三話です！

桜花祭での攻防戦？

さてさて、零牙達が頑張ってる最中、零牙の義妹のマユと恋人のミアは…

ミア「すっごく可愛いよマユちゃん！」

マユ「エへへ…。あんまり誉められると恥ずかしいなあ…」

早速フリマで買った洋服を着ているマユを鑑賞中だった。

今のマユは上は白いＴシャツにミリタリージャケットを羽織り、白いスカートを着いて、花柄のサンダルを履いている。そして、ロリコンの菜摘が「か、可愛いー！絶対いじるううう！！」と言ってマユの髪を弄ってツインテールにしているため元の面影はどこにもない。

普段黒い修道服しか着てないうえに、フードに隠れるため、髪型なんて弄らないマユが、今は普通の女の子らしく見える。

……………というか、清貧を掲げるシスターがオシャレしていいものなのだろうか？

マユ「む。うるさい作者だなあ。お兄ちゃん曰く、ばれなければ大丈夫なんだよ。ばれなければ」

ミア「……レイって本当に神父さんなんだよね……？」

マユ「そうですね？信仰心は限りなくないように見えますが、立派な神父さんなんですよ？」

目の前の可愛い女の子の言葉を信じるべきなんだろうか。とミアは思ったが、心に思うだけで実際には言わないでおいた。

マユ「それよりミアさん。これからどうします？お兄ちゃんはなんか取り込んでみたいだし、私も特に行きたいところなんてないし……」

ミア「うーん。お兄ちゃんの劇がそろそろ始まるから、体育館行くか。途中でお菓子かっていこ？」

マユ「はい！」

二人の少女たちは、仲睦まじく体育館へと歩いて行った。

- - - - -

おまえを破門する！

オレは、ただなりたかった。主人公に。

大切なものを守り通す。そんな主人公に。

でも、そんな夢は、『才能』や『血筋』といったくだらないものによつて簡単に消えた。

それでもオレは願った。主人公になることを。だから努力した。技を磨き、昇華し、力を得た。

それなのに、待っていた結末は残酷ものだった。

工藤「オレのほつがふさわしいはずだ。あんな子供^{ガキ}よりも、もっと・
・・！」

「なあにブツブツ言ってんだお前？人にぶつかっておいて謝りもしねえなんてどういづ見だあおい！」

目の前のガキどもが騒ぐ。ああ、本当にうっとうしいな…！

工藤「黙れよクソガキ。こっちは忙しいんだ。さっさとどっかいけ。

「テ、メエ…！調子こいてんじゃ…。」

殴って黙らせる。オレは、こんなガキにかまっている暇なんてない。

工藤「神裂火織、速水零牙…。」

憎い。たいした努力もしないで、やすやすとその場所にいるんじゃないか…！

何もわかってないバカどもに、オレの力を見せつけてやる…！

そして午前11:50分。劇が開始される10分前に三人の魔術師が体育館にいた。

零牙『おそらく、奴らが手を出してくるのは、『オペラ座の怪人』のワンシーンの【仮面舞踏会】のシーン。狙いはオレの知り合いだ

と思う』

体育館の一階で、ステイルは姿を消しながら零牙、神裂とともに作戦会議をする。この体育館のどこかに隠れている零牙の声が、ステイルの頭に響く。

ステイル「……それはあくまで君の推理ではだろ。でも、奴らは実際は関係ないんじゃないかなあ」

零牙「なんだと？」

ステイルの反論に、零牙はいぶがしげに聞く。ステイルは紙煙草を噛みながら説明する。

ステイル「もう少し考えてみる。ここでもし殺人事件が起こったとする。そうすれば君の友人たちは事件を解決するためにここにやってくるはずだ。当然、君も「委員会のメンバー」として収集がかかるだろう？」

零牙「…オレは適当に理由つけて行かないけどな」

ステイル「行かなかったとしても関係ない。集まった君の友人はそのまま人質になる。違うか？」

零牙「！」

ステイル「焦る気持ちもわかるが、少し落ち着け。いざとなったら僕が火事でも起こして避難させる」

体育館に入ってから零牙は少し意気込みすぎてる。なんでも一人で頑張ろうとするのはやめてほしいものだ。

神裂『……どちらにせよ、これはあなたをおびき出すための罠です。でしたら、正面から堂々とぶつかりましょう。私はその方が気楽で良いです』

神裂も僕と同じ事を思っていたのか、言葉はとげが見られる。零牙は黙ってその言葉を聞いていた。

零牙『……そうだな。これはオレ個人でなんとかできる問題じゃねえよな。悪かったなステイル、神裂』

ステイル「気にするな。いつものことだ」

神裂『しかし、我々が総出で見張る必要はないのではないのでしょうか？私と零牙だけで十分な気が……』

零牙『奴らにかんしては心配ない。オレの「切り札」が常に動向を
探ってるからな。奴らが魔術を使っても対処できる』

ステイル「随分と信用してるんだね」

零牙『当たり前だ。アイツの実力はオレが一番よくわかってる』

ふう。零牙がそこまで信じる魔術師か。一度あってみたいね。

零牙『もうすぐ劇が始まる…。そろそろ作戦会議は終了しよう』

ステイル「そうだね。じゃ、気をつけるよ」

零牙『ああ。お前もな』

魔術による通信が切れ、僕は息を吐いた。さて、ここからが――勝
負だ。

――

ミア「うわっ…。たくさん人がいる…」

同時刻、ミアとマユは体育館の入り口にいた。小等部よりも広い体

育館いっぱい人がいて、その多さに圧倒される。

ちなみにマンモス校木ノ花学園高等部体育館の最大収容数は3000人を超える。

杏子「席、とれるかなあ」

美咲「これだけの人数じゃね…」

先程偶然出会った美咲と杏子も驚きを隠せないようだ。

それもそのはず。毎年毎年大勢の人が来る【桜花祭】の出し物は一つの見物となっており、体育館に入れない程の人数がくるため、小中高それぞれの視聴覚室でリアルタイムの体育館の映像を出してこれに対応している。

ミア「席とれるかなあ。ちょっと諦めたほうが良いような気がしない？」

マユ「確かに…。もうほとんど席は埋まってるだろうし…」

杏子「じゃあ、今から小等部の視聴覚室行く？でも、ちょっと遠いから最初は見逃しちゃうね…」

美咲「ほらほら三人とも。せっかく入れたんだから、なんとか席が空いてないか見ておこうよ。最悪立ち見でも構わないでしょ？」

「ええ〜。座りたいよ〜」と弱音を吐く杏子に「我慢しなさい」と言っただけで首からぶら下げた双眼鏡を使って空いている席がないか見てみる。

……が、開始10分前ともなるとほとんどの席は埋まってしまっているため、はつきり言って美咲達全員で座れる場所はなかった。

ミア「……素直に小等部に行こうよ。走れば最初から見れるかも知れないし」

マユ「私、今サンダルだから走れない……」

ミア「靴だけ履き替えれば……ってそうするとマユちゃんがダサくなるね……。元のは革のフリンジブーツだったから」

美咲「みんな諦めるの早いよ！まだどこかに席があるよきつと！」

リュウ「席がどうしたんだ？」

すでに諦めモードに入っていた三人の前に、両手に紙コップを握ってキョトンとしているリュウが現れた。

美咲「あれ。リュウくんいたんだ。こういう興味なさそうだと思っ
ていたからびっくり」

リュウ「おう。俺も何でお前らがここにいるのかびっくりだ…」

杏子「あゝ。まあ見ての通り席が見つからなくてね…。困ってる
んだよ」

リュウ「ふう〜ん。そうなのか。……………じゃ、オレはミユが待つて
るから」

ミア「ストップ。さらっと自然に見捨てないで」

ミアがリュウの肩を掴んで制止させる。リュウは「ええ〜…」とけ
だるそうに顔をゆがめるとミアの方に振り返った。

リュウ「なんだよ。オレがいてもしょうがないだろ…?」

美咲「今すぐにもミユちゃんとイチャイチャしたいの気持ちは分

かるけどね…。少しは協力してくんない？」

リュウ「ええ〜…だるう…」

本気で面倒くさそうなりゅうにマユは「なんか…お兄ちゃんが一番の親友ってわけがわかる気がします…」と思った。妙なところで、リュウと零牙は似ているのである。

一方、『彼女とそこまでイチヤイチャしたいのか』とリュウのたいどになぜかイラッと来た三人娘は、地味に反撃を始めた。

美咲「ふん。なら良いよ。零牙くんがリュウくんがミアちゃんに手を出してる』ってメール打つから」

リュウ「待てい！オレを殺す気か！」

ミア「リ、リュウくん。私にはすでに速水零牙っていう心に決めた人がいるから…！だから…！／／／」

リュウ「ミアちゃんも、その人妻みたいなノリ止める！」

杏子「あぁーっと！今リュウくんが強引にミアちゃんの唇を奪いましたぁ！」

リュウ「一ノ瀬も止める！コレがもし零牙に聞かれてたら一大事」
ピリリリッ！」で、電話？いつたいたれだよこんなタイミングで…」

リュウは『非通知設定』と表示されている携帯を取り出して電話に
でた

リュウ「もしもし。どちら様ですか？」

零牙『……貴様ヲ殺ス』

リュウ「零牙か！？待て、これは誤解なん『ツーツーツー』………
…やばい。本当にやばいぞコレ！！」

リュウは普段から零牙と一緒にいるから知っている。ミアだけが嫉妬深いように見えるが、実は零牙も相当独占欲の強い男なのだ。

やはり似た者同士惹かれあつたためか、最初から共通の趣味嗜好を持っていたために周りから『バカップル』と言われるぐらいラブラブだが、その逆……つまり嫉妬の度合いも相当強く、零牙の場合はそれが二割増しでミアではなく、その周りの男に向けられるために相当怖い。

簡単に言えば、リュウは今零牙に心底ビビっているのである。

リュウ「零牙の奴、そういう話を冗談とかで言っても、凄い形相で睨んでくるからなあ…。このバカップルめ」

ミア「ふふ 嫉妬するってことは、それだけ相手のことが好きなんだよリュウくん？」

美・杏・マ「バカップル……」

ミア「」

美咲達が呆れてもすでにミアはニコニコと笑うだけとなった。慣れとは恐ろしいものである。

リュウ「はああああっ……。立ち見で良いなら俺たちと一緒に見ようぜ……。二階にいい場所があるからよう……。」

美咲「うん！いくいく」

杏子「それじゃあ二階にレッツゴー！」

美咲「おおー！」

ごうしてミア達は、リュウとミュと一緒に二階で劇を見ることになった。

.....

エンディー「さて、役者はそろって来たようだ。」

その時、《天地逆転》のエンディーは工藤真と共に一階の席に座っていた。

エンディー「くくく……。確かに私は『一人殺す』と宣言したが、どうやって殺すかは宣言してない。そして陰陽師は呪術も扱うことができる……」

エンディーの隣の席に座る工藤真は、現在刀印を結んでなにやらブツブツ呟いている。呪術を使って会場内にいる誰かを呪っているのだ。

エンディー「さてと。パワーズの方は上手くやっているのかな？ 境界を張るのはアイツの専売特許だから心配はいらないだろうが……」

工藤「……念のため、そいつに確認した方が良いかもな」

隣に座っていた工藤真が話しかけてきた。呪術は成功したのか吹き出している汗をハンカチで拭いている。

エンディー「心配無用だ工藤真。パワーズの結果はそう易々と破壊されない。お前が作ったあの『魔術』は確かに扱いが難しいが、アイツなら操れる」

工藤「それが解らなくなってきた…。オレの呪術が成功しない。」

エンディー「それはただ単に、お前の魔術が失敗しただけでは？」

工藤「違う。誰かが邪魔をしているんだ。しかも、的確かつ完璧に」

エンディー「なに？」

工藤「邪魔している奴を突き止めようとしたが無理だった。相手は自分に強固なプロテクトをかけてやがる。どうすることも出来ない」

エンディー「なんだと…」

エンディーは工藤真の实力を知ってる。陰陽師としては間違いなく

一流の力を持つ。その陰陽師の呪術を防ぐとは…。

工藤「それからもう一つ。これは直感だが、恐らくお前の渡した資料の中には入ってない奴だ」

エンディー「なんだと!？」

工藤「おそろくな…。今回、一番警戒しなければいけないのはそのイレギュラーだろう。さて、呪術が使えないとなるとお前はどつするんだ？」

エンディー「案ずるな。策は二重、三重と張っておくのが基本さ」

エンディーは手に握ったナイフを見てニヤリと笑った。

.....

オレ「そうか…呪術を…」

切り札「一応妨害しておいたけど、多分奴らは直接行動に出てくるよ。私は奴らの痕跡を探しておく」

切り札からの緊急連絡を受けてオレはホッと一安心する。色々やる
ことが重なっているがどうにかなりそうだ。

オレ「あんまり無茶するなよ。今回はお前が切り札なんだから」

切り札「わかってるよ…。じゃあ切るね…」

切り札との連絡を切ったオレは二回の中央部分から二階全体を見渡
す。

この体育館は二階建てになっていて上から見ると長方形の形をして
いる。二階へ上がる階段は全部で四カ所。一番奥にある舞台脇につ
ながる階段が左右に一カ所ずつ。そして一番手前側にある玄関へと
繋がる階段二カ所。コレもやはり左右に一カ所ずつ。

そとに出るには、玄関から出て行くか、窓から出るしかない。しか
し、今体育館の窓はすべて黒いカーテンを閉めて光を入らないよう
にしているため、おそらく窓からは出ない。

オレ「だから、奴らが出るには玄関から出るしかない」

一階は神裂とステイルが常に見張って、敵がいたら入り口で待ち伏
せを仕掛ける作戦になっている。オレは二階にいた場合だ。

オレ」さて、どんな手できやがる…?」

現在時刻、午後12:00

ついに、劇が始まった。

桜花祭での攻防戦？（前書き）

ついに始まった劇。零牙達は惨劇を防げるのだろうか…。

桜花祭での攻防戦？

ついに城崎先輩たちのクラスの劇が始まった。

演目は『オペラ座の怪人』。19世紀のフランスのパリにある【オペラ座】を舞台にして物語は始まる。

最初はヒロインとなるコーラスガールが舞台で歌を歌うところから始まる。そして舞台はどんどん進み、主人公の貴族が苦悩しながらもヒロインへの愛を貫き通す。そして、二人が恋を成就するために避けては通れない最大の敵：「怪人」が現れるという『仮面舞踏会』のシーンになった。

エンディー（さあ始めようか。命をかけた戦いを！！）

パチン！

誰かが指を鳴らす音が聞こえてきたら、突然、どこからか男の悲鳴が上がった。声のした方向に視線を向けると、足を抑えてうずくまる青年とナイフを片手に舞台へ走っている男が見えた。

オレ（あいつか！）

一階にいるステイルと神裂がすでに戦闘態勢に入っている。が、姿が認識できるなら、オレの魔術の方が確実だ。

オレは武器召喚の魔術の呪文を詠唱し始める。まずはこれで一人…

エンディー（かかった！）

ふっ…

オレが呪文を詠唱しきる前に、いきなり体育館の照明がすべて消えた。これにより、オレは一瞬対象を見失い詠唱を失敗してしまう。

オレ（っ！ならもう一度だ！！）

再びオレが詠唱を始めると、ナイフを持っていた男がオレに向かってナイフを投げてきた。魔術による何らかのサポートを受けているのか、異常な速度で向かってくるナイフを、オレは紙一重で避ける。だが、再び詠唱は失敗してしまう。

オレ（一度ならず二度までも…！！）

三度オレは詠唱しようとしたが、いつの間にかナイフを投げた男は神裂によって気絶させられていた。……なにはともあれこれで一人

工藤「捕えた。かな？」

オレ「!!！」

聞きなれない声が突然頭に響いたと思ったら、直径三センチぐらいの半透明な球が、オレに向かってふよふよ浮いていた。その球はオレの体に触れると…

バンツ!!

爆発した。爆発こそ小規模だが、威力はそこそこあるらしく、当たった部分が火傷している。
オレ「くっ!!！」

工藤「まだまだ…」

オレが身構えると、さっきと同じものが無数に表れた。オレを囲むように出現したそれは

ドンッ！！

オレの目の前で、一斉に爆発した。

美咲「な、なに！？」

杏「いきなり暗く…」

同時刻、二階の端で劇を見ていたミア達は、突然の異常事態にパニックになっていた。

ミア「確か、男の人の悲鳴が聞こえて、そしたらいきなり…」

ミュ「……リユウ、怖い…」

リユウ「いったい何が起こったんだ…」

状況を理解できていないミア達と同じように、体育館全体がパニックに陥っているのにも関わらず、マユが二階中央部分をじっと見て

いることミアは気づいた。

ミア「どうしたのマユちゃん？」

マユ「お兄ちゃん…？」

ミア「え？」

ミアが中央部分に視線を向ける。彼女もよく知っている、白髪の少年の姿をその目に捉えたと思ったら

ドンッ！

その姿が爆炎に包まれた…。

オレ（……オレは 死んだのか？）

あの爆発後、オレは真っ黒な空間の中で目を覚ました。右も左もわからない。あらゆる感覚が消えてしまったかのように、オレは漂っていた。

オレ（ずいぶん、あっけなく死んだなあ…）

いいえ。まだあなたは死んでいませんよ…

オレ（誰だ??）

目を覚ましてください。眠っている場合ではありませんよ…

暗闇の中で聞こえた声のする方へ、オレは意識を向ける。すると

オレ「う、ううん？」

??「やっと目覚めましたか…」

オレが目を覚ました時、見慣れない人がオレを抱えていた。

オレ「あ、あなたは…?」

天一「私は、^{わたくし}十二神将『天一』。こうしてお話しするのは初めてです
ね。零牙様」

オレ「……十二神将？と、いうことは……」

陽の光のような金色の髪を持つ十二神将の奥から、足音が聞こえてきた。オレは、逆刃刀を打ちなおしてくれた、頼れる友人の顔が思い浮かべる。

昌彰「危ないところだったな。相変わらず無茶する……。」

オレ「お久しぶりです。昌彰さん」

昌彰「少しはミアちゃんのことも考えるよ？零牙」

工藤「……まずは一人。意外と簡単だったな」

その頃、工藤真はエンディーと一緒に体育館近くのベンチに来ていた。観客が逃げるのにまぎれて神裂達の追跡を逃れたのだ。

工藤「意外と簡単だったな。『悪魔の化身』だなんて呼ばれている
そつだが所詮は子供だな」

エンディー「……あんまり奴を甘く見るな」

零牙を殺したと思って有頂天になっている工藤にエンディーが険しい顔で言う。彼ら《天地逆転》は零牙のしぶとさをいやというほど知っている。

工藤「何を恐れているんだか。あの距離で爆発したんだ。生きているはずがない」

エンディー「いや……。奴は害虫並の生命力としぶとさを持っている。死体を確認するまでは生きていると考えたほうがいい」

工藤「ずいぶんと慎重だな……。オレの力が信用ならないのかな？」

エンディー「いや。死んではいないだろうが怪我は負っているだろう。これで無傷だったら本物の悪魔か何かだ」

工藤「そうかい。だてに『化身』と呼ばれているわけじゃないわけね」

エンディー「そういうことだ。まったくもって忌々しい。もう少し簡単に倒れてくれれば楽なものを」

エンディー「は理不尽な愚痴をこぼすと、携帯を取り出して、どこかへと通話する。相手は天地逆転の一人、パワーズだ。」

エンディー「もしもし。そっちはどうだいあ？」

パワーズ「エンディーか…。こちらは順調だ。」

お前らがうまくひつかきまわしてくれているおかげでな」

エンディー「そうかい。まあ、オレ達がひつかきまわすまでもなく、お前は『姿くらしの魔術』が使えるんだけどな」

パワーズ「だが、用心に越したことはない。私は戦闘向きではないんでね」

電話越しに聞こえるパワーズの声はいつも通りに聞こえるが相当疲労していると感じられた。

工藤真が考案し、パワーズが魔術に改造した『本命』は、発動すれば凄まじい効果をもたらすが、発動までにかかる準備が長いうえに魔力の消費が激しいのだ。

エンディー「まあそっちはお前に任せた。こっちはお前を気配とらせないように注意する」

パワーズ「わかった」

パワーズは連絡を切った。あの様子なら今のところ異変はないのだから。

エンディー「よし。ではこちらもつぎの段階へ進もう。体育館で騒ぎを起こしたんだ『本格推理委員会（ごっこ遊び）』も動き始めるだろう」

工藤「わかった。とりあえず何人ぐらいやればいい？」

エンディー「とりあえず10、15人ほどか。これだけの入場者数だ。それぐらいいなければな」

工藤「わかった」

そういつて工藤真は人ごみの中に紛れ始めた。順調に、本命は動き始めている

ピリリッ！

そして、再びエンディーの携帯がなった。電話の相手を知って、エ

ンディはニヤリと笑う。

エンディー「やあ。体調はどうだ　ドミニオン」

オレ「お久しぶりです昌彰さん……。つう…」

昌彰「無理に動こうとするな。右腕と左足は火傷している」

体育館から命からがら生き残ったオレは、現在水の十二神将、『玄武』の力によって火傷した個所を冷やしている。右腕と左足に手酷い火傷ををってめっちゃ痛い。

オレ「っていつかなんで昌彰さん桜花祭に来ているんすか。つうかどうやってオレを助けたんです？」

昌彰「ミアちゃんが『楽しいから来てくださいッ！』って電話してくれたんだ。で、どうやって助けたかというと…」

太陰「私よ！」

昌彰さんの隣にツインテールの少女の姿をした風の神将が現れた。

十二神将『太陰』である。

太陰『本当に危ないところだったんだから。私がとつさに風をあんたに纏わせてなかったら、今頃あんたは川を渡っているわよ』

オレ「はは…。よく生きてるもんだ」

昌彰「まったくだ。少しは命を大切にしろ」

朱雀『昌彰』

白虎『見回りをしてきたぞ』

突如、虚空から燃え上がるような髪をした炎の神将与亜麻色の総髪をした体躯のよい風の神将が現れた。

十二神将『朱雀』と『白虎』である。

昌彰「ありがとう朱雀、白虎…。で、どうだった？」

白虎『奴ら、上手いこと隠れているらしい…。オレの風読みでもダメだ。敵の一人もつかめない』

朱雀『だが、代わりにこんなものを見つけた』

火将、朱雀が持ってきたのは何かしらの文字が彫つてある鉄釘だった。彼はそれを昌彰さんに渡す。

朱雀『その木の根本で見つけたんだが、文字かわからない。しかも、似たようなものが同じように近くにたくさんあった』

白虎『強い悪意がその釘から感じられる。何かの呪術の痕だと思ふのだが…』

昌彰『なんだ、コレ…、オレもわからないな…。零牙、何か分かるか？』

オレ『いえ…。オレも…』

その釘に掘られた文字は、元は漢字のようにもローマ字のようにも思える。しかし、形が崩れすぎていて記号のように見えてしまう…。ステイルのルーン文字を連想したが、ルーン文字ではない。

オレ『なんだコレ…』

ピリリッ！

オレ「う……。電話か……」

オレは動ける左腕をつかってポケットの中で振動する黒い携帯を取り戻した。相手は――

土御門「もしもし」。元気にやー零牙」

オレ「……。消え失せるシスコン」

補習とかで協力してくれなかった土御門だった。……。今更なんのよ
うだアノ野郎……！

土御門「にやー！？やっと補習が終わったから電話してやったのに、
この扱いはなんだにやー！」

オレ「にやーにやー言つの止める土御門。それよりわかんねえ文字
あるから今すぐ解け」

土御門「先輩に対する態度じゃねえ！」

オレ「今更お前に尊敬語、謙讓語、丁寧語なんて使うかロリコン。
いいからさっさと今から送る文字解け役立たず」

土御門「友人に対して酷くないかその《ピッ》」

オレ「……よし、じゃあ早速メール送るか」

昌彰「……あの、零牙くん？一応君の先輩なんだよね？その人」

オレ「ええ。軽蔑と尊敬が10:0の割合でいる先輩です」

携帯に内蔵されているカメラで文字（記号？）を撮る。最近のは便利だなあ。

オレ「送信つと」

昌彰「……」

昌彰さんが「それはもう先輩じゃないんじゃないか」と言っている。いや、全くもってその通りなんだが。

昌彰「いいのか？それで？」

オレ「良いんです。それで」

ピリリッ！

なんてやり取りしていたらまた携帯がなった。相手は土御門だった。随分はやいな。

オレ「もしもし…」

土御門「零牙、今すぐこの鉄釘を壊せ！」

オレ「どうした？そんなに声を荒げて…」

土御門「くそっ！なんでこんな術が…！」

オレ「どうした？なんて彫られてたんだ？」

土御門「こんなもの読めなくて当然だ。ここまで既存の術を改造するなんて…」

既存の術。と言うことは、既に作られている魔術なのか？

オレ「おい土御門、既存の術っていったい……」

土御門「いいかよく聞け零牙。コイツは、世界でたった一人しか使えない術だ……。」

土御門はこの魔術の名を忌々しそうにこう言った。

土御門「これはかなり改造してあるが、紛れもなくかの大陰陽師『安倍晴明』が使った魔術……『離魂術』の術式だ!」

桜花祭での攻防戦？（後書き）

夢幻「更新遅くてすんませんでしたあああ！」

零牙「……神裂、切腹の用意は？」

神裂「既に出てます」

夢幻「まって！次回はもうちょっと早く更新するから！」

零牙「ステイル、炎剣は？」

ステイル「ここに」

夢幻「まって！許して！」

零牙「安心しろ夢幻……。『拷問部屋の主』こと、オレ、速水零牙がお前を調教してやる」

夢幻「助けて！誰でも良いから誰か助けてええええ！」

次回は9月17日に更新予定。
が、頑張ります…。

桜花祭での攻防戦？（前書き）

工藤真の攻撃を、昌彰率いる十二神将達によってなんとか回避した
零牙。

そして、ついに敵の本命の魔術にも気付いた。それは、大陰陽師安
倍晴明の編み出した術『離魂術』

零牙は、敵を打ち破れるだろうか……？

桜花祭での攻防戦？

オレ「…………『離魂術』？」

土御門『そうだ。この術は、「魂と肉体を分離させる術」だ。この鉄釘自体が術を発動させるための霊装となっている』

土御門と何とか連絡を取れたオレは、この釘の破壊方法をレクチャ―してもらっている。土御門曰く、一度発動すれば確実に死んでしまふとのこと。

土御門『ここからはオレも参加する。零牙、すぐにステイルと神裂を呼んでくれ。この術が完成する前に破壊しないとイケない！』

昌彰「どうした零牙？なにかわかったのか？」

すると話についていけない昌彰さんが質問してきた。…よし、まずは…

オレ「土御門、今から送る番号に電話してくれ。術の解除はそいつに任せる」

土御門「お前は？」

オレ「オレは奴らをたたく。術式も止めないのだが、奴らを迎撃しないといけない」

土御門「……何かあったらすぐ連絡しろ。いいな！」

土御門は連絡を切った。オレは「切り札」^{ジョーカー}の番号を送って一息つく。はあ、やっかいなことになったなあ。

昌彰「どうした？なにがあった？」

オレ「土御門があんまりの文字を解析したらしいです。どうも、ルーンと真言を混ぜていて、同じ意味の言葉を一行にまとめて彫ってあったらしいです」

朱雀「それで、なんて書いてあったんだ？」

オレ「くわしくは聞きませんでした。どうやら『離魂術』という術らしいです」

オレがそういった瞬間、明らかに神将たちの纏う空気が変わった。これは　驚き、か。

玄武『清明の術か。相手もなかなか厄介な術を使ってくる』

太陰『あの術は清明だけが使える術よ！他の術ならともかく、なんでそんな術を…』

オレ「土御門曰く、『改造されまくっていて原型はほとんど見られない。だけどこれだけは言える。これは明らかに広範囲殺人のために改造された危険な術だ』って」

さらにオレがこういうと、神将たちは怒りを露にした。彼らにとっでは大切な主の技。それを悪用されるのが我慢ならぬのだろう。

朱雀『まさか、清明の術を人殺しのために使う奴がいたなんてな』

白虎『……千年の時を経て、陰陽の術を扱う者も落ちぶれたという訳か…』

天一『清明様は誰かを守るためにこの術を編み出したのに…まさかこんな日が来るなんて…』

昌彰「……たしかにそうなのかもしれない。でもみんな、今やるべきことはわかってるよね？」

玄武『無論だ』

太陰『悪用した奴をぶっ飛ばしてやるんだから!!』

太陰が小さな拳を握ってそういった。しかしそこに

ステイル「ふうん。でもその前にこの攻撃がよけられるかな？」
轟!という音とともに、炎が襲ってきた。風將、白虎の風によって、オレと昌彰さんは空中に浮いて炎を回避。他の神將たちも回避しようだ。

ステイル「へえ。なかなかやるね。一応、回避できないようやったつもりなんだけど」

太陰『あんた誰よ!いきなり攻撃してきて、なんのつもりよ!』

ステイル「僕の名はステイル!!マグヌス。零牙の友人さ。君らを敵かと思っただが、どうやらちがうらしいね」

ステイルが炎剣で攻撃してきたようだ。……おいおい、オレに当たったらどうするんだよ。

神裂「いきなり仕掛けて申し訳ありません。まさか零牙を助けてくださった恩人だとは思わなく……」

昌彰「攻撃するんだったらもう少し状況を見てくれ。危うく死ぬかと思ったぞ……」

そりゃ、いきなり攻撃されたら死ぬと思うよな。

ステイル「悪いね。ま、怪我はしてないようだしよかったじゃないか」

なんかよそ事みたいなステイルの言動に朱雀は睨みつけて威嚇する。
……おいおい、いきなり最悪な展開じゃねえか。

ステイル「さてと、とりあえず零牙の治療だけでもやらないとな。負傷している個所は右腕と左足だけかい？」

天一「はい。それ以外は大丈夫です」

ステイル「そうか。じゃさくつと終わらせよう」

オレ「なるべく早く頼むぞ…」

ステイルがルーンのカードを取り出してせつせとオレの火傷を治療する。ひとまず大丈夫だろうと思ったオレは、昌彰さんの方に目を向けてみた。

神裂「先程は本当に申し訳ありませんでした…」

昌彰「いえ。怪我はなかったんですから、そんなに謝らなくてください」

その時、昌彰さんは神裂と自己紹介をしていた。神裂のほうはステイルと違って礼儀正しいから、神将達もあんまり警戒していないのだろう…。良かった良かった。

神裂「しかし、こんなところで安藤家の後継と会えるとは。驚きが隠せません」

安藤「……オレのことを知っているのか？」

神裂「ええ。我々天草式にとって、情報とは命に等しいものですから…。将来、有望な陰陽師だとよく耳にするのですよ」

あーそうか。神裂達（天草式）って日本各地に情報網張ってるからなあ。それに引っかけたのか。

太陰『有望な陰陽師って、そんなのあたり前よ！』

玄武『我々、十二神将の次の主なのだからな。当然だ』

昌彰（そんなに褒められると照れるなあ…）

神将達の言葉に昌彰さんは照れてしまっている。白虎はそんな昌彰さんを見つつ口元で笑っている。

神裂「お互い守るべきがある身…。困った時はいつでも相談してください。力になります」

昌彰「あ、ありがとう」

現代に甦った大和撫子、神裂の微笑みに昌彰さんは恥ずかしそうに握手を交わす。……これはゆらさんに見られたら危なかった光景だな…。

プリプリッ！

昌彰「……メール？」

from【ゆり】

sub【未定】

本文

【なんか嫌な予感したんやけど、浮気してへんよね？】

昌彰「……………」

……メールを読んでから昌彰さんの体が小刻みに震えだしたぞ！？
なんて書いてあったんだ！？

昌彰（ごめんなさいゆらさん！ちょっとだけクラッと来てましたっ
！）

ゆらの直感に、ただ恐怖するしかない昌彰だった。

……しばらく……

スタイル「よし、これで大丈夫なはずだ。動かせるかい？」
オレ「……問題ない。ありがとうスタイル」

スタイル「どういたしまして。さて、これからどうしようか……」

オレの治療も終わり、これからの行動を決める。さっきの闘いで、
奴らの行動が分からなくなってしまったからな。けど、まずオレが
やるべきことは

オレ「悪い。ちょっと電話してくるわ」

神裂「切り札ジョーカーのところですか？」

オレ「いや……。ミアにちょっとな」

多分今頃、心配してくれているだろうからな。なんて言えば、良い
んだろう……。――

あざみ「……零牙くんはどこにいるのっ！――」
同時刻、高等部体育館内で木ノ花あざみは怒っていた。

それもそのはず。体育館で爆破事件が起こったため、『本格推理委員会』を収集したが零牙だけ来ていない。しかも連絡が取れない状況が続いているからである。

ミア「レイ……」

修「あいつ、また行方不明か？」

鈴音「前回と言い今回と言い、零牙くんって私達にも内緒で何やってるんだろっね……」

椎「そうやなあ。ミアちゃんにも言えへん事なんやからなあ。とてつもなくヤバい事なんやないか？」

梢「お姉ちゃんが言つと真実味が増すから止めてほしい……」

菜摘「というかそもそも、零牙くんって謎多いよね。秘密だらけっていうか……」

委員会のメンバーは、今一度『速水零牙』という少年について考えてみる。この学園で誰よりも親しいミアでさえ、零牙がコソコソ何をやっているのか知らないのだ。

ミア（……怪我、してないと良いけど……）

ピリリッ！

一同『！！』

噂をすればなんとやら。ミアの携帯に、零牙からの電話が掛かってきた。ミアはすぐさま通話ボタンを押す。

零牙『……もしもし』

ミア「……レイ？今、どこにいるの？」

零牙『高等部の雑木林の中だ……。あざみ先生、怒ってるか？』

ミア「うん。早く来ないと死んじゃうかもね」

零牙『そうか……。悪いが、オレは行けないと伝えといてくれ』

ミア「……………なんで？」

ミアの声が僅かに震える。さっき見てしまった光景が頭の中に映し出される。

- - 怪我、してないと良いけど…。

零牙『体育館の爆発に巻き込まれて…いや、あれはオレを狙ったんだろうな。仕掛けられた爆弾で危うく死にかけてな…。命に別状はないが、右腕をやられた。しばらく使い物にならない』

ミア「……………」

零牙『どうも奴らの狙いはオレらしい。そっちに行けばみんなに危険が及ぶ可能性があるから、オレは身を潜めて「…………て」- - え？』

ミア「お願い、私の所に来て。危険があるからとかそんなの気にしなくて良いから。顔を見せて…」

ミアは弱々しい声で頼んだ。さつきからもう不安で不安で…心が、限界だった。

零牙『……ゴメン。無理だ。そっちには、まだ行けない』

ミア「……………バカア…！レイの大バカア…！…こんなに…こんなに心配しているのに…！…！帰ってきてよお…！バカア…」

ミアは涙を流しながら、ひたすら『帰ってきて』と零牙に言う。

零牙は『戻る』という言葉をなんとか呑み込んで、もう一度『ゴメン』と言ってから、電話をきった…。

……………

零牙「……………」

オレは携帯を握りつぶすような勢いで握る。また、ミアを泣かせてしまった。そのことが、オレの心を締め上げている。

でも、今は

零牙（今は、立ち止まっている場合じゃない。さっさと奴らをぶっ潰して、ミアに死ぬほど謝ろう…）

奥歯を噛みしめながら、オレはそう思った…。

桜花祭での攻防戦？（後書き）

夢幻「本日、『本格推理委員会』は一周年を迎えました！」

零牙「一周年！？よく続いたなあ…」

夢幻「自分でもそー思う。うんうん」

雅「なんか特別企画とかしないのー？」

夢幻「ん？するよ。この【桜花祭編】が終わったら」

零牙「随分先だな」

夢幻「後半分くらいだよ」

雅「その間、私はレイに会えないんだね…」

夢幻「設定上、仕方のないことだから諦めて？」

「「むう……」」

夢幻「しかし記念すべき一周年。めでたいね！ケーキ食べよ」

雅「あつ！ずるい一人だけ！」

零牙「オレたちにも食わせる！」

夢幻「ふはははー！やなこつたー！」

一年間、この小説を読んでくださった読者の皆様。ありがとうございます！
います！これからも、『本格推理委員会』をよろしくお願いします！

今回は《天地逆転》が『委員会』に接触。そしてミアに再び危機が
- -。

次回をお楽しみに！

桜花祭での攻防戦？（前書き）

約1ヶ月近くの久々の投稿…。

長らくお任せして申し訳ありませんでしたっ！

桜花祭での攻防戦？

修「零牙のやつ…！帰ってきたらタダじゃおかねえっ！」

零牙との通話後、泣いているミアを見た修は事情を聞いた後、今までになかったぐらい激昂した。可愛い義妹を泣かせたという理由もあるが、勝手に別行動しているのも気に入くない。

修「アイツ、ホントにコソコソなにやってるんだ？オレ達になにも言わず一人で勝手に突っ走りやがって…ああもうイライラするっ
！！！」

あざみ「ったくあの子は…！なんでもかんでも一人で背負うなっというのよ全く…！」

隣で話で聞いていたあざみも同じぐらい怒っていた。本気で怒っているあざみは本当に怖い。例えいようのないぐらい怖い。

椎「全く男の風上にも置けんヤツやなあ。ミアちゃんがこんなにも心配しているんやから、顔ぐらい見せなきゃあかんやろ」

梢「そう思う」

修「今回はこっさり一人でなにやってるか話してもらうまで許さねえぞ零牙…！」

さすがに温和な修も今回ばかりは本気で怒っているのか、顔がヤバい事になっている。

元々の悪人面（ジェ ソンぐらい）が、レベルアップしてさらに凶悪化（大魔王ぐらい）し、心臓の弱い方と小さい子は見てはいけな
いほど怖い。

菜摘「あ、あのう修くん？気持ちは分かるんだけど、もう少し冷静
になってくれないかな？鈴ちゃんが怖がっているんだけど…」

ガクガクブルブル
鈴音

菜摘「ね？ねっ？」

菜摘は大魔王（顔だけ）を説得したが、聞く耳を持っていないよう
だ。

菜摘「……ゴメン鈴ちゃん。正直無理」

鈴音「あ、諦めちゃダメ！もう一回話かければ」

菜摘「無理。実は私も…結構ビビってる」

鈴音「ええっ!？」

恐るべし修の顔、百戦錬磨の菜摘を威圧させた。

修「零牙ア…!」

オファニム「あらあら。そんなに怖い顔しちゃって。せっかくの顔が台無しよ？城崎修くん？」

『!?!?』

突然、修の目の前に金と黒のオッドアイの女性が現れた。その人は、優しくほほえむと

オファニム「彼が今なにをしているか…私が教えてあげる」

零牙の秘密が…暴かれる。

ゆら「……迷った」

同時刻、昌彰からミア達の護衛に付くように言われたゆらは、小等部の後者前でそう呟いた。

ゆらの手にはパンフレットが握られているので、迷うはずがないのだが…。

ゆら（たしか、人混みに巻き込まれたと思ったらいつまにかここに来て、有無も言わずいるんな所つれられて…）

つまり、周りに流されたゆらは（というより周りが聞かなかつた）は本来の目的も果たせず、ワタアメ片手にハッと気づいたわけである。なんと間抜けな。

ゆら「うっさい！ だいたい敷地が広すぎるんや！ パンフ見ても場所なんて米粒程度にしか描いてないやないか！」

と一人天空に叫ぶ彼女。周りから異様な視線で見られ始めていることに、彼女は気づいているのだろうか？

ゆら「……！」

視線に耐えられなくなって彼女はそこから駆け足で逃げ出した。なにか、とため言いたそうな顔をしているが、そこはあえて触れないでおこう。

ゆら（後で覚えてれ…作者！）

赤面しながらしばらく走り続ける。すると、やがて人目のつかない場所へきた。いや、人目のつかない場所に来てしまった（……………）。

ゆら「…………あれ？」

これまでもにも考えずに走っていたゆらも、さすがに違和感を覚えたらしい。注意深く、周囲を見渡す彼女に向かって……

ドミニオン（以降ドミ）「……………」

斬刃刀が振り下ろされた。

ゆら「っ！」

が、ゆらもギリギリ後方に跳んで回避。護符を取り出し身構える。

ドミ「ほう。今のをかわしたか。意外とすばしっこい」

ゆら「アンタ誰や!」

ドミ「雑魚にいちいち名乗る名はない」

ドミニオンはそう言い捨てると、超重量の斬刃刀を地面にたたきつける。叩きつけた刀の先端から、斬撃が三方向に飛んでゆらに襲いかかる。

ゆら『守!』

対するゆらは護符をつかって攻撃を防ぐ。そしてすぐさま体勢を立て直し――

ゆら『貪狼!』

日本狼の式神を喚びだし特攻を仕掛ける。貪狼は雄叫びをあげて素早くドミニオンへと駆け出すが

ドミ『水は力を得て姿を変える』

ドミニオンの魔術によって強制的に凝結した無数の氷杭が襲いかかる。貪狼はそれを軽快なステップでさけるものの、わずかながら当

たつてしまい、当たった箇所が凍りついた。

ゆら「貪狼っ！？くっ…！回り込んで攻撃や『武曲！』」

手負いの状態になってしまった貪狼を守るべく、ゆらは落ち武者の式神を喚びだした。さらに自分自身も動いて呪符による援護攻撃も行う。だが…

ドミ『五行相生、木生火』

ドミニオンの魔術も発動しゆらの放つ呪符が全て燃えてしまう。しかし、この間に武曲がドミニオンと距離を詰めて、大上段から刀を振り下ろす。

ズドンッッ！！！！

重量のある武曲の一撃が、地面をえぐる音がした。

ゆら（よし！これで・・・）

勝利を確信したゆらだったが…

ドミ『五行相生、水生木』

ドミニオンは半身ずらしてその攻撃を避けていた。そして離れたゆ

らに土中から攻撃した。

ゆら「かつ…は…」

油断していたゆらに木の杭が直撃し、ゆらは地面に倒れ込んでしま
う。

その隙をドミニオンは容赦なく攻撃する。

ドミニ『五行相生、土生金、木生火』

ゆら「くっ…」

地面から金属の矢、そしてしたの落ち葉から火が吹き出しゆらに襲
いかかる。もうろうとする意識の中、ゆらはなんとか攻撃を避けよ
うと立って走りだす。

ドミニ「残念だな。私は追い討ちをかけて確実に敵を葬るタイプの人
間だ」

ドミニオンは出現している二体の式神を破壊した後、目にも止まら
ない早さで走り、ゆらに接近する。

ドミニ「……死ね」

横薙一閃。空気を裂く音がゆらの耳に届くが、体が言うことを聞かない。

ゆら（……ここで、終わりなんか…？）

ゆらが諦めて目を瞑る。そしてその瞬間、斬刃刀の刃が襲った。

ゆらの体が宙に舞う…と思われたが

ドミニ「……逃げられたか」

ドミニオンは手応えのなさからそう判断した。あの時、あの当たるか当たらないかの瀬戸際の一瞬で、ドミニオンの攻撃を防いだ者がいる。

ドミニオンは斬刃刀を地面に突き刺し、睨みつけるように空を見上げた。

- - - - -

修「……誰だアンタ？なんでオレの名前を知っている？」

オファニム（以降『オフ』）「《天地逆転》のオファニム…と言っ

てもわからないようでしょうね。とりあえず今は『金田るり子』と名乗っておくわ」

菜摘「あなたまさか…!」

鈴音「あの時の…!」

菜摘と鈴音は前回の事件の最後を思い出した。たしか、零牙がるり子に向かって『オフアニム』と言っていたような…。

オフ「やつほう、元気かな雅ちゃん。怪我が治って良かったね」

雅「……ッ!」

椎「アンタ、今更なんでこんな所にノコノコ来たんや?またミアちゃん狙いに来たんか!?!」

椎は怯える雅を背中に隠し、思いっきりオフアニムを睨みつける。

しかし、オフアニムは動じてない。

オフ「まあ、今回は雅ちゃんの容態チェックと……今言ったように零牙君のことを教えによ」

あざみ「なぜ、そんな事をするの？」

オフ「あなたが知りたがってるからよ。知りたいんでしょ？」
『速水零牙』について」

あざみ「そんなことして、あなたに何のメリットがあるの？」

オフ「それは言えないわ。まあでも聞きなさい。彼が今やっていることを」

オファニムは一息ついてから零牙について話し始める - - 嘘偽りない真実を

オフ「彼は今、この桜花祭に来ている人の命をかけて、命懸けの戦いをしているの。ここの爆発事件もそう。これは私の仲間達が起こしたもので目的は彼の抹殺。まあ残念なことに彼は生きているんだけど」

鈴音「なっ…」

オフ「嘘じゃないわよ。以前、雅ちゃんを襲った理由だってそう。全て零牙くんを苦しめるため」

修「アンタ…零牙を苦しめるためだけに、ミアをあんな目に合わせたり二人の人間の命を奪ったのか!？」

オフ「そうよ？」

オフアニメは「それがどうした？」と言わんばかりに返した。

『目的のためなら手段は選ばない』 - 委員会メンバーは、初めてそういう者の - 彼らの『異常性』を、肌で感じ取った。

オフ「この際だから言っちゃうけどね、別に私は雅ちゃんを襲う理由はなかったの。でも、丁度よく零牙君が苦しみそうだったから利用させてもらったの。感謝してるわよ？あなたを傷付ければ、彼が苦しむとわかったから」

菜摘「っ！この人でなし！」

オフ「どうも。でもね、『人でなし』は私たちだけじゃないのよ？」

梢「……どういうこと？」

オフアニメは笑ってさらに話を続ける。この話を聞くことで、ほんのわずかでも委員会が零牙に疑問を持てば - オフアニメの目的は

達成される。

オフ「彼はその類いまれなる戦闘センスで、今までたくさんの人を殺してきたの。イギリス清教……いえ、イギリス王室が特例として認めているから罪には問われないんだけどね」

オフ「アニメは機密情報……というより、表に知られてはならない裏について包み隠さず話す。

零牙が必死に守り続けてきた秘密を、知られてほしくなかったことを、残酷なまでに暴露する。

オフ「いくら罪には問われないからと言っても、彼がしてきたことは決して許されることじゃない。

一人の人間を殺すのに……戦う意志がなくともためらわずに、被害者の仲間や恋人さえ巧みに利用して、いかに残酷な手段を用いても目的を成し遂げる……それが『速水零牙』なのよ。わかるかしら？ あなた達が知らないだけで……本当の彼は罪深い。罰を受けなければならぬ人なのよ

私達は、そんな彼に殺された人を大切に思っていた人からの想いを聞いて行動してるの。『復讐してほしい』っていう想いに応えるためにね……!!」

もう一度言うが、オフアニムが言ったことは全て真実だ。零牙が背負うべき業、零牙が受けるべき罰を、《天地逆転》は執行しようとしている。

彼らは今まで、零牙やその周りの人々を危険な目に遭わせた。

だから『悪』なのか？

彼らにとっては、これは当然の報いなのだ。

この真実をしって、メンバー全員に零牙に対するわずかな、不信が生まれた。拭い去れない不安にも感情――

そんな不安に駆られながらも、ミアはオフアニムに恐る恐る聞いた。

ミア「……そこまで、そこまでレイを恨んでいて、殺したいって思っている、殺さないのはなぜ……？」

椎「ミアちゃん……」

雅「私を捕まえて、レイをおびき寄せれば、あなた達の目的は達成される。それなのに、なんで？」

ミア自身、恐ろしいことを聞いていると思っっている。現に、椎の服を握っている左手は震えていて、今すぐにも泣き出してしまいうな表情だ。

オフ「そうね…。私達としてもそうしたいのはやまやまんだけどね。彼だけが持っている才能や技、能力にはまだ利用価値があるのよ。それを欲しがってる組織が高い懸賞金を懸けていてね。だから殺せないのよ」

それはあまりにも身勝手に横暴で、むごい理由だった。零牙の扱いの悪さにメンバーは皆、絶句している。

オフ「……もう一度、彼についてよく考えて。頭の良いあなた達なら、『天地逆転（私達）』と『速水零牙（彼）』、どちらが『悪』か、分かるわよね？」

そういうと、オフアニメは静かに体育館を出た。メンバーは、今知った事実の内容に衝撃を受けすぎていて、オフアニメを捕まえる気すら出なかった。

少しずつ、『天地逆転』の魔の手は広がっていく……

続く。

桜花祭での攻防戦？（前書き）

久々の更新です。

次回はテストが終わってからだな…

桜花祭での攻防戦？

- 力を貸してほしい。

オレがああバカ共に復讐しよう準備をしているとき、一人の男がそう言った。

その男には、どうしても成し遂げたいことがあった。どうしても成し得なければならぬ理由があった。

オレはその男の目的に共感した。だから協力することにした。

- あの少年は、幼いながらにして罪を犯しすぎている。

穢れは祓う。罪人は罰する。悪は - 滅する。

工藤「……勝手に他人の幸せを奪っておいて、自分だけ幸せになるうとなんかさせるかよ」

そうだ。オレはそんな罪人には - 決して負けない。

.....

零牙「・・・これで10本目！」

ガッ、キイン…

零牙「はあ、はあ、はあ…」

昌彰「お疲れ零牙。少し休むか？」

零牙「いえ…。次のポイントに行きましょう。時間が惜しい」

その時、零牙は例の五寸釘の破壊を行っていた。

次の行動を決めようと考える直前で、また土御門から連絡があったのだ。内容は、術式の発動方法。

この術は、木ノ花学園中にある鉄釘のどれでも発動出来るようになってるらしい。

各釘には特殊なラインが繋がれていて、一カ所発動すればそれに繋がっている他の釘も誘発されて発動。最終的には全ての釘の術が発動し、木ノ花学園内にいる全ての人間の『魂』と『肉体』が強制的に分離、つまりは死んでしまう。

土御門曰わく、『イメージ的にはインターネットを思い浮かべると良いにゃー』だそうだ。

だから、零牙は少しでも釘を壊しておこうと決めたのだが…。

零牙「敵もご丁寧^{プロテクト}にやってるものだ。まさか一つ一つの釘に強力な防壁をかけてあるとはね」

昌彰「釘自体は術で隠されているのではなく、見つけにくいだけなんだかな。オレや勾陣の力まで弾くなんて…」

朱雀「勾陣の力をも弾くとなると、騰蛇ならどうなるんだろうな」

白虎「止めておけ。ついでに森が火事になる」

十二神将の朱雀と白虎は、あの最強にして最凶の神将を思い出す。あの炎にかかれば、ほぼ確実に一撃で破壊出来るだろうが…

零牙「……いない人の話しても仕方がないでしょう？それより次の場所へ《ピリリリッ》……電話？」

息を整えた零牙が歩こうとすると電話が掛かってきた。電話の相手は、今神裂と別行動をとっているステイルからだ。「何があった？」と零牙は思う。

零牙「もしもし？どうしたステイル？」

ステイル『零牙、今すぐ表に出るんだ！来場客の様子がおかしい…』

零牙「はあ？いったいどうし《ツーツーツ》……なにが起こったんだ？」

ステイルのあの慌てよう。零牙は直感的に見過ごしてはいけなさと感じた…。当たって欲しくない、この胸のざわめきは…

六合『大変だ昌彰』

昌彰「六合」

昌彰のそばに、黄褐色の瞳をした神将が現れた。

十二神将、『木将』六合である

六合『来場者の中に暴徒が出てきた。……だが、ただの暴徒じゃないよっだ』

昌彰「暴徒？すまん六合、もう少し説明して…」

昌彰が最後まで言い切る前に、零牙は表に向かって走り出した。

昌彰「ちよつ、零牙!？」

白虎「……」

朱雀「白虎、いきなり黙ったりして、どうした？」

白虎「いや…六合が来てから、さっきまで感じていた空気が急に澱んできているのが感じられてな…。オレ達も彼を追いかけたほうが良さそうだ」

風を司る神将、白虎は顔をしかめてそう言った。普段なら「風読み」をして詳細を知るのだが、今回はそれをせすとも伝わってくる。

零牙に向けられる、異常な悪意が。

昌彰「……とにかく零牙を追いかけよう。オレ達も表の状況を知るべきだ」

朱雀「わかった」

昌彰達が走って、全力疾走で走り去った零牙の下に行くと、零牙は表の光景を見ながら呆然と立っていた。

零牙「なんなんだ…これ…」

オレ達の目に映ったのは辺り構わず暴れまわっている来場者の姿だった。

普通に考えればこれはただの《暴徒》で済まされる。けど、オレの目には違って見えた。

零牙「もがいてる…？何かに苦しめられて、もがき苦しんでるようだ…」

白虎「そうだな。まさしくそう表現するのが正しい」

目の前の男性は、奇声を上げながら周りの人に襲いかかったりしている…。

だけど、ただの暴徒なら普通は奇声なんか発するだろうか？むしろ《怒り》という感情が感じられるはずなのに、目の前の男性にはそれが感じられない。

零牙「奴らの魔術で、強制的に暴れさせられてるのか…くそ！」

六合「どうする？このままでは、周りの人間に被害が出るかも知れないぞ」

零牙「……………くそっ！」

オレは悪態を尽きながら男の前へ躍り出た。

……………

その頃、零牙から『切り札』と呼ばれている人物は…。

「……………よし、準備OK。あとは相手が発動するのを待つだけ」

一人、雑木林の中で《本命》用の迎撃術式を発動させていた。

今まで出番がないように見えて、意外とちゃんとやっていたのだ。

土御門『……………しかし、よくもまーやるもんだにゃー』

切り札の正体を知った土御門はのんびりとした口調で話しかける。
電話の向こうで、彼はきつと笑ってる。

「なにがですか？」

土御門『いや、お前には魔術の才能がないとばかり思ってたからにゃー。まさかここまでやるとは思ってなかったんですわ』

「今でもそうですよ。私はあなたみたいに才能なんてない。ただひたすら頑張っつて、一つのことを磨いてきただけ……」

土御門『それにしても、だにゃー。全く、零牙のやつがこんな隠し玉を持つてるとはにゃー。隠したりしないでさっさと戦力に加えれば良いものを』

「……」

土御門『とにかく、オレが手伝えるのはここまでだ。あとはお前に任せるぜーい』

切り札は土御門との電話を切った。携帯を見れば、もう15時になる。

切り札は空を見上げて呟いた。

「……これ以上、好きにはさせない。ここからは……」

反撃の時間だ。

- - - - -

あざみ「もう、なにがどうなってるのよー！」

あざみは体育館を出た後、走りながらそう叫んだ。

オフアニムが来たあと、予告通りまた異常事態が発生した。

突然、来場者の数人がいきなり苦しみだして暴れだして暴徒と化しているらしい。すぐさま教師が対応し、鎮圧に向かったのだが…

あざみ「いったいなにが起こってるのよ…」

現場の教師によると、暴徒となっているものは、感情つんぬんで暴れているのではなく、無意識に暴れているらしい。

あざみは保険医でもあるが原因がわからない。

ショック症状でそういう事があつたりもする。だが、学校でしかも同時に起こるなんてことは『ない』に等しい。

理解不能な現象が今まさに起こっていた。

あざみ「零牙くんといい、さっきの女といい、私の学校でなに勝手なことをしているのかしら…?」

あざみは別に、零牙がどう行動しようが知ったことではない。それは個人の自由であり、零牙自身が選んだことだ。

だが、そのせいで雅が泣いている。小中高関係なく、誰もが笑って楽しい桜花祭を作りたかった。ただそれだけなのに。

あざみ「私の野望を壊してくれたからには、それ相応の報いは受けてもらうわよ」

あざみがそう呟いた瞬間、前から何かを殴った鈍い音が聞こえた。もしやと思っただけでそちらを見ると――

零牙「あざみ先生！」

あざみ「零牙くん!?!」

渦中の零牙があざみの前に現れた。零牙は刀を納めると、あざみの近くまで駆け寄り急かすように聞いてきた。

あざみ「零牙くん?!?!今の今までいっただいなにやってたの!」

零牙「説教なら後で!とりあえず今は暴徒の方をなんとかしましょう!」

あざみ「…っ！高等部の体育館にみんないるわ。一緒に来てちょうだい！」

零牙「はい！」

あざみは零牙に峰打ちをくれられて気絶している男を担いで体育館へ戻った。

あざみ「みんなは一階の事務室よ。こっちは大丈夫だから先に行つて！」

零牙「わかりました！」

零牙が見た体育館の中は、ベットの上で暴れ狂う人が20人ほどいた。全員正気を失っているのか、訳の分からない叫びをあげている…。あざみは連れてきた男をベットに寝かせて拘束具をつける。こつでもしないと、危険でしょうがないようだ。

零牙「ミア！先輩！」

『レイ（零牙）！！？』

零牙が事務室に入った瞬間、メンバー全員が驚いてイスから立ち上がった。ミアに限っては、驚きすぎて困ったような表情をしている。

ミア「レ、レイ。なんで「」に…」

零牙「状況が変わってな。こつちのことも知らないとまずくなつた」

修「どういうことだ？」

零牙「あの後追跡してはいるものの、奴らを見つけれないんです。オレやステイルがあつちこつち探しているんですが、状況は悪化してきて…」

梢「悪化？」

零牙「どうも奴ら、また爆弾を仕掛けているようなんです。イギリスの間組織で開発されたものを…」

うまく魔術に触れないように注意しながら、零牙は今の状況を伝える。あながち嘘でもない上、ポーカーフェイスには自信のある零牙は『ごまかせる』と思っていた。

椎「……………」

そんな零牙を椎は黙って聞いていた。さっき『オフアニム』の言ったことが頭にこびりついていて、零牙の言葉を怪しんでいるのだ。

今の状況の、真実を知ろうと。

マユ「(ドタドタ...) お兄ちゃん！」

菜摘「マユちゃん！今までどこにいたの？いきなり居なくなっただから、心配してちよっと探しちゃったよ」

鈴音はオフアニムが来る前に菜摘が「マユちゃんどこ？ハアハア...」と、マユを探していたことを思い出した。この場合、`心配して`と言えるのだろうか。

マユ「なんか、みなさん事件で忙しそうだったから、杏子さんと一緒に回って...。お兄ちゃんの姿が見えたからここに来たんです」

ミア「杏子といたんだ」

椎「なるほどなあ。私はてっきり嫌われたのかと思っただわ。良かった」

修「...むしろロリコンを好きになる幼女って、いなくないか？」

鈴音「ま、まあとにかく、無事で良かった」

椎のズレた発言にツッコミを入れつつも、マユのおかげでいつも通りな空気へ戻る。

一方、出鼻を挫かれた上に真剣な空気を根こそぎ義妹に壊された零牙は、「オホン！」と咳払いをして話を続ける。

零牙「……話を戻しますが、今のところ学園ないに現れた暴徒は何人ほどですか？

鈴音「30人ぐらいだよ。でも、学校の先生が対処しているから大丈夫」

零牙「そうか……」

ミア「どうするのレイ？このままじゃマズいよ」

零牙「……」

マズいのは零牙もわかっている。奴らは一般人にまで魔術を使ってきた。これ以上後手に回れば確実に負ける。

零牙（どうする……どうすればいい？）

せめて、奴らの《本命》さえ潰せれば……

マユ「(グイグイ) ねえお兄ちゃん」

零牙「なんだマユ？」

マユ「焦っているのもわかるけどさ、もうちょっと冷静になってよ。お兄ちゃんらしく、ドーンとみんなが驚くような方法を考えて！」

零牙「あのなあマユ、だから今考え……」

言いかけて止まった。`ドーンと？` `みんなが驚くような？`

考える。今やるべき最低限のことを。それをするべきために必要な行動を。

零牙「最低限……、最低限奴らをおびき寄せて集めさえすれば……」

修「ブツブツ呟いて……どうした零牙？」

- 楽しそうだな

ヴァーグが笑っていると、突然頭の中に聞き慣れた声が聞こえてきた。相手は本命の準備をしているパワーズだ。

ヴァーグ「パワーズか。ああ楽しいよ。これでオレ達は完膚無きまでに速水零牙に勝ったのだから」

- そうだな。私のほうもついさっき終わった。これでいつでも動ける

ヴァーグ「そうか。よし、じゃあ早速勝利宣言でもするか」

ヴァーグの計画では来場者や生徒の命と零牙自身の投降を取り引きする予定だ。

なによりも他人が傷つくのが嫌いな零牙はこの取引に乗ってくるはず - そう読んでいた。

読んでいた、はずだった（……………）。

あざみ『ピンポンパンポーン』

学校の各所に備え付けられたスピーカーに声が入る。声の主はこの理事長、木ノ花あざみ。今更なにをしようというのか。

- - なんだ？

ヴァーグ「さあな。みつともなく悪あがき何じゃないか？」

ヴァーグは「気にすることでもない」と校門の方に歩き始めた。だが

あざみ『ご来場のお客様、および生徒に連絡します。これから理事長主催の宝探しを始めます』

ヴァーグ「なんだ。もうすぐみんな死んじゃうのに、呑気だなあ」

あざみ『ルールは簡単！この木ノ花学園中にある文字の刻まれた釘を私の元を持つてくること』

ヴァーグ「……！？」

あざみ『期限は16時まで！見つけた方には賞金が出るわ。みんな

たくさん見つけて、いっぱい私の所に持ってきてね!』

そこで放送がきれた。そして頭に響くパワーズの声に異変が起こった。

- 大変だヴァーグ。我々の仕掛けた釘がどんどん抜かれている。

ヴァーグ「……っ! 速水零牙か……っ!」

考えたものだ。今からすべての釘を破壊するのは不可能。しかし釘さえ抜けば発動を遅らせることはできる。その作業を「イベント」と称して一般人に任せたのだ。

ふつつの学校なら、こんなことはみんなめんどくさがってやらないだろう。

しかし、ここは天下の『木ノ花グループ』の経営する『木ノ花学園』。世界の半分は掌握したとされる大企業。その吉社長が直々に賞金を出すと言ったのだ。

本当か嘘かはわからない。

けど人は、「あるかもしれない」と思っただけでそれを根拠に行動できる。そして、一人行動すればつられてさらに多くの人がやり始

める。

人の心理を利用した作戦。

こんな作戦を思いつくのは、速水零牙あいつぐらいだ。

ヴァーグ「…っ。あのクソガキめ…」

…どうするヴァーグ？

ヴァーグ「今すぐ工藤真と合流して体勢を立て直す。なに、今ならまだどうにかできる！」

…なら、すぐに会おう。そばの林の中にいる。

ヴァーグ「わかった」

ヴァーグはパワーズのもとに移動する。運良く工藤真とも同時に合流でき、すぐさま話しをしようとするが…

零牙「よお…。会いたかったぜ天地逆転」

ちょうどヴァーグが北方向の反対…林の奥から三人の魔術師と一人の陰陽師が現れた。

その中のひとりの少年は、抜刀した刀を突きつけて宣言する。

零牙「もうこれ以上は好きにさせねえ。もうこれ以上、オレ達の桜花祭は邪魔させねえ！」

負けられない闘いが始まる。

もう一度、あの場所へ帰るために。

例え、その手を地で濡らしても勝たなくてはいけない……

桜花祭での攻防戦？（前書き）

11月27日再編集。

桜花祭での攻防戦？

スタイル「……一応聞いておくけど、降参する気はないのかい？ 今ならまだ間に合うよ？」

スタイルはたばこの煙を吐き出しつつそう問う。戦力差は四対三。単純に考えてこちらが有利だ。だが、

ヴァーグ「降参なんてするかよ。最後に勝つのはオレ達だ」

スタイル「そうかい。じゃ早速……死んでもらおうか。『Fort
iss931』」

スタイルはくわえていたたばこを放り投げるその軌跡ラインに沿ってオレンジ色の炎が生まれる。

スタイル「『炎よ……巨人に苦痛の贈り物を』！」

轟ッ！とスタイルが生み出した炎剣は敵に向かって一直線に叩きつけられた。その直後、炎剣が爆発して三人を包み込んだ。

零牙「……相変わらず容赦ないなあお前」

ステイル「容赦なんて、僕らの世界に必要なだったかな？」

昌彰「まさか、これで終わりってわけには」

パワーズ「いかないよ」

ステイルの炎の中から、防御結界で全員を守ったパワーズがにやつと笑いながら話しかける。そして、すぐさま別の術式の起動準備に取りかかった。

昌彰（……なにか、くる）

昌彰は直感で、それを感じとり懐から札を取り出して妨害しようと試みる。が、真言を唱え始めたときに、土中から五匹の銀狼が躍り掛かってきた。

零牙「しまった!」

昌彰『望める兵、戦つ者、皆陣破れて前にあり!』

すぐさま狼を蹴散らした昌彰だったが、その間に術式は発動してしまふ。パワーズが一言唱えると、零牙と神裂き工藤の周りに六角形の形をした結界が生まれ、そして三人は姿を消した。

神裂「！！転送魔術……」

ステイル「神裂！……くそっ、やられた」

ヴァーグ「さあて、これで二対二。戦力差は…あるな。こっちは銀狼こいつらがいる」

ヴァーグは口笛を吹くと、ステイルと昌彰を囲むように銀狼が現れた。その数、約三十匹。

青龍「ふん……」

勾陣「ただか狼をつくりだせるだけで、ずいぶん強気だな」

太陰「全部まとめてぶっ飛ばしてあげるわっ！」

それに合わせて十二神将が姿を現す。武器を持つ青龍、勾陣、六合、朱雀は各々の武器を手にとって構える。

ステイル「……おい、昌彰とか言ってたな」

昌彰「なんですか？」

ステイル「ここから先は人殺しの世界だ。君は、人を殺す覚悟があるのか？」

昌彰「ありません。元より、殺しなんてする気はない」

ステイル「ふうん。なら、せめて足手まといにはなるなよ」

昌彰「そつちこそ」

ここに、異色コンビが結成された。

.....

零牙「……ッ！くそつ、やられた！」

一方、パワーズの転送魔術によってステイル達とは離れた場所にとばされた零牙は……

工藤「どうやら、契約通り一対一でやらせてくれるらしいな」

同じようにしてとばされた工藤真と向かい合うようにされていた。周囲の雰囲気からして、場所は木ノ花学園らしいが結界が張ってあるのか、人の気配がない。

工藤「さて、もうここまで来たら小細工なんてナシだ。全力でお前を滅させてもらう」

工藤は薙刀と符をいくつか取り出して、上着の上に白い狩衣を着て身構える。あの白い狩衣には見覚えがある。

零牙「お前…花開院家の人間か!？」

工藤「残念なことに元だ。オレはそのある流派に弟子入りしてたんだが、上役の連中の策略で破門された」

零牙「なるほど。名のある陰陽一族の花開院家なら、安倍晴明の術式について詳しく調べてあってもおかしくはない…。」

工藤「そういうことだ。・・・さて、昔話をする気は元からない。お前を倒す」

工藤が柄を握っている手の力をさらに加えると、工藤の薙刀が生き物のように蠢き、工藤の右腕を取り込んでおぞましい妖刀となった。青紫色をした柄の部分は工藤の憎悪に呼応するかの如く、毒々しい色合いを強めていく。

零牙「禍々しいなそれ…本当に陰陽の術か？」

工藤「答える気はない」

零牙「そうか。ま、オレのやるべきことは最初から決まってるんだけど」

対する零牙は逆刃刀を構えて工藤を見据える。

- - 瞬間、零牙は開いていた間合いを零にして右足を軸に回転し加速をつけていた。

零牙「飛天御剣流 - 龍巻閃！」

そして右薙一閃。工藤の胴に逆刃刀の峰を叩きつける。息もしないの間に起こった出来事は、工藤が反応するよりも早くその体をぶっ飛ばした。

零牙「悪いけど、オレもみんなを守りたい…だから、お前を斬る」

工藤「やれるものならやってみろ！」

零牙『hopliss666（我が存在が人々の希望とならんことを）

』

闘いの火蓋が切って落とされた。

- - - - -

ミア「……成功したのかな？これは……」

鈴音「うん……。多分ね……」

その頃、表の方では、来場客が目の色を変えて雑木林の中を歩き回っていた。それを冷静に傍観しているのは、我らが本格推理委員会メンバー。

今は全員、どこか思いつめた表情をしている。

菜摘「ねえ……。どうするのミアちゃん。これから……」

ミア「どうしようかな……。わかんないや……」

梢「結局、あの女性の言うことは本当だったのかな」

修「違うって言いたいが、今アイツが戦っているって考えると…」

鈴音「考えれば、私達って零牙君のこと全然知らないよね。聞いても上手くはぐらかされるし…」

オファニムの言った言葉を信じたくない。けれど否定できる材料がない。零牙が、今まで自分のことを隠してきたから。

零牙を信じたい。けど、零牙が本心でなにを感じているのかわからない。仲間だっと思ってても、零牙はそうじゃないかもしれない。

ミア「どうすればいいんだろ…」

椎「なんやなんや？みんな辛気くさい顔して…暗いわぁ」

全員、暗くなっているところに購買でシュークリームを買っていた椎が戻ってきた。大あくびをして、今にも眠ってしまいそうである。

修「椎、あのな今は「零牙君は悪い子やない」…は？」

椎「零牙君は悪い子やない。断言する」

鈴音「……どうして、そう思うのかな？」

椎のきつぱりとした発言に鈴音は理由を聞いてみた。椎は「んー」とおさげ髪をいじって考える。

椎「もし、零牙君があの子の言うとおりになんやしたら……まあ、そうなんやろ。私らは零牙君のことよう知らんし、違うって言えることは出来へん」

鈴音「……うん」

椎「けどなあ、これだけは確かやと思うんや。零牙君は私らの為に戦ってるんやって」

全員、いつの間にかマヌケ面をしている椎の方を向いていた。椎はおさげ髪をいじりながらのんびりと、しかしはつきりとした口調で言う。

椎「私ら、零牙君と出会って半年も経ってないけど……。けど、私らが零牙君を大切に思ってるように、零牙君も私らのことを大切に思うんや。それだけは、信じられると思うとる」

修「……その言葉の根拠はなんだ、椎」

椎「直感や。上手いこと、思いつかれへんからなあ」

椎ははつきりそう言いきった。おさげをいじるのを止め、にかつと笑って締めくくった。

椎「だから、今は信じて待つ。絶対零牙君はかえってくるってな。な？そう思うやろミアちゃん？」

ミア「……うん！」

ミアは深く頷いた。こんな単純なこともわからなくなっていた。零牙を疑う前に、まずは信じることが大切だった。結論を出すのは、零牙が戻ってきてからでも遅くはない。

彼らは零牙が早く帰ってくるように祈った。

そして、零牙の方は…

工藤「ハアアアッ！」

零牙「……くっ！」

ガキン!!! - 闘いが始まってから、何度も交えた刃と刃が再び重なる。零牙の逆刃刀に対する工藤の薙刀は、通常のものよりやや大きく、刀身は70センチ、柄は1メートル以上はあるため、全長は2メートルある。

……が問題なのは大きさじゃない。先ほどから、工藤の右半身を取り込み形を変えて攻撃してくる柄の方だった。

いくら『感情の読み取り』によって工藤本人の攻撃は予測出来ても、右肩から生えた全く別の動きをする蜘蛛の足のような触手は予測出来ない。

零牙はそれをライフルを扱うことで撃ち落とし、回避していたがこれでは意味がない。

零牙「いったい何なんだその薙刀は!？」

工藤「教えてやる必要はない! 『爆ッ!』」

工藤の術が襲いかかってくるもどうにか避ける。が、工藤と触手が同時に攻撃してきたため、龍巻閃で身を守る。

零牙（昌彰さんに退魔の力付けてもらわなかったら死んでたな…コ

レ)

改めて昌彰に感謝しつつ、零牙は目の前の敵に集中する。あの薙刀はなにかしらの陰陽術を……いや、妖怪とか魔物とかの力で強化していることは分かった。言ってしまうえば、自分だってそういう存在なのだから似たような物があってもおかしくはない。

だが一つだけ解せないことがある。

それは、どうみても工藤真があの薙刀を制御しきれてないことだ。刀は時間と共にどんどん工藤の体を異形へと変えていく。

…所有者を食べているみたいだ。と零牙は思う。

工藤「う…ぐあ…。まだ…まだ…ッ！」

侵食によって息が切れている工藤は、そこでさらに薙刀に体を食わせる。そうすると、さらに化け物じみた体になったが工藤の霊力が膨れ上がった。

零牙「お、おい、それ以上やったら戻れなくなるぞ！」

工藤「うるさいー！」

工藤が再び突進してきた。侵食されるたびに強化される工藤の身体だが、零牙は一度跳んでその攻撃を回避してそのまま龍追閃を決める。しかし、またもや触手が不意打ちをかけてきたため、それをラィフルで撃って対処する。

零牙（ヤバい……。元々銃器は弾を補充するたびにオレの魔力を消費するから燃費が悪い！このままじゃ魔力が切れる……）

ついでに『肉体強化』も使うとさらに魔力の消費は激しい。しかし、片方だけでも敵にとっては十分脅威にはなるのだが。

工藤「死ねッ！」

零牙「（魔力が切れる前に……とどめをさす！）飛天御剣流……龍卷閃、旋ッ！」

密着状態で左に振ってきた薙刀を半身ずらして避け、一撃たたき込む。まだ人間の部分への攻撃は効いたのか、工藤の体がよろめいた。

零牙「龍卷閃、木枯らし、嵐ッ！……九頭龍閃ッ！！」

間を空けずにさらに二撃。そして少し距離をとってからトドメの九頭龍閃。常人なら間違はなく倒れる連続技。それをもろにくらった工藤は四メートルほど吹っ飛んだ。もう、起きあがることは出来な
いはずだ。

工藤「ぐっ…っう…」

零牙「諦める。もう立つことも出来ないはずだ」

そう言う零牙も疲労が激しく、気力で持たせてる部分が多い。気を抜けば倒れてしまいそうだ。

工藤「が…ああ…」

零牙「この期に及んでまだ戦う気か！いい加減…！？」

工藤「あああああっ！が…は、ああああっ！」

急に工藤が叫び声を上げて立ち上がった。刀に意識を奪われたのか、目の焦点が合っていない…、呑み込まれた（…）のだろう。それでもブツブツ、呪詛のように言葉に吐き続ける。

工藤「勝つ…絶対勝つ…。滅する…魔を滅する…」

零牙「呑まれたか…。そこまでして勝ちたいとはな。ある意味すごいよ。アンタ」

恐らく目の前の工藤に意識はもうほとんどないだろう。中途半端に使った術式は、完全に工藤の体を取り込んで殺すだろう。

そして工藤自身もこれ以上戦えば死ぬ。体の侵食によって『薙刀』

と『工藤真の命』完全に同調すれば、薙刀が折れた瞬間に工藤ら死ぬ。

零牙「時間的にも、もって一撃か……。なら」

零牙は逆刃刀を鞘に収めて居合い抜きルンフェルの構えになる。それと同時に『肉体強化』を発動。白い髪は黒く、瞳は鬼灯のように紅く染まる。

工藤も零牙の纏う雰囲気が変化した事に気づき、臨戦態勢になる。

よく切れる刃のような殺気を出した零牙は、工藤との間合いを計る。

零牙「身構えておけよ……。でないと、死ぬからな」

……そして地面を強く蹴る。正真正銘、普段零牙が出し切れない神速の剣術はこの状態でのみ真の力を発揮する。

『神速』で間合いを詰めた零牙は、その勢いを殺すことなく、まず右足を踏み込む。

零牙（飛天御剣流……奥義）

……そして、剣を抜いた刹那の瞬間に、さらに左足を踏み込む（……）。

零牙「あまかけるりゅうのひびめき天翔龍閃!!」

九頭龍閃を超えた飛天御剣流の奥義、さらには神速を超えた『超神速』の一撃は逆刃刀であっても相手を死亡出来るほどの威力をもつ。

〃 奥義 はいとも容易く工藤の薙刀を壊し、工藤の体に深々と傷を付け、 - - 最後に昌彰によって付与された退魔の力が働き、汚れた魔の力が浄化されて工藤の体が元に戻る。

破壊された薙刀は - - 工藤の憎悪の念ごと、真っ二つにおれていた。

- - - - -

……そしてスタイルと昌彰の異色コンビは……。

昌彰『臨める兵 闘う者、皆陣列れて前に在り!』

スタイル「炎に焼かれろっ!」

ヴァーグ「ぐっ……」

意外と優勢だった。ヴァーグが使う二丁拳銃の弾や魔術をスタイルの炎が対処し、反対に昌彰の術がヴァーグを襲う。

ヴァーグ「くそっ…！狼共、喰い殺せっ！」

朱雀「させるか！」

青龍「剛碎波！」

ヴァーグはさらに銀狼や蛇などの生物を出すも、神将達がそれらを倒す。その間にも昌彰は術で、ステイルは炎剣で絶えず攻撃する。

ヴァーグ「……パワーズ！まだか！？」

パワーズ「もう少しだ。待ってる」

昌彰「（何かされる前に倒さないと…！）」放たる風、さながら白刃のごとく！」

ヴァーグ「しまっ…」

ヴァーグが気を逸らした隙に昌彰がパワーズにも術をぶつけるが、その術はパワーズの張った防御結界に阻まれる。

昌彰「くっっ！」

パワーズ「……ヴァーグ、準備OKだ！すぐに逃げる）……………
（ぞー！）」

ヴァーグ「やっとか！」

ヴァーグは昌彰とステイルの猛攻からなんとかして逃げると、拳銃で牽制しつつパワーズの隣まで逃げる。

ステイル「逃がすか！」

それをステイルが炎剣を投げつけて阻止しようとする。が、その炎剣も防御魔術によって防がれてしまう。

パワーズ「悪いが、この魔術は壊せないようにしてあるんでな！大人しく諦めろ！」

ステイル「生憎、諦めは悪いほうなん…だよ！」

更に炎剣を作り出して防御魔術を破壊しようとして剣を振る。しかしいくら攻撃しても壊せそうにない。

ステイル「ッ…！この…」

勾陣『加勢する』

ステイル「すまない！ハアアアツ！」

劣勢とみた勾陣が、昌彰と入れ替わる形で結界の破壊の入る。得物の二振りの筆架ひっかま叉またに通力がほとばしり、少しずつだが結界が揺らいでいく。

ステイル「終わりだ――」灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字
『！』

最後に二振りの炎剣が爆発し、パワーズの結界が破れた。破れた瞬間に勾陣がヴァーグを抑え、ステイルは炎剣をパワーズの喉元に突き付ける。

勾陣『動くなよ。動けば死ぬ』

ヴァーグ「乱暴な扱いだなあ。少し優しく出来ない？」

勾陣『断る。敵に情けを掛けるほど、私は情に厚くないのでな』

ステイル「そのままソイツを抑えてくれ。僕はコイツに【本命】を解除させる」

パワーズ「ふむ…。この危機的状況で逆らえば間違いなく私は死ぬ

だろうな」

ステイル「わかっているなら早く「ただし」……なんだ？」

パワーズ「ただし、もう私が動くことも、何をする事もないのだがな」

- - 元々魔術の発動には、ある一定の行動を取ることが多い。それは術式に対する安全装置も兼ねているからだ。

『魔術で結果が破壊される』

- - それが、【本命】を発動させるための『鍵』だったのだ。

ゴゴゴゴゴゴッ！！！！

突然、地響きがなって体の力が抜けた。地面に倒れ込み、もう一度立ち上がるうとしても力が入らない。

ステイル「!?!?!?」

持っていた炎剣がいきなり消え、力の入らなくなったステイルはなにが起こったのか理解出来ない。理解出来るのは、何かの魔術が発

動されたということだけ。

ステイル「ぐう……。これって……」

勾陣「!?いきなりどうした!?!」

パワーズ「我々の本命が発動したのさ」

ヴァーグ「そうだよ。魂に関する術式だからね。きっと生命^{マナ}力も不安定になって魔力を精製出来なくなってるんだろ。ほら、君の主も苦しそうだよ?」

勾陣「ッ!昌彰!」

勾陣が見る、その先には――

――

昌彰「う……ぐ……!」

青龍「大丈夫か昌彰!」

昌彰「なん……とか……」

増殖し続ける狼達を一掃するために勾陣と入れ替わりにはいった昌彰は、【本命】の影響を受けてうずくまっていた。

元々【離魂術】は肉体と魂を切り離す術。魂とは魔力や霊力の源となる部分なので、それが不安定になっている今、昌彰とステイルは魔力や霊力が殆どない。ゆえに魔術や陰陽術がつかえない。

昌彰（このままじゃ確実に死ぬ。まだ神将達みんなが抑えてくれる今のうちにどうにかしないと…）

だが、何も昌彰はこれから【本命】を破壊しようとしているのではない。

本来の予定は零牙の『切り札』ジョーカーの仕掛けた術が【本命】を無力化するはずなのだ。それが、なんらかの理由で滞っている。

昌彰はそれを解消しようとしているのだ。

昌彰（術に干渉して原因を探れば…どうにかなるか？）

意識が朦朧としている中、必死に精神を研ぎ澄まし原因を探ろうとする。

……しかし

昌彰「……が、あああああつ！」

太陰「昌彰!？」

昌彰「ぐ……がああ……。頭が……割れる……!ぐ……!」

昌彰の頭に強烈な負の思念が流れ込んできた。

それも個人ではなく、何十人、何百人という数の負の感情。ガンガンの頭の中が響いている昌彰は、遠くなりそうな意識を必死で堪えて分析する。

昌彰（原因は……あの怨念に……違う。ここまで強烈なのは……始めだが……とにかく……被わないと……いけない）

何百人分の負の感情を被うということは、並大抵では出来ない。技術はともかく、霊力がない今、下手をすれば死んでしまう。

太陰「……!?なに、このおぞましく澱んだ怨念……!強すぎる……!」

朱雀「太陰、昌彰を頼む!空気が澱んでから、急にこいつら強くな

りやがった!』

青龍『剛碎波!』

六合『しっ!』

十二神将たちも異変に気づいたらしい。澱み澱んだ怨念は、暗く冷たい陰の力を狼達に授ける。

おそらく一般人も、勘のいい人はこの異常に気づき始めている。やるならなるべく早くしなければならぬ。

昌彰「……太陰」

太陰『な、なに昌彰?どうかした?』

昌彰「これから…ちょっと、無理をする…。後のことは頼んだ…」

太陰『え?ええっ!?!?』

『無理をする』と宣言した昌彰は、使えるだけの靈力を限界まで使用し呪文を唱える。

昌彰『この手は我が手にあらず、この息は我が息にあらず、この声は我が声にあらず…！』

昌彰は柏手を打つ。呪詛払いには本来、結界を張る必要があるのだが、今回はその必要がない。この魔術に結界が利用しているためそれを利用すればいい。

昌彰『全ては高天原におわす神の手、神の息、神の声…！』

昌彰の皮膚がブシュツ！と音をたてて避ける。不安定な状態の霊力が暴走しかけているのだ。

体が悲鳴を上げている。これ以上続ければ、どうなるかわからない。

『布都之御霊、十握剣、無上行神！』

それでも昌彰は唱え続けた。狙うは何十、何百と折り重なった零牙への呪詛、それに伴って変質している狼、呪詛を動力源としている魔術。

それら、全て。

瞼を閉じて昌彰は祈る。
どうか。

振り上げた刀印を、くわつと脛を開いた昌彰は、怒号と共に叩き落とした。

『天地玄妙てんちげんみょう、急々如律令……！』

パワーズ「……！術式が、破壊された？」

勾陣に筆架叉を突きつけられているパワーズは、【本命】が不発に終わったことを感じ取った。術式の根幹にある釘を打ち込んだのはヴァーグ自身だから、それを感じることは容易なのだ…

ヴァーグ「はあ！？【本命】をか？アレを破壊するには相当の実力がなくちゃ……」

勾陣『あの程度の呪詛、昌彰の実力なら簡単に抜える。我らの次代の主、そう甘く見るなよ』

ヴァーグはギリツと奥歯を噛むが、勾陣はむしろ当然と言わんばかり

りに堂々としている。

当の本人の昌彰は靈力を使い果たし、ぐったりと太陰に寄りかかっている。今なら簡単に仕留められそうだが、近くにいる十二神將たちがそれを許さないだろう。

さっきまで這いつくばっていたステイルは、立ち上がってタバコを吸っている。ヴァーグやパワーズがなにかしようとしても、炎剣で防御されるだろう。

ヴァーグ「……クソっ」

勾陣「打つ手はないさ。この闘いは、私達の勝ちだ」

.....

零牙「つつつ……。やっぱり奥義は反動がデカイ」

一方、零牙は奥義の反動で地面に倒れ込んでいた。元々使い切れないう飛天の技の中で別格の奥義は、まだ零牙の体では耐えられない。

零牙「どうにかしてステイル達に合流しないと……」

ドミニオン「それは無理だな」突如として聞こえた声に、零牙は飛び起きて前方を見る。

そこには

ドミニオン「久しいな速水零牙。リベンジをしに来たぞ…！」

かつて封印したはずのドミニオンが立っていた。

桜花祭での攻防戦？（後書き）

前書きにあるように再編しました。

次回で桜花祭編は完結です。

感想、レビュー等お待ちしております

桜花祭での攻防戦？（前書き）

お久しぶりです。

今回で桜花祭編は終了です。

長いのはごめんなさい。

オレ「ッ！クソッ！」

飛天御剣流奥義『天翔龍閃』を使い、工藤を倒したオレの目の前に、かつて封印したはずの敵『ドミオニン』が立っていた。

奥義の反動でまともに動けなくなっているこの状況下で、ドミニオンの戦闘――まずい。絶対に勝てない。確実に死ぬ。

ドミニオンが斬馬刀を振り上げる間際、予想される戦いの結末を瞬時に悟ったオレは再び『ルシフェル肉体強化』を発動。全力でその場から離れようとする。

ドミ「――甘いな。一度闘った相手が、まさか前と同じ状態で現れると思うのか？」

ドミニオンが地を蹴ってオレとの距離を詰める。銃を使って動きを牽制しようと試みるが斬馬刀に防がれて意味がない。しかも――

ドミ「私の名前は『ドミニオン力天使』、その名前から一応魔術的な力にはある程度干渉が可能でな。『龍脈』の膨大なエネルギーを操ることができる。例えば、『力』を体に回せば身体能力の向上などもできる。大気中の水分に【力】を回せば」

四方八方から襲ってくる氷の杭。逆刃刀でできる限り防いでいるが、刀身が凍り付いていく。

ドミ「状態変化を起こせる。まあこれは副産物だがな。神髄はこちらにある。『五行相生、土生金』」

さらに地中から金の槍が飛び出して来る。死角から相当な勢いのあ
るそれを、オレはぎりぎり回避するが、どんどんその数を増やし
てくる。

オレ「畜生ッ……！回避が間に合わなく……ッ」

ドミ「どうした？追いついたぞ？」

オレ「……！」

右からドミニオンの斬馬刀が襲ってくる。反射的に飛んで回避した
オレは、次の一撃が来る前に龍追閃を撃つ。

ドミ「『五行相剋、水剋土』」

オレ「オオオオオッ！」

落下中にドミニオンの前にある土が、手のようになってドミニオン
の頭上を守るように覆う。シェリーのゴーレムに比べれば幼稚な泥
人形だが、それでも質量が半端じゃない。

オレ（だけど、どれだけ量があるうと土は土！斬れないわけじゃな
いんだ！）

オレはそのまま土ごと斬ろうと逆刃をふるう。しかし、

オレ「……！斬れない！？」

ドミニ「土は水に剋つ」。お前の刀身はすでに凍り付いているのだらう？そんな刀では斬れないぞ。そして」

そして、オレの後方からドミニオンが斬馬刀を持って構えている。

ドミニ「すでに满身創痕な上に、攻撃一辺倒で防御ができないお前は……恐ろしく弱い」

オレ（右切り上げの攻撃！）

相手の動きを読んで攻撃を避けたオレだが、すぐさま金属の槍が飛来してくる。龍巻閃で防御するがこのままでは……

ドミニ「五行相生、金生水」

オレ（ッ！？避けたはずの金属矢から氷の杭が生成されて飛んで来やがった！？）

ドミニ「昔、世界中の哲学者や宗教家がこの世界を形作る『力』の要素を各自で決めていった。

その哲学は今は医療や科学の基礎、美術となって今に残っているものが多い。

魔術また然り。私は幾多ある【哲学】^{それら}中から一番各要素の繋がりが明確かつ分かりやすい『五行説』を扱う。

『五行説』は五つの要素の優劣やそれに伴う循環機能が定められている。

「...これを使うという意味が、お前に分かるか？」

身代わりの武器を呼び出して氷の杭を防御する。その間にも、ドミニオンの斬馬刀が勢いを付けて襲ってくる。ギリギリ先読みして回避するが、段々体の反応が鈍くなってくる。

ドミニ「...お前の周囲の空気そのものが私の武器になるということだ!！」

さらにドミニオンの魔術による氷杭と金属矢がオレを取り巻くように出現する。下からは木の槍、上からは斬馬刀。

オレ（マ、ズツ、回避が...）

そう思った瞬間、斬馬刀が逆刃刀ごとオレに当たる。

そして...

ズドオオオオン!

斬馬刀が地面に振り下ろされ、土煙と落ち葉が舞った...

オファニム（以降オファ）「いやー、やっぱり参っちゃうわねー。こつも見せつけられると」

その時、オファニムはチユ ス片手にのんびりと学園内を歩いていた。周りにいるのは十代の子供達。対する自分は三十路近いおばさん。普通ならば年齢的に「そろそろ結婚…」という年だが、彼女にそんな相手はいない。

オファニム「やっぱりそろそろ婚活とか考えた方が良いのかしら。このまま独り身なんてつらいし…。あの肌の艶とかハリとかみるとねえ」

天野「……何を言っているんだ、君は？」

そんなオファニムに話しかける『天地逆転』リーダーの天野秀一。黒のグラサン、黒のコート、黒の手袋と黒づくしの彼の表情は、一見すれば何とでもないのだが、心なしか呆れているように見えなくもない。

オファ「あら？私だって結婚したいとか考えるわよ。なかなかいい男がいなくて意外といい女なのよ？私」

天野「自分でそれを言うか。というか種は仕込んだのか？」

オファ「ええ。ちゃんとやり切ったからこんなのにのんびりしてるのよ。念を入れてさつきもチェックしたけど、心配はいらなそうよ」

天野「そうか。ならいい」

オファ「それより返答は？さっき連絡してきたんでしょ？」

天野「まだだ、会議で結論が出次第、我々を正式なメンバーに加えるそうだ」

オファ「そう。じゃ、もうちょっとね」

天野「ああ。もうちょっとだ」

敵対者二人は、口角をつり上げて笑った。

.....

オレ「ごぶつ・・・」

落ち葉のかけらが頬に当たる。口から血があふれてくる。意識がもうろうとする。体が重い。オレは…

ドミ「なんだ…。意外と弱いものだな。お前」

オレは魔術を解除されてうつぶせに倒れていた。そばでドミニオンが、斬馬刀片手に見下していた。

ドミ「考えれば当たり前か。かつて、イギリス清教全員相手にして一ヶ月も逃げ切るといふあり得ない所行を、お前が成し遂げることが出来たのは、お前の聡明な頭脳と飛天御剣流による一撃必殺、そして魔術による心臓や脳といった箇所に武器を転移できたから。どんなに強くとも、一撃で倒せた上に『神速』を使えるのだから逃げ切れる」

オレ「ぐ……」

逆刃刀はドミニオンの後に突き刺さっている。肉体強化で相当の魔力を使い果たした。今魔術を使おうと思っ、何も起きずに生命力がつかさる。

ドミ「一ヶ月後、お前はボロ雑巾のようになっているところを、ステイル「マグヌスと神裂火織が見つ、上層部に引き渡した。噂によると、見つかったときのお前は髪の色素は抜け落ちて餓死寸前だったそうじゃないか」

オレ「……よく、喋るんだな……お前」

ドミ「禁じられている悪魔との契約。同じくして生まれた『禁書目録』とは違い、制御不可と考えたお前を上層部は始末しようと考えてたらしいが、その強さに利用価値を見いだしてお前はまだ生かされている。……が、残念なことにお前は『飛天御剣流』を制御できなくなったため長い間戦えず、あの時のショックで肉体に武器を転移出来なくなつた。ま、それでも常人より強い事には変わりはないんだがな……」

オレ「……昔語「くろろうさん。脈絡もなく話し始めてどうしたんだ？」

ドミ「なに、死に物狂いで封印を打ち破って別の術式を収めた割にはあっけなすぎるほどに倒したんでな。暇つぶしだ。」

ドミニオンは斬馬刀をオレの左肩に当ててつまらなそうに言う。

ドミ「後々暴れられても厄介だ。両手足を切り落として連れて行く。恨むんだ。たら自分の弱さを恨むんだな」

オレ「くっそ…」

力のない今のオレでは、悪態についておとなしく斬られるのを待つしかない。

前にステイルから「いつか足元をすくわれるなよ」と忠告を受けてたが、まさかそれが現実になるなんて思いも寄らなかつたな…。

- - あんな不安そうな顔したミアが、オレを待っていてるのに…。
くそ…。

ドミ「何かもの言いたげな顔だな - - だがこれで終わりだ。後々の実験の心配でもしてろ『闇の魔術師』」

ドミニオンの刃が振り下ろされる。その時、オレの脳裏にミアの顔が浮かんだ。

……ゴメンミア。オレ、帰れそうにない……。

瞼を閉じて齒を食いしぼる。オレがなにもかも諦めた……その時、

『……guardiana925)闘う者を癒やす者(!!)』

……声が聞こえた。

よく聞き慣れた少女の声。はっきりとした声で聞こえたのは……
『魔法名』。

ガキン！と、振り下ろされたドミニオンの斬馬刀が、空中で、何か
に当たって止まる。見えない、何かは十中八九、アイツの……

ドミ」「・・・防御魔術：だと!？」

????」「悪いけど、もうこれ以上はやらせないよ」

その少女は、黒い修道服に身を包んで林の影から出てきた。

いつもにまして真剣な顔で、その小さな拳を握って、覚悟を決めた目で真っ直ぐ敵を見据えて

・・・オレ（義兄）を助けようと、駆けつけてくれた。

マユ「私が……あなたを倒す!」

『魔術師、姫野真優』が、戦場に現れた。

.....

昌彰「ゆら……なんで電話に出ないんだ?」

ステイル「単純に出られない状態にあるんじゃない? 戦闘中とかさ」

同時刻、昌彰とステイルはなるべく一目を避けながら、零牙のほうに向かっていった。しかし、零牙が『天地逆転』をおびき寄せるため、林の中に人を入れたため、なかなか零牙の方へ進まない。

そして昌彰は、ミア達と一緒にいるはずのゆらがいないのを知って一抹の不安を抱えていた。先程の戦闘では吹っ飛んでいた不安が、時間と共に戻ってきたのだ。

昌彰「……ゆら」

最愛の人の名を呼ぶ。相当不安が心の中に広がってる証拠だ。見かねた朱雀が、隠行した状態で昌彰に話しかけてきた。

朱雀『心配しすぎるな。昌彰』

昌彰「朱雀」

朱雀『ゆらは間違ってもお前の嫁だ。実力も経験もある。あんまり心配しすぎるのはゆらを信じてないように見える』

昌彰「……」

朱雀『白虎が探しに行ったんだ。ちょっと待てば結果なんてすぐである。それまでにお前がやるべきことぐらいわかるだろうっ？』

昌彰「……そうだな」

ステイル「急ごう。また零牙が『肉体強化』を使ったようだ。多分あんまり持たないだろうから早く合流しないと」

昌彰「わかった」

不安になるのもいい。心配するのもいい。

ただ歩みを止めてはならない。

今は、前へ。

.....

零牙「マユ……」

マユ「お兄ちゃん助けにきたよ。もう、守られてばかりは嫌だから……。今度は私が守るよ!」

零牙の絶体絶命の状況下にマユが駆けつけてきた。零牙と違って攻撃の術を一切持っていない彼女が来て、ドミニオンはつまらなそうに言う。

ドミ「なにをしに来た見習い魔術師。まさか、私と闘いに来たのか？ 言っておくが、お前では『闘い』どころか『準備運動』ウォーミングアップにすらな

らない。今なら見逃してやる。さっさと消える」

零牙（そうだった…。マユは防御魔術はすば抜けてすごいんだが、攻撃魔術はドベなんだ…）。

というか、それ以前にまだ『見習い』でしかないマユが『プロ』の魔術師のドミニオンに叶うはずがない）

零牙が冷静に考えてみて、今のマユの実力でドミニオンに勝つのは無理だと判断する。

だが、侮蔑とも言えるような厳然たる事実を突きつけたドミニオンや、そんな不安をもつ零牙に対して、『見習い魔術師』こと『姫野真優』はこう言った。

マユ、「くだらないこと言っていないでさっさと仕掛けてきたら？それに、見習いだからって甘く見ると痛い目に遭うよ？」

なんと挑発したのである。世間一般では今の行為を《無謀》、または《身の程知らず》という。

あまりの発言に啞然となる零牙の頭上で、プロとしてのプライドを傷つけられたドミニオンはマユの方に体を向け斬馬刀を構える。

ドミニ、「世間知らずが。実力の差を思い知らせてやる」

零牙がハツとした時にはドミニオンはすでに動き出していた。斬馬刀を左薙に振るいながら魔術で後ろから木の槍を突き出す。

零牙「マユ！逃げろ！」

零牙が必死に声を出してマユに警告を出す。それに対するマユは逃げることも攻めることもせず、ただそこに立っていた。

マユ「……確かに私は、攻撃の術なんて使えないよ？だからね……」

ドミニオンの魔術が再び発動。空気中の水分が凝結し氷の杭へと形を変えてマユに遅いかかる。

だが、やはりマユは何もしない（……）。ただ立っているだけだ。

マユ「だからね、そういう力を持った人を連れてきたんだよ」

ゆら「……『爆！』」

ドミニオンの刀、そして魔術はマユに当たる前にすべて見えない何か に阻まれて、動きを止められる。

そして、ドミニオンの動きが止まったその瞬間……ゆらの声と共に

ドミニオンの周囲の地面が一斉に爆発した。

ゆら「本来はこういう使い方しちゃいけないのやか…。っていうか、不意打ちって卑怯やない？」

零牙「ゆらさん!？」

マユ「たかだか見習いが、プロと真正面から闘って勝てるはずがないでしょ？不意打ちでもなんでもしなくちゃ。元々私は闘えないし、ハンデですよ。これぐらい」

零牙「マユって、こういうタイプだったけ…?」

ゆら「なんか、マユちゃんのイメージ崩壊したわ…。ええんかな…これ」

二人が突然のキャラ崩壊を目の当たりにして困惑している間に、ドミニオンが爆発の中から現れた。所々ダメージを負っているらしいが、特に変わってない。

ドミニオンは片膝をついた状態でマユに話しかける。

ドミ「まさか、いきなり不意打ちを仕掛けてくるとはな…流石は『闇の魔術師』の義妹と言ったところか」

マユ「『魔法名』名乗ったらどう？言っておくけどあなたの攻撃は一切通じないよ」

ドミ「お望み通り教えてやる『resemblance』。名乗った以上は必ず勝たせてもらうぞ。姫野真優」

マユ「負けるつもりはないよ。ゆらさん、攻撃は任せました」

ゆら「逆に防御は任せたよマユちゃん！」

姫野真優と花開院ゆら。

主人公の兄を持つ、妹コンビがここに結成された。

.....

零牙「……っつ……動かねえ……」

ステイル「零牙！」

昌彰「大丈夫か!？」

魔力切れを起こして地面に突っ伏しているオレの耳に、昌彰さんとステイルの声が聞こえる。が、無理して闘ったためかダメージが酷くて一ミリも動けない。

零牙「ステイルと、昌彰さんか…？」

ステイル「ああ…。君の魔力を感じてきたんだが…ヒドい状態だね。呼吸で精一杯か」

零牙「奥義を二回使った上に魔力まで切れたからな…。当然の結果だ」

昌彰「前に奥義を使ったことがあったけど…やっぱり反動が大きいんだな」

零牙「足りない実力を無理矢理補おうとすれば、こうなるんです…
くう…」

ステイル「ところで敵はどこだい？君がそんな状態になっているんだから、多分倒しているんだろうけどさ」

零牙「それはな…」

その時、林の奥から爆発音が聞こえた。ドゴオオオンッ！！とい
う巨大な音にオレ達三人は音の聞こえた方向に顔を向ける。そこには

ゆら『爆！』

ドミ『五行相生 金生水！』

ゆらさんとドミニオンが術をぶつけ合っていた。しかしゆらさんの
符はきちんと爆発したのに対し、ドミニオンの氷は精製途中で水に
戻されていた。

ドミ「くそ！またか（・・・）」

マユ「言ったよね？あなたの魔術は通じないよって」

昌彰「ゆ、ゆら！？」

零牙「……見ての通りの状況です。どうしてか、マユがゆらさんと
共闘しているんですよ」

ステイル「待て。まだマユは魔術師ですらないはずだ！それなのに

…」

零牙「闘ってるんだよ。しかも今、あの二人は善戦している」

ステイル「くそっ！」

ステイルは舌打ち一つして即座にルーンをばらまく。炎剣を生み出して一歩前が出る。

ステイル「多勢に無勢だが僕も参戦するよ。昌彰くんの妹もいるが見習いのマユがいるんじゃない不安だからね」

昌彰「……朱雀、青龍。ゆらの加勢を頼めるか？」

『『御意』』

零牙「ス、ストップだ三人共。今から加勢する必要はない」

今にもマユのところに行きそうな三人(?)を慌てて止める。ステイルが「なにを言っているんだ」とも言いたげな顔でオレを睨む。

零牙「言ったろ?『善戦してる』って。それに恐らく、すぐに勝負は着く」

スタイル「その根拠は？」

零牙「ない。……ただ、もう少し様子見をしてくれ。」

オレは眼前で広げられる義妹の闘いを見始めた。

- - - - -

ドミ（なぜだ……。なぜこうなっている！）

ドミニオンは斬馬刀を振るいながらそう思った。

今、彼が闘っているのは『開花院』という陰陽師の一人と見習いの魔術師一人。素人が玄人に勝てないのと同じように、見習い魔術師マユのことは眼中になかった。

そしてゆらについても、さっきと同じように蹴散らすだけだった。

なのに

ゆら「やっただれ武曲ー！」

ドミ「ぐっ……！」

あの見習いが入った今回は、なぜか自分が押されている。

魔術を発動しようとしても妨害され、攻撃は防御せれる上に陰陽師（まじ）やその式神の力が上がっている。

これは一体……？

マユ「……わかってないみたいだから教えてあげるよ。私の『魔術』について」

ドミニオンのはるか向こう、ゆらの後ろに隠れているマユの声が聞こえる。自分の手の内をさらすほど余裕をみせて声は続く。

マユ「私は攻撃が苦手だね。どうやっても上手くできないんだ。だからそれ以外の方面で努力したんだよ。そして私は、治療や防御の術が多い『神の薬』（ラファエル）の術式を多少使えるぐらいになったの」

落ち武者の式神、武曲が右薙に薙刀を振るってくる。さっきは避けられたはずの攻撃が、今度は避けられない（……）。斬馬刀でギリギリ受け止めるものの、体勢を崩してしまう。

ドミニ「ぐっ……！」

ゆら「追撃や祿存！『臨める兵、闘う者、皆陣破れて前にあり！』」

体勢を崩したところにエゾシカの式神、禄存が角を突き出して突進してくる。とっさに魔術で防御するが、強化された式神の一撃に耐えきれずにぶっ飛ばされ、さらにゆらの術をマトモに受けてしまう。

ドミ（『龍脈』を使った強化用の魔術が無効になっているのか！だから反応が…）

マユ「『神の薬』が象徴するのは『土』。だから私は、ほんの少しだけ龍脈に干渉できた。だからあなたの術式を妨害出来てるんだよ。これで、力でごり押しするのは出来なくなった。」

ゆら「貪狼！あのバカでかい刀を奪い取りー！」

ドミ『五行相剋 金剋火！』

斬馬刀の切っ先から直径60センチぐらいの炎の球が高速射出される。本気でマズいと感じたのか、ケリをつけるために大量の魔力を消費して連続攻撃する。

マユ「そうそう。どういう訳か、本来『神の薬』が象徴するのは『風』らしいんだよね。知つての通り『風』は『神の火』^{フウエル}の象徴なんだけどさ。なぜが変わってるんだよ…でもま、おかげで私は『風』にも干渉できるようになったんだけど、やっぱり私は攻撃はできない。けど、応用すればこんな事も出来る」

だが、大半はマユの起こした突風でかき消された。わずかに当たった球も防衛魔術によって防がれついに狼の式神、貪狼が斬馬刀の刃に食らいついた。

ドミニ『五行相生金生水！』

とつさに斬馬刀から複数の氷の杭を作り出して貪狼の口元を貫くが、貪狼は斬馬刀を離すことなくドミニオンの手から奪い取った。

ドミニ「っ！この…！」

マユ「…ま、とはいっても私は攻撃出来ないからサポートに回るしかない。だから…ドメは任せました」

ドミニオンが斬馬刀を取り戻そうと無理矢理体を反転させて貪狼の方を向く。そこには…

ゆら「さあて、そろそろ終いにしようや」

金魚の式神、廉貞れんていを腕に付けてこちらに身構むかえているゆらの姿があった。

ドミ」「……っ！』五行相生……』」

ゆら「これで………終わりや！」

腕に取り付けられた廉貞の口から大量の水が弾丸のように放たれる。

その一撃で、勝負がついた。

………

天井「………しかし、今思えば長かった」

木ノ花学園玄関前のはずれにある小さな百葉箱の前で、天井は呟いた。

隣にいたオファニムはすでに学園から去っている。ある用件を聞くために一人残っていたのだ。

天井「我々の目的は正当なものだった。しかしそれは一人の権力者によって否定され、今まで後ろ盾なく活動するしか出来なかった。それがやっとな認められたのだ。これは喜ぶべきだとは思わないか？神裂火織」

ザッ、と気配を絶っていた神裂が天井の前に姿を表す。ニメートル

を越える愛刀、『七天七刀』を握るその表情はどこか暗いものがあった。

神裂「……どんな主義主張や正当な理由があつたとしても、あなたが今までやって来たことは、私にとっては認められないものです」

天井「よく言う。二年前に速水零牙に致命傷を与え、餓死寸前の重傷に追い込んだ張本人が。」

神裂「……………」

神裂は二年前、人質に取られていた禁書目録を護るために、零牙相手に『唯閃』を使った過去がある。

零牙は付けられたその傷は完治して跡などないが、付けた傷は未だ神裂の中にあつて癒えてない。

天井「君ほどの人物が協力してくれると、私としては嬉しいんだが……………どうだね？」

神裂「断ります。私は、もう二度と友は傷つけない。」

天井「そうか。それは残念だ」

天井はフツと口元に笑みを浮かべて歩き出した。

天井「今回はこれで引き下がるとしよう。十分種は根を張った。あとは花が咲くのを待つだけだ」

神裂「……精神攻撃ですか。二年前と同じようにして零牙を追い詰める気ですか」

天井「遅かれ早かれいずればれることだ……。速水零牙のことを思うなら、本格推理委員会の彼らとは話さないほうがいい。……それに、この方法を選択したのはほかでもない……」

天井は口を歪めて悪魔のような笑みを浮かべる。一見すれば子供のように楽しそうに、嬉しそうに笑う。

しかし、その口から出たのは

天井「我々が所属することになったイギリス清教の決定だ。先に忠告するが、無闇に反抗はしないほうが良いぞ？」

その言葉に神裂は黙ってしまふ。神裂がいかに強大な力を持つ聖人

といえども組織の中では下っ端に過ぎない。

自分の意見など、却下されるのが目に見えている。

天井「さらばだ神裂火織。また会う時を楽しみにしている」

その言葉を最後に、天井は神裂の視界からいなくなった。

神裂はなにも言えず、ただ黙って天井の背中を見ることがしか出来なかった。

物語は進んでいく。

消えつつある温かな日々と、実行されていく『天地逆転』^{かれら}の計画。

全ては、二年前のあの日から・・・

桜花祭での攻防戦？（後書き）

夢幻「さてさてやつと」というか読者の皆様は多分予想していただろう魔術師のマユが出てきました！プロフィールはこちら」

『姫野真優』

見習い魔術師 イギリス清教第零聖堂区 『必要悪の教会』^{ネセサリウス} 所属の新人魔術師。

魔法名：『guardia925（闘う者を癒やす者）』

防御、回復といった魔術が得意。逆に攻撃の魔術は下手すぎて出来ない

が、得意なものを伸ばした結果、『神の薬』^{ラファエル}に関連した術式を単体で発動出来るようになった。

まだまだ新人なので知識に比べて経験がない。

夢幻「イメージ的には零牙と対極の存在。プライベートと仕事の差があるのは作者もびっくりです」

マユ「え！？予想外なの！？」

零牙「確か、『出番なかった割に』キチンと成長してるのがお前なんだよな。設定では」

マユ「どこを強調してるんだよお兄ちゃん！お兄ちゃんこそ、主人公で出番あるくせに弱いじゃん！」

零牙「るせつ！大体なんでドミニオンがまた出て来るんだよ！倒したじゃんオレ！」

夢幻「いやー。別の敵出すの面倒で……」

零牙「そんな理由！？」

夢幻「まあ倒したから良いじゃないか。それに今回で状況が変わったからね〜」

マユ「委員会の皆さんとイギリス清教が……」

夢幻「零牙の周りが敵になっていくね。そうしたんだけどさ」

零牙「……」

夢幻「まあこれからどうするかは置いて…やっとシリアス終了だ。次回はどうぞしよう」

零牙「内実知っているオレも…どうすんの次回」

夢幻「……どうにかします」

零牙「するしかないんだけどな。そして作者がまたテストが近いので更新が出来ません。ごめんなさい」

夢幻「次回はなるべく早く更新しますので…。感想等お待ちしてま
す。」

「「「それでは皆さんまた次回まで」」」

桜花祭二日目（前書き）

テスト後、久しぶりの投稿です。

無理やり感が拭えない…しかも面白くもない…。

……とにかく本編へGO！

桜花祭二日目

小等部、とある場所にて

零牙「なんで、なんでなんだ…っ！」

速水零牙は悔やんでいた。まさか、こんなことが起こるとは思いもよらなかったからだ。

零牙「チクシヨウ、なんで、なんでなんだスタイル…！」

零牙は目の前にいる変わり果てた友人を見つめる。金髪を染めた赤い髪、バーコードのような刺青タトゥー、そして…

スタイル「どうも、一パツク二百円です」

そして、鉄板の上でおいしそうに焼ける焼きそば。

零牙「なんでお前が焼きそば焼いてんだよオオオオオオオオオオオ
ッ…!!」

ミア「い、いきなり叫ばないでよレイ！恥ずかしい」

ステイル「そうだ！文句があるならどっかいけそこの白髪！」

零牙は頭を抱えて絶叫する。目の前の悪夢を見ないために。

桜花祭二日目。一日目に起こった魔術師戦のため、ほったらかしにしてしまったミアとデートしていた零牙だったが、。昨日の戦いの疲労がまだ残っていたらしい。このままじゃ昼まで持たなそうなので出店で焼きそばでも買おうとしていたのだが…。

零牙「なんで？なんで無駄に作るの上手いんだよステイル！ソースの香ばしい匂いに釣られて来ちゃったじゃねえか！」

ステイル「うるさい！僕だって好きでこんなことやってるんじゃないんだ！この親父が急に倒れたから代役を頼まれたんだ！いわば不可抗力なんだ、コレは！」

と、いう現状である。なぜかエプロン姿でジュージュー焼きそばを焼いている炎の魔術師ことステイル「マグヌス。この光景、どこからどう見てもミスマツチにしか見えない。しかも、本人は噛みタバコを噛みながら焼いているのか常に何かを噛んでいるそぶりがある。

零牙「つつか、お前焼きそば作なんかれたのか？長いつき合いだけで全然知らなかったぞ」

ステイル「僕もわからないんだが…なんとなく前に作ったことがあるような気がするんだ。なんとなくな」

零牙「なんだそりゃ？」

ミア「そんなことってあるのかな…」

ステイル「…というか、君はこの焼きそばを食べるのか？一パツク二百円だぞ」

ステイルが焦がさないように焼きそばを焼きつつ嫌々聞いていた。代役とはいえ、一応出店者なので出来る限り儲けたい。

零牙「ニコチン中毒者の焼いた焼きそばなんて誰が食うか。冗談じゃない」

ステイル「零牙…ちなみに言っておくが、ニコチンとタールのない世界は地獄と呼ぶんだ。わかるな？」

零牙「一切わからねえよ！そしてお前は健康についてもう一度よく考える！」

ミア「それ、レイが言えること…？」

憐れみに満ちたな顔で『世の中にタバコがなければ僕は生きていけないよ宣言』をするステイル。そんな彼は正真正銘14歳である。

ステイル「そうだそうだ。不規則な生活を送っている君に言われたくない。他人を叱る前にまず自分の生活について見直せ」

零牙「……………だあああっ！」

ステイルの開き直った態度に零牙はイライラするも、本人はさして気にしてない様子。そろそろ焼きそばが焼けたのか、ステイルがミアに聞いてきた。

ステイル「ふむ…。焼きそば食べるかい？一パック二百円だ」

零牙「買うなよ…。買ったら負けだよミア！」

零牙が勝手にになにか言っているが、ミアは「うん」と思案してから笑顔で一言。

ミア「二パックください」

零牙「ミアすわぁん!？」

ステイル「まいどあり〜」

零牙の悲鳴と共に、ミアは無難に焼きそばを手に入れた。

- - - - -

同時刻、A M 1 0 : 3 0

開花院ゆらはイラついていた。それはもうどうしようもないぐらいにイラついていた。

ゆら（わかつとる。これは自分勝手な感情やってわかつとる、けど…！）

本人にもわかつている。けど、わかつているのと割り切るのは別の話だ。

なので - -

昌彰「神裂さん、次はどこに行きます？」

神裂「射的、なんてどうでしょうか？」

ゆら（けど、流石にこれはどうなんや！？）

なので、神裂と昌彰が仲良く話していることにイラついている。そりゃもうどうしようもないくらいにイラついている。いつそ爆発させたほうが楽なんだろうが、昌彰の前でそんな子供っぽいことをするのは気が引けて不完全燃焼のままになっている。

ゆら（今日はお兄ちゃんと一緒に見て回るって言う計画やったのに…。なんでこんな邪魔者が登場するんや！）

昌彰「…ゆら？どうしたんだ、そんな恐い顔をして…」

ゆら「なんでもない。なんでもないんや…」

昌彰「な、なら良いが…」

ゆらのなかで『打倒神裂火織』が固まりつつあるなか、昌彰は残念なことにゆらの気持ちに気づいてない。さらにいえば、ゆらは二人の距離が妙に縮まってるような気がして（実際は気のせい）たりするのでゆらは更に恐い顔をしてしまい - 典型的な悪循環に陥っていた。

ゆら（認めたくないけど、神裂さんは強敵や。太刀打ち出来へん。

あのエロい姿で昌彰が口説かれたりなんかしたら…っ！）

ゆらは今、いるかどうかわからない『神様』を恨む。考えたくないが自分と神裂の差をみると…絶望するしかない。所詮この世は選ばれた人間だけが得するのだろうか。

いや、そんなわけがない！と思ったところで…

修「おーおー。両手に花ですか昌彰さん？つらやましいですね」

昌彰「あれ？城崎さんどうしたんですか？怖い顔がさらに怖くなっ

てますよ?」

修「余計なお世話だ!」

そこへ、神様に選ばれなかった人間こと城崎修（顔面殺人鬼b y 稚）がやってきた。中身は良い人なのに、見た目が悪いせいで色々苦労しているひとだ。

まあとりあえず、『ここでなにをしているんだ?』という質問はさておき、まずはこの質問。

ゆら「……で、その両手に握ぎられている子供はいったい誰なんです?」

昌彰「まさか誘拐……!」

修「待つてくれ。すぐそこに直結しないでくれ。これは……」

見た目と中身は違うとか言うが、大抵人は見た目で判断する。大侠客の親分的な顔をしている修を知らないものなら、十中八九こういう反応をするだろう。

やはり見た目で色々と残念な人である。

神裂「まさかそういう……。ステイルといい土御門といい、男の人は幼女になんらかの興味があるのでしょうか……?」

修「その人、さらにオレの印象を悪化しないでくれ。ただの迷子だから。ただ親御さんを探してるだけだから」

昌彰「……身の代金を要求するために？」

修「ええいしつこい！この子達が困っているようだから助けていただけだ！それだけだ！」

女子二人が昌彰の影に隠れて怯えている。ますます昌彰が『両手に花』状態になっていくのを、修が「羨ましいですねコノヤロウ」と妬みを込めた視線をおくる。

ちなみに昌彰の後ろではゆらが神裂を追い出そうと静かに戦いが起こってたりしていた。

……なぜだろうか、昨日よりも激しいような気がする。

修「昌彰さん、なかなかこの子達の親が見つからないんで協力してくれませんか？」

修があらかたモテ男への恨みつらみを視線で送ると（悪人面の）笑顔で言う。決して昌彰のことを妬んでいたわけではない。

……多分！

昌彰「いいですよ。じゃあ早速・・・」

神裂「いえ、私が行きましょう。昌彰さんは妹君と楽しんでください」

ゆら（！？なにを言って・・・）

昌彰「え？いや、そんな大丈夫ですよ？白虎を呼べはすぐ・・・」

神裂「では城崎さん、行きましょつか」

修「え？あ、じゃお願いします」

ゆらの気持ちを察知した神裂は、修を連れてあつという間に人混みに紛れてしまった。その技術はさすが天草式の女教皇、プリエステスといったところか。

もちろん、神裂の行動に理解できてないゆらと昌彰はポカーンとしているしかなかったのだが・・・

ゆら（な、なんか知らんけど神様ありがとっ！さっきは恨んでゴメンナサイ！）

どちらにしろ、ゆらは幸運が巡ってきたと思った。このチャンスを、

逃すわけにはいかない。

昌彰「白虎を呼べばすぐなんだけどなあ……」

ゆら「ま、まあ神裂さんもああ言っていてくれたことだし、別にええんじゃない?」

昌彰「城崎さんも変なことだったなあ……。オレはゆらだけ振り向いてくれれば十分なんだが……」

ゆら「ツ!? / / お、お兄ちゃん今なんて『ピンポンパンポーン……開花院ゆらさん、菅原雅さん、至急理事長室まできてください』」

……何の因果だろうか。委員会曰わく、理事長からの『地獄の呼び出し音』がなった。しかも、やっと二人きりになれたこのタイミングで。

昌彰「じ、地獄の呼び出し音……。ゆらどつす」「…の「え?」」

ゆら「神様の……大バカアアアアアアアアアアア!」

ゆらは（心の中で）泣きながら理事長室へダッシュした。

.....

そして、ちょっと時間は経ったあと…

マユ「はあ…」

マユは木ノ花学園のはずれにある社（小さい神社、といっても問題ないレベルのものだが）にきていた。

マユ「コレどうしよう…」

マユは古びた一冊の本を見てつぶやく。

ことの起ころいは、昨日まで遡る…

桜花祭一日目の夜。速水零牙はベットに腰掛けて自身の体調をチェックしていた。今日は無理をしてまで闘い、そして体力・魔力共に底をついている。体のあちこち外傷だけでなく内臓のほうもダメージがあるかもしれない。しかし…

零牙「……お前、いつの間にかここまで技量を身につけたんだ…？」
マユ「だから、出番がなかった時だって」しかし、体に違和感が無い。さらに言えば、反動のある『奥義』を二回も使ったのにもかかわらず体が動くのだ。……普段なら、一日寝込んで居なければなら

ないところなのに。

マユ「体の方は違和感ない？『神速』は大丈夫だろうけど、魔術はもちろん飛天御剣流も使っちゃダメだからね？本当は時間をかけて治すのが一番なんだから」

零牙「ああ……。わかったよ」

昨日の鬪いで魔術師として華々しく(?)デビューを決めたオレの義妹、姫野真優。魔法名『guardia925(鬪う者を癒やす者)』

扱う魔術は治療、防御系。まだまだ見習いの、新人の魔術師だと高たかをくくつといたのだが……。

零牙「よくまあここまで……。『必要悪の教会』ネセサリウスで治療を受けてもここまでではないぞ?」

マユ「お兄ちゃんの場合、他の人と違って魔力精製の負担と飛天御剣流の反動で内臓までダメージがあるんだもん。そもそも悪魔の加護を受けている時点で普通の魔術師と違う回復方法使わなくちゃだし……」

零牙「……総じて言つと?」

マユ「治療し辛い。治療する箇所も多い。さらに生命力の回復まで

しなくちゃならない。それに加えて回復したらまた無茶する。はっきり言うよ？もう少し体大事にしろ」

零牙「……ゴメンナサイ」

零牙はうなだれて小さい声で謝る。プロなのに新人（しかも一日経ってない）のマユから説教。立場がない。というかプロ失格な気がする。

マユ「闘つ、闘わない以前に体調管理は基本中の基本だよ？新人にもわかることなのにプロのお兄ちゃんはどうか。大体いつもいつもお兄ちゃんは……」

零牙「や、もうそれぐらいで勘弁してください。お願いしますから……」

マユ「いやー！今日という今日はお兄ちゃんに説教するんだよ。ミアさんのことも含めて徹底的にこの愚兄に言わなくちゃダメだと私は今悟った！」

クワツ！と目を光らせてマユは立ち上がる。小さい手で握り拳をつくり説教モードに移行。マズい、これは相当長くなる。直感的にそう感じた零牙は、説教回避のために話題を切り替えることにした。

零牙「せ、説教の前に少し良いか？」

零牙は立ち上がって仕事机の引き出し……鍵が掛かって開けられない

いようにしてある三段目の引き出しを開けて、一冊の本を取り出した。

零牙「デビュー祝いだ。受け取れ」

マユ「これ…！まさか」

零牙が取り出した一冊の本。表紙に星や月の模様が描かれている古めかしい本。

それは、本来個人の魔術合師が持っているはずのないもの。ましてや新人のマユが扱う事など出来るはずのないもの。

零牙「魔導書『月の書』。お前にやるよ。オレが持っても『死蔵』になるだけだ」

マユ「ほ、本物の『原典』！？ムリムリムリ！こんなもの使えないよ！大体、並の魔術師ですら使えないようなものをなんで…」

魔術の教科書である『魔導書』。その原典には精神を壊す^{テキスト}毒がある。常人なら一文字でもみただけで廃人になる凶悪な毒が

その魔導書には【自身の知識を広める者に協力する】という魔術的な機能が存在する。

それを利用すれば、原典を介してマユから攻撃することも出来る。

零牙「例え魔術に長けた魔術師といえども、原典の毒は凶悪過ぎて普通耐えきれない……だが、お前なら『宗教防壁』という『原典の毒』を防ぐ魔術を構築出来るはずだ。それがあればどうにかなる。オレじゃあ魔導書の知識は広める事なんて出来ないし、なにより『月の書』の内容を理解しきってない」

マユ「……え？理解出来てない（……………）？」

魔導書『月の書』。その中に組み込まれた術式は【天体制御】ちからアストロインハンド
天使クラスの術式を使うことが出来るため、てっきりマユは【天体制御】そが『月の書』の真価とばかり思っていた。

零牙「コイツの真価はオレも知らない。だから、お前が見つけるマユ」

マユ「ええ……」

零牙「大丈夫。お前ならやれるさ」

そう言って、零牙はマユに魔導書を渡したのだ…。

マユ「……はあ……。『お前が見つける』って言われてもなあ……」

マユは魔導書を見てはやく。まさか、面倒なことを押し付けられた
……そう思えば、思うことは出来る。

しかし使いこなせれば、それは凄まじい力が手にはいること間違いない。だから、返却出来ずにいる。

マユ「どうしようかな……本当に……」

マユが本気で『月の書』について悩んでいると、スピーカーから放送が流れた。

あざみ『ピンポンパンポン……。えー、本格推理委員会は至急、理事長室に集合すること。以上！』

なにやら零牙（あ）に嫌なことが起きそうだと、このときマユはなんとなく予感していた。

.....

あざみ「・・・という訳なの。みんな、当然協力してくれるわよね？」

『絶っつつつ对イヤー!』

ここは木ノ花学園理事長室。山積みになされた書類と、床一面に散らばっている書類と、机の上を埋めている書類と、唯一きれいにされている上質なソファアールとテーブルのあるゴミ屋敷（ゴミ部屋？）だ。本来は『本格推理委員会』意外は入れないこの場所に、雅を除く委員会メンバーと昌彰がいた。

先程の発言は、女性陣から言われたものである。

あざみ「しょうがないじゃない。コンテストに出る女子生徒になんか華がないのは事実なんだから。どういう訳かこのメンバーは全員『美少女』といってもいいレベルだし、ここは一つ学校を盛り上げるという意味で…ね？」

鈴音「だ、だけどそれは！委員会の活動に関係ないですよね!？」

菜摘「そうよあざみちゃん！そりゃ確かに、鈴ちゃんや梢ちゃんのコスプレはみたいけどさ！」

梢「わざわざ恥ずかしいなんて格好したくない…!」

椎「そうや！しかもそのコンテスト、観客は男子生徒が大半って聞

いてるで！そんな修みたいな連中けだものがいる中に恥ずかしい格好カッコして歩
け、なんて女子として無理や！」

女子勢は各々真つ向から反対する。修としては、先程の椎のセリフ
になにかもの申さなければならぬような気がしたが、零牙の「否
定出来るんですか？」という目に「……出来ないな。」と返したた
め黙っている。

しかし当事者ことトラブルメーカー木ノ花あざみは、沈黙を続ける
男性陣の方へ目を向ける。

あざみ「仕方ないでしょ？そういうことは男子が一番興味あるに決
まってるんだから」

あざみの堂々とした発言に、主人公の零牙は「なにを！？」と、く
つてかかる。

零牙「偏見はよしてください先生。女子だってそういう嗜好を持つ
人はいます！」

昌彰「どこを反論しているんだお前は。」

修「しかもお前が言うんじゃ説得力がないも同然じゃねえか」

修と昌彰が諦めにも似たため息をつく。しかし、かといって『本当
に興味がないのか？』と言われるとなにも言えないので、あざみの
言葉は否定しない。

あざみ「大丈夫よみんな。さっきも言ったように全員顔はいいし、スタイルだって悪くない。梢ちゃんや委員長は、他の二人に比べると一部見劣りする部分があるけど、気しなくてもいいわ」

梢と鈴音はあざみと他の二人を見る。あざみは自己主張が激しいくらい、菜摘もなかなか、椎も意外と胸元の部分がはつきりしている。比べて自分たちは――悲しくなるほど（梢は発展途上だが）まっさらだった。例えるならあざみは山脈、菜摘は山、椎は小高い山。そして二人は平原……。

顔を真っ赤して女子のメンバー（+修、昌彰）は目を下にするが言葉の真意に気付いた零牙は、慰めようとして追い討ちをかける。

零牙「大丈夫ですよ先輩！！平地こそ、人類の求める安住の地です！」

鈴音「誰のセリフの引用かなソレ！？しかも慰めるどころか意外とえぐってるよ！？」

あざみ「まあまあそれぐらいにして二人とも。あつたところで肩こりがヒドいだけだし、なによりコレを見ればなにも言えないわ」

昌彰の「唯我独尊とはこの人のためにある言葉何だろうな……」という呟きはさておき、あざみは理事長室にあるものを呼んだ……こういった反論対策の為にあらかじめ用意してしたものだ。破壊力、効果抜群の自信作が理事長室に入ってきた。

それは――

雅「う…。本当にコレ着なきやダメなんですかあ…？」「フリル満載のドレス。頭にはカチューシャ。足は特注の小さな編み上げブーツ。そう、可愛らしさ全開の…まるでお人形が人間となって目の前にいるような気分だろうか…ロリータファッションに身を包んだ（包まされた）ちよつと涙目の雅がいた。

椎・菜「萌えええええええええつ！」「」

修「こ、これはなかなか…」

椎と菜摘は発狂（即座に修と鈴音が抑えた）し、修は別人の義妹に見とれている。零牙に至ってはあまりの高威力にフリーズしていた。

あざみ「フフフ…。あともう一人いるわよ…」。

昌彰「え？」

昌彰は嫌な予感がした。

しかし一方で当たってほしいような気も…していた。

ゆら「な、なんでバニーなんやあ…」。

昌彰「ゆ、ゆら…っ！」「

昌彰の目に映ったのは…丸尻尾の飾りを付けたレオタード（+蝶ネクタイ付きの付け襟）を着て、ウサギの耳をかたどったヘアバンド、カフスストッキングを完璧に身につけた…婚約者のあられもない姿だった。

昌彰（い、意外と似合ってる…っ！）

修「ほう…。これはなかなか…えい」グアアアアツ！！目が、目が
ああああっ！」

ゆらのバニー姿に思考を停止させる昌彰。彼の脳内では天使（理性）
と悪魔（劣情）が大決戦を繰り広げているに違いない。

その光景を見て満足したのか、大魔王こと木ノ花あざみはニヤリと
笑う

あざみ「ちなみに言っておくけど、二人はこの格好でコンテストに
出るわ。後輩が出るなら先輩も出るべき、そういうわけでみんなも
出なさい。というか出ないなら全員退学よ。」

『横暴だ！』と女子勢は再び反発したのだが、結局押し切られて（
職権乱用による脅迫ともいう）コンテストに出場するはめになった
…。

.....

零牙「ひどい目にあっただ…」

そして夜。あの後コンテストの盗撮を試みた零牙だったのだが、ど
ういう訳かミアをはじめとした女子勢に見つかってしまい折檻（拷
問、というには生ぬるいレベルの）を受けてぐったりしていた。
そんなことになるならやらなきゃいいのに…と思う人もいるだろう

が、コスプレ好きの悲しい性なのでわかってほしい。

零牙「か、神裂の野郎…カメラごと写真データをぶったり切りやがって…。バックアップ取ってなかったらどうする気だ、まったく…」

零牙はぐったりしながら死守したデータ（が入っているカード）を取り出す。腹いせに土御門にデータを送ろうそうしよう、とすでにイギリスへ帰国するため空港へ向かっている神裂が聞いたらまた拷問されそうなることを零牙が決めたとき、ポケットになにか入っていることに気づいた。

零牙「なんだコレ…。手紙？差出人は…ステイルか」

意識を失っている最中に入れられたんだろう。手紙の封（気持ち悪いことにハートのシールだった。）を切って中身を見る。そこには

『アホ』

と書かれていた。

零牙「……アイツのコスプレしている合成写真、アーキヒョン『最大主教』に送るか。」

とりあえず冷静にそう判断した零牙は、手紙が二枚組だと気づく。どうせロクなことが書かれてないんだろうな、と思いつつ二枚目に

目を通す。

『気を失って言うタイミングがなくなったから、書面で伝えるよ。イギリス清教、最大主教から君に直々の命令だ。厳守するように言いつかっている。実際、僕は君に伝えたくないんだが、心して聞くんだ。』

【速水零牙】

上記のものは、来年3月31日までに任務を終了し、任務達成まで関わったすべての人間との関係を断ち切りイギリスへ帰還すること。

命令に違反した場合、木ノ花学園に関係する人物全てを殺害する。』

- -そして、物語は終わりへと進む。

桜花祭二日目（後書き）

零牙「皆様本当にお久しぶりです。作者が真っ白になっていましたが、やっと復活して書き上がりました…」

ミア「久しぶりだったんだね…。無理やり感ハンパない。」

零牙「言うなミア。作者が向こうで灰になってるんだから」

夢幻「……………」

ミア「次回はどうなるのかな？」

零牙「さあな。一応、事件をやるとかやらないとか…」

ミア「未定なんだね…」

零牙「そついうな。作者の現実がシビアになってるらしいから、少しは見過せ」

ミア「そつだね…。それでは皆様、次回までさようなら」

風邪には注意（前書き）

久しぶりの投稿です。

本編へGO！

風邪には注意

「は〜寒っ…」

現在時刻 01時00分

木ノ花学園中等部職員、宮間あかりは既に人通りの少なくなった暗い道を、一人歩いていった。

普通、夜番になった日以外はあかりは日が変わる前には帰宅できる。しかし、最近はこうして夜番でもないのに夜遅くまで残ることが多くなっていた。

なぜなら、セキュリティは万全と謳われる木ノ花学園で今年は様々な事件が起こったからだ。それらは主に理事長率いる本格推理委員会が解決したらしい(・・・)とあかりは記憶しているが。

実質、事件とは無関係な(今のところ中等部は本当に無関係)職員なのだが「事件が多発しているから」と、教育委員会やらその他講演やら防犯に関わるセミナーに職員全員が受ける羽目になってしまった。

もちろん、その間生徒の授業も行わなければならない。全ての職員が一斉にセミナーを受けられるわけがないので、この間の職員会議で『開いた職員の穴はほかの職員が埋めよう』という方法を探った。そのために普段担当してない書類を作る羽目になり、遅くなってしまうということだ。

(しかもそれが終わってないっていうのがね…はあ)

昨年までは平和な学園だったのに、どうして今年はこう事件が多発するのだろうか。来年度の入学希望校のランキングが度重なる事件のせいで大幅に落ちているらしい…。まさにもう『泣きつ面に蜂』なわけである。

(理事長から『来年度の入学希望者の割合を色々まとまる！なんてありがたい指令が下ってもねえ…。しかも最重要機密だかなんだか知らないけど、傍受対策にUSBメモリで受け渡して…])

心の中でグチりつつ、暗くなった真っ直ぐな舗装道を歩く。この道を突き当たりまでにまでいって左に曲がれば住んでいるアパートが見える。

見晴らしが良いとは言えまわりに人はいない。最近近所でひったくりが横行していると、警察主催のセミナーで習ったばかりだ。気は緩めない方が良さだろう。

と、思った矢先。

「きゃっ!?!」

後ろからエンジンの唸る音が聞こえてきたと思ったら、ものすごい

力でバツクが引つ張られた。

突然のことで体勢を崩し地面に倒れる。そして目の前を走り去るバイクをみる。その手にはあかりのバツク。

簡潔に言つて、ひつたくられた。

「あ……」

追いかけてよとする前にバイクは夜の闇に消えていった。今から追いかけても追いつかないだろう。

あかりには、まさかこれが事件のきっかけになるとは、思いも寄らなかった――

――

リュウ「……はあ！？零牙が風邪！？」

木ノ花学園小等部六年六組。

朝のHRの前である今、眠気に負けて机に突つ伏していたリュウは、顔を上げてミアを見る。小等部でも上位にはいる美少女のミアは「そうなんだよ」と話を続ける。

ミア「仕事のし過ぎで…ね。元々の不摂生がたたってインフルエンザにかかったらしい」

ミュ「…予防接種は？」

ミア「仕事が忙しかった上に面倒だったからって…」

リュウ「あいつ…」

リュウは頭が痛くなるのを感じた。自分の前の席に座っている博多才な美少年、速水零牙は色々と人間離れた友人だ。身体能力や剣術や知識に関しては同年代では絶対になわなないだろう。

……が、実際はコスプレ好きで盗撮を含めたちよつとした犯罪者で不摂生で仕事優先の彼女泣かせの、いわゆる変態のダメ人間である。

ミュ「……誰か看病しなくていいの？零牙君って妹さんと二人ぐらしだったよね」

ミア「マユちゃんが看病するらしいけど、念のためおばさんに頼んできたから大丈夫だと思う。……料理以外は」

ミアが最後に付け加えた一言は学園内で特に人気の高い美少女のミュには聞こえなかった。まあ、聞こえたからどうだ、という話ではないのだが…

ミア「一週間前の桜花祭についてあざみ先生に散々質問されていたし…そこらへんのストレス溜まってたのかな…」

リュウ「ますます奥さんじみた発言はともかく、零牙がないのにミアちゃん大丈夫なのか？」

ミア「なにが？」

リュウ「今まで告白してなかった男子から色々くると思うぞ。主にFFF団から」

六組から生まれていたFFF団だが、最近は事件のたびに起こる生徒の動揺を鎮めるために尽力している。多数の利点を生かして『ちよつとした噂』を流し、なるべく生徒が不安にならないようにしている。目的が『FFF団の勢力拡大』だということを除けば、かなりマトモな団体になった。

…が、残念なことにその実態は変わらないために相変わらずカッブルには嫌がられているのだが。

ミア「それはないよ。私とレイのバカップルぶりは知ってるでしょ？」

リュウ「ついにそれを言っちゃうのかミアちゃん…」

杏子「なになに？なんか面白そうな話してない？」

美咲「ただのバカツプルの話だよ杏子」

そこへ登校してきた一部生徒に大人気の杏子と美咲も加わった。

実は零牙を抜きにしてこのメンバーが揃うのは初めてだったりする。

美咲「だってさ。ミアちゃんはキスしちゃったなんて噂があるくらいだよ？甘々な話が多いんからさ」

リュウ「発言に気をつけるーノ瀬。FFF団が零牙の顔写真を的にダーツをやり始めたぞ」

ミュウ「……相変わらず零牙くんはみんなの噂の中心」

杏子「転校したときから噂だもんねー零牙くん」

本人がいない中で広げられる会話は歯止めが掛からないのが当たり前である。ワイワイ話しながら、話題は自然と『零牙について』となる。

杏子「零牙くんって意外と謎だね。イギリスにいた頃の話まったくくないし」

美咲「そうそう。ロンドンにいたときの話を聞こうとしても、あんまり話さないよね」

リュウ「そうか？確かこの間、ロンドンを訪れる観光客の話してたぞ」

ミア「え！？初耳なんだけどその話！？」

自分が零牙について一番知っていると思っていたミアはちよっぴりシヨック。帰ったらちゃんと話そう、色々話を聞こう。と、いま心に決める。

ミュ「……たしか、イギリスで土御門（同僚）と「最新作の小天使ロリメイド」について熱く議論を交わしていたとき……」

美咲「ごめん。始まりの時点ですでに犯罪臭がするよ」

リュウ「ショージ・ムラカミという人が道を尋ねて来たんだと」

杏子「待って。著作権法的にその名前は大丈夫なの？」

この作品はフィクションです。登場する人物、団体名などはあくまで架空のものであり、実在するものには関係ありません。

ミア「いいのかな？」

リュウ「大丈夫だろ。さて続けるぞ……。でそのショージがだ、「スミマセーン、マイケル見マセンデシタカ？」と言うから、「マイケルとは、どのような人物ですか？」と聞いたんだ。そしたら……えーっと」

ミュウ「……『服装ハ、上ハブラジャー、下ハピンクのパンティーダケデス』だよリュウ」

「……マイケル変態!?!?!」

リュウ「そうそう。それだ。それで零牙が『なぜマイケルを探しているのですか』と冷静に聞いて……」

美咲「零牙くんスルー!」

リュウ「『マイケルガイナイト、オイラ達ミンナシンジャウヨ!』とショージは言って」

杏子「マイケルさん何者？」

リュウ「『分かりました。5000円＋実費で探しましょう』と零牙が」

ミア「お金とつちゃうんだ！？ビジネスなんだ！」

美咲「しかもマイケルの情報が全くないのに！」

リュウ「で、えーっと…。あれ？どうだったけ？スマン忘れた」

杏子「リュウくん、これからって時にソレはないよ…」

ミュ「大丈夫。くだらない話だったし、オチは「『モシモシ…マイケル、どうしたんだ、マイケルウウウ！』」ってショージが叫ぶだけだから。」

「『なにがあつたんだマイケルに！！』」

リュウ「違うだろミュ。たしかオチは「そんな…。あのマイケルが…！…マイケルウウウ！カムバーツク！！」って零牙が言うところだろ」

ミア「マイケルってどんな人！？すごく気になるんだけど！」

美咲「しかも零牙くん、マイケルについてなんか知ってたし！！」

杏子「リュウくん！省略した部分になにがあったのさ！」

リュウ「たしかマイケルは…ハンターに襲われて捕まったと」

「」「逃 中かよ!!」「」

結局、マイケルについてはなにもわからなかった。

.....

零牙「あ、頭痛い…ダルい…くしゃみが…うう…」

その頃、博学多才の魔術師、速水零牙はベッドの上でうんづん唸っていた。風邪、もといインフルエンザである。

マユ「お兄ちゃん、今まで散々無茶したツケがまわってきたね」

零牙「今、辛辣な言葉を言う必要はないんじゃないかなマユ…うう…」

直子「こっつしてると思い出すなあ。修が風邪引いたときにどっしらいいか分かんなくて困ったけなあ…」

その零牙を看病しているのは最近やつと出番が増えたシスター（義妹または修道女）のマユと修の母親の城崎直子である。

今は直子が零牙の頭を撫でて、マユがその隣に座っている。

零牙「つつか直子さん…仕事は…」

直子「もう、こんな時まで仕事はなしよ零牙くん。ちなみに私の仕事は作家だからちよつと休んでも問題なし」

零牙「そう…ですか…」

マユ「お兄ちゃん、教会に提出しなきゃならない書類はあとで私が持って行くね。仕事なんかしたら、今度は説教じゃすまないんだよ？」

マユが手錠（零牙の私物）を見せながらニツコリと笑顔で言う。この光景『冗談で言っているだけだよ…』と零牙は心底願う。きっと、冗談のはずだ。

…ズキッ！

零牙「うう…頭が…」

マユ「大人しくしててねお兄ちゃん？」

直子「そうよ零牙くん。たまにはゆつくり休まないで、体に毒なんだから。これを気にしっかり休みなさい。」

零牙「はあい……」

零牙は再びうんうん唸る。体が本当にダルい。今はしっかり休もう。

直子「さて……マユちゃん、調理器具出しといてね。後でおばさんがなにか作ってあげるから」

マユ「やった！じゃあ私は書類を出して来ちゃいます！」

直子「お願いね。零牙君にもお粥作ってあげるから、ちょっと待っててね」

零牙「ありがとうございます……」

このとき、零牙は身にかかる不幸についてなにも知らなかったのである。

.....

さて、少し時は進んで昼休み。木ノ花学園にいる修は…

修「なにがあった…」

虎スケ「なにがあったんだろうね…」

響「なにがあったんでしょ…」

友人の虎スケ、響と一緒に修は目を見開いていた。目の前で信じられないような…というか信じたくないような出来事が起こっているからだ。

修「椎が授業中起きていてマトモに受けただと…ありえない。明日は槍でも降るのか…？」

虎スケ「いや、むしろ木ノ花グループが潰れるくらいのが起こるんじゃない…」

響「言い過ぎですよ虎。精々修がいきなりモテ始めるぐらいでしょ」

修「響さん、そりゃいつたいたいどういう意味だ」

椎「……なんか黙って聞いてれば好き勝手なこと言いよるなあ……。私だってな、たまにはちゃんと授業受けるときはあるんやで！内容チツとも分からへんけど！」

「「意味ねえじゃん」！？」

椎のドヤ顔発言に冷静にツッコミを入れる三人。ちなみに過去九年間、椎がマトモに授業を受けた回数とは0である。幼なじみ兼世話役の修が言っただから間違いはない。というかマトモに授業受けてたら修は苦労してない。

虎スケ「椎ちゃんってさあ……よくダブらずに進級出来たよね。本当、オレ不思議に思う」

椎「ふつ。コレが凡人と天才の違いや。私みたいな天才なら授業寝ててもちゃんと進級できるんやで！」

修「はっ！この間の再テスト、前日になって『教えてくれ』って泣きついたのはどこのアホだっけかな？」

椎「そ、それは禁句や修！言わんといてー！」

虎スケ「椎ちゃん…！やつぱりオレ達、同じ穴の貉むじななんだね！？オレ、また再テストだけど安心したよ！」

響「なにが『安心した！』なんですか虎…」

ワイワイと話しながら食堂に向かういつものメンバー。ついこの間までは、これで食堂にいつて椎のゲテモノ料理を隣に昼を食べつつ過ごすのが当たり前だった…。少なくとも、今までは。

だが今は、

小山「修くん！」

修「小山！？っていきなり抱きつくなよ！見てるから、みんな見てるから！」

小山「大丈夫大丈夫！！修くんはなにもしなくても注目集めるから、問題ない（モーマンタイ）だよ！」

修「いや、そういう問題じゃなくてだな！？」

小山「それより早く食堂行こ！お腹へったよ」

修「だから、いきなり引つ張るな小山！」

修に彼女が出来ている。強面顔の修が、尻に敷かれるぐらいの女の子がそばにいる。

桜花祭での事件は、表沙汰にならなくとも生徒達には伝わっていた。そのために、小山は『委員会』所属の修のことが心配になって・・・結論からいえば全く平気なのだが・・・なるべく自分のそばに置きたがっている。

なので、ここ最近修は小山と一緒に昼を過ごす。修も小山の気持ちは知っているため嫌がったりはしない。

虎「あー。また修兄は彼女さんとか〜。いいなあ・・・」

響「うらやましいですね。男としては、少し悔しい気もしますが」

椎「……ふん！あんなデレデレして……。あんなのドコがええんだか……」

虎スケ「次来るのは放課後かな。チクシヨウ羨ましい！」

響「あなたは下ネタを封じればいけると思いますが…。おっと、我々も食堂に行きましょう。遅れると、椎さんの好きなカレーも売り切れますし」

虎スケ「もうお腹減って死にそうだよ…。椎ちゃん、早く行こうぜ？」

椎「だいたい、なんであんな上っ面だけのやつなんか…。もっとマシな奴を…」

三者三様の反応を見せるが、椎だけはブツブツと文句を垂れる。ここ最近、小山が現れて消えるといつもこの状態だ。一気に不愉快な顔になって、修の文句を言う。しかも修が戻ってくるまでずーっと。

虎（なあ響さん、やっぱり椎ちゃんって）

響（かもしれませぬ。もともと、本人に自覚はないようですが）

そんな椎を横目に虎スケと響は目で語る。違うとは思つ。だがもしかしたら…。

この反応を見る限り、可能性はありそうだ。と友人二人は密かに思う。

- - - - -

あざみ「まずいわね…」

同時刻、木ノ花あざみは報告書を読んで呟いた。

そこに書かれていること。もしそれが本当なら、これは本当にマズい。学園にとっても、木ノ花グループにとっても。

あざみ「……みんなを頼るしかなさそうね」

あざみの鋭い視線が、虚空を睨みつける。

- - -これが、新たな事件の始まりだった。

続く

風邪には注意（後書き）

夢幻「はい！お久しぶりですみなさん、夢幻です」

梢「最近出番がないのであとがき出演。木下梢です」

夢幻「そんなこと言わないの梢ちゃん。本当、悪いなあと思ってんだから」

梢「だったら出番増やして欲しい」

夢幻「ごめん！謝るから睨まないで怖いから！」

梢「……本編のムラカミとショージってなにもの？」

夢幻「無理矢理な話題変更ですね……。それは秘密です。零牙が復帰したらバラします」

梢「ショージ…ムラカミ」

夢幻「本名は『シヨージ』ムラカミ『アレキサンドリア』です。マイケルは『マイケル』ムラカミ『アレキサンドリア』という名前」

梢「……まさかの兄弟……」

夢幻「彼らはシヨージとマイケルには、それはそれは大変な苦労話という裏設定が……」

梢「シヨージとマイケルに何が……！」

夢幻「それはまた今度ね。次回は『盗まれたモノを取り戻せ?』です。マイケルとシヨージについては、皆さんの御想像にお任せします」

梢「適当!？」

夢幻「それではみなさんまた次回」

梢「マイケルとシヨージにはなにが……」

盗まれたモノを取り戻せ？（前書き）

新年一回目！

感想ください！m（）（）m

盗まれたモノを取り戻せ？

あざみ「みんな、また呼び出したりしてゴメンね」

菜摘「全くよ！おかけで練習ができないじゃない」

鈴音「まあまあ菜っちゃん。それぐらいにして」

菜摘「分かってるわよ……。で、また呼び出してどうしたの？あざみちゃん」

現在放課後。菜摘が不機嫌になりながらも、本格推理委員会のメンバーは一人を除いて全員理事室に集まった。

桜花祭以後たった（・・・）数日で再び召集。つまり、それだけ木ノ花学園にとって危険な状態が立て続けに起こっているということだ。

こうなっている以上、学校のセキュリティをもう一度考え直す必要があるだろう。

あざみ「……あれ？そういえば零牙君がいよいよただけど…どうし

たの？」

ミア「あー、レイはインフルエンザで休みです」

鈴音「インフルエンザって…予防接種は？」

ミア「面倒くさかったようで…」

あざみ「面倒くさかったってあの野郎。保険便りにも書いたし、つうか日頃から体調には気をつけろってあれほど言ってたのに…！」

理事長兼保険医のあざみは事件とは別に頭を抱えるはめになった。なにを隠そう、零牙は度々あざみから「もっと規則正しく生活しなさい」と直々に指導されたことがあるのだ。

あざみ「こうなったらしかたない……後で地獄を見せてやる」

『アハハハ…』

あざみが小さく呟いたその一言はまさしく魔王からの死刑宣告。関係ないメンバーも乾いた笑いを浮かべるしかできない。

とりあえず修は、ここにはいない白髪の少年に手を合わせて合掌する。運が良ければ多分生き残れるさ。きっと

あざみ「……いない人の話をしてもしようがないわ。原作メンバーでやるわよ。今回、みんなに解決してほしい事件は『ひつたくり』よ」

梢「ひつたくり、ですか……」

あざみ「ええ。ここ最近不知木町を中心に起こってるね。犯行は単純で、後ろからバイクに乗った犯人がカバンを無理矢理さらっていくもの。すでに五件も起きているわ。うちの教師も被害に遭っている」

もちろん、ここで言っている被害者は「宮間あかり」のことだ。幸い彼女はけがなくすんでいるが、被害者の中には自転車から転倒してけがをしてしまうという二次被害も起きている。

それが五件。早急に解決しなければならない。

あざみ「被害者は男女合わせて五人。突然襲われたからはつきりとした部分が少ないんだけど、犯人の服装はヘルメットに黒いライダースーツ上下。年齢は20代後半〜30代前半。背丈は170cmくらい。性別は男。バイクのカラーは黒らしいわ。被害範囲は」

修「ストップ。質問いいですか先生。」

あざみ「今いいところなのに……なにかしら修君。」

あざみに配られた「資料」をいち早く頭に叩き込んだ修が話の腰を折る形で割り込んできた。あざみはブーたれながもちゃんと話聞く。

あざみ「この資料、かなりの精度で調べ込んでありますよね？さっき言ったことに加えて事件現場の詳細な情報まで……はつきり聞きませんが、これは警察の資料じゃないんですか？」

あざみ「やっぱりバレちゃうのか。さすが少年探偵団なんてやってただけはあるわね修くん。見事だわ」

修「先生、さらっとオレの黒歴史出さないでください。忘れたいんです」

梢「……あの、先生？まさかコレって……」

あざみ「その通りよ梢ちゃん。修くんの言った通り、これは本物の警察資料よ」

その場にいた修とあざみを除く全員が、驚いてもう一度資料を見る。特に、警察署長の娘である菜摘の驚きは一番すごかった。彼女ですら、どうやっても警察資料は手に入らないからだ（前は未解決／解決済だったため手に入った）

あざみ「ネタばれするとね。現在、不知木町警察署は『少女誘拐連続殺人犯』のほうに大多数を割り振っていて、この事件に割ける人員がないの。そ・れ・で、白羽の矢に立ったのが『本格推理委員会（私達）』ってわけ。」

不知木町近辺では、現在二人の女子中学生が誘拐され、翌日にゴミ捨て場に死体となって捨てられている事件が起きている。ひつたくりと殺人で天秤に掛けた結果、殺人のほうに傾いたというわけだ。

あざみ「だから、私達はこの事件を何が何でも解決しなければならなくなったのよ。みんな頑張っってね？」

ミア「やる以上は全部解決します！」

あざみ「いい心意気よミアちゃん。さて…どこまでは話したっけ？」

鈴音「被害範囲までだよ」

あざみ「そうそう。ありがとう委員長。で、被害範囲は北町 - - 繁

華街や商店街があるところね。 - - の周辺半径三キロのエリア。犯行時刻は一時から三時の間よ。犯人の特徴がわからない以上、今回は強攻撃にでるわ」

修「と、言いますと？」

あざみ「囹捜査よ」

さらつと言いつつあざみの言葉にメンバーは体を固くする。囹捜査は危険な捜査法だ。下手をしたら怪我や事故に巻き込まれる。

あざみ「そんなに身構えなくてもいいわよみんな。あの病人と違って危険なマネなんてしないから」

鈴音「零牙くんも、好き好んで危険なマネしてるとは思わないですけどね……」

ミア「先輩。その危険なマネをしている人を待つてる身になってくださいよ。不安で押し潰れそうになります」

ミアが口先を尖らせて文句を言う。しかし、あーだこーだ言ってもミアは零牙のことが大好きなのだ。だから今も文句を言うだけで済んでいる。

梢「本当、零牙くんはミアちゃんに苦勞を掛けてる」

あざみ「そうね。ミアちゃんがいないと、零牙くんはなんか真つ白になるし……ってそうじゃない、そんなノロケはどうでもいいわ。嫉妬するだけだし」

修「大丈夫つすよ。先生は一生掛けてもノロケる相手なんて出来ませんから」

あざみ「修くん、後でメンソレータムの刑よ。かつてイギリスでマイケルにやったぐらいに目をヒリヒリさせてあげるわ」

サムズアップした修が至極真つ当な意見を述べると、あざみは胸ポケットからメンソレータムを取り出して死刑（私刑か？）宣告。ミアは「また出たよマイケル…」と思う

謎の人物マイケル。因みに彼の日課は『毎日ちゃんと、深夜にひとりで歩いている女性を気付かれないように後ろから付いて見守る』である。

あざみ「話が半分逸れたけど、元に戻すわよ…肝心の囀役は私よ。まあこれは当たり前ね。菜っちゃんバイクを持ってるから、追跡調査をお願い。ただし法律は守ってね」

菜摘「当たり前よ」

あざみ「梢ちゃんと修くんは、私がかばんの中に仕込ませたGPSの発信記録を辿って。委員長は山下さんに別用があるからそっちを頼むわ」

鈴音「別用って？」

あざみ「その説明は後でね。最後にミアちゃんは零牙くんの看病、及び監視をお願い。完治するまで見張ってて」

ミア「わかりました」

あざみ「作戦決行は準備があるから明日。今日はこれで解散よ。みんな、明日は頑張ってね！」

その一言で今日の集まりは終わった。

.....

零牙「……ケホッ。そうか、そんなことがあったのか」

ミア「そう。だから私はこうする義務があるんだよ」

所変わって、ここは体調管理をしつかりしなかったがために、現在ベッドで横たわっている零牙の自室。

普段はあまり本人以外は入れないこの部屋にミアは訪れていた。

もちろん、看病が目的で

零牙「うー。やっぱり調子悪い…」

ミア「そりゃあ病人だからね。調子が悪いと思うよ」

零牙「いや、それは分かるんだけどさ…」「じゃあ黙って寝てる…はい」

ミアはりんごの皮むきをしながら横たわる零牙を見ている。整った眉の眉尻を下げて何度も寝返りうつ零牙はまさしく病人であり、早く良くなってほしいと願わずにはいられない。

零牙「うう…頭いたいよう…」

ミア「大丈夫？あと、りんご切ったけど、食べる？」

零牙「食べる…」

ミア「それじゃあ…はい、あーん」

零牙「あーん」

零牙は一口大に切られたりんごを差し出されておとなしく食べる。
なぜだろう、いつになく甘えた顔をしているのは気のせいだろうか？

零牙「うまいな…。もっと」

ミア「はい。あーん」

零牙「あーん（モグモグ…）ふう、幸せだ…」

ミア「ふふつ。はい、あーん」

零牙「あーん」

不謹慎だが、治るのが遅くなるといいな。

零牙は、りんごを食べながらそんなことを考えていた。

.....

修「甘ったるい雰囲気出してんなあ……」

マユ「甘々ですね」

一方、居心地が悪くなったので城崎家に避難してきたこの二人。

最近修は、ミアよりもマユの相手をする事が多くなったりきたりしてる。

修「あー、考えるだけで辛いなあ。マユちゃん、何か飲むかい？」

マユ「じゃあ、紅茶を」

修「わかった。ティーパックだけど勘弁な」

マユ「はい」

修は台所に立って紅茶ダーズリンを淹れる。ちなみに紅茶は修がよく飲むので家に常備されているのだ。

修「そういえばマユちゃん、お昼ご飯はどつしたんだ？」なにわ屋にでも行ったのか？」

マユ「いえ。直子さんがオムライスを作ってくれたのでそれを食べました」

修「ふーん。そう、か…？」

聞き間違いだろうか、いやきつと聞き間違いだろう。修はコップの取っ手に指をかけた状態でフリーズする。さっき、マユはなんと言った？

『いえ。直子さんがオムライスを作ってくれたので…』

修「……ふう。マユちゃん、お昼、なにを食べたって？」

マユ「え？直子さんの作ったオムライスを…」

修「…そうか。うん、幻聴でも聞き間違いでもなく、母さんのオムライスを食べたのか」

マユ「はい、そうですよ…？」

流石に不安になったマユは語尾に疑問符をつけて修を見る。修は「

すーはー」と深く深呼吸をして自身に出来る最高級の笑顔をしてマユの方を向く。そして優しげな口調で言う。

修「どこか調子は悪くないかい？吐き気がするとか、目眩がするとかないかい？」

マユ「その顔でする笑顔に対して吐き気を催しそうなんです…」

修「なにか言っただかい？」

マユ「いえなにも」

今の状況を上手く伝えようと、凶悪犯が純真無垢な子供に対して無理に優しくしているような感じである。推理小説ならこのまま身の代金を要求してもおかしくはないくらいだ。

マユは修の笑顔に若干防御姿勢をとるも、特に体は異常はない。「なにもありませんよ？」と言おうとしたその時

ガタン！ガクガクガク…

突然テーブルに突っ伏した。笑顔のまま、内心冷や汗を川のごとくダラッダラ流している修は恐る恐るマユに話しかけてみる。

修「マ、マ〜ユちゃん？大丈夫か〜？」

マユ（ガクガクガクガク！！！！）

……冷や汗が川から滝へランクアップした。マユの小さな体が尋常じゃないくらい小刻みに痙攣してる。

修も若干ガタガタ痙攣しつつ必死に肩をゆする。「おい、マユちゃん〜ん？」と声を掛けても返事がない。

この時修は思った。「あ、これヤバいんじゃない？」

零牙『くけけかきくけかくけけかきくけかきくけかきけけかけくけか〜ッ！』

ミア『レ、レイ！？なんで某学園都市の第一位的なセリフを言うのんだよ！？目の焦点があつてないからスゴく怖いよ！！』

真向かいの家から従姉妹とその恋人の悲鳴も聞こえてきた。そろそろ笑顔と許容量キャパシティが限界に来ている。はやく、どうにかしないと。

直子「なに？コンビニから帰ってきたけど何事なの修！」

そこへタイミングよく物事の元凶がやって来た。限界に達した笑顔と過去最大級の怒りを含めて修は一言。
修「とりあえず、あとでお説教しようか？」

……三時間後、救急隊の懸命な処置により二人は元に戻った。

- - - - -

そして、次の日の午前一時。

あざみ「みんな良い？作戦、始めるわよ」

『了解』

作戦が開始した。

盗まれたモノを取り戻せ？（後書き）

「わたしの出番は!？」 - - 椎

「次回になったらあるさ（きつと）」 - - 夢幻

感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8318n/>

本格推理委員会

2012年1月3日23時49分発行